

Moon Light Another
fate

深緑 風龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無の神であり星の破壊者である『ラヴオス』を打ち破り、更にはサラを救出することが出来たガルツチ達。

次元を超えた存亡の戦いも終わりを迎え、ガルツチ達は、ルツチ達とお別れを言い、門矢未来と共に行くこととなった。

そんな中、G T A Vの世界にいた時、また何かを察したガルツチは笑みを溢し、見ず知らずの者に挑発する。

あらゆる世界を巡り、その瞳は何を見る？

目次

登場人物	1
全王神が作ったG T A Vの世界 く秩序 無き戦い	
第1話 暗殺稼業	22
第2話 死は未来への希望なり	30
第3話 初めてのお料理	37
第4話 戦闘訓練	45
第5話 再戦と決着	50
第6話 盗まれたレシピ	60
第7話 処刑執行	63

第8話 名探偵と怪盗との出会い	68
第9話 夜中のデート	80
第10話 星空英竜	88
第11話 エデン	92
第12話 同盟と襲撃	106
第13話 ANOTHER INFI NITY DIEND	114
第14話 暗殺稼業2	125
第15話 休養と夢	134
第16話 鈴美とクリムゾン	142
第17話 龍神の覚醒	155
第17・5話 スリラーの真価とその	

	正体	161	未来の始まりの世界	く円卓の騎士
	第18話	未来の妹と名乗る少女	第25話	未来の始まりの地
172	登場人物2		第26話	仮拠点
	第19話	零と全	190	183
	第20話	幻影と破壊者と能力者		
205	第21話	今起ころうとしてる世界		
215	第22話	深雪の過去		
	第23話	性病を治す薬	240	228
247	第24話	雷鳴を轟かす神罰の剣		
	第29話	愛花の真意	286	280
	第29.5話	麻婆を極めし者		
	第30話	杜王町奪還作戦	295	
	第31話	太陽の騎士		
	第32話	V S 転生者 騎士王	319	306
	第28話	叛逆の騎士V S 裏切りの騎士		
	第27話	聖弓のスタンド使い	271	
	第26話	仮拠点		
	第25話	未来の始まりの地	264	257

第33話	熾天へと輝く復活の剣	357	『エルム街の悪夢男』	466	
第34話	月の花	374	第39話	猫耳パニック	476
第35話	奇妙な旅館	385	第40話	魔界のバーサーカー	485
恐竜ドラゴンとコラボ	もう一つの幻想	493	第41話	仮面ライダーゲーム	493
郷	く東方影悪夢く		第42話	フランとフレディ世界のレ	503
第36話	悪夢を使う男	422	ミリア		
第37話	エルム街の悪夢VS幻影の		第43話	破滅の魔神フランVS運命	
不死鳥		438	を操る吸血鬼レミリア		510
第37・5話	有翼人の羽化	449	第44話	襲撃	521
登場人物3		455	第45話	過ぎ去りし思い出	進撃の
第38話	魔境狂乱世界	幻想郷	巨人		534

	第46話	美しき残酷な運命	—	542
	第47話	ガルツチの本心	—	554
	コロ助なりくさんとコラボ	複合した世界	—	636
	界	Time Crisis EX	—	
	第48話	混合した世界	—	577
	第49話	放たれる戦い	—	586
598	第50話	レイジングストーム	—	
	第51話	恐怖の支配者と痛みの支配者	—	604
	第52話	コブラ部隊	—	608
	第53話	空を攫う理由	—	619
	第54話	破壊者VS狂狼	不死鳥V	703
	第55話	サーヴァントソルジャー	—	628
	第56話	メタルギアエクセルサス	牙	648
	第57話	次元を超える絆	—	656
	第58話	ロードの居場所	—	665
	第59話	魔眼の試練	—	678
	第60話	大宴会	—	692
	やくびょうがみXとコラボ	狭間の世界	—	
	く全の竜神	—	—	
	第61話	部署プリズマ☆イリヤ	—	
	S狂犬	—	—	

第62話	復讐と狂乱のガルッチ	711	ガルッチの第2の故郷	く消えない思い	
第63話	ガルッチの祖父との出会い	721	懐かしき世界		808
特別編	修学旅行	734	懐かしきお守り		855
第64話	未来達の修行	750	不穏なる王国		866
第65話	虚の龍神と全の竜神		第73話	思い出したくない場所	882
第66話	ホームンクルスの襲撃		第74話	歪んだ精神と清らかな魂	892
第67話	夢現に続く希望の光	789	第75話	神話スタンド覚醒	906
第68話	次の世界へ	798	第75.5話	動き始める運命	921
			出		

第76話 決戦の世界へ | 929

ラル |

985

『原典回歸終焉世界』 End of T

第83話 超全大王神『ガルツチ』VS

he World ~最後の戦い~

零の龍神『ゼロノス』 |

1000

第77話 かつての戦友の再会

第84話 超大宴会 |

1016

938

第84・5話 英竜との異世界デート

第78話 英竜の忌まわしき過去

|

1029

949

最終話 抑止力の最後 |

1055

第79話 全王神&龍神王VS全王

第EX話 2万年後の君へ |

1063

961

第80話 歪んだ兄弟愛と守護する姉

弟愛

| 967

第81話 ゼロノスの真意 |

976

第82話 超完全生命体アンチスパイ

登場人物

ラーク・バスター・ガルッチ ∞歳（外見的に14歳） 11月14日生まれ 性別
男

身長：150cm（女体化時） 130cm 体重：45kg（女体化時） 40kg
（女体化時のスリーサイズ：B87/W50/H70）

CV、内山？輝（女体化時，田中あいみ）

テーマ曲 u.n. オーエンは彼女なのか？アレンジ曲 『蒼月の懺悔詩』 Univ
ersal Nemesis』

種族：有翼人（元 魔神）

髪の色：アクアマリン

目の色：蒼（右眼は魔法の眼球の為色々な色になれる）

クラス：グランドアーチャー・グランドセイヴァー・グランドアヴェンジャー・

グランドビースト・アサシン・バーサーカー

属性：混沌・中庸

カテゴリ：月

ステータス 筋力：USD XEX / 耐久：C / 敏捷：UEX / 魔力：∞ / 幸運：A
 (C) / 宝具：∞

無の神であるラヴオスと戦い、ジャキの姉であるサラを救出した大英雄。(本人は否定)

その後、未来達と共に行くことを決意し、家族や友人達に後を託し、旅に出て行った。前世は全王神の息子で、虚王魔神とも呼ばれているが、真の前世は、無の神を生み出した元凶であるケンジの弟、遠藤宇宙だった。

しかし、その前世と訣別したのか、全王神の息子として生きることにした。

不老不死の呪いは継続か、永遠に解けない呪いとなってしまうも、それ程気にすることもなくなり、此からも生き続けることにした。

未来と正式な恋人になり、鳳凰とアラヤという子をもっている。

以前より明るくなり、いつも以上に接しているも、少しヤンデレ気味でもある。

後、女性扱いには殺意を持つ。とは言え、髪形はサイドテールで水色の羽のヘアピンと水色の翼のヘアゴムを付けている。

戦闘面では、殆ど英霊達の宝具やその贗作の宝具、そして白い剣である生命の樹の剣セファイロトソードと黒い剣である邪悪の樹の剣クリフトソードの二刀流、日光・暁丸と月光・闇夜丸の二刀流、そして聖

剣スターダストソードと魔剣ダークネスムーンの二刀流のどれかになる。どちらも属性相反した剣で戦う。

魔神化する場合は、常闇月の刀と絶望の力で対抗する。(最早魔剣士………)
世界を揺るがす神々の剣^{ゴッド}に関して、ギルガメッシュにあげたため、現在の武器はその6つしかない。

門矢未来 18歳 2月7日生まれ 性別 男

身長：160cm 体重：47kg

CV、佐倉綾音

テーマ曲 Journey through the decade

種族：人間(怪獣娘?)

髪の色：黒

目の色：右眼 金色 左眼 黒色

クラス：ライダー・グランドセイヴァー・チェンジヤー

属性：中立・中庸

カテゴリー：星

ステータス 筋力 : SS / 耐久 : B+ / 敏捷 : UEX++++ / 魔力 : ∞
 / 幸運 : B / 宝具 : ∞

両儀式の姿をした男の娘であり、転生者。前世は『ともだち』事、カツマタミクという者だった。

今ではデイルーラーの門矢士の弟なのではあるが、士のことは嫌っている。

イフの能力に加えて、様々な力を持っていて、救いたいときは救い、しかしたまにとんでもない行動にも移る。

実のところ、両儀式と関係がないが、『直死の魔眼』を所持していて、それには気付いていない。

鈴美、オフィス、簪、本音、レティシア、白夜叉と共に行動していて、養子であるリサも連れて旅をしている。

現在は新たに、正式な恋人となったガルツチに、その妻であるフラン、こいし、イリヤや、未来とガルツチの子である、門矢鳳凰と、門矢アラヤと共に旅に出ている。

ガルツチとは違って、服装は女装なものが普段着で、意外と気にしていない。

門矢アラヤ 200歳以上（外見的に6歳） 11月8日生まれ 性別 男

身長：129cm 体重：30kg

CV、宮野真守

種族：人間と有翼人のハーフ

髪の色：アクアマリン

目の色：群青色

クラス：アサシン・キャスター

属性：中立・悪

ステータス 筋力：A+／耐久：D／敏捷：EX／魔力：EX／幸運：B／宝具：E

X

門矢未来とガルツチから出来た息子で、ラーク家の末っ子。見た目的に6歳なのではあるが、死を司る力を持っていて、スタンドは『DEAD or ALIVE』というジャツジメント式で、相手を生かすか殺すか、どちらかを選ぶことが出来る。

性格はガルツチと似ているが、そこまで暗くないが、守るためなら命を張って戦うところがある。

武器は大鎌の『混沌の大鎌』と呼ばれていて、斬られた相手は気を狂うか、身動きを取れなくなる。最も、即死効果もあるため、死なずに、狂うか動けなるかだけでも、奇

跡である。

直死の魔眼もちやつかり受け継いでいて、使用すれば即死も狙える。

門矢鳳凰 205歳以上（外見的に7歳） 6月28日生まれ 性別 女

身長：130cm 体重：32kg

CV、悠木碧

種族：人間と有翼人のハーフ

髪の色：桜色

目の色：マゼンタ

クラス：キヤスター・ヒーラー

属性：中立・善

ステータス 筋力：B+／耐久：D／敏捷：S／魔力：EX++++／幸運：B／宝

具：EX

門矢未来とガルツチから出来た娘で、ラーク家では七女。見た目は7歳で、その子の笑顔や寝顔は女神級で、殆どの皆が鼻血を吹き出してしまいうぐらいの可愛らしさがあ

別 女

フランドール・スカーレット 495歳以上（見た目的に8歳） 5月8日生まれ 性

身長：125cm 体重：30kg

CV, 丹下桜

テーマ曲 u. n. オーエンは彼女なのか？

種族：吸血鬼

スリーサイズ：B60/W30/H40

る。スピリットレストランで料理を鍛えているのか、料理上手でもあり、トニオでさえ涙を流してしまうほどの美味しさがある。その為か、命を司る能力を持っていて、致命的な傷や、末期ガンですら治療する事が出来る。更にスタンドは、16の翼がついた少女の姿で、名前は『Born to Love You』（元ネタは古明地こいしのハルトマンの妖怪少女アレンジ曲から。）と呼んでいる。

短剣の二刀流も出来て、しかも状態異常を作り出すのが得意らしく、毒や麻痺、眠り、石化など操れている。

優しいときは優しいのだが、怒るときはちゃんと怒る。

髪の色：ゴールド

目の色：深紅色

クラス：グランドバーサーカー・キャスタ

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：U EX／耐久：B／敏捷：EX++++／魔力：EX++++

＋／幸運：A／宝具：EX

ガルツチの妻で、ドラキュラ・ブラッド・ツェペシユの末裔。レミリア達に後を託して、未来達と共に旅立っている。

それに加え、未来ガルを作り出した本人でもあり、実際作った本人もご満悦。

破滅の魔神であるルイン・ブレイク・ヘラの能力を受け継いでおり、スタンドも『D ESTRUCTION LIGHT』に進化するも、範囲がデカすぎるため、使用には控えている。

戦闘面ではレーヴァテインとアレガステインの大剣二刀流とスベルカードを使用し、更に宝具である『災厄^レへと導^{ヴァ}く破壊^イの剣』で、なぎ払って戦うこともある。

情緒不安定なところも無くなり、無邪気で甘えたがりなのだが、やるときはやるという性格をしている。浮気は許さないのだが、実質、自分が気に入った相手なら寧ろ犯して

しまう性癖があるため、許容範囲は不明。

古明地こいし 500歳以上（見た目的に12歳） 5月14日生まれ 性別 女

身長：130cm 体重：33kg

CV、門脇舞以

テーマ曲 ハルトマンの妖怪少女

スリーサイズ：B87/W50/H70

種族：覚妖怪

髪の色：アクアマリン

目の色：碧色

クラス：グランドアサシン

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：C++/耐久：E++/敏捷：EX++/魔力：A/幸運：EX

／宝具：C

ガルツチの妻その2。暗い過去を持っているが、今ではガルツチ達が着いていて、訣

別している。義理の姉であるさとりとペットであるお空とお燐と別れを告げ、未来達と共に旅立っている。

無意識に行動しているが故、初めての女性と出会うとどういふ訳か胸を触りまくるといふエロ無意識が発動するようで、ガルツチが止めようとする女体化させて犯かしているのが目に見える為、諦めている。

第3の目を封印していたが、現在は使用してる。更には、心のもつと深い部分を見ることが出来るため、さとりよりも強力な能力を得ている。

戦うときは短剣の二刀流を使用しているが、殆どがアサシンらしい行動があるため、真正面に戦う方が稀。

無意識で行動してるため、何をしでかすかは分からないけど、凄く優しく、甘え上手でもある。淫乱なところもありまくりではあるが、実際は愛されて欲しいが故にこうしている。

そして心の奥底では、未来とHしたいなど思っている。(既にしてるかは不明)

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン 200歳以上(見た目的に10歳) 1

1月20日生まれ 性別 女

身長：133cm 体重：34kg 誕生日：11月20日

CV、門脇舞以

テーマ曲 ローレライ ラストリモート

スリーサイズ：B60/W40/H51

種族：人間

髪の色：銀色

目の色：深紅色

クラス：グランドキヤスター・アーチャー

属性：秩序・中庸

ステータス 筋力：A／耐久：C／敏捷：A／魔力：EX／幸運：B／宝具：EX

ガルツチの妻その3。UBWルートで、ギルガメッシュに殺され転生した少女。家族である士郎達に後を託し、未来達と共に旅立っている。

英霊達を一時的に召喚する事が出来て、グランドサーヴァントも呼び出すことが出来る大魔導師でもあり、自身で戦うときは、ルビーを呼び出して転身して戦うこともある。

無邪気さはフランと同じくらいで、可愛い物を見るとほぼ暴走しまくる。いわばステイナイトのイリヤとプリズマ☆イリヤのイリヤとの中間のような性格をしている。ガ

ルッチが未来と付き合っていることに関しては、凄く喜んでいて、寧ろもつとやって欲しいと思っている。

更識簪 11歳 4月21日生まれ? 性別 女

身長:150cm 体重:35kg

CV,三森すずこ

テーマ曲 『luminous rage』

スリーサイズ:不明

種族:人間

髪の色:水色

目の色:桃色

クラス:アーチャー・セイヴァー

属性:秩序・善

ステータス 筋力:C/耐久:C/敏捷:EX/魔力:B++++/幸運:D/宝具:

EX

未来のハーレム要員の一人で、『星の勇者』と『星の勇者を阻む者』の両方の刻印を持つ

ていた少女。インフィニット・ストラトスの住人であったが、未来と共に生きたいと思い、ついに行くことになった。

自身のI Sは全員のウルトラマンだけでなく、ウルトラ怪獣の能力を備えていて、更にはスタンダム使いでもある。

姉への強いコンプレックスを持っているが故に、内気で臆病、人を寄せ付けない性格になったのだが、未来と出会ったお陰で、少しずつではあるが、明るくなり、更には『フレディがいる幻想郷』にてリサと出会い、その後養子として育てている。趣味はアニメ、それも勧善懲悪のヒーロー物のアニメを見ていて、自分もヒーローになりたいと思っている。

最近では未来ガルのBL同人誌を作ってるらしく、密かに売っているらしい……………。(どうしてこうなった。)

布仏本音 11歳 5月3日生まれ? 性別 女

身長: 145cm 体重: 33kg

CV, 門脇舞以

テーマ曲 ハルトマンの妖怪少女 アレンジ曲『LOVERS』

スリーサイズ：B91/W59/H83？

種族：人間

髪の色：長春色

目の色：琥珀色

クラス：ライダー・アーチャー

ステータス 筋力：D／耐久：A＋＋＋／敏捷：EX／魔力：A＋＋＋＋／幸運：C
／宝具：SSS

未来のハーレム要員の一人で、簪と同じインフィニット・ストラトスの住人でもある。現在は未来と共に旅をしていて強くなっていく。

更識簪とは幼なじみで、かんちゃんと呼んで、他にはオーフィスの事はオーちゃん、フランの事はフフラン等、親しい人にはニツクネームで呼ぶ癖がある。

自身のISを持っていて、更にはスタンド使いでもある。

凄くのほほんとしているのだが、怒ると魔王並みに怖くなる。未来とガルツチが恋人になつてるに対しては、どうも喜んでいるようだ。

余談ではあるが、玉藻の前から一夫多妻去勢拳を伝授している。

更識リサ 本名リサ・トレヴァー 8歳 誕生日不明 性別 女

身長：120cm 体重：不明

CV、花澤香奈

テーマ曲 BENNIE K『サンライズ』

種族：元人間

髪の色：紫色

目の色：虹色

クラス：セイバー・バーサーカー

ステータス 筋力：A++／耐久：C／敏捷：EX／魔力：SSS／幸運：E++／

宝具：？

『フレディがいる幻想郷』の元怪物だった少女。アンブレラの企業に人体実験にされた存在で、自殺を図ろうとするも、簪の優しさで救われるも、カオスヘッダーやウィルス憑依時の身体能力やパワーと不死性すらも備わっているだけでなく、更にはガルツチの相棒のスタンドである『アヌビス神』を持ったため、戦闘面では最強になった。

髪の色は金色だったのだが、旅をしている内に、紫色になり、目の色は虹色へと変化

した。

今は簪と未来の養子ではあるが、それと同時にアラヤと鳳凰の義理の姉となっていて、実質ガルツチの養子でもある。

オフィス ∞歳（見た目的に9歳） 誕生日不明 性別 女

身長：∞（変えようと思えば変えられる） 体重：∞（身長と同じ）

CV，三森すずこ

種族：龍神

髪の色：黒色

目の色：ポイズン

クラス：モンスター

ステータス 筋力：∞／耐久：∞／敏捷：∞／魔力：∞／幸運：SS／宝具：∞

ハイスクールD×Dの世界の住人で、前から未来と一緒にいたハーレム要員の一人。『無限の龍神』ではあったのだが、ガルツチの能力『逆無限』と『反無限』の能力を得て、『反無限の龍神』となった。

元々はグレードレッドを倒すために禍の団に入っていたが、未来の説得により、抜けて、未来と共に旅をしている。

グレードレッドを敵視していたが、今では友好関係を持っている。

大食漢なのか、よく食べるようなのだが、不味いものは食べない。因みにガルツチ達の料理は美味しいようで、滅茶苦茶気に入っている。

しかも無限の力に加えて『夢幻と真実を司る能力』を持つてるため、滅茶苦茶チート染みた能力を得てしまった。

レティシア・ドラクレア ???歳 誕生日不明 性別 女

身長：不明 体重：不明

CV、 異悠衣子

スリーサイズ：不明

種族：元吸血鬼 現 有翼人

髪の色：プラチナ

目の色：琥珀色

クラス：セイバー・アーチャー・ライダー・キャスター

ステータス 筋力：SS++／耐久：EX／敏捷：EX／魔力：EX／幸運：B／宝具：EX++

『問題児たちが異世界から来るそうですよ?』の住人で、未来のハーレム要員の一人。寡黙で物静かだが、子供たちにも常に礼儀を重んじるよう諭すなど、時に厳しく、時に優しい性格の持ち主。しかし、同属に対する仲間意識は強く、仲間を傷つけたり、侮辱した者に対して激しく怒りを燃やすなど、仲間を大切に思う気持ちを持つ。

元は吸血鬼の純血と神格を持ち合わせた魔王だったが、“ノースーム”にかっつけられるべく神格を捨てたため、魔王と称していた時の力を失うも、未来の『セライロト・グラール幽世の聖杯』により、新たな肉体が生成され、白い翼を十二枚も生やし、白いドレスを身に纏う姿となったのだ。

その為、種族も変更され、ガルツチと同じ有翼人となった。

白夜叉
???歳（見た目的に5歳ぐらい） 誕生日不明 性別 女

身長：120cm 体重：35kg

CV、新井里美

スリーサイズ：不明

種族：不明

髪の色：乳白色

目の色：琥珀色

クラス：キヤスター・ライダー・ランサー・アーチャー・セイバー・セイヴァー

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：∞／幸運：A++++／

宝具：EX+++++

『問題児たちが異世界から来るそうですよ?』の住人であり、時空の賢者の一人。ガルツチの祖父を知っている者であり、唯一ガルツチに全身全霊の力を使っても勝てなかった太陽神でもある。

普段はおちやらかした言動や女の子へのセクハラなど不真面目な態度だが、実際は仕事を全て片付けた上で遊んでいるという有能な人物。

箱庭世界に来たばかりの逆廻十六夜らにその実力の一端を見せつけ、戦わずして退散させるという底知れなさを見せているが、未来やオーフィス、簪、本音に敗北し、以降は旅のお供というよりはハーレム要員の一人?として旅に出てる。

実際ガルツチの世界にいる時空の賢者であるロヴァス・グランドよりも実力が高いよ

うで、パチユリー、ヴォルデモートをも超えている。

杉本鈴美 16歳 誕生日不明 性別 女

身長：不明 体重：不明

CV，原紗友里

スリーサイズ：不明

種族：元幽霊 現 人間？（龍神？）

髪の色：茶色

目の色：茶色

クラス：不明

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／幸運：D++／宝

具：不明

『ジョジョの奇妙な冒険』の第4部の人で、決して振り返つてはいけない小道にいる元地縛霊の少女。それと同時に、未来の最初のハーレム要員の一人でもある。

吉良吉影に殺され、その後は吉良を打倒する者が現れるのを小道で15年間ずっと待

ち続けていた。が、未来が殺したことにより、その未来に惚れてしばらくは滞在、そして成仏してこの世を去ったと思われた。

しかし、ガルツチ達が生き返らせたお陰で、未来と再会、以降は未来と共に旅をしている。

実は鈴美は『零の龍神』の血を引いて、本人にはそれに気付いていないらしい。

ただ、ガルツチのもう一つの人格、ジャック・マッドネス・クリムゾンが言うには、何故だか妹と似ていると思っっているらしい。

全王神が作ったGTA Vの世界　　～秩序無き戦い～

第1話　暗殺稼業

―ロスサントス―

ガルツチside

数十分掛けて移動……………って、うわー信号無視かよ。しかも警察過激すぎ……………。
でもなあ、あれ一般人も巻き込んでるよね？

未来「さすがGTA Vの世界……………」。

ガルツチ「あの一、ランチャーは何処ですか？」

未来「え？」

簪「ちよつと!？」

千夏「ランチャーはありませんが、これを付けて下さい。」

ん？なんかフックショット的な何かだな。とりあえず窓を開けて……………、つていう
か使い方が……………なるほど、大体分かった。

ガルツチ「そらよつと！ついでに橋に繋げてつと。」

そして橋に繋がれたパトカーは、これ以上動かなくなり、そのまま引つ張られ、宙ぶ

らりんの状態になった。

ガルツチ「……………これ、どつかのGAMEにもあつたよね？つていうか普通に銃でも撃つとけばよかつたかも。」

白夜叉「考え方おかしくない!？」

ガルツチ「いや、此処つてG T A Vの世界だろ？恐らく常識もぶつ飛んでるしさ。」

レティシア「……………何も言えない。」

千夏「さあ着いたぞ。此処が、私達のアジトだ!」

僕等はリムジンを降りて、見たのは、巨大な畑に囲まれた一つの屋敷だ。つていうか此処紅魔館に見えるけど、なんか違う気がする……………。

千夏「我々『千夏』のアジト兼コミュニティのようこそ。そして改めて、此のギャングの店長兼ボスである『千夏』だ。宜しく頼むぞ。」

ガルツチ「此方こそ、宜しく——」

『バリーーンツ!!!』

ガルツチ「……………何で警察が石を投げるかなあ？銃撃てよ銃。(ゝωゝ#)」

アラヤ「母さん、殺意でまくりだよ?」

千夏「ふつ。警察の過激派か。内部にも協力者は居るが、中にはこの様な事を平気でヤル奴も居る。だが、甘く見るなよ。」

警察が、パトカーに乗って逃げ出した瞬間。

『ドドドドオオオオ
!!!!!!』

アジトから放たれた無数のミサイルが、警察を吹っ飛ばした。

一言言わせれば、あの時の『End of The World』も、此に近かったし……………。
リサ「ええっ!!? お巡りさんが!!!」

簪「幾ら石を投げられたからって……………。」

ガルツチ「うーん、デジヤヴを感じる。」

3人「そつちの世界も荒れてるの!？」

ガルツチ「いや、戦場に戦場を重ねてるせいかな、なんか見慣れちゃったし。」

フラン「お兄ちゃん、修行するためだけに、世界飛び回ってたしね……………」

イリヤ「うんうん。(・|・)(・|・)」

未来「相当荒んでるね……………」

千夏「フツフツ。我々に逆らった結果だよ。君達も所属すれば解るさ。」

そして、千夏がアジトに案内してくれた。

千夏「それから、私の事は、千夏、店長、ボスでも何でも良いぞ。呼び方は自由だ。ま

あ此処に居る部下達は、全員店長かボスって言うがな。」

未来「そうか。なら僕は、千夏って呼ばせてね。」

ガルツチ「んじやあ僕はマスターと呼ばせて貰うね。」

未来「そういうえば、ガルツチってサーヴァントもやってたね……………」

そして、案内されたアジトの中は、かなり広い物だ。企画書も沢山あり、風呂やトイレも充実し、美味しそうな匂いもする。凄いな……………」

千夏「しかし、ギヤングと言っても、此方から企画があるまでは暇なものさ。やることと言ったら、何処かで薬やタバコを売るか、コンビニやレストランの経営、喧嘩、目

的地まで手配度MAXで逃げる。ダイナミック乗車位だな。それに、他のギャングと交戦したりもする。後は、新商品を考える位だな。」

なる程なる程……。つていうか麻薬じゃないよね？

千夏「それでは、今日からギャング生活を楽しんでくれ。ギャングの基本は、仲間と共にある信頼関係か、後は金だ。」

未来「ありがとう!!! それじゃあ食堂で何か食べてくねー!!!」

鳳凰「未来お父さん!!」

リサ「未来お母さん待ってよー!」

アラヤ「僕も行くー!」

………お母さんって、なんか違和感ないよね。

簪「あつ! ころ! リサ!! 走つちや駄目!!」

リサ「ごめんなさいママ。」

簪「もう。リサったら」

………微笑ましいな。さてと………。

ガルツチ「マスター、早速暗殺稼業の移りたいが、そう言うのは?」

千夏「うーん、今のところないな。」

ガルツチ「分かった。」

千夏「あ、そうそうガルツチ。全王神様から伝言を預かつてる。」
ガルツチ「？」

千夏「この世界で、いっぱい楽しんでね。♪って。」

……………了解。いっぱい楽しませて貰うよ。

翌日というよりなつたばかりの深夜、早速僕の仕事が来た。

千夏「実はある部下が、取ってきた情報だが、何もやってない一般人を逮捕している警察が居るんだ。其奴を、如何なる方法でも良いから、始末して欲しい。」

ガルツチ「場所は？」

千夏「このストリップクラブに、よく出入りしているから、君の腕次第だな。好きな場所で構わない。死体処理は、まあどうせ何とかするでしょうね。魔法認知しないし。」

ガルツチ「んじやあ、起源弾の使用は？」

千夏「構わない。ただ、一発必中で頼む。」

ガルツチ「分かってる、無闇に犠牲を払いたくないしな。んじやあ、行ってくるね。」

千夏「ああ、気をつけて。」

さてと、久々に言うとするか。

t o b e c o n t i n u e d
ガルツチ「さあ、聖杯戦争を続けよう。（そもそも聖杯戦争すら起こらないがな。）」

第2話 死は未来への希望なり

—ロスサントス とあるビル— 月夜ノ刻—

ガルツチ side

よし、配置完了。今日は満月は綺麗のようだな。

ガルツチ「さてと、起源弾をセットして……………」。

よし、そんじゃあ其奴が居る方向に見るとしますか。念のために、幻影を張って、誰にも見えない仕組みにするか。いや、下手すりゃバレるか。慎重に狙わないと……………」。

ガルツチ「まあ一応、眠らなくても大抵はなあ……………」。

今は鼓動も殺意も何もかも消して、存在感を消す。奴が来るまで——

全王神『ガルツチちゃん？ 仕事中？』

今仕事してるんだけど、つていうか暇なときに連絡つて……………」。

全王神『良いじゃん、私だつて暇なんだしく。』

暇つて……………母さん、あんたねえ……………」。

???『お前なあ、息子に連絡するのはいいがちゃんとしろよ。』

ぬお!? 今度は誰!?

??? 『ようガルツチ、久し振りだな。』

おいその声、デイルーラーか!?

士 『おう、俺の弟の恋人になったって聞いた以上、連絡しようかなくて。』

だからって、念話はねえんじやねえの? 後今暗殺稼業やってんだから……。

全王神 『そういえば、あっちの世界は天皇陛下の補佐やってたんだっけね? あとは暗殺稼業とか。』

士 『おまつ!? マジで!?!』

マジだよ。実際僕は、こつちに性に合ってるし、何より——

全王神 『あのー、ガルツチちゃん。つくくん気絶しちゃったよ?』

お前もかよ。なんなの? 何で僕が元天皇陛下の補佐やってるって言った途端、気絶するんかな?

未来達もそうだけど、そんなに気絶すること?

全王神 『あー、そういえばさ。キングも、息子の職業を言ったら、発狂したあとに気絶したよ?』

………何でかな? そこまで気絶すること?

全王神 『多分皆、天皇陛下の補佐やるなんて誰も思っても見なかったんじやないかな

?』

解せぬ……………。

全王神『それより、ストリップクラブから、ターゲット来たよ。』

OK, んじゃ永眠してもらおう!

ガルツチ「シヨット!」

一方……………

「いやー、良い姉ちゃんいたねえ……。さて、次のグアラバツ!」

「お、お客様!?!どうなされました!?!」

ガルツチ「さてと、終わったことだし、帰ると……おっと！」

何かを察した僕は、すぐさま回避し、攻撃してきたところを見た。そこには黒いコートを着ている男が、2人ほど存在していた。

「なかなかすばしっこいガキだな。」

「兄貴、此奴が今回のターゲットですか？」

「ああ、こんなところにいるとは、ついてるぜ。」

此奴、『名探偵コナン』に出てくる黒ずくめの組織!?

ガルツチ「……………ジンとウオツカか。しっかし、酒の名前つてどういうこつちやな。」

ジン「ほう、俺のコードネームを知ってるとは、厄介な奴だな。」

ウオツカ「兄貴、気を付けてください。此奴は伝説と名高いスナイパー使いですぞ。」

ジン「フツ、俺がこのガキに遅れを取るなんて事は、絶対ないからな。」

ガルツチ「悪いが、あれが契約者だったら残念だったな。既に暗殺済みだ。」

ジン「構わねえ、お前を殺せば、チャラになるしな。」

ガルツチ「……………どうかな？」

ウオツカ「兄貴！」

ガルツチ「『フラッシュ・アロー』
『閃光の矢』！」

そして！

ガルツチ 『Timealter ChangeTheWorld』！』

そのままジンとウオツカを気絶させ、指紋や虹彩更には顔写真もとり、更には唾液も取った後すぐさま立ち去った。

まあ思わぬ収穫も得たな。一応これも報告するか。あ、ついでに記憶修正つて事で。

ガルツチ 『忘却の彼方に忘れよ』。』

よし、そんじゃ撤退とするか！！

その後アジトに戻ったら、何故か半殺し状態の千夏がいた。何があった……。

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第3話 初めてのお料理

—千夏アジト—

ガルツチside

ガルツチ「んで、何で半殺し状態だったんですか？というか、僕が暗殺が終わった後ブラブラしてたのは悪かった。でもさ、ホントに何があったの？」

千夏「あ……アハハ、き、気にしまいでくれたまえ。」

いや気になるだろ、何があった。

こいし「千夏はね、コンビニ事爆發させた挙げ句、ガソリンスタンドに当たって大惨事を——」

ガルツチ「OK把握。そりや半殺しなるわな、マスター……。というかさ、普通ガソリンスタンドのコンビニところで爆弾仕掛けるか？」

千夏「……申し訳ございません。」

やれやれ……。今度からはちゃんと気を付けろよ？

それからというもの、現在僕等は、子供達のお料理会に来ています。暗殺の仕事は終

わり報酬は多く貰い、更に未来達の強盗により、更に多くのお金を貰った。こつちの所持金は不可思議位のお金を持つているが、全部電子マネーに変えている。使うときは、どれくらい使うかを設定すれば、現金が出てくる仕組みがある。そして、子供達は今、僕等のために料理を作ってくれる。料理と言っても、コンビニで売つてするようなチキンと、マクドナルドで売つてするようなハンバーガー。ケンタッキーのチキンといった簡単なフードだ。

因みに、鳳凰は物凄く料理が上手なのは知つている。

未来「そういや、僕も料理は出来るよ。教えてくれれば、すぐに出来る。ガルツチもだよね？」

ガルツチ「まあ本当なら、料理はしなかつたんだが、エミヤよりの僕の幻影が滅茶苦茶上手で、いつの間にか僕も料理上手になつたからね。」

未来「なる程。他の皆は？」

鈴美「うーん。小さい頃、ママと一緒に料理のお手伝いをしてたわ。それで、大抵お料理は出来るわよ。」

なる程、鈴美さんの料理には興味あるな。

簪「私は一応出来るけど、お姉ちゃん程じゃないよ……………。でも、料理でお姉ちゃんを超えてみせるから！」

フラン「目指せ！姉に勝る妹!!」

簪「おー!!」

ガルツチ「アハハ……。フランは十分超えまくってるけどね。」

—スピリットレストラン—

レミリア「クシュン！」

バルツチ「レミリア姉ちゃん！風邪？薬持ってこようか？」

レミリア「いや、何でもない……。なんか噂された気がしたから。」

—千夏アジト—

ガルツチ「それで、本音は？」

本音「私は、出来ないなあ。みつくんに教えてもらおうよ。」

こいし「意外、出来ると思ってたけど……。」

僕もだわ。

レティシア「私はメイドの経験上、料理は得意だ。今度ギャングの皆に料理を振る舞ってやろう。」

ガルツチ「あ、それ良いね。夜叉は？」

白夜叉「うむ。出来るのう。」

どや顔でいうことか？（・―・；）

オーフィス「我、出来ない。」

確かに、食べる側だったしな。

未来「フラン達は？」

ガルツチ「3人とも料理できるよ。凄く上手だし、僕が経営していた『弓兵の店』や

『スピリットレストラン』で、色々と料理を提供してるよ。」

アラヤ「出来たー！」

お、出来上がったか。

そして、人数分更にチキンとハンバーガーを置いてくれた。

鳳凰「お母さん、フランお姉ちゃん、こいしお姉ちゃん、イリヤお姉ちゃん。食べて。」

僕等は、子供達の作ってくれたチキンを食べた。

その瞬間。

『~~~~~』
!!!!!!!!!!!!!!
』

ビックボスの言葉を借りるのならば……、『旨すぎる』!!!!!!
あまりにも美味すぎて、涙
流しちゃったよ。このチキンのレシピは、子供達^が書いた^為! クレヨンで書かれていた。
子供用の画用紙に書かれたレシピを守ると決意した僕等であつた。

全王神『キヤアアアア!!! 私にも食べさせてえええええ!!!』
うちの母さんも欲しがってたようです。

翌日『千夏マート』で販売された。

んで、僕とオーフィス、未来の三人で、リサとアラヤと鳳凰の作ったチキンとハンバー
ガー。通称、ちなチキと、ちなバーガーを販売するために店に来た。

と、そのときだった。

『ズガガガガアアアア
!!!!!!!』

なんとお客様がバイクや車に乗って、店内に突っ込んで来たのだ。いやいや……………。

未来ガル 「バイクで店内に入店するなあー……………!!!」

「これで、究極入店!!!」

未来ガル 「巫山戯んなああー……………!!!」

!!!!!!!

結論、千夏マートが店内爆発により、臨時休業しました。

更に上空から輸送機タイタンの落下、爆撃機による爆撃により、千夏マートは全壊。長期休業。後一ヶ月で直るといふ。

つて言うのは冗談で、実際はあと15日で直ることになった。

まあでも、さっきのお客様は、未来と僕のスタンドラッシュでお仕置きをし、最終的にはモリアーティの宝具『???』。どんなもんかという、担いでいる仕込み棺桶から重火器をブツ放す。たったそれだけである。勿論、再起不能程度の感じだがな。まあ男だと分かり、そして此奴の犯罪履歴を見れば、なんと幼女をさらってレイプしまくっていた

ようなんで、滅・一夫多妻去勢拳で、男としての人生を終わらせました。

此には未来も苦笑い。まあ未来にはやらない。絶対に！というかしたくもねえわ!!
未来が泣いちゃうじゃん!?

その間僕等は、夏休みになりました。

千夏曰く、对警察、对軍隊、对怪物用訓練を兼ね備えた遊びを用意したらしい。僕等はワクワクしてきた。どんな遊びという名の訓練があるのか、楽しみだ。

t o b e c o n t i n u e d ↪

第4話 戦闘訓練

—ロスサントス 千夏アジト—

ガルツチ side

母さん、ちよつと良いかな？

全王神『はいはい、どうかしたの？』

一応聞くけど、仕事中に襲ってきた黒ずくめの組織がいるって事は、あの工藤新一ごと江戸川コナンもいるって事か？

全王神『まあそう言うことだね。』

成る程ね、よもや名探偵コナンの世界にも繋がってたとは………………。大丈夫なんかな？特にあの子供の方。絶対に余計な首を突っ込んで居る気がする。

全王神『まあまあ、子供なんだから仕方ないよ。』

そりゃあそうだけど、というか分かつてはいるんだが、洒落にならないからなあ…………。よそはよそ、うちはうちっていいながら、よその子を見習いなさいって、モロ矛盾してるし…………。

自分は自分なんだし、もうちよつとなあ…………。個人を大事にした方がいいよ。褒め

るときはちゃんと褒めて、叱るときはちゃんと叱る。場合にもよるけど、やっぱりね……。

全王神『すっかり親だね。教育委員会に出た方が良いかもしれない。』
教えるのは無理だぞ？下手くそなんだし……。

千夏「次はガルツチだよ、定位置に着いて。」

ガルツチ「了解、この辺りだな。」

千夏「そうそこ、そんじゃあ起動させるよ。」

千夏がスイツチを押すと同時に、チンピラ40万人、警察は重装備している奴と盾持ちを入れて60万人、軍人に関してはずっと500万人、そして……。

シヨツカー達『イイイイ!!!』

……何故かシヨツカーの軍勢が1000万人という。つていうか、何でシヨツカー？

千夏「時間内に、チンピラ、警察と軍人を無力化。そして、シヨツカーの全滅をしてみて。」

ガルツチ「600万人を無力化に、シヨツカー全滅ねえ……。」

未来「というか、大丈夫なの？」

ガルツチ「大丈夫大丈夫。これでも1億人以上も殺せたんだし。」

未来「一億……………」

鈴美「改めて凄いわ……………」

ガルツチ「んじゃ、無力化させるぐらいなら、出来なくもないな。殺害は、もう決めてる。」

千夏「んじゃ行くぞ。Ready?」

さてと、未来より超える神速で行くか!

千夏「GO!!」

ガルツチ「ハッ!!」

sideChange

千夏side

って、ええええええ?!?!?1秒も経ってないのに、もうチンピラ、警察、軍人を無力化?!?!?そして0秒25のところまでショッカー999万人倒した?!?!?早くない?!?!?

ガルツチ「終わりだ。」

そして終わったアアアアアアア

!!!!!!!

千夏「た、タイムは……………、『0秒31』」

ガルツチ「ふう、あの時よりは早く終わったな……………」

千夏「遊びで本気でやる人なんて、今までいただろうか……………。しかも素手で……………」

ガルツチ「んじゃ僕、VRガンシューティングゲームやってくる。最高スコアを出してやる。」

千夏「……………マジですか。」

ガルツチ「Change, 未来。」

未来「お疲れさま、ガルツチ。」

ガルツチ「頑張れよ。」

これは……………、最強かつ最狂、最高のカップルかもだね……………あれ。未来も凄まじいタイム出しそうな気がする……………。

sideChange

ガルツチside

いやー、真面目にやっただけで、あれだけのタイムを引き出せるとは……。まあ、僕をもっと手こずらせたかったら、その1000倍用意するがいい。

ガルツチ「さてと、どんなVRガンシューティングゲームにしようかなあ……。」「
そういえば兄さん、学生時代に遊んでたガンシューティングゲームがあつたな。それやってみるか。」

ガルツチ「えーつと、難易度は……。『ルナティック』でいつか。」
兄さんでも出来たのならば、僕でも出来るはず！行くぞ、『パイレーツ』呪われた宝船
――』。その鬼畜難易度で十分か？

t o b e c o n t i n u e d
→

第5話 再戦と決着

—ロスサントス どこかの荒野—

ガルツチ side

ふう、確かに鬼畜難易度だわ。何なのだあれ、マジモンの鬼畜じゃあねえか。全く持って想定外な事をするわ、裏切りとかもあるわ、鬼畜過ぎる選択があるわ。

何じゃありや、確かに鬼畜難易度じゃん！それを V a r y H a r d にしたら更に鬼畜になったよ。

言峰がやったら、きつと愉悦顔間違いなじゃあないか。

ガルツチ「まあ、それも終わったことだし、この場所で何か作ろうかな。」

でも何を作ろうかな？何しろ、あのアジトは色々と設備も良いし、でもホントに何に

しよ——

!!!!

ん？なんだ？あの砂埃。なんかこっちに来そうな勢い？

ガルツチ「いや待て、なんかこっちに来るんだけど!?」
え? マジで何が来るの!?

『見つけた見つけた見いいい!!
たああああああああああああ
なっ!? あれって!!!
!!!!!!!』

ガルツチ「バルボツサ!」

キング『何ッ!? 私が消したはず!!』

ガルツチ「キングだったのか!? バルボツサを消したの!!」

キング『お前のためには思って、消したのだが、まさかここまでとはな……………。』

士『ええええ………、俺ですらビックリだぞ。なんだ彼奴の執念、一度惚れたらマジモンで着いてくる奴。』

東『私も思わなかったわ。私でも、あの執念には敬意を評するわ。』
うん、東に同意するわ。んじゃ、剣を抜くとしますか。

『ズドーンッ!』

バルボツサ「ようガルツチ、久しぶりだなあ………。」

ガルツチ「こつちとしたら、全く会いたくなかったんだが。というか、消されたはずじゃ。」

バルボツサ「へっ、あんな消滅。お前を手に入れるためだったら、消えてたまるかってんだあああ!!!」

ガルツチ「お前なあ……。逆に怖えわ。」

バルボツサ「さあて、再戦かつ最終決戦と行こうじゃあねえか!!負けたら、分かっくんな?」

ガルツチ「……………ハア。」

もうこれは、覚悟を決めるほかないな……。一方的とは言え、約束した以上、やるしかねえ。

母さん、最大宝具を使用するから、ロスサントスの町や千夏のアジトを——

全王神『了解!!絶対!に勝って!!ファイトー!!』

いっぽーつ!

全王神『あれ?なんだかノリがいいねえ……………?』

んじゃ、逝ってくる。

全王神『待って!!文字がおかしいよ!?!行くが逝くになってるよ!?!』

さあて、決着だ!!バルボツサ!!!!

バルボツサ「ほう、良い面構えになったじゃねえか。そう来なくつちやな。」

バルボツサの剣から、凄まじい程の魔力が籠もっている……。恐らく、あの時よりも一撃宝具を使用するに違いない……………。

バルボツサ「俺の一撃、食らうがいい。秘奥鉄槌、極闇は反転し、無を超越する。」
こりや、やばい宝具を使う気だな。ケテル、バルケル、オーバーチャージ頼む。

ケテル『了解、マスター。』

バルケル『ケテル、彼奴だけは絶対に勝つぞ。』

ケテル『お前に指図されるのはムカつくけど、確かにそうだね。マスターの安らぎの為に、此奴だけは絶対に勝つ！』

バルケル『魔力オーバーチャージ完了！』

ケテル『僕もだ！マスター！』

ガルツチ「ああ……………」

『無限闇』、『無限光』……………。相反せし属性よ、我に力を。

ガルツチ「我は虚王魔神、全王神の負の心から生まれし者。存在することもない虚無の魔神なり。我が虚無に、怯えて永眠ねむれ!!」

降参だ!!!ボロ負けだ、ガルツチ!!」

やっぱりな。あれで耐えると思ったよ。いや、あの鎧が、全部ダメージを受け止めて砕け散ったんだろ。言わば、あの鎧こそが、真の宝具。

バルボツサ「俺の鎧を破壊したのは、お前の初めてだ。お前の勝ちだ。約束通り……。」

そう言うのと、僕の近くに寄り、跪いて先ずは僕の足の甲、その次に指先に口付けた。

バルボツサ「此からは、貴男方の剣となり、守り手となりましょう。我が主。」

ガルツチ「やめろ、気色悪い。変に畏まるなよ。」

やれやれ、そう言えば足の甲だと『隷属』で、指先は『賛美』だっけ? って隷属ってお前、まさか……。」

バルボツサ「安心しろ、お前に負かされた以上、お前やその仲間以外には従わねえ。俺はあんた達の奴隷さ。」

ガルツチ「奴隷って、それはそれでどうかと思うんだけど……。」

バルボツサ「何なら、鞭打って、調教させても良いんだぜ?」

ガルツチ「僕にそんなS Mプレイを要求すんな!! まあ、僕が勝った以上、従ってもらうぞ。裏切りは厳禁だから、覚悟しておけ。」

バルボツサ「了解、我が主。」

全く、仕方ないなあ……………。

——バルボツサが、ガルツチ達の仲間奴隷になりました。

——千夏アジト——

ガルツチ「つうわけで、此奴が新しく仲間になるヴェルバー・バルボツサだ。」
 未来「この人か、ガルツチを奪おうとしたのは……………」。

あの一、皆さんなんか『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』の文字が出てるんですが。(・
 |・;)

ガルツチ「待て、此奴は僕に負けを認めた。それだけでなく、自分から奴隷要求したんだ。」

簪「へえ？ 奴隷っていったの？」

本音「ガルガル君の奴隷って事は、私達の奴隷って事でもあるよね？」

ガルツチ「おい、今の本音の笑顔、どこぞのうっかり娘みたいな顔になってるから、別のしろ。うっかり移るよ？」

本音「大丈夫、うっかりするときはどこかに引っかけてずっこけるところだけだから。」

オーフィス「ガルツチ、此奴、調教していい？」

ガルツチ「なんでさ。一応いうが、仲間なんだからあんま下手なことは——」
 バルボツサ「是非！ 俺を罵って調教してくれ!!」

4人「『『自分から要求したああああああああああ』』」

!!!!!!

?ーん。まさかのドM発言かよ………。

士『しかも何故だろ、今回の未来の笑顔。何処か恐怖を感じる………。』

全王神『アハハハ、お気を付けて。』

まあ、そう言うわけだから、キング。

キング『分かった、消さないで置いてやろう。喜ぶがいい、バルボツサ。君の願いは
ようやく叶う。』

まるで言峰が言う台詞だな………。

t o b e c o n t i n u e d
↪

第6話 盗まれたレシピ

—千夏アジト—

ガルツチ side

ガルツチ「……………一体、一体誰が盗んだというのだ!？」

未来に敗北したのはいい、だが、レシピを盗まれるとは、どういう事だ!？」

千夏「あり得ない、ちゃんと嚴重に保護したはずなのに、何故盗まれた!？」

未来「犯人が分かり次第、それ相応の罰を受けて貰わなければ……………」

全員「激しく同意。」

うちの息子達のレシピを盗んだ罪は、きつちり払わねばな……………。代償として、スペシャル拷問チケットを受け取って貰わねばなるまい。

悪夢じゃ生ぬるい。

おぞましいほどの絶望を与えなくてはならないなあ。

「此方です。」

ホントに金庫が破られてるな。何の目的で盗んだのだ？

全王神『うわー、派手にやられちゃってるねえ……………。』

4人「ニ「マジ、許早苗。」」

東『そして凄まじい殺意……………』

ガルツチ「なあ、犯人にはどう言う罰を受けて貰えば良いかなあ？」

フラン「そうね……………、まずは両手両足にある爪を剥いで、それからゆつくり削いで行つて。」

こいし「お次に、皮を少しずつ剥いていつて、骨まで来たら削りまくつて…………。」

イリヤ「その後は、目玉を抉つて、歯を無理矢理折つてから……………」

ガルツチ「後は僕が回復させてからもう一度やる。」

全王神『4人が、ヤンデレになつて……………。そして、怖い。』

士『やるのが女の子がいう発言じゃない……………。』

キング『……………犯人、ご愁傷様です。』

全王神『未来ちゃん達は……………、鈴美ちゃん以外滅茶苦茶怖い……………。』

士『……………うわ、怖い。』

キング『おいビルス、あの殺意如何すれば良い？』

ビルス『知らん、というかこの破壊神でも、め、めめめ滅茶苦茶怖いんだから

……………』

全王神『破壊神ですら恐れる殺意なの!』

というか、ビルスもいたんだね……。まあ、関係ないが、それより犯人を模索しなくては。

ガルツチ「ミスト、早急に犯人を模索を頼む。」

ミスト『りよ、了解……。兄や……。怖いよ……。』

ガルツチ「……。いかん、怒りの余りミストに八つ当たりして怖がらせた。気を付けないと……。」

あーもー、どれも此も全部犯人のせいだ!!!殺すなんて生温い、二度と盗みを働かせないように、ゆっくり痛めつけておかなくては……。

全王神『みんな、犯人に祈っておこうか。』

士『そうだな、その方が良い。というかそうしよう。』

ビルス『うん、彼らの怒り買わせたのは自業自得だが……。』

——『パンパンッ!』

全員『『南無阿弥陀仏……。』』』

t o b e c o n t i n u e d ♪

第7話 処刑執行

—遊園地—

ガルツチ side

ぼん吉ねえ、しかもガンダムで行くとは……………、何と愚かな奴め。

ガルツチ「行くぞ皆、3人が作ったレシピを取り返すぞ!!」アサシン『暗殺者』アルトリア・ベンドラゴン『ヒロインX』!バーサーカー『狂戦士』! アルトリア・オルタナティブ『ヒロインXオルタ』! ユナイティッドストーリー『融合夢幻召喚』!!

『融合開眼!! WヒロインX!! 正体不明、セイバーキラー!!』

まあ女装はご愛敬だな。

未来「ガルツチ! 僕にもカードを!」

ガルツチ「OK!!」セイバー『剣士』! セイバー『ダース・ベイダー』! 此を使い!」

未来「行くぞ! 変身!!」

『INFINITE RIDE <Darth Vader>!!』

未来の方はフードを被ってるが、仮面は付けてないな。

『フハハハハハ!!! 僕のガンダムに勝てると思うなよ!!』

ガルツチ「はっ! 自分がニュータイプだと思ってるなら、その効果を消してやるぜ!

オルトリアクター、コスモリアクター!! 起動!!」

『そんな物、僕に利くとでも?』

未来「思うんだよね、此が!」

『グアツ!?う……………動かない……………!!』

ガルツチ「サンキュー、未来。そんなじゃ、この人の宝具を使うか! 『擬似宝具起動』!

苦悶を示せ! 『妄想心音』!!』

よし! リサ達のレシピを取り返した!

『しまった!!! 僕のレシピがあああ!!!』

ガルツチ「なあ未来、気に入らない相手は?」

未来「そうだねえ……………」

未来ガル「取り敢えず、機体ごとぶった切る!!!」

そしてそのまま初代ガンダムを、ライトセイバーと二刀の約束された勝利の剣でぶつた切られ、ガンダムは大破、ぼん吉が吹っ飛ばされる。が、それを逃すまいかと言わばかりに、未来がもう一度捕らえた。

未来「この辺りでいい?」

ガルツチ「そう、そこだ。」

未来ガル「そこが1番、拳が叩き込みやすい角度!!!!!!」

そして、ぼん吉は肉片が飛び散るほど血飛沫をあげるも、リサ達を書いてくれたレシ
ピにはつかなかった。勿論真正銘の本物。そしてフラン達は、既に全滅させていた。
黒の組織は全面撤退していったようだ。

ガルツチ「全く、機械如きに相手になろうなんざ10京年早い!!」

未来「つていうか、拷問は？」

ガルツチ「あ……………。忘れてた。」

怒りの余り、つい殺っちゃったよ。

ガルツチ「まあ……………、いつか。すつきりしたとこだし。」

未来「そうだね。」

そして、リバティーンテイーの店長は復活するも、窃盗容疑だけでなく、ストーカー、
誘拐、猥褻、等々の罪により、現行逮捕、従業員はその店長の悪事を知ったことにより、
辞職していき、最終的に倒産していった。

そして裁判は有罪、仮釈放なしの終身刑となった。ナムアミダブツ!

関係ないが、また千夏コンビニが爆発した……………。いやなんでさ。

言いたいことは……………。

6人「『『『爆発才チなんて最低エエエエ
t o b e c o n t i n u e d
⇩
!!!!!!!
『
『
『
『
『

第8話 名探偵と怪盗との出会い

—ロスサントス— 月夜ノ刻—

ガルツチ side

今日は仕事の休み、つてな訳で今未来と買い物に出掛けている。

未来「それにしても、ガルツチ。車の運転上手いんだね。」

ガルツチ「騎乗スキルがあるからな。まあ、船も運転出来なくもないが、やつぱり機動性とスピードが欲しいからね。」

未来「耐久の考えはなしか。」

ガルツチ「そう言うことだな。つと、この辺りだな。」

先ずはスーパーマーケットのところに到着し、そこで必要な物を買っていった。

ガルツチ「エミヤが言うには、新鮮が一番だとか。後長持ちがいい奴、農薬が使つてない奴等々。」

未来「エミヤさん、お母さんなのかな？」

ガルツチ「違くない。つて、そんな噂してたら、くしやみしてるだろうな。今頃。」

―スピリットレストラン―

エミヤ「オカンではない！執事バトラと呼べ！」

クロエ「貴方は何を言ってるの？」

プリヤ「うー、またお兄ちゃんが変なこと言い出したあ……………」

クロウ「気にするな。何時ものことだ。」

エミヤ「なんだと？」

士郎「はあ、何やってんだか。」

凜「……………ねえ衛宮君。」

エミヤーズ「何？」

凜「……………ホントに、あんた達同じ名前ってどういう事？」

―ロスサントス―

ガルツチ「よし、此ぐらい買えば、何とかなるな。」

未来「結構買っちゃったね。」

ガルツチ「タイムセールとかのせいだな。余計なものまで買っちゃった……………」

さてと、次は……………なんだあの人が？

未来「ねえ、あの人が？」

ガルツチ「以前黒の組織がいただろ？つて事はさ、彼奴らもいるつて事になるんじゃないかな？」

そう、彼奴らと言うことは……………この人たがりは、恐らく……………。

『レデイース、アード、ジエントルマン！よくぞ来て下さりました。』

「キッド!!今日こそは貴様を逮捕してやる!!」

ワオ、予想通りあの人がいたか。

未来「あれって？」

ガルツチ「怪盗キッド。本名は黒羽快斗。工藤新一と同じ高校二年生で、マジックが得意。元々は、ただのマジック好きだが、ある組織の仇を見つけるために、怪盗キッドとして生きている。因みに、スケベでもある。」

未来「如何するの？」

ガルツチ「何、次に行くところが分かれば、後は簡単。先回りするよ。」

そう言い、僕らは人たがりから離れ、怪盗キッドが隠れるところに向かった。その場所が、公園の辺りだった。

僕と未来は直ぐさま隠れ、怪盗キッドが来るのを待った。

「さて、お宝は手に入れて、あの子供を出し抜いたことだし、取り敢えず調べるとしよ

……?そこにいるんだろ?お二人さん。」

あらま、予想通りって感じか。

ガルツチ「先回りさせて貰ったよ、怪盗キツド。いや、黒羽快斗。」

快斗「此は此は、見ず知らずの者にもかかわらず、僕の名前を知ってるとは……………」
ガルツチ「目的は知ってる。その盗んだ奴は、偽物なんだろ?」

快斗「知ってたのか。」

未来「つて事は、もし本物だったら、壊すつもりだったの?」

快斗「ええ、勿論です。しかし、驚きました。まさかお二方、女装してるとhブギヤ
!」

ガルツチ「女装いうな!!」

未来「一応言うけど、此が普段着だよ。」

快斗「イテテテ、女装が普段着って、不思議な人もいた者ですね……………」
痛え……………」
ほっぺが

全く、女装とか言わないで欲しかったなあ……………。フランの服装はまだできてないつて、マルフォイが言うから、代わりに送ってきてくれたこいしの衣装を着てるつてのにな。でもなんか、こうしてみると、本音と同じ袖がダボダボな気がするのには僕だけかな?

快斗「まあいいや、んじやこのお宝はお返ししておく。偽物だって事は分かったこと

だ——」

??? 「見つけたぞ!! 怪盗キッド!!」

おろ、良いタイミングで来やがったな。

快斗「おや、小さな名探偵さん。残念ながら、お宝は既に彼方にお返ししたよ。」

??? 「関係ない、お前を捕らえることが出来ればそれで充分さ。」

快斗「まっ、それが出来るのならばな。」

ガルツチ「……………聞きたいことがある。キッド、もしお前の仇相手を見つけたら如

何する?」

??? 「?」

快斗「……………さあな。それは、自分自身で決めるさ。じゃあな、小さな名探偵さん。

そして、女装ブベラッ!」

ホントに懲りねえな。

未来「気をつけて、ガルツチは女装とか女性扱いすると、反射的に殴ってくるから。」

快斗「何それ!? どっからどう見ても女性ゴハア!!」

ガルツチ「いい加減黙らねえと、その口を縫い合わすぞ?」

快斗「ヒエエエ!! 怖え……。んじやさいなら!」

そしてそのまま、何処かへ雲隠れしていった。

ガルツチ「全く、僕は男だったの。別に、たまには女装して出掛けようかななんて、思ってもないし、気分で着たんだから……。」

???「それはそうと、お宝を持つてるのは誰？」

ガルツチ「僕だよ、後で返してやって。どうせ偽物だが。」

???「偽物？ところで、あなた方は？」

ガルツチ「僕はラーク・バスター・ガルツチ。あのキッドとは無関係だ。」

未来「僕は門矢未来。通りすがりのスタンド使いだ。覚えておけ。」

???「そうか、僕は江戸川コナン。探偵さ。」

ガルツチ「おいおい、偽名は勘弁してくれ。」

???「!?」

ガルツチ「何故知ってるって思ってるけど、僕等は別に、黒ずくめの組織の仲間じゃない。信じがたいけど、僕と未来は、君が何者で何故その姿になったのかは知ってる。」
滅茶苦茶驚愕してる顔をしてるな。そりやそうか、っていうか普通そう言う反応するよな。

ガルツチ「念のために、本名言ってくれないか？今この公園には誰も聞かれないように、そして誰も来ないように結界を張って置いた。」

???「結界？」

未来「真実を伝えるとね、僕とガルツチは転生者なんだ。色々な世界を旅回つてるところなんだ。」

???「そんなファンタジー、俺が信じるとでも?」

ガルツチ「だろうな。普通皆はそういう反応するさ。」

???「え? 証明しないの?」

ガルツチ「寧ろ、僕等が存在している時点で、証明してるようなもんだしな。あそこに車1台あるだけで、後は僕と未来、そして君だけさ。」

まあぶつちやけ、今まで自分を隠し通していたしな。

???「分かったよ、そこまで言うのなら……………。俺は工藤新一、黒ずくめの組織の一人に気絶させられ、APTX4869を飲まされて、仕方なく『江戸川コナン』として生きる探偵さ。」

ガルツチ「……………APTX4869か。つまり、それを飲まされて、幼児化しちまつたつて訳ね。」

コナン「ああ、お陰で隠し通すのが面倒くせえよ……………」

未来「確かに、あの薬は現代の力じゃどうにもならないけど、ガルツチだったらそれを治すことが出来るかも。」

コナン「なつ、ホントかそれ!!」

ガルツチ「幼児化は一応見たことあるからね。何らかしらの呪いなら、解呪も出来るが、それ以上となると、兄さんか友人に頼むしかないなあ。」

コナン「でも俺は、薬で縮められたんだ。」

ガルツチ「分かっている、その為の魔法薬さ。薬草学の知識も加わって、今じゃあらゆる万能薬も作れるようになったからな。幼児化させる薬もあれば、元に戻す薬も作れる。」

ようやつと、短縮レシピも作れたしな。

ガルツチ「ほい、緑色の飴玉ではあるけど、此は君の歳、つまり高校二年生に戻す薬だ。永続性もある。因みに、ミント味だ。」

コナン「何でミント味？」

ガルツチ「何、味を変えられる魔法をかけて、緑色のミント味にしようかなって思っで。んで、こっちの赤い飴玉は、幼児化の薬。緑色と同様、永続性もある。」

コナン「何でこんな物を？」

ガルツチ「隠れたいときあるだろ？その為の薬。とにかく、それを飲めば、風邪を引いた状態じゃなくても、どっちにも変身できる。」

コナン「……………なんて言うか、虫のよすぎる効果だな。」

ガルツチ「まあね。」

コナン「それに、あんたらギャングなんだから？」

あー、やっぱりそこは名探偵なんだねえ……。まあ否定しません。設定上、そういう感じだし。

コナン「凶星のようだな。」

未来「今はギャングの仕事は無く、ただ買い物してただけだよ。」

ガルツチ「それに、殺害はしても、強盗はしてもだ。時折、其奴のボロがあるんだ。それを見つけ、処分するのが我らの役目さ。」

コナン「どうだか、殺人は許されない罪だ。強盗も同様だ。」

ガルツチ「……………否定はしない。重々承知の上さ。だからって、そう言うわけにはいかない。警察だって、間違った正義を持つてる奴もいる。その為なら、僕は誰かを守れる存在になりたいんだ。自分の身は、自分で守り、そして本当に救うべき人がいるなら、救う。」

コナン「……………」

ガルツチ「取引しよう、その飴とあの黒の組織のデータをやる。」

コナン「なっ?! どうやって?!」

ガルツチ「何もやってない一般人を平然と逮捕する警察を暗殺した後、ジンとウオツカにあった。其奴らを気絶させて、指紋や虹彩、更には顔写真、そして唾液を取っ

たんだ。代わりに、僕らの行動は目を瞑って欲しい。」

コナン「は、破格すぎる！それじゃあお前達のメリツトが——」

ガルツチ「気にするな。僕だって、君を救いたい。頼む、目を瞑ってくれ。」

未来「僕からも、お願いできるかな？新一。」

兎に角僕と未来は、深くお辞儀をした。救って、黒ずくめの組織を止めたい気持ちを、分かってくれ！

コナン「……………分かったよ、なんて言うか……………お前らの目は澄んだ目をしてるしな。」

未来「ありがとう！」

ガルツチ「済まない。助かる。」

コナン「でもよ、舐めるのはいいが、どうやって戻るんだ？」

ガルツチ「そうだな……………、その時計貸して。」

コナン「？」

ガルツチ「……………此奴をこうして……………、よし。これで煙りが出る。」

コナン「何をしたんだ？」

ガルツチ「戻るときは、今改造したその時計の煙りに隠れば、元に戻る。ただ、人の着かないところで頼むね。」

コナン「分かった。」

ガルツチ「服装は大人バージョンに戻るから、安心しろ。」

未来「何そのご都合主義。」

ガルツチ「気にするな。じゃあな、新一。」

そうして僕は、未来と一緒に、車に乗り、コナン姿の新一がいる公園を後にした。

ガルツチ「……………未来、やきもちするなよ。」

未来「バレてた？」

ガルツチ「心眼を使えばな。少しだけ、嫉妬が見えた。」

未来「だつてさ、元々は買い物に兼ねてデートだったんでしょ？」

ガルツチ「まあね……………。取り敢えず、帰ってからまた出掛けよつか。」

未来「……………そうだね。」

side Change

—千夏アジト—

こいし side

ウフフフ、お兄ちゃん。私の盗聴器には気付かれてないようだね。未来お兄ちゃんと

デートかあ……………。

フラン「勿論こいしちゃん、私達もよね？」

オーフィス「我、あの2人のデート、気になる。」

バルボツサ「……………」。プルプル

イリヤ「ちよつと、動かないの！」

バルボツサ「済みません。」

楽しみだなあ、お兄ちゃん達のデート……………。

t o b e c o n t i n u e d ♪

第9話 夜中のデート

―チリアドマウンテン―

ガルツチ side

未来「それにしても、早速山に登るなんて、ビックリしたな……………」

ガルツチ「仕方ないよ、NOPLANなんだしさ。」

そう、計画なんて全くない。というよりは、元より気になってたことがあった。常々に思う、宙に浮いてるアレが気になっていたので。

ガルツチ「この辺りだな。」

未来「何かあるの？」

ガルツチ「あの辺りなんだけど……………」

未来「え？つてああ、あれつてUFOか。」

ガルツチ「あ、そういえばGTA Vやったことあるんだったね。」

未来「うん、でも生で見れるなんて夢にも思ってたよ。」

まあね、こういうのってあんまりなかったし。でも、こっからの……………」

ガルツチ「こっからのロスサントスを眺めるのも良いかもしれないね。」

未来「確かに、綺麗だな。」

リアルゲームだからこそ、この景色を見れる世界なのかもな。母さんに感謝しないとね……………。

ガルツチ「……………今思えば、ホントに幸せ者だな。自分の宿命が終わった瞬間、なんだか楽になった気分だよ。」

未来「ずっと、無の神での戦いで張り詰めていたんだよね。」

ガルツチ「うん、無の神を倒せば、そして星の勇者を阻む者、無の神の信者達を滅ぼせば、それでいいと思ってた自分が、馬鹿らしくなってきたよ。その幸せを犠牲しても、自分自身を犠牲にして手に入れたかった、みんなの幸せが見れたら、それでよかったと思ってた。でも……………君はそれを止めてくれた。僕自身を止めてくれた。」

言ってみれば、返しきれない恩をくれたしな。未来と出会えて、本当によかった。本当に……………。

未来「ガルツチはさ、もしあの時……………倒していたら、消えていたの？」

ガルツチ「恐らくな。でも、その前に消えていった世界を蘇らせた後に、この世を去り、そして地獄のところまで永遠の供養をしていたのかも知れない。そして、僕がいた事さえ、忘れさせていたのかもしれないね。」

未来「そっか、だったら止めて良かった。だって、僕は君のこと大好きだからね。」

ガルツチ「うん、僕もだよ。未来。たださ、あの時のツツコミしていい？」
未来「？」

ガルツチ「未来の声、どうなってるの？ラヴオスさえ吹っ飛ばせる声って、正直ビックリなんだけど。」

未来「え？吹っ飛んでた？」

ガルツチ「滅茶苦茶吹っ飛んでた。気付いていないだろうけど……………」

ホントにビックリしたよ!?!みんな一瞬だけど、ラヴオスが吹っ飛ばされるとこ目の当たりしたんだもん！

未来「……………マジで？」

ガルツチ「マジで。どうなってるんのアレ？」

未来「……………あの時の精液といい、あの声音といい、ホントにビックリだらけなんだけど……………。どうなってるの僕の身体？」

ガルツチ「僕が訊きたいよ……………」

全王神『それは勿論——』

未来ガル「いや、全王神（母さん）には訊いてないから。」

全王神『お母さんシヨンボリ。(´・ω・｀)』

やめろ。

レイス『ウエ!? 誰と!? 男? 男の人!? 男性なの!?』

ガルツチ「……………この顔見ても分からないのか? (^ ω ^ #)」

レイス『え? ホントに……………、ホントに男性との?』

当たり前だろ、レイス。よくもまあ邪魔をしてくれたもんだなあ?

未来「あの、誰ですか?」

レイス『あ、ガルツチの恋人ですか!? そうでしょ? そうですよね!』

未来「え、ええ……………」

レイス『リアルBLキターー!!! (^ o ^) /』

ガルツチ「……………んで、なんか用? 手短かに頼むよ、変なことなら叩くから。」

レイス『ご、ごめんごめん! 実はというとな、ロヴァスから連絡があつて伝えたいこ

とがあるつて言つてたの。』

ガルツチ「伝えたいこと?」

レイス『何でも、未来と一緒にいるのなら、その者を幸せにしなさいって。』

ガルツチ「校長つたら……………、言われなくてもそのつもりだよ。両思いだし、お互い

全力で守つて決めたからね。」

レイス『そつか、良かった。それで貴方が未来さん!』

未来「え、ええ。」

レイス『初めまして!!私にはガルツチのセフレのシルフ・エメラルド・レイスって言い
ます!!』

未来「え?セフレ?」

ガルツチ「お前、まだそんなん思ってたのか?」

未来「……………ガルツチ。」

ガルツチ「ん?」

未来「君の友人、个性的過ぎない?特にこの人、滅茶苦茶暴走してるんだけど
……………」

レイス『そそそそそ、それで、みみみ、未来さん!!ががが、ガルツチとは、どう言
う関係なんですか!』

未来「どうって、恋人関係だよな?」

ガルツチ「うんうん。」

レイス『まさかの恋人関係!』

ちやつてるんですか!』

ガルツチ「ナニを訊いてんだナニを……………」

未来「まあ、何回もやってるよね?実際。」

レイス『えええええええ!?攻めは!?攻めはどっち!』

!?!?!?!?!

そ、それじゃあ、アレも、やっ

ガルツチ「未来だよ。受けは僕担当。」

レイス『やっぱりガルツチは、受けなのね!!! あー、私のBL妄想が満たされていくウウウウウ……!!!』

……やばいな、この腐女子。もう腐ノ女神だな……。

ガルツチ「あのさ、伝えた事を伝えたのなら良いけど、これ以上BL話になるなら切るね?」

レイス『いいよ! 私今からBL同人誌を作るから!! 未来ガルのBL同人誌を、私が先駆けを——』

ガルツチ「いや、もう既に出てるよ?」

レイス『え?』

ガルツチ「簪って人が作ったBL同人誌なんだけど……。」

レイス『……あらま。んじゃあ私が広めなくては!!!』

ガルツチ「ちよ、おま——」

レイス『じゃあねえええ!!!』

『プツツ……。』

……もう、ブレーキすらないんじゃないの?

未来「君って、色々と大変だね……………」。

ガルツチ「ホントに、どうしてあんなった……………」。

ホントに、レイスはなんであんなったのかなあ……………」。

ガルツチ「もうさ、帰ったら好きだけ犯して。というか、甘えさせて……………」。

未来「うん、君が満足するまで、いっぱい出してあげるから。」

それから、未来と僕が帰った後、部屋に入って滅茶苦茶セックスしまくった。

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第10話 星空英竜

—
???

風龍「なあデイルーラー、別に僕が居なくてもいいんじゃないの？」

士「そう言うな、お前だつて楽しんで貰わねばならねえしな。」

だからつて、別に僕を呼ばなくても良いんじゃないの!? 一応戦闘は出来るけど!

イリア「私まで来ちやつたけど……。つていうか、作者がこの世界に居て大丈夫なの？」

士「安心しろ、作者補正があるんだからな。メアリーは気にするな。」

風龍「僕としては気になるわ! つていうか、メタイ話しはやめろ!!!」

全く、此奴はフリーダムなんだから……………。

葵連「大変だな、風龍。」

風龍「お前もそう思つてんなら、何とかしろ! ファイフティーン!! こちとら、『異次元の

人間』なんだよ!」

葵連「そうは言われてもねえ……………」

風龍「……………何でこうなるんかな。はあ……………」

イリア「まあまあ、私も手伝うわ。喪失と忘却の能力でね。」
風龍「すまん、恩に着るよ。」

—ロスサントス—

ガルツチ side

全王神『つて言うわけで、『エデン』つていう言わば君達の同盟になるから、宜しくね。』
宜しくねつて言われても、具体的には、名前を言ってくれないか？

全王神『えーつと、リーダーが『星空英竜』、幹部は『五河士織』。『衛宮藍』。『夜神小夜』。この4人よ。』

おい待った、衛宮藍？衛宮士郎と関係あるのか？

全王神『うーん、それは君次第かな。でも偶に衝突するかもね。』

ガルツチ「……………気難しいな、それ。」

全王神『まあ、伝えるだけ伝えたからね。それじゃ。』

はあ、しかし転生者か……………。それも怪獣娘……………。いずれ出会うと予想はして
いたけど、このタイミングでかあ……………。ん？

「よう嬢ちゃん、俺と一緒に良いことしないかい？」

??? 「悪いけど、私は急いでるので……………」

「おいおい、つれないねえ。良いじゃねえか。」

??? 「触らないで下さい！」

「ッ!?このガキ!!」

やばっ、やらせるか!

ガルツチ 「オラア!!」

「ブヘエ!」

その女の子にナンパした男は、僕の飛び膝蹴りにより、途方の彼方まで吹っ飛ばされた。

ガルツチ 「……………あちゃー、焦ったとは言え、やり過ぎたな。」

??? 「……………あの、貴方は?」

ガルツチ 「通りすがりの英霊使いさ。君は?」

??? 「星空英竜、『エデン』のリーダーだ。」

……………え?

ガルツチ 「英竜って、もしかして……………母さんが言ってた、あの?」

英竜 「母さん?」

ガルツチ 「あー、ごめん。母さんってのは全王神。つまり僕、その人の息子なんだ。」

英竜「え”？息子？」

ガルツチ「うん。」

アレ？滅茶苦茶固まってるんだけど、ちよつと？

英竜「……………あの。」

ガルツチ「うん？」

英竜「ちよつとお話しませんか？私のアジトで。」

ガルツチ「ウエイ!!」

英竜「そうと決まれば!!」

おいおい、引つ張るなつてちよつとおおおおおおお!!?!?

t o b e c o n t i n u e d
↳

第11話 エデン

—エデンのアジト—

ガルツチ side

英竜「着いたよ、ここが私の……………って大丈夫かい？」

ガルツチ「誰のせいだと思ってるの？」

あー、酷い目にあつたよ。何が一体どうしたら、こうなるんだよ。頭痛え……………。

そんなこんなで、僕は英竜という少女に（無理矢理）連れてこられた場所が、誰も使っていない工場だった。その中に入り、暫くすると、3人の少女がいた。

ああ、なんで僕が出会うのは女性ばかりなのだろうか……………？

??? 「あ、英竜。お帰り。って、その人は？」

英竜「みんな訊いて！この人、全王神の息子だつて!!」

3人「ええええええええええ!!?!」

ガルツチ「あの……………、普通に接してくれませんか？というか母さん、どうしてこうなつた。」

全王神『えへへへ、私は別に何もしてないよ。』

ガルツチ「なんでさ……………」

??? 「あの、今誰と話してたのですか？」

ガルツチ「正しくは念話。んで話してたのは、全王神。つまり僕の母。」

??? 「嘘オオオ!!」

??? 「息子がいるなんて、知らなかった……………」

ガルツチ「そりゃ、こつちの事情つてのがあったからな……………」
 とりあえず、改めて自己紹介させて貰う。その前に……………」
 『^{トレイス・オン}投影、開始』」

??? 「投影魔術!」

さすが転生者つて事か……………。とりあえず、僕は投影した椅子に座り込んだ。

ガルツチ「まずは初めまして、僕はラーク・バスター・ガルツチ。この世界に来る前は、無の神ことラヴオスと戦い、全次元を救った大英雄になった者だ。」

??? 「無の神？」

ガルツチ「うん、知らないのも無理は無いからね。今はもういなくなってるし、僕が住んでた世界も伝わってると思うんだ。」

英竜「待って、全王神の息子なのに、何故一緒にやないの？」

ガルツチ「母さんに殺されたから。理由は聞かないであげてね。」

??? 「全王神様に殺されたって、ホントに何をしたのですか!」

ガルツチ「だから訊くなって……。それから、転生に転生して、今の姿になった。でもさ、殺されて良かったって思えるところがあるんだ。」

???「どういう事？」

ガルツチ「自分の幸せを、漸く見つけたことかな？元々真なる前世の僕は、誰も見てくれる人、存在を認めてくれる人は、居なかつたんだ。でも転生して、発想を逆転した。いつそ死んで、この世から消え去ればいいのにつてね。」

英竜「なんて言うか、大変だったのね……………」

ガルツチ「まあね、彼らのお陰で、今があることだし。それに、自分の本当の前世と訣別したんだ。過去は過去で、今を生きるつて決めたから。」

話を終えると、ぐだ子みたいな人が自己紹介を始めた。

???「そうだったのですね……………。あ、私は衛宮藍。実は前に別の世界で転生人生を送っていた。特典は、『Fateシリーズの全宝具』『どんな英霊の力も纏える体』『仮面ライダーアギトの無限進化能力』。」

ガルツチ「fateシリーズの全宝具つて……………、マジか。つていうか無限進化つて……………」

イフ「私のような能力だな。」

英竜「誰!？」

??? 「つていうか、いつからそこに!？」

そういうえば、イフも無限進化持ってたね。

ガルツチ「あー、この人は完全生命体イフ。元々は、ある人のスタンドだったけど、今は僕のスタンドになってるんだ。」

??? 「其奴がスタンドつて、強すぎるだろ。」

ガルツチ「まあね。」

英竜「それで、その擬人化したイフが貴方のスタンド?」

ガルツチ「いや、この右眼がスタンド。」

藍「どういう事ですか?」

ガルツチ「元々は両眼とも蒼だったんだけど、ある剣士の戦いによって失明して、今は義眼として使ってるんだ。んで、イフがこっちに来たことにより、スタンドに変わった。いや正しくは進化だな。」

??? 「進化つて事は、原型が?」

ガルツチ「うん、元々は『ハイミット、パープル隠者の紫』の鎖バージュンだったんだ。名前は『THE

VISION』。能力は相手のスタンドをコピーして、そのスタンドを自分でも使えるようにする。」

3人「何それチート!？」

ガルツチ「つて、脱線したな……………。この話は後にして、それより、藍だっけ？」
藍「はい。」

ガルツチ「f a t eシリーズの全宝具っていう能力だけど、僕の宝具と似てない？」
藍「え？」

僕はすかさず、月のマークが描かれた白銀のカードケースを取り出し、皆に見せた。

藍「それは？」

ガルツチ「クラスカードケース、元英霊カードケースだけど、この中にf a t eシリーズだけじゃなく、ジヨジヨ、仮面ライダーシリーズ、ファイナルファンタジーシリーズ等の英霊カードが、この中に入ってるんだ。」

藍「何それ!?そっちの方チートでしょ!?!」

ガルツチ「それだけじゃない。プリズマ☆イリヤ式だけど、宝具限定なら^{インクワールド}限定召喚、自身の体を媒体にして一時的に英霊化するなら^{インストリアル}夢幻召喚、そして、他の英霊の力を融合して能力のパワーアップでき、特定の英霊と融合すると宝具自体もパワーアップするのが^{ユナイティインストリアル}融合夢幻召喚が使えるんだ。」

藍「さすが全王神の息子……………、何でもありだね。」

イフ「まあ、これ自体が宝具ってだけで、後は擬似宝具を使ってるだけだしな。」

まあね。

藍「え？擬似宝具？」

ガルツチ「言ってみれば、このカード使わなくても、擬似宝具って言う形で、発動できるんだ。代わりに威力が下がるが、連発して使えるからね。」

藍「すごいなあ……………」

凄く感心していると、次は青と赤のオッドアイ。青空のような鮮やかで美しい腰に届く程長い髪をした少女が自己紹介してきた。

???「それじゃあ、次は私ね。私は、夜神小夜と言います。前世が貧しかった為、特典はお金持ちになる為のものです。『ゴールド・ライオン黄金創造』という、黄金を好きだけ生み出す能力です。そして、『ONE PIECE FILM GOLD』の『ゴルゴルの実』を食べました。因みに覚醒しますよ。次に、『無限成長』。そして最後に、裕福でいて弱者に優しい家庭を望みました。」

ガルツチ「悪魔の実を食べたって事は、弱点は……………」

夜神「海が弱点ですね。それが何か？」

ガルツチ「いやなに、僕だったらその弱点を消せると思うんだ。」

英竜「フア!？」

???「弱点の海を!？」

ガルツチ「まあね。一時的か永続的なんだが、それを無効化出来るんだ。」

藍「凄くないですか!? 神王神の息子さん、万能すぎません!？」

ガルツチ「万能な訳ないでしょ。こちとら前は、薬草学で単位落とされてやめさせられたんだから……………」。

ホントにあの頃は失敗したよ畜生め……………」。

ガルツチ「まあ今は、必死こいて勉強したし、どうになったがな。」

夜神「それで、海の弱点を消せるのはホントですか!？」

ガルツチ「うん、実際ルフィにも出来たしね。」

夜神「あのルフィにですか!？」

ガルツチ「うん。今はまだ準備出来てないから、すぐには出来ないけどね。」

夜神「ええええ……………」。

ガルツチ「ごめん、ホントに。それで、そっちは?。」

青く長い海のような髪に、凛々しい瞳をしている人に話し掛けた。

???'「私の名前は五河士織。特典は、『デート・ア・ライブの精霊の力』『五河士織の姿

』『デート・ア・ライブの精霊達』『無限成長』の四つだよ。」

ガルツチ「無限成長って、無限進化と違うのかな?。」

イフ「いや、似てはいるが少し違う。それより、デート・ア・ライブの精霊の力って

事は。」

士織「うん、文字通りの意味だよ。」

ケテル『なるほど、僕達みたいな力を持つてるとて訳だね。』

バルカル『反転があるかは疑問だがな。』

4人「「「剣が喋った!?!」」」

ガルツチ「おいケテル、バルカル。勝手に出て来るな。あと念話だから。」

ケテル『驚かせて済まない。僕はケテル。我がマスターが持つ剣、セフィロトソード生命の樹の剣に宿る精霊だ。んでこのまっくろくろすけ的な剣は———』

バルカル『おいケテル、馬鹿にしてるのか?』

ケテル『おやおや、沸点低いね。カルシウム採ってる?』

バルカル『黙れ、この女たらし!!』

ケテル『何を!!』

はあ、また此か。

士織「あの、その黒い剣は?」

ガルツチ「クリフォートソード邪悪の樹の剣。んでケテルと喧嘩してんのはバルカル、悪魔さ。両方とも、

デート・ア・ライブの力を持っていて、その進化版もある。」

英竜「フア!?!」

藍「進化版!?!」

ガルツチ「うん、彼ほどではないけどね。」

士織「嘘ーん……………、反転の力を持つてるとか……………」

英竜「つていうか、何であんなに喧嘩するの？もう打ち合いまで始め掛かってるけど。」

ガルツチ「ちよつと失礼。おいお前ら、いい加減にしないと、その刃諸共折るぞ！」

バルケル『すんません、勘弁してくれませんか？』

ガルツチ「全く、此奴らは……………。こう言えば、割と収まるんだ。」

士織「脅しで収まるつて、貴方それでいいの？」

こうでもしないと煩いし……………。

ガルツチ「それで、英竜さんはどんな特典を？」

英竜「私は、『ウルトラマンシリーズの全怪獣の力を纏う』『ウルトラ怪獣を一度に二体まで召喚』『全てのウルトラマンの力を持つ』」

はいいいいいい!!?!?

ガルツチ「おい尊さん!!なんだそのチート!!」

全王神『えー、然つて英竜ちゃんが決めてつていうから滅茶苦茶チートにしてみたんだけど?』

ガルツチ「うわー……………、こーもやばい力を持つてるとか、モンスターモード使つ

でも勝てるのか分かんねえ……。いや神話礼装でも勝てるか分かんないわ。」

藍「ガルツチさん、神話礼装なんてあるんですか？」

ガルツチ「使おうと思えば使えるけど、アレはマジでやばいときにしか使わない奴なんだ。」

英竜「それで、ガルツチの転生特典とかは？」

ガルツチ「いやない。」

4人「「「え？」」」

ガルツチ「いや、あるっちゃあるけど、あくまでサーヴァントになったときだな。」

英竜「サーヴァントに？」

ガルツチ「うん。オリジナルスタンドを3つ同時に使えると言うこと。だけど今は二つだな。此奴は進化したし。」

士織「んじゃあ、『THE VISION』ってスタンドは、今は？」

ガルツチ「イフと融合して、この義眼がスタンドになった。名前が『PERFECT I F T H E V I S I O N』だ。能力はイフと一緒に進化するはないけど。」

英竜「そうなのか……。」

ガルツチ「後は波紋が使えるようにする。太陽の波紋だけじゃなく、月の波紋ついてい

うD I Oが言う気化冷凍法の波紋バージョンを持つてる。」

藍「ふえええ………。んじゃあ、もう一つのスタンドは？」

ガルツチ「進化しちやつたけど、見た目はスタープラチナに翼と鎧、そして左胸には月の刻印がある奴なんだ。名前は『ムーンライト・アウターヘル』。能力は終焉、あらゆる能力または効果を終わらせる力を持つてる。要は強制終了だな。」

まあ、強制終了なのは確かだしな。強力だけだ。

英竜「てつきり凄い能力を持つてると思ってたんだけど……。」

ガルツチ「まあ母さんからは不老不死の呪いをくれたけどね。今はもう二度と解けないけど。」

英竜「ちよつと、悲しすぎでしょ？」

ガルツチ「まあ、息子の頃の力を取り戻したから、気にしてないさ。後はノアからノアの能力の一部と、怪獣達、皆の力をくれたんだ。まあウルトラマン全員だろうけど。」

英竜「ノアと出会ったの!？」

ガルツチ「ぶつちやけ言うと、アレは勝てない。っていうか勝てる気がしない。」

夜神「そこまで言わせるノアって凄い……。」

ガルツチ「後は僕のスータータスを見せておくよ。これ以上の説明が——」

未来「あれ？ガルツチ、こんなところで何してるの？」

ガルツチ「あ、未来。」

オーフィス「というより、何故ここに？」

ガルツチ「英竜に連れてこられたの。」

藍「あの、あの人は？」

ガルツチ「ああ、ゴスロリ姿なのはオーフィス。その隣は、転生者かつ僕の恋人、門
矢未来。」

4人「「「「、、、」」」」恋人オオオオオオオオオオ「「「」

おいマジでやめろ！耳が壊れる!?

!?!?!?!?!?!?!?!

英竜「つて、んじやあ全王神様が言つてた同盟組織つて……………」

ガルツチ「そゆこと。あと耳が……………」

これで3度目だよ……………、鼓膜が破れないって凄すぎるだろ……………。

ガルツチ「因みに言うが、ああ見えて男の娘だから。」

英竜「（。D。）ポカーン」

藍「嘘、え？恋人？」

ガルツチ「まあ、子供いるが。」

それを言った瞬間、やばつって思つたときには、既に遅かつた……………。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
→

第12話 同盟と襲撃

—エデンアジト—

ガルツチ side

英竜「あの、ガルツチ？大丈夫か？」

ガルツチ「いや、大丈夫じゃない……………少し、目眩がする……………」

そりやあんな超音波を2度も食らったら、僕でもやられるわ。しかし、1度と2度は
未来、3度、4度はこの3人の超音波って……………、あう……………。

『ピュッッ。』

藍「!？」

未来「が、ガルツチ？み、耳が……………。っていうか尻尾!？」

ガルツチ「んむ？ああ、此か。どういう訳か、勝手にピーストモードになるんだよ。自分から発動させればジンオウガに、んでこつちは謎なんだが、尻尾は猫なんだけど、実際はジンオウガの尻尾だし、んでこの耳はプクリポっていう種族の耳が生えるんだよ。差し詰め、キヤットモードかな……………」

英竜「なんて言うか、見た目がアレなのか、可愛く見えてしまう。」

4人「「「確かに。」」」

確かにとか言うな、これでも恥ずかしいんだよ？フラン達以外に見せるの、初めてなんだから……………」。

ガルツチ「あんまり尻尾とか耳とか弄るなよ？敏感なんだから……………」。

オーフィス「そう言われても……………」。

夜神「どう見ても……………」。

英竜「弄つて欲しいっていう……………」。

藍「誘いが見えて仕方が無い……………」。

士織「というよりは……………」。

未来「誘つてるようにしか見えない。」

ガルツチ「なんでさ!?!誘い受けじゃないんだから、マジでやめて!?!」

一応心眼で皆の心見たけど、めっちゃ欲望丸出しなんだけど!?!

何で僕、キヤットモードになるとこうなるのかな？そんなに欲情してしまうほどの可愛らしさとかあんの？っていうかそもそも、こうなったのって玉藻のせいだしな。

ガルツチ「つてあんたら、今日は僕を愛でるといとかペロペロする為に集まったんじゃないだろ？」

藍「ド直球にペロペロとか言い出したね……………」。

英竜「いや、ガルツチの言うとおりだ。彼を弄るのは、これを終わらせてからだな。」
ガルツチ「弄る前提なの!?!ちよつとアンタ、何とか言つて!?!」

「悪いが、無理だ。」

薄情者オオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

そんなこんなで、現在は情報共有、そして交渉をしていると、ふと目にした資料が見えた。

ガルツチ「なあ、その資料は？」

英竜「此か。我々の組織の中で敵視している奴らだ。」

ガルツチ「ふーん……………」

僕はすぐにその資料を取り、見始めた。まず最初に目にしたのは、財団X。仮面ライダーWに登場する闇の組織とも呼ばれている。

メンバーはみな白いスーツを身につけており、一様に無表情。

出資相手からの技術を使い、ドーパントなどの怪人に変身できる者が多数いるようで、その組織に魅了して合併を求める企業も多い。

どうやらガイアメモリ以外にも、セルメダル、ゾディアーツスイッチ等々開発をしているようで、中には魔法関連もあるらしく、更にはあのユグドラシル・コーポレーションの企業もあるのか、ロックシードも作っているようだ。

しかも驚いたことに、あのAPT X 4869、つまり黒ずくめの組織が生み出した薬すらも販売しているらしい。

どうやら英竜達は、とんでもない奴らを敵視しているようだ。というか、何じやこりや!? 怪人のバーゲンセールじゃあねえか!!

っていうか、財団Xって何者!?

ガルツチ「なるほど、敵視するのも分かるかも知れん。」

未来「それは？」

ガルツチ「英竜達が敵視する組織、財団Xに関する情報だ。それにしても、とんでもない組織だな……………」

英竜「元々は、我々の手で壊滅させたいところだが、意外としぶとくてね。」

ガルツチ「しぶとすぎだろ……………、この組織。っていうか巨大組織じゃん。黒の組織も居るんだろ？」

藍「うん、確かにね。」

未来「実は、ガルツチは1度その組織に絡まれた事があったね。」

4人「!?」

ガルツチ「気絶だけじゃなく、指紋等採ったこともあるんだ。」

英竜「ええええ……………、凄すぎでしょ……………」

ガルツチ「でも資料は、既にコナンという少年に渡してある。今頃警察に渡してると思う。」

夜神「貴方、チート過ぎない？絶対転生特典持つてるでしょ？」

ガルツチ「全部努力して得た能力だ。後天的なチートなのかもな、これ。」

藍「もしそうだとしたら、相当凄い努力家かも……………」

実際、仲間や家族を守るために、色々と頑張ってきたからねえ……。お陰で念能力は特質系と具現化系、そして放出系の技を覚えたしね……………。

英竜「……………出来れば、全王神の息子とは敵対したくないな。」

ガルツチ「いやいや、英竜達と敵対したくないのは、僕らも一緒です。」

未来「そうだね。そこで交渉したいので——」

と、そのときだった。

『ドゴオオオオツ!!!』

「何だ!？」

いきなりの爆発音が聞こえ、皆は立ち上がり、すぐさまアジトの外に向かった。そこには……………。

英竜「くつ、財団Xの刺客か。でも、全部雑魚ばかりだ。」

藍「しかも大軍で来てるねえ。」

夜神「まあ、私達の敵じゃないのは確かだな。」

士織「まあ、ついでだから、未来達の実力、見せて貰うチャンスかもね。」

オーフィス「我、負けない!」

未来「そうだね。ガルツチ、準備いい?」

ガルツチ「ああ、勿論だと——」

言いかげの時に、何かのカードが飛んでくると同時に、今度は光線銃が現れた。

未来「それって、デイエンドドライバー？」

ガルツチ「……………何で急に？ いや、それよりは此奴らと戦わないと。」

未来「んじゃあ、一緒に言う？」

ガルツチ「いいよ。」

僕はすぐさま、デイエンドのカードを挿入した。

未来ガル「変身!!」

『INFINITE RIDE へINFINITY DECADE』！』

『ANOTHER INFINITY RIDE へANOTHER INFINITY
DIEND』！』

すると、僕の姿はデイエンドの姿へと変わった。まさか海東大樹、此奴を渡しに来たわけじゃ……………、いやそんなことはない。兎に角、やるべき事はやろう。

未来「ケニーさん、貴方は下がってて。」

「分かった。」

ガルツチ「そんじゃ、行くか!!僕の新たな力を見せるために!!」

未来「うん!行くよ、皆!」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
→

第13話 ANOTHER INFINITY DIE ND

—エデンアジト 外—

ガルツチ side

イフ「よもや、お前もその力を手にする時がくるとはな。」

本当に、それだな！

『ANOTHER INFINITY ATTACK RIDE〈BLAST LAST
ER〉!!』

ガルツチ「食らえ!!」

トリガーを引くと同時に、弾が放たれ、当たった敵からレーザーが放たれ、周りに居た敵は倒れていった。

『ANOTHER INFINITY ATTACK RIDE〈TRACE ON〉
!!』

今度はデイエンドドライバーを投影して2丁となつて、そのまま敵に撃ちまくつた。

未来「凄いな、それ。」

ガルツチ「皆、伏せてけよ！」

『FINAL ANOTHER INFINITY ATTACK RIDEへIsh
tar Phantasm』

ガルツチ「さあ、逃げたい奴は見逃してやろう。立ち向かうのならば、この宝具に耐えてみるがいい!!」

そんなことを言った途端、恐怖に震え上がったのか、逃げ出す奴が多く現れた。が、それを逃すまいと言わんばかりに、英竜達は何かしらで、逃げた奴らを閉じこめた。

エグいことしてくれたな、おい。まあ良いか。

ガルツチ「行くぜ! 『山脈震撼す明星の薪』!!」

放った瞬間、閃光が放たれ、閉じこめた敵達に当たり、大爆発を引き起こし、敵すら見当たらない程消し飛ばしていった。

だが、それでも残っていたらしく、後の残り物は英竜達や未来とオーフィスが片付けていった。

一方で僕は、別の方を向くと、そこにはデイエンドドライバーの持ち主である、海東大樹が立っていた。

ガルツチ「……………何の真似だ、海東。」

海東「ああ、それはプレゼントさ。」

ガルツチ「プレゼント？」

海東「そう、土が持ってたデイケイドの力は、未来に渡したんだろ？ だったら、僕にも何かあげようかと思って、デイエンドドライバーとそのカードをあげたんだ。」

ガルツチ「……………って事は、アンタもドライバーと似た力を？」

海東「そう言うことだ。僕はもう、仮面ライダーデイエンドじゃない。まあ、土のドライバーではないが……………、敢えて言うなら……………」

すると、海東が持つてる首飾りから、一つのカードが現れた。

『MASKED RIDER DEMISE』

そうカードに書かれていた。そして、そのデイマイズであろうライダーの絵も描かれてあった。黄色で、デイエンドとは違い、横向きに円盤のような物が三つも付いている。なんだか刺さっているようにも見える。というよりは、どうやら、あのドライバーと似たようなものようだ。

海東「変身!!」

海東は、胸元の心臓部にカードを翳す瞬間、あの声が聞こえた。

『KAMEN RIDE』

海東を囲むように三つの輪が出現し、虹色に輝いた。しかし、それは決して眩しくな

く、寧ろずっと見ていたい気分だった。

そして、胸にカードがくつつく瞬間……。

『DEMISE!!』

あのカードと同じ姿となった。

胸の辺りには、やはり海東らしく宝箱のような紋章があり、その歯車の部分とカードが一体化している。そして、黄色のデイエンドに似た全身鎧を身に纏った。

ガルツチ「終焉を意味するのに、何で宝箱なんだよ。」

海東「僕と言ったら、これだろ？とりあえず、手伝ってあげるね。」

ガルツチ「まあ、宜しく頼む。海東。」

side Change

未来 side

驚いた、まさかガルツチがデイエンドの力を持つなんて。しかも、隣にいるのって、元デイエンドの海東大樹じゃないか！

英竜「あの2人、相対するはずなのに、的確に動いてるね。」

ガルツチ side

ガルツチ「ありがとう、海東。」

海東「気にするな。いずれにせよ、そのお宝は君の物だ。そして未来！」

未来「？」

海東「士の事は許してやってくれ！元々素直な奴じゃないからな！それと、これからもガルツチと仲良くやってくれ！」

そしてそのまま、海東はクールに去って行った。

ガルツチ「……………全く、未来がデイケイドで、僕がデイエンドって。」

もうこれ、母さん狙ってるだろ。いつそ息子にも、仮面ライダーデイエンドにさせたいなあって、思ってただろうなあ……………。

全王神『何故バレた!?!』

やっぱりか！畜生！

士『まあこれで、ガルツチもデイエンドの力を手に入れたって事だな。いやー、未来の兄として鼻が高いよ。』

やかましい、お前の場合、未来を虐めたただけだろ。そもそも、出会って早々折檻するなよ折檻！

士『おいおい、そりゃあないだろ。あれは俺なりの———』

!!
黙らっしやい。いい加減にしないと、お前のところに繋げて、笑いのツボ押しまくるぞ

士『ちよ、洒落にならねえからやめろ!』

しかも未来の目の前でね。

士『俺の醜態をさらさせる気満々かよ!』

勿論です、これでも愉悦部の部員ですから。いやー、赤面の士の顔、見てみたいなあ。

(愉悦顔)

未来「ガルツチ? 何でその顔に?」

ガルツチ「いやなに、士の醜態を未来に見せたら、良いネタになるんじゃないかなあつてね。」

藍「うわあ……、君ギルガメツシュに感化されてるんじゃないの?」

ガルツチ「伊達にギルガメツシュのマスターをやったわけじゃないからね。愉悦部も入ってるし。」

藍「愉悦部入ってたの!?!」

夜神「凄いわ、あのギルガメツシュをサーヴァントとして扱えたなんて、貴方凄いわ。」
英竜「まあ、とりあえず交渉の事だけど、此方もOKよ。貴方方の力も見させて貰ったし、それに、全王神様の息子にも出会えたしね。」

あらま、交渉成立しちやったよ。僕が居たお陰なのかな？いやまあ良いとして、とりあえず一件落着だ——

オーフィス「それじゃあ、ガルツチ。襲おう。」

5人「〇〇賛成!!」

あるえ〜? (・ω・)

つて、これのこと忘れてた!!

ガルツチ「逃げるんだよオ！」

英竜「逃がさないわよ！ブルトン！」

ガルツチ「セコオオ！『DIMENSION BREAK』！」

未来「ブルトン、皆をガルツチの目の前に繋いで!!」

『ブルブル〜!』

おいおいおい!! 目の前はないだろ!? バックステップして、逃げる!!

夜神「あ、バックステップした!!」

オーフィス「逃がさん！」

何でこうなるんだよ!?

英竜「いいから、大人しく捕まって、弄られなさい!!」
ガルツチ「誰がなるか!? 弄られたくないんだけど!？」

つとそこで、簪達も着いてきたのだが……………。

簪「未来、私達も手伝うわ!」

ガルツチ「おいおいおいおい!!! 何でそうなの!？」

未来「よーし! ガルツチを捕まえるオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

畜生オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!
味方なんていなかったアアアアアアアアアア!!!
士『……………まあ、ドンマイ。』
!!!!

おのれ、デイルーラー!! マジで笑いのツボ押ししてやるから、覚悟しとけよ!!!

全王神『ガルツチファイター。』

いっばーつ!! って、そんなことをしてる場合じゃなかった! 兎に角逃げ
未来「捕まえた。」

あ、オワタ。＼(^o^)／

英竜「さあて、いっばい弄ってあげるね。」

ガルツチ「いやちよつと、頼みますから僕はそんなじゃないから、うん。つていう

か、今の皆、怖いよ？ねえ、とりあえず落ち着こう？」

本音「大丈夫、恐くない。ちよつと耳や尻尾をペロペロするだけだから。」

そのちよつとが怖いんだけど!?ねえ!?

こいし「ペエッロツペロオウッ♡(^ ω ^)

ペエッロツペロオウッ♡(^ ω ^)

おにいっちやああんつをつペエッロツペロオオオッ♡(^ ω ^)

ガルツチ「あの、いやホントに、勘弁してくんない？(^ ω ^ ;)」

イリヤ「心配しなくてもいいよ、お兄ちゃん。ただ快樂という名の天国に連れて行くだけだから。」

ガルツチ「いやいやいやいや!!!マジで、ちよ、おい!マジでなめっ……っ!耳あ、ダメだつて……っ!」

全王神『うちの息子が、私が転生させた人達に、弄られるの巻。』

そう言うこと言うんじやあない!!って、未来っ!そこあ、首筋っ!簪っ、やめっ、そこあ、耳の裏だつてっ!

第14話 暗殺稼業2

—ロスサントス とあるビル— 月夜ノ刻—

ガルツチside

『エデン』との正式な同盟が終わって、しばらくたつたある日、千夏からまた依頼が来た。今度は麻薬の密売阻止に加え、ターゲット2人を仕留めることだった。

ガルツチ「まあ、そのまま麻薬を盗んで、薬に変えるつても良いかもしれないな。殆ど麻薬のイメージだけど、魔法薬に変えれば、陶酔薬とかにもなれるしな。後は、原料に戻して、麻の糸を作つて服とか作つて売るのもありかも知れないな。」

まあ、こういうのはマルフォイ専門だな。いや、あつちは変な服とか作りそうだな。それにしても……………、まだちよつと『ビクンツ!』つてするな……………。

いやまあ、仕方ないか。あんな長時間も弄られ、イカされ続けたらこうなるわな……………。なんなの皆、耳と尻尾以外に、首筋やら耳たぶとか、挙げ句の果てには胸も弄るつて。

とりあえず、リサ達が運んで色々してくれたおかげで助かったけど、ホントにキャットモードはろくな事しか起こらないな……………。

全王神『大丈夫？アラヤ君に任せたら？』

ガルツチ「いや、彼奴は子供と言えど、容赦はしないからな。それに、一度スナイパーで撃たせたけど、100発中20発外してる。8割で充分かもしれないが、あの時の例もあるし。」

士『お前、子供に暗殺を教え込むって……………。』

ガルツチ「いやいや、自分から教えてほしいって頼み込んだんだ。しかも、弱音を吐かず、淡々と技術を高めていったし。」

士『おいおい……………、子供が暗殺者にさせていいのか？』

ガルツチ「何、愛情は注いでるよ。あの子を育ててるかぎり、僕のようにはならないさ。」

そう、あの親父が馬鹿なことしたからこそ、性格は歪みきって、壊れてしまった。実体験してるからこそ、なって欲しくないんだ。誰かを守っても、自分を大切にする。そんな子に育って欲しい。

ミスト『兄や、ターゲット2人見つけたよ。』

ガルツチ「OK、盗聴器起動。」

さて、仕事始めるか。

『おい、例の物は持ってきただろうな。』

『ああ、勿論だ。だが、念のために確認したい。お前が持ってきた、あれはあるか?』
『フツ、安心しろ。人数分は、ちゃんとある。この大金と………』『ロックシード』、そして………』『ガイアメモリ』だ。』

『おいおい、早速やばい取引してんじやあねえか。』『ロックシード』と、『ガイアメモリ』って、マジかよ。』

『その代わり、その大量のヤクは、俺らが貰う。そして、この全部は、お前達の物だ。』

『だな、ホント。財団Xがここまで企業を伸ばしてくれて正解だったなあ。』

『違うない。』

『よし、早速だから此奴を渡す。代わりに———』

『分かってる。此奴はお前の物だ。好き勝手に暴れるがいい。』

「ここだツ!!」

ガルツチ「ショット!!」

『交渉成——』

『なっ!?! どうし——』

交渉成立と言いつけ掛けたところで、ターゲット2人は脳天貫かれ、そこから剣が吹き出し、串刺しの状態になった。それを見た他の仲間は、何があつたのか分からず、急いで確認をした。

『ボス!! 如何したのですか!?!』

『剣が!?! なっ、なんだこれは!?!』

『ど、どうしやす?』

『と、兎に角……。あれは——』

ガルツチ「壊れた幻想。」
ブローケン・ニアントズム

そう唱えた瞬間、取引先の場所ごと爆発し、建物全体崩壊した。

ガルツチ「ふう、とりあえず仕事は終わった。んで、藍。そつちは?」

藍「約束通り、大金と『ロックシード』、そして『ガイアメモリ』は盗んだわ。」

ガルツチ「仕事が早いな。」

藍「まあね、流石にあの爆発は焦ったけど……。」

ガルツチ「君だからこそだ。んじゃ、それらはエデンの物って事で、僕は——」
藍「え？もう帰るの？」

ガルツチ「うん、仕事が終わったし、僕には3人の妻や2人の子供（今連れてる子供）もいるしね。」

藍「あー、そう言えば結婚しちやってたか。でも、未来と恋人って事は、やっぱりアレ、してるの？」

ガルツチ「してる。というか、実際子供出来てるし。」

藍「あ、あの鳳凰ちゃんとアラヤ君って、未来と君の子だったわね。って、貴方どういう身体してるの!? 男の娘だよね!? 子供産むなんて、有り得ないよね!」

ガルツチ「確かに、『男』の姿だったら、無理だろうね。」

藍「そうでしょうそれで………ん? 『男』の姿?」

まあ、見せてあげてもいいか。

藍「あの、何で手の甲でハートを描いて——」

ガルツチ「Girls Change!」

『Drive! Type Girl!!』

藍「……………ホントに、女の子になっちゃってる。」

ガルツチ「まあ、何故か声が高く、ロリに巨乳なんだけどね。」

藍 「いやいや、声が高くなるのは当たり前前だけど、何でロリ巨乳？」
ガルツチ 「僕に訊くな。」

さてと、見せたことだし、そろそろ元の姿に戻り――

『ビクンッ!』

あ。

藍 「危ない!」

今にも落ちそうなところで、僕の腕を掴み、引つ張ったところでバランスを崩してしまい、そのまま押し倒している体制になった。

いや、なんでさ。というか『女祝の相』スキル、自重しろ。

ガルツチ 「あ、えっと……………ごめん。」

藍 「ううん、無事ならそれでいいよ。それより、貴方って意外と肉食系なのかな?」

ガルツチ 「肉食系は彼奴だと思っけど……………。僕の場合、魚食系なんだが……………」

藍 「そう言っつて、ホントは私を食べようとしてるんでしょ? キャーツ! ガルツチさん 獣く!」

ガルツチ 「あの時散々弄くりまわして何を言っつて。元々こうなつたのつて、弄くつた皆のせいだからな? 正直手元が狂っつてミスするかも知れないつてのに……………。今だつて、震えてるんだから……………」

実際、ここに来るまでの間、鎮静剤飲んで来て、すぐ来たんだけど、どうやらそれも切れたせいで、もう手足も震えてしまった……………」

藍「震えてるわね。」

ガルツチ「煩い……………、責任とれよな？ どうせ僕、受けになるんだから……………」

ガルツチ「え？」

藍「え？」

嘘、それって如何なの？

ガルツチ「……………悪いが、攻めに転じてくれ。」

藍「いやいや、貴方が攻めになって。」

ガルツチ「いやそもそも僕、いきなり攻めは無理だよ。君が攻めになって。」

藍「え、君の攻め姿が見たいからガルツチさんからしてえ。」

ガルツチ「あのな、僕はやらねばなしは性に合わないから、受けから攻めに転じるのが性分なの。『グランドアヴエンジャー冠位復讐者』舐めんな。」

藍「え？ それ初耳なんだけど。」

ガルツチ「無の神を倒したからだと思う。他にも『グランドローチヤー冠位弓兵』とか、『グランドセイヴァー冠位救世主』とか、『グランドビースト冠位獣』もあるし。」

藍「ちよつと待つて!?!え?冠位多くない!?!つていうか、何でグランドビースト!?!人類悪じゃない!?!」

ガルツチ「おい、自覚はしてるが人にもよるんだから。ビーストだからつて、酷すぎる命令以外なら、ちゃんと従うし。」

藍「あー、確かにガルツチさんはビーストだけど、根っからの人類悪じゃないよね。」
あつたり前だ。宇宙だったら、ビースト枠にも入りそうだが…………。

ガルツチ「それより、早く……………、攻めてきてよ……………。焦らす気か?//////

藍「ホントに仕方ないね、私は受けがよかつたけど、如何してもなら攻めてあげるね。
後から文句は、受け付けないんで。」

ガルツチ「わ、分かつてるから、早くう……………。//////

藍「焦らしながら誘つてるガルツチさん、滅茶苦茶エロすぎる……………。もう、全部ペロペロしてあげるね!?!」

それからというもの、帰りは藍に担いでもらって、『千夏アジト』に到着後、フラン達に担がれ、ベットに運び込まれた。僕はそのまま悦楽に浸っていた。

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第15話 休養と夢

—千夏アジト— 月夜ノ刻—

ガルツチ side

ガルツチ「警察署に、襲撃……ですか？」

しばらく休んでたとき、千夏から新しい任務が飛び込んできたのだ。

千夏『そうだ。良いところを悪いが、明日の任務を説明するぞ。明日は、無実の罪で

逮捕し続ける警察達が多く居る警察署を襲撃するんだが……、動けそうか？』

ガルツチ「済まない、まだ、身体が万全じゃない……。鎮静剤を飲んだとしても、動けるのは短時間だけだとおもう。長時間となると、途中で支障が起こるから、今回はパスさせてくれ。」

千夏『分かった、未来達に伝えておこう。』

ガルツチ「代わりなんだが、アラヤにするよ。」

千夏『え!?子供だろ!』

ガルツチ「だが、年齢的に子供じゃない。戦闘面なら、足を引っ張る事はないはずだ。それに今回の任務は、アラヤが特化してると思う。」

千夏『どういう事?』

ガルツチ「アラヤがフランと一緒に散歩してたとき、その警察署のこの階層を把握しているんだ。無実の罪で捕まってる奴も、知ってるはずだ。」

千夏『分かった。んじゃあ、明日はアラヤ君に頼んでおくね。』

僕は通話を切り、直ぐさま寝転んだ。

フラン「じゃあ、しばらくは動けないの?」

ガルツチ「うん、というか誰かな?あの時僕をイカしまくったのは……………」

イリヤ「アハハ……………」それはホントにごめん。まさかそこまでになるなんて。」

言ってみれば、あの暗殺稼業以降、未だに動いていなかった。それもその筈、あの時の快樂や暗殺稼業後に藍と百合ツクスしたからか、上手く動けないのだ。

別に快樂に溺れたくないとは思ってない。ただ、今後に支障がないように犯し犯されていたのだ。

全王神『意外、ガルツチちゃんって未来みたいに性欲ないの?』

んな訳あるか、表向きはそう見えるが、本性は未来以上に高いの。元々有翼人の皆は、子孫を残す為ともっと快樂が欲しいが為に、三大欲の中の一つ、性欲だけは人間以上に高いんだ。まあその人にもよるけどね。

全王神『あらま、んじゃあ今でもムラムラしてるって事?』

実際そうだな。それに有翼男性の人の精液って、種族の中で案外沢山作りやすいようだし、意外と無限に近いほど、溜まるんだよね。その分理性も高めだし。

全王神『じゃあ、セックスし終わると、有翼人の皆って、理性がすぐ戻るの?』

いやあ、流石にそれは分からね。僕の体質上かもしれないし、皆がそうかもって言うほどの根拠もないからねえ……………。

全王神『そっか。』

まあ、一応精力剤でも飲んでくか。

全王神『いや、何でそれ使うの?』

快樂で身体が動けないけど、精力剤を飲めば、性欲は高まる分、治る速度も早まるんだ。まあ、個人差だけだね。

こいし「それじゃあ、しばらくはお兄ちゃんお留守番?」

ガルツチ「そうだね、代わりにアラヤに頼むよ。」

フラン「分かった。ゆつくり、休んでね。お兄ちゃん。♡」

ガルツチ「うん……………、お休み。」

イリヤ「お休み、お兄ちゃん……………」

♡

???

ん？アレ？僕何時から、ビルの屋上に？ん？

??? 「へえ、驚いたな。彼奴の身体で、ずっと見てたけど、お前って面白いんだな。」

ん？誰なんだ？

??? 「おっと、俺は此処だけ。彼奴の恋人さん？」

僕はすぐに右を振り向くと、未来らしい姿をした人が立っていた。未来には見えたが、だが雰囲気違った。

ガルツチ「……………式？」

両儀式「そう、初めましてというべきだな。」

ガルツチ「何で、急に夢の中に？っていうか、ここは!？」

両儀式「ここか？ここは『空の境界』の世界、オガワハイムのビルの屋上だ。」

つて事は、fateの世界とは全く違う世界か。何だか、雰囲気似てるけど……………。

ガルツチ「だが式、何で急にこんなところ呼び出したんだ？」

両儀式「ああ、彼奴の恋人さんってどんなのか気になってることと、お前に伝えなきやいけねえ事があるんだ。」

ガルツチ「伝えなきやいけないこと？」

どういふ事なんだ？

両儀式「そうだね、先ずは俺の身体を使つてる、『門矢未来』なんだが……。彼奴の転生した肉体つて、元々は俺の身体だろ？」

ガルツチ「まあ、確かにな。」

両儀式「だろうな。だったらさ、彼奴にも使えるんじやねえのか？」

ガルツチ『直死の魔眼』か。」

両儀式「そう、お前の息子だつて、あるんだろ？」

確かに、アラヤは『直死の魔眼』は持つてる。そして僕もまた、『直死の魔眼・絶望』を持つてる。変わつてはしてるが、言つてみれば、これが僕の完成型の『直死の魔眼』かもしれない。

でも、未来のは見たことないな。

ガルツチ「未来の中に潜む『直死の魔眼』は、どうやって目覚めさせるの？」

両儀式「そうだな……。能力覚醒となると……。お前が今まで戦つてきた奴と戦わせるつてのは？」

ガルツチ「つて事は、ミストラル達や、宵闇霊夢、殺生院キアラ、ヘブンDIO、ブラック、グランドライダー冠位騎乗兵のマーモン、女神イリアス、シーモア等の奴らと戦わせるのか？」

両儀式「そうなるな……。一応VRで再現出来るし、彼奴なら勝てるさ。」

ガルツチ「それで、晴れて習得でき——」

両儀式「いや、最後は自分自身と戦って、ようやく習得出来る。」

やっぱりそうなるのね……………。

両儀式「もし起き上がって、未来がここに来たら、こう伝えておけ。『いずれ君は、『直死の魔眼』が使えるようになる。だが、覚醒させるには、お前の恋人が、今まで戦ってきた奴らに勝ち、最後は自分自身と戦い、勝つ必要がある。手に入れば、それなりに楽になるからな。』ってな。」

ガルツチ「自分では伝えないのか？」

両儀式「俺には無理さ。もし、お前達がこの世界に来ることがありや、着いてつてやるぜ。地獄の果てまでとことん、な。」

それは、未来次第だな。

両儀式「んじや、彼奴に伝えておけよ。俺の恋人さん。」

ガルツチ「待て待て、なんでそうなの!？」

両儀式「未来はお前の恋人だろ? だったら、俺の恋人にも変わりないさ。身体や魂、心も違えど、俺はお前の恋人だって事さ。彼奴も、お前のことを気に入ってるしな。」

ガルツチ「……………そうか。」

両儀式「じゃあな、ガルツチ。もしこの世界に来ることがあれば、歓迎するぜ。」
そうして、式との話が終わると同時に、夢から解放された。

—千夏アジト—

目が覚めると、そこには任務に行く前に、僕の様子を見に来た未来が来た。

未来「千夏から訊いたよ。ゆっくり休んでね。」

ガルツチ「ああ、後行く前に、話がある。」

未来「何？出来れば、手短で。」

僕は急いで、夢の内容、そして未来には『直死の魔眼』を持っていることを話した。

未来「『直死の魔眼』か……………」。

ガルツチ「でも、使えるようにするには、僕が今まで戦ってきた奴らと戦って、最後には自分自身に打ち勝たなければならぬんだ。」

未来「……………そっか。分かった、ありがとう。」

ガルツチ「行ってこい、未来。応援してるよ。」

未来「うん。行って来ます。」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
⇨

第16話 鈴美とクリムゾン

—千夏アジト—

ガルツチ side

未来達が警察署の襲撃した後の事、鈴美さんが僕の部屋に入ってきた。

何だか真剣な顔をして、此方を見ていた。

ガルツチ「どうかした？」

鈴美「ガルツチちゃん、ちよつと話があるのだけど………。あの時の言葉、覚えてる？」

ガルツチ「………自分の正体を知る。それがどう言う意味か、分かるか？」

鈴美「ええ、何故なのか分からないけど、貴方の、誰だか知らない貴方が、何処か霧囲気が懐かしく思うの。まるで、ママの事を、今でも大事に思っているような、そんな感じ。」

どうやら、ジャックの存在も気付き始めて来たようだ。まだ完治してはいないが、日常生活にまでは、問題ない。そう思い、僕はジャックを呼び出すことにした。

ガルツチ「分かった。それじゃあ、彼奴と話をしてくる。」

僕は直ぐさま精神世界に入り、ジャックと話をしていた。

ガルツチ『ジャック、出番だ。』

クリムゾン『……………。』

ガルツチ『ジャック?』

クリムゾン『なあ、ガルツチ。』

ガルツチ『ん?』

クリムゾン『俺は、あの子にどう話せば良い……………?なんて言うか、彼奴……………、妹に見えて……………。』

ガルツチ『……………分かってる、その為の話し合い。だろ?』

クリムゾン『……………そうだな。分かった、俺話してくる。』

そして僕は、人格交代し、ジャックが僕の身体を乗っ取った。

side change

クリムゾン side

あー、緊張する。鈴美さん、だっけ？何だか彼奴を見ると、スゲえハズい気がする。妹が、見えるって言うかなんて言うか……………。

クリムゾン「……………よう、鈴美さん。」

鈴美「貴方が……………、ガルツチちゃんの？」

クリムゾン「おう、そうだ。初めまして、だな。」

鈴美「そう……………ね。」

……………ここで会話が途切れてしまい、黙ってしまった。いや、鈴美さん！なんか話があつて、俺に話し掛けてんだろ!?ちよつと!?

フラン「えーつと、ジャック。私達、お邪魔だと思うから、部屋に出て行くね。」

クリムゾン「お、おう。すまねえ。」

何かの空気を読んだのか、フラン達は部屋を出て行き、今ここにいるのは、鈴美さんと俺だけだった。

流石にだんまりは我慢できなくて、俺から話を出した。

クリムゾン「それで、俺を呼び出したのって、何か理由があつてガルツチのところに来たんだろ？言え、そうすりゃ少しはスッキリすると思うぜ。」

鈴美「あ、うん。えーつと、ジャックさん？貴方は、私が何者なのか……………分かるの？」

クリムゾン「……………何故、そう思ったんだ？」

鈴美「私、ママの写真集を見ていたとき、お婆ちゃんの写真があったの。その中に、何故だか知らないけど、その写真に映ってるお婆ちゃんらしい人の隣の人を見ると、懐かしく思っちゃうの……………。出会ったこともない、知らない筈なのに、何故か、懐かしい……………。そんな気持ちになっちゃうの。」

なるほどな。彼奴、今でも持つてたつてわけか。ギルサンダーの奴と結婚し、子を産み、その子に写真集を渡して子離れし、気がつけばジョジョの世界に着き、其奴と結婚したときに、鈴美さんが誕生したって訳か。

クリムゾン「そうか……………」

鈴美「だから、教えて欲しいの。私は……………、何者なのか。」

クリムゾン「……………酷な真実だが、聞くか？」

鈴美「教えて。」

クリムゾン「分かった。後悔しても、俺は知らねえからな。」

俺は少し、一息をつき、鈴美さんに話をした。

クリムゾン「いいか、鈴美。お前は、俺と同じ『零の龍神』という一族の血を引いてる存在なんだ。」

鈴美「『零の龍神』？」

クリムゾン「そう。嘗て無の神ことラヴオスを生み出した、始まりと終わりを司る『零』の存在たる龍神。俺や兄貴、そして妹もまた、その血を強く引き継いでいた。お前に流れる血は、俺の懐かしき妹の血『アサナト・カオス・ティポタ』、その血を引いてる。」

鈴美「え？」

クリムゾン「言ってみれば、お前の母親。いや俺からしたら、従姉妹になるな。其奴は俺が住んでた世界から来たというわけさ。」

鈴美「……………じゃあ、私のお爺ちゃんは？」

クリムゾン「……………『七つの大罪』の漫画、呼んだことあるなら良いが、ギルサンダーっていうのがお前のお爺ちゃんだ。」

鈴美「その人も、『零の龍神』？」

クリムゾン「いや、ドルイド族のクオーター。言ってみれば、お前は、『零の龍神』に加え、ドルイド族、その他の血が、お前に宿してるんだ。」

鈴美「……………。」

言葉が出ない、多分それが正解だろう。普通なら、その反応が正しい。知っていたのなら、驚きだがな。

未来「鈴美、ここに……………あれ？ガルツチ？」

クリムゾン「彼奴はちよつと休んでる。それと未来、今ちよつと鈴美と大事な話をし

てる。聞くのは構わねえが、あまり邪魔をしてあげないでくれ。」

未来「あ、うん。分かった。」

未来が扉をしめ、どっかの椅子に座り、俺は話しの続きを言った。

クリムゾン「今はまだ覚醒には至っていないが、それももうすぐで、目覚めようとしてる。」

鈴美「……………私、扱えるの？その力……………」

クリムゾン「それは、お前次第だ。それにどうやら、妹より先に、ギルサンダーの魔力が解放しきってるな。其奴が扱ったのは『雷帝』、つまり雷を自在に操る魔力さ。」

未来「ねえ、それって『レッド・ホット・チリ・ペッパー』みたいな能力なの？」

クリムゾン「いや、それより強大な筈だ。『ウエザー・リポート』の中の一つ、雷雲を呼び出す事も出来れば、自身に身を纏わす事も出来る。『レッド・ホット・チリ・ペッパー』の使い手だったら、其奴の電気を奪うことも出来るしな。日常でも雷を帯びることが出来れば、大したものだ。」

鈴美「……………」

クリムゾン「いずれにせよ、お前は人間とかけ離れちまった存在だ。能力といい、血族といい、お前は最初から普通じゃなかった。だが、俺の従姉妹は、そんな辛いことを背負わせねえが為に、どうやら何らかの封印をしたようだな。だがそれも、終わつち

まった……。吉良吉影って男が、殺されちまったことにより、封印の外壁もぶつ壊れた。正直スタンドで無理矢理壊される事は、想定していなかったのだろいな。」

未来「そういえば、『レッド・ホット・チリ・ペッパー』の電気の僅かが、鈴美に吸い込まれるようにいったけど……。」

クリムゾン「なるほど、少しずつだが解放していたのか。そしてガルツチ達が生き返らせたことにより、先にギルサンダーの魔力が解かれてたつて訳か。」

こりや驚きだな。ギルサンダー、どうやらお前の孫が、その魔力をきつちり受け継いでるようだぜ。喜べ、ギルサンダー。お前の子孫が受け継いでくれたぞ。

クリムゾン「怖いか？自分が何者なのかを知ったの。」

鈴美「うん……。覚悟していたけど、やっぱり……。」

クリムゾン「安心しろ、ここにはガルツチや未来、簪達がいるんだ。それに、俺もついでる。」

鈴美「……………」

話し終わったのか、鈴美は俺に抱き付き、静かに泣いていた。俺も優しく、抱きしめ、頭を撫でていた。こうすれば、アサナトの奴も、落ち着いて眠つちまうけどな。

未来「ジャックさん、鈴美は……………」

クリムゾン「ああ、分かってる。此奴は無意識のうちだが、雷帝の使い方をマスター

してる。後は此奴の気持ち次第だ。此奴が覚えてるのは『雷帝の鉄槌』、『雷帝の肅清』、『雷獣の追走』。武器を持てば、『雷鳴斬』、『雷帝の剣』、『雷帝の重鎧』、『雷神の抱擁』。そして、どうやらオリジナルの技である『迅雷の天罰』、『裂雷の刃』とかも持つてるようだ。」

未来「分かるの？」

クリムゾン「妹の孫だろ？撫でただけで、分かっちゃまった。だが、鈴美は他の技も持ち合わせていやがるな。いずれにせよ、『零の龍神』の能力も目覚めるのは目に見えてる。その為には、戦闘に慣れさせなくばならねえ。鈴美もまた、戦いの運命には避けられねえようだしな。」

未来「そうか……………」

クリムゾン「んじゃ、俺はガルツチに変わるぜ。今度話すときは、俺が出て来たときだな。じゃあな。」

さあ、戻ってこい。ガルツチ。

side change

ガルツチ side

どうやら、話は付いたようだ。実際、鈴美さん眠っちゃってるし。

未来「それでガルツチ、もう大丈夫なの？」

ガルツチ「変わったの分かるんだ……。うん、日常生活なら支障はないと思う。もうちよつとで完治すると思うよ。」

未来「そつか……。あの時のガルツチは、ホントに可愛かったなあ……………」

ガルツチ「ぶつちやけ、あれはろくな事にならん。でも……………、希望するんなら、次からは——」

『ズドドドドオオオオオオオオオオッ
!!!!!!』

何事!?

未来「何で転生してるんだ!」

ガルツチ「それはこっちの台詞だよ!母さんは、知らないそうだけど。」

簪「ねえ、アレって何?」

未来「以前ジョジョの世界で、僕が倒したはずのスタンド使い。」

ガルツチ「そしてあの白いタキシードを着ている奴は、僕とフラン、こいし、イリヤと結婚するときに現れた奴……。貴様、一体どうやって!」

???「教えられないねえ……。それに、今回は此奴がついてる。闇を操るスタンド使い、だったかな?丸ちゃん。」

金欲「そうそう、オーズ君。彼奴には、今までの借りを、たああああつぷり返さないとねえええ!!」

ちつ、闇を操るスタンド使いか……。しかもオーズはあのベルトも健在。あーくそ!完治していれば、一気にたたみかけれるってのに……。

つと、そのときだった。

鈴美「未来ちゃん、ガルツチちゃん。私に任せて。あと、その剣借りるね。」

未来ガル「鈴美!」

なんと鈴美さんが、僕の聖剣スターダストソードを手に取り、前に出たのだ。

未来「鈴美!!危ないから下がって!!」

ガルツチ「それに、彼奴らは——」

鈴美「だから何なの!! もう未来ちゃんやガルツチちゃんや簪ちゃん達に、見守られるのは嫌!! 私だって……………、私だって……………!!」

すると、鈴美の背後から、何かが見えた。すると空は暗くなり、雷鳴が轟いた。しかも驚いたことに、殆どが鈴美さんの周りに落ちていた。

鈴美「私だって!! 皆を守りたい!!! 来て! 『ライトニング・ゼウス!!』」

雷鳴が落ちると同時に、スタンドは唸りをあげ、その雷を取った。途端に剣に変わり、鈴美の隣で浮いていた。

鈴美「貴方が闇のスタンドだというのなら、私はその闇を切り裂く雷になるわ！未来ちゃんを……、ガルツチちゃんを……、そして皆を護る雷として!!!」

ライトニング「まさか、貴様のスタンドになるときが来るなんてね。いいだろう、新しく手に入った力で、その闇を断とう!!覚悟は良いか、レイミ。」

鈴美「ええ、行くわよ！ライトニング!!」

t o b e c o n t i n u e d

◇

ガルツチ side

鈴美「ありがと、ガルツチちゃん。」

ガルツチ「気にするな。それにしても、凄かったな。あの一撃、さすがのオーズも、あの男も……………」

鈴美さんが、聖剣スターダストソードを返してきて、僕が持つてる鞘に片付けた。どうやら、鈴美さん専用の剣を作る必要があるそうだ。

だが、疑問がある。何故転生させ不可能だったはずのオーズや、未来が言う闇を操るスタンド使いの金欲丸が、何故転生したのか、不思議に思ってしまった。

しかも未来と英竜を転生させた母さんも、僕をサーヴァント化させて転生させたラヴオスさえ知らなかったという。

もしかしたら、まだ見ぬ敵の仕業なのかも知れない。それか、他の奴らの仕業か。どちらにせよ、あの2人が消えてよかった。

未来「凄い……………、凄いよ鈴美！」

ライトニング「やれやれ、兎に角一件落着だな。大丈夫か、ガルツチ。」

ガルツチ「ああ、済まない……。でも、ライトニングが鈴美さんのスタンドになるなんて。」

ライトニング「まあな。こうしてお前と出会うのも、久方ぶりだ。スノウもセラも会いたがってたぞ。」

ガルツチ「アハハ、彼奴らも元気か。」

鈴美「知り合いなの？」

ガルツチ「うん、ライトニングみたいに召喚獣とかは出せないけどね。」

ライトニング「何謙遜してるんだ？お前の場合『ナイツオブラインド』を召喚出来るなんて、凄いことだぞ？」

簪『『円卓の騎士』を!』

鈴美「ガルツチちゃんって、何処まで規格外なのかしら……………」

ガルツチ「仕方ないだろ、ただでさえ僕虚王魔神なんだから……………」

鈴美「そういえば、そうだったわね……………」

それで納得するって、凄いよなあ。

千夏「まあ、皆が無事でよかった事で、今日はパーティーでもしようじゃないか!!!」

つというわけで、今夜は派手なパーティーとなった。

t o b e c o n t i n u e d ♪

s i d e C h a n g e

???

s i d e

???

「はあ、やっぱりあのデータで出来た奴を使ったとしても、無駄だったか。いや、そもそもあんなの役立たずだ。誰だ、彼奴のデータを取った阿呆は？」

??? 「それは其奴担当の奴だろう。まず、人選すら間違ってるだろ？オーズ、金欲丸。能力は強力で、あれは宝の持ち腐れだ。せめて、その能力を誰かに移してからでないか？……。それで、あの能力は、どうなった？」

??? 「残念ながら、どうやら丸々使って、能力すらないと。」
??? 「馬鹿だろ、ホントに。」

はあ、何であんな奴を雇ったのだ？抹殺してやりてえが、奴がいなければクローンを作り出せなかったのもまた事実。

??? 「まあいい、次の手を考えようではないか。」
??? 「お任せを……………」

新たな無の神『ゼロ』。

第17.5話 スリラーの真価とその正体

—V R ルーム—

ガルツチ side

鈴美が零の龍神の力を解放して暫くしたある日、僕は金欲丸が持っていたスタンド『スリラー』と呼ばれるスタンドの、試運転を始めるため、V R ルームに向かった。

ガルツチ「千夏さん、何時でも準備OKです。」

千夏「分かった。念のために、こちらの流れ弾が来ないように、強力なバリアを張って置くぞ。」

ガルツチ「そうしてくれ。」

さてと、あのキモ男が持ってたスタンドはどれ程の物か、試させて貰う。

千夏「V R 訓練始め!!」

ガルツチ「来い! 『スリラー』!!」

side Change

未来 side

未来「え!? 何で彼奴のスタンド姿が違うんだ!？」

あの金欲丸のスタンド姿は、ヘドロのようなドロドロの人型で、血管が浮き出ている。全身にはカチカチと開閉する口があった。

だけど、ガルツチのは違う……。ガルツチが出した『スリラー』は、ケルベロスの姿だった。しかも、黒い翼のおまけ付きだった。

イフ「恐らくだが、THE VISIONの頃的能力があるのか、自分好みの姿に変えたのかも知れないな。」

未来「変えられるって、なんだか凄いな。」

鈴美「でも、何であの男のスタンドを?」

フラン「お兄ちゃん絶望の力と、彼奴のスタンドが何かと相性が良いって、ヘラが言ってたの。」

簪「ヘラって、オリンポス神の?」

フラン「うーん、オリンポスじゃなくて、私に宿してる破滅の魔神の事よ。」

簪「ホントにややこしい名前がありまくりだね……。 (・。・)」
それ僕も思った。

ガルツチ『んじゃあ、行くぞ。』

sideChange

ガルツチside

ガルツチ「ガイア、絶望の力と『スリラー』とリンクを。」

ガイア『リンク、完了。』

ガルツチ「目標、ロックオン！」

僕はすぐさま両手を挙げ、目の前にある的を見た。ロックオンの数が増えれば増えるほど、両腕から溢れ出る闇のオーラが湧き出し、ケルベロスの口から黒い光球が大きくなり始めた。

ガルツチ「よし、ダークマター、チャージ!!!」

ガイア『チャージ、オーバーロード!』

ガルツチ「これが、深遠なる闇の力!! 『ダークマター・メテオレイン』!!!」

解き放たれた闇は、無数の流星群と化し、ロックした的に当たると同時に、凄まじいほどの轟音と大爆発を起こした。的は碎け散り、結果表が出た。

『破壊力：EX 命中率：99, 99% 種別：対城技』

予想はしてたが、まさか対城宝具並みだとは……………。

ガルツチ「ふう……………」

???『お疲れのようだな、我が主。』

ガルツチ「？」

あれ？誰だ？

???『おい、我はここだ。』

ガルツチ「え？スリラー？」

???『我にそんな名を付けるな!!』

ガルツチ「!?」

え!?喋った!?

???『いや、失礼。我が名を知らぬが、済まぬがスリラーという名はやめてくれ。彼奴を思い出して腹が立ってしまう。』

ガルツチ「あ、はい。ごめん。」

えー？スタンドが話す……………、いや待て、スタンドにしてはなんか違う気がする……………。

sideChange

未来 side

え!? 何あの威力、あんなのが僕に当たっていたって言うの!?

イフ「そのようだな。威力は、恐らく元のスタンド使いよりは、最も強力かも知れないな。」

鈴木「でも、それは未来ちゃん、イフがいたからこそ、防げたんだよね?」

未来「そうだけど、でもガルツチのアレ……………正直受け止められる自信がない。」

イフ「あれが敵だったと思うと、ゾツとしていたかもな。」

ホントだよ。つて、あれ? ああのスタンド、なんか様子が違う。

千夏「お疲れガルツチ。」

ガルツチ「疲れた。少し休むよ。」

??? 『そうしたまえ、我が主。』

イフ「な!?!」

未来「え!?!」

ガルツチ「ん? どうかした?」

未来「一つ聞くけど、ガルツチ。そのケルベロスって、スリラー?」

??? 『我にそのような名を付けるなど言っただは!?!』

未来「!?!」

嘘!? ケルベロスが!?

??? 『いかん、知らぬ者がいたのをうっかり忘れてた。済まぬが、この場にいる者よ。我をスリラーと呼ぶのをやめてくれ。あの者を思い出すだけで腹が立ってしまうからな。』

えー、まさかケルベロスが喋るときが来るなんて……。でも、何でスタンド片付け
ないんだ?

未来「ねえ、ガルツチ。」

ガルツチ「ん?」

未来「スタンド片付けないの?」

ガルツチ「それがさ。出来ないんだ。」

鈴美「え?」

ガルツチ「いや正しくは、これスタンドじゃ無くなってる感じかな?」

嘘くん……………。

sideChange

—千夏アジト—

ガルツチ side

??? 『度々重ねて済まぬが、我は『スリラー』とかの名前ではない。彼奴が勘違いして、呼んでいただけの事よ。』

ガルツチ 「んじゃあ、お前真名あるのか？」

??? 『無論だとも。我はケルベロスの中での長とも呼ばれた者、名は『ディアボロス・マルドウク』。まあ、難しいのならば……………その……………、『アムール』でも……………構わん。』

待て、なぜアムール？アムールって確か、『愛』または『恋』を意味するんだけど……………。未来「えーっと、アムール？何でガルツチの事を、我が主って言うの？」

アムール 『ああ、それが。いや正しくは、此奴の中にいる主に言っているのだ。』

ガルツチ 「えーっと？それって、ジャック？それとも、ガイア？」

アムール 『そう言うことだ。』

ガイア 『ぬ？我って、ケルベロスを買っていたのか？』

アムール 『お忘れになられてしまったのですか!?我が主!!以前貴方の使い魔として、

生きていた我を!」

ガルツチ「ちよつと、落ち着け!!おいガイア、お前何も覚えていないのか!」

ガイア『待て!思い出してみるから、少し待て!』

アムール『彼奴だな?彼奴が記憶を奪ったから、思い出せんのだな!?くつ、我が守れなかつたばかりに……………。おのれ宵闇霊夢ウウウ!!!我が主を殺した挙げ句、記憶を奪い去るとは!!』

あれ?これつて、気付いていない奴?

アムール『教えてろ!彼奴は何処におる!!我が成敗して——』

ガルツチ「あの、其奴はもう死んでるよ?」

アムール『何?』

ガルツチ「僕とフラン、こいし、兄さんとレミリア、さとり、そして早苗の手で、葬つたけど。」

アムール『なつ!?!そ、そうだったのか……………。』

未来「あの、状況が読み込めないけど……………。取り敢えず、アムール?教えてくれない?その、ガルツチの中にいる人と君との関係を。」

アムール『ふむ、そうだな。我と我が主は主従関係なのだ。傷付いていた我だったが、それを手を差しのぼしてくれたのは、他でもない…………。ガイアだったのだ。それから我

は、恩を返すが為に、彼の使い魔として生きてきた。だが、あの宵闇霊夢のせいで、我が主は殺され、我は憎んだ。そして、気が付けば我は死んでいた。姿も形も変えられてしまい、あの金欲丸とかいう巫山戯た名を持った男の『スタンド』という者になってしまったのだ。』

未来「え!?!んじやあ、君は最初から、ちゃんと肉体があったんだ!?!」

イフ「それで、ガルツチがコピーし自分好みに変えた結果、偶然にも元の姿に戻ったという訳か。」

えー、ホントに何でこうなったんだ? あんな趣味悪いスタンド姿が嫌だったから、ケルベロスの姿をただだけに、まさかの本来の姿なんて思っても見なかったんだけど……。

ガイア『あー!!お前あの時の!?!』

アムール『思い出してくれたのですか!?!我が主!!』

ガイア『迎えに来てくれたのか!!すまぬ、貴様には辛い思いをさせてしまったようだ……。』

アムール『いえ、主が無事で、我も嬉しいです……。』

………なんだろう、これって僕が居ちや駄目な空気がする……。

ガイア『しかし、アムール。もう我は、肉体はない。だから、もう一度契約するのは、

難しいのだ。』

アムール『そんな……………。』

ガイア『だからガルツチ、頼みがある。アムールを、使い魔として契約して欲しい。この者の力は、闇だけでなく、憎悪、絶望、混沌の力を備わっている。上手く使えば、これまで以上に扱えるはずだ。』

うーん、ガイアに言われるとなると、断ることは出来ないな。

ガルツチ「分かった。アムール、済まないがこれからは、僕の使い魔として生きてくれないか？ 誰かを守るために、力を貸してくれ。」

アムール『良からう、我が新たな主。名は？』

ガルツチ「ガルツチだ。」

アムール『では、新たな契約者ガルツチ。これからは、お主の闇と牙となりて、護ろうぞ。』

ふう、一時期どうなることかと――

『アムール』

ん？

『新たな宝具の使用可能。』

フリーレン・シャルフリヒター
遙かなる者への斬罪

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1～5

最大捕捉：1人』

使い魔を持つだけで宝具が生まれるって、どういうこつちやな。

未来「でも、まさか使い魔がスタンドに変わるなんて、思っても見なかったね。」

鈴美「ええ、私も。」

イフ「だが、これもまた運命かも知れないな。」

ガルツチ「……………取り敢えずこれからも、よろしく頼む。」

アムール『こちらこそ、我が主。』

t o b e c o n t i n u e d
◇

第18話 未来の妹と名乗る少女

—
???

???
side

とりあえず、今度は全世界の能力を持ったホムンクルスを生み出したぞ……。最終段階さえ終われば、兵器として使える。

フフフ、時間は掛かるが、完成すればあの者達もおしま——

「大変です！実験体0号が、逃げ出しました!!」

「はあ!？」

「時臣が鍵を掛け忘れたらしく、その隙に——」

あのうっかり遠坂めええええええ!!!何が優雅だ！優雅にうっかりミスをするなど、あれ程言っておるのに、何を考えておるのだ!?!馬鹿なの!?!遠坂一族って、何事にも華麗にうっかりミスをするようにって教えているのか!?

くそつたれ!!誰だ!!其奴を雇った奴!明らかに人選ミスだろうが!!!!!!!

「じゃあ、全世界の能力のDISKは?」

「あれだけです。はい。全部、時臣が管理していて——」

ガルツチ side

いやあ、派手なパーティーのおかげで、食糧が結構無くなっちゃったな。しかし、鈴美さんホントに凄かった。いやまず、それを覚えることが出来た僕と未来も凄いけど、あの力、凄まじいよ……………。

因みに僕は、あの時未来の模擬戦で貰った次元 i P h o n e を使って、音楽を聴いていた。

聴いている曲は、『絶望性ヒーロー治療薬』という曲で、ホントに踊りたくなるほど気に入ってる。

さて、とりあえず食糧はこれで十分だな。しかし、エニグマか。凄いよなあ、全部入りちやうもん。

そう思いながら、千夏レストランに到着し、料理人に渡そうとしていたとき、一人の少女が看板を見ていた。僕がそこを通り過ぎようとする、その少女が僕の裾に掴んだ。

ガルツチ「？」

???'「あの、ここの関係者ですか？」

ガルツチ「え？ええ、そうだけど？それが、何か？」

何だろ、この子なんだか、あのノアより強大な力、いやデイルーラーより強いんじゃない

ないのかと思ってしまうほどの力を感じる。

??? 「ここに、未来兄が居ますか!？」

ガルツチ 「……………はい?」

瞬間、この世界……………いやあの第零宇宙のところまで、カオスドライブが起こった。ちよつと待て、なんつった? 未来兄? え? ちよつと、なんだつて? 未来に、妹とかいたの? いやいや、それ以前に、士に妹とかいたの! え? え? おい母さん!

全王神 『ありのまま、今起こったこと話そう!! 私はいつも通りガルツチちゃんと未来ちゃん達を24時間ずっと見ていたとき、偶然滅茶苦茶きやあああわいすぎるうううおにやのこを見つけたと思つたら、未来ちゃんの妹だった!!』

何を言ってるか分かんないけど、私自身も何が起こつたのか、全くわかんなくなつちやつた……………。

流星の私も頭がおかしくなつちやう! 幻惑とか催眠とか超スピードとか、そんなちやちなもんじやないよ!

もつと恐ろしい片鱗を、いえ恐怖を超えてどう現せば分からないほどの片鱗を味わつちやつたわ……………。』

だめだ、母さんですらポルナレフ状態になつてる……………。おい士!

士 『理解不能!! 理解不能! 理解不能理解不能理解不能理解不能理解不能理解不能理解』

うーん、でもホントに何者なんだ？可愛いを除けば、なんだか凄い力を感じる。しかも鈴美さんと同じ力も……………。

イフ、この子は一体……………？

イフ『分からん、それ以上に此奴、全ての力を備わってるかのようなものを持つてる。おそらく、土や全王神、そしてTOAAという者を超えているやもしれない。』

?ーん。チートおん。

いや、チートを超えた理不尽すぎるチートやないか。とりあえず未来が終わるまで、待つてるとしようとしたら、丁度未来が出てきた。

ガルツチ「む、迎えに来たよ。未来。」

未来「あ、ありがとうガルツチ。ん？その子は？」

???「未来兄いいい！会いたかったああああ!!!」

未来「ファ!?え?え?この子誰!？」

ガルツチ「何でも、未来の妹だとか何とか……………。おっと、超音波は勘弁だよ?と
りあえず、先ずは一旦帰って、状況整理しよう。」

未来「う、うん。」

後から簪達も戻ってきて、未来の妹と名乗る謎の少女を見て、滅茶苦茶可愛いと言いつながら鼻血をドバツと出しながら、幸せな顔をして気絶した。そのまま乗せて、千夏ア

ジトに到着した。

悔しいけど、この子フラン達より可愛すぎる……………。ううう……………。

—千夏アジト—

んで、到着し、皆に見せるや否や、その子を見た瞬間、鼻血をドバツと大量にぶつかられ、幸せな顔をして気絶した。

いやさ、正直ここまでだとは思わなかったんだけど……………。

もう一度、この子の姿を見ると、まさしく美少女らしい女の子で、海のように凄く綺麗な青色のロングヘアで、誰からも魅了してしまうほどの澄んだ緑色の目をしていた。

だが、この子ホントに何者なんだ？可愛すぎるのを除いて、この子凄まじい程の力を持ってるし……………。

一見一般人からすれば、普通の美少女だけど、僕からの視点だと、なんて言うか……………。神々しい程のオーラを放っている気がする。

ガルツチ「とりあえずだけど、皆起きて。先ず、君は何て言う子なの？」

そう言うのと、待つてましたと言わんばかりに、机に乗り、ドヤ顔をしながらこう言った。

??? 「よくぞ聞いてくれた！私は、未来兄の妹で、時空一の美少女アイドル！全知全能で、絶対無敵、完全無欠のおおおおおおおおおおおおおおお！」

ガルツチ 「こら、調子に乗らない。あと普通に紹介しろ。そして、机に乗らない。」

??? 「え？そんなの？」

どこが完全無欠だ……。常識すらぶつ壊れてんじゃねえか……………。

ガルツチ 「とりあえず、僕の膝の上に座ってなさい。」

??? 「はい。」

全員 「さり気なく膝の上に座らせた!？」

未来 「何だかんだ言って、ガルツチも可愛がつてるじゃん……………」

ガルツチ 「……………。／／／／／／／／／／／／／／／／」

言わないでよ未来、恥ずかしいんだから……………。

??? 「じゃあ普通に言うけど、私は『門矢愛花』っていうの。未来兄やガル兄を見つけるのに、凄く苦労したからね。」

ガルツチ 「いやまず、僕未来に妹がいたなんて知らなかったけど……………」

未来 「いや、それだったら僕もただけど……………」

ガルツチ 「士の奴も、滅茶苦茶動揺しまくってたよ?」

未来 「デスヨネ……………」

何なの皆!?!目がヤバすぎるんだけど!?!

愛花「ねえ、兄に……………」。

ガルツチ「?」

愛花「私のこと……………、好き?」

あ、もうこれ勝てないや……………。アラヤも鳳凰もりサも、この子の魅了に負けちやつてるし……………。一言言えば、今ので……………。理性が……………ぶっ壊れちやつた……………。

母さん、少女には………勝てなかつたよ。
その後愛花を一日中滅茶苦茶可愛がった。

t o b e c o n t i n u e d
→

登場人物2

ジャック・マッドネス・クリムゾン 不明（見た目的に26歳） 2月27日生まれ
性別 男

身長：170cm 体重：65kg

CV、中村悠一

種族：龍族（零の龍神）

髪の色：バニラ

目の色：深紅色

クラス：アサシン・バーサーカー

属性：混沌・悪

ステータス 筋力：SSS／耐久：B／敏捷：EX／魔力：EX／幸運：C／宝具：？

ガルツチのもう一人の人格。と言っても、都合よく憑依した人格とも言っても良い存在。生前の頃の記憶は覚えているが、どういう訳か自分の名前を覚えていないように、ガルツチが付けた名前で呼んでいる。

かつてジャックは、『零の龍神』の一族の一人なのだが、とあるきつかけにより亡くなってしまっても、ガルツチが転生と同時に、ジャックも転生する際に『鋼の錬金術師 Full Metal ALCHEMIST』に出てくる憤怒の罪『ラーズ』のマスターとして活躍していた。

それからしばらくは人格だったのだが、鈴美と出会った瞬間、同じ一族の力を感じる。同時に、どこか妹の面影が見えるらしい。

殺人鬼とも呼ばれているらしいが、根っからの悪人ではない。そして、ガルツチが男である未来と付き合っている事に関しては、最初は驚きを隠しきれなかったのだが、今ではすっかりと受け入れている。

生前の頃の力は、あの無の神ことラヴオスを一撃で倒せるぐらいの力を所持しているらしい。

門矢愛花 不明（見た目的に10歳） 誕生日不明 性別 女

身長：134cm 体重：35kg

CV、豊崎愛生

種族：不明

髪の色：紺碧色

目の色：エメラルドグリーン

クラス：不明

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／幸運：不明／宝具：不明

未来の妹と名乗る少女であり、今作のキーパーソン。完全無欠と自称しているが、実際はどこか常識が抜けているところがある。

万人には魅了してしまうほどの美少女で、少し見るだけでハートを射抜かれ、話し掛けるだけで鼻血が大量に出たり、密着するだけで理性蒸発させてしまうほど、可愛らしい少女。

未来達ですら魅了してしまうのだが、ガルツチは可愛さ以外の『何か』を感じ取っていた。

そして、イフからは『全ての力を備わってるかのようなものを持つてる』と感じ取つたらしく、どうやらデイルーラーの門矢士やウルトラマンノア、そして全王神、TOA Aより強いらしい。

名前無し（全王神） ∞歳（見た目と言語的に7歳？） 誕生日不明 性別 女（時に男にもなる。）

身長：不明 体重：不明

CV，豊崎愛生

種族：神

髪の色：不明

目の色：不明

クラス：なし

属性：混沌・善

カテゴリー：全

ステータス 筋力：|／耐久：|／敏捷：|／魔力：|／幸運：|／宝具：∞

虚王魔神であるガルツチを産み、あらゆる人を転生させた、女の子っぽい神様。もの凄く破天荒な上に、色々と暴走しまくってるが故に、ガルツチに悩まされている。（本人は全王神が母だと知るまでは、何があつたかさえ分らない。）

何でも出来てしまったが故に、弟にも神々にも界王達にも界王神達にも破壊神達にも、存在しない者として扱われていた為に、孤独を感じていた。

その為、全王神から転生させてくれる場合、神々を脅かすものでも、世界を滅ぼせるような力でもどんな物でもあげてしまう。

馬鹿なことをやれば止めたりはするが、基本口出しにはしないように、過保護過ぎるところもある。

転生させた人達、特に未来とガルツチは24時間ずっと見ている。しかもガルツチには何時でも念話で会話することが出来るが故、偶に殴られる事がある。(特に死ぬ間際のところで邪魔された時には、気絶させられる程の拳が飛んできたこともあった。それでも感謝はしているが。)

門矢士 20歳 3月20日生まれ 性別 男

身長：182cm 体重：63kg

CV、井上正大

種族：人間

髪の色：茶色

目の色：黒色

クラス：グランドローラー・グランドライダー

属性：混沌・善

カテゴリ：調和

ステータス 筋力：EX／耐久：A＋／敏捷：∞／魔力：∞／幸運：C／宝具：∞

門矢未来の兄で、元仮面ライダーディケイドでもある。現在は仮面ライダーディールーラーとして生きていて、時々未来のところに行くことがある。

折檻したのか、未来だけでなく、ハーレム要員（オフィス、本音、簪）には嫌われている。

自分は完璧だとかかなりの自信家で、誰に対しても尊大な態度を取る俺様キャラだが、襲われている人を体を挺して守るなど、熱いハートも持ち合わせる。口調や仕草に癖が多い人物で、物事を何か比喻したアメリカンジョークをよく口にする。

全王神や束と話しもすれば、趣味でもある写真撮影もする。しかも何故か知らないが、ガルツチと念話することが可能。

実際ガルツチの存在は、虚王魔神の頃から知っているのだが、唯一完璧の士を打ち破ったのもガルツチだった。

そんな完璧な士でも、笑いのツボを押されると、身動きが取れなくなり滅茶苦茶笑い出してしまう、その事をきっかけに未来に知られてしまったため、押されなにか心配している。ぶっっちゃけガルツチにも相当恐怖しているようで、笑いのツボを押されまくられながら、愉悦顔をするのではと思っている。というか天敵はガルツチと光夏海だけである。

第19話 零と全

|
???

風龍 side

士「風龍、何を読んでるんだ？」

風龍「ああ、調べもんさ。『零の龍神』について、色々調べてたらさ、面白いのがあったんだ。」

葵連「面白いの？」

皆は僕が読んでいる本、『零と全を持つ龍神王』を見せた。

士「なんだ、これは？」

風龍「多分皆は、『零の龍神』の章だけは知ってるだろうけど、実際は他にも居るんだ。例えば『全の竜神』。零を相反する全の竜の神様とも呼ばれていて、この者らも同様、居なくなってる筈なんだ。」

イリア「筈って、貴方曖昧すぎないかしら？」

風龍「鈴美みたいに、子孫を残して可能性もあるって事なんだ。だから、全の竜神だって、子孫を残してるってのも、ありえるだろ？」

葵連「確かにだな……………。って、うん？なんだこの龍は。」

風龍「……………こいつか。おそらく、全王神と同等の力を持つてる龍神の王。『零と全の龍神王』と呼ばれる奴だ。」

ただ、姿的に何故か幼女姿。どういうこっちゃな。

風龍「伝説では、全王神と全面戦争を仕掛けた事もあり、『第零宇宙』と『最終宇宙』の民や兵士達は、どちらが滅びるまで戦っていたそうだ。だが、ある日『虚数宇宙』と呼ばれるものが、そのどちらも戦争を仕掛けるのを見て、全王神と龍神王は手を組み、虚数宇宙と戦い、勝利したらしい。が、龍神王は虚数宇宙との戦いにより、疲弊していて、全王神はこれ以上犠牲を生ませないために、同盟を組んだらしい。それ以降の龍神王の姿を見た者は、全く居なかったそうだ。」

士「……………龍神王か。」

風龍「まあ、全面戦争の原因は……………これは呆れてものが言えない物なんだけど……………」

葵連「知ってるのか？」

風龍「実は、異次元の人間と呼ばれて間もないとき、一度龍神王と出会ったことがあってね。んで彼女らの全面戦争の原因が……………、『マンガープリン』の奪い合いからだとか。」

皆はそれを聞いて、（。D。）ポカーンってしちやったよ。そりやあそうだろ、プリンの為に全面戦争を起こしたなんて、呆れて物が言えないだろうよ。

むしろそれにのった皆もどうかと思うけどね。

風龍「まあ、忘れろ。彼女らの名誉の為にね。」

2人「「そうする。（。|・;）」

しかし、龍神王の奴……………今頃どうしてんのかな？

s i d e C h a n g e

??? |
??? |
side

??? 「ほう、ここに来たと言うことは、転生しにきたということか。」
誰かの声でした。男なのか、女なのか、老人なのか、子供なのか、全く解らない。
だが解るのだ。それは、自然の摂理すら超越する存在。

??? 「我は、お主の望みを叶えてやろう。」

「貴方は？」

??? 「我は神では無い。そしてお前達の言う宇宙人でも、メタヒューマンでもない。お前の好きなように呼んで良い。」

「じゃあ、シエンロンで。それで、転生ですか？」

??? 「そうだ。我は転生させることが出来る。お前が望めば、転生する——」
「いえ、興味ないです。」

??? 「ファ？」

「そもそも私、転生したいなんて思いません。私がやったことは、ただの復讐ですし、地獄で永遠と供養する事にします。」

??? 「……………」フルフルフルフル

あら？何で震えて……………？

??? 「もう……………!!!折角全ちゃんのシリアスモードを真似して神様っぽく言ってやったのにいいいい!!!此処はあれでしょ! 『ありがとうございます!!特典貰って楽しく転生人生送ります!』って、言うもんでしようがああああ!!!」

あれ？なにこのシエンロン可愛い。キャピキャピとした女の子みたいな喋り方になってるし、っていうか全ちゃんって誰？

??? 「まあ私は、この転生をしたくてしたくてウズウズしてたんだもん。というか全ちゃん狡いい！私だって、最強の転生者を作りたいもん！ニヤアア!!」

「知りませんよ、そんなこと。そもそも私は——」

??? 「そうプリプリと怒っちゃやーよ。君自身は如何したいの？転生して好きなように生きたいと思わない？ You, 転生しちやいなよ。」

「しません。そもそも私は罪人なので、地獄に行かなきゃならないので。」

??? 「そんな必要ナツシング！たとえ皆が地獄に行けと言われても、私は許しちゃうよ

〜！」

「だからって、私がやったことは——」

??? 「それに、君自身はそう願ってる。解るんだよ。さつきから目の奥が何だか悲しそうにしていたし。」

「関係ないで——」

??? 「あつるもーん!! こうして出会い、そして転生するしないの話をしている。此だけでも充分関係があるよ〜!!」

「煩い！ 私に何が——」

??? 「ほら、もう泣き始めちゃったじゃない。辛かったよね？ 寂しかったよね。望みが適って欲しかったよね。でももう良いよ。最期だし欲出しちやえ！」

「……………ホントに、ホントに私が望んだ生き方に、なれるの？」

??? 「勿論!! さあ、どうする？」

てつきり、私がやったことは、許されない物だと思ってた。私の友達が、あのいじめっ子を殺されてしまって、それから私は、そのいじめっ子に復讐するために、殺人に手を汚してしまった。おかげで、私は警察に捕まり、それから死刑にされてしまい、世間を許せなかった。

何でいじめっ子を、そうまでして生かしたいの？ 先生も親も、誰も信じない……………。

いじめっ子さえいなければ、あんな事にはならなかったのに……………。
でも、どうせ最後になるぐらいなら、転生でも何でもする！

「お願い！転生させて!!」

??? 「待つてました！任されました!!」

変わろう、二度とこんな思いをしないように！

??? 「それで転生先だけど、全ちゃんが作った世界に行つて、全ちゃんの転生者や息子と出会つて貰うよ。」

「その全ちゃんつて、誰なの?」

??? 「全王神つていう、私の友達なの。あっちも転生してくれるようで、今じゃ3人も転生したこともあるんだよ。」

「そうなのですか……………」

??? 「それで、転生する際には特典が与えられるんだ。神々を脅かすものでも、世界を

滅ぼせるような力でも良いよ？」

「待つて下さい、そうなると貴方が危険では……………」

「かもね。でも放っておけないの。全ちゃんも昔、誰からも存在しない者扱いされていたんだ。何でも出来るってだけで、忌み嫌われてね。可哀想だと思つた私は、話し掛けて、一緒に寄り添つてあげてたの。それからかな？友達になつたの。偶に喧嘩もしちやうけどね。」

神々の喧嘩つて、私達からすればはた迷惑な気がする……………」

「うーん、何でも良いですよね？」

「うん、いくつか持つても構わないよ。」

「だつたら、先ずは『東方Project』の『全能力』を扱えるようにして、全部のスペルカードを使えるようにして下さい。」

「ほうほう、まだある？」

「fateシリーズの全宝具、そのスキルも扱えるようにしたいです。あと、不老不死、完全生命体イフのような無限進化が欲しいです。」

「なる程。イフちゃん人気ねえ……。そういえば、息子も不老不死を持っていたわね。後は？」

「自分から戦いたいので、格闘や剣術、色々とお願ひします!」
??? 「OK! こんな感じかな?」

〈東方 project〉

『全スペルカードを同時に使用できるようにする』『紅魔郷からの全員の能力を扱える』

〈fate〉

『全英霊の好感度は最大値』『全英霊の宝具、またはスキルをEX（狂化は使用する場合のみ）』

〈無限進化〉

『完全生命体イフのような力を持ち、あらゆる能力を得る』『肉体強化のため、不老不死』
その他諸々

「自分で言うのもなんですが、チートですね。」

??? 「そうでしょそうでしょ? 因みに全ちゃんの転生者も皆チートだよ。」
「出会ってみたいですね……………」

??? 「それじゃ、早速転生させるよ。全ちゃんにも、連絡入れるから。」

「分かった。」

??? 「行ってらっしゃーい！」

私は、「扉を潜る。此処から変わろう。私は、私の人生を歩むんだ!!もう二度と、あんな思いをしないために！」

side Change

龍神王 side

さてさて、あの子は無事転生したようだね。早速全ちゃんに連絡しよう。♡

??? 「もしもし全ちゃん！」

全王神 『あ、龍ちゃん久しぶり〜！元気だった？』

龍神王 「うん！もうアルティメットファイバーしたくなるぐらいだよ〜！」

全王神 『それでそれで、何か用？』

龍神王 「全ちゃんが作った世界で、私が出した最初の転生者を出したよ。」

全王神 『おっ!! って事は、未来ちゃんやガルツチちゃん、あと英竜ちゃんと出会おうんだね!! 何て言う名前なの？』

龍神王「その子はね、『神風深雪』ちゃんっていう、滅茶苦茶可愛いおにやのこなの！」
全王神『えええええ!!羨ましい!!私も会いたいなあ……。』

龍神王「大丈夫、息子ちゃんとみつくんと出会えば、自動的に見えるから！」
全王神『ヒヤッホー!やつぱり。』

龍神王「可愛いはああああ！」

「『ジャステイス!!!!』」

sideChange

—千夏アジト—

ガルツチside

ガルツチ「ツ!？」

愛花「如何したの?兄に。」

ガルツチ「何故か、一瞬寒気がした気がする……………」。

未来「いや当たり前でしょ……………」。

君が『大豪雪』を呼び起こしちゃったからだよ。」

仕方ないだろ!? 愛花が可愛すぎるんだから!!

ガルツチ「未来だって、楽しんでたじゃん。」

未来「まあ、確かにね。でも君の結界凄いな。アジト全体で護られてるんだもん。」

英竜「私もお邪魔させてしまったが、確かに凄いな。」

ガルツチ「まあ、雪が解けても沈まないようにした母さんは、凄いいんだ。性格がアレだけど……………」

全王神『酷い！何でガルツチちゃんはそんなに冷たいの？ツンデレなの？』
ちよつとは僕の苦勞を考えろ……………」

藍「それにしても、この子可愛いねえ。」

未来「でしよ〜？」

簪「それに、未来の妹だし〜。」

うーん、でもやっぱりその力は気になるよな。全王神でさえ超える力かあ……………」

全王神『あ、そうそう。未来ちゃんと英竜ちゃんに伝えて。龍ちゃんの初めての転生者が、この世界にいるって。』

え？つていうか龍ちゃん？

全王神『あ、そういえばガルツチちゃんは知らないんだっけ。私の友達に、龍神王っていう神様がいて、友達なの。』

嘘〜ん。全く知らなかったんだけど……………」

全王神『それで、名前は『神風深雪』ちゃんて言う、未来ちゃんみたいにすごい可愛く、ちよつと英竜ちゃんと似ているって感じかなあ？』

マジですか……………」

全王神『んじや私、強化で忙しいから皆に伝えてねえ。』

丸投げされた……………。でも強化って、一体……………。

未来「ガルツチ?どうかした?」

ガルツチ「母さんから連絡があつた。何でも、全王神の友人からの転生者が、この世界にいるって。」

英竜「なんだって?」

藍「因みに、どんな人ですか?」

ガルツチ「可愛らしさは未来だけど、前世に関しては英竜と似てる感じかな?名前は『神風深雪』という人らしい。」

未来「深雪か……………」

どんな奴だろう……………。会ってみたいな。

side Change

—ロスサントス—

神風side

クシユン!うー、まさか豪雪だなんて思わなかつた……………。早く温まる場所

……あ、もこたんの能力で、自分を暖めればいいんだ。
神風「さて、全王神がいう転生者は何処かな？」

t o b e c o n t i n u e d
◇

第20話 幻影と破壊者と能力者

—ロスサントス—

深雪 side

さて、先ほどの豪雪が嘘のように消えたらしいけど、なんだったんだ？一度G T A V やったことはあるけど、確かチートコードの一つに、何かがあった筈なんだよねえ……。

深雪「でも何処に居るの？全王神が言う転生者は。」

とりあえずナズーリンの能力で、探してみるけど……、駄目だね。何かと警戒しているのか、それとも全王神の息子という人が結界を張ってるかのどつちかだね。

まあ此処、G T A Vの世界だし、善悪なんてないのも当たり前だもんね。

深雪「だったら、自力で探すとしますか……。」

一応黄金律スキルでお金には不便がないけど、金銭感覚が狂っちゃうと駄目だし、必要な時以外は使わないで置こう。

でもまあ、ホントに何処なんだろ。まさか、その転生者は買い物に行ったりして……いやまさかね。

深雪「ん？」

あれ？なんだか揉め事が起こってるわね。ちよつと耳を澄ませてみましょう。

『ザツケンナコラーツ！』

『スツゾコラー!!』

………何でニンジャスレイヤーの忍殺語を使ってるの？って、あーあ喧嘩が始まっちゃったよ。皆迷惑になると思うし、止めてあげようかな。咲夜の能力で、お仕置きしない。

まあ、お決まりの台詞は、ちゃんとと言わないとね。

深雪 『咲夜の^{THE WORLD}世界』！時よ止まれ！』

そして、世界は止まり、殴り掛かった男も止まった。さてと、先ずはこの男は、ゴミ箱のところにに入れて、そしてこの人は袋に詰めて、ゴミ収集車にいれてつと。これでいいかしら。

深雪 「そして時は動き出す。」

動くと同時に、これを見ていた皆は滅茶苦茶びつくりした。

『アイエエエ!!?』

『え!?あ、ありのまま、今起こったことを(略)』

『コワイ!』

『ゴボボーツ!』

だから皆何で忍殺語知ってるのよ。って上から2番目、絶対にポルナレフでしょ。でもまあ、転生者ならこれぐらいは知ってるでしょうね。って、大半の人失禁してるんだけど……………。いやまって、数人だけ何でイってるけど……………。

深雪「……………今の内に去りましょう。私は、何も見ていないって事で。」
私は何も見ていない。そして、何もやっていない。これ見る皆、良いね？

sideChange

ガルツチside

今日は愛花のために服を買いに、ロスサントスに来ました。何しろあの子、なんか知らないけど、白いワンピース一枚しか着てなくて、後はまさかの下着つけてなかったんだし。

未来「まさか、下着着けてなかったなんてね。」

ガルツチ「うん、僕もそう思った。」

もし僕達じゃなかったら、強姦魔に襲われてハイライトが消えてかつ孕ますまで犯し尽くすでしょうね。エロ同人誌みたいに。いやこれ自体が、エロ同人小説だったな。そもそも、この小説、名前変えたとは言え続編っぽい感じだし。

全王神『メタイ、さすがガルツチちゃん。メタ話を平然とやるわね。』
デッドプールと一緒にするなよ？

そういえば、あの場所妙に騒がしいな……つて、あれ？何であの人ゴミ箱に入ってるの？

そして、何であの人はゴミ収集車に入ってるの？

何で大半の人は失禁してるの？

最後に何で、少数の人らは絶頂してんの？

ガルツチ「……………何があつたんだ？これ。」

未来「うーん、なんだろうね……………」

愛花「ねえねえ、次は何処なの？」

ガルツチ「お、おいおいちゃんと座つて！見えちゃうつて。」

とりあえず、後回しつて事で、今は愛花の服と下着を買わないと……。つていうかあの時下着を着てないつて、大丈夫なんかよ。

愛花「私はこのままで良いと思うなー。スースーして、ちよつと気持ちいいと思うけど。」

待て、それはそれで如何なの!?とりあえず、急いで下着と服を買わないと、最悪ワンピースを脱ぎ捨ててしまう気がする………………。いやそれだけは、絶対に避けな

いと。

ガルツチ「未来、ちょっと飛ばすよ。愛花がとんでもない事やらかす前に！」

未来「ラジャー！」

ガルツチ「ハイパーブースターオン！」

つてな事で、3分後服屋に到着し、子供服のところで似合う服を探し回った。途中で愛花が店員に下着を見せないパフォーマンスを仕掛けていたのを止め、下着のところで急いで似合うのを探し、そして見つけて買った。今回はおしやれに余裕がなかったために、実用性重視になった。

まあ、仕方ないか。下着がないって言う非常事態だったし……………。

未来「何とかなったね……………」

ガルツチ「うん、きわどいとこだった……………」

まあ、後はマルフォイに頼んでみようかな。うまくいけば、下着も作ってくれそうだし。

ガルツチ「さてと、後は帰るだけだな……………」

全王神『あ、そうそう。報告があるよ〜！』

ガルツチ「ん？」

全王神『天ちゃんとおつくくんが作った、新たな世界が出来上がったっていう報告があ

るよ〜!』

新たな世界?

全王神『でもちよおつと問題があつて、まだ時代が決まつてないの。ううん、一応現代風なんだけど、時代の設定がまだっぽいんだよねえ。一応G T A Vの和風バージョンつて感じ。』

ガルツチ「G T Aの日本バージョンつて言えば、『龍が如く』シリーズじゃないんですか?」

未来「あ、確かに。つていうか、龍が如くやつてるの?」

ガルツチ「うん、0から6まで全部。」

未来「つていうか、ラジオを弄つて連絡してるの!?!」

全王神『E x a c t l y!
その通りで御座います』

凄いな……………、ホントに。

ガルツチ「んで母さん、それで如何すればいいの?」

全王神『そこで!ガルツチちゃんには時代を決めて欲しいの!月夜見の継承者として!』

ガルツチ「……………虚王魔神かつ月夜見の継承者つて、なんか都合が良すぎる気がするが……………。まあいいですよ。その前に、英竜達にも話し掛けますんで。」

全王神『はいはい！でも、深雪ちゅあんも忘れないでね〜！』
ガルツチ「はいはい。」

つていつても、何処に居るってんだ。如何見つければ良いんだ？

未来「うーん、ヒントになるのは……………あの場面だね。」

ガルツチ「え？あの場面って、ゴミ収集車とゴミ箱に人が入ってたこと？」

未来「うん、他の人が見てたとき、大半失禁してるでしょ？酔っぱらいだったら、不思議に思わないけど、失禁する事だと思おう？」

ガルツチ「……………あ、確かに不自然過ぎる。つて事は……………」

未来「その場に転生者がいた可能性がある事だね。」

ガルツチ「時間止めの能力者か、またはスタンド使いかのどれかだな……………」

でもスタンド使いの気配はない。しかもこの存在感ない力、恐らくは気配遮断かも知れない。それもEX並みの……………」

ガルツチ「イフ、転生者の気配探知をEX以上にあげて。探し回るよ。」

イフ「分かった。」

さて、一体何処にいるのかな？

side change

深雪 side

深雪 「ご馳走様。お金はここに置いておくね。」

さてと、昼食を取ったことだし、もう一度ナズーリンの能力で……………って凄い反応!!
深雪 「え?どの辺りなんだろう?」

何で急に?とりあえず反応がするところに行こう!!

って、あれかな?なんだか凄すぎる反応があるけど……………。

『ガチャ。』

あ、開いたって事はこの人達だわ……………。っていうか、サイドテールの女の子に、男装した女性?そういえば、あの白いワンピースを着た子……………なんて可愛いのかしら。

深雪 「あの、ちよつといいですか?」

??? 「あ、もしかして君が転生者?」

知ってるって事は、やっぱり転生者なのね。

深雪 「そうよ。そう言う貴方も?」

??? 「まあそうだね。って事は、君が神風深雪で良いね?」

深雪 「ええ、そうとらえていいわ。貴女はなんて言うの?」

??? 「僕はガルツチ。全王神の息子で、かつて虚王魔神と呼ばれていた。こっちは門矢

未来。君と同じ転生者だ。」

深雪「その可愛い女の子は？」

未来「僕の妹らしい子は、門矢愛花っていうんだ。」

愛花「宜しく、深雪お姉ちゃん。♡」

『ボビュルルルルルルルルルルルルルルルルウウウウウウウウウウウウウツツ
!!!!!!』

何これ……………、可愛すぎる……………。もう、ロリコンで……………いいかも

……………。

side Change

未来 side

えー、鼻血出しながら気絶しちゃったよ……………。妹？が可愛いから仕方ないけどね。

未来「とりあえず、運ぼうか。」

ガルツチ「そうだね。」

それから暫くして、千夏アジトに到着し、英童達が待っていたときに球磨川禊という人が現れていた。

t o b e c o n t i n u e d
◇

第21話 今起ころうとしてる世界

—千夏アジト—

ガルツチside

??? 『やあ、初めましてだね。』

そこにいたのは、学生服を着た青年の姿だった。そして、まるで怯えている鈴美もそこにいた。

念のために殺意のオーラを放つ。

ガルツチ「誰だ？あと鈴美さんに何をしようとする。」

未来「その人は球磨川禊。殺意は収めて、ガルツチ。禊、その人を離して。」

禊『はいはい。』

ガルツチ「……………分かった。」

未来がそう言うのなら、収めておこう……………。

未来「何か用？」

禊『うん、予想通り『零の龍神』の力、解放してるね。』『なじみの言うとおりだ。』

ガルツチ「なじみを知ってるの？」

禊『「うん。」』それに彼女が目覚めた以上、どうやら動き始めそうだしね。』

深雪「動き始めるって、どういう事？」

禊『「運命の予言者」である、イエス・キリストから、あることを告げられたらしい。』
『零と全が蘇る時、再び歯車が動き出す。』『新たな無の神、いや、虚神が虚数宇宙を目覚めさせ、再び全てを交えた戦いに赴く。』

ガルツチ「無の神!？」

深雪「え?あのみ。状況が読み込めないんだけど。」

ガルツチ「かつて、無の神こと星の破壊者ラヴオスは消滅したと思われた。結構やばい状態だったんだけどね。」

未来「でも禊、虚神って?」

禊『「恐らく関係してるのは、その妹と名乗る少女じゃないか?」』『ガルツチとイフは気が付いているらしいけど?』

未来「そうなの!？」

ちよつとではあるけど、まあそうだな。

ガルツチ「どうやらその愛花って子、あらゆる世界の全員の能力が、この子に備わってるんだ。しかも全王神よりも、デイルーラー士よりも強大な力を……。」

未来「嘘ーん、チートすぎない？」

深雪「私よりチートがいたなんて……………」

ガルツチ「だが、その子と一体なんの関係があるの？」

禊「それは、君達次第。』『それと鈴美、未来、ガルツチ、英竜、藍、夜神、土織。そして、龍神王に出会い、転生した者。君達にもまたその運命と闘う羽目になる。』」

おいおい、またかよ……………」

ガルツチ「何で運命は僕達を楽にしてくれないんだ……………」

禊「『文句を言わない。』『それに君の責任じゃないんだ。』『だけど、最も重要な人物は……………』」

すると禊は、僕を指差した。いや、正しくは……………」

ガルツチ「ジャックが？」

クリムゾン「……………俺と関係する、つて事は、お前のいいたいことが分かったぜ。』」

ガルツチ「ジャック？」

クリムゾン「ガルツチ、済まないが千夏アジトにいる全員に、この場に集めてくれ。』」

数分後……………

僕はジャックの言うとおりにし、フラン達と簪達、そして英竜達を呼び出し、大広間に集ませた。

そして、禊はこれから起こることと、運命の預言者が予言した事を全て話した。そして、それに関係するジャックが、久方振りに姿を現した。

クリムゾン「ふう、久々だな！ここに出られるのは。」

簪「ええ!? 誰!?!」

クリムゾン「簪達には、初めましてかな？俺はジャックとも呼んでくれ。鈴美の伯父だな。」

本音「へえ。伯父なのに、龍っぽい姿をしてるんだね。」

クリムゾン「俺達『零の龍神』は、いや龍族は皆この姿さ。鈴美は人間寄りだがな。」
鈴美「そ、そうだったのね……………」

クリムゾン「とりあえず、今回の元凶を話すが、恐らくは俺の兄貴『カオス・ゼロノス・デストラクション』。つまり『零の龍神』が、全てを掌握しようとしている。」

英竜「ゼロノス?」

クリムゾン「あの野郎は相当な野心家で、俺や妹の事なぞ眼中になかった。彼奴はいつも、『いつかは全てを越え、全てを掌握してみせる！』って言ってたし、俺は兄貴と一緒にいるのが嫌だったんで、妹と一緒に出て行ってやった。」

それからは、ロストエンドの頃の記憶通りかも知れない。暫くして、僕はジャックに出会い、七つの大罪の世界で暫く居たときに、妹が殺されたと言い、ジャックは怒り狂い、七つの大罪の騎士に喧嘩を売った。だが、殺したのは別の七つの大罪の奴だったことを知り、そいつの復讐を手伝い、見事撃破。

そして、ジャックとお別れして、僕は別の世界に出て、ジャックは妹を生き返らせるために、禁忌蘇生魔法を放つて、ジャックの命の引換に、妹を生き返らせ、ギルサンダーに頼み、この世を去ったと思われた。

クリムゾン「正直、彼奴がやろうとしてるのが、此処までとなると、もう見逃せねえな。だから、皆に頼みがある！」

『兄貴を、あの野郎の野望を打ち砕かせてやってくれ』!!頼む!この通りだ!」

ガルツチ「おいおい、何も土下座する事はないんじや……………」
未来「……………英竜達は？」

英竜「確かに、全王神様を超えようだなんて、許せない奴よね。いいよ、手伝ってあげる。」

藍「私に出来ることがあるなら、手伝います！」

白夜叉「偶には、こういう刺激的なものもほしいのう。」

レティシア「まあな。」

フラン「それに、今更過ぎるわよ。ジャック。」

こいし「そうそう、ここには強い味方がいっぱい居るんだもん。」

ガルツチ「深雪は、如何するの？」

深雪「私は……………」

クリムゾン「行きたくないなら、俺は構わねえ。強制でも何でもねえしな。」

確かに、いきなり来て、いきなりこんなヤバすぎる戦に飛び出させるのって、やっぱり心配だしね……………」

深雪「私、行きたい。二度とあんな思いをしないために。」

クリムゾン「悪い、恩に着る。」

ガルツチ「だから、お願いだから顔をあげてくれない？あと土下座はいいから。」

あかんな、どうも僕土下座は苦手意識がでるな……………。

未来「それで、其奴の居場所は？」

クリムゾン「分かんねえ。だが、『零の龍神』に対抗するには『全の竜神』の力を貸さなくちゃならねえ。其奴は俺達と同様、滅んじまつてるしな……………。」

未来「ううん、多分『囁告^{ラジエ}篇^{エル}帙』か『神蝕^{ベルゼバブ}篇^{エル}帙』で調べれば、きつと出て来ると思うし……………」

クリムゾン「甘く見ない方が良いで。『全の竜神』は、俺達よりもひっそりと住んでいやがるし、何より何も残さねえようにしてるから、情報を探すなんざ雲を掴むぐらいの可能性だぜ？」

それ、完全に手詰まりになるんじや……………ん？

ガルツチ「あつたわ。」

クリムゾン「あつたんかよ!？」

ガルツチ「うーん、確かに滅んでるって書いてあるだけで、それ以外は曖昧だな。恐らく、何処かの世界で生きてるはずだ。」

クリムゾン「マジかよ……………」

簪「んじやあ、暫くしたらこの世界に出るの?」

ガルツチ「千夏、お前は……………」

千夏「大丈夫です。そんなことだろうと、すでにドツペルゲンガーの準備は出来て
います。それよりもまず、天照大神様と月夜見尊様がお作りになられた世界の時代を――

ガルツチ「それなら、もう決まってる。『平安時代』から『鎌倉時代』で頼む。」

全王神『はいはい！天ちゃんとおつくんに伝えるねえ〜！』

気軽だな……………。

ガルツチ「まあ、完成するまでは、皆好きなようにしよつか。」

まずはあの2人が作った世界。舞台は平安時代の日本。だが、平安時代だが現代風。
銀魂みたいな感じだが、ギャグ要素は、多分母さんが作るだろうな……………。

ガルツチ「さてと、次に大事が決まっちゃったことだし、そろそろ物語も動き始めそ
うだな。

だが、僕は生き続ける。この幸せを、護るために！」

とりあえず、夜になったのは良いとして………。

4人「二何が一体如何したらこうなった?」三」

いやそもそも、何で来て間もない深雪さんとヤルの?そして藍達も乗り気だし、つて
いうか今更だけど、女性陣多くね!?なにこのハーレム!?

英竜「なあ、何がどうしてこうなったのだ?」

レティシア「私に聞くな。元より、フラン達が企画したのだから……………」

深雪「え?つていうか私、何時から脱がされたの!?

こいし「私が脱がせました。」

ガルツチ「ごめん、深雪さん。うちの嫁達が……………」

未来「何でもフラン達は、親睦を深めるために、乱交パーティーを始めたとか何とか
……………」

英竜「ええええええ!?!」

ガルツチ「マジですんません、うちの嫁達が……………」

愛花「それにしても、深雪お姉ちゃんのおっぱい大きいなあ……………」

ガルツチ「って勝手に揉んでるし!？」
んで、肝心の簪は……。やっぱペンもって、しかも露伴みたいに素早く書いてるわ……。

っていうか思うんだが、これリサ達には見せられないよね!?早過ぎるって!
まあ、寝ているから何も問題ないでしょ。多分……。

s i d e C h a n g e

アラヤ side

どうも、未来父さんと母さんの息子のアラヤです。実はちよつと眠らない事があるんです。

何故なら……………。

アラヤ「(この状況、如何すれば良いんですか!?)」

だって、鳳凰お姉ちゃんとリサお姉ちゃんの間で眠ってるんですよ!?!しかも、僕を抱き締めてるから、余計にドキドキします!

いえ、慣れてはいるんですが……………、一度エツチな本?つていうのを見て以来、凄くドキドキするんですよ!でも、リサお姉ちゃんはともかく鳳凰お姉ちゃんとしたら、近親相姦になっちゃいます!

うー……………、見なければ、こんなことにはならなかったのに……………。僕のアレが、大

変なことに……………。

どうか、お二人に気付かれませぬように……………。

t o b e c o n t i n u e d
⇩

第22話 深雪の過去

—千夏アジト—

ガルツチ side

ガルツチ「……………まさか、未来が性病に掛かるなんて。」

いやまあ、ぶっちゃけあれだけ出し過ぎたら、仕方ないよね……………。うーん、一応性病でも治す薬とかあるし、案外強力なんだよね。ってかさ……………。

ガルツチ「イフ、性病だけは何とかならなかったの？」

イフ「いや、治すことは出来るが、未来のは治す許容度を超えてしまい、治すことが不可能だったんだ。私がいなくても、なりはしないが……………」。

ガルツチ「結果、アジトがはみ出るほど出してたしね。未来の精子ただけ出してん……………。フェルグス・マック・ロイ並みの、いやそれ以上の絶倫なのかな……………」

イフ「私もそう思った。だが、お前もお前で凄いなと思うぞ？」

ガルツチ「？」

イフ「何しろ、未来の精液を1日足らずで片付けたんだぞ？真似できないぞ？」

ガルツチ「あー、イフ達は知らないんだっけ？」

イフは首を傾げている。それもそっか。

ガルツチ「サキュバス達がさ、時々でも良いから自分のでもいいから精液を取って、送ってもらえないかって言われてさ。その時僕の量は半端なかつたな……。このアジトどころか、この世界を覆い尽くすんじゃないかと思うほど、いっぱい出したんだよね……………」

イフ「お前もか……………」

ガルツチ「でも、性病にはならなかつた。」

イフ「おかしくね？身体感覚なくなつても、おかしくないだろ？」

ガルツチ「かもな。大体が風邪程度で済んじゃうから、逆に凄いよ。」

イフ「確かに……………お前の病耐性：反射でもあるのではないのか？」

ガルツチ「反射だったら、風邪なんて引いてないよ。」

イフ「確かにな。だが、気になるのだが……………何故サキュバスが？」

ガルツチ「ああ、実は最近、飲み物を開発してさ。その時に僕が抜擢したんだ。結果は、大成功。あらゆる風俗店での販売が開始された。その後は……………まあご想像におまかせします。」

しかし、未来のも人気あるとはビックリだな。……………ん？待てよ？そういえばとあるサキュバスから、こんな事言つてたな。

『それにしても、この精液。飲めば飲むほど、性病すら掛からなくなってきたわ。』

これ使えるんじゃない!! って、おや? 深雪さん。なんか暗い顔してた気がする……………。

イフ「行つて来い。大体が、お前の言葉で直るからな。」

ガルツチ「僕はカウンセラーじゃねえんだが……………」。

でも放っておけないし、一応追ってみるか。

sideChange

深雪 side

……………私、何してるんだろ。変わるために、転生してるのに……………これじゃあ

ガルツチ「深雪さん?」

深雪「はい!?!」

え? いつの間に私の後ろに来たの!?! あっちの方が気配遮断上手くない!?!

ガルツチ「あの、どうかしました？なんか、暗い顔をしてた気がしたけど……………」
深雪「あ……………」

嘘、生前の頃のポーカーフェイスが、全く通じてないの!? あ、さどりの能力だったら、分かつちやうか。でも顔で分かつたって事は……………」

ガルツチ「あ、訂正すると、君の目が、なんか暗かったからさ。僕、ポーカーフェイスしている人の対策のために、目で見てるんですよ。動揺してたなら、分かりますしね。」

深雪「そうですか……………」

ガルツチ「何か、ありましたか？出来れば、力になりたいけど……………」

深雪「いいわ、こんなの私一人で十分だから。」

そうよ、これは私だけの問題。こんなの、私だけで——

『ギユウウウウウウウ……………』

へ？何で抱き締められて……………？

ガルツチ「……………かつて、僕もそうだった。」

深雪「何が？」

ガルツチ「僕もまた、君と似たような事を思ってたんだ。『自分ならどうにか出来る。』『全員を守れるなら、この命捨ててやる。』ってね。でもさ、無理だった。自分を騙し続けても、何時かはボロが出る。でも、それを見せないように、ずっと隠れていたんだ。」

深雪「……………」

ガルツチ「辛かった……………。隠し続ける自分と、もう本音を言っても良い自分と葛藤して、何時も、隠し続ける自分が勝ってる。皆に悟られないように、ずっとね。今はもう辛くなくなっただけど、僕のような人を見ると……………。放っておけないんだ。だから、お願い。暗い理由……………。教えて。」

何でだろう、この人の声……………。聞いていると落ち着いてくる。それに、安心感がある……………。

深雪「……………。私の前世はね。」

ガルツチ「ん？」

深雪「普通の女子高生だったの。友達もいて、家族もいて、普通に、幸せに過ごしていたの。だけど……………。ある出来事によって、その幸せが無くなった……………」

ガルツチ「……………」

深雪「あるいじめっ子が、私の友達を虐めていたの。それも過激で、残酷で……………。そして、友達はいじめっ子に殺された。私は許せなかった。何も出来なかった私を、友達

を殺したいじめっ子を……………」

ガルツチ「……………復讐、したのか。」

深雪「ええ、だけどそれがいじめっ子の計画だった。でも関係なかった。友達の仇を取れば、それでよかったんだ。そして捕まり、判決で死刑が確定され、家族も会えないまま、牢獄にいたの。友達を殺したのは、彼奴なのに、復讐する顕現は、私にあるのよ！何で皆はいじめっ子に庇うのよ！私の友達を、殺したのに！！」

「そうよ！！悪いのは彼奴、私は地獄に行く覚悟で、其奴を殺したの！！彼奴が虐めなかつたら、どんなに良いことか！！」

ガルツチ「……………僕だったら、徹底的に殺すな。」

深雪「でしょ!？」

ガルツチ「いじめっ子だけじゃない。仲間も、庇う奴も諸共、復讐するかもしれない。二度と、誰もいじめを起ささないように、恐怖を植え付けるかも知れないな。」

深雪「え?……………ちよつと、何もそこまでしなくても——」

ガルツチ「僕はさ、そんな奴が許せないんだ。例え全員が許そうとも、僕は絶対に許さない。滅ぼしてやりたいね。」

深雪「何で……………、何でそこまで?」

ガルツチ「幼少期の頃、親父に裏切られた事があるんだ。お金がないからという、理

不尽な理由でね。後から嘘だつて分かったけど、でも僕にとつて、許せないことだった。だから、親父も母さんを殺して、家を燃やし、あてのない旅に出たんだ。おかげで、僕の心は壊れちゃったんだ。」

深雪「……………ごめんさい、思い出したくなかつたでしょうに。」

ガルツチ「ああ、あんな思ひは、二度と御免さ。俺だつて、許せないさ。同情じゃなく、本気でね。其奴がこの世界に居たら、残酷な殺し方してやるよ。」

深雪「う、うん。つて、ちよつと緩めて？ 苦しいから……………」

ガルツチ「ご、ごめん。感情的になると、偶に『俺』になつちやうんだよね。みつともないのに……………」

意外、私だけじゃない。友達の為に、いじめつ子に怒る人がいるなんて……………。

ガルツチ「復讐はいけないのは、重々承知かもな。許せないなら、それぐらいの仕返ししたつて、いいし。お前は間違つちやいないさ。」

深雪「はふう……………。//////////////////」

ガルツチさんがそういい、私の頭を撫で始めた。凄く優しく、暖かい手だった。

でもガルツチさん、ちよつと恥ずかしい……………。なんだか、顔が真っ赤になつちやいます……………。

ガルツチ「……………もう、大丈夫？」

深雪「うん、気に懸けてごめんね。」

ガルツチ「いいさ。放っておけないのは、お互い様っぽいしな。ホントは、優しい女性だから、笑顔を作らなきゃね。」

深雪「笑顔……………か。」

ガルツチ「そうさ。女性は、笑ってたほうが、可愛いからね。正直、僕が女の子っぽいって思われちゃってるけど……………。何で僕は女性扱いなの？おかしくねえか？」

深雪「……………気にしてたのね。」

ガルツチ「これでもね……………」

深雪「でも、そのサイドテール似合ってるよ。貴方らしいっていうか、なんて言うか。ガルツチ「なんか複雑だな……………。んじゃあ、僕はちよつとあるもの作ってくるから。」

深雪「分かった。」

私は手を振り、ガルツチさんは行ってしまった。

意外と、私みたいな人も居るものなのね。復讐なんてダメってしかるかと思ったのに、肯定するなんて、少し歪んでるからこそなのかしら？

フランちゃんやこいしちゃん、そしてイリヤちゃんを受け入れたのは、もしかしたら

.....。

だったら、今度は私が護らないといけないわね。

side change

ガルツチ side

深雪さんを慰めてから暫くして、僕はあの時未来が出した精液の分析をするため、バケツにあつた奴を小瓶に入れ、分析機で調べてみた。

ガルツチ「おいおい、ホントにこれマジで？」

一度人工で作つた卵子で、未来の精液をかけた途端、すぐに細胞分裂をし始めていた。それを100回やった結果.....。

ガルツチ「マジかよ。妊娠対策しないとこれ、確実に妊娠出来るじゃないか。」

それだけじゃない。分析した結果、なんとあらゆる性病を無効化させる効果があると

出た。更に、それを薬にすれば、それまで掛かった性病は治り、二度と性病には掛からない体質に生まれ返させる力を持つていたのだ。

ガルツチ「……………これは、未来に伝えないと！」

僕は急いで、未来に電話をかけた。

ガルツチ「もしもし未来？朗報があるんだけど。」

未来『朗報？』

ガルツチ「君の精液を調べてみたけど、どうやら凄い薬にもなれそうだよ！」

未来『え!?精液が、薬に？』

ガルツチ「一見信じられないけど、未来の精液には、大量のミッドカインに加え、あらゆる性病を無効化させる効果があるんだ。」

未来『嘘くん。僕の身体どうなってるの？』

ガルツチ「さあね。でも薬にすれば、それまで掛かった性病は治り、二度と性病には掛からない体質になるよ。」

未来『出来るのガルツチ？』

ガルツチ「魔法薬学の成績でSSランクを取った僕だぞ？作ってみせるさ。ただ、デメリットは、あるかな？」

未来『あー、やっぱりあるよね。どんなデメリット？』

ガルツチ「それはだな。未来の精子って、100%確実に妊娠出来るんだよね。それを薬にするって事は、相当な避妊方法じゃないと、確実に妊娠できるようになってるさうだ。」

未来『どうなってるの!?僕の身体!?!』

ガルツチ「未来……………、頼むから電話越しで大声は勘弁して……………」

未来『あ、ごめん。』

また目眩が来てしまったら、困るしな。

ガルツチ「とにかく、未来の精液。使わせて貰うね。」

未来『僕のだけで良いの?』

ガルツチ「うん。案外それだけで、作れそうな気がするからね。」

未来『時間は?』

ガルツチ「それは作ってからじゃないと、分からないからね。んじや、作り始めるから切るね。」

未来『うん。楽しみにしてるよ。』

ガルツチ「サンキュー。」

『♪』

さてと、作るのでしょうか。量的に、余裕もあるし、失敗したのなら、レイス達に協力

するってのも、ありだしな。

ガルツチ「んじやまあ、始めますかね!!」
t o b e c o n t i n u e d
→

第23話 性病を治す薬

—千夏アジト—

ガルツチ「……………出来たのはいいが、何故なのだ？」

僕は鍋の様子を見ると、オレンジ色をした液体が見える。材料は、勿論未来の精液。もう一度言おう。『未来の精液』。

それを入れて、攪拌し続けるが、結果は消滅。つまり失敗したのだ。どうやらそれだけでは完成は出来ないということになる。

だが諦めず、試行錯誤し続け、そして遂に完成した。が、気になる点があった。ガルツチ「何で、僕好みの『ブラッドオレンジ』味なんだ？」

そう。毎回思うのだが、薬というのは、基本苦いのだ。勿論甘めもあるのだが、問題がそこだった。

初めて魔法薬を作ったとき、カシマール先生に伝えると、喜んでいたが、少ししてから不思議な顔をしていた。

カシマール『ガルツチ君、完成させたのは褒めよう。だがなぜ、チェリー味なのだ？』
何故か薬の『味』を変えてしまうのだ。

カシマール『しかし、なかなかの高度な魔法でもあるな。味の変化魔法、本来なら超高度な魔法と呼ばれていて、扱う物も少ない。

これを使い、毒薬を盛ることも可能だ。言わば暗殺特化魔法でもあるな。味を変えるだけで、薬の効果に変化はない。この吾輩を驚かせたことに、50点やろうではないか。』

当時は喜んでいたが、今となつちや、ちよつと罪悪感が湧き出てしまう。

ガルツチ「でもまた消すのもなあ……。仕方ない、小瓶に詰めて、未来が帰ってきたら渡そう。」

一応効果は抜群。データで調べたら、永続的に性病には掛からない体質になった。まあ僕が飲んでも意味ないが、でも永続的は凄すぎる……。。

未来、ホントに君の身体どうなってるの？

本音「あれ？ガルガル君？何してるのく？」

ガルツチ「薬を作ってたんだ。二度と性病に掛からない薬をね。」

本音「えー！凄く凄くいい！一口舐めて良い？」

ガルツチ「あーちよつと——」

本音「ん？これって、柑橘系？」

ガルツチ「大雑把過ぎるだろ……。正しくはブラッドオレンジ味、僕の好きな味

さ。」

本音「へえ、それで私の身体は？」

ガルツチ「ちよつと待ってね。……………おー、成功だ。」

本音「ところで、材料は何に使つたの？」

ガルツチ「未来の精液。」

本音「……………ほえ？」

ガルツチ「もう一度言おう、未来の精液。」

うんまあ、普通かちこちになるよね。だって、未来の精液だとは知らずに舐めるなんて、多分気が付かないだろうしな。

本音「……………全部飲み干したくなつた。」

ガルツチ「おい待て!?!保存用なんだから!?!」

レテイシア「何の騒ぎだ？」

ガルツチ「レテイシア!濟まないが、本音を止めてくれ!未来のために作つた薬を、失わせるわけにはいかないんだ!!」

レテイシア「え?まあ、手伝うが。」

本音「聞いて!みつくんの精液で使われた薬なんだつて!」

レテイシア「フア!?!」

『バリーーンッ!!!』

ガルツチ「そのまま錬金！破れることのないガラスに変えよ！」
簪&本音「待てええええええええ!!!」

2人も追いかけるように窓から飛び降りようとするも……………。

『ビター——————ンッ!!』

あつぶねえ、間に合って助かった……………。

『スタツ。』

未来「……………ガルツチ？何で窓から？」

ガルツチ「あ、未来お帰り。薬を完成したのはいいが、あの2人がね……………。」

未来「(・。・;)」

ガルツチ「ほい、これが君の精液で作った薬だ。」

未来「あ、ありがとう。」

しかし、なんのためらいもなく飲むって、どうかと思うけど……。まあいいか。
 未来「これで、性病にかからなくなったの？」

ガルツチ「うん、永続的だから二度と掛からないよ。」

未来「よかった。でも、なんかみかんの味がするけど——」

ガルツチ「あ、それブラッドオレンジ味。僕の好きな味。」

未来「そつか。そういうえげさ。」

ガルツチ「？」

あれ、なんか妙に色目を使ってる気が——

未来「君の味は、どんなのかな？」

おい待て、流石にこの場は危ないって!!

未来「なんて冗談だよ。冗談。」

ガルツチ「洒落にならんよ………、凄くドキドキした………。／／／／／／／／／／

／／／

未来「それにしても、魔法薬学って凄いな。僕も習ってみたい。」

ガルツチ「うーん、今度カシマール先生に頼んでみるか。僕の元寮官の人で、魔法薬

学を教えているんだ。」

未来「そうなんだ。厳しい？」

ガルツチ「クセは強いけど、良い先生だよ。」
そういえば、鈴美さんのために、剣を作らないと……。暫くは忙しいかもなあ。

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第24話 雷鳴を轟かす神罰の剣

—千夏アジト—

ノーム『おうガルツチどん、あんたが頼んでた鉱石、採ってきたぞ。』

ガルツチ「すまん、恩に着る。念のため確認するが、何を採ってきた？」

ノーム『そうあせんなさって。まず、最近になって登場した『サンダー・アダマンド』に、『雷の玉』、『オリハルコン』、『クリプトン鉱石』、『雷神の宝玉』。後は、希少とも呼ばれとる『ゴッドフリークス・ダイヤモンド』じゃ。』

ナイスだ、ノーム。鉱石マニアとして、これまで以上に嬉しいことはないな。

ガルツチ「これなら、良い剣が作れるかも知れない。ありがとう、ノーム。」

ノーム『気にすることなか。例え旅を続けとったって、おいどんらの仲間じゃ！旅、がんばりんしゃい！』

ガルツチ「うん。」

さてと、久々に鍛冶の神の力を借りて、鈴美さんの武器を作るとしますか。でも、ここだとあれだな。ちよつと限定固有結界を使つてつと。

ガルツチ「I am the bone of my blade.

S o a s I p r a y,

『UNLIMITED WEAPON WORKS!』

僕は本来の詠唱を短縮させ、部屋一帯に果ての無い草原に、無数の剣。そして一本の大桜。

だが、あの血に塗れた草原や死体は何処にもなかった。夜の空には、無数の星が瞬いていて、一つの月が佇んでいた。おまけとして、空から羽根が降り注いでいた。

ガルツチ「さてと、オリンポス神、炎と鍛冶の神へパイストス！接続!!」コネクト

『Connect Hephæstus please』

さあ、鍛冶の時間だ！

sideChange

イリヤ side

今お兄ちゃんは、鈴美さんのための武器を作ってるらしい。確かに、鈴美さんの技量は驚いたわ。

私のバーサーカーには届かないけど、でもそれ以上に強いわね。あの力、多分9回ぐらいは殺すかもしれないわね。

ヘラクレス「お嬢様、紅茶で御座います。」

イリヤ「ありがとう、バーサーカー。」

未来「……………紳士だ。」

藍「紳士だね……………。狂化何処行つたんだろう？」

深雪「気にしたら、負けかも知れない。多分、ガルツチ達を知ってるでしょうね…………。」

まあ、私も驚いたわ。当時現博麗の巫女の時、突然喋り出すんだから、お兄ちゃんもビックリだったよ。

でも、慣れてって怖いわね。今じゃ普通に白いタキシード着て、射殺す百頭の全部の形態も復活したし、ホントに最強のバーサーカーになったわね。あの金ぴかは除いてだけ……………。

認めたくないけど、あの金ぴかの宝具は勝てないわ。あんな無数な宝具、卑怯にも程があるわ……。

鈴美「ガルツチちゃんは、何を作ってるのかしら？」

フラン「鈴美お姉ちゃんの為の、武器だと思うよ。扱えるように重さも調節すると思わ。」

未来「鈴美の武器か……。そういえばジャックが言うには、ギルサンダーの血もあるんだっけ？」

こいし「うん。あの時の鈴美さん格好良かったなあ。女剣士に見えちやった。」

鈴美「そ、そうかな？／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

凄いデレデレね。でも確かに、格好良かったなあ。指から雷出せるって、なんか憧れちゃうわね。

未来「そういえばガルツチ、まだ掛かるのかな？」

本音「ガルガルの作業って、意外と時間かかるものなのかな？」

イリヤ「その分凄い武器になると思うから、待ちましょう。」

sideChange

ガルツチ side

ガルツチ「よし、完成した！」

とは言え、まだ使える部分もあったから、刀とか盾とか作っちゃったな。んで本命の剣は、見た目はフランベルジュではあるが、こちらは雷のように少し角張っていて、切れ味もザンテツケンとは比べものにならないほど、良い切れ味。

そして、フランベルジュとは異なる点は、やはり鏢の部分は不死鳥の形だろう。後は、斬れば雷の斬撃を飛ばすことぐらいだな。

刀とかも同じようにだせるし、盾は雷属性の攻撃を吸収させて、逆に強化させるぐらいの力を持つてるしな。

ガルツチ「んじゃ、手渡ししますか。」

固有結界を解除し、未来達がいるところに向かった。ぶつちやけ言うが、僕の固有結

界は、もう世界の改変させるぐらい強化している。未来は固有結界だと思ってるけど、あれでも加減はしてる奴だしね。

まあ、いづれ見せるつもりだけどね。

ガルツチ「鈴美さん、完成したよ！」

鈴美「ホント!?!」

ガルツチ「これだ。ちゃんと鈴美さんに扱えるように、色々調節しておいたよ。余った奴は、盾と刀にしておいた。」

鈴美「ありがとう、ガルツチちゃん！」

未来「鍛冶も出来たの?」

ガルツチ「いや? 僕は鍛冶の神の力を借りて、作っただけだよ?」

藍「流石全王神の息子……………、真似できない。」

いやだから、僕は魔神だからって何でも出来るわけじゃないからね!?! 何で神様ってだけで、何でも出来るって思われちゃうんだろ……………。

全王神『やつほー!!ガルツチちゃん!』

ん? 母さん、どうかした?

オーデイン『全く貴様は、ホントに……………。』

えーつと、どちら様?

全王神『もう、オーデイちゃん! あ、ガルツチちゃんとは初対面かな? 今のはオーデインって呼んで——』

何イイイイ!? レミアアが持つてるグングニルの持ち主だとオオオオオオオオオオオオ?

オーデイン『まあそうだな。初めまして、全王神の息子よ。貴様も苦勞が^{?!?!?}けるようだな。』

ホントにそうだね……………。ホント、こんな母さんですみません…………。

オーデイン『気にするな、元よりこの神泣かせの扱いは慣れてる。』

全王神『うー、オーデイちゃんが酷いこと言うなあ……………。全ちゃん泣いちゃう。やめろ。また殴らなきやならないのか。』

全王神『またあの拳が来るの!? それは勘弁して!?!』

オーデイン『自業自得だろ、そりゃ息子がくれるの当然だろ。』

全王神『(・ω・)』

それで、何か用かな?

オーデイン『そうだった。天照大神と月夜見尊が作った世界が出来上がったと、貴様らに報告しにきたのだ。』

おー! 遂に来たか!!

全王神『でもその前に、行って欲しいところがあるの。』

ガルツチ「でも、その前に未来、ジョジョの世界に行かないといけない。」

未来「え？」

鈴美「杜王町で、何かあったの？」

ガルツチ「母さんが言うには、円卓の騎士と呼ばれるチームが、杜王町を襲おうとしてるらしい。」

未来と鈴美は驚愕を隠しきれなかった。無理も無いだろうな…………。

簪「それなら、尚更じゃないの!？」

本音「すぐ助けに行こう! みつくん!!」

オーフィス「我、助けてい!」

白夜叉「久々に、暴れ回ろうかの。」

レティシア「未来、私と白夜叉はスタンドはないが、助けに行きたい。」

英竜「私も同感だ。」

ガルツチ「未来…………。」

未来「……………行こう、杜王町に戻って、守りに行こう!」

そして、皆は準備を進め、次なる世界に向かおうとしていた。

深雪「でも思ったんだけど、スタンドはスタンド使いしか見えないよね? 持ってない

私達はどうすれば？」

ガルツチ「安心して。皆にはスタンドが見えるように魔法をかけておいたし、攻撃も出来るようにしておいた。」

士織「もうスタンドルすら無視しちゃったね……………」

イフ「では、戻ろう。未来と私の、始まりの地へ!!」

未来は扉を開き、僕達と英竜達は入っていった。

t o b e c o n t i n u e d
→

未来の始まりの世界　　〱 円卓の騎士〱

第25話 未来の始まりの地

― 杜王町 ―

円卓の騎士 side

??? 「アーサー、準備は整いました。どうか、出陣の準備を――」

アーサー 「待ちなさい、ガウエイン。どうやら、この杜王町の何者かが入り込んだらしいです。」

ガウエイン 「……………と、いうと?」

アーサー 「おそらく、我ら『円卓の騎士』にとって、最大の脅威になりかねない者かも知れません。」

side change

未来 side

戻つて来ちやったね、僕の始まりの場所……………。

本音「此処がみつくんの始まりの場所かあ……………」。

簪「まさか、ホントにジヨジヨの世界で仗助達に会えるなんて、思ってもみなかったよ。」

ガルツチ「そうか？僕は気まずいんだけど……………。あの時敵同士だったし……………」。

フラン「うん。老ジョセフも、敵だったしね……………」。

こいイリ「うんうん……………」。

そこまでなのか……………。って、あれって……………。

良平「ん？おお!!未来ではないか!!」

未来「良平さん!ご無沙汰です!」

朋子「未来ちゃん！」

どうやら降り立った地は、仗助君の家だったようだ。仗助君、元気かな？

仗助「ん〜？どうかし……………ぬお!? 未来か!？」

未来「久しぶり、仗助君。」

仗助「お前、久しぶりだなく! って、鈴美!？」

朋子「え? 嘘……………」

良平「見違えるように、変わったの……………。いやいや、鈴美が生き返った!？」

ガルツチ「あ、それでしたら僕が説明します。」

ガルツチは此までの経緯を全部話した。

良平「なるほどのう、異世界の力って羨ましい限りじゃ。まあ、自己紹介は——」

簪「凄ーい!! 生仗助だアアアア!!」

仗助「!？」

未来「あ、その人は更識簪と言って、僕の恋人の一人なんです。詳しい話しは、中で。」

朋子「分かったわ。」

仗助「ついでだから、旅のことも話してくれねえか?」

未来「いいよ。」

そして僕は、仗助君の家に入り、今まで旅してきたことと、出会った人達、そして恋

人の事まで話をした。

仗助「……………いやまあ、正直ここまで過酷だとは思ってもみなかったが……………」
良平「今一番驚きなのが、同じ男の娘と出来た子供がいるって事が……………」

朋子「うん、私も驚いたわ……………」その、ガルツチちゃんって女の子な——
」

ガルツチ「待て、僕は男だ！以前変わりなく！男です！」

朋子「つて、言われても……………ねえ。」

『バタンツ！』

あ、ガルツチが倒れちゃった。しかも全身負のオーラが溢れ出ちゃってる……………。ガルツチ「どうして僕こうなるのかなそもそも何で男の娘とかに生まれちゃったんだよおかしいだろ女体化で生まれたとは言えそれでも別に良いじゃ無いかも女として認めたくないよそもそもラクトが女体化させるのが悪いんじゃないか酷すぎるよ酷だよ残酷だよ誰も僕を男として見てくれる人がいないのかよなんでさなんでさなんでさなんでさレティシア「うわ……………、ここまで落ち込むガルツチは、初めて見た……………」

妻3人「大丈夫、お兄ちゃんのは発作だから。(ゝω・) b」

全員「発作なの!?! (O O ;)」

アレで発作って、滅茶苦茶怖いよ!?

アラヤ「そのお……………、母さんの事は気にしないで下さい。あと、女性扱いしたら、こうなりますし。」

東方家「「以後気を付けます……………」」

未来「アラヤと鳳凰は何ともないっほいけどね。」

仗助「どう言う基準してんだ……………」

イリヤ「気にしないで。」

良平「だが、何でまたこっちに戻ろうとしたのじゃ?」

ガルツチ「実はというんですね。」

東方家「「復活早っ!」」

うん、僕もそう思った。あの発作(?)が嘘のように復活し、座り直したのだ。なるほど、不死鳥とは伊達ではなさそうだ。

そして、ガルツチはここに来た理由を話し終えると、驚愕な顔をしていた。

良平「杜王町が狙われてるじゃと!」

仗助「その円卓の騎士の目的って、一体!」

ガルツチ「分かんないが、恐らくろくなもんじゃあないって事だな。」

朋子「そんな……………」

仗助「杜王町を泣かせようってんなら、この俺が許さねえ！」
すると、いきなりドアをぶち壊す音が聞こえ、滅茶苦茶焦った顔をした女性らしい人が皆を見た。

???「はあ、はあ……………。ガルツチ達というのは、貴方方ですか!？」

ガルツチ「ん？誰だ？円卓の騎士の奴か？」

???「元ですが、コードネームはベデイヴィエール。名前は佐々木愛梨、スタンド名は『アガードラム』。」

仗助「ほう、早速敵が来たという訳か。」

ガルツチ「待って。元って、どういう事？」

愛梨「もうあのやり方にはうんざりだと思い、あの場から逃げたのです。奴らがやってくることは、悪逆非道ばかりです！」

ガルツチ「……………それでここに来たと。」

愛梨「そうです。目的は、善意も悪意もない平和にすること。つまり、闘争心、反逆心を持つてる者を全て殺し、誰にも逆らえない暗黒郷を作ろうとしているんです。」

全員「!？」

ガルツチ「それで、裏切ったと。」

愛梨「ええ、そして叛逆の騎士であるモードレットも、円卓の騎士を抜けています。」

ガルツチ「……………信用しづらいが、今は君の言葉に信じよう。」

確かに、急に裏切り、目的を話すなんてあまりにも不自然すぎる。何か裏がありそうな気がするから、一応警戒した方が良くもただけど、今はこの人のいうことは信じるとしようかな。

簪「よろしく、愛梨さん。」

愛梨「はい。あ、重ねて言いますが、僕男ですからね？」

仗助「なっ!?!俺女かと——」

『ドスッ!!』

ん? 何かが刺さったような音が……………。あ、愛梨さんとガルツチが落ち込んでる。だ、大丈夫なのかな……………? ?

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第26話 仮拠点

ガルツチ side

どうも、ジョジョの4部世界に到着し、早速出会うの気まずすぎる仗助に出会ってしまつたガルツチです……………。

ぶつちやけ平然と会話をしたのはいいけど、心底複雑な気持ちです。だって、あの時敵同士だったんだよ!? 平然と会話をしている自分が怖いよ!!

まあでも、まさか女の子と思われるなんて……………。オンナノコって……………。
ガルツチ「ハアアアアアア……………。」

愛梨「……………。ズーン

イリヤ「これは、相当重いわね……………。」

朋子「ご、ごめんって……………。」

仗助「つて、それはそうと仮拠点はどうすんだ? 流石に金かかるだろ。」

未来「大丈夫、お金はちゃんとあるから。」

ガルツチ「あ、それなら僕の魔法で空間を歪めて仮拠点の場所を作るけど。」

良平「……………どう言う性格なのか、分からぬのう。」

未来「でも、それがガルツチですから。んでガルツチが作る家は、やつぱり……。」「ガルツチ「うん、というかもうお決まりだね。というわけで、庭の方お借りしますね。」

仗助「おい、どこに……。……ん？」

ガルツチ「Пространство обороны совершено
а, Жемчужной реки защитить кажду ката
Трофу。(万全の守りの空間よ、あらゆる厄災を守りたまえ。)」

よし、白い渦が出来たな。後は中に入つてつと……。……。

仗助「ん？なんだこの白い渦……。……？」

未来「今あの空間の中で、家を作ってるんです。外装とか内装とか色々。」

イリヤ「何で知ってるの、未来お兄ちゃん。」

未来「え？適当に言っただけ……。……。」

こいし「それで引き当てる未来お兄ちゃん、凄すぎるよ。」

ガルツチ「終わったぞ〜！皆、この空間の中に入つて。」

しかし、まさか衛宮家の再現させてしまうとは、思つてもみなかつたな……。……。

イリヤ「これって、シロウのお家？」

ガルツチ「何故こうなつたかは聞くな。でも部屋は多くした方だよ。一応布団も多め

フラン「あ、それ私も思った！」

本音「結婚かあ………。そういえば、ガルガル君って、フランちゃんとかいこいちゃん、イリリンちゃんと、結婚してるんだっけ？」

イリヤ「勿論よ。」

こいし「じやなきや、指輪貰ってないしね。」

うん、何故だか知らないが、っていうか今更だけど、どうもこいしとイリヤと本音が会話をすると、どっちが話してるのか分かんなくなるよなあ……。

全王神『そりゃあ同じせ——』

オーデイン『言わせぬぞ。』

うん、母さんが言いたいことはわかるが、やめたまえ。

未来「そういえば、ここガルツチが作った空間なのに、外と何も変わらない気がするんだけど、何で？」

ガルツチ「これが。実はというところ、どの次元にも属さない、いやそもそもどこにも存在する筈のない惑星なんだ。」

するとこの場にいた全員は、超音波並みの大声を放とうとしていたため、咄嗟に無言呪文版の『シレンシオ』を使い、超音波を防いだ。だってまたあの超音波を食らうなんていやだもん……。

とりあえず超音波が来ないと思った僕は、すぐさま『シレンシオ』を切った。
レティシア「貴様、そんなところを繋げるとか、どこまで規格外なのだ!？」

白夜叉「そもそもよくこう言う星を見つけたな! 私とて知らなかったぞ!？」

ガルツチ「元々は隠居するためにも思つて、探しまくつて、見つけたのが此処だったんだ。本当は、全てが終わつたらこの場所で誰も関わらないようにゆつくりしたかったんだ。」

未来「あの言葉、元々そのつもりでいったのか!？」

鈴美「つていうか、今さらつと隠居とかいった!？」

オーフィス「ガルツチ、年寄りくさい……………」

ガルツチ「元々ジジイの筈だったんだけど、どっかの誰かさんのせいで、若い姿になつてんだよ察してくれ。」

全員「……………(そういうえば本当ならお爺ちゃんだったね……………)」

全王神『えー、ガルツチちゃんがお爺ちゃんになる姿なんて、誰が得しちやうの?』

オーデイン『この神泣かせめ……………』

ホントにこんな母さんですみません、オーデイン。

簪「そういうば、庭にあるあの白い渦は?」

ガルツチ「あー、そこは畑だな。田んぼもあれば牧場もある。全部機械任せだけど

ね。」

本音「もう殆ど隠居する気ありだね……。」

深雪「まあ、兎に角この場所からだろうか。」

ガルツチ「そうだね。3人とも、そろそろ出るよ！」

そして、皆は白い渦の中から出ていくと、渦自体が消えていった。

愛梨「しかし、凄いですね。でも入られたらどうなるんですか？」

ガルツチ「あれより別の星に繋がるようにしてあるんだ。絶対零度の星とか、煉獄の星とか。あとは地面に着くだけで20京Vの電気が流れる場所とか——」

愛梨「いや、もう良いです。」

仗助「完全地獄絵図じゃねえか……。」

ガルツチ「あ、一応神系の奴の場合、神罰の星って場所があるよ。具体的にどんなところかは……、察してくれ。」

全王神『ええええ……、そんなあああ……。』

まあ母さんは例外だけだね。

???「仗助君！仗助君!!」

仗助「康一？どーしたんだ？」

康一「大変だよ！億安君が、謎の男に襲われてる！」

仗助「何!？」

未来「まさか……………」。

ガルツチ『『円卓の騎士』だな。急ごう!!』

さてと、円卓の騎士の実力、見せて貰おうじやあねえか!

t o b e c o n t i n u e d ♪

第27話 聖弓のスタンド使い

—杜王町—

億安「ちつくししよう!!なんだってんだ!?!」

???'「フハハハハ!!どうだ?我がスタンド『フェイルノート』の力は!!」

億安「(こりゃあ、俺のスタンドと相性が悪すぎるぜ……………」頼む、康一!仗助を!!」

『ドリアアアア!』

???'「!?!」

間に合った!って、あの弓、まさか!!

ガルツチ『トレスネオン投影開始』!我が錬鉄は崩れ歪む!爆ぜろ!!『カラドボルグX虚・螺旋剣』!!』

???'「よつと!!」

僕が放った投影武器は易々と避け、弓を引くと閃光の矢が現れた。が、鈴美のスタンドを使い、防いだ。

仗助「億安!無事か!!」

億安「おうよ、仗助!」

未来「ガルツチ、あれって?」

ガルツチ「なるほど、読めたぞ。『円卓の騎士』、つまり奴らが使うスタンドは、武器だ！そしてあの攻撃は妖弓フェイルノート。それを扱う奴はトリスタン、そうだろ？」

???「ほう、アグラヴェインが言つてたとおり、来ましたか！例え東になったところで、私のスタンド『フェイルノート』には勝てない！冥土の土産に名乗っておきましょう。私は遠藤鳥弓、アーサー王に従う『円卓の騎士』の一人だ！」

仗助「ちっ！『クレイジーダイヤモンド』!!」

仗助のスタンドと、鳥弓が放つ無数の矢がぶつかり合う。が、仗助は知らない。フェイルノートの恐ろしさは、こんなものではないと。

鳥弓「ハッ！真っ直ぐに撃つていると思つているのか？」

仗助「なっ!？」

一本の閃光の矢が、仗助の右肩部分に貫いた。

康一「仗助君!!」

鳥弓「ほらほら！此奴はどうか——」

ガルツチ「やらせるか!!ナルト直伝忍術！螺旋丸!!」

未来「え!？」

鳥弓「おっと！そういえば、お前達がいた事を忘れていたね。だったらお前から先に

!!」

ガルツチ「『弓兵』^{アーチャー}！『トリスタン』!!『限定召喚』!!無数の矢を見せてやる!!」

鳥弓「ふつ、そんなもの！私には無意味だ!!」

ガルツチ「どうかな？それと……………。未来達は他を当たってくれ！もしかしたら、他の皆も襲われてるかも知れない!!此奴には、一度格の違いを見せてやらないといけな
いからな!!」

鈴美「倒せるの!?!」

ガルツチ「ああ、こんな奴。『赤子を殺すより楽な作業よ』!!殺しはせんがな。」

鳥弓「吠えたな！負け犬の遠吠えを!!」

ガルツチ「違うな、トリスタン。これは……………勝利への雄叫びだ!!『擬似宝具』起

動!『王の財宝』!!」
ゲイトオブパレロン

鳥弓「何ツ!?!」

未来達は他の円卓の騎士を捜し当てるため、一旦バラバラに行動することになった。

ガルツチ「億安！康一！仗助を頼む！」

康一「わ、分かったけど、君は？」

ガルツチ「……………通りすがりの英霊使いだ。安心しろ、未来の仲間だからな。」

さてと、康一達はこの場から去ってくれた事だし、全力で行くか!

ガルツチ「無限の矢と武器を、^{ブランドアーチャー}冠位弓兵を、なめるな!!征け！」

鳥弓「穿て！」

弦を解き放つと同時に、双方の無数の矢と武器が走り、互いにぶつかり合い始めた。その光景は、まるでギルガメッシュとエルキドウの戦いと、よく似ていたのだ。

だが、こんなところで負けるわけにはいかない。どちらの攻撃も、恐らく杜王町に被害を食らうだろう。

でも、こんな奴らに明け渡す訳にはいかない！今回は大盤振る舞いだ！！f a t e シリーズの宝具全部使っても、お前を倒してやる！！

鳥弓「ちつ、スタンドを使ってるつてのに、なんなのだ!?!何故スタンドを使わない!?!」
 ガルツチ「愚問だな、雑種！貴様のようなやつに、スタンドを使つたとしても僕に勝てるわけがない！だがまあ、あることを言えば、それだけ撃ち続けければ、精神は摩耗しはじめられるだろう。その閃光の矢は、元々は精神で出来ているのだろうか?！」

鳥弓「なっ!?!ガハッ!?!」

ガルツチ「そしてその限界が訪れ、お前はスタンドを使われなかった男に殺される。クロウ、お前の宝具を使わせて貰う。」

『I a m t h e b o n e o f m y S w o r d .』

S o a s I p r a y ,

『UNLIMITED LOST WORKS!!』

鳥弓「



」

まあ表現するまでもないだろう。ただ言うなれば、エグすぎて吐き気がするほど、グロすぎたのだ。

!!!!!!

嫌だつてさ、彼奴の死体殆ど剣やらなんやら色々つぶささつてんし、しかも目やら口やらどこでも剣が出てきてるから、とてもじゃないが、死体とは程遠いものになるよ。

全王神『うわあ……………。』

士『ガルツチ、お前……………。』

束『流石の私も、ちよつと此は……………。』

キング『お前、人として如何なのだ?』

おいお前ら、引くのは勝手だが、これ以上言うのならば特大のロードローラーで無駄無駄ラツシュ使いますよ?

あとキング、僕は人じゃないんで。

ベリアル『そうだぞ! 彼奴は化け物なんだからよ!』

キング『なつ、おい馬鹿!!』

ベリアル、それ悪口じゃない………………。どっちかというと、それ褒め言葉だよ。
 4人『『『褒め言葉なの?!?!?』』』

遠藤鳥弓

スタンド名『フェイルノート』

【破壊力：A／スピード：A／射程距離：A／持続力：D／精密動作性：使い手次第／成長性：D】

ガルツチに敗北 リタイア 死亡

仗助「痛え……………、つてうわ、なんだこの惨劇。」

億安「なんじゃあこりゃあ……………」。

あれ？仗助達が戻ってきた。

康一「あの、彼奴は？」

ガルツチ「見ない方が良い。というかあれは、地獄絵図だから。」

仗助「ああ、この惨劇から見てどれ程ヤバいのか、分かったよ……………。つていう

かお前、スタンド使えよ！スタンド!!」

ガルツチ「いいかい、仗助。この世にはな。『^ル破^ル戒^ルす^ベき^全て^の符^カ』という物がある。」

仗助「それで？」

ガルツチ「このように、常識すらぶち壊すぐらいのものなのだ。とある究極生命体^{!!!}の

言葉を借りるならば……………。『勝てば良^{!!!}からう^{!!!}なのだ^{!!!}アアアアアアアアア^{!!!}』

仗助「いやいや、それでもスタンド使えよ!!」

ガルツチ「嫌そんなことしたら、即死すると思うじゃん。僕のスタンド『ムーンライ

ト・アウターヘル』の能力に『終焉』というのがあって、触れたらあらゆるものを終わ

らせる力があるんだよ。例えば人生つてのを——」

仗助「悪い、謝る。」

康一「うわー、チートじゃないですか。未来さん、この人規格外です……。つて
いうか今更ですが、鈴美さん居ませんでした!？」

ガルツチ「今!？」

仗助「ああ、その事ならガルツチが生き返らせたんだと。」

億安「マジで!？」

正確には、聖杯の『シン』^{ハート}を使って生き返らせたけどね。

ガルツチ「ただ、鈴美さんの事なんだけど、言っつていいか？」

3人「!?!?!」

ガルツチ「実は鈴美さん、彼女は『零の龍神』つていう血を引いて、元々人間と
は程遠い存在だったんだよ。」

億安「え?それつてつまり……。……。」

ガルツチ「最初つから人間じゃあなかつたつて訳。だからつて、冷たくするなよ?し
たらボロボロにしますんで。」

仗助「お、おう……。……。分かつた、分かつたからその殺意収めろ……。……。」

ガルツチ「あと仗助、もし鈴美さんを傷つけたら、その自慢の髪形を丸刈りしますの

で、か・く・ご、しといてね？」

普通なら仗助はプツツンとキレて殴り掛かるのだろうが、どうやら僕の殺意によって恐怖をしたらしく、ガクブルと震えていた。

さてと、まずは一人だね。

t o b e c o n t i n u e d
⇩

第28話 叛逆の騎士VS裏切りの騎士

—杜王町—

未来side

ガルツチがトリスタンという人と戦つてゐる間、僕と鈴美、簪、本音、オーフィス、愛梨、そして愛花は円卓の騎士を見つけるために捜し回つていたら、紫の鎧を着込んだスタンドを持つてゐる男性と、由花子さんを守ろうと、ボロボロになつてでも守つてゐる女性があつた。

??? 「まさか、我々を裏切るだけでなく、そのような者を守ろうとは、貴様は何処まで堕ちる気だ？ モードレッド。」

??? 「黙れよ、ランスロット。関係ねえ奴を、いやそもそもお前らのやり方が気に食わなかつたんだよ。」

愛梨 「モードレッド！」

??? 「ちつ、その声はベデイヴィエール。貴様か。」

由花子 「あ、貴方は？」

愛梨 「話は後、未来さん！」

未来「う、うん！」

兎に角僕は、由花子さんを安全なところに避難させると、モードレッドという女性のスタンドが現れた。

少っだけその人と似ていたけど、スタンドの方は鎧を着込んでいて、何かの剣を握っていた。

愛梨「モードレッドさん、私も助力します。『アガードラム』！」

愛梨さんの右腕は銀色の隻腕に変わり、モードレッドと並んだ。

???「愚かな奴らめ、私の『アロンダイト』の力を忘れた訳ではあるまい？」

???「ああ、確かにあんたのスタンドは強いかな。だからって、引くわけには行かないんだよ！行くぞ！『クランレス』！」

クランレスの剣はアロンダイトの剣はぶつかると、僅かだけアロンダイトの方が、素早く攻撃していた。愛梨も接近して本体を狙うも、本体自体も剣で受け止めていた。

あれ？スタンドって、なんだっけ？

愛梨「セイツ！」

???「無駄だと、言ってるだろ！」

愛梨「ツ！」

???「ベデー！」

??? 「最早これまでだな。では、潔く死ぬがいい！『アロンダイト・オーバー——』」

鈴美 「『雷帝の鉄槌』!!!」

??? 「!？」

2人が殺されかけたときに、鈴美さんが丁度良いタイミングで雷を放ち、ランスロットと言う男を退いてくれた。兎に角、危ないところだった……………。

??? 「くつ……………、女。その力、もしか……………。いや、今は撤退する事にしよう。その前に女！名はなんだ？」

鈴美 「杉本鈴美、『零の龍神』の最後の末裔よ！」

??? 「鈴美……………か、覚えておこう。命拾いしたな、ベディヴィエール、モードレッド！」

ランスロットはそのまま光の扉のところに逃げ、消えていった。

??? 「すまない、助けられたな。」

鈴美 「いいわよ、そんなの。貴方がモードレッド？」

??? 「ああ、俺は元円卓の騎士の1人、叛逆の騎士のモードレッド、真名『煉獄紅虎』だ。オレっ子だがこれでも女性だ。」

愛梨 「ホント、無事で良かったです。」

紅虎 「つていうかベディ、危ねえだろ！下手したら死んでたかも知れねえつてのに！」

愛梨「モードレッドが心配だったんです！」

それからわーぎやーわーぎやーの何かと可愛らしい言い争いが始まった。うん、とりあえず助けられたのは良かったかもね。

ランスロット

真名 不明

スタンド名『アロンダイト』

【破壊力：B／スピード：B／射程距離：E／持続力：D／精密動作性：C／成長性：D】

見た目：f a t e / G r a n d O r d e r ランスロット（セイバー）

撤退

モードレッド

真名 煉獄紅虎

スタンド名『クランレス』

【破壊力：B＋／スピード：B／射程距離：E／持続力：C／精密動作性：E／成長性：D】

見た目：f a t e / G r a n d O r d e r モードレッド

生存

由花子「えーっと、ありがとう。それじゃあ私、康一君のところに行くね！」

由花子さんは、いつも通りだなあ……。……。康一君も、大変だね。あの人に好かれるのって。そういえばガルツチって、ヤンデレだった気がする。

うーん、なんて言うか天使と悪魔の両面を持つてるけど、どっちも可愛いからいつか。

紅虎「とりあえず、如何する？」

未来「そうだね、先ずは連絡した方が良いかもしれない。」

今頃、みんなも助け終わったところかもしれないね。

t o b e c o n t i n u e d
→

第29話 愛花の真意

—隠れ家—

ガルツチ side

ガルツチ「とりあえず、皆集まったね。」

未来「うん、先ずは杜王町の現状を、もう一度把握しよう。」

良平「そうじゃな。先ずは、今杜王町の現状じゃが——」

どうやらトリスタンと名乗る遠藤鳥弓とランスロットは囿だったようで、大半の杜王町の区域は占拠されてしまっている。

そして、それに生き残っていたのは、この世界のトニオさん、支倉未起隆、東方家全員、モードレッドが守っていた山岸由花子、虹村億安、広瀬康一、岸辺露伴。以外の人

は恐らく死亡、又は捕縛した可能性もあるらしい。

未起隆「しかし、驚きました。何故円卓の騎士と呼ばれる者が、杜王町を襲ったのか。」

愛梨「それは私がいいます。円卓の騎士の目的は、恒久平和。つまり善意も悪意もない平和にすることです。」

仗助「改めて聞くが、矛盾してねえか？ だったら別に襲わなかったっていいんじゃない

……。

紅虎「確かにそうだ。が、彼奴らは人類が邪魔、平和にするために、この世の全ての人類の力を奪おうと考えているんだ。虐殺だろうがなんだろうが、老若男女を殺していた。しかもそれを大勢の奴らに見せつけるために。」

ガルツチ「……………改めて聞くと、度し難い連中だな。それで愛梨さんと紅虎さんは裏切りをしたと？」

紅虎「ああ。」

相当な屑野郎の連中だな。トリスタンを殺したから、とりあえずはいいが……………。

仗助「とりあえず承太郎さんに連絡を入れようかと——」

ガルツチ「待った、承太郎は恐らく動けない。理由は不明だが、感がそう告げてる。」
仗助「なんだよそれ……………」

紅虎「あ、そういえばアーサー王の奴、何でか知らねえがやたらといっても良いが、あの奴を探せとか何とか——」

愛花「!!」

ガルツチ「ん？」

あれ？愛花の表情が、一瞬強張った気が……………。

紅虎「何でも其奴はスタンド、能力、宝具、神器、異常、過負荷、精霊、反転等の全

てを持っていやがるんだ。」

仗助「……………なんだ其奴、勝てねえじゃねえか。」

紅虎「もし其奴が奴らに見つかり、捕まったら、一巻の終わりだ。もう円卓の騎士に逆らう者は、二度と現れなくなる。」

仗助「うっし！それじゃあ其奴を見つけて——」

未来「あれ？愛花？」

利用されるのではないかと恐れたのか、愛花は黙ってどこかにいった。

未来「ごめん、僕愛花の様子を見てくる。」

ガルツチ「僕も。」

紅虎「お、おう。」

とは言え、アーサー王がその力を求めてる理由が不明だな。でも、愛花が逃げるって事は、恐らく奴らの狙いは……………。

未来「愛花！如何したの？」

愛花「怖い……………、私……………捕まりたくない！」

未来「え？」

愛花「痛い事なんていや！皆が死んじやうのはいや!!」

未来「愛花？ねえ、如何したの？」

ガルツチ「……………愛花、もしかして……………」

愛花「……………」

ガルツチ「……………なあ、聞いて良いか？愛花。何で、僕達に近づいたの？」

未来「え？」

ガルツチ「不自然過ぎるんだ。皆は教えていなかったら気付いていなかっただろうけど、僕には何か神々しいオーラを放っていたのが見えたんだ。」

愛花「……………そっか、ガル兄は気付いてたんだ。んじゃあ、白状するけど、私はあの奴らのホムンクルス『実験台0号』なの。」

未来「ホムンクルス!？」

やっぱりか「……………人間にしては違和感を感じていたが。」

愛花「造られたって事が分かったのは、名札だったの。私、造られたんだなあって。でも、なんのために造られたのか、分かんなかったの。でも、赤い服をきた如何にも優雅でうっかりしてしまいそうな紳士が現れて——」

ガルツチ「それ絶対遠坂家の1人じゃん。全く、”うっかり”一族め。」

愛花「それで、そのディスクってのを触れた途端、凄い力が溢れ出たの。そして分かった。あの人達は私を利用するつもりで、造られたんだって。だけど、全部の能力

を得たお陰で、脱走して何処か遠くに逃げようと思ったの。そこで変わった世界の公園に着いたとき、未来兄とガル兄を見つけたの。それで咄嗟に思いついた。あの人達の妹にして、隠れちゃえば良いんだって。」

ガルツチ「……………なるほど、だからあんな事を。」

でも先ず、そのオーラを隠していなかったのは失策だったと思うぞ？

さすがに違和感があつたし。

未来「そうだったんだね。」

愛花「ごめんね、未来兄。騙したりなんかして……………。ガル兄も……………。でも、私これからどうしよう……………。このままだと、私……………。私……………」

ガルツチ「だからって離すわけないだろ？」

愛花「え？」

ガルツチ「ホムンクルスだからって如何した？妹じゃないから如何した？僕は別に気にしないし、これからも守るつもりだ。これでも僕、大切なものを奪った奴はとことん奪い返し、二度と手を出さないようにメンタルブレイクさせてやるのが、僕なんだ。愛花が逃げてきたその組織に渡すつもりもない。」

未来「ガルツチ……………」

愛花「兄に……………」

ガルツチ「任せておけ。君が未来と僕に兄と呼んでくれた時には、もう僕らの妹だ。奴らに手を渡すつもりはない。」

そうだ。誰かを守るのなら、組織だろうがなんだろうが、敵にまわす覚悟ぐらいあるさ。

愛花「……………ありがとう、兄に。」

ガルツチ「未来、絶対にこの子を守ろう。この子が殺される、又は手遅れになってしまったら、僕らの『負け』だ。」

未来「分かっている。絶対に守ろう。」

さて、戻るとしましようかな。多分話し合いは終わったことだし。

紅虎「戻ったか。」

ガルツチ「ああ、迷惑をかけたな。」

良平「それで、これから如何するんじや？」

愛梨「いずれにせよ、杜王町を奪還するほかありません。それからは、アーサー王を殺すだけ。今はそれでいいです。」

ガルツチ「分かった。だが、アーサー王の相手は、僕と未来がする——」

深雪「待って、私もお願ひ。」

ガルツチ「深雪さん？」

深雪「貴方2人だけ格好付けさせる訳にはいかないわ。それに、何でだろ。そのアーサー王には、滅茶苦茶ぶん殴りたい気持ちなの。」

ガルツチ「……………分かった、だが無理はするなよ。」

んじゃ、方針は決まったことだし、後は杜王町の奪還と円卓の騎士を倒すだけ！覚悟しておけよ、アーサー王。

t o b e c o n t i n u e d
→

んだけど……。。
(・|・;)
「

第29. 5話 麻婆を極めし者

—隠れ家—

とある日の朝、一人の男はあるものを作っていた。

仗助「ふああああ………、ん？おうガルツチ、おはよう。」

ガルツチ「おはよう、仗助。」

仗助「何作ってんだ？」

ガルツチ「麻婆豆腐。」

麻婆豆腐。

それは、ただ唐辛子が山のようにぶち込まれた一見雑な料理にも見えるが、豆腐を口に含んだ瞬間舌を焼く刺激がたまらない味覚をもたらす。

そう、辛さこそ至高、辛さこそ究極の味覚。辛くない麻婆豆腐など、麻婆豆腐ではない！

仗助「ほう、麻婆豆腐………うげっ!？」

ガルツチ「？」

仗助「ほ、ホントに麻婆豆腐？」

ガルツチ「うん。」

仗助「グレートにヘヴィいな色してるぜ……………、大丈夫なんか？」

ガルツチ「ああ、一応僕だけの一品だな。あー、味見はやめておけ。超越者じゃないと耐えられないぞ？」

仗助「ええええ……………。つていうか、お前大丈夫なんか？もう一度聞くけど。」

ガルツチ「大丈夫大丈夫、食べ慣れてるからな。おやつ代わりにもなるし。」

仗助曰く、あれでおやつ代わりになるのかよと、何とも言えない顔になっていたのだった。

そしてガルツチは、味見をしようと小皿を投影し、小皿に移し、舐めてみた。

ガルツチ「うーん、まだ辛さが足りないな。」

仗助「フア!？」

ガルツチ「あ、そういえば僕あの時作っておいた『地獄のラー油』があつたはず……………。

ちよつと離れるから、攪拌頼む。」

仗助「え？おい待て!!」

そのままガルツチは、冷蔵庫のある場所まで取りに行った。残された仗助は、チラリと麻婆豆腐を見ていた。

億安「おう仗助、おはよう。」

ガルツチ「あー、朝食は既に作っておいたから、後は食卓に置くだけだよ。由花子さん、すまないが代わりにお願い出来るか？」

由花子「ええ、いいですよ。後、何を作ってるんですか？」

ガルツチ「自分用の麻婆豆腐。味見はお勧めしませんよ？億安みたいになりますんで。」

由花子「え？ええ。」

そして由花子は、ガルツチが作った料理を装い、食卓に持っていった。その途中、由花子はその麻婆豆腐を見た。

由花子曰く、あれは殺しに来ているかのような真つ赤な色をしていたと、心底恐怖した顔をしていた。

ガルツチ「……………まだ辛さが足りない気がする。」

2人「(あれでまだ!?)」

ガルツチ「ふうむ……………、こうなったら言峰に聞いてみるか。ついでに例のアレのレシピの確認しなくては……………」

そしてまた、キッチンから出て行き、庭の方に行った。

ガルツチ side

さてと、言峰に連絡するか。リアクターで、言峰に連絡つと。

ガルツチ「もしもし、言峰。ちよつといいか？」

言峰『これはこれは、愉悦部の精鋭隊のガルツチではないか。何か用かね？』

ガルツチ「ああ、今麻婆豆腐を作ってたんだが、どうも手詰まりだね。出来るだけ辛くしてはいるが、なかなか上手く行かない。」

言峰『ほう、それは困ったな。だが無理も無いだろう、何しろ『超究極天元突破四風超絶激辛麻婆豆腐』を、お前が作っているのだからな。さすがの私でも、どう足掻いても駄目だったようだ。』

ガルツチ「何か、それに行き着く方法はないでしょうか？」

言峰『ふむ……………、如何すれば……………。』

バゼット『言峰神父、砂糖を持ってきました。』

言峰『ああ、ごく——え？』

ガルツチ「どした？」

言峰『バゼット、何故サトウキビなのだ？』

ダメツトエ……………、一体何処から何処まで脳筋なのだ？いや、流石バーサーカー
ガールと言うべきか。

言峰『しかし、ホントに如何すれば……………ん？待てよ？』

バゼット『?』

言峰『……………そうだ! ガルツチ、これなら行けるぞ!!』

ガルツチ「どんな方法です!? 教えて下さい!」

そして僕は、そのコツを聞きお礼の言葉を言った後、すぐさま冷蔵庫に走り、あるものを取り、摺り下ろし、『地獄のラー油』を混ぜ合わせ、そのままバツと入れた。そのまま攪拌し続け、味見をした。

仗助「……………ガルツチ?」

ガルツチ「……………。」

由花子「ガルツチさん?」

ガルツチ「……………う。」

康一「う?」

ガルツチ「……………美味!! 出来た、漸く出来上がったぞ。『超究極天元突

破四川風超絶激辛麻婆豆腐』の完成だ!!!」

4人「何その明らかに人間が食べたら死ぬほど苦しむような名前!?!?!」

ガルツチ「失敬な、そう言うレシピが! あったんだ。察してくれ。」

さてと、容器に入れて後は食卓に置くだけ。

未来「ふああああ……………、ガルツチおはよう……………」

ガルツチ「おはよう、未来。ご飯出来上がったよ。」

未来「分かった、みんな呼んでくるね。」

そして皆は起き上がり、すぐさま来た。4名は若干僕の麻婆豆腐を見て、引いてはい
るらしいが……………」

フラン「お兄ちゃん、その麻婆豆腐って、まさか……………」

ガルツチ「そのまさかだよ。」

こいし「遂に出来上がっちゃったのね……………」

イリヤ「流石、もう麻婆を極めし者の称号を持つてもおかしくないわね……………」

未来「まあそれでも、僕らの口に合わせた麻婆豆腐を、作ってくれてるけどね。」

オーフィス「我、辛すぎるの、無理。」

簪「それにしても、まさか現実で呼ばれる日が来るなんて、思ってたよ。」

本音「私も……………」

白夜叉「不思議じゃのう……………、というかガルツチは辛い物好きじゃとは……………」

鈴木「そうね。」

レティシア「無理はするなよ？」

ガルツチ「んじゃ、皆揃ったし、食べるか。」

未来「そうだね。それじゃ……………」

全員『いただきます!』

それじゃ、先ずはこの麻婆豆腐を食うとするか。さてさて、出来は良いとは言え、果たして……………?」

『パクツ』

ガルツチ「!!!」

鈴木「ガルツチちゃん?」

深雪「な、なんか凄いい形相になつてゐるが、大丈夫なの?」

大丈夫かつた? この世全ての苦しみを全て凝縮したかのごときの辛み、外部だけでなく、内部からも挟られるかのような痛み、そしてその痛みと苦しみの辛さを超えて至福とも言えるほどの旨さ。

一言言えば……………。

ガルツチ「美味い。」

簪「……………あの幻想が現実のものになつちやつた。」

ガルツチ「言峰神父、やり遂げました……………。漸く、たどり着きました

……………。全て遠き麻婆豆腐……………。

露伴「……………麻婆豆腐如きで涙するつて、ちよつと食わせろ。」

仗助「あ、バカ!」

露伴「ん？君は黙って——」

『バタンツ!!』

露伴「グオオオオオオオオオ………。」

鈴美「露伴ちやああああああん!!!」

仗助「だから言ったのによ………!!!」

良平「んじゃあ、儂も食べて——」

全員『それは絶対に駄目!!!』

自分が作ったのもなんだが、良平さん。あんた食ったら即死だぞ!?

露伴「凄い体験した………、一生にないリアリティを手に入れたが、もうこれ以

上はいい………」

ガルツチ「美味いとおもうんだけどなあ………」。パクツ

愛花「普通じゃないと思うよ、それ。」

未来「(もう、超がつくほどのMなんじゃないのかな?)」

全王神『つつくん、アレ食べる?』

士『いやいや、俺は嫌だぞ!?!東、お前は?』

東『勘弁して死んじやいます。』

風龍『あ、それなら生き返った紫に食わせるのはどうだ?』

3人『それだ!!!』

なんか念話で変な会話をしている気がするが、まあいいか。とは言え、また作りた
いなあ……………。

t o b e c o n t i n u e d
◇

第30話 杜王町奪還作戦

—杜王町だった町—

ガルツチ side

作戦決行の日となり、皆は外に出た途端、驚く場所が変わっていた。

今までの杜王町の風景はなく、あったのは城壁ばかりだった。

仗助「俺達の町を……………!!!」

ガルツチ「戦闘向きじゃない人は、隠れ家に入っつて。それにしても、此処までとは……………」

未来「……………如何する？」

ガルツチ「いずれアーサー王を倒すことになる。どうせなら、正面突破がいいだろう。

簪達は、捕虜が居れば救出してあげて。アラヤ、鳳凰は僕達に着いてきて。フラン達も。

仗助達は……………」

仗助「好きに暴れさせて貰うぜ。奪還するなら、奴らを滅ぼしてからだしな！」

???「悪いが、私が居るかぎり壊させはしない！」

城門から現れたのは、鎧をつけ、大きな盾を持った青年がいた。

僕は直ぐさま、アルトリアの宝具である『約束された勝利の剣』とマッシュが持つていた『ラウンドシールド』を召喚させ、前に出た。

というか、この盾重いな……。多分重量再現させるためだとは思いますが、此処までのものか？

ガルツチ「行くぞ、どちらの盾が碎けるか、勝負だ！」

盾「こい、私は決して屈しない！」

ガルツチ「おい、敵の僕が言うのも難だが、その台詞は禁句だ。」

絶対エロ展開になりそうな気がしてならないんだけどなあ……………。

ガルツチ「ハッ!!」

盾「無駄だ！」

魔力を込めて剣を振るうも、『ラウンドシールド』が邪魔されていて、どんなに斬つても弾き返されてしまう。

ならば、之ならばどうだ？

ガルツチ『『シールドバニッシュ』!』

盾「!？」

ぶつかつたのか、相手は仰け反る。チャンスだ!

ガルツチ「風王鉄槌!!」

盾「くうう………!!!」

仗助「すげえ………。」

ガルツチ「反転！ヴォーテイガイーン卑王鉄槌!!」

盾「なっ!!」

未来「反転させた!?!」

ガルツチ『「デート・ア・ライブ」の精霊って、反転も出来るんだろ?その応用さ。」

盾「このままでは不味いですね、仕方ありません!」

真名、開帳——私は、災厄の席に立つ。

それは全ての疵、全ての怨恨を癒す我らが故郷。

顕現せよ!!『ロード・キヤメロットいまは遥か理想の城』!!!」

ちっ、ここで鉄壁の守りかよ!だったら、それを超える宝具で!!彼方が対悪宝具なら、

こっちは対善宝具!

ガルツチ「ギャラハット、反転!」

盾「まさか………。」

ガルツチ「反転、開帳——我は、厄災をもたらす者。

それは全ての痕、全ての怨恨を蘇らせし、厄災の故郷。

怨念よ、高らかに叫べ!!『ソード・キヤメロット・オルタナティブいまを滅ぼす城の災厄』!!」

『ラウンドシールド』は崩れ去り、剣と化した物は黒い光を纏い、そのままギヤラハットで斬る。瞬間、相手のラウンドシールドにヒビが入った。

盾「ぐつ……………、このお……………!!!」

深雪「ガルツチ！私も手伝う！災禍『呪いの雛人形』!!」

盾「こんなところで、こんなところでっ!!負けてたまるかああああああああ!!!」

盾から凄まじいほどの風圧が来た……………。それと同時に、相手のスタンドの損傷が激しくなっている。

ガルツチ「お前、いい加減にしろ！死ぬ気か!？」

盾「構わない！ここで死ぬのも本能だ!!!」

ガルツチ「馬鹿か!？スタンドが砕けたら、お前悲惨な事になるんだぞ!？」

盾「重々承知だ!!!」

駄目だこの騎士、意地でも死ぬつもりじゃねえか!？あーもー!!!自分が言うのも難だが、もうどうなつても知らんぞ!!!

ガルツチ「簪!!『ウルトラ・モンスター!』を頼む!!飛びつきりデカイのを頼む!!!城壁諸共吹き

飛ばす威力を持った怪獣を!!」

簪「え、ええええええええ!？そんなことしたら、ガルツチと深雪が!!」

ガルツチ「安心しろ、食らって死ぬほど柔じゃない!だから!!!」

side Change

簪 side

ベリアル『まだ気にしてんのか、簪。』

当たり前でしょ!?!もしホントにガルツチに当たったら、最悪――

ベリアル『阿呆、彼奴の力を見くびりすぎだ!彼奴の覚悟は、俺ですら恐れ多い程のものだぞ!それを無にさせるってのか!?!』

確かにそうだけど……………、でも!!

ガルツチ「簪!!!だったら、姉を超えようと思つて放て!!僕は君の姉はどんな人なのかは分からない。けど、今の君は、姉を超えている!後は、お前の覚悟次第だ!!!超えるべき姉を、今ここで見せつけろ!!!」

お姉ちゃんを……………、超える……………?!

ガルツチ「僕はな、兄さんを超えようとは思つたことはなかったが、実力的には既に、兄さんを超えていた。本当に超えようと思えば、兄さんを超えることは出来る!だから、今一度だけ、お前の覚悟を、姉に見せつけるんだ!!!」

そうだ……………、今の私はお姉ちゃんを超えようと頑張つてたんだ……………。未来や、ガルツチと出会つたおかげで、私は強くなつてきて……………。

本当に超えろって言うなら、私は……………、私は……………!!!

簪「私は、もう迷わない!!!!!!」

『complete! One of ability Install!!』

『モードハイパーモード形態超越形態移行。此より、『ウルトラマンズ光の戦士達』と『ウルトラモンスターズ大怪獣達』の使用が可能です。』

私の専用機から、自動音声が響く。

簪「行くよ!! 『召喚』!!」

『『ハイパーゼットン』!! 『ダークバルタン』!! 『キングジョーブラック』!!』

すると、私の後ろにその3匹が現れ大きく唸り声をあげていた。

盾「私は……………、アーサー王に恩がある！それを、仇で返すわけには、いかな
いんだ！！たとえ悪事を働いてたとしても、残虐非道な人だとしても、私は！！あの人を、守
るんだああああああああああ！！！！」

もう殆どが、ひび割れを起こしていて、何時割れてもおかしくないというにもかかわ
らず、彼は最後の力を振り絞って、仲間を守ろうとしていた。

私達からしたら、最早敵ながら天晴れだと思う。でも遂に、それが終わるときが来て
しまった。

彼のスタンドが砕け散ると同時に、悲惨な声をあげながら血飛沫を出していた。

私はそれに耐えられず、目を背けようとした。でも、何故か出来なかった。

ガルツチ「もう、終わりだ。ギャラハット……………」

盾「あ……………あ……………」

ガルツチ「アーサー王は、お前に取っっちゃ恩人かも知れないけど、それでも僕等は、倒
さなくちゃならないんだ。だから、悪いがここで死んでくれ。」

盾「ハハハ……………、そう……………ですか……………。アー……………サー

……………王……………も……………う……………し……………訳

.....(イ).....(ヤ).....。」

盾のスタンド使いは、一筋の涙を流し、息を引き取っていった.....。

side out

ギャラハット

真名 江ノ島盾

スタンド名『ラウンドシールド』

【破壊力：Z／スピード：―／射程距離：―／持続力：EX／精密動作性：―／成長性：E】

技 『ロード・キヤメロツト
いまは遙か理想の城』

見たい目 マシユが持ってた盾

防衛するも、守り抜く事出来ず

死亡リタイア

ガルツチ「……………トレス・オン『投影開始』」

何を思ったのか、ガルツチはスコップを投影し、アンジエロ岩の隣に掘り始め、人が入れるぐらいの穴となった途端、盾を抱え、その穴の中に入れ、そのまま埋め、石碑を建てた。

『アーサー王を守ろうとした英雄』

江ノ島盾

アンジエロ岩の横で眠る』

ガルツチ「行こう、杜王町を取り戻すために……………」。

t o b e c o n t i n u e d
◇

第31話 太陽の騎士

— ???
— 玉座 —

アーサー王「……………アグラヴェイン、戦況は？」

??? 「はっ、ランスロットは裏切り者により死亡、城壁の守りであったギャラハットは死亡。その他は此方の資料を……………」

アーサー王「……………やはりこうなるか。まあ、どちらにせよ、ガウエインが負ければ、今度は私だろう。」

??? 「いけません！王直々に言っでは……………」

アーサー王「アグラヴェイン、お前は本当に頼りになった。元より、これを決めたのは……………」

??? 「王よ、私の我が儘を付き合ってもなお、そこまで……………」

アーサー王「……………お前はすぐにあれの起動をしろ。」

??? 「ハッ！仰せのままに。」

—
???—

ガルツチ side

しかし、まさか兵士やら傭兵やら色々雇っていたとは思わなかったな。まあ5人で一掃したから、是非もないよネ。

ガルツチ「そろそろ玉座に近い、もうそろそろ——」

???「そこまでだ! 『エクスカリバー・ガラディーン 転輪する勝利の剣』!!」

ガルツチ『ロー・ア 熾天覆う十四の円環』!!!

いきなり炎の波が襲って来るも、14の花弁の盾を使い、防ぎきった。

???「なるほど、トリスタンを討っただけのことはあるな。」

ガルツチ「その聖剣、って事はガウエインか。」

???「ええ、初めまして。私はガウエイン、真名は『焰陽炎』、アーサー王の幹部です。」

深雪「そこを退け!」

陽炎「断る。通りたいのなら、私を倒してからにするが良い!! 行くぞ、『ソード・キャメロット』!」

ちつ、存在そのものをガウエインになる能力か。結構厄介なスタンドだな……………。

深雪「ここは私に任せて! 『トレイス・オン 投影開始』!」

え!? 何で僕の生命の樹の剣の投影出来るの!?

陽炎「たかがそんな物に、負けやしない！」

深雪「洪水『デリユーヴィアルメア』!!!」

おいおい、弾幕出すのかと思つたら本物の津波を引き起こしやがった!?

陽炎「水如きで、私の焰は消えん!!」

深雪「どうかしら? 『氷結傀儡』! 氷符『アルティメットブリザード』!!」

ガルツチ「あれつて、チルノのスペルカード!？」

深雪「まだまだこんな物じゃないよ! 冬符『ノーザンウイナー』!!!」

陽炎「くつ、愚かな攻撃をしたところで、私は負けん! 『忠義の剣閃』!」

拙い、何が拙いかというと、属性的に相性が悪い。そう、ポケモンで例えるなら、氷

技で炎ポケモンを攻撃するというぐらい相性が悪い!

まあぶつちやけ、うちには『ホワイトキュレム』を捕まえたこともあるけどね……………。

深雪「くつ、氷じゃ駄目って訳ね……………。だつたら!」

陽炎「太陽オオオオオオオ!!!」

深雪「キヤツ!？」

陽炎「不夜の力を、思い知るがいい!! 『転輪する勝利の—————』」

未来「深雪さん!!」

ガルツチ「お前が昼なら、僕は夜となろう!! 『不昼』!!」

陽炎「なっ!? 光が!？」

夜が現れたのか、彼が纏っていた光が弱められ、僕はそのまま斬り裂いた。

陽炎「ガハッ!？」

深雪「ガルツチ!？」

ガルツチ「月夜見尊の継承者だぞ? それぐらいの対策はしている! 今ここに日食が始まった。深雪さん、この刀を使え!!」

僕はすぐさま、月光・闇夜丸を深雪に投げつけ、その手に持った。

ガルツチ「其奴には太陽を斬り裂く力も備わってる。ついでだ、妖夢の力を使え!!」

深雪「つて、カード!?! いや、使い方はもう知ってはいるけど………」

陽炎「こんなところで、負けてたまるか!!」

深雪「『セイバー剣士』『インストロール魂魄妖夢』! 夢幻召喚!!」

深雪の服装は変わり、妖夢の服装へと変わった。そのままガウエインに走り、技を使おうとしていた。

陽炎「威力は落ちようとも、お前を倒せるなら十分な火力だ。これで終わりだ!

『エックス転輪する勝利のバー』

深雪「断迷剣『迷津慈航斬』

陽炎「ッ!？」

!!!!!!

深雪「ついでにもう1発！魂符『幽明の苦輪』!!」

うわ、深雪さんが二人になったよ。っていうか、もう一人は楼観剣と白楼剣の二刀流か。

W深雪「これで終わりよ!!剣伎『桜花閃々』!!」

未来でも驚くようなスピードを出した深雪は、目にも追いつかない斬撃を出し、そのまま鞘にしまった。

途端にガウエインは血飛沫と桜の花びらが舞い散りながら、倒れていった。

陽炎「こんな……………筈は……………。たかが……………、スタンド使いじゃない……………奴に……………負け……………」

深雪「悪いけど、貴方なんか私に勝てると思わないですよ。」

そして妖夢のカードが戻り、元の白と青のワンピースに戻った。

ガウエイン

真名 焰陽炎

スタンド名『ソード・キャメロット』

【破壊力：B＋／スピード：B＋／射程距離：E／持続力：A／精密動作性：Z／成長性：E】

装着型スタンド

見た目 fate／Grand Order ガウエイン 最終霊基

深雪に敗北 死亡^{リタイア}

深雪「ありがとう、ガルツチ。」

ガルツチ「気にするな。」

アラヤ「深雪お姉ちゃん、格好良かった！」

鳳凰「私も!!」

深雪「……………あ、ありがとう。」

今めつちや震えてねえか? つていうか、深雪さん。何か目覚めかけてない? とりあえず、刀とカードは戻り、ガウエインは倒れた。後は、アーサー王だけだな……………。

—— ??? 玉座の間 ——

僕は玉座の間に着くと、そこにはまさしく王者と言うにも相応しいような服装をした女性がいた。

??? 「その様子、どうやらガウエインを退けたようですね。それと、おやおや。これは懐かしい顔がいますね。」

深雪「やつぱりアンタね、まさか転生していたなんて思わなかったよ。」
ガルツチ「知り合いなのか？」

深雪「ええ、本当に驚いたわ。誰に転生してもらったの？『門真小百合』。」

小百合「誰とは、また随分な言い草ですね。深雪。でも教えましょう、転生してもらったのは、全王様よ。」

深雪「全王様？」

ガルツチ「それって……………、まさか母さんの!？」

おい母さん、どういう事だ!？」

全王神『あの弟、どこまで私に恨みを持つてるのよ……………。巫山戯た幻想をお持ちのようだね、ホントに!』ガンツ

あれ?なんか珍しく苛立ちが聞こえる気がする……………。

小百合「全王様から直々に転生してくれて、しかもスタンドは fate のアルトリア 全員の宝具をくれたわ。貴方をもう一度絶望に陥れるために。」

深雪「何処までも不愉快ね、私の友達を奪って、何がしたいの!!」

小百合「決まってるでしょ? 貴方に何度も絶望に落としてあげたいの。何度でもね。」

深雪「……………なんて吐き気を催す邪悪なの。最低最悪なアマだね。」

小百合「嬉しい褒め言葉ね、それが遺言って事でいいわ。どのみち、全王様から命令

されてるの。『クソ姉貴に転生した者共を刈り尽くせ』、つてね。」

ガルツチ「……………もういい、喋るな雑種。」

小百合「へ？」

今のでわかった、此奴は二度と転生させない方がいいな。

ガルツチ「母さんを侮辱したのは結構だが、あれでも僕の母親なんでね。たかが特典如きに、俺達を倒そうなど、無駄なんだ。無駄無駄。」

小百合「ふーん？私に倒せると言うのか？アヴァロンの宝具を持った、この私に。」

ガルツチ「勝てるね、何しろ僕は……………そのアヴァロンその物を消す力を持つてるんだ。お前がどんなスタンドを使おうが、お前には決して到達できない領域に居る。」

その根端を見せてやる。」

さてと、見せてやろうかな。僕の力を……………!!

ガルツチ「『I am the bone of my blade.

shadow is my body, and phantom is my blood.

I^幾 h^多 a^の v^戦 e^場 c^を r^a e^t a^越 t^え h^て o^不 u^敗 s[.] a^敗 n[.] d[.] b[.] l[.] a[.] d[.] e[.] s[.]

U^た n^だ k^一 n^つ o^の w^の t^悪 o^を e^持 v^た i^た l^ず,

N^た o^だ k^一 n^つ o^の w^の t^正 o^義 j^を u^持 s^た t^な i^い c[.] e[.]

U^た n^だ a^だ w^一 a^つ r^の e^つ o^の f^開 d^に a^墮 r^ち k^ず n^ず e^ず s[,]

N^た o^だ r^一 a^つ w^の a^光 r^を e^持 o^つ f^こ l^と i^な g^し h^し t[.] 『』

未来「あれ？詠唱が、全く違う。模擬戦に使ってた詠唱と、この詠唱は一体……。」

T I なら
 h 今
 i ば、
 s こ
 a 我
 v が
 e 生
 i こ
 s 涯
 t n に
 h o 意
 e r 味
 o を
 n g な
 r e す
 t 広
 h げ
 e ため
 o n に、
 l y げ
 p よ
 a 上
 t う
 h .

e 自
 x 由
 c 元
 e の
 d o
 i n 空
 n g に
 d i 飛
 m び
 e n 超
 s i 立
 o n .
 f 次
 l y 地
 c r a 地
 w l を
 o 元
 v e r 這
 t h e r を
 e s t 飛
 h e i 超
 n o f び
 f r e e 立
 e d 超
 o m .
 y け
 e t , と、
 T h a t そ
 の
 s u f 苦
 f e r し
 r i n g し
 a l s o 解
 u n 空
 l e a 虚
 s h e s 放
 k , は、
 , 貴
 , れ、

E 永
 v 遠
 e r l a の
 s t i 苦
 n g し
 s u f し
 f e r み
 r i n g を
 g . 背
 p e r 負
 r s o n 、「
 h a s 彼
 a s t 〓
 t r a y , 〓
 , の
 者
 は
 自
 分
 を
 責
 め、

らね。
 そりやそうだ、何しろこれから起こるのは、” 第零宇宙 ” を巻き込むぐらいの力だからね。

S
o

a の
s

I 意

p 識
r
a
y, は、

『UNLIMITED DIMENSION WORKS』
無眼を超え、刃で出たて、いいた
!!!!!!!

詠唱が終わると同時に、自身の周りに光が満ち溢れ、世界を、いや全ての次元を繋げていった。

sidechange

全王神side

じやな。

本音「でも、凄い……。なんだか、うっとりしちゃう……。」

愛梨「……………うん、私も思う。」

紅虎「へへっ、やっぱりガルツチって奴は、すげえ奴だったんだな……………」

レテイシア「白夜叉、お前はこの力を与えたというのか？」

白夜叉「いや？確かに世界変換の力は得させたが、この力は彼奴自身が手にした力じゃ。」

フラン「ホントにお兄ちゃんったら、こんな力を持つてるなんてね。」

こいし「えへへ、さっすがお兄ちゃん。」

イリヤ「これは、シロウお兄ちゃん達も、驚いてるだろうなあ……………」

sideChange

ギルガメツside

我が雑種め、よもや此処までの力を……………。

エミヤ「なんて事だ、私の固有結界を超えているだど!?!」
士郎「遠坂?」

凜「……………もうこれ、封印指定されてもおかしくないでしょ。いやされない方がおかしいわ!?!何よこれ!?!固有結界じゃなくなってるじゃないの!?!」

クロウ「ククク、流石ガルツチだ。」

アイリ「これ、ガルツチの宝具でよくない?」

切嗣「うん、僕も思う。というか、第4次聖杯戦争で召喚されたら、ルーラーが呼ばれてもおかしくないよ。」

さとり「うん、これがこいしだったら、お姉ちゃん勝てないわ。」

レミリア「私も、此ホントに勝てない。」

ルツチ「……………ガルツチ、頑張れ。」

さあ、貴様の力、どれ程の物か、見定めて貰うぞ!!我が雑種!!

side Change

風龍（作者） side

あーうん、知ってた。知ってたよ、ガルツチの力。でもね……………。

風龍「まさか始原の城を覆い尽くすなんて、思わなかったよ。」

士「ガルツチ、お前何処まで行くんだ……………」。

ユウスケ「抑止力全く働いてねえ……………」。

夏海「私もそう思う……………」。

鳴滝「おのれガルツチ！このような美しい世界に変えるとは!!!」

士「鳴滝、それ罵倒じゃない。」

アラン「つていうか、戻せるのかな？」

風龍「キングがいるから、一応問題ないかな？」

つていうか、こうも全てを覆い尽くすつて、相当規格外な奴を作っちゃったなあ

……………。

sideChange

ガルツチ side

小百合「なっ、そんな馬鹿な!!なんだこの固有結界は!!」

アラヤ「母さん、これは一体!?!」

アラヤも鳳凰も、未来も深雪さんも、敵であるアーサー王も、恐らく全員は驚いているだろうな……………。

ガルツチ「まあ、驚くのも無理はない。今次元は、我が心像世界へと変わった。死体よ血塗れだった草原は、今では蛍のような光が満ち溢れる武器が刺さった草原に変

わった。

これが僕の最終進化を遂げた『無限の剣製と幻影の世界』。

その名も『次元アンミリテッド・ディメンションを超える無限の刃製』！

小百合「なるほど、確かにあの英雄王も賛美を送るだろう。だが、そのような神妙な世界で何が出来る？ 私のスタンドは、全アルトリアの宝具を全て取り揃えた能力を持ったスタンド、『ステイナイト』の力に勝てるのも？」

ガルツチ「勝てるとも、この宝具を使用した時点だな。最早お前の真作の能力は、僕の贗作を超えている。その神髄を見せてやる。」

未来「……………ガルツチ、僕も手伝うよ。変身！」

『FINAL INFINITY RIDE <PERFECT INFINITY
DECADE>!!』

深雪「決着を着けよう、小百合。貴方を倒し、円卓の騎士を壊滅させてあげる！」

小百合「……………許さない、此処まで侮辱されたのは初めてだわ！ 覚悟しなさい!!!」

アラヤ『DEAD OR ALIVE』！

鳳凰「お母さん、未来お父さん、アラヤ、深雪さん。私がサポートするね！ 『Bor

n to Love You!

ガルツチ「行くぞ、騎士王。死ぬ覚悟は充分か？ 『ムーンライト・アウターヘル』!!」
小百合「ハッ、思い上がったわね。」

今ここに、深雪さんにとって、因縁の戦いが始まった。

to be continued

第32話 VS転生者 騎士王

ガルツチ side

小百合「行くわよ、ラムレイ！ドウン・スタリオン！」

ランサーのアルトリアか、どちらも強力だが、そんなの届くか！

深雪「『トレス・オン投影開始』！グングニル!!」

アラヤ「レミリア姉さん、力を貸して！夜符『デーモンキングクレイドル』!!」

アラヤは大鎌を回しながら体当たりを仕掛け、深雪さんはグングニルを投げつけた。

小百合「無駄です！『W最果ロクてンにて輝ゴミける槍ニ』!!」

黒い閃光はアラヤにぶつかり、アーサー王が乗っているドウン・スタリオンは突撃し、

深雪さんが投げたグングニルに当たった。

アラヤ「こんな力………、父さんの修行と比べれば、生温い!!」

深雪「この世界を変えてくれたおかげで、私も全力の投影術が使える！神槍『スピア・

ザ・グングニル』!!」

アラヤ「深雪姉さん!!」

深雪「ええ！」

ん？何をするんだらう？

アラヤ「我が大鎌は、魂を刈り取る。死を恐れぬ者よ、我が力に挑んで来るが良い!!」

深雪「擬似宝具『門矢アラヤ』!」

アラヤ&深雪「『ジャッジメント・デス死神の審判』!!」

小百合が出した宝具は、完全に打ち破られ、2人の小百合は消滅し、次のアルトリアが来た。WヒロインXだった。

ヒロインX「どうも、ヒロインXです。」

ヒロインXオルタ「何で私まで……………」

ヒロインX「本当なら私の顔、またはセイバーを滅ぼすつもりですが、先ずは貴様達を殲滅してやりましょう!」

今思ったけど、何で此奴らを召喚出来るの？

小百合「言ってなかったか？彼女達を召喚する事ぐらい、容易いのよ。」

ちっ、だが英霊ならやりやすい!

ガルツチ「行くぞ未来!」

未来「うん!」

未来ガル「来い、セイバースレイヤー!!僕らが相手だ!!」

ヒロインX「セイバー滅ぶべし!特にお前達を殺す!!」

ヒロインXオルタ「手加減しません、行きます!!」

僕はアサシンのアルトリアを、未来はバーサーカーのアルトリアとの戦いを始めた。

ヒロインX「その剣……………、私の銀河流星剣だ?!?」

ガルツチ「お前がセイバーなら、これで殺すことも容易いだろう。己がセイバーになるうとしたことを、そして生まれたことを後悔するがいい!!」

ヒロインX「貴様……………、やはり危険人物ですね。」

ガルツチ「全てのセイバーを守るために、セイバースレイヤーを殺す!セイバースレイヤー滅ぶべし!!」

ヒロインX「なるほど、セイバーを守る守護神か……………。いいだろう、だったら来るが良い!セイバーガーディアン!」

力を貸して、カラリス!アナザー!!

ガルツチ『グラントセイバー冠位剣士』、『カラリス』!『アナザー・ホライズン』!『グラントユナイトインストリアル融合冠位夢幻召喚』

!!

僕はその二つに融合され、あの2人の服装に変わった。すると、懐かしい声が聞こえる。

カラリス『久しぶりね、ガルツチ。』

アナザー『ああ、本当に久しぶりだ。』

カラリス!? アナザー!? お前ら、何で!?

カラリス 『そういえば言っただけじゃなかったわね。』

アナザー 『実はというと、其奴を使えばお前をサポート出来る仕組みにしてるんだ。』
な、なんつう仕掛けだ……………」

カラリス 『それより、今から戦闘でしょ? あの素早さ追いつける?』

勿論だ。火力は殲滅^{シュバ}せし滅亡^{ルド}の剣とアナザーの武器で対抗出来る。

カラリス 『そっか、だったら言うことは一つよ。』

アナザー 『ああ。』

『『全力で、敵を葬れ!!!』』

勿論だ!!

ガルツチ 「ブースター・オン!!」

ヒロインX 「星光の剣よ…赤とか白とか黒とか消し去るべし!!!」

sideChange

簪side

オーブから貰ったのは、輪っかのようなものがついていて、翼状のパーツと手持ちグリップが付いているものを貰った。

本音「これ、なんだろう？」

オーブ『それは、オーブリング。今は力を失っているが、彼らの力を借りれば、何時でもウルトラマンになれるようになるぞ。』

オーブ「皆？」

オーブ『ガルツチ、未来、本音、オーブ、レティシア、白夜叉、リサ、アラヤ、鳳凰、フラン、こいし、イリヤ、そして深雪の事だ。』

フラン「つまり、私達の力を……………」

こいし「このリングに力を込めれば……………」

イリヤ「簪ちゃんは、何時でもウルトラマンになれるって事？」

オーブ『その通りだ。』

って事は、私……………本物のウルトラマンに？

オーブ『では、渡した物を渡したことだし、そろそろ行くとしよう。幸運を、ウルトラマンセラフィムオーブよ。それが、君がなるウルトラマンだ。』

それを告げた後、ウルトラマンオーブはそのまま宙へ飛び去り、消えていった。

イリヤ「凄いなあ、簪ちゃんがウルトラマンになるのか……………」。って、こうしちゃ

いられない！早くお兄ちゃん達のところに行こう！」

簪 「そうね、皆！急ごう！」

まだアーサー王と戦ってる最中かも……………、今間に合えば助けることが出来る！
待ってて、未来、ガルツチ、アラヤちゃん、鳳凰ちゃん、深雪さん！

sideChange

ガルツチ side

ガルツチ 「如何した？もう限界か？」

ヒロインX 「くそっ！私の無銘勝利剣が……………、ガーディアンに届かなかったというのか!？」

ガルツチ 「そうだ、これで終わりにしてやろう。我が刃は、理想郷を守るべく作られた剣。そして、此方の刃は、友を守るべく作られた剣。」

今ここに、アンドロイドの意志を見せてやる！

ガルツチ 「『友と誓いし悠久なる剣』!!」

ヒロインX 「ガハッ!？」

ガルツチ 「もういつちよ!! 『絆を結びし永劫なる剣』!!」

ヒロインX 「グフツ………………。あ、悔りましたね。ですが、覚えて

おきなさい。私は必ず、貴方を倒す………………。絶対に、絶対に!!」

ガルツチ 「………………。楽しみに待つてるよ。アルトリア・スカイウォーカー・ペンドラゴン。」

ヒロインXが青い霧となつて消滅すると、未来が戦っていたヒロインXオルタも青い霧となつて消滅した。

未来 「さあ、あとはアーサー王だけだね。」

ガルツチ 「うん。」

小百合 「あの2人を倒せたのね………………。でも、仮に倒せたとしても、私の『全て遠き理想郷』に勝てるのかな?」

深雪 「『投影開始』! 虹霓剣!」

あれつて、フェルグスが持ってたオリジナルのカラドボルグ?

深雪 「貴方が次元を超える防御を仕掛けるなら、私はこのドリルで、それを貫いてあげる! 『貫通螺旋虹霓突』!!!」

ガルツチ「皆!!」

フラン達が放つ技が、虹霓剣に集まっていき、遂に最強の防御が打ち破られた。

小百合「零距离宝具を受けるがいい!! 『約束された勝利の剣』!!!」

つと思つたら最後の足掻きと言わんばかりの、エクスカリバーを放ってくる。が、それも虚しく、全員の力が宿った虹霓剣によつて、宝具は打ち砕かれ、アーサー王を貫いた。

小百合「……………絶望に落ちるのは、私の方だったのね。」

深雪「私の勝ちよ、小百合。」

小百合「ええ、そして私の……………敗北ね。」

貫いた部分から、血飛沫や内蔵が落ちていき、彼女の口から血を吐いていた。普通に考えたら、即死と言つても過言じゃないのに、彼女は喋り続ける。

小百合「参ったわね……………、これで……………アグラヴェインを……………、庇うことが、出来なくなっちゃった。」

深雪「え?」

小百合「良いこと、教えてあげる。元々、このような残虐非道を提案したのは、アグラヴェイン。提案した理由は、私の恋人だからよ……………。生前の、彼にそっくりで……………」

深雪「……………」。

小百合「でも、その恋人を、貴方が奪った！だから報復で、貴方を絶望に陥れたかったのよ！転生しようが、なんだろうが、私の恋人を奪った貴方を!!」

ガルツチ「黙れ雑種!!」

小百合「!?!」

ガルツチ「それが報復だと？恋人を奪った？それで其奴の恋人は喜ぶのか!」

小百合「そ……………それは……………」。

ガルツチ「今頃、泣いて居るぞ？こんな歪んだ性格になったお前を見て、大泣きしてはるはずだ。恥ずかしくないのか!?!人の不幸を……………」。

あかん、これモロブルーメンじゃん。

小百合「……………泣いている、か。あの泣き虫……………、心配症め……………」。

んな、私を……………今も愛してるなんて……………」。

まあいい、どうせ自業自得……………ね。でも、出来れば……………アグラヴェイン

の……………幸せも、み……………た……………か……………つたな。」

深雪「小百合……………、あんた……………貫いてもなお、立っているっていうのか?」

だが、何故だか知らないけど、彼女の顔に、一筋の涙と、優しい笑みが零れていた。

アーサー王

真名 門真小百合

スタンド名『ステイナイト』

【破壊力：SS／スピード：B＋／射程距離：E／持続力：A／精密動作性：A／成長性：E】

能力 全アルトリアの宝具の使用、または召喚する事が出来る

死亡^{リタイア}

さて、あとはアグラヴェインだけだけど……。どこに？

『ズドンツ!!ズドンツ!!ズドンツ!!』

つて、なんだありや!?

??? 「王よ、貴方のご慈悲、しかと見させて貰いました。そして、よくも私の王を!!!」

うげえ……………、なんかやばいロボットが出来上がってるな……………。

??? 「仇を討たせて貰う！そして、この世を変えてみせる!! 善意も悪意も何もない平和にさせるために!! 我が名はアグラヴェイン。真名『八坂矢峰』だ!!」

つまりラスボスはロボトって奴かよ。うーん、『例のアレ』を使うわけにもいかないし、如何すれば……………。ってそういえば。

ガルツチ「簪、それは？」

簪「あ、そうそう忘れてた。これオーブリングなんだけど、力がなくて……………。」

未来「え……………。それ如何するの？」

簪「これを皆の力を宿せば、使えるようになるんだって。」

ガルツチ「どうやって？」

フラン「簡単よ。みんな、簪ちゃんが持つてるのを掴んで。」

みんなはその通りに、リング状の部分に触れると、突然光が溢れ出し、まるで全ての力が、そのリングに集まるかのように、輝いていた。

『Awakening!』

途端にそのリングが光り出し、簪の服装が黒いピッチリとしたスーツ姿に変わり、一

枚のカードが現れた。

『セラフイムオーブオリジン』

そう書かれていた。

簪「ありがとう、みんな。あとは、私がやる!!」
ガルツチ「大丈夫、君ならやれる。」

簪「ありがとう、ガルツチ。」

未来「頑張って、簪。」

リサ「お母さん！信じてるよ！」

簪「うん！」

さあ……………。

4人「「「やっちゃえ!!ウルトラマン!!」」」

簪「セット！」

『覚醒せよ！セラフイムオーブオリジン!!!』

『standby complete』

簪 「ウルトラマンセラフイムオーブ!!!」

簪の姿は一変し、ウルトラマンオーブとよく似た姿へと変わった。そして、簪は巨大化していき、900m位大きくなっていった。

後ろには熾天使のように12枚の翼が生えていて、凄く神々しいウルトラマンへと変わった。

矢峰 「ウルトラマンオーブだ?!」

簪 『いいえ、私はウルトラマンセラフイムオーブ。貴方の野望を止める者よ。』
そして簪の手元には、剣らしき物を持っていた。

簪 『未来を、ガルツチを、リサ達を、仗助さん達を、世界を救うために!!貴方を止めてみせる!!行くよ、最後の円卓の騎士!!エネルギーの貯蔵は充分か?』

矢峰 「思い上がるな!!小娘風情がああああああ!!!」

さあ、見せてくれ、簪。ヒーローの一端を!

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
→

第33話 熾天へと輝く復活の剣

簪 side

凄い、私本当にウルトラマンになっちゃった！つて、そんなこと言ってる暇ないよね。今は、相手に集中しないと！

矢峰 「おどりやあああああああああ!!!」

簪 『ハッ!』

アグラヴェインが乗っているロボットは速そうだけど、まだ捉えられるぐらいの速さだったので、オーブカリバーを使って、その右腕を叩き切った。

矢峰 「無駄だ、このロボットは再生する。バイドとゴジラの細胞で出来たこのロボットは、まさに無敵のロボットになったのだ!」

ゴジラの細胞?!しかもバイドってちよつと大丈夫なの!?

矢峰 「まあ、正直これに乗るときは覚悟を決めたよ。王のためなら、喜んでこの命をくれてやろうとな!!」

簪 『とんだ命知らずなのね……………、いえ、それだけアーサー王の事を思ってる行動なのね。』

矢峰「その通りだ！だから、我が理想のために、まずはお前が死ぬが——」
 未来「ガルツチの友人たち、ルツチさん、力を貸して！」

『ELEMENT PHOENIX！INFINITY RIDE！』

ガルツチ「未来！アレを！」

未来「分かつてる！」

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE<PERFECT INF
 INITY ELEMENT PHOENIX>!!』

すると、私と同じぐらいの大きさの不死鳥が現れ、ロボットを傷つけていく。

ガルツチ「絆符『レインボーフェニックスレイン』!!」

その不死鳥は9匹となり、そのロボットに攻撃していく。いえ、再生すればまた叩き切るの繰り返し、遂には再生力が鈍くなり始めた。

ルツチ「みんな！アレ行くよ!!」

8人「!!!」
 「おう（ええ）!!」
 「!!!」

ガルツチ「簪！」

簪『分かった!』

私は炎の紋章のところまで止め、トリガーを引いた。

『オーブ、フレイム!!』

途端に刃は煉獄の如く燃え上がり、不死鳥を囲むように輪つかを作っていった。

簪『不死鳥の如く、彼の者を焼き尽くせ!!』

ガルツチ「煉獄、深海、疾風、大地、迅雷、極寒、光明、暗黒、そして幻影!! 全てを貫くは、我ら不死鳥の刃!!」

簪『^{オーブカリバーガラティン}転輪せし復活の剣!!』

ガルツチ『^{エレメンタルフエニック}永遠に繋ぐ未来への不死鳥!!!』

炎を纏わした虹色の斬撃は右肩を切断していき、そこから再生することはなかった。
ブレイズ「さすがガルツチだな。」

アビス「相変わらず、凄まじい力です。」

レイス「ありがとう、簪ちゃん! 手伝ってくれて!」

カレン「いや、手伝ってたのは私達でしょ!」

レイス「そうだった。(ゝω・) テへ」

カレン「テヘじゃない!」

ノーム「はっはっは! まあよいではなか!」

マルフォイ「簪だったか? なかなか凄い力だな。これからもガルツチ達を守ってやってくれ。」

アルファス「さあ、また動きそうだけど、簪。頑張ってください！」
 ルツチ「簪さん、どうかこれからもガルツチの事、お願いします。」

それを伝えた後、ガルツチの友人らしき人と、ルツチさんは黄金の霧となつて消えていった。それにしても、凄かったなあ……………。

矢峰「ッ！右腕が修復出来ないだど!?だが、左腕は生きて——」

未来「今度はこれだ!!」

『SCARLET FAMILY：INFINITY RIDE!』

今度はフラン達のご家族、つてあら？DIO達が居ないんだけど……………。いえ、多分あの頃の家族つて事なのかな？

フラン「ウフフ、今度は私の番。簪ちゃん、一気に行くよ!」

簪『あ、うん!』

今度は水の紋章のところまで止め、トリガーを引いた。

『オーブ、ウォーター!!』

するとあのロボットは水の中に閉じ込められてしまい、身動きが取れなくなつていった。

矢峰「なっ、何故動かない!？」

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE<PERFECT INF』

INITY SCARLET FAMILY!!」

美鈴「さあて、久々に行くわよ！華符『破山砲』!!」

パチュリー「全盛期の魔法、受けてみなさい！日符『ロイヤルフレア』!!」

咲夜「お掃除の時間です。傷魂『ソウルスカルプチュア』!!」

レミリア「貴方の運命は、既に決まってるわ。宝具開帳！『突き穿つ神槍』!!」

フラン「我が剣は災厄をもたらず剣。ロキの名を挙げ、今ここに煉獄の厄災を起こそう！」

簪『浄化の水刃よ、彼の者を斬れ!』

フラン『『災厄へと導く破壊の剣』!!』

簪『『陽光煌めく復活の剣』!!』

フランの家族と私の斬撃は、今度は左肩部分を切断させ、両腕が使い物にならない状態に追い込んでいった。

矢峰「バカな、奴らの力………これ程までに!？」

美鈴「ヤッホー！美鈴大勝利!!」

咲夜「なわけないでしょ、馬鹿美鈴。」

美鈴「あてっ!?!酷いですよ咲夜さん………。」

パチュリー「未来、ありがとう。私の全盛期の頃に召喚してくれて。簪さん。これが

らも、フランの事、よろしくね。」

咲夜「簪様、お役に立てたでしょうか？ 立てたのでしたら、私は嬉しいですよ。」

レミリア「さて、私も戻るわ。簪さん、私は応援してるわ。それとフラン。お姉ちゃん寂しいよ！ 帰って——」

ええええ………、レミリアさんがカリスマブレイクしちゃったんだけど、如何すれば良いの？ って思っていたら、フランのご家族はすぐ赤い霧となって消えていった。

矢峰「クソ！ クソ!! だが、両腕が使い物にならなくとも、まだこっちの兵器が残ってる!!」

ちよつと、それってゴジラで言う放射熱線じゃ!?

矢峰「はっ s——」

??? 「させないわよ! 『深淵^アの核融合^{スノ}』!!!」

謎の声と共に警報がなり、放射熱線が放たれると、その人が付けているものから、灼熱のような熱さを持った閃光が放たれ、ロボットが放つ放射熱線が貫かれ、頭部が破壊された。

未来「こいし、無意識とはいえ幾ら何でも僕が出そうとしていたのを勝手に取つて入れないでくれる?」

こいし「えへへ、ごめんなさ〜い。」

未来「もう……………」

ガルツチ「ごめん、こいしが勝手なことを……………」

こいし「それじゃ、行ってきまうす。」

そしてこいしが私の目の前に現れると、3回目のあれが来た。

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE PERFECT INF
INITY EARTH SPIRIT FAMILY∨!!』

お空「さあて、最大級の核融合を放つよ！滅&爆符『グリーザゼロエクスプロシヨ
ンアルティメットエクスフレア』!!!」

お燐「あなたに、地獄を……………」
『デッドコーワールド死体繁華街』!!』

さとり「貴方には、トラウマ級の宝具を与えます。『アルテマウエボン極光の斬撃』!』

こいし「簪ちゃん!」

簪『今度はこつちね!』

次は風の紋章のところまで止め、トリガーを引いた。

『オーブ、ウインド!!』

こいし「此よりは地獄。私は風、霧、無意識。恐怖の殺戮を、ここに!!」

簪『風よ、舞い上がれ!!』

こいし『殺戮遊戯』!!』

簪『オーブカリバ・ストライクストラッシュ風 帝 鉄 槌』!』

風を起こし、ロボットを中に上げるとこいしは神速の如く素早く斬り裂き、3人が放つ閃光が、ロボットに当たり大爆発を起こしていった。

こいし「やった!」

ガルツチ「油断するな!!こいし!!」

私も倒したかと思った。だけど、違った。爆風が消えると、そこにはロボットの姿がなく、最早バイドとゴジラが組み合わさった怪獣へと変貌していた。

お空「ありやあ、あれはもうどうしよもないね……………」

お燐「これもう、死んでるか生きてるのか分かんないねえ……………」

さとり「こいし、あの時酷いこと言って、ごめん!こんな時で謝るのも——」

こいし「いいよ、お姉ちゃん。私は知ってるから。私は、誰よりもお姉ちゃんの苦しみ、孤独を、知っているから。」

さとり「こいし……………」。簪さん、未来さん、皆さん。どうかこれからも、こいしの事、よろしくお願いします。」

いた。

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE PERFECT INFINITY FATE/STAY NIGHT SEVEN SPIRIT AND EMIYA FAMILY!!』

全員「長つ……。」

うん、私も思った。長すぎでしょ？

士郎「行くぞ、アーチャー！」

エミヤ「ああ。我が骨子は捻れ狂う!!」

士郎「輝け、失われた聖剣。遥か届かぬ理想を、今ここに！」

アルトリア「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるが良い！」

クー・フリーン「行くぞ。この一撃、手向けとして受け取るがいい!!」

メデューサ「優しく蹴散らしてあげましょう。」

小次郎「秘剣——!!!」

メデア「一気に決めますわよ！」

ヘラクレス「我が武術、ヒュドラを穿つ武術!!」

切嗣「さあ、着いてこれるか？」

アイリ「白き聖杯よ、我らに力を！」

アイリヤ「簪ちゃん!!」

今度は大地の紋章をとこころに止め、トリガーを引いた。

『オーブ、グランド!!』

簪『大地よ、彼の者を打ち砕け!!』

アイリヤ「我が魂よ、絆よ。永遠となれ!!」

アイリ『ソング・オブ・グレイ
「白き聖杯よ、謳え!!」』

切嗣『時のある間に薔薇を摘め!!』

士郎『偽・約束された勝利の剣!!』

アイリヤ「此が私の宝具! 『我が魂と絆を繋げる永遠の剣!!』

アルトリア『約束された勝利の剣!!』

エミヤ『偽・螺旋剣!!』

クー・フリーン「牙を向け! 『突き穿つ死翔の槍!!』

メデウス『騎英の手綱!!』

メデア『神官魔術式・灰の花嫁!!』

小次郎『燕返し!!』

ベリアル『へっ、彼奴をどうにかするんだろ？手伝うぜ！』

キング『今回は初のウルトラマンの仲間になった記念だ。私も羽目を外そう！』

ゼロ『お、親父が羽目を外すなんて、珍しいな。』

ゾフィー『確かに。』

凄い、でも此過剩戦力じゃない!?これ!?いやこつちも十分過剩戦力だけど……………。

ガルツチ「さあ、ど派手に行くぜ!!!」

全員「おう!!」

『FINAL INFINITY ATTACK FOAM RIDE へALL T

HE WORLD<!!』

皆の力、お借りします!!

『解き放て、オーブの力!!』

簪『束ねるは星々の息吹、輝ける光の奔流！次元を越え、大切なものを護るために、今

ここに剣を振るおう!!』

此が、私の全て!!

簪 『熾天へと輝く絆の剣』

!!!!!!

』

未来「『星光の破砕砲』!!」

ガルツチ「『善悪・鶴翼三連』!!」

フラン「『災厄へと導く破壊の剣』!!!」

こいし「『殺戮遊戯』!!!」

イリヤ「『我が魂と絆を繋げる永遠の剣』!!!」

鈴美「『零に戻りし無の剣』!!」

オーフィス「『夢現へと連なる閃光』!!」

白夜叉「『アルティメットブラスタ』!!!」

レティシア「『ギガントドラゴニックダブルスラッシュ』!!」

本音「『アース・オブ・ザ・スパーク』!!」

深雪「『大魔砲』『ファイナルダブルダークマスタースパーク』!!!!!!」

深雪「安らかに眠りなさい、……………八坂矢峰。」

アグラヴェイン

真名 八坂矢峰

スタンドなし

簪達に完全敗北 死亡

t o b e c o n t i n u e d
⇩

第34話 月の花

―杜王町 病院―

ガルツチ side

あれから一ヶ月、簪はまだ病院で眠っている。無理もないだろう。あれだけの力を使えば、バツタリと倒れない方がおかしい……………。

そして杜王町だが、あの時円卓の騎士が破壊された場所は、2週間ぐらいで復興できた。まあ、殆ど僕がやりましたがね……………。

愛梨さんと紅虎さんかというと、何でも円卓の騎士として自首したそう……………。いい人なのに……………。

未来「……………」。

ガルツチ「大丈夫、簪は起きるよ。」

未来「でも……………」。

ガルツチ「死んだわけじゃないんだから、気をしっかり持とう。な？」

未来「そう……………だね。」

しかし、一番の問題は未来のシヨックだな……………。この一ヶ月間、未来を励ます為

に色々頑張ってたんだよね……。あのショックは凄まじかった。

『着メロ IS ed曲『SUPER ∞ STREAM 更識姉妹版』く♪』
 ん？誰からだ？

ガルツチ「ちよつと電話してくる。」

未来「うん……………」。

僕は屋上のところにワープし、そこで電話をかけた。

???『もしもし、初めまして。』

ん？なんかクロエと似たような声が聞こえる……………。

ガルツチ「どちら様？」

???『あ、名乗ってなかったね。私は簪の姉、更識楯無よ。妹の事が気になって……………。』

ガルツチ「彼女の事でしたら、まだ眠ってます。もう一ヶ月ぐらい……………」。

楯無『一ヶ月!』

ガルツチ「おい、頼むから電話越しで大声は止めてくれ。」

楯無『ご、ごめん。それで大丈夫なの?』

ガルツチ「見たところ後遺症はない。力の使いすぎて、眠ってるだけさ。まあ、あれだけの力を使えば、眠らない方がおかしいさ。」

楯無『そつか……。でも、参ったねえ……。ありや私をずば抜けて超えちやつてくれたよ……。遠くから見ているとは言え、簪には追い抜かれちやつたし……。』

もうアレは、姉に勝る妹だね。』

ガルツチ「そりやあ未来と一緒に旅をしているからね。つていうか思うんだが、何で僕の番号知ってるの!？」

今更だけど、何で番号も知らないはずなのにかけられたの!?!何で!?!

楯無『そりやあ勿論、束が教えてくれたよ。』

ガルツチ「あんにやろく……。いつの間に番号を……。後で触手&媚薬責めしてやる。」

楯無『そこまで……。?まあ良いわ。』

束『ちょ!?!何で私酷い扱いなの!?!』

ガルツチ「そして何気に念話してくるな、束。追加として快樂責めだ。」

楯無『うわあ……。エグイ。』

束が解せぬつて言うてるが、デモ僕二ハ関係ナイ関係ナイ。

楯無『まあ良いとして、もし退院したら電話お願いね。』

ガルツチ「了解。刀奈さん。」

はなんて言うのかやら……。実際あの子って、シスコンなところがあった……。ちよつと映像があるから、見てみて。』

ミスト『榎無さんから送られた映像があるよ。見てみよう、兄や。』
了解、さてどんな様子が——

『ハアハア、本音のばんちゅクンカクンカ——』ピッ

……うん、なんか疲れてるのかな？今変質者っぽい人が居た気がする。もう一度再生つと。

『ああああああああああ、本音ちゃん何故行っちゃったの!?お姉ちゃん寂しくて寂しくて死んじやいそうだよ……。もし未来のお嫁さんになるなんて言ったら、私は如何すれば良いの!?これからの私は如何生きれば良いの!?あの子が幸せならそれでいいけど、もし苦しんでいたら、未来を殺しても取り返さないと……。つていうか私の本音ちゃんを返して〜!もう生パンだけじゃ物足りない……。本音ちゃんのおもらしばんちゅも——』ピッ

……これ以上は見ないでおこう、うん。そして本音には黙っておこう。そして削除。彼女の名誉のために……。いや、名誉もへったくれもないな。

ガルツチ「……………刀奈さん、アレは淫獣ですか？」

楯無『さあ……………。私も、あんなやばい性癖持つてるなんて、思わなかったよ……………。』

ガルツチ「取り敢えず、そちらはOKって事で、宜しいでしょうか？」

楯無『そうね、私も幸せになって欲しいって思うし、何しろ、未来ガルの同人誌をジャンジャン作ってくればそれで……………。』

ガルツチ「おい待て、なんつった？」

楯無『あ。』

ガルツチ「未来ガルの同人誌を……………、なんだって？（ωω）ンン？」

楯無『えーつと、そのお……………私は……………別に……………、っっておつと、学校にいかなきゃ!!じゃあね!!』

ガルツチ「あ、おい……………」

『プツンツ。ツー、ツー、ツー。』

逃げたな、あれ絶対逃げた。まさか更識家って、腐女子しかないの? いや、それは

ない。絶対にない……………とりたい。

ガルツチ「……………ちよつと、簪の為に、花でも送ろうかな。月まで行くつと。」

sideChange

未来side

未来「……………簪。」

もう一ヶ月ぐらい、簪は眠ってる。正直、ハイタッチした後に倒れるなんて、思わなかった。ガルツチは眠っているだけっていつてたけど、もし簪が死んだら……………。

うわあああああああああああああ！！！！！！考えたくない考えたくない！！死んで欲しくないよおおおおおおお！！！！！！

簪「ん……………んんっ……………。」

ッ!?

簪「あ、あれ？ここは？」

未来「簪いいいい！！！」

よかった、目覚めてくれた!!

簪 「未来!?! って痛い痛い!!」

未来 「よかった……………、簪が生きててよかつた……………。」

簪 「待って待って、その前にここは!?!」

?? 「お、ナイスタイミングで目が覚めたか。」

僕は後ろを振り向くと、いつの間にか花束を持ったガルツチが、病室に入ってきた。

簪 「ガルツチ、おはよう。」

ガルツチ 「おはようって……………、いや仕方ないか。ほら、月まで採ってきた花だぞ。」

簪 「つ、月!?!」

未来 「月まで行ってきたの!?!」

ガルツチ 「うん。しかし、ラッキーだったよ。まさか月の花こと『マグノリアムーン』

が多くあったとは思わなかった。」

っていうか宇宙まで行ってくるって、ホントに凄いよ……………。」

ガルツチ 「調子はどう?」

簪 「うん、すっかり良くなったよ。ところでどれぐらい寝ていたの?」

未来ガル 「一ヶ月。」

簪 「……………え、私そこまで寝ていたの?」

未来ガル「うん。」

簪「アハハ、そこまで寝てたなんて、思わなかった………………。皆は？」
ガルツチ「ちよくちよく見舞いに行ってるよ。そういえば、僕長野に行つて適当などこ掘つてたら、温泉が吹き出してね。」

簪「ええええええええええ!？」

未来「うん、思いもよらなかつたよ………………。それで退院したら、ガルツチが引き当てた温泉のところで宴をするつて。」

ホントにガルツチつて、運がいいのか悪いのか分かんないなあ………………。

簪「そつか、だつたら頑張つてリハビリしないとね。」

ガルツチ「うん、退院したら連絡するよ。それじゃ。」

未来「え、ちよつと引つ張らないで。」

そして僕とガルツチは、そのまま病院に出て行つた。

ガルツチ「………………。」

未来「如何したの？ 難しい顔になつて。」

ガルツチ「いやなに、簪の事なんだけど………………。確か前に、一度死にかけていたんだよな？」

未来「うん。」

ガルツチ「……………もしかしたら、いや信じたくないが……………」
 何で、そんなに悩むのかな？

未来「簪が死にかけたけど、それがどうかしたの？」

ガルツチ「多分だけど、別の種族が目覚めたんじゃないかって……………」

未来「え？いやガルツチ、流石にそれはないよ。」

ガルツチ「まあね、あくまで過程なんだが、鈴美さんの祖先は『零の龍神』だよね？」

未来「そうだね、確かに彼女は『零の龍神』の子孫だったし……………」

ガルツチ「それで思うんだ。表向きは人間だけど、血筋は……………『全の竜神』
 だったりして。」

未来「……………いやまって、流石に簪が『全の竜神』は……………あ
 りそうか。」

ガルツチ「まあ過程だけだね。」

確かに、ないとは言いきれないかもしれない。実際鈴美さんもそうだけど、多分それはウルトラマン達によって生き返らせたんだと思うなあ。

でも、何でガルツチって深く考えるんだろう。

ガルツチ「まあ、今は杜王町を救って、宴の事でも考えておくか！貸切もしておいたし。」

未来「でも、簪が帰ってきてからね。」
ガルツチ「そうだね。」

ついでだから、仗助達も誘おうかなあ。今回のVIPは簪だしね。

そしてしばらくして、簪は退院して、早速僕らは仗助達を連れて、ガルツチが掘り当てた温泉のところに向かった。その途中、簪の髪に違和感があり、よくよく見ると、ガルツチが送った花が飾られていたのを見た。

t o b e c o n t i n u e d

→

第35話 奇妙な旅館

—長野県 とある旅館—

ガルツチ side

ガルツチ「着いたぞ。」

仗助「おう、ここか。しつかしお前凄えよな、こんな良いところ掘り当てるなんてよ。」
そんな会話をしながら、僕らは旅館の門を潜り、扉を開けた。

『ガラッ』

言峰「温まりますか？」

目の前に神父（カソック服の上に温泉宿の法被を重ね着した言峰37歳？）が居た。
黙って戸を閉める。

未来「ガルツチ？」

うん、なんかデジャヴを感じる。これ、前にもあつたよね？

簪「どうかしたの？」

ガルツチ「いや、どう反応すれば良いのか分かんない人が居た気がして……。今度は、覚悟して開けるわ。」

本音「ガルガル君？別に覚悟する必要ないと思うけど？」

『ガラッ』

言峰「おいでやす〜。」

京都弁で、オ・モ・テ・ナ・シ・をする神父（ガタイの良い渋すぎる声の中年）が居た。

ピシツと扉を閉める。

白夜叉「だから如何したのじゃ、ガルツチよ。」

ガルツチ「うん、なんか僕疲れてる気がするんだ。あり得ない程の幻覚が見えてるようだ。」

未来「だったら、尚更入らなきや。僕が開けるよ。」

『ガラツ』

士「よう、未来。待ってた——」

『ピシヤン』

未来「嫌な事件だった……………」

未来も僕と同じように頭を抱えていた。つていうか、なんかいた？

仗助「いや、お前らどうかしたのか？」

未来「うん、あり得ない人が居た気がしたので。」

仗助「たかが従業員だろ？早く入ろうぜ？」

未来「うん、今度は勇気持って入る。」

イリヤ「もしかして……………」

『ガラツ』

東「おこしやす〜。♡」

『ピシヤン』

未来「……………変だね。なんだか見慣れた人が、ここに居る気がするんだけど。」

ガルツチ「奇遇だな、僕もだ。」

今一瞬浴衣姿の束が居た気がしたけど、まさか……………。

『ガラツ』

言峰&士&束「お客様、おいでやす〜。」

いや、もう我慢できないから言わせて貰う。

未来ガル「何でいるの!?!」

言峰「何を言う、此処と言ったら、私が居て当然の事よ。」

士「未来の成長も見たくて此処で働いてる。」

束「Me too.」

ガルツチ「あと言峰、お前、前もやってなかった!?!」

言峰「よいではないか、よいではないか。」

ガルツチ「あゝあゝ ああああ……………、まあいいや。」

これ以上考えるのやめよう……………。まず、土と束がいた事に関して滅茶苦茶ビツクリなんだが。しかも束の浴衣姿、滅茶苦茶似合いすぎだろ……………。

イリヤ「やっぱり言峰、あんた居たんだね……………。」

白夜叉「おお言峰、久しぶりじゃのう。愉悦ってるか？」

ガルツチ「知り合い!？」

言峰「勿論だ、白夜叉もまた、愉悦部のエロ参謀長とも呼ばれるものでな。」

未来「初耳なんだけど!？」

ガルツチ「愉悦部……………、奥深い。」

フラン「あ、お兄ちゃんが愉悦顔になってる……………。」

言峰「この調子で、愉悦部を広めようではないか。」

ガルツチ「そうしよう。」

未来「ガルツチの意外な一面が、また見えた気がする……………。」

そんなこんなで旅館に入り、ガルツチ一行は束による案内をしてもらい、廊下を歩いていた。

一方で仗助達は土の案内をして貰っていた。

ガルツチ「いきなり物凄い歓迎をさせられたね……………」
未来「うん、忘れることも出来ないかもね……………」

東「みつくん達はこつちの部屋だよ。」

本音「たつちゃん……………、変なことしないでね？」

それはご尤もだな、うん。

レティシア「それで、これから如何するのだ？」

フラン「お兄ちゃんの車に乗っていたとはいえ、疲れちゃったしね。」

アラヤ「だったら、お風呂に入ろう。」

深雪「そうだな、とにかく風呂に入って癒されたい。」

愛花「じゃあ早く荷物置いて、お風呂セット持っていこう！」

『それに賛成だ!!』

あれ？今何か聞こえた気がするが、気のせいか……………。

僕らは部屋に荷物を置き、お風呂セットを持って、温泉宿のメインである浴場へと入る。そこで男湯のところに入り、アラヤはイリヤ達が任せてと言い、皆女湯に入っていた。

仗助「お？ガルツチと未来、今からはいるんか？」

ガルツチ「うん。つて、今から？」

康「僕達はもうつかり終わったからさ、着替えてるところなんだ。」

未来ガル「早くない!？」

いやいや、一体いつから入ったというのだ？まさか、士のやつ……………なんかやったのか!？」

露伴「しかし、さっぱりしたな。未来ちゃんもガルツチ君も早く入るがいい。」

そう笑いながら仗助達は先に出て行った。うん、ホントにビックリだよ。

未来「それにしても、広いね。」

ガルツチ「デザインは殆ど僕だったからね。というかもう、和風特化してんじゃないの?」

未来「有り得そうだね。」

僕と未来は体を洗った後、湯船に浸かり、ゆったりとしていた。

未来「そういうえば、この湯どんな効果があるの?」

ガルツチ「うーん、解析してみたけど塩化物泉って言って、切り傷、火傷、慢性皮膚病、虚弱児童、あと女性なら慢性婦人病にも効果あるそうだよ。しかも、これ驚いたことにはオリハルニウムって言うのがあって、あらゆる病気にも耐えられるようになるんだとか。」

未来「ジョジョの世界なのにオリハルニウムがあるって……………」。

僕の幸運ランクがAなのかC—なのか分かんねえなあ……………」。

そんなことを思っていたら、女湯の方から何かか聞こえた。

深雪『ちよ、こいし!やめっ!』

こいし『いやだいやだと言いつつ、ホントは興味あるんじゃないかな?』

簪『こいし!?子供達がいるんだから、今は我慢して!』

アラヤ『あ……………あああ……………。／／／／／／／／／／／』

おい、なんかおっぱじめようとしてる気がするんだが……………。まさかこいし、そこでおっぱじめるつもりはないよね?

未来「あれ?日本酒?」

ガルツチ「温泉と言ったら、やっぱり日本酒だからね。飲めなくはないけど。」

未来「そういえば、結構歳取ってたんだっけ……………」。

ガルツチ「まあ普通に考えたらショタヅジイと思われるのも不思議じゃないんだけど……………」。

未来「つて、あれ?ねえ、ガルツチ。アレ見て。」

ガルツチ「ん?」

未来が指差す方を見ると、そこには明らかに覗きしてくださいと、言わんばかり

の穴が堂々と空いていた。

ガルツチ「なんですか……………」。

未来「誰が空けたんだろうね。」

ガルツチ「億安か露伴の誰かじゃねえの？」

未来「……………有り得そうだね。」

まあ覗きなんて無粋な事はしない……………よな？（実は少し興味あるけど、駄目だよね。）

未来「……………ねえ何故か知らないけど、少しムラつとしてきたんだけど。」

ガルツチ「え？」

未来「なんて言うか……………、覗かれていたらつて思うと……………」。

ガルツチ「待て、流石に場所が場所だろ……………。一応言うが、覗かれながらヤルのは、恥ずかしいからね？」

流石に視姦は勘弁してほしい、どこかの誰かじゃないんだし……………」。

未来「で、でも、僕のここが……………」。

ガルツチ「……………分かった。分かったから、その目は勘弁して？あと本番すると

きは、寝床でいい？」

未来「うん、ありがとう。」

ガルツチ「んじゃあ、フェラするから、あまり動くなよ？」
しかし、いつも思うんだが、未来のつて大きいよなあ……………。

side Change

フラン side

簪「ねえ、その穴から見れる？」

フラン「うーん、駄目だね。お兄ちゃんだったら見られないように結界を張っているわ。」

本音「う……………、みつくんもガルガル君も狡いく……………。」

アラヤ「覗き見駄目ですよ、皆さん。」

鳳凰「そうだよ、覗いちやだめよく、ダメダメ。」

リサ「そうそう。」

愛花「あれ？覗き見は文化だって、誰かが言ってたような。」

全員「それこそ違う気がする……………」

う……………、こうなったら、音で聞くしかないわね。絶対に訊いてやるんだから

……………！

ガルツチ『つて思ったけど、これ女体化してパイズリした方がよくない？今思えばフエラしようにも難しいかも』

未来『言われてみれば、確かに……………。』

ガルツチ『んじゃあちよつと待つてね。『Girls Change!』

『Drive!! Type Girl!!』

未来『やつぱり、女体化したガルツチつて、ロリ巨乳なんだねえ……………。』

ガルツチ『それは、言わないお約束。……………それじゃ、挟むよ。／／／／／』

未来『う、うん。』

あ、音だけはちやんと聞こえる。それにしても、お兄ちゃん女体化したのね。

白夜叉『どうじゃ？』

フラン『うん、どうやら音だけはちやんと聞こえるそうだよ。』

レティシア『全く、お前達は……………。』

深雪『ホントにそうだよね……………。』

本音『う……………、スノーちゃんもレティちゃんも一緒に聞こうよ。』

深雪『私とレティシアが聞いたら、ここの常識人が居なくなるだろ!?!』

本音『え。』

こいし「そう言いつつ、ホントは見たいくせに。いやん、むつつりなんだから。」
イリヤ「今は自分の本性を、さらけ出しても良いよ。」

レテイ深雪「だが断る。」

フラン「聞いてもいいのに……………」。

しょうがない、私達でも聞こうかな？

未来『んっ！ほ、ホントにつ、ガルツチのパイズリつ、上手なんだねっ。』

ガルツチ『もう、恥ずかしいんだからあまり言わないで。／／／／／／／／／／／／』

未来『うっ！こ、これっ、今にもっ出ちやう……………！』

ガルツチ『もう？流石に早いと思うけど……………。いいよ、僕の乳圧で、いっぱい出して。』

未来『うっ、イクウウウウウ……………』

!!!!!!

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

『ドビュルルルルルウウウウウツ!!!ドボボボボボボボボボボボボボボボオオオオオオオ!!!』

ガルツチ『あうっ、凄っ！一瞬にして僕のおっぱいの中が、精液まみれになっちゃった。顔にも掛かっちゃったし。』

ぶ、ぶっかけられた!?う、羨ましい!!!私も、私も参加したい!!

未来『はあ………、はあ………。気持ちいい………。♡♡』

ガルツチ『とりあえず、今はこれで勘弁してね?』

未来『うんっ。♡』

うん、決めた。絶対に私も参加しよう。そう思った私達だった。

sideChange

ガルツチside

とりあえず、パイズリを終え、再び男に戻った僕だが、正直言う………持つのか心配だ!

そう思いながらあがり、浴衣姿となり、何処かの椅子に座っていた。ん?聞き耳させられてた?勿論知ってる。そこまで気が回らなかった。

言峰 「随分とお楽しみだったな、ガルツチ。」

ガルツチ 「アハハ、どうせ録音してただろ？」

言峰 「さあ、何の事やら。」

ガルツチ 「あと、あの壁発泡スチロールで出来てるんだろ？」

言峰 「おやおや、気付いていたのか？」

ガルツチ 「言峰、チエツクが甘かったね。僕の解析を、甘く見るなよ？」

言峰 「それもそうだな。そろそろ、宴も始まると思うから、君達も来たまえ。」

ガルツチ 「全部麻婆豆腐はないよな？」

言峰 「悪いが、今回は私担当ではない。別の人がやつてる。」

ガルツチ 「ならいいが……………」

言峰 「後ガルツチ、紫からの連絡が来て居るぞ？」

ガルツチ 「ん？あの年増の紫がなんだって？」

紫 「だれが 年増 ですつて「オラ。」ブギヤ!？」

— 今回の紫 ガルツチに殴られて死亡 —

紫 「またこのパターン!? ちょ、ガルツチ!? 酷くない!？」

ガルツチ「蘇ってもその調子って、お前相変わらずだな。んで、どうかしたの？」
しかし、ホントに久しぶりだな……………」

未来「紫さん？何でここに？」

紫「あ、貴男が門矢未来ね。初めまして。」

未来「初めまして？」

ガルツチ「多分未来が出会った紫は、別世界の人だろうね。それで、何か用？」

紫「いけずねえ。まあいいわ、実はもう一人の私から伝言を頼まれてるの。」

未来ガル「伝言？」

紫「何でも、また異変が起こってるそうなの。」

おいおい、何時になったら天照大神と月夜見尊が作った世界に行けるんだよ畜生!!
未来「それってフレディがいる幻想郷？」

紫「そう言うことよ。それじゃあ、伝えたことは伝えておいたから、じゃあね。」

ガルツチ「待てや。」

紫「ヒツ!!」

ガルツチ「このまま僕が何も言わずに戻る気か？（ωω）」

紫「あ、あの……………勘弁を。」

ガルツチ「安心しろ、一言言うだけだから。」

紫「へ？」

ガルツチ「お帰り、紫。言いたかったのは、それだけさ。」
そして紫は、顔を真っ赤にしてスキマに戻っていった。

全王神『息子のデレ来たー！！！！ \ (^ o ^) / 』
母さん、あんたあ黙つとれい!!!

そんなこんなで僕らは大広間に行くと、既に仗助達は到着していた。それもその筈、

今日は宴。皆でワイワイ騒ぎながら料理を食べ、そして歌いまくるからな。

ガルツチ「簪。」

簪「何？」

ガルツチ「あれを頼む。」

簪「了解。それじゃあ皆、杜王町奪還したのを祝って、乾杯!!」

全員『かんぱーい!!!』

その後ワイワイガヤガヤしながら料理を食べ、飲んでいると、カラオケ大会が始まった。まずは一番手の簪は『SUPER ∞ STREAM』と『ウルトラの奇跡』を歌い始め、途中から本音、リサ、オフィス、果ての果てには未来と白夜叉と鈴美、そしてレティシアが歌い始めてきた。

そのまま『みんな大好きなウルトラマン』、そして『ETERNAL TRAVELER』を歌いまくっていった。相変わらず、凄いな。

仗助「んじゃ、今度は俺が行くか。『BLOODY STREAM!!』」

仗助が言うと、途端にBGMがなり始め、格好いい踊りをし始め、そのまま歌い始めた。

仗助「静寂しじまのく、そこかゝらゝ………………。目覚めるスタンド使い、時を越こえゝ

……♪

深紅のく……、血潮くがく……。立ちほだかる勇気をつ。引き合わせるく

……♪

ちよつと乱入するか。と思つていたら、どうやらフラン達も同じ気持ちだったようなので、3人にもマイクを渡した。

ガルツチ「受け継ぐ愛をく……、宿命とく、呼ぶならく……。♪

微笑む目で、次の手をく……。!!

フラン「闇を欺いてっ!」

こいし「刹那を躲して!」

イリヤ「刃すり抜ける奴らの間隙を突け!」

仗助「つらぬいた信念が、未来を作くるく!」

4人「Like a Bloody Storm!」

仗助「熱くLike a Bloody Storm!」絆に刻まれた運命に!」

5人「浮き上がる、消えない誇りの、絆くく!」握りしめてく!」

そしてそのまま億安達が受け継ぎ、二番を歌い続けていき、遂に僕らの正式な出番が来た。

歌う曲は『色は匂へど散りぬるを』。っていうか、今思つたけど、未来達がウルトラマ

ン系で、仗助達はジョジョ系、んで僕らが東方か fate 系つて……………いやいいか。

ガルツチ「……………色はく匂へど……………」

フラン「いつかく散りぬるを……………」

こいし「さ迷う、ことさえ……………」

イリヤ「許せなかつた……………」

間奏が流れると曲名と、歌うアーティスト名が記される。今回は、僕等7人の名前が記載されていた。

一番は深雪とアラヤ、鳳凰の3人が歌い始め、二番目に入り、僕とイリヤ、こいし、フランが歌い始める。ただ、フランとこいしは、僕とイリヤと違う歌詞で歌っていた。

こいし「弱さ知るアナタは今……………」

フラン「許してくれたく、求める者の欲を……………」

イリヤ「枯れていようと……………、凜とした生き様……………」

ガルツチ「演技ではない、悔いなしと悟りの証……………」

4人「色はく匂へど、いつかく散りぬるを……………」

こいフラ「あなたの(あなたの)すべてに(すべてに)、幼く、委ねたい……………」

♪

イリガル「愛しさ、伝えても……………忘れろるため去ろうと……………」

4人「「「秤に〜（アナタは〜）、かけぬ〜（優しく〜）、我が儘なく愛〜（見守る〜だけでしよう〜）。」」」

二番目が終わり、再び間奏に入ると、ここで3人は手拍子を始め、僕らは扇を持って舞い踊っていた。

踊れば踊るほど、どこからともなく桜が舞い散り、手拍子をするればするほど、水色の羽根が降ってきた。

そして最後に入り、気合いを入れて歌い始めた

7人「「「「色は〜匂へど〜、すべて〜散りぬるを〜。」」」」」

アラヤ&鳳凰「短き〜（短き〜）、記憶に〜（記憶に〜）。」

深雪「溢れる、思〜い〜。」

こいフラ「愛さ〜れた〜ように〜。」

イリガル「愛し〜てあげよう〜と〜。」

4人「「「「いつでも〜（一緒に〜）、ず〜っと〜（一緒に〜）。」」」」

7人「「「「「ず〜っと〜、君といると〜……………」」」」」」

そして、最後の伴奏が流れ、僕は演説をする。

ガルツチ「大切なものを守る者こそ、真の正義の味方。」

言い終わると同時に、曲も終わった。

そして、最後は皆で『Bad Apple』を歌いながら踊り、途中で士達が乱入しながらも、宴の終わりを告げた。

それからというものの、仗助達は部屋に戻り、僕らも部屋に戻った。

ガルツチ「いや〜……………、歌い疲れた……………」

未来「そうだね、っていうかガルツチはほぼ踊ってたよね？リユウタロスみたいに。」

ガルツチ「アハハ、確かに。僕ってリユウタロスと相性いいのかな？」

というか動きやすいつて、言ってたしなあ……………」

あ、ちなみにフラン達は隣の部屋にいますとかなんとか……………」

一方、フラン達はどうと……………」

フラン「3人は寝ちゃった？」

簪「うん、ぐっすりと。」

本音「それじゃあ、皆でガルガル君とみつくんの所に……。」

深雪「私はアラヤ達と寝るので、お休みだみよん。」

9人『何故みよん?』

深雪「スー……、スー……。(――) z z z」

白夜叉「そして早っ。」

愛花「……………。(――) スヤスヤ」

こいし「愛花ちゃんも寝ちやつてる!?!」

簪「仕方ない、私達だけでも覗き見るしかない!」

鈴美「み、見つからないようにね?」

こいし「大丈夫、私の無意識を使えば、お兄ちゃんも未来お兄ちゃんだつて気づかないよ。」

レティシア「もはや完全なステルス迷彩だな、お前の能力…………。」

何か聞こえた気がしたが、別にいつか。

ガルツチ「んじゃあ、そろそろ…………。」

未来「うん、始めようか。」

何を始めるかって？そりやあ勿論……………。

f a t e / u n l i m i t e d c o d e s に決まってるでしょ！

え？あれはしないのかって？それは後でいいんじやね？

ガルツチ「ところで未来は何を選ぶ？」

未来「ランサーかな？」

ガルツチ「んじや僕はアーチャー。」

未来「これ因縁の戦いだよね。」

ガルツチ「確かに。ステージは？」

未来「言峰教会前にしよつか。」

ガルツチ「さあ。」

未来「聖杯戦争を始めようか。」

『スコオ！』

ん？なんか音が聞こえた気がするが……………。いつか。

一方フラン達は……………。

フラン「え、二人ともゲームしてない？」

オーフィス「意外。」

白夜叉「おかしいのう。てつきりすぐにまぐわうかと思うたんじやが……………。」

イリヤ「私も……………」

本音「もしかして、見られてるのがバレてたりして。」

こいし「そんなことはないと思うけど……………」

簪「う……………、なかなかの焦らしがくるね……………」

レティシア「やつぱり、あの時で満足したのでは？」

鈴美「多分ないんじゃないかな？」

こいし「もう少し、探ってみよう。」

うん、何かに見られていてどうしよもないわ、これ。

ガルツチ「行くぞ、ランサー。『アンミリテッド・フレンド・ワークス無限の剣製』！」

未来「うわ、ちよつとこれやばい……………。こうなつたら……………！『ゲ突き穿つイ死棘ボのグ槍』

！」

ガルツチ「当てるか！『熾^{ロ!}天覆^アう七つの円環^{アイ}』！」

未来「防御!？」

ガルツチ「これで終わりだ！『無^ア限^リの剣舞^ミ』！」

ランサー『俺としたことが……………。』

未来「……………なんか悔しい。」

アーチャー『自慢の槍……………衰えたか？因縁だなランサー。君としのぎを削り合う

のは楽しいが、次は本気で来てほしいものだ。』

ガルツチ「やっぱ僕って、エミヤと相性良いのかな？」

未来「えー……………、んじやあお得意キャラじゃん。次別のキャラにしよう？」

ガルツチ「そんなじゃ、ギルガメツシユで。」

未来「おいおい……………、でも今度こそ勝つよ。やっちやえ！バーサーカー！」

そしてフラン達も……………。

イリヤ「殺つちやえ！バーサーカー!!」

フラン「如何したの急に？」

イリヤ「なんだか言いたくなっちゃって。」

オーフィス「あるある。」

だが結果……………。

ギル『所詮はバーサーカー。戦うことしかできぬ物であつたか。雑種風情にしてはよく持ち堪えた。褒美を遣わそう。さあ、死を受け取れ。』

未来「ええええ……………、ちよつと羽目技しすぎじゃない？」

ガルツチ「それがアーチャー特権ですからね。」

未来「う……………。こうなつたら、ライダー！」

ガルツチ「だつたらディルムツド、お願いします！」

が、結果は……………。

ディルムツド『マスター……………面目ない……………。』

ガルツチ「あ、やつちやつた。」

ライダー『余興はここまでですね。私が揺らぐほどの魅了の呪い……………。……………互いに不自由な生を送つた同士、気があつたかもしれない……………。』

未来「勝つた。(コロンビアのポーズ)」

ガルツチ「……………そういや僕、アサシンとアーチャー、ギルガメツシユ、衛宮士郎以外のキャラ使って、勝ったこと無いんだった。」

そんなこと言った途端、未来はずっこけた。

『どんがらガツシヤン!!!』

あれ?なんか後ろからも聞こエタ気ガスル。マア、気ノセイダヨネ。うん。

未来「うー……………、こうなったら最も勝てる方法を使うしか……………。」
ガルツチ「?」

何だろ、凄く嫌な予感しかし無いのは気のせいだろうか?だがその予感が、的中してしまった。

未来「君を犯して、2敗した雪辱を、屈辱を晴らす!!」

ガルツチ「いやいや、理屈がおかしくね!?何で犯す選択になるの!?それと関係無いよ

ね!？」

未来「だから如何した!とにかく君を犯して犯しまくる!!」

ガルツチ「何そのバーサーカー染みた思考!？」

おかしいよね?いくら負けたからって、どう見ても八つ当たりだよね?

つと思つていたら未来は僕の腕を掴みそのまま押し倒されてしまった。あれ?未来の筋力ってSSだった気がするんだが……あ、そいや僕未来より軽いから押し負けし易いんだった。

最初は抵抗するつもりだったのだが、いきなり耳を舐め始めたせいとか、一気に意気消沈しちゃいました。というかホントに僕の耳って、敏感だな……。もう性感帯になつてんじゃないの?

いや、よくよく考えたら……、フラン達結構耳を舐めまくられてた気がする。もう耳は開発済みなのか?

未来「ひょう?こうひゃんする?(翻訳:どう?降参する?)」

ガルツチ「何で?、降参する必要がっ!!//>//>//>//>//>//>////」

未来「こうひゃんしなひなら……!んんっ!」

ガルツチ「っ!!／／／／／／／／／／／／／／／／」

耳が引つ張られてる!?!ダメダメ待つて!?!さすがにそれはっ!!

フランク side

7人「Hシーン来たー!ー!ー!!＼(・o・)／」

予想外、ゲームの腹癒せでお兄ちゃんを攻めるなんて、私でも思いつかなかったわ!!
鈴美「つていうか、ガルツチちゃんつて、耳弱点なのね……………」

レティシア「聴覚が敏感なのは、それが理由か……………」

フラン「私とこいしちゃんとイリヤちゃんど、いっぱい感じられるように開発して
たの。」

レティシア「何してくれてるんだ!?!」

イリヤ「えへへ、それ程でも。」

レティシア「褒めてない!!」

ガルツチ「ひやあああ!!!／／／／／／／／／／／／／／／／待ってっ、耳の中はっ……………!／／／／／

／／／／／

未来「んじゃあ、降参する?」

ガルツチ「いや何でそうな……っ!!／／／／／／／／／／」

うわあ、耳の中まで舐め始めてる。未来お兄ちゃん凄いや……。

簪「あ………ああああ………、私も、私も舐められたい………。」

本音「やばい！かんちゃんのご乱心を!!」

レティシア「落ち着け！見つかったらやばいぞ!？」

鈴美「でも、おかしいわね。まるで、待ち構えてるような気がするんだけど。」

こいし「ま、まさかそんなこと………、無いよね?」

うーん、未来お兄ちゃんはともかく、お兄ちゃんならやりかねないわね………。あの

目が気になるし。

簪「もう限界!!私も混ぜてええええええ!!」

こいし「あ、かんちゃん!!」

未来ガル「ハイキヤツチ。」

簪「あ。」

sideChange

ガルツチside

はあ、んなこつたと思った。まあ当然と言ったら当然か……………。

ガルツチ「ほら、こいしも無意識解除して。」

本音「ええええ、こいこいちちゃん……………。何で〜?」

こいし「おつかしいなあ……………、お兄ちゃん達には見えないようにしてたんだけど……………。」

ガルツチ「欲情丸出しだったぞ。さっきの音といい、こつちに来たときから気付いてるぞ。」

3人「二(そうだった、お兄ちゃんの無意識心眼を侮ってたわ。二)」

ガルツチ「うゝ、っていうか未来、流石に耳の中に入れるなんて思わなかったよ……………。いくらこれが手っ取り早いとは言ってもねえ……………。的確過ぎでしょ。」

未来「でも途中で気持ちよさそうな顔してたじゃん。」

否定出来ねえ……………。むしろもつとやれって思ってたのが、一番痛いな……………。

あかん、段々M化し始めてきた気がするの僕だけだろうか?

ガルツチ「……………まあ、こつちに来た以上、どうせ乱交パーティーするんでしょ?」

フラン「さすがお兄ちゃん、話が早い!」

ガルツチ「やっぱりこうなるか。」

未来「もう定番だよ、これ。」

こいし「と言うわけで、ピヨーン！」

未来「え!?!何で僕!?!」

あらく、珍しい。未来の方攻めるとは。

こいし「ムツフー！前々から思ってたけど、未来お兄ちゃんもやりたいと思ってたんだよね。」

ガルツチ「しかも虎視眈々と!?!」

簪「うく………、だったら私はガルツチさんと!」

ガルツチ「マジで?」

しかも一瞬で裸になったし、あーもーこれ覚悟しましょう。うん。

7人「「「「行くよ、お兄ちゃん達。精液の貯蔵は充分か?」「「「「」

未来ガル「「ふつ、思いつがるなよ?ついてこれるか?」」

レティシア「何これ………。」

鈴美「さあ………。」

そして僕は乱交パーティーが始まり、皆仲良く搾り取られました。

side Change

??? |
s i d e
|
???

ちつ、やはり円卓の騎士は役に立てなかつたか。何処に消えおつた？
時臣「及びでしょうか。ゼロ様。」

ゼロ「貴様、いい加減うっかりを直す気ないのか!？」

時臣「う、うっかりですか!？」

ゼロ「元はと言えば、貴様のうっかりを招いた事だぞ!？」

時臣「も、申し訳ございません。」

ゼロ「いいか、次うっかりしたら、貴様を消す。」

時臣「了解……………しました。」

クソ、この計画は、必ず成功させる……………!絶対のだ!!

side change

―杜王町 仗助の家―

ガルツチ side

そして、別れの日が来た。

仗助「もう行くのか？」

未来「うん、次の世界が待ってるから。」

億安「寂しくなるな……。また行つちまうつてのはよ。」

鈴美「ごめんね、みんな。私達、やることがあるから。」

由花香「寂しくなるけど、仕方ないわよね。」

露伴「……………」

康一「露伴先生？」

露伴「あーもう！言えば良いんだろ言えば!!未来ちゃん、鈴美を頼む！もし傷つけた

ら、許さないからな!!」

未来「うん。じゃあね、みんな。」

鈴美「それじゃ、皆元気でね。」

仗助「それと、ガルツチ！」

ん？

仗助「お前の知ってる俺じゃないが、謝っておく。すまなかつた！」

ガルツチ「……………：気にしないで、仗助。お前は悪くないから。バイバイ、ジョ

ジョ。」

仗助達と別れを告げた僕達は、すぐさま次の世界に向かった。

―幻想郷 人里―

ガルツチ「幻想郷かあ………、違う世界とは言え、懐かしいな。」
フラン「そうだね。」

未来「んじゃあ皆、早速フレディ達のところに行こう。」

t o b e c o n t i n u e d

♫

恐竜ドラゴンとコラボ もう一つの幻想郷
く東方影悪

夢く

第36話 悪夢を使う男

—博麗神社—

ガルツチ side

霊夢「あら、未来！久しぶり！」

???「ん？おう！未来！！相変わらず女装してんな。」

未来「おまつ、再会して早々それか!？」

博麗神社に到着すると、あの時未来が召喚した男、確かフレディだっけ？其奴とで会った。

霊夢「あら？そこにいるのって……………?」

ガルツチ「……………多分君は僕のこと知らないと思うけど、一応言う。久しぶりだな、博麗霊夢。」

霊夢「どうやら、私のこと知ってるようね。見たところ、人間には程遠くなってるけ

ど、妖怪でも無いわね。」

ガルツチ「有翼人って言う種族さ。」

???「ん？おい未来、なんか前来た時より増えてねえか？あの未来と違って男装してる奴は？」

未来「あ、紹介するよ。あの人はガルツチ。幻影の不死鳥とも呼ばれていて、あのお方の息子だつて。ガルツチ、この人はフレディ……………つて、ガルツチは僕が召喚したフレディと出会つてたね。」

ガルツチ「宜しく、フレディ。」

フレディ「おう、宜しく。お前、未来と違ってちゃんと真面そうな……………つて訳でもねえか。何故サイドテールしてんだ？」

ガルツチ「いいだろ別に、どうせ女性にしか見えないんだし……………」

フレディ「おいおい、シヨック受けることなのか？」

当たり前だろう畜生……………」

フラン「初めまして、フレディさん。」

フレディ「おう初め……………、つてフラン!?つてか胸デカっ!？」

フラン「あー、多分この世界の私ね……………。でも、私は貴方とは初対面よ。」

フレディ「あ、そうか……………。んで、その指輪は？」

ガルツチ「結婚してんの。もう14人ぐらいの子供居るからな。」
フレディ「ファ!?この子14人で!」

なわけないだろ……………。

ガルツチ「フランとこいし、イリヤ、んで女体化ではあるが僕。」

フレディ「わるい、ちよつと混乱してくる……………。」

???「如何したツスか?フレディ先輩?」

すると、誰かがフレディに声をかけた。

???「つてあああ!!未来さん、お久しぶりっす!」

未来「久しぶり、ゴーストフェイス。」

ゴースト「お久しぶりっす。ところでフレディ先輩、如何したっすか?」

ガルツチ「いや、気にするな。なんか混乱してるだけだから。うん。」

ゴースト「そ、そうっすか。それで、あなたは?」

ガルツチ「僕はガルツチ。戦場では幻影の不死鳥と呼ばれ、有翼人なんだ。」

ゴースト「ガルツチさんっすね。僕はゴーストフェイスっす。」

ガルツチ「宜しく。」

ゴースト「宜しくっす。」

しつつ、今思えばこれホラー映画に出てくる奴らだよな?いよいよ僕の恐怖感覚も

Т р о ф у . (万全の守りの空間よ、あらゆる厄災を守りたまえ。)

フレディ「おお、すげえ……………」

霊夢「な、何あれ!？」

ガルツチ「みんな入って。」

未来「ジョジョの世界でも、それだったよね?」

—隠れ家 大広間—

ガルツチ「さてと、改めて自己紹介させて貰う。僕はラーク・バスター・ガルツチ。幻影の不死鳥、この世の全ての刃、虚王魔神と呼ばれ、有翼人という種族だ。んで、未来の恋人というか愛人的な関係。」

フレディ「ブーツ!? 未来、お前まさか——」

未来「いや、そうは言うけど、何故か安心感があつたし。」

ガルツチ「色々と事情があるんです。」

ゴースト「りよ、了解つす……………。それで、そちらのお嬢さんは?」

ゴーストフェイスが指さしていたのは、こいしのことのようだ。

こいし「私は古明地こいし。お兄ちゃんの妻よ。多分、霊夢なら知ってると思うけど。」

霊夢「あー、確かに。でもそんな胸大きくなかった気がするけど。」

こいし「仕方ないよ。風龍さんの作品の私とフランちゃんはロリ巨乳だもん。」

ガルツチ「わざわざメタ発言するか？しかも風龍さん自体登場してるし。」

フレディ「いや待て、作者が登場するってどう言う作品だ!？」

フラン「そういうものなの。」

ゴースト「そんなことあるわけ——」

風龍「呼んだ?」

ゴースト「つてホントに来た!？」

だから言ったのに……………。

フレディ「いやいや、作者がそこにいたら成り立たねえだろ!？」

風龍「それにはご尤もだけど、そう言うもんなの。」

フレディ「うちのさ——」

『ガゴンッ!』

フレディ「ゴフウ……………」

ゴースト「フレディ先輩が倒れた!？」

未来「この人でなし!!」

ガルツチ「この人のクラスがランサーだったら、多分僕も言ってたな……………。多分

彼方の世界の作者さんがやったに違いないな。」パシツ

ゴースト「す、すげえ………………。作者さんの攻撃を、意図も容易く受け止めてる。」

ガルツチ「いったら？この世の全ての刃だと。」

霊夢「作者の攻撃を防ぐって、普通じゃないわよ。」

ガルツチ「一度YouTubeみる、殆どの作者が弄られてるぞ。」

ゴースト「もうメタ発言ばっかじゃないかつす。」

ガルツチ「気にするな。」

(ちなみに風龍は元の場所に戻りました。)

ゴースト「それで、その明らかに美少女な人は？」

イリヤ「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。こいしちゃんとフランちゃ
んと同じお兄ちゃんの妻で、幻想郷に居た頃は博麗の巫女をやっていたわ。」

霊夢「嘘!？」

イリヤ「そういえば、何故か私になった途端、参拝客が増えたわね。」
すると霊夢が・の目になり、凄い形相でイリヤを見つめた。

霊夢「どうやって稼いだの!?!ねえコツとかあ——」

ガルツチ「霊夢?」

霊夢「後にしてよ!それより教えて!?!ねえ!!」

イリヤ「お兄ちゃん……………」

イリヤを泣かせるとは……………、此奴にはちよつとばかりお仕置が必要だな。

ゴースト「え？あのガルツチさん？それって……………」

ガルツチ「スペルカード発動。殺符『夢想封印』殺！！」

霊夢「え？ちよ、いやああああああああ！！！！！！」

『ピチューン』

!!!!!!

——巫女復活中

ガルツチ「霊夢、次うちの嫁を泣かせたら、殺すからな？」

霊夢「ご、ごめんなさい……………」

フレディ「痛え……………、って何でガルツチがあんな殺意を!!」

未来「気をつけて、ガルツチってヤンデレ要素もあるから。」

ゴースト「嘘!？」

マジです。ホントに殺しますので。それから、白夜叉、レティシア、鈴美、アラヤ、鳳凰の順に自己紹介した。その後ゴーストフェイス、フレディ、更には仲間達も来て、順に自己紹介した。

ガルツチ「はあ……………、こんなに疲れる自己紹介だったっけ？」

フレディ「お前疲れるなんて、情けなさ過ぎじゃねえの？」

ガルツチ「仕方ねえだろ、僕の身の回りにはカオスしか起きねえんだから。おかげで僕のS A N値ガッツリ削られたよ……………」

フレディ「わ、悪い。」

ガルツチ「そもそも何でカオスしか起きないんだよおかしいだらいいやそもそも僕ってトラブル体質なのかも知れないしそもそも何で僕の身の回りには常にカオスが起こるんだよなんでさ………」

ゴースト「……………なんて言うか、メンタル弱いですか？」

簪「普段こんなじゃないのよね……………」

アラヤ「母さん、元気出して。」

未来「そういえばガルツチ、この世界の異変って？」

ガルツチ「あ、そうだった。おい紫、出て来い！」

紫「『私』を呼んだ？『私』を散々弄んだガルツチ。」

ガルツチ「それで、異変ってなんだ？」

紫「威圧すら無視って……………、まあいいわ。異変って言うのは、謎の影が人里、妖怪の山に現れてるって事よ。」

謎の影……………。

ガルツチ「念のために、特徴を頼む。」

紫「これよ。」

ガルツチ「どれど……………なっ!？」

イリヤ「如何したの？」

未来「？」

みんなは一斉に紫から貰った紙を見ると、そこには驚くべくものが描かれていた。

『特徴

変幻自在

外の世界でいう宝具と呼ばれる技を使う。』

ガルツチ「これって、シャドウサーヴァントじゃないか!？」

霊夢「此奴……………、そういえばスペルカードを使っても平気な顔をしていたわね。」

ガルツチ「ちつ、円卓の騎士の次はシャドウサーヴァント……………か。」

紫「まだあるわ。これも同類だと思っけど。」

ガルツチ「ん？つておい!？」

『特徴』

普通の攻撃でも蘇る

魔法攻撃なら有効ただし気休め程度

後は先ほどの資料と同じ。』

ガルツチ「こっちはハートレスサーヴァントか……………」。

今まで姿を見せてこなかったなと思ったら、この世界にいたのか。

未来「知っている奴なの？」

ガルツチ「ああ、以前聖杯戦争で現れた連中だ。今まで出ないと思ってたが、ここにか。」

少し予想するために先ほどの地図を投影し、居場所を特定するために解析を始めた。

ガルツチ『トレス・オン解析開始』。

シャドウサーヴァント探知・・・・・・・・探知完了

セイバー 人里

アーチャー 紅魔館

ランサー 守矢神社

ライダー 地霊殿

アサシン 白玉楼

キャスター 白玉楼

バーサーカー 魔界

ハートレスサーヴァント探知・・・・・・・・失敗

聖杯探知・・・・・・・・完了

聖杯は守矢神社

ガルツチ「……………厄介なことになったな。」

フレデイ「厄介なこと？」

ガルツチ「このままだと、聖杯戦争が起こりかねないぞ……………」

霊夢「聖？」

フレデイ「杯？」

ゴースト「戦争……………すか？」

イリヤ「あ……………、これ正直説明が面倒なのよね……………」

ガルツチ「仕方ない、聖杯戦争を説明するから、よく訊いて。まず聖杯つてのは、いわば『万能の願望器』とも呼ばれている。つまり何でも。」

3人「何でも!？」

ガルツチ「つて言ってるけど、曖昧すぎる願いは無理なんだ。んでそれを得るにはサーヴァントつう使い魔的な奴と共に戦うのが聖杯戦争。」

イリヤ「様々なルールがあるけど、基本的に7つのクラスがあるの。『剣士』、『弓兵』、『槍兵』、『魔術師』、『暗殺者』、『騎乗兵』、そして『狂戦士』の7つよ。場合によっては、『裁定者』、『復讐者』、『救世主』、『獣』等のエクストラクラスがあるの。」

霊夢「うー、なんだか頭が痛くなるわね……………」

それからは、僕とイリヤの聖杯戦争の説明をしまくり、ようやくみんなは理解した。

フレディ「だがよ、何でこんな場所でおっぱじめる気なんだ？」

ガルツチ「さあな。原因不明だが、ろくな事にはならないのは確かだ。」

フレディ「ふーん………、ところでガルツチ。」

ガルツチ「？」

フレディ「お前って強いのか？」

ガルツチ「うーん、どうだろ。加減してばかりだが、殆ど勝利してるようなもんかな？」

フレディ「なるほど、戦えば分かるって訳だな。いいぜ、外に行こうぜ。」

ガルツチ「いいよ、悪夢と戦えるなんて、素晴らしい幸運だ。」

そうして、僕とフレディは白い渦に入ると、草原ばかりの場所に着いた。

ガルツチ「こっちは何時でもいいよ。加減は出来るだけするが、本気でこい。」

フレディ「いいぜ。」

【マイティアクションX!】

身に覚えのないベルトにガシエツト？

フレディ「変身！」

【ガシャット! レッツゲーム! メツチャゲーム! ムツチャゲーム! ワツチャネーム!? アイム ア カメンライダー!】

………ツッコミしか出来ないけど、何かとやばいのは分かった。だったら………。

ガルツチ「仮面ライダーなら、仮面ライダーだろうな。」

【ブラッドオレンジ！ ロックオン！】

フレディ「ブラッドオレンジ？」

ガルツチ「かの英雄王から貰った奴さ。変身!!」

【ソイヤ！ブラッドオレンジアームズ！邪の道、オンステージ………】

フラン「お兄ちゃん、頑張ってる！」

ゴースト「フレディ先輩、ファイトっす！」

さあ、お前の力、見せてみる！

ガルツチ「Are you Ready？」

フレディ「OK。」

t ガル
o フレ
b 「い
e ざ
c 参
o る!!
n 「
i
n
u
e
d
→

第37話 エルム街の悪夢VS幻影の不死鳥

—隠れ家 草原—

ガルツチside

【Freddy Krueger VS phantom phoenix】

【Sword or Death】

フレディ「何だ、今の。」

ガルツチ「そういえば、一騎打ちの時に限って『fate/Extra』風になつてたなあ……………」

というかゲームの仮面ライダーって、何かとヤバい気がするな。 って思っていたら早速攻撃を仕掛けてきた。

フレディ「貰った！」

ガルツチ「よっと！」

フレディ「オラア！」

ガルツチ「ショット！」

僕はすぐさま無双セイバーを抜き、銃口をフレデイに合わせて放った。

フレデイ「グフォ!?」

ガルツチ「まだだ！」

そのまま持ち直し、フレデイに斬り掛かった。ダメージは与えているが、ぶつちやけ言おう。ホントにゆるキャラ姿のまま戦っていいのか？

フレデイ「こりや、レベルアップしないとな。大変身!!」

「ガツチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション！エックス!!」

あ、そっちの方が仮面ライダーらしい。んじやそろそろ赤色の大橙丸を持って挑むとするか！

side Change

未来 side

あれ？何でフレデイが仮面ライダーに？っていうかいつからなったの？

未来「ねえゴーストフェイス。僕が居ない間何があったの？」

ゴースト「そうっすね。僕でもよく分からないっす。」

未来「そうなんだ。」

でもレベルアップ出来る仮面ライダーかあ……………、何だかいなあ。でも、ガルツチは何で戦極ドライバー持つてるんだろ？

簪「うーん、私どっち応援すればいいんだろ。」

フラン「やつちやえ！お兄ちゃん！」

本音「フランはガルガル君を応援してるけどね……………」

まあ僕も、ガルツチを応援するけどね。頑張れ、ガルツチ。

side Change

ガルツチ side

フレディ「行くぜ！火符『ファイアボール』！」

ガルツチ「マジかよ!?!だが無駄だ！」

まさか仮面ライダーの姿でも放てるとは……………、だがその属性はミスったな？

フレディ「何!?!俺のスペルカードが吸収した!?!」

ガルツチ「いや、属性だな。僕の魔術礼装『煉獄の衣』を着ているおかげで、あらゆる火属性は吸収、そして氷属性は無効化出来る力を持つてる。」

フレディ「なっ!?!此奴はヤベえな……………」

ガルツチ「仕返しだ！火&斬符『フレイムブレードカーニバル』!!」

僕はすぐさまスペルカードを放ち、火の短剣、炎の剣、業火の大剣等の武器が現れ、フレディに目がけて放った。

イリヤ「あれ、あの金ぴかを意識してやってるでしょうね……………」

こいし「まあお兄ちゃんは、慢心というより、力の加減をしないと大変な事になるからねえ……………」

霊夢「え？」

イリヤ「お兄ちゃんの本気は次元を越えちゃってるのよ。それも破壊できるほど。」

霊夢「何それチート!?!」

まあ事実ですしね。

フレディ「やっぱ鈍器より、こっちだろ！」

【ジャ・キーン!!】

ガルツチ「んじや、そろそろこれと行くか！」

僕はブラッドオレンジロックシードを外し、代わりのものを出した。

【カチドキ!! ロックオン!】

【ゲート・オブ・バビロン!! ロックオン!】

まああれも言わなきゃならないだろうなあ……………。気が進まないが、言うか。

ガルツチ「A・U・O!!!『CAST OFF』!!!」

【ロックオーブン!!英雄王アームズ!!最強、最古、英雄王!!】

先ほどの姿は一変し、ギルガメッシュの『原初の神話礼装』の姿へ変貌した。

フレディ「おいおい、いきなり最強形態って、ねえだろ!？」

ガルツチ「慢心なしだ。王の財宝、その一端を見せてやる。」

すぐさま『^{ゲート・オブ・パレロン}王の財宝』を使用し、フレディに向けて放つ。

フレディ「こりゃ、此奴を使うか!変化『スーパーフレディ』!!」

なっ!?全部受け止めた!?

フレディ「危ねえ、さて……………仕返しと——」

ガルツチ「やらすか!『^{ルールブック}破戒すべき全ての符』!!!」

フレディ「グハア!?!って、バカな!?!無敵時間が強制的に!?!」

ガルツチ「この宝具は、あらゆる効果を初期化出来る短剣さ。無敵だろうが何だろう

が、この宝具に刺されれば一瞬で終わる。」

フレディ「何そのチート武器!?!ってアアアア!?!変身も切れてる!?!」

ガルツチ「さあ、行くぜ!!原初を語る、元素は混ざり、固まり、万象織り成す星を生

む!!」

イリヤ「あ、これヤバイ……………」

ねえか!」

ガルツチ「うちの宝具はそう言うもんだぞ? まあこれが、宝具だ。普通に考えたら、魔力切れ起こしてもおかしくないけどね。」

フレディ「……………俺寝てたらそれに食らう悪夢を見そうだぜ。」

ガルツチ「悪夢を操るのに悪夢を見るとはこれ如何に……………」

フレディ「いやあれトラウマ級だろ!? 初期化する宝具を持つてるわ、次元を越えていそうな宝具を持つてるわ、狡くねえか!」

ガルツチ「だからサーヴァントが必要なんだ。実際、そのスペルカードも宝具に近いもんだよ? あとそれ止めて、マジで怖い。」

フレディ「クソ!! 可愛い顔して恐ろしい力をもつて!! こうなりや悪夢に引きずつてで
も———」

ガルツチ「『^ル破^ル戒^スべき^ブ全^レて^イの符^カ』。」

フレディ「なっ!?!」

ガルツチ「止めとけ、僕の悪夢は、お前が思ってる以上におぞましい世界だ。見ないことをお勧めする。」

フレディ「りよ、了解……………」

結果、フレディが降参し僕の勝利で収まった。まあぶつちやけ、あれはやり過ぎたと

は思ってる。でも一応手加減はした方だぞ!!

ガルツチ「つて、ああ…………お前凄いい怪我だぞ。やっぱり避けたと言えど、ダメージはあったか。」

フレディ「オメエなあ…………。」

ガルツチ「ちよつとこつち来い。治してやるから。」

sideChange

—隠れ家 大広間—

未来side

ガルツチ「おい馬鹿、動くなって!」

フレディ「いやいや、お前消毒とは言え俺としたら無茶苦茶痛えんだよ!!」

ガルツチ「そう言うな。今から使う魔法は水を使うんだ。その前に、その怪我を消毒しないと。」

フレディ「馬鹿!そこは大丈夫だって!!つておい!話聞け!!」

うわー、無自覚なのか天然なのか分かんないけど、色々なとこ触りまくってるね……………。

簪「……………」フルフル

未来「あ、簪が震えてる。」

霊夢「如何したの？ 簪さん？」

ゴースト「簪さん？ 大丈夫ですか？」

簪「紙とペン持つてくる。」

ガルフレ「いや待て!?! なんか勘違いしてねえか!?!」

簪「大丈夫、ガルツチとフレデイの同人誌書いただけだから。」

ガルフレ「それこそ待てだろうが!?!」

またBL同人誌を書くのかよ。っていうか、何でこうなった。

ガルツチ「っていうか消毒終わったとは言え、あまり動くな！一瞬で治すから動くなよ。」

フレデイ「いやなにすんだよ!?!」

ガルツチ「癒しを。『ヒーリング・アクア湧水』。」

フレデイ「何々何だこの水!?!」

あ、フレデイがガルツチの水に閉じこめられた……………。あれって……………。

イフ「あれはあらゆる傷を癒し、治すことが出来るものだ。まあ、フレデイの顔はそのままだが。」

未来「凄いね、その技。」

簪「つまり、スライムブレ——」

ガルツチ「全然違うよ!？」

如何してこうなった……。いや、こうなったのって、大体がフラン達だよね……。

霊夢「あの、簪さん？」

簪「？」

霊夢「いつから、そうなったの？」

フラン「私が目覚めさせました。」

霊夢「何してくれてるの!？」

ガルツチ「ごめん、うちの嫁が……。」

ゴースト「こっちのフランって……。意外と、あれなんだね。」

ガルツチ「気にしないで……。とりあえず、これでよし。」

フレディ「サンキュー。だが、あれは勘弁しろよ?」

ガルツチ「まあ、これが正式な治し方なんだけどな……。」

あれ? そうですね、ガルツチの耳……。なんか違う。

こいし「そういうええお兄ちゃん、お兄ちゃんの耳おかしいよ?」

ガルツチ「え? 何がおかし……。フア!? 何で羽耳になってんの? 僕……。」

どういう訳か、ガルツチの耳は、いつの間にか空色の翼の耳に変わっていた。

ガルツチ「……。まさか、僕羽化したの!？」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
→

第37. 5話 有翼人の羽化

—スピリットレストラン 地下超大図書館— 夜ノ刻—

パチユリースイデ

はあ、いずれ羽化する予兆はあったのは分かっていたけど、ルッチよりも少し遅かったわね。いえ、弟だから仕方ないかな。

マルツチ「師匠、新しい本を持ってきました。」

パチユリースイ「あら、ありがとうマルツチ。」

マルツチ「父上を見ていたのですか？」

パチユリースイ「ええ、どうやらガルツチは羽化したらしいよ。」

有翼人の羽化。正直言って、原因は不明。ルッチの羽化も、気が付いたら肩から翼が生えたと言っていて、その現象はガルツチと似ている。ただガルツチは耳が翼に変わっている。

対して、その両親であるエアとフィンには、羽化の様子はなかった。

普通羽化は幼虫から蛹、そして成虫、言わば進化みたいな感じなのだが、有翼人の羽化は不明処がある。

何故大人の有翼人がいるのに羽化がないのか。様々な有翼人に関する事を探し当ててみたけど、余り見つからなかった。

分かったことと言えば、有翼人は人間と翼のある種族、または天使と神、悪魔と魔神から誕生し、場合によっては長寿の種族とも呼ばれている。

姿は殆ど人間らしいが、背中には翼が着いている。色は皆それぞれだが、場合によっては翼の数が4つ以上あるとされていて、その人は特別扱いとされる。

現にルッチもガルッチも、4つ以上の翼を持っている。(2人が覚醒すればだが………)

だけど不明なところがある。

その一つが羽化だった。成体と書かれたものは、決まって何処かに翼が生え、そのままの状態となる。例えば、両足のくるぶし部分とか太股部分、そして、両手に翼が生えるとか。

でも羽化するタイミングが、全く分からない。子供の時に早めに羽化するのがあれば、普通に大人になって羽化する事もあり、老人になってやっと羽化する事等がある。

2人に至っては、不老不死の呪いによって羽化する事は無かったのだが、どうやらそれとは関係がないようだ。

歳的には老人の歳なのだが、どうやら違うようだ。どうも、数千万歳になれば漸く大

人になれ、不可数歳になれば老人扱いになるらしい。一言言わせれば……………。

パチュリー「有翼人って、超長寿種族じゃないの？」

普通に考えたら気が遠くなる歳じゃない。でも滅びてしまった以上、確かめようがない。そして2人の両親から聞いたけど、どうも覚えていないらしい。

歳といい、羽化といい、ホントに謎すぎる……………。

マルツチ「父上が羽化ですか……………、と言うことは、何かしらのリミットが外れたんでしょう。」

パチュリー「え？知ってるの？」

マルツチ「ええ、諸説ではありますが、父上は耳から翼が生えたのですね？」

パチュリー「ええ、そうだけど？」

マルツチ「耳から翼でしたら、それは五感のうち、視覚は最も遠いところや人体の内部分が見える事が出来、聴覚だったら地獄耳並みによく聞こえ、心眼使わなくても心の声が聞こえるようになるんです。」

パチュリー「ええええ……………、敏感の理由はもしかしてそれ？」

マルツチ「いえ、父上が言うには、生まれたときから耳は敏感だったそうです。」

パチュリー「な、なるほど……………」。

マルツチ「一方で伯父上の肩ですが、恐らく第六感が今以上に敏感になった事でしょう

う。何故かは不明ですが。」

パチュリー「そう……………」

マルツチ「ただ、羽化のタイミングですが、本来なら儀式をして試練を与え、クリアすることによって羽化するのですが、羽化したい人はあまりいないのです。たまに知らない内に試練を与られ、気がつけばクリアして羽化していたつてもありますが。」

なるほど……………儀式ね……………。

パチュリー「それじゃあ、今もその祭壇は？」

マルツチ「いえ、ないですね。遺跡でそれらしき物がありました。まともに使える物ではありませんね。」

パチュリー「うーん、それじゃああの2人が羽化し、何の試練を渡したのか不明って事になるわね。」

マルツチ「あまり、詮索はやめておいた方がいいかも知れません。もしかしたら、とんでもない無理難題かもしれませんし。」

パチュリー「そ……………そうね……………」

確かに、これ以上の詮索は止めておきましょう……………。

マルツチ「しかし、少し疲れましたね……………。少々、お隣に寄り添ってもよろしいでしょうか？」

パチュリー「むきゆ？ま、まあいいけど……………」

マルツチ「では、師匠。失礼……………」

あ、そのまま眠っちゃった……………。それにしても、ガルツチの息子なのは分かってるけど、なんて言うか……………。可愛らしい外見ね。

まあでも、私も少し眠くなつたし、今日は……………添い寝でもさせてあげましょう。宙に浮かせる魔法使つてつと……………。

パチュリー「いつか、マルツチと恋人になったら、なんてね。」

sideChange

—博麗神社—

ガルツチside

ガルツチ「まだ婿はやらんぞ!!」

フレディ「どした急にデカイ声出しやがって。」

ガルツチ「いや、なんか知らんが……………、その……………、すまん。」

未来「あー、そういえば他にも息子が居たんだったね。」

ガルツチ「駄目だ、あの親父と切嗣に親バカが移されたか……………。おのれ切嗣と親父

!!よくも親バカを移してくれたな!!」

もうマジで許さん。あの2人には起源弾で殺るしかない。覚悟しやがれ……………。

t o b e c o n t i n u e d
⇩

登場人物3

神風深雪 18歳 8月31日生まれ 性別 女

身長：165cm 体重：50kg

スリーサイズ：B85/W55/H70

CV、坂本真綾

種族：人間

髪の色：ピュアスノー

目の色：グレーブルー

クラス：不明

属性：中立・中庸

ステータス 筋力：B／耐久：A／敏捷：SSS／魔力：EX／幸運：D＋／宝具：E

X

元々は普通的女子高生だったのだが、ある出来事により、警察に逮捕され、死刑となった。が、全王神の友人である龍王神によって転生し、第二の人生を送っている。

現在は未来達と旅に同行している。

東方の紅魔郷からのキャラの能力と全キャラのスペルカード、f a t eの全英霊の宝具やスキルランクがEX（病弱は無し）、更には戦闘技術などの特典を持っている。

こう見えて可愛いものには目がなく、しかもアラヤや鳳凰、更にはリサを見てしまったためか、ロリコンとシヨタコンに目覚めかけている。

コラボ者の登場人物

フレディ・クルーガー 不明 6月9日 性別 男

身長：173cm 体重：70kg

CV、置鮎龍太郎

種族：夢魔

髪の色：なし（髪自体ない）

目の色：空色

クラス：アサシン・バーサーカー

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：A／耐久：A／敏捷：SSS／魔力：EX／幸運：E／宝具：E

恐竜ドラゴン作である東方悪夢男の主人公。元々は、エルム街の悪夢に登場する主人公的な存在だが、忘れ去られたのか幻想入りさせられ、現在は霊夢のところに居候している。

焼きただれた顔、赤と緑の横縞セーター、焦げ茶色の帽子、右手に手製の鉤爪を持っている、かつスタンドを持っている。スタンド名は『ナイトメア』で、一度未来を手こずらせた事がある。

能力は夢を操る程度の能力で、夢の中では最強でもある。2つも形態あるが、どうやらまだあるらしい。

しかも仮面ライダーエグゼイドでもあるが、一度ガルツチと戦うも、ガルツチの贋作宝具である『破戒^ルすべ^ルき^レ全^イての符^カ』により、敗北を喫している。

ガルツチ程ではないが、人を殺すことがあるが、殺すといっても悪人の方であり、時には焼きただれた顔の皮を剥がし、ガイコツ顔を見せて脅かすこともある。さらに夢の世界でも現実世界でも関係なく不死身。博麗神社に住み、人里に散歩に行ったり、材料の買い出しに行ったりする（といっても霊夢にパシられている）。実を言うとフレディは幻想郷を知っていて、場所はある程度分かるらしい。また、酒に弱い。酒に手をつけ

ると何がなんだか分からなくなり、フラフラになったり、右手の鉤爪を振り回したりするので危険。その上、次の日には自分がやったことを何もかも覚えていない。それでも酒は嫌いではないらしい。自分の焼きただれた顔をけなされるのが一番大嫌いで、けなされると東方仗助の如くキレル。

ゴーストフェイス 不明 11月20日生まれ 性別 男？

身長：不明 体重：不明

CV，松野太紀

種族：一応人間

髪の色：不明

目の色：不明

クラス：アサシン

属性：混沌・中庸

ステータス 筋力：C／耐久：D／敏捷：A／魔力：EX／幸運：E／宝具：A

フレディとは先輩後輩関係で、同じホラー映画の存在。（スクリームという名の映画出身。）

顔がムンクなのだが、どういう訳かガルツチでも表情が分かってしまう（らしい）。
フランにはトラウマとかあるのだが、ガルツチの妻であるフランとはどうも平気らしい。

レザーフェイス／ジェド 不明 誕生日不明 性別 男

身長：不明 体重：不明

CV、大友龍三郎

種族：人間？

髪の色：黒

目の色：不明

クラス：アサシン

属性：混沌・悪？

ステータス 筋力：A／耐久：C／敏捷：EX／魔力：D／幸運：E＋／宝具：不明

『悪魔のいけにえ』に出てくる怪物？で、フレディとはゴーストフェイスと同様ホラー映画の先輩後輩関係である。

喋れないのか、殆ど『ウガツ』と言っているらしいが、フレディには何を言ってるの

か分かるらしい。

ガルツチも一応分かるのだが、勘違いするのがあれなため、現在普通に喋らせる薬を
調合中。

チャツキー&ティファニー 不明 どちらも誕生日不明 性別 チャツキー 男
ティファニー 女

身長：不明 体重：不明

チャツキーCV，金丸淳一 ティファニーCV，岡村明美

種族：人形（どちらも）

髪の色：（チャツキー）赤（ティファニー）金

目の色：（チャツキー）緑（ティファニー）青

クラス：アサシン（どちらも）

属性：（チャツキー）混沌・悪（ティファニー）中立・中庸

ステータス 筋力：C／耐久：D／敏捷：C／魔力：EX／幸運：E／宝具：D

『チャイルドプレイ』という名のホラー映画の登場人物で、上記2人同様、フレディとは
ホラー映画の先輩後輩関係。

2人とも夫婦で喧嘩もするのだが、結構なかよし。

山本貞子 不明（見た目的に16〜18歳） 6月？日 性別 女（実はふたなり）

身長：不明 体重：不明

CV、沢城みゆき

種族：霊

髪の色：黒

目の色：黒

クラス：キャスター・アサシン

属性：混沌・悪

ステータス 筋力：E／耐久：D／敏捷：A／魔力：EX／幸運：E／宝具：B

『リング』というホラー小説の登場人物で、上記3人とは違うが、フレディとはホラー関連での先輩後輩関係。

ふたなりをお持ちで、ぶつちやけ男女どちらもいけるといいうバイセクシャルでもある。（実はガルツチの本質を見抜いている。）

しかもどうやら、BL好きの腐女子で、未来とガルツチが付き合ってるのが分かると、早速簪のBL同人誌を買って読んでいるらしい。(2人はそれに気づかない。)

トライボグ 不明 誕生日不明 性別 男

身長：不明 体重：不明

CV、最上嗣生

種族：ロボット

クラス：不明

属性：秩序・中庸

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／幸運：不明／宝具：

不明

海外の格闘ゲーム『モーターコンバットXL』に登場するキャラ。スモーク、サイラックス、セクター、サイバーサブ・ゼロの姿をコピーした謎のサイバネティック忍者。基本ボディはスモークである。4つの姿を持つわりには名前にトライ(3つ)とあり、本人もそれにコンプレックスを抱えているらしい。

別の姿になるのはもちろん、別の姿を呼び出して戦うこともある。デスマシーンにも

変身でき、相手を押し潰してレッドキューブにしてしまう。

普段は八雲紫の家に居候している（本人いわく『私はお手伝いロボットじゃない』）。
橙の遊び相手をしたり、紫が冬眠した際は彼女の式の藍と共に幻想郷を仕切るんだとか
…。

ちなみに性格は優しいが、怒らせると怖い。

仮面ライダーゲンム／ジェイソン・ボーヒーズ 不明 6月13日 性別 男

身長：192cm 体重：114kg

CV、森川智之

種族：人間？

髪の色：黒（ゲンム変身時、変身前は生えていない）

目の色：不明

クラス：バーサーカー

ステータス 筋力：A／耐久：EX／敏捷：B／魔力：D／幸運：C／宝具：—

『13日の金曜日』の殺人鬼。フレディの永遠のライバル。1歳の時、先天性の病で顔が醜く歪んでしまった。11歳の時クリスタルレイクで参加したキャンプで子供達にい

じめられ湖に沈められたが奇跡的に無事だった。

あるフレディとの対決に母を変装して騙したのか、フレディと敵対している。

何故かキースに特別扱いされており、兵士達から内緒でもらったゲームドライバーとプロトマイティアアクションXガシャットで仮面ライダーゲンムに変身する。

キースにとつての最終兵器でもある。

キース・シャーデイス 不明 誕生日不明 性別 男

身長：不明 体重：不明

CV，最上嗣生

目の色：茶色？

クラス：不明

属性：(教官時) 秩序・善 (現在) 混沌・悪

ステータス 筋力：不明／耐久：不明／敏捷：不明／魔力：不明／幸運：不明／宝具：不明

元『進撃の巨人』出身の教官だったのだが、あまりにも厳しすぎるといふ理不尽な理由でクビになり、進撃の巨人の世界から幻想郷に追放された。その恨みを晴らすため追

放先の場所で力をつけ、13人の部下達を集め、八雲紫及びその式2人を始末して幻想郷を支配しようとしている。

現在支配の邪魔をしているフレディ達と、今回この世界に來たガルツチ、そしてウルトラマンセラフイムオーブとなった簪を敵視している。

第38話 魔境狂乱世界 幻想郷 『エルム街の悪夢男』

—
???

キース side

キース「ツ!？」

この気配、まさか……。まさか、この世界に舞い戻ったというのか!?!いや、確かに彼は、人類にとつての希望だった……。同時に、敵対すれば、確実に人類にとつての絶望にもなり得る彼が、この世界に来た……。

「如何なさいましたか?」

キース「拙いことになった。私にとつての天敵が、この世界にきた……。」

「貴方様に、天敵?」

キース「ああ、かつて我が世界は絶望の闇に覆われていた。しかし、一筋の光があった。その光は、一瞬にして巨人を両断し、更には町を救った。そして彼は、訓練生となり、立体起動装置、更には学問や身体測定でも完全に熟し、首席を得るぐらいの実力を持った。が、彼は首席を取りやめを頼み、変わりに2位の人を首席をあげてほしいという謙虚さもあつた。」

「凄い訓練生ですね……………」

ああ、あんな奴が調査兵団に入るとは、本当に幸運だった。だが、今の私に取っては……………、不運過ぎる。

キース「だが、人類は危惧していた。もし、敵対してしまえば、滅ぼされかねなかった。その男の名は……………」

『ラーク・バスター・ガルツチ』。ミカサ・アッカーマンの実力を超える、史上最強の男だ。」

side change

—人里— 月夜ノ刻—

ガルツチ side

さて、まずは人里にいるセイバーを、どうにかして倒さないとね。今回セイバー討伐に抜擢したのは、僕、イリヤ、フレディ、そして本音の4人となった。

フレディ「んで？どの辺りなんだ？」

ガルツチ「うーん、反応が最も高い場所が何処かに……………あつた！」

本音「どこ？」

その場所は、人里の中心の場所だった。しかし、セイバーらしき姿はどこにもなかつ

た。

本音「何もないけど？」

フレディ「おいガルツチ、本当にここか？」

ガルツチ「正確には、こことは違う世界だな。つて、なると……………」

イリヤ「そうね……………、致し方ないけど、ルビー。」

ルビー『はいはい。半径2メートルで反射路形成、鏡界回廊一部反転します!!』

ガルツチ「2人とも、この場から動くなよ？」

ルビー『ジャンプ!』

そして僕は、人里とは反対の世界、鏡面世界についた。

フレディ「な、ええええええ!!」

本音「なにこの魔法ステッキ!」

ルビー『おや? そういえば、今更ですが見慣れない人達がいますね。つて、そんなこ

と後々、皆さん。来ますよ。』

さあ、何が来る? 僕はそう思っていると、黒い闇は形を変えていく。

そして、そこから現れたのは、黒いマントと黒い鎧に深紅色の線があり、金髪で黄色

のレイプ目をした男性がいた。

ガルツチ『『剣士』の『ガウエイン・オルタナティブ』か……………。』

『殺す……………、殺すッ!』

イリヤ「来るよ!」

フレディ「よっしゃ!行くぜ!」

【マイティアクションX!】

フレディ「変身!」

【ガシャット!レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!ワツチャネーム!?ア
イム ア カメンライダー!】

ガルツチ「……………いつ見ても、何でLEVEL1はゆるキャラっぽい姿なの?」

フレディ「おっと、これだけじゃねえぜ。」

【ゲキトツロボツツ!】

すると、フレディが取り出したのは、さっきのガシエツトとは違う物だった。つてい
うか、それどうやって持つてるの?

フレディ「大・大・大変身!!!」

【ガシャット!】

【ガツチャーン!レベルアップ!ぶつ飛ばせ!突撃!ゲキトツパンチ!ゲキトツロボツ
ツ!】

フレディ「へへっ、どうだこの姿。」

【GAME CLEAR!!】

フレディ「あんまり歯応えはなかったな……………」

ガルツチ「仕方ないさ。あれでも弱体しているんだ。まっ、カードも回収したし、さつさと戻りま——」

ルビー『おっほー、本音さんのパンツの中ってこんな感じなんですわねえ。ムフフ……………』

……………一遍シメる。

ガルツチ「本音、君のスカートの中に変なのがいるから、其奴蹴飛ばして。」

本音「うん。私もそうしようと思っていたの。」

ルビー『え?』

本音「そーれ!」

ルビー『ギヤアアアアアアアアア!!!』

ガルツチ「擬似宝具起動、行け! 『荒れ^タ狂^ラ哀^スしき竜^ッよ!!!』

←

そしたら皆、猫耳とそれに合うかのように尻尾が生える。

←

僕はプツツンとキレて、ルビーを殺す勢いで、贗作宝具を使用しまくっている。(現在
二二二)

つとまあ、こんな感じですね。

霊夢「ちよつと、神社当たってないとは言え、落ち着きなさいよ。」

アラヤ「諦めて下さい、霊夢さん。ああなつたら、止められませんか？」

ジエド「しかし、よもや猫耳を付けられてしまわれるとは、このジエド。不覚と言つていいでしょう……………」

フレディ「駄目だこいつ、なんか変な方向に向かつてる気がする。」

ゴースト「まさか、ジエド先輩の喋り方が、あなるなんて、思わなかったっす。」

イリヤ「あの、お兄ちゃんには悪気はないと思うよ。喋らせたっていうのは事実だったんだけど……………」

こいし「何でか知らないけど、私達。」

フラン「よくカオスを起こすのよね……………」

そこで大人しく、そのウイルスに犯されてろ。愉快犯礼装め。

イリヤ「え、エグい……………」。

本音「さすがにあれば、やり過ぎじゃあ……………」。

貞子「確かに……………、人としてどうかと思うわよ？」

ガルツチ「いや貞子さん？人としてとか言う以前に、君幽霊でしょ？」

まあ、これで何かしでかそうとすると、自動的にウイルスが発生する仕組みにしたいから、一応制御はできるようにしたかな？

ガルツチ「というかさ、まさか全員猫耳にされるなんて……………。っていうかホラー陣営が猫耳にされてしまったせいとか、最早カオスになったんだけど……………。猫耳にホラーって、どう見てもおかしいだろ、誰得だよ。」

ジエド「恐らく、余程の変人であれば、得になるのでは？」

ガルツチ「それがこの小説を読む人が居るってのか？恐竜ドラゴンさんのとこやエイリアンマンさんならまだしも、風龍さんの場合100%でカオスを起こしかねない『カオスを引き起こす程度の能力』者ですよ？」

未来「待つて待つて、うちの作者名出てるよ。そしてメタイって。」

ごめんなさい、お二方。

鳳凰「でもお母さん、私は別にいいと思うよ？だって、可愛いし。」

さて、どうしたものか……。とりあえず、次行くところはバーサーカーがいる魔界って事にしようかな？

確か、白夜叉と未来と霊夢、あとはゴーストさんだっけ？しかも、鳳凰も一緒に来るよのだが……………。

大丈夫だろうね。うん。

t o b e c o n t i n u e d
→

第40話 魔界のバーサーカー

—魔界—

未来side

霊夢「それにしても、この場所に行くのって、随分久しぶりね……………」

ゴースト「霊夢さん、ここ来たことあるんすか？」

霊夢「ちよつとね。色々あったけど……………」

霊夢さんが、この世界に来たことあるって、何しに来ていたんだろ？

鳳凰「未来お父さん、そろそろポイントに——ツ!!下がって!!!」

え? 一体如何——

『ズババツ!!』

突然謎の攻撃が襲ってきたが、鳳凰の防御魔法で防いでいった。

??? 「やはり、この程度の攻撃は効きませんか。」

霊夢「あら、随分なご挨拶ね。夢子。」

???「久しぶりね、霊夢。」

ゴースト「え？霊夢さん、知り合いつすか？」

霊夢「一応ね。それで、何の真似かしら？」

夢子「いえ、ただ仕事を熟してただけです。侵入者を排除するのが、私の役目なので。来なさい、頼光さん。出番です。」

???「あらあら、鬼が来たのね。だったら、お相手しないと。」

鳳凰「ツ!!皆、彼女からサーヴァント反応を起こしてる!あの人、クラスカードの

一人『バーサーカー狂戦士』よ!」

嘘くん。なんか、別の意味で有り得ないんだけど。シャドウサーヴァントの筈なのに、何で従えてるの？

ゴースト「ちよちよ霊夢さん!僕達鬼と呼ばれてるんすけど!」

霊夢「やれやれ、萃香じゃないのに……。まあいいわ、貴方が鬼というのなら、望み通り『鬼』になるわ。鬼人『狂オシキ鬼』!」

え?!霊夢の姿が、別人になっちゃった!?

霊夢「奴ハ、私ガ引キ受ケル。ソツチハ、夢子ヲ!」

ゴースト「ま、任せるって——」

未来「分かった！来て、ラーマ!!」

ラーマ「やっと、出番だね。行くよ、マスター!」

白夜叉「小娘、降参するのも今の内じやぞ?」

夢子「ご冗談を、すぐ終わらせます。」

白夜叉「そうか……………、ならば容赦せん!!」

瞬間、魔界だった場所は、今では白夜叉の世界へと移されていた。離れても使えるつて、白夜叉……………、実はそれ宝具でしょ?」

ゴースト「だ、大丈夫ですか!」

未来「大丈夫、ゴーストフェイスさんは耐久スペルカードを!」

ゴースト「りよ、了解つす!怪奇『ポルターガイスト』!!」

ゴーストフェイスさんの後ろに、不気味な“目”が描かれた額縁が出現し、額縁を中心として椅子、机、ナイフ、電球、皿、コップ、等の家具が現れ多数入り乱れ始めた。

鳳凰「私も手伝います!命&剣符『ソード・オブ・ザ・レインズ』!!」

鳳凰ちゃんはゲーム盤に触れると、様々な剣が現れ、しかも自分の意思で夢子という少女を襲いかかってきた。

夢子「私の知らない間、ルールが変わっているのね。でも、そんな攻撃、私の”短剣”の前には無力よ!!」

え？ちよつと夢子さん？それ、短剣じゃなくて剣ですよ？どう言う基準してるの？
鳳凰「だったら此はどう？」

汝、美の祝福賜らば、我その至宝、紫苑の鎖につなぎ止めん！氷の龍の剣よ、目覚めよ！！『アブソリユートドラゴンソード』！！」

鳳凰ちゃんが呼び寄せたのは、龍の姿をした氷の大剣で、それが夢子やあのバーサーカーを襲いかかった。

夢子「頼光さん、宝具開帳を！」

頼光「ええ。すぐに終わらせて——」

霊夢「私ヲ忘レテ無イ？終符『瞬獄殺』！！！」

頼光「え——」

『(この効果音は、文字で表せないほど非常にエグい事になっています。ご了承お願い申し上げます。』

あのエグすぎる効果音が終わると、そこには背中に獄と描かれた血塗れの霊夢が立っていた。

夢子「ええええ……………、嘘。」

鳳凰「余所見してる場合？」

夢子「しまっ!？」

鳳凰「つて思ってるけど、目的は達成したから、もうようはないわ。私達の目的は、あくまでこのカードだから。」

そう言うと、先程の龍の姿をした氷の剣は、姿を消した。

夢子「な……………何のつもり——」

白夜叉「元々は、この異変を解決するために、此奴のような奴を探しておるのじゃ。それを集め終えたら、もうここに用はない。」

未来「白夜叉、本当は戦いたかったんじや……………」

白夜叉「まあ。では。『リターンクリスタル』!」

元々はガルツチが投影してくれたもので、設定場所は博麗神社になっている。白夜叉が使用した途端、僕らは姿を消し、気が付くと博麗神社に到着した。

—博麗神社—

って早いよ!?!何あの短い戦闘シーン!?

ガルツチ「未来、それ僕が言おうとしてただけど……………」

未来「って、ガルツチは何読んでるの?」

ガルツチ「何って……………」。「簪と本音の百合同人誌」だけど?」

ファ!?2人の!?ってどうかガルツチってそんな本読んでるの!?

未来「簪!?!いつの間にそんなの書いて……………」

簪「わ、私じゃないよ!?!// // // // // // // // // //」

本音「こいこいちゃんを作ってくれたんだよ。」

ゴースト「ええええ……………」

霊夢「ガルツチ……………、貴方って……………」

ガルツチ「言うな。自分で言うのもなんだが、バイセクシャルなんじゃないのかと、思

い始めてんだよ……………」

鳳凰「お母さん、もう性別捨てちゃったら?」

ガルツチ「いやいや、鳳凰。それはダメだつて!!」

こいし「お兄ちゃん。今度は白夜叉とレテイシアの……………」

レテイシア「待て待て待て待て!!やめんか!?!私の醜態を、同人誌として晒させる気か

!？」

こいし「え………、見せたいのにく。」

レテイシア「いや、そうだとしてもだな!？」

2人が書いた百合同人誌かあ………、見てみたいかも。

霊夢「まあいいけど、それよりガルツチ。バーサーカーのカード、取ってきたわよ。」

ガルツチ「サンキュー。さて、残るは、アーチャー、ランサー、アサシン、キャスター、ライダーの5人だな。」

鳳凰「でもお母さん、今回のバーサーカーは『源頼光』だったよ。」

ガルツチ「むう………、てつきりExtraの奴らと思っていたが………違うか

………。」

未来「え?」

ガルツチ「実は、この世界に居る7騎を調べていたんだけど………、どうも噛み合っていない。セイバーはガウエインだったから、Extraのサーヴァントかと思ってた。が、源頼光だったら話は別。どう見ても接点はない。でも、ある程度は予測できる。アサシンとキャスターが一緒って事は、恐らく佐々木小次郎とメディア。でも、こういう事だ?」

フレディ「なあ、今は深く考えない方がいいと思うぜ?俺達だって、まだ分からねえ

事ばかりだしよ。」

イリヤ「そうよ、まずは残り5騎のサーヴァント達を倒しましよ?」

ガルツチ「確かに、そうだね。」

ガルツチは同人誌を読み終えたと同時に、誰かがやって来る事を察したのか、皆は鳥居のところをみた。そこには、フレデイの黒いバージョンの仮面ライダーが、立っていた。

??? 「あれ?なんか前来たときより増えてない?」

t o b e c o n t i n u e d
→

第41話 仮面ライダーゲンム

—博麗神社—

ガルツチ side

え、何あのフレディが闖落ちしたバージョンの仮面ライダーは……………。

フレディ「ゲンム？どうかしたのか？」

ゲンム「えーっと、暇だったので来ましたが……………。っていうか、人が多い。」

フレディ「あー、紹介するぜ。此奴はガルツチ、幻影の不死鳥という二つ名を持つて
る。ガルツチ、彼奴はゲンムだ。」

ゲンム？にしては、あの鈍が気になるんだが……………っていうか、何で変身したまま
？

ゲンム「宜しく、ガルツチさん。」

ガルツチ「さん付けはいい。宜しく、ゲンム。」

ゲンム「何ですか？そのカード。」

ガルツチ「此？クラスカードっていう奴。どういう訳か、幻想郷のあちこちに散ら
ばってるから、集めているんだ。」

ゲムム「ふーん……………。でも、なんて言うか君、女の子っぽくない？」
『グサツ!!』

ガルツチ「おいゲムム、出会って早々言う台詞かよ……………。っていうか、僕男なんです
すが…………。」

ゲムム「え……………、あーごめん!!」

フレディ「うわあ……………、すげえ絶望オーラが漂ってる…………。」

未来「えーつと、ゲムムさん。ガルツチは、あまり女性だと思われたく無いんですよ。
どうもそれ言うのと、相当ショックを受けるかぶつつんとキレて、ぶん殴られてしまおう
か。」

ゲムム「そ、そこまで?」

ルビー『そうですね。なんとたつてあの人は、身も心も女の子でするぜバブっ!!』
黙れ、愉快犯型魔術礼装……………。

未来「まあ、大体あなるね。」

ゲムム「い、以後気を付けます……………。(;(。D。)(」

フレディ「そしていつの間にか憎悪のオーラが……………」

ガルツチ「擬似宝具起動……………。これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮……………!
『ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン』
『吼え立てよ、我が憤怒!!』

あのゲンムっていう人から、何故かフレディを見る度に憎悪の視線を感じたからだ。

それから、ゲンムはこの場からすぐに立ち去っていく。が、何故か鉈を忘れていったように、僕はそれを拾い、博麗神社を後にしようとしていた。

フレディ「ガルツチ？何処に行くんだ？」

ガルツチ「ゲンムがこれを忘れにいったから、届けに行くだけだ。だから着いてこなくていいよ。」

フレディ「お、おう。気を付けろよ？」

そして急いで走ると、丁度ゲンムが看板を見ていた。

—分かれ道—

ガルツチ「ゲンム、忘れ物だ!!」

ゲンム「え？あ、ああ!!それ僕の鉈!？」

ガルツチ「やつぱりな、忘れ物するなよ？」

ゲンム「ごめん。」

鉈を渡し、博麗神社に戻る途中、あることを言ってみた。

ガルツチ「……………誰か復讐したい人居るのか？」

ゲンム「!？」

ガルツチ「……………凶星か。」

ゲンム「何で……………、何で分かったの？」

ガルツチ「僕はね、ポーカーフェイスをしている奴には目を見ているんだ。」

ゲンム「目を？でも僕は——」

ガルツチ「仮面を付けていても、無意識の心眼があれば、視線で分かっちゃうんだ。どす黒い憎悪の視線がな。恐らく君の感情は、畏怖しているだろう。そして、殺意を僕に当てている。違うか？」

すると、ゲンムは膝を着く音が聞こえる。どうやら、当たってたようだ。

ガルツチ「なあ、教えてくれないか？いや、その前に変身を解いて欲しい。今この辺りは僕と君以外には来ないし、聞こえない、見られないようにしているから。」

ゲンム「……………他言しないって、約束する？」

ガルツチ「……………時が来るまでは、話さない。」

ゲンム「時が来るまでは？」

ガルツチ「隠していたとしても、いずれボロが出るだろ？どちらか、あるいは第三者から言うに違いない。だから、時が来るまではって事だ。」

ゲンム「……………分かった。」

【ガッチョーン！ガツシユーン！】

フレデイが着けていた変身ガチエツトが外れると、そこにはホツケーマスクを被っていた男がいた。

ガルツチ「やつぱり……………、『13日の金曜日』に出てくる——」

ゲムム「ジェイソン・ボーヒーズ。そう、それが僕の真名だよ。ガルツチ。そして、キースの部下にして最終兵器なんだ。」

ガルツチ「は？キース？」

え？ちよつと待て、何で教官の名前が!?

ゲムム「知ってるの？」

ガルツチ「いや待て、もしかしたら人違いかもしれないけど、確認を取らせてくれ。キースって、『進撃の巨人』出身の、キース・シャーデイスなのか？」

ゲムム「うん、その人だよ。それがどうかしたの？」

ガルツチ「マジか……………。教官、一体何があつたんだ？」

ゲムム「その前に教えて、キースとどう言う関係なの？」

ガルツチ「あー、実は僕のかつての先生でもあるんだ。僕は進撃の巨人の世界で、その世界の巨人と戦ってたんだ。まあ、あの装置がなくても飛べるが、あれはなかなかい

い経験したよ。」

ゲンム「そ、そうなんだ。」

ガルツチ「んで、その教官は、何があつてこの世界に？」

ゲンム「それはね、あまりにも厳しすぎるといふ理不尽な理由で『進撃の巨人』の世界から幻想郷に追放。その恨みを晴らすため追放先の場所を力をつけ、強力なならず者や兵士達を集める。そして八雲紫及びその式2人……………八雲藍と橙を始末してこの世界を支配しようと企んでるんだ。」

はあ!?

ガルツチ「嘘だろ!?!あの教官だったからこそ、みんな精一杯頑張つて来たじゃねえか!なのに追放つて……………。ちつ、あの世界の人間は、本当にクズばっかだな。そうやって、使える奴らを減らして、自分で首を絞めているというのに……………」

ゲンム「ガルツチ……………」

ガルツチ「復讐とか八つ当たりなんて、馬鹿なことをしちゃ駄目だ。そう言うのは、僕のような復讐者がやることさ。君とフレイに何があつたかは知らない。でも、復讐は止めておけ。後悔することになる。」

ゲンム「何で？」

ガルツチ「かつて……………、僕はこの世の全てを憎んだ事があつたんだ。理由は単純。」

”誰も、僕を見てくれる人が、居なかった”。

僕は、かつて訣別した『遠藤宇宙』の頃の話をしていた。訣別したとしても、起こった出来事は、如何することも出来ない。

それでも、出来るだけ復讐心を止めようと、全て話した。

ガルツチ「——以上だ。」

ゲムム「……………そうだったんだね。僕より、辛い思いをしていたんだね。」

ガルツチ「ああ……………。でも、未来と出会ったからこそ、ううん、転生を重ね、色々な人と出会ったからこそ、今の僕があるんだ。それにもう、あの惨めな宇宙はこの世に居ない。今ここにいるのは、本当の過去を否定し、大切なものを守るために、様々な奴らを殺してきた『この世の全ての刃』ラーク・バスター・ガルツチしかない。」

ゲムム「……………」

ガルツチ「あなたに対して復讐するなどは言わない。でも、フレディを殺さないでくれ。母さんだって、望んでないから……………」

そう言い、僕は直ぐさま博麗神社に戻ろうとしたが、ふと、あることを思い出した。

ガルツチ「そうだ。ついでだから、教官にも伝えてくれ。『必ず、止めに来てやるから』ってな。」

sideChange

ゲンム(ジエイソン) side

ガルツチか……。不思議と、母さんのような優しさが感じた気がする。でも、あの意味僕の天敵になる人かもしれない。

彼の言うとおり、復讐はよくないかも知れない。フレディがママに化けて騙していた事に関しては、彼も怒っていた。でも、復讐してもいいが、殺さないで欲しいって言うだけ……。今更如何すればいいんだろ。ママ、僕は如何すればいいの？

【マイティアアクションX!】

僕には分からない……。復讐するべきなの？しない方がいいの？

【ガシャット!レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲームワツチャネーム!?アイム ア カメンライダー!】

でも、これだけは分かる。ガルツチ、君が最大の障壁なら………僕はそれを乗り越えてみせるよ。

ゲンム「楽しみにしててね、ガルツチ。」

t o b e c o n t i n u e d ♪

第42話 フランとフレディ世界のレミリア

—紅魔館 門前— —夜ノ刻— —天満月—

フラン side

どうも、フランだよ。今は、紅魔館にいるアーチャーを倒すために、簪ちゃん、オーちゃん、アラヤ君、リサちゃん、そして鈴美さんと一緒に向かってたところよ。

まあ確かに、この世界の私と、お兄ちゃんと一緒に来た私とは、全く違うのは確かだけど、それでも本質は一緒なのかな？

因みに今回は、3つのグループで別れて行動してるよ。お兄ちゃんとイリヤちゃん、未来お兄ちゃん、フレディさん、ゴーストさんは白玉楼のキャスターとアサシンを。

本音ちゃんとこいしちゃん、霊夢さん、深雪お姉ちゃん、愛花ちゃんはライダーを倒しに向かっているわよ。

ただ、ここで問題が起きたのが……………。

美鈴「アイエエエエ!?!? 妹様!? 妹様ナンデ!」

厄介なことに、美鈴に見つかっちゃったのよね。珍しく起きてるし、そのまま紅魔館

に入つて行つちやつただけだ………。つていうか、この世界の私と違うでしょ？
簪「ねえ、フランちゃん。」

フラン「うん、分かつてはいるけど、さすがに咲夜なら気づくかな？」
アラヤ「だと、いいのですが………。」

でも、さすがの咲夜も美鈴と同じ反応をしていて、そのまま気絶してしまった。うーん、此はどう言えればいいんだろう？まあ、この世界のお姉様なら、この運命も見抜けるはず——

レミリア「チーン チョロロロ

そう思つてた時期が、私にもありました。でも、この世界の私は驚いていなさそう。やっぱり、自分自身だからなのかな？つていうか、お姉様が気絶して失禁してるし………。

お兄ちゃんの言葉を借りるなら………、なんでき。

—紅魔館 客室—

そんなこんなで、私達は紅魔館に入つて、お茶していたんだけど、来た用事も話さないアレだったので、私はすぐに本題を出そうとした。

レミリア「フラン、貴方の目的は分かつてるわ。このカード、でしょ？」

なんと、自分から出し、しかも驚いたことに、それはアーチャーのカードだった。

簪「嘘!? 一体どうやって!？」

フラン「あらかた、パチエに頼んで、自力で倒したんでしょ？」

レミリア「ええ、正解よ。さすがね。」

鈴美「でしたら、どうかそのカードを——」

レミリア「でもダメよ。このカードは、私のだから。」

まあ、そんなことだと思ってたわ。お姉様は、手にした物は自分の物にしたがるからね。まあ、穏便には出来ないだろうけど………。

オーフィス「それ、危険。下手すると、世界を滅ぼしかねない。」

レミリア「そうかしら? そんな運命なんてないわ。見える運命は、私が持つて、この幻想郷を支配しているのが、目に見えるもの。」

(フレディ世界) フラン「むう、またお姉様変なこと考えてる。」

フラン「お姉様がそう言う慢心染みた事をいうから、紅霧異変の時に失敗したんじゃないの?」

レミリア「あら、面白い事言うのね。私がまた同じ失敗をすると? その能力を制御すら出来ない貴方が?」

フラン「残念だけど、私はもうあの時のような感じじゃないわ。制御どころか、強化

したわよ。次元を破壊する事なんて、容易いわよ?」

レミリア「!?」

まあ、試したことはないけど、実際それぐらい強化してるってのは事実だしね。お兄ちゃんと一緒にいたおかげなのかもしれないしね。

アラヤ「えーつと、この世界のフラン姉さん。少し、寄り添ってもいいですか?」

(フレディ世界) フラン「え?そ、そんなことしたら——」

アラヤ「ダメ……………、ですか?」

(フレディ世界) フラン「うっ……………、わ、分かった。」

リサ「私も私も!!」

咲夜「……………何これ。」

フラン「甘えたい年頃だと思うよ?見た目的に、6歳ぐらいだもの。」

レミリア「へえ、まるで母親みたいな事を言うのね。」

フラン「実際そうだよ?結婚もしてるし、子供もいるよ。」

そんなこと言うと、お姉様は口に含んだ紅茶を吹き出した。

レミリア「な、なななななな、な、なっ!?!」

フラン「大体4人ぐらい産んだかな。」

簪「平行世界のフランちゃんって、確か14人産んだんだっけ?」

フラン「そういえば、平行世界のバルツチが言ってたわね。」

レミリア「なっ?!? そんな運命あつてたまるものですか!?!」

フラン「あれあれ? 否定しちゃうのかな? それとも、妹に先越される運命なんて、怖くて見たくないのかしら?」

簪「フランちゃん……………、煽りすぎは——」

すると、お姉様の武器であるグングニルが、私の右頬を掠めるように投げつけ、そのまま壁にぶつかった。

レミリア「どうやら、貴方の私は、私に対する礼儀がなっていないようね。」

フラン「そうかしら? でも、認めないっていうのはどうかと思うわよ? 怒りの沸点が低いのは、悪いクセよ?」

レミリア「あらそう? その怒りを沸騰させたのは誰かしら?」

フラン「言われなくても、私よ。私のお姉様は、出来るだけ沸点を高めようと、色々罵倒とか侮辱とかやっていたけどね。」

オーフィス「それ、もうSMプレイじゃ……………」

まあ、沸点が低いのを何とかしたいって言ってきたのは、他でもないお姉様だったしね。正直、他の人から見たら、妹に罵倒される姉のSMプレイみたいな感じに見えたし、そして気が付いたら、鞭打つてとか、罵倒しながら踏みつけて下さいとか言い始めてき

たし。

うん、さすがに私引いたわ。そしてそれを心底楽しんでる私も引いてる。もう完全にSMプレイだもん。最終的には、あのペニバンつてのを着けて、滅茶苦茶楽しんでたし……………」

もう止めよう、これ以上はお姉様の名誉的に困るわ。私のお姉様はMなんかじゃない。此見ているみんな、いいね？

(フレディ世界) フラン「ねえ、もう一人の私。それ以上は——」

フラン「それは無理よ。元々ここに来た理由は、そのカードを回収しないと駄目なの。穏便ですませることは出来ないなら、もう方法を選べないのよ。」

レミリア「それはつまり、倒してでも奪い取るっていうこと?」

フラン「ええ、そうよ。アーチャーを倒してカードを手に入れようと思っていただけ、まさかお姉様に取りられていたのは想定外だったわ。出来れば渡してくれれば、こんな事にはならなかったけど。」

そう言い、私は立ち上がり、あの時バットマンVSスーパーマンの世界に居たとき、バットマンが作り、渡してくれたクリプトンの槍を持った。

レミリア「私の真似事かしら?」

フラン「別世界の私の力、見せてあげる。」

そう言い、私とこの世界のお姉様は館の屋上に向かった。簪ちゃん達やこの世界の私達も、それについてきた。

t o b e c o n t i n u e d

第43話 破滅の魔神フランVS運命を操る吸血鬼レミア

—紅魔館 屋上— | 月夜ノ刻— | 望月—
 フランスィデ

【Lancer Remilia Scarlet VS Berserker Fr
 andle Scarlet】

【Sword or Death】

先ず動き始めたのは、お姉様の方だった。私に追いつけないほどの動きで、私を突こうとしている。でも、私からしたら、鈍いわね。

フラン「遅い！」

レミア「どうかしら？」

薙ぎ払う動作もしようとしているけど、お姉様。その攻撃は無駄よ。

フラン「よっと。」

レミリア「ちよこまかと、良く動くわね！」

フラン「私のお姉様だったら、もっと素早く動くわよ。こんな風に!!」

レミリア「ツ!？」

普通の人からしたら、一突きしたように見えるけど、実際には50回ほど突いていて、避けきれなかったのか、衣服が破けていた。

レミリア「やってくれるわね……………。スペルカード発動!紅符『スカーレットマイスタ』!!」

ここでスペルカードを使ってきたわね。でも、そんな狭さなんて、序の口よ。

咲夜「なんと……………。お嬢様の弾幕を、途惑う事なく、狭いはずの隙間に入って、近付いている……………」

アラヤ「フラン姉さんは、もしレミリアお姉様と似た人物がいたらの対策で、ずっと修行していたんだって。」

(フレディ世界) フラン「凄……………!私も混ざりたい!」

簪「うーん、今は我慢して?」

(フレディ世界) フラン「む……………」

そういうえば、当時の私もこんな感じだったなあ。

レミリア「余所見なんて、随分余裕ね！その心臓、もらったわ！」
あの構え、やはり来るのね。

レミリア「必殺『ハートブレイク』!!」

フラン「トラップ発動！『テンタクルス・インカーセラム』！」

レミリア「え？キヤツ!？」

素早い攻撃で、私に当ててくるなんて甘いわよ。お姉様。そしてお姉様は、触手に捕まり縛られてしまった。

レミリア「ひ、卑怯よ!!触手をつ、使うなんて!」

フラン「罠に気が付かなかったお姉様が、どうかと思うけどね。それに私、まだ本気すら出してないわよ?」

レミリア「何ですって?」

フラン「だって、まだこの槍以外スペルカードも能力も使っていないだもん。」

レミリア「……………どうやら、そこまでコケにさせられているなんて、思ってもみなかったわ。いいわ、預言してあげる。この戦いで最後に勝つのは『私よ』!」

その途端、触手は無惨にも何かに切り裂かれてしまい、お姉様は自由に動けるようになっていた。多分あれは、咲夜ね。

咲夜「別世界の妹様、出来ればこう言う類の罫は使わない方がいいですよ。」

フラン「それもそうね。まあ、さすがに能力を使われるぐらいなら、そろそろ宝具を使おうかな。」

レミリア「宝具？」

無駄な足掻きとか思ってるけど、その運命………『破壊』してあげる。

フラン「一撃必殺！『刺し穿つ碧緑の槍』!!」

レミリア「早っ——」

緑の一閃が走り、お姉様を貫いた。咲夜だったらわかるけど、他の人からしたら、まるで瞬間移動したかのように見えてしまうでしょうね。

フラン「私の勝ちよ、お姉様。」

レミリア「………驚いた。戸惑い無く、私の心臓を射抜くなんて。本当に、私の妹とは思えないほどの、純粹な殺意ね。」

フラン「アーチャーのカード、頂くわよ。」

レミリア「ええ、どうぞ。好きなように。」

さて、アーチャーのカードが手に入ったけど………。どうやら此、『無銘』と描かれたエミヤさんの姿だった。ようはExtraのエミヤシロウって事になるわね。

フラン「さて、貰った物は貰ったし、お兄ちゃんのところへ——」

レミリア「貰った！神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」
フラン「つとでも言うと思ってたわ。」

レミリア「!?!」

奇襲と言わんばかりに、グングニルを投げつけたお姉様だったけど、それは奇襲じゃなくて、悪足掻きっていうのよ。私はすぐに右に避け、グングニルを手に取り、そして
.....

『ズドゴン!!』

そのまま腹パンしました。それも内臓破裂してもおかしくないぐらいにとっても重い一撃を。

咲夜「お嬢様!?!」

フラン「安心して、咲夜。気絶させたただけだから。」

咲夜「え.....」

お姉様はグツタリと私に寄り掛かっていたけど、死んではいなかった。あの腹パンが

利いたのか、気絶してしまったようだ。私はお姉様を抱え、咲夜に渡した。

フラン「迷惑をかけちゃったね、咲夜。それと、もう一人の私。」

(フレディ世界) フラン「……………ねえ。」

フラン「なあに？」

(フレディ世界) フラン「私も……………、貴方のように、この能力を制御できるの？」
うーん、難しい質問してくるわね。

フラン「それは分からないわ。制御できず、自分自身を壊しちゃった私も居れば、能力その物を破壊しちゃった私もいるから、何とも言えないわね。」

(フレディ世界) フラン「そっか……………」

フラン「でも、それはあくまで可能性の1つよ。私は、ガルツチお兄ちゃんと出会ったお陰で、初めてこの能力で、守りたいって思っていたの。どんな障壁だとしても、私の手で破壊して、お兄ちゃんを守りたい。そしたら制御も出来て、更には強化したのよ。だから、如何するかは、あなた次第。パチエに魔法を教わるのもいいし、独学で色々学ぶのも良いかもしれないね。」

咲夜「ですが、それでは——」

フラン「何も教わらず、何も関わらせないっていうのは、酷な事よ。咲夜。お姉様にとつては、最善の道だけど、それは外の世界の関係を遮断すること。そして、能力の暴

走を高めてしまふ事よ。」

(フレディ世界) フラン「……………」

簪「フランちゃん……………」

アラヤ「フラン姉さん……………」

鈴美「フランちゃん……………」

フラン「いずれにしても、この子には色々教わった方がいいよ。何時かは、大人になつて、私みたいに結婚して、子を持つて家庭を築いていく。そんな生活が待っているんだしね。」

この世界のお姉様は、変なプライドを持つてるし。超えたくないなら、プライドを捨てて、必死に頑張ればいいのに……………。だから軽く見られちゃうのよ。まあ、それでも私のお姉様だけどね。

フラン「それじゃみんな、帰ろう。」

(フレディ世界) フラン「待つて！」

フラン「？」

(フレディ世界) フラン「此、持つていつて。」

この世界の私が渡してくれたのは、2人の人物が描かれたガシャットと、ゴースト眼鏡だった。

(フレディ世界)フラン「そのガシヤットはフレディおじさんに渡して。そしてこっちは、貴方の友達にあげて。きつと、役に立つと思うわ。」

フラン「ありがとう。ばいばい、もう一人の私。」

そして、私達は紅魔館を後にし、博麗神社に戻っていった。

—博麗神社—

ガルツチ「お帰り、フラン。丁度僕らも二人のカード回収したところだよ。」

こいし「私も。」

どうやら、お兄ちゃん達も終わって、先に戻ってきたようだ。

そして私達は一度カードを見せ合ってみた。アサシンとキャスターに関しては、お兄ちゃん言うとおおり、小次郎とメデアだった。こいしと戦ってたライダーは、アレキサンダー大王ことイスカンドルだったらしい。でも、こいし達はこの世界のさとりお姉様達と協力して手に入れたらしい。

未来「後は、ランサーを倒せば、何とかなるね。」

ガルツチ「でも、これまでハートレスサーヴァントの気配は無かったな……………」
ちよつと確認のために、地図出して、調べてみる。」

お兄ちゃんには地図を出して、解析を始める。その数十秒後、凄く驚愕した顔をしながら

らみんなを見ていた。

フラン「如何したの？」

ガルツチ「あり得ない……………、そんな馬鹿な事が!!」

フレディ「如何した？」

ガルツチ「ランサーと聖杯の場所が変わってる!しかも、なんだここ!?!こんなところ、幻想郷には無かったぞ!」

未来「えっ!?!この位置って……………、まさか……………。」

フレディ「間違いねえ、以前アンブレラ研究所を潰したはずの場所じゃねえか……………」

「ガルツチ「ん?この反応……………、ちっ!聖杯だけじゃない。ハートレスサーヴァン
トもここにいやがる!」

ええええ!?!って事は、ここが最終決戦場所!?

ガルツチ「……………いや待て、おまけにキースもここにいる。どうやら、本格的に
幻想郷を支配しようとしてる。」

チャッキー「なっ!?!」

フレディ「よっしゃ、だったら俺達の手で——」

ガルツチ「いや、ラスボスは僕がやる。」

未来「え!? ガルツチ、また!」

ガルツチ「キースは、僕の尊敬している先生であり、教官なんだ。彼奴が何があったかは、ゲムムから聞いた。説得は無駄なのは承知の上。でも、僕は感謝しているんだ。あの教官だったからこそ、僕もエレンもミカサもアルミンも、ジャンも、コニーも、サシャも、胸張って頑張ってきたんだ。見抜けなかったのは、僕の落ち度だ。」

フラン「お兄ちゃん……………」

そういえば、お兄ちゃんは進撃の巨人の世界に行ってたんだっけ。確か部屋にも、立体起動装置が飾ってあったわね。

ガルツチ「安心しろ、僕は負けない。そして途惑わない。確実に、彼の苦しみを解き放つために、息の根を止める。」

フレディ「……………その眼、なんだかジエイソンを思い出すぜ。」

ガルツチ「そうか……………。久しぶりに、殺戮の本能を、解放するか。ミスト、この場所の兵士の数を。」

ミスト『確認済みよ。ザツと、10億人の兵士がいるわ。その中に、ランサーのカードは植物室、ハートレスサーヴァントは実験室、そして聖杯は最深部。おそらくそこにキースさんがいるわ。』

ガルツチ「……………分かった。」

そんなとき、私はこの世界の私から貰ったガジェットをフレディさんに、眼魂はこいしちゃんに渡した。

フラン「この世界の私から頼まれたものよ。フレディさんののは、多分強化形態のガジェットだと思うよ。こいしちゃんのは、多分私のアイコンだと思うわ。とりあえず、お兄ちゃんが言うには、これが最後の決戦であり、異変解決になると思うわ。」

ガルツチ「そうだね。みんな、疲れてるだろうけど、このままランサーの位置に行くぞ!!」

全員『おー!!!!!!』

t o b e c o n t i n u e d
+

第44話 襲撃

—アンブレラ研究所 地下—

『Warning! Warning!! 侵入者が入り込みました! 直ちに排除して下さい!!』

「ええい! さつさとこんか!」

「そもそも、まだ眠いつてのに、侵入者?」

「俺今、エロ本読んでいたんだが……。」

「そんなの後にしろ!! っていうか、後で見せる!!」

—アンブレラ研究所 ロビー—

ガルツチside

「みなっ! 奴らだ! 少数だが油断す——」

「隊長!!」

あーもー、手荒い歓迎だな!! 銃撃で挨拶ってんなら、こつちもしてやる!!

ガルツチ「ホラホラア!!!」

『ズダダダダダダダッ!!』

僕はすぐさま2丁サブマシンガンにし、やってくる敵兵を一掃していく。正直言つて脆すぎる。

未来「おかしいなあ？サブマシンガンの筈なのに、滅茶苦茶命中しまくってるんだけど。」

フレディ「奇遇だな、俺もだ。つてか、ガルツチの奴、銃の扱い上手すぎねえか!？」

フラン「お兄ちゃん、色々な銃を使って、相性の良い種類を探していたの。その中で気に入ったのは、サブマシンガン、リボルバー、そしてスナイパーライフルなのよ。まあ、スナイパーライフルは、エグい使い方していたけどね……………」

簪「どんな方法？」

こいし「聞かない方がいいよ。ジャック・ザ・リツパーより残虐だから。」

ガルツチ「みんな、ここで別行動だ！未来達はハートレスサーヴァントが居るところに。フレディはフラン達と一緒にランサーのカードを回収して！僕は急いで、最深部に向かう。いずれにしても、自爆コード作動する可能性もある。脱出経路は、このデータで参考してくれ。」

フラン「無事に帰ってこれる?」

ガルツチ「安心しろ、ここで死ぬほど、僕は柔じや——」

『チユンツッ!』

ガルツチ「話し合いの時に、邪魔をするな!!! 礼儀がなっていないぞ!!!」
全員『いや、誰だつてそうするよ……………。』

みんなの心の声が聞こえるけど、僕二ハ関係ナイ関係ナイ。

ガルツチ「さて、深雪さん。君はフレディチームに入つて。」

深雪「分かった。武運を、ガルツチ。」

ガルツチ「みんなもね。じゃあな!!!」

そして、皆は別々に動き始めた。僕は中央のエレベーターを最深部のところに押し、しばらく待っていた。

まあ、待っている間、音楽を聞きながら待っていますか。つて事で、別サイド。どうぞ。
side Change

—植物室付近—

深雪 side

フレディ「この辺りだったな。」

深雪「ええ、とにかく入り——」

??? 「行かせないよ。」

私の目の前に現れたのは、ホッケーマスクを付け、鉈を持った男性がいた。

フレディ「お前、ジェイソン!?! 何でそこに!?!」

ジェイソン「また——あ、いや久しぶりだね。フレディ。お前を殺すことを、どれ程待ち侘びたか。」

深雪「いい加減話したらどうですか、ジェイソンさん。」

ジェイソン「何を?」

深雪「貴方、本当はフレディに毎回会うために決まって、ゲムムという偽名で会ってたんでしょ?」

ジェイソン「……………如何してそれを?」

深雪「私の能力、『東方キアラ全員の能力を操れる程度の能力』を持っているのよ。」

フレディ「何それ、チートだろ!?!」

深雪「まあね。帰ってきてすぐ、ガルツチの心の声を聞いてみたら、それで分かったの。ゲムムはジェイソンだってね。」

ジェイソン「やつぱり、こうなるんだね。そうだよ、僕がジェイソンだ。またの名を、仮面ライダーゲムム。ママに化け、僕を騙したフレディに復讐するために、自らキースの部下になった、最終兵器だ!!」

【ガッチョーン！デンジャラスゾンビ！】

ジェイソン「変身!!」

【ガチャット！バグルアップ！デンジャー！デンジャー！（ジェノサイド）デス・ザ・ク
ライシス！デンジャラスゾンビ！（Wooooo!）】

その姿は、エグゼイドの黒バージョンではなかった。骨を思わせる白と黒を基調としたスーツと左右非対称の装甲、左目の水色のオッドアイ、左胸部には「死のデータ」を採取する際に突き刺したガシヤコンバグヴァイザーの銃口痕など、黒と紫を基調とする従来のゲナムとはかけ離れており、死霊とも言うべき禍々しい姿となっていた。

フレディ「……………深雪達、お前らは先に行け。ランサーはこの先だ。」

こいし「待って、私も戦う。」

フラン「こいしちゃん！」

こいし「えへへ、一度ぐらい格好付けさせて。」

すると、こいしの腰からベルトが現れた。けど、フレディのベルトと違うけど、どう

やらあの目玉が変身するのに必要な道具のようだ。

ボタンらしきものを押すと、そこにはEXと描かれた赤い文字があり、そのままベルトに入れた。

【ア—イ—！】

こいし「無意識と破壊の融合、見せてあげる!!」

【サアバッチリミヤガレ！サアバッチリミヤガレ！】

こいし「変身!!」

【開眼!!フランドール!!破壊の使い手、吸血少女!!】

先ほどの姿は一変し、フランと同じ服装へと変化した。
フレディ「ほう、可愛らしいな。だったら!!」

【マイティブラザーズXX!!】

フレディ「変身!!」

【ダブルガシャット!レベルアップ!マイティブラザーズ!二人で一人!マイティブラザーズ!二人でビクトリー!X!】

………やっぱりその姿は戦力が下がってるように見えちゃうけど、まあいいわ。

イリヤ「んじゃあ、任せたよ!二人とも!」

フラン「無事を祈ってるね!」

アラヤ「頑張ってる!!」

鳳凰「………出来れば、ジエイソンを——」

フレディ「分かってる、殺しはしない。」

こいし「手加減はちゃんとする。」

深雪「行こう、皆!」

そうして、私達は植物室に入ってしまった。

—アンブレラ研究所 植物室—

中に入ると、そこにはランサーのカードが黒いオーラに纏っていき、現れたのは……。

猫耳を付け、何やら極道の長みtainな雰囲気を出して、薙刀を持った女性が立っていた。って、どう見てもこれ。

全員『S S F。』
（そこまでにしなさい藤村）

英霊なのは確かなんだけど、凄く萎えるんだけど……………。

side Change

—アンブレラ研究所 実験室—

未来 side

えーつと、なんだか闇の生き物らしきものが滅茶苦茶多いんだけど、これがガルツチが言ってたハートレス？

簪「つていうかこれ、ウルトラマン達の技を使っても、全然効果が無い!!」

本音『『ジ・アース』を使っても、まだ湧いてくる!』

オーフィス「鈴美、何とかならない?」

鈴美「やってるけど、灰色のハートが現れては、また湧いてくるのよ!」

白夜叉「むう、これが闇の魔物、ゼアノートが言ってたハートレスか……………」

レティシア「如何する!?!」

そういえば、ガルツチからキープレードとか何とかの力を貰ったんだっけ。でもどう

取り出せば……………。

『シユーン！』

僕の右手に現れたのは、鍵らしきものがあり、まるで剣にも見えた。デイケイドのキーホルダーに連なるかのようなカード、イフのマシユマロ形態のように白く、剣身は赤と緑の剣をして、剣先は無限の形をしていた。

これが、僕のキーブレード……………。名を付けるなら『ジャーニー・スルー・インフィニティ・デイケイド』かな。

僕はそのキーブレードを振るい、ハートレスに当てると、先程の灰色のハートではなく、赤色のハートが現れ、そのまま何処かへ消えていった。多分復活することはないけど、小っちゃいハートレスはハートは無かった。って事は、こつちが本命のハートレスって事か。

未来「皆、どうやらこれがガルツチが言ってたキーブレードだと思う。これさえあれば、ハートレス達を倒せるかも!!」

リサ「未来お母さん、でもどうやって出すの？」

未来「分かんない。でも、イメージしたら、出せた。」

簪「イメージ……、ね。だったら!!」

簪の右手に、形状は違えどキーブレードが現れた。

簪のキーホルダーは、ウルトラマンノアの赤いエナジーコアで、それに繋がってるのは光の紐、柄は銀色の翼、剣身はオーブカリバーの刃、そして剣先はオーブリングのリング状だった。

簪「これを名付けるなら、『ディメンション・ノア・オーブ』よ!」

本音達もキーブレードを出し、振るっていたため、どんな形状なのかは分かんなかったけど、僕らはそのままハートレスを倒しまくり、遂に7騎のサーヴァントの姿を見せた。どうやら、『f a t e / S t a y N i g h t』に出てくるサーヴァントだって事が、すぐに分かった。

リサ「私はバーサーカーを倒すね!」

未来「じゃあ僕は、キャスターとアサシン!」

本音「私はライダー!」

オーフィス「ん、それなら我、ランサー。」

簪「私はアーチャーと戦う!」

鈴美「でしたら、セイバーは任せて下さい!」

レティシア「だったら、私達がハートレスの相手をする!!」

白夜叉「私のことは気にするな!! お主達はサーヴァントを!」

6人「!!!」分かった!!」!!!」

さあ、僕達ミツクの大戦争スデートを始めよう!!

s i d e C h a n g e

—アンブレラ研究所 最深部—
ガルツチ side

時間かかりすぎだろ……………、どんだけ地下深く作ってんだ？んで、到着したのはいいが…………。

ガルツチ「エレベーターに、一つのドアのみ……………。殺風景すぎねえか？」

幾ら何でも、これはねえな。そんな愚痴を言いながら、僕はドアを開けた。この先に、キースが居ると信じ、その中へ入っていった。

ガルツチ「待ってろよ、教官！」

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第45話 過ぎ去りし思い出 進撃の巨人

—アンブレラ研究所 ???—

ガルツチ side

ガルツチ 「……………え？」

嘘だろ？ここつて……………、ここつて……………！

ガルツチ 「ウォール・ローゼ南方駐屯の訓練兵団の訓練場じゃないか!!」

どういう事だ!? 何でこんな場所に!? つていうか、さっきのドアが無い!? 如何して……………?

ミスト 『待つて、兄や。この場所はVRの世界よ。』

ガルツチ 「え? それじゃ……………」

ミスト 『キースが作った世界かも。あれ見て。』

ミストが示す方向には、104期生らの人と、教官達が立っていた。その中央に居たのは、キース教官だった。

そういえば、あの中に、僕も入っていたな。今思えば、懐かしい。

『おい、貴様!!』

『はっ!』

『貴様は何者だ!?!』

『シガンシナ出身、アルミン・アルレルトです!!』

『そうか、馬鹿みてえな名前だな!!親が付けたのか?!』

『祖父が着けてくれました!!』

今思えば、あの罵倒する理由も領ける。教官は、通過儀礼であり、『それまでの自分を否定して真つさらな状態から兵士に適した人材を育てるため』に必要な過程だったからこそ、あの言い方をした。当時は分からなかったが、納得できるな。お?僕の番が来たな。

『貴様は何者だ!何しにここに来た!?!』

『シガンシナ出身のラーク・バスター・ガルツチ!ここに来たのは、この世の全ての巨人を滅ぼすために来ました!!』

そういえば、あの時は偽の出身と動機を言うために、あんな事を言ったんだったな。そんなこといったら、皆静まり返ってたな。

『……………貴様、この世の全ての巨人を滅ぼす、そう言ったのか?』

『そうです!!領地を奪われた人間達の復讐するために、同じ屈辱と苦しみを、巨人共に味合わせたい!そう思ってきました!』

『ふんっ、面白い！貴様が口先ではないとこそ、この私が見定めてやろう!!』
アハハ、今思えば恥ぢずかしい……。でも、文字通りの意味にもなっちゃうとこだったしな。

すると、そこにいた人達は消えると、今度は立体起動装置の適性検査が見えた。僕は難なくクリアしたけど、なんか違和感があったな。今はエレンの適性検査の場面だが、あそこで一時的に、維持できたけど、そこで転けちやつたんだっけ。僕は見抜いていたけど、もう一人気付いた人もいたな。

言わずとも、教官だった。

『おい、エレン・イエーガーとベルトを交換しろ。』

『はいー!』

あ、そういうえば、僕がベルトを着ける担当だったな。

『教官、これ破損しています。』

『ふむ、やはりか。ベルトが破損するなんて聞いたことはないが、後で検査項目に入れておこう。』

結果はエレンも訓練に励んでいった。でも訓練事態は、僕に取っちゃ楽なものだった。格闘訓練は、特に楽なものだったな。もしも僕が盗人だったらどう行動するか、見つかったらどう戦うか、1番組んでいたのは、ア二だったな。敵ではあったが、良い訓

練相手だった……………。

ガルツチ「ほんと、懐かしいな……………。」

ある程度見ながら進むと、教官がいる場所に着いた。確かこの場面って……………。

『来たか、ガルツチ。』

『どうか、なさいましたか?』

『貴様、夜中にも鍛錬と狩りをやっているそうだな。』

『どちららも、癖というか、趣味のようなものです。食料に関しては、問題ないとは思いますが、余分にあつた方が良いと思い、鍛錬を込めて、狩りもしました。』

『なるほど、動体視力や身体能力を極限まで高めるのは良いことだ。だが休まなければ、襲撃したときに全力をだせませんぞ。』

『ご安心を、休憩時には、必ず仮眠は取っています。』

『そうか、そろそろ戻るがいい。』

教官は、何かと気をかけていた。僕からしたら、罵倒するただの教官だと思っていたが、違った。教官は、皆に悔いが無いよう、厳しい訓練を心身諸共強くしていったんだ。休みの時は、ちゃんと休んでたな。その時は、結構踊っていたな。まあ、一応鍛錬を意味しているけど。

そう思いながら、どう見ても場違いな扉を見つけた。

ガルツチ「恐らく、この扉だな。入ってみるか。」

—アンブレラ研究所 ???—

中に入ると、そこには果てしない草原と夕日の景色に着いた。その目の前には、教官がいた。

キース「遅かったな、ガルツチ。」

ガルツチ「……………教官。」

キース「ふつ、懐かしい。だが、こんな変わり果てた私を、まだ教官と呼んでくれるのだな。」

この声、間違いなく教官の声だ。

ガルツチ「ジェイソンから聞きました。教官を、辞めさせられたんですね……………」

キース「ああ、私は悔しかった。無能に変わり果てた私は、世界を追い出され、気がつけば幻想郷の世界に着いた。後は、ジェイソンの言うとおりに、幻想郷を支配するつもりだ。」

ガルツチ「……………もう、如何することも出来ないのですか？」

キース「すまないな。もう私には、幻想郷を支配する他ないのだ。説得は無駄だ。それに、もう私は、サイボーグだ。」

振り向くと、そこには全身銀ピカのサイボーグと化してしまった教官の姿があつた。確かに、説得は無駄のようだ。

ガルツチ「……………出来れば、貴方を殺したくなかつた。追い出した奴らの事に怒りを感じるのは、僕も同じです。」

キース「貴様……………」

ガルツチ「ですが、幻想郷を明け渡すわけにはいかない。この幻想郷は、僕にとっての故郷でもあるんだ。だから、貴方を殺します。教官。」

キース「ふつ、出来るものなら、やってみるが良い。」

すると、キースの腕は6本となり、ライトセーバーらしき剣を装着した。変わり果ててしまった教官、もうあの頃の厳しく、優秀で、思いやりがあつた教官は、もう何処にも居ない。だが、それでも僕は、僕にとつて、尊敬した教官とは、変わりなかつた。

どんなに変わり果てようとも、幻想郷を支配する他なくなつたとしても、それでも僕は、受け入れる。それを承知の上で、教官。貴方を殺す。だが、せめてだけでも、これだけは言いたい。

ガルツチ「教官、最後に言いたいことがある。」

キース「なんだ？」

僕は進撃の巨人にいた時、訓練兵だったときの頃にやった敬礼を、教官に見せた。
『心臓を捧げる敬礼を』。

ガルツチ「第104期生元訓練兵から代表して、このラーク・バスター・ガルツチから、最初で最後の感謝を贈ります!!」

キース「……………言うが良い。」

ガルツチ「3年間、心身諸共鍛え、巨人を打ち倒す知識を学ばせたことを、ここで改めて言います！」

「ありがとうございます、貴方という教官で、良かったです。」

キース「……………そう言われると、私も少し救われる。やはり貴様は、他の奴らとは違っていたな。ならば私も、全力で殺さなくてはならない。来い、ラーク・バスター・ガルツチ!!教官として、我が最大の宿敵として、貴様を殺してやろう!!」

ガルツチ「では、もう敬語は必要ないね。」

絶対に、生きて帰る。

そう決心し、魔神化に加えて神話礼装を着けた。言ってみれば、これがあれを除いた最終形態なのかもしれない。生命セフィロトソードの樹の剣クリフォトソードと邪悪の樹の剣は自分で持ち、他の4つの剣と常闇月の刀は闇の魔手が持っていた。

実力は、教官より上。教官もそれに承知の上で、戦おうとしてる。

ならば本気で挑まなくては……………!!

ガルツチ「行くぞ、キース教官。我が剣術の極地、恐れずして掛かってこい!!」

キース「ふっ、来るが良い!ガルツチ!」

to be continued

キース「隙あり!!」

ガルツチ「絶望よ、我を守れ! 『ダークネスシールド』!!」

キース「くっ、貴様……………」。攻撃をも防ぐか!

ガルツチ「それだけじゃない。噛み砕け、アムール!!」

キース「何ツ!?!」

『ブチンツ!!』

アムール『キースのアーム、引き千切り完了。』

ガルツチ「良くやった、アムール。」

1本引き千切られたことにより、残ったのは5本。だが、その途端何かのオーラを纏い始めた。

ミスト『拙い! 兄や、アムール! アンドルフが使う回転レーザーが来るよ!』

ガルツチ「マジか……………」。だったらっ! 花卉よ、我らを守りたまえ!

『熾天覆う十四の円環』!!

レーザーが放たれると同時に、僕は14枚の花弁を召喚させ、レーザーを防いでいく。そして攻撃が止むや否や、速攻で攻撃してきた。

キース「ウオオオオオオオ!!」

ガルツチ「ちっ、これじゃあラチがあかねえ!! 『アイアスバツシュ』!!」

悲痛がこの場所全体に木霊し、有り得ないことに血飛沫をあげていた。

ガルツチ「教官……………!!」

キース「お、驚いた。貴様、ここまで強かったとは……………。」

ガルツチ「まだ、続ける気か？」

キース「当たり前だ!! さあ来い!!」

やっぱり、悲しいな。教官を殺すのは、やっぱり惜しい……………。でも、幻想郷を、守らなきゃ!!

その途端、頭の中から声が聞こえた。

???『ガルツチ!! 途惑うな、奴はもう人間じゃない!』

この声って……………、リヴァイ兵長!?

リヴァイ『お前は俺やエレンを超えた、最強の兵士だ! 恩人が殺せというのなら、それに従うのは通りだろ!』

でも、でも僕は!!

???『馬鹿野郎!! 辛いのはお前だけじゃない!! 俺たちだって辛いんだ!!』

エレン!?! って事は、ミカサ!?! アルミン!?! お前らもいるのか!?

ミカサ『そうよ。ガルツチ、貴方は誰よりも強い。私やエレン、アルミン、皆の希望になつてくれた!』

アルミン『それに、教官が追い出されていたのは、僕達も悲しい。けど、関係のない人が、教官によって苦しんでるところを見たら、もつと悲しい!!』

サシャ『教官はいつも、私やコニーを叱っていたけど、あれ以上に良い教官なんていない!!』

アニ『私もだ。敵とは言え、あの教官は、本当に素晴らしい人だ。』

ライナー『ああ、そのお陰で、大半の奴が頑張つて訓練してきたんだ!』

ベルトルト『確かに、アニやライナー、僕が言うのも難だけど、あれ以上の教官は何処にも居ない。』

ヒストリカ『ガルツチさん、お願いです!教官の苦しみを、野望を、止めて下さい!!』
ユミル『あー、つたくよく。教官が居なくなるのは、あたしらだつて悲しいんだよ。だからさ、ガルツチ。ヒストリカの愛人として、皆のためにも、教官の苦しみを解き放つてやれよ。』

おい待て、ユミル!何でそうなるの!?

ユミル『いやだつてオメエ、ヒストリカと一緒にどっか行つたときに——』

ヒストリカ『ちよつとストップ!ユミル、何でそうなるのよ!?!っていうか、ユミルだつてそうしたじゃない!?!』

ユミル『なつ!?!』

ヒストリカ『どっちかかって言うと、私とユミルは、ガルツチの愛人でしょ？』

あ、結局そうなるのね。って、僕いつの間にか2人の愛人作ってんじゃん!?

ジャン『オメエ……………。まあいいか。ガルツチ、辛いだろうが、教官の為だ。思いつ

きしやれ。』

マルコ『ガルツチ……………、頼む。教官の苦しみを、解放してやってくれ!』

コニー『俺からも頼む、ガルツチ!』

皆……………。

ヒストリカ『さあ、ガルツチ。教官や私達の為に……………!』

……………分かった!

ガルツチ「これで、終わらせる!!」

キース「ウオオオオオオオ!!」

教官は僕に向かって斬り掛かろうとする。だが、そこが狙い目!!!

ガルツチ「フレイム・オブ・ザ・ブレイド紅蓮の刃!!!」

体当たりが当たる寸前、僕は素早く避け、真つ二つに横に斬った。教官の上半身は落ち、馬の半分は爆発した。

ガルツチ「僕の勝ちだ、教官。」

キース「……………いや、まだだ。」

何？

【自爆装置が作動!! 自爆装置が作動!! 施設に居る人は、すぐさま脱出エレベーターに乗ってください!!】

ガルツチ「教官!?!」

キース「フッフ、私にとつての、最後の足掻きだ。いずれ、私は立ち上がる。だが、脱出エレベーターは、この辺りだ。貴様の仲間も、そこにいる。」

ガルツチ「何で、何で教えるんだ!?!」

キース「私にとつて、最後の理性だからさ。もうすぐ、お前という思い出が、消えてしまう。そうしたら、私は本能のまま、お前達を道連れにするだろう……………」

ガルツチ「教官……………」

キース「ガルツチ……………、お前に、最後の任務を与える。もし、脱出途中で、私が襲いかかってきたら、すかさず、うなじに攻撃しろ……………! さあ、早く行け!!」

ガルツチ「……………ありがとうございます。」

僕は涙ぐむも、すぐに拭き、この場から去った。

— アンブレラ研究所 脱出エレベーター —

フラン「お兄ちゃん!!」

未来「その様子、終わったんだね！」

ガルツチ「……………ああ、だが今は脱出しよう！」

ジエイソン「皆、こっちだ!!」

【貨物エレベーター作動、緊急事態のため素早く動きます。酔いにはご注意ください。】

僕らは急いで乗るとすぐさま発進し、地上へと目指した。

フレデイ「それで、キースの事だが……………その……………、なんつうか……………。」

ガルツチ「言うな、フレデイ。教官だって、頼んでた事だ。」

未来「でも、何だか嫌な予感がする。」

簪「私も……………。」

なるほど、って事はもうそろそろかな？



皆は後ろを振り向くと、そこには巨大化し、最早デスタムアの頭部だけの状態となつたキースが現れた。

フレデイ「キース!?!」

鈴美「そんな、ガルツチちゃんが倒したはず!!」

ガルツチ「来たんだな。」

未来「来たって……………」

ガルツチ「彼奴は、僅かな理性で、僕に忠告してくれたんだ。しかも、脱出場所も教え、最後に頼まれたんだ。」

未来「頼まれたって……………」

ジェイソン「何を、頼んでたんだ？」

ガルツチ『もし、私が襲いかかってきたら、うなじに攻撃しろ』。でも、これじゃあ狙えない!!」

クソツ!! どうすれば……………、どうすれば!!!

ジェイソン「前方に何か来ます!! 灰色の機械が!!」

フレディ「待て!! それって!!」

皆はその灰色の機械を見ると、そこには『トライボーク』が、逆方面から現れた。

トライボーク『私が何とかする。お前達は先に行け!!』

そしてそのままトライボークは、教官の後ろへ回り込むと、彼方も後ろを向いた。見えた!!

フレディ「トライボーグウウウウウ」

ガルツチ「済まない、感謝する!!」トリス・オン「投影開始!!」

僕はエミヤが持つ弓を投影し、矢は炎を纏った魔法の矢を投影した。

『死に損ないの機械男め!!邪魔をするなああああ!!』

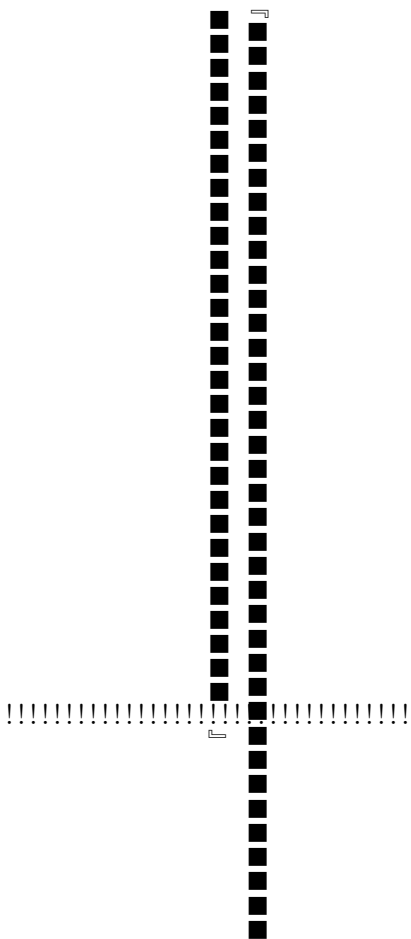
ガルツチ「……………お墓、建てますので、安らかに、眠って下さい。『クリティカルアロー必中の矢』

!!

その矢は放たれ、そのままキースのうなじを貫通した。それと同時に、トライボーグはキースの頭部を真っ二つにし、僕らの方に来た。

ガルツチ「……………さようなら、キース・シャーデイス教官。貴方の事は、忘れません。」

キース・シャーデイス



アンブレラ研究所と共にこの世から去る

t o b e c o n t i n u e d
→

第47話 ガルツチの本心

—博麗神社—

ガルツチ side

霊夢 「さあ皆、異変解決したことを祝って……………」

全員 『かんぱーい!!』

やっと終わった。クラスカードについては、7枚のカードを集めたのか、それらが融合し、一つの聖杯へと変わった。そしてそのまま『聖杯』の『シン』に取り込まれていき、願いが15回に戻った。つまり、かつてアストルティア聖杯戦争で獲得した聖杯が叶う回数が増えた事になった。

フレディ 「いやー、ようやく終わるんだな。カオスヘッダーの時といい、今回も大変だったな。」

ガルツチ 「何かあったの？」

未来 「そういえば、ガルツチは知らないんだったね。実は幻想郷がカオスヘッダーに幻想郷中にウイルスをまき散らしていてね。お陰で、魔理沙やアリス達が亡くなってしまったんだ……………」

ガルツチ「そう……………、か。」

霊夢「アレは大変だったわね……………」

トライボーク「しかし、それでも我々は生きてる。それだけでも充分だ。死んだ者達のためにも、今を生きるしかない。」

ガルツチ「そうだな……………」

僕はチビチビと、日本酒を飲んでいた。一応これでも成人だから、お酒ぐらい飲める。まあブラッドワインを飲んでいたしな。

ゴースト「ヒック、ガルツチすあくん。そんな悲しい顔しないでくださいやくい。」

ガルツチ「おいゴースト、酔ってんの!？」

ジエイソン「そういえば、ここのところガルツチは悲しい顔してるね。」

フレディ「やつぱり、堪えてんだろ？キースを殺したことに關して。」

フラン「そういえば、そのキースって、お兄ちゃんの恩師だったね。」

簪「確かに、ガルツチにとつては辛い体験だね。」

分かつてはいる。生き返らせたとしても、また異変が起こっても不思議じゃないのは、分かっている。

そう思っていると、僕はいつの間にか6本目まで飲んでた。

チャッキー「おい、彼奴7本目の日本酒飲んでるぞ!？」

霊夢「意外とお酒に強いのかしら？」

未来「まだ未成年だから、まだ飲めないなあ。」

簪「私も。」

ガルツチ「いや、2人とも飲むなよ？」

深雪「えへへ、アラヤくん。膝枕になつてく。」

アラヤ「深雪姉さん……、一口で酔っぱらうって初めて見ましたけど。」

深雪「いいじゃない。アラヤくん。」

鳳凰「お酒を飲んだら性格が変わるって、居るのね。」

リサ「なんだか深雪お姉ちゃんが、猫みたくい。」

そんなこんなで、カラオケ大会が始まるも、僕はそのまま隠れ家に入ることにした。

今回は、ちよつと歌いたい気分じゃ………ないから。

sideChange

未来side

なんだろう、今日のガルツチ、ホントに悲しそう。ちよつと心配だし、見に行つてみよう。

トライボーグ『未来?どちらへ?』

未来「ちよっと隠れ家に行つてくる。」

そう伝え、僕はガルツチの後を追ひ、隠れ家に入る。

—隠れ家—

ある程度ガルツチを探していたら、月を眺めながら、一人でお酒を飲んでいるガルツチが、縁側のところに座っていた。

ガルツチ「ん?未来か。」

未来「大丈夫?凄く悲しそうだったけど。」

ガルツチ「あー、やつぱりそう見えたか。いや、誰だつてそう見えるか。」

何故だろう、まるで泣くのを我慢しているかのような声な気がする。

未来「やつぱり、キースの事?」

ガルツチ「……………ああ、そうだ。」グビツ

未来「君にとって辛いのは分かるよ。でも幻想郷を守るには、殺すしかなかった。そうでしょ?」

ガルツチ「うん……………」

未来「……………生き返らせたいとは、思わないの?」

ガルツチ「いや、仮に生き返らせたとしても、教官は望まない。教官がああなったのは、上の人間さ。」

『パリンツ！』

ガルツチが持ってたコップは、強く握ったのか、そのまま砕け散り、その手のひらからお酒と血が流れ出していた。

ガルツチ「俺は、許せない……………！教官を変えさせた人間共を……………、追い出した奴らを……………！！殺してやりたいほど憎い！！」

未来「ガルツチ……………」

ガルツチ「今更戻って、其奴らを殺しても戻ってこないのは分かってる！けど、如何すれば良いんだ……………。一体、この怒りを誰にぶつければ良いんだ！！」

『ギユツ』

ガルツチ「……………未来？」

未来「なんだか、辛そうだったから、こうしなくなつた。それに、今にも泣きそうだったから。」

ガルツチ「……………そうか。」

ガルツチが握っていた拳を緩むと、コップの破片が落ち、そこには切り傷から血が流れ落ちていた。

それはまるで、たった今誰かを殺し、後悔しているかのような、そんな光景が見えてしまった。

ガルツチ「いつか、僕の知ってる誰かが、変わり果てて、殺さなくてはならない日が、来るかもしれない。そうなったら……、僕は殺せるのか？」

未来「……分らない。でも、その人が望んでいるのなら、そうするしかない。だから、辛かったら、泣いて良いんだよ。」

ガルツチ「……だったら、未来の胸……貸して。」
未来「うん。」

ガルツチは僕を強く抱きしめ、僕の胸の中で、静かに泣いていた。

今思えば、ガルツチは簪達とは違って、一番苦しい思いをしていた。きっと、頼ろうにも自分の素直な気持ちが出すことが出来ず、幸せを投げ捨てても誰かを守りたかった。自分の存在を、消してでも……。

『ガルツチはさ、もしあの時……倒していたら、消えていたの？』

『恐らくな。でも、その前に消えていった世界を蘇らせた後に、この世を去り、そして地獄のところで永遠の供養をしていたのかも知れない。そして、僕がいた事さえ、忘れさせていたのかもしれないね。』

ずっと、自分はいらない存在だと言い聞かせて、世界を平和にしたのはガルツチでは

なくみんな救った。そしてガルツチは、その手伝っていたに過ぎないと思うだろう。

でも、そんなのは間違ってる。僕はガルツチが生きていて欲しい。フラン達を離さないガルツチのように、僕はガルツチを離さない。

ガルツチ「……………僕さ、たまに思うんだ。」

未来「？」

ガルツチ「ずっとみんな女性だと言われ、否定し続けていたんだけど……………。フラン達はともかく、いつそう……………女性に——」

未来「待って、もしホントにそうなら取り返しの付かない事になるよ。」

ガルツチ「というか聞いてよ未来う、何で僕女性扱いされるの？そんなに可愛くないってのに……………」

あれ？さっきのシリアスが消えちゃったんだけど……………。それに、なんだかガルツチの様子がおかしい。よくよくガルツチの顔を見ると、何故かほろ酔い状態に陥ってた。

え？何で？何でガルツチがほろ酔い状態に？

ん？手に切り傷……………。って事は、その傷にお酒が入ったの!?ガルツチって普段お酒を飲んでも酔わないって、フラン達は言ってたけど、怪我してお酒が染み込んで酔うなんて聞いたことない。

ガルツチ「ねえ未来、聞いてる〜?」

未来「え? あー、えーっと。」

ガルツチ「もう、聞いてくれたって良いのにく……………」

未来「それより、怪我してるでしょ?」

ガルツチ「あ、そういえばコップが割れちゃったんだっけ。」ヒツク

未来「治してあげるから、ちよつと手を貸して。」

ガルツチ「ん、いいよ。」

それにしても、ガルツチが酔うところ初めて見た。でも、間近で見ると、ホントに女の子に見えて可愛く見えちゃうなあ……………」

ガルツチ「む、今未来、僕を女の子に見えたとか思ってるでしょ?」

未来「え? な、何のことかな?」

ガルツチ「う〜、惚けるの? 拗ねちゃうよ?」

未来「今のは充分女の子っぽくっていか本音みたいだね。」

ガルツチ「そうなのかく。」

未来「とりあえず、手を治したよ。クレイジーダイヤモンド凄いなあ。」

ガルツチ「ありがと。」

というか、ガルツチが女の子に見えて来ちゃうんだけど……………。もうこれ、宴に戻ら

ず寝かせた方が良くも。

—博麗神社—

一方……………。

霊夢「2人とも、遅いわね。」

簪「確かにそうだね。」

鈴美「でも、そっとした方がいいかも。」

フレディ「何でだ？」

レザー「私にはさっぱりなのですが……………。」

ジェイソン「知ってる人は知ってるけど、キースはガルツチの教官。ガルツチ自身だって、殺したくないって思っていたけど、苦渋の選択でやむなく殺した。」

アラヤ「それに、今辛い思いをしているのは母さんです。あんな風に変えさせた『進撃の巨人』の何者かを、憎んでいるが、帰ってくるわけでもないと思っていて、悔やんでいると思います。」

トライボーグ『……………。』

本音「ホントに、ガルガル君は悲しそうだったね。」

フラン「……………お兄ちゃんは、今でも仲間だと思ってる人には、いつも殺すことを躊躇ってる。」

こいし「本当に殺意を持って殺すのは、平気で裏切り、平然と出来るやつだけ。」

イリヤ「お兄ちゃんはいつでも、キースさんは恩師だと思っていたし、キースさんもそうだった。」

フレディ「何でだ？」

イリヤ「キースさんらしき部屋に、お兄ちゃんとキースさんが写ってる写真が飾っていたの。それだけじゃなく、104期訓練生と呼ばれてる写真集の中に、一部は抜き取られていたけど、それでも全員を憎んでいるわけじゃなかったんだ。」

ジェイソン「そういえば、そうだったね。チラ見してみたけど、確かに本当に憎んでいたのか、分かんないね。」

アラヤ「……………とにかく、母さんの事は、未来お父さんに任せましょう。」

フレディ「そうだな……………」

こいし「まあ、もしかしたら……………お兄ちゃん達今頃やっていたりして。」

霊夢「いやいや、さすがにないでしょう!？」

(風龍「霊夢、それはフラグだ。」)

士「奇遇だな、俺もだ。」

—隠れ家 寝室—

未来「ほら、ついたよ。」

ガルツチ「えへへ、ありがと。未来。」

とにかく、ほろ酔いにしては何やらふらついていたガルツチを介抱して、寝室まで連れていった。やつぱりこれ酔ってるよね!?

未来「ねえ、ホントに大丈夫なの？ 凄く酔っぱらってる気がする。」

ガルツチ「そう………かな？ 実のところ、50本も飲んだからかな？」

未来「ふあ!？」

いやいや、日本酒50本も飲んだの!？ これ相当重症だな………。ここまでショックを受けてお酒を飲んでたなんて……。いや、50本も飲んだことに関して凄いと思うよ？

ガルツチ「普段、酔っぱらう事は、無かったんだけど、コップを割ってからかな？ なんだかほわーんとしちやって……。」「

未来「(やつぱりあの怪我で、酔い始めたのか……。怪我して酔うって……。)」

うーん、直接飲むのは何ともないが、怪我してる場所にアルコールが入れば酔うのか、ガルツチの体分らないなあ……………。

まあ、とりあえず簪達のところに戻ろうかな？

未来「それじゃあ僕、簪達のところへ——」

ガルツチ「待つて……………」

未来「え？」

行こうとしたら、ガルツチが僕の右手掴んで、離さなかった。

ガルツチ「お願い……………、1人にしないで……………」

未来「ガルツチ？」

ガルツチ「行ったら、寂しいんだ……………」

何だろ、酔ってるガルツチが、なんだか弱気になってる気がする。

そういうえば、ガルツチが弱気なところは全くなかった。むしろ好戦的で仲間思いで優しいところがあるけど、今は……………。なんだか寂しそうで今にも泣きそうな子になってる気がする……………。

未来「分かった、何処にも行かないよ。」

ガルツチ「えへ……………、僕の我が儘なのに、嬉しいなあ……………」

とにかく、今のガルツチは放っておけない。簪達には悪いけど、今日はガルツチと一

緒に眠ることにした。

でも、聞きたいのは何故パジャマが、フランが着ている服なのか。いや、こいしが着てる服もあったね。って待つて待つて、ガルツチって女装しないって言っているけど、パジャマの何着かは女物なんだけど……。うーん、ガルツチが女体化するのは知ってるけど、っていうかよく見たらこれ手作り!?

ガルツチの友人って、ホントに個性が強すぎるんだけど……。まあとりあえず、これを着させようかな。

数分後……………。

ガルツチ「ううう……………、未来う……………。ちよつとこれ……………。恥ずかしい……………」

おつふう……………。やばいこれ、ホントに可愛すぎる。確かアレ、アストルフオの私服だっけ?それ着させたら、なんだろ……………。急にムラアつときたんだけど……………。

未来「えーつと、布団一つしか無いけど、これつて——」

ガルツチ「添い寝……………。かな?」

あ、もしかして誘ってるの?なんだかモジモジしてるし。え?これホントに?

side change

ガルツチ side

いやいや待って!?!僕はさつきから一体何を言い出してるの!?!というか今僕の声、エロくなつてない!?!酒か!?!傷口に酒が含んだからか!?!

そして未来!?!なんか君のアレが滅茶苦茶主張しまくってるんですが!?!

いやそれ以前に、僕のも同じぐらい主張してるし、もうなんでさ!?!

ガルツチ「それじゃあ、寝よつか。」

未来「う、うん。／＼／＼」

なあに言つてんだ僕はああああああ!!!

ラクト『もう理性そのものが働いてないね。』

クリムゾン『ああ、どう見ても本能のまま動いてる……………。』

う……………、正直怪我してお酒に触れて酔うなんて思わなかった。そのせいか、今ま

で弱気な発言は言わなかったのに、凄く言ってるよ……………。

そんなこんなで、僕の知らない間アストルフオの私服パジャマを着せられ、未来を連

れて布団の中に入ってしまった。

ガルツチ「暖かい……………、未来の温もりが、凄く気持ちいい……………。♡」

未来「あ……………うん、僕も……………だよ。／／／／／／／／」

……………後で謝ろう。

ガルツチ「でも、どうせなら……………寝る前に、未来とHしたいなあ……………。／／／

／／／♡♡♡」

もはや完つ全に誘ってるだろオオオオオオオオ!!!いや別に、嫌じゃないよ!?でもさ、弱

気になってるし、こんな恥ずかしい思いをしていてるのに、挙げ句の果てにはセックスだ

と!?

未来「いいよ、僕も……………、したかったから。／／／／／／／」

……………もう、性別いいや。

ラククリ『待つて待つて、それだけは絶対にダメ!!』

もう酔ってる自分に身を任せ、そのまま未来の唇を重ね合わせていく。(もう正直

言つて、どうにでもなれ……………)。

この場所には2人しかおらず、時間が止まった静かな夜みたい、凄く気持ち良くなつていった。ただキスしているだけなのに、多幸感と陶酔感が溢れ出るかのように満ち溢れてきた。

それからにはされるがままになり、僕の耳を舐め始め、乳首を弄んでいた。

ただ、正直に言うと、この先何があつたのかは分かっているが、これ以上は覚えてなかつた。

そして……………。

僕が気が付き、酔いが覚ました時には、お互いに臨月位のお腹に、溢れ出てる精液、そして身体中に僕か未来、又はその両方の精液塗れになっていた。

そして、誰かが僕の寝室に入ってきた。

フラン「おはよう、お兄ちゃん達。昨日は凄く熱い夜だったそうね。」

ガルツチ「……………何も言えねえ。宴は？」

フラン「もう終わってるよ。朝になったし。」

ガルツチ「マ〜ジか。」

気を失ってる間、いや未来とやってる間、もう終わってたのか。

ガルツチ「んで、子供達はともかく、君等は何処まで見てたの？」

フラン「うーん、お兄ちゃんが騎乗位でお互い射精したところからかな？」

ガルツチ「全然気が付かなかった……………。いや、酔ってたから仕方ないか。」

フラン「お兄ちゃん酔ってたの!？」

ガルツチ「うん。ハードセックスしたことぐらいなら、一応……………。具体的なところ

ろまでは全く覚えてない。」

ただ、忘れることの出来ない悦楽と陶酔だった気がする。(どんな感じなのかは、ご想像におまかせします。)

フラン「でも意外、お兄ちゃんが酔うなんて思わなかった。はい、お水。」

ガルツチ「僕もさ。何だろうな、心の重荷を捨てて軽くなったかのような心地よさとか、なんというか……………」

フラン「ふーん。一度見てみたいなあ、お兄ちゃんが酔うところ。」

ガルツチ「それはちよつとなあ……………、だからって酔わせる魔法とかかけないですよ？ 恥ずかしいし。」

フラン「興味はあるんだけどなあ……………」

むう、あまり見せたくないんだけどなあ……………。それに、あんな弱気……………見せたくないし……………。

フラン「でもさ、別にいいんじゃないかな？」

ガルツチ「酔うのが？」

フラン「うん、なんだか新鮮だし、酔ってるお兄ちゃんが、なんだか可愛らしいし。」
ガルツチ「……………可愛らしい、か。もし酔って、僕の本心を言ったら、傷つくんじゃないかな？」

フラン「……………内容次第だけど、珍しいね。なんだか弱気だけど。」

ガルツチ「酔ってたときに、弱気だった気がするんだ。もう覚えてないけど。」

フラン「……………お兄ちゃん。」

ガルツチ「？」

フラン「もしお兄ちゃんが弱気になったら、私が守ってあげるね。お兄ちゃんの妻だから。」

ガルツチ「フラン……………」

未来「ん……………、んんっ……………」

お、未来もようやく起きたか。

未来「ふあああ……………、おはよ、ガルツチ。」

フラン「おはよ、未来お兄ちゃん。」

未来「あれ？フラン？宴は？」

ガルツチ「終わったって。」

未来「あ、そつか。ところで今朝なの？」

フラン「うん。」

未来ガル「マ〜ジか。」

今更だけど、朝か。って事は、知らない内に気を失ってたってわけか。

簪「あ、やっと起きたんだね。」

ガルツチ「ん？」

未来「やっど？」

「

オイオイオイオイ!? いつの間に着いたの!? っていうかどうやって渡ったんだ!?

こいし「土が代わりにやってくれたよ。」

o h ……………。

ガルツチ「お別れの言葉、言いたかった……………」

イリヤ「あ、そうそう。お兄ちゃん。フレディからこんなの貰ってきたよ。」

イリヤが持ってきたのは、フレディとその友人達の写真で、裏にはこう書かれていた。
 フレディ「ようガルツチ、これ見てるって事は、おそらく起きたんだろな。」

別れが良かったが、フラン達から聞いてやめておいた。代わりとはなんだが、俺達の写真を送っておいたぜ。それで俺達を思い出してくれ。

それとキースの野郎だが、気に悔やむ必要はねえ。そんな顔したら、キースが悲しむからな。だから笑え、そうすりや少しは喜ぶからよ。

それと、未来のこと頼む。未来の恋人の一人なら、全力で互いを守れよな。また出会えたら、また勝負しようぜ。

じゃあな、ガルツチ。

b y, フレディ』

フレディ……………。確かに、くよくよしてられないな。

ガルッチ「ところで、次はどんな世界？」
フラン「それは……………」。

次話で分かるよ。」

未来ガル 「メタイし次話かよ!?!」

t o b e c o n t i n u e d
⇨

コロ助なりくさんとコラボ 複合した世界 く Time

C r i s i s E X く

第48話 混合した世界

—
???—

ゼロ side

ゼロ「それで、奴は見つけたか？」

時臣「残念ながら、全く反応がありません。」

ゼロ「……………仕方あるまい。こうなれば、—1号の製作をするぞ。」

時臣「—1号って、大丈夫なのでしょうか？」

ゼロ「確かに、あれを生み出すのは危険を伴う。だが、上手く扱えば凄まじい兵器と化す。今回は俺が管理する。」

時臣「私は？」

任せてたまるか愚か者。うっかり時臣め……………。

ゼロ「お前は下がれ。」

時臣「畏まりました。」

さて、今度は上手く作るぞ。絶対に、全てを支配してやる!!

s i d e C h a n g e

—
???

ガルツチ side

はあ、まさか次の世界に着いて、早速隠れ家の結界を張ったのか。どうやったのかは謎だけど、いつか。

とりあえず僕と未来は、朝風呂に入り、お互いの精液を落とし、僕はいつもの和装ではなく、青い月のバッチが着いてる空色のYシャツを着て、黒いズボンを着き、そして翼のヘアゴムを付けてサイドテールにした。

未来「珍しい、ガルツチがそんな服を着るなんて。」

ガルツチ「たまには良いだろ？それに、これを着ると特定の人物以外の人は普通の人間と変わりなく見えるんだ。一種の気配遮断だな。」

未来「凄いなそれ。」

とりあえず着替え終わり、朝食を食べ終わった後、皆は隠れ家の外に出た。その場所は………。

もう複合しすぎてどんな世界なのか分からないところに着いてしまった。
ガルツチ「え？ここ何処なの？」

オーフェイス「ここは………、間違いない。我の世界だ。」

7人「………え？」

オーフェイスは何か知っているらしいけど、分からないんだが………。

未来「そういういえば、皆は知らないんだっけ。ここはオーフィスと出会った世界。『リリカルなのは』と『ハイスクールD×D』、『プリズマ☆イリヤ』、『デート・ア・ライブ』等の世界が複合した世界なんだ。」

ガルツチ「つて事は……………。ミスト。」

ミスト『もう解析終わつたよ。ここは『デート・ア・リリカルなのは』と言う作品の世界よ。』

なるほどね……………。

全王神『あー、そうそう。この世界の龍神空つて人なんだけど、実はある事件を救つた大英雄なんだ。』

ある事件？ 僕が起こした無の神的な？

全王神『うーん、そこまでは分かんないけど、でもそれぐらいやばい事件だつたつて事だよ。』

なるほど……………。

全王神『因みに、英竜がここに来る前で、清浄星花と別世界の簪ちゃんか帰つた後の世界だよ。』

別世界の簪……………、か。しかし、清浄星花か。あらゆるスタンドを持つてる能力者つて事は、恐らくそいつか。

分かった、ありがとう母さん。

ガルツチ「とはいえ、何処向かおう。」

未来「だったら、空に会いに行こう。久しぶりに会いたいし。」

オーフィス「賛成だ。」

確かに、僕も気になる。一度空とで会ったけど、その時は未来が召喚した時だったしな。

ガルツチ「んじやあ、案内を頼むね。未来。」

フラン「空お兄ちゃんかあ……………」

こいし「どんな人なのかなあ……………」

イリヤ「あれ？『プリズマ☆イリヤ』もあるって事は……………」

ルビー『恐らく、平行世界のプリヤちゃんとプリエちゃん、そして美遊さん、そして

可愛い私と、サファイアちゃんがいると思います。』

イリヤ「自分で可愛いって、言ってるで恥ずかしくないの？」

アラヤ「……………」

鳳凰「アラヤ、もしかして……………」

アラヤ「一度警戒した方が良くも、どうやら何者かが、僕らの行動を監視してる人がいるらしいよ。」

深雪「そうなの？」

アラヤ「うん。」

ガルツチ「……………アラヤ、今は逆探知するな。泳がせておけ。」

やれやれ、どうやらまた面倒な事件が起こりそうだな。まあいい、何者かは知らないが、敵を回したことを後悔してやるから、首を洗って待つてろよ。

s i d e C h a n g e

side

「Indeed, this time the target is this one.」

「その通りだ。そして唯一のターゲットである『龍神空』を、なんとしてでと捕獲するのだ。」

「It's an easy victory.」

「いいか、其奴らは強敵だ。特に、このサイドテールをした奴と、如何にも女装が普段着だと言う奴は1番厄介だ。確実に仕留めろ。」

「Leave it to me, Fang.」

「Yes, Dogg. Then, the contractor.」

さて、ゼロのために、先ずは彼を捕らえなくてはな。あの事件を救った大英雄、か。

神々ですら感謝する程の凄まじい力、どの様な者かは分からぬが、採らせて貰うぞ。龍
神空。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
⇩

第49話 放たれる戦い

—海鳴市 空の家—

ガルツチ side

未来「着いたよ、ここだ。」

ほう、確かに大きいな……。しかも、如何にも転生者いますよって思うぐらいの力を感じる。

鈴美「ちよつとドキドキするわね……。。」

簪「私も初めてだし、どんな人かな？」

ガルツチ「とりあえず押すね。」

『ピロピロピロ〜、ピロピロロ〜』

うーん、なぜ例のコンビニの音楽が流れるんかな？

??? 「はい、今出ますね。」

扉が開くと、そこには僕の見た目より1つ下の少年がいた。

??? 「どなたで……。って未来さん!? いやまって、式さん？」

未来「正真正銘の門矢未来だよ、久しぶりだね。空。」

空「未来さん！お久しぶりです!!」

どうやら、彼が龍神空で合ってるようだ。しかし、式を知ってるって事は、ここにも来たって事か。

空「ん？簪さん、何か忘れ物したのですか？」

簪「え？私初対面ですけど。」

空「え？」

ガルツチ「待った、多分君と出会った簪とは別の存在だ。」

空「あ、そうでしたか。っていうか人多い!？」

???'「空、お客様？」

ん？彼女は……………」

空「あ、十香。未来さんが来たよ。」

十香「未来がか、ところで其方は？」

未来「その前に、立ち話もなんだし中に入らせてもいい？」

空「うん、いいよ。」

ってな訳で、空の家に入り、その場所で自己紹介することになった。

ガルツチ「んじゃあ、先ず僕から。僕はラーク・バスター・ガルツチ。幻影の不死鳥と呼ばれ、全王神の息子、虚王魔神という命名を持った、通りすがりの英霊使いだ。」

空「あの、ガルツチさん。まるで未来さんみたいな言い方ですね……。通りすがりの英霊使いつて。」

ガルツチ「強ち間違いじゃないよ。このクラスカードケースっていうのがあって、f a t e シリーズの英霊だけじゃなく、他作の英雄達や反英雄達もこのカードの中にあるんだ。」

空達「何そのチート!?!」

いやそう言われてもねえ……………。

バルカル『まあ、我がマスターはこういう人なのだ。気にするな。』

空「剣が喋った!?!」

ケテル『なるほど、彼女らが……………。』

バルカル『おいケテル、貴様何鼻血出してる?』

ケテル『其方こそ、女性を見て興奮してるでしょ?』

バルカル『貴様のような変態と一緒にするな!!』

ケテル『何を言う!! 貴様のアソコが主張してるくせに!!』

バルカル『なっ、何を言う貴様! これはアレだ! 生理現象だ!!』

ケテル『どっちも変わらねえだろ!!』

あーもー、またこれか畜生め……………。

十香「あの、その剣は？」

ガルツチ「ああ、これらか。白い剣は『生命の樹の剣』セフィロトツード、黒い剣は『邪悪の樹の剣』クリフォトツード。よく喧嘩するんだよねえ……。因みに、『デート・ア・ライブ』、つまり君等の力を持つてるって事さ。反転はこの黒い剣だな。」

十香「えええ……。って事は。」

空「十香や四糸乃とかの反転の力も使えるって事ですか？」

ガルツチ「E x a c t l y !」その通りで御座います

琴里「何なのそれ、反転の力も扱えるって……。」

美久「そういえば、結構前に凄く綺麗な歌声が聞こえたのですが、もしかして……。」「ガルツチ「あ、多分それ僕だ。『破軍歌姫』ガブリエルとエリザベートという子の宝具を組み合わせてから歌ってたからね。」

空「規格外だ……。」

母さんも聞いてたしな。

フラン「それじゃあ私ね。私はフランドール・スカーレット。お兄ちゃんの妻で、吸血鬼よ。」

空「………はい？」

琴里「待つて待つて、貴方子供でしょ!？」

フラン「そうだけど？」

琴里「ガルツチ……………、貴方まさか——」

ガルツチ「ロリコンですみません。」

琴里「やつぱり!? ってどうか認めた!？」

ガルツチ「一応言うが、この子の姉も同意してるぞ。子供もいるし。」

空達「嘘オオオ?!?!」

いやホントだし! 嘘言って如何するの。

空「って、ててててことは、アレなの? ききき、キスして、赤ちゃんが出来たの?」

『ドンガラガッシャンッ!!』

ガルツチ「いやいや待て待て?!?!ちよつと待て!!何その生息子発言!？」

未来「空……………、君って意外と……………?」

空「え? 違うの?」

なんか純粹な目で見てるけど、キスして赤ん坊が出来るわけじゃないからね?! いや、当初初心だった僕が言うのもなんだが、さすがにそんなじや無かったぞ!?

コウノトリが運んでくるならまだしもだが……。

おい、今同じじゃないかって言った奴、去勢拳な？

ガルツチ「空、一応言うけど……………確実に違う。というか出来る方がよっぽどおかしい……………」

こいし「うん、どう見ても違うよ……………」

空「え？じゃあガルツチは、知ってるの？」

ガルツチ「……………知ってはいるが、聞かない方が良い。一応これ、R18の同人小説だし……………」

空「メタイ!?っていうか、R18って何!?というか知ってるなら、教えて!」

ガルツチ「……………後悔、しないよね？」

空「うんうん!!」

はあ、知らんぞ?とりあえず僕は空を連れて別の部屋に連れて行き、どうやって赤ちゃんが作れるのかを教えた。というか、保健体育から始めた方が良かったんじゃないの?

ガルツチ「えーっと、先ずその作り方だけど……………」ゴニョゴニョ

空「え?ええ!?な、何でそんな行為を!」

ガルツチ「何でって、そりゃ……………」カクカクシカジカ

空「ちよちよちよちよ!?!?え!?!?そんなところが大きくなつて、如何するのですか!?!?ってい

うか入れるって何を!」

ガルツチ「要するに——」シカクイム?!?ブ。コンテ、シントウジヨウ。ダイハツへ。

空「ふあk b n v z d k n z。d ; ねふえf m」

あー、やつぱりこうなつたか……。……。なんだね?!?!、あの頃酷く赤面していた頃の僕を思い出す。

空「嘘でしょ!?!ホントにそれで作れるのですか!?!//////」

ガルツチ「真実は時として残酷である。じゃなきや、子供が作れんだろ……。……。低い確率ではあるがな。(経験者は語る)」

空「……。……。//////」

ガルツチ「それに、例えば小学生でもすれば、出来ないわけでもないからね。」

空「(。ム)ポカーン」

だから聞かない方が良いつて言ったのに……。……。……。全くもう……。……。

空がポカーンとしながら戻っていき、そのままみんなの自己紹介が終わるも、空は未だにポカーンとしていた。

空「(。ム)ポカーン」

琴里「ガルツチ、まさか教えたの?」

魔神化——不可

ちっ、なんてこつたい。ホントに使えなくなってる……。投影魔術は!?

投影魔術——可能 ただし、銃限定

銃限定か……………。

未来「大変だ!! スタンドが出ない!!」

簪「オーブの力も使えなくなってる!!」

イリヤ「私なんて、英霊を呼び出せなくなってる!!」

十香「何で、如何して!？」

ガルツチ「原因は不明だけど、どうやらヤバイ事態になったって事は納得した。しかも、空が空が攫われるなんて……。なんだか嫌な予感がする!!」

四糸乃「如何するの……。ですか……………!？」

ガルツチ「ミスト、空の居場所はどこ!？」

ミスト『攫われてから、そんなに時間かかってないけど、結構遠くまで連れて行かれてるわ。北当たりに向かってる!』

倶矢「ツ!?!」

アラヤ「母さん、何か手はない!?!」

手はないかって言われても、車がないと……………。

そう思っていたら、別の車両が現れ、僕らに銃を突きつけた。

「あのお方の命令で、お前達を始末しろと命じられた。ここで死ぬがいい!!」

「無能となったテメエらを仕留めるなんて、楽な作業だ——」

『ズダンツ!!』

「グハツ!?!」

「何ツ!?! 貴様、何故能力を!?!」

ガルツチ「黙れ雑種、さっさと死ぬ。」

『ズダンツ!!』

「ガフツ!?!」

襲撃してきた者は、殆ど僕が投影した銃で息絶えていった。

ガルツチ「あの車両なら使える。しかも、トラックか……………」

これならいける!

ガルツチ「みんな、あの車に乗って、空を助けるぞ！」

琴里「でも攻撃手段は!?」

ガルツチ「僕が投影する贗作銃だ! 詳しくはあの中だ!! 急げ!!!」

そうして僕らは、トラックの中に入り、僕は運転席に、未来は助手席に乗った。後のみんなは後ろに乗り込んだ。

ガルツチ「未来、ハンドガンは扱えるか?」

未来「うん、全部命中心で訳じや無いけど……………」

ガルツチ「ならばこれを使え。『USP』だ。」

フラン「ねえお兄ちゃん! このトラック、いろんな銃があるよ!!」

ガルツチ「よし、みんな!! 到着するまで、扱える銃を選べ!! 飛ばすぞ!!」

さあ、空を取り戻しに行こう……………。

t o b e c o n t i n u e d ⇨

第50話 レイジングストーム

—海鳴町—

未来 side

まさか、スタンドが使えなくなるなんて、思わなかった。みんなも能力使えなくなつてくけど、幸いガルツチの投影魔術は銃限定なら無事だったみたい。弾は如何なんだろう……。

ガルツチ「弾なら心配要らない。こんな時のために、無限バンダナを持ってきて良かった。」

未来「それ、投影できる?」

ガルツチ「バンダナは難しいが、どうやらネックレスなら作れそうだ。つと、そろそろ敵のお出ましだ。」

サイドミラーを見ると、そこには武装した車がわんさか来ていた。

ガルツチ「挨拶代わりに、此奴を食らえ!」

『ズダンッ!!』

ガルツチ側のサイドミラーを見ると、なんとタイヤをパンクさせ、敵の車両はひっく

『ズガガガガガガガガガッ!!!』

うわー、みんな凄い撃ってる……………。っていうかオーフィス、機銃使ってる!!

ガルツチ「こりや、テンション上がるな。って、前方に敵へり確認!!いや待て、アレは……………」

未来「何が来たの？」

ガルツチ「シーカーだ！ちつ、窓ガラス割って、撃ち落とす！手伝え、未来!!」

未来「分かった！っていうかシーカーって、ハリー・ポッターのクディッチの選手ボジションのシーカー!？」

ガルツチ「うーん、例えは間違っていない気がするけど……………」

っていうかこんなに敵の数が多いなんて聞いてないよ!!一体何なのこれ!?

そう思いながら、ガルツチはサブマシンガンで、僕はハンドガンでシーカーと呼ばれる兵器を撃ち落としていく。

ガルツチ「クソ、数が多い!!」

『パーンッ!!』

ガルツチ「しまった!!みんな！降りろ!!」

みんなは言うとおりにし、トラックから降りると同時にトラックは横転、大爆発を起

こした。

簪「危なかった……………」。

六喰「しかし、まだ敵が来てるんじゃないが……………」。

狂三「如何するのですか!？」

美久「ガルツチさん、何かありません!？」

ガルツチ「待って、その前にシーカーを片付ける!!」

オフィス「我に任せろ!!」

オフィスが持つてる機銃により、すぐさまシーカーは一掃し、後は敵兵のみとなった。

ガルツチ「しかし、ここまでの軍勢を率いるなんて、変だ。」

ルビー『やっぱりガルツチさんも思っていましたか。』

ガルツチ「ルビー、これってもしかして……………」。

ルビー『恐らく今回の件は、軍勢を率いるぐらいの組織を持った奴らというわけです』

ね。それか、とんでもない組織だったりして……………」

ガルツチ「……………」となると、かなり厳しいな。しかも能力が封じられた今じゃ、かなり厳しいな。」

ルビー『私的には、今は別チームに分かれて行動した方が得策だと思います。どのみちここで野垂れ死ぬ訳にはいきませんね。』

ミスト『だったら、3チームに分けた方がいいわね。』

そうなると、通信機が必要になってくるな。

未来「ガルツチ、人数分の通信機と無限バッチを投影できる？」

ガルツチ「どうにかなりそう。一応、その両方の機能を持ったバッチを作ってみる。

27人分だな……………」『トレース・オン投影開始』！」

すると、一瞬にして星形のバッチが作られていき、あつという間に27人分の通信機兼無限バッチを作り終わった。その時には敵は居なくなつた。

十香「何とか追い払えた……………。つて、ガルツチ……………それは？」

ガルツチ「無限バッチ。見た目は星形だが、通信機の役割がある。みんな何処かに着けて。」

そして、みんなはバッチを着け終わり、ここでチームを分けた。僕とガルツチ、簪、本音、リサちゃん、アラヤ君、鳳凰ちゃんの7人でアルファチーム。フランと鈴美さん、

オフィース、愛花ちゃん、こいし、白夜叉、レティシア、深雪さん、イリヤの9人でデルタチーム、そして十香達11人のブルーチームとなった。

ガルツチ「それじゃあみんな、ここで別行動だ。ルビー、空の現在地は？」

ルビー『空さんの居場所ですが、どうやらこの辺りでしょう。この場所は、どうやら何かしらの施設でしょう。』

イリヤ「むう……、どういう感じのルートが良いのかな？」

ガルツチ「だったら、僕らアルファチームは、このルートに行く。デルタチームはこのルート。ブルーチームはこのルートで。合流地点はこの施設の入口、いいね？」

未来「よし、みんな、無事を祈るね。」

そして、3チームは別々となり、僕らはその施設に向かった。

t o b e c o n t i n u e d

→

第51話 恐怖の支配者と痛みの支配者

—海鳴町—

ガルツチ side

「ターゲットだ！例のアレを！」

「了解、例の兵器を使用します。」

僕らはフラン達と十香達と別行動し、今は空が捕らえられてる施設に向かっていた。ガルツチ「つていうか、ホントに数が多いな。少しは休ませろつてんだ。」

未来「確かに、僕もそう思うよ。」

ミスト『兄や！3時の方向に兵器が来るよ！』

兵器？僕はすぐに右を向くと、蜂らしきものがこちらにやってきた。

簪「ちよ!?何あれ!?!」

ガルツチ「ミスト、アレは!?!」

ミスト『アレは、『タイムクライシス4』に出てくる蜂型テラーバイトよ。シヨットガン系が有効よ!』

アラヤ「僕に任せて!!」

アラヤが放つショットガンは、一瞬にして束になって襲ってきた蜂を落としていく。どうやらあの蜂はアラヤに任せた方が良いかもしれない。

本音「それじゃあ、私達は敵兵を相手にした方がいいね。それぞれ!!」

リサ「ほうちゃん、あのガソリンを撃って!」

鳳凰「分かった!」

鳳凰が撃つた先には、漏れ出したガソリンがあり、それが引火し、その場に居た敵達は爆風によってやられてしまった。

ガルツチ「何とかなつたね。」

未来「そうだね。」

簪「でも、ここまでの大規模な軍を持つてるなんて、これちよつとおかしくない?」

ガルツチ「僕も思ってるんだ。一体、どうやって……………」

そう思いながら進むと、いつの間にかジャングルらしき場所に

……………つてジャングル!?

ミスト『みんな、どうやら敵の固有結界に入っちゃったようだよ。』

未来「え!?!このジャングルが!?!」

ガルツチ「静かに、誰かいる。」

幸い、聴覚は無事で、僅かな音が聞こえた。木から木へ移る音。こちらに向かうかのような風を切る音。そして、蜂の音が聞こえた。

「……って待て、そんなまさか……」

「……???' 「漸く見つけたぞ!!」

蜂のテラーバイトがどンドン集まり、散り散りになった瞬間、そこに人が現れた。それと同時に、僕の近くにある木の上にある枝に、異様に腕が長い人が止まった。

「……???' 「ほう、此奴がああ……」

アラヤ「母さん！あの人達は!」

ガルツチ「まさか、メタルギアソリッド3に出て来る『コブラ部隊』まで、派遣されるなんて、思わなかった。」

簪&本音「『コブラ部隊』!」

「……???' 「ほう、俺達を知っているようだな。ならば名乗らねば。俺の名は、『痛み』。」

「……???' 「そして俺が、『恐怖』!」

未来「嘘くん、何でこんな奴らまで?」

ガルツチ「あんたら、正気か?」

ペイン「正気も何も、これが俺達だ。」

ファイアー「いずれにせよ、あのお方の命令だ。痛みと恐怖で苦しむといい……」

ガルツチ「……………能力が封じられた今、この2人を倒すのが結構苦痛だが、負けるわけにはいかない！アラヤ、リサ、鳳凰。ペインを頼む！僕と未来、簪、本音はファイを倒す！」

鳳凰「分かった！」

リサ「任せて、ガルお父さん！」

アラヤ「母さん、負けないで！」

ガルツチ「よし、行くぞ!!」

ファイアー「来い！お前達に真の恐怖を味わせてやろう！」

ペイン「さあ……………、来い!!」

t o b e c o n t i n u e d
→

第52話 コブラ部隊

—固有結界内—

アラヤ side

それにしてもこの蜂、一体何処から湧き出てるの？有り得ないほどの数なんだけど……。

ペイン「無駄だ、どれだけの蜂を呼ぼうが、全てを滅ぼすなぞ不可能だ！」

アラヤ「だったら、此奴ならどうだ！拡散弾！」

トリガーを引き、大きく反動するも、ペインに近づくと同時に拡散し、当たりに居た蜂は死滅していく。

ペイン「は、蜂が!!」

鳳凰「今の内に撃ちまくるよ!!」

リサ姉さんと鳳凰姉さんの同時射撃により、ペインのダメージも侵攻している。でも、もつといい方法があるはずだ。

たとえば……、火炎瓶で燃やすとか。

ペイン「いや待て、貴様何をする気だ!？」

アラヤ「貴方を燃やします。蜂が酔ってこないように。」

3人「そんなことしたら、森が燃えるだろ（燃えちやうでしよ）!?自然を大事に!」
え、いい方法だったと思つてただけどなあ……。ん?

ガルツチ「いい方法があるぞ、みんな!」

未来「何?」

ガルツチ「火炎瓶を使つて、このジャングルの固有結界を燃やし尽くすつてのは——」

4人「「「いやいや待て待て!!自然を大切にして（しろ）!」」」

ガルツチ「いや、敵のお前が言うことなの?」

ファイアー「当たり前だろ!?最近地球温暖化の原因があるのだからジャングルを燃やしたら駄目だろ!」

ガルツチ「……………敵の筈なのに正論つて。」

あ、母さんも同じようなことをしようと思つてたんだ。

ペイン「くっ、燃やされる前に、まずはその小僧を倒さなくては……………」

すると、再び蜂が集まっていき、僕に向かって襲いかかってきた。そういえば、殺虫玉持つてた気がする。そう思い、僕は毒煙玉を地面に叩きつけた。途端に蜂はその煙を吸つてしまい、一瞬にして死んでいった。

あ、この手があったか。僕はすぐさまあらゆる毒キノコを集め、その弾を作り出し、毒弾を作り上げた。その弾をハンドガンに入れて、すかさずペインに向けて放った。

ペイン「グハッ!?! 貴様、一体何を——グフオ!?!」

鳳凰「アラヤ! 一体何をやったの!?!」

アラヤ「毒キノコを使った弾を撃つたんだ。しかも、その毒キノコはエゾテングダケ。それとカエンダケ。」

全員『それさすがにエグいだろ(でしょ)!?!』

そんなこと言われても、これ作ったの初めてなんだけど。まあ、まさか上手く行くとは思わなかったけどね……………。

ペイン「……………、これだ……………、この……………、痛みだ……………」

!!」

鳳凰「ツ!?! リサお姉ちゃん! アラヤ! 伏せて!!」

え? どういう——

『ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオッ
!!!!!!
(THE PAIN!!!)
』

なんと、毒にやられたのか、ペインはそのまま自爆をしたのだ。そして周りに居た蜂型テラーバイトは、ペインが死んだことにより、どンドン息絶えていった。うーん、自爆するなんて思わなかったなあ。

リサ「ねえ鳳凰ちゃん、何で自爆するって分かったの？」

鳳凰「一瞬だけど、僅かだけどカチツって音が聞こえたの。」

アラヤ「そういえば、狩人もやってたんだったね。」

さて、後は母さん達の戦いを手伝わないと。きっと倒せば、この固有結界も解けるはず!

side Change

ガルツチ side

さつきの爆風からして、ペインは死んだか。いやまあ、やり方がエグいけど、何はともあれ倒したからいつか。だが、あの原始的な罠が、まさかここまで発揮してるとは……。

『グウウ………。』

ん？今腹が減った音が聞こえた気がする……。

簪「ねえ、何か方法ないの!? これじゃあ撃つても撃つても、避けられちゃうよ!」

本音「それに、あの罠引つかかっちゃったら身動きが取れないよ! エロ同人誌みたいに!」

ガルツチ「いや、何故エロ同人誌が出てくるのか謎なんだが……。だが如何すれば……。」

そういえば、アイリさんから貰った弁当の中見てなかったな。ちよつと開けてみる

結果から言おう。

アイリさんの弁当は、ダークマターしかなかった……。やっぱアイリさん、料理しない方がいいです。はい。

未来「ちょ!?!なにこのヤバい料理!?!いや、それ以前になんなのこれ!?!」
ガルツチ「アイリさんが作った弁当だとか……。いやもうこれ、得体の知れない何かだな。」

本音「うわー……。これはちよつと引くよ……。」

簪「私もそう思う……。もうこれ料理以前の問題だよ……。」

リサ「ママ、これ食べ物じゃないよね?」

簪「食べちゃ駄目よ、リサ。」

アラヤ「……。」

鳳凰「やっぱり、アイリ母さんは料理はやっちゃいけないってのが、改めて分かっちゃったね。」

ガルツチ「うーん、如何する？」

アラヤ「待ってみんな、僕にいい考えがある。」

全員『？』

数分後……………。

ファイアー「ぬお!?食べ物か!!」

ホントに来たよ!!でも、さすがに開けたら絶対ヤバイよね?つてかそれ以前に――

『ムシヤムシヤパクパクガツガツ……………』

食ったアアアアアアアアアアアア!!!

簪「(え?アレ食べちゃったの!?)」

ガルツチ「(幾ら何でもアレは死ぬぞ?)」

未来「(あー、この後の展開が読めちゃった気がする……………)」

本音「(どんな展開?)」

すると、食べるのをやめたかと思えば、急に血を吐き出し、苦しみ始めた。

「アラヤ「あーうん、やっぱりアイリさん料理しちや駄目だね。」

全員『当たり前でしょ!』

っていうか、ファイアーがアイリさんの弁当食って死ぬって、嫌それ以前にあの戦いの意味があつたのか!?!いや、時間稼ぎもあつたが、まずファイアー!よく躊躇いなく食えたな!?

—海鳴町—

そう思いつつ、固有結界は解除され、先程起きてしまった戦いはなかったことにし、何食わぬ顔で、施設へ向かった。

ガルツチ「アイリさん、もう作るなよ？」
t o b e c o n t i n u e d
⇨

第53話 空を攫う理由

—海鳴町—

フランクサイド

フラン「結構進んだね。」

鈴木「ええ、未来ちゃん達、大丈夫なのかな？」

ルビー『つていうか、何で急にこうなったのですかね？空さんを攫うといい、イリヤさん達の能力を封じるといい。分からないことだらけです。』

確かに、言われてみればそうね。何で空お兄ちゃんを攫ったんだろう。目的は一体なんなの？

イリヤ「うーん、オーちゃんと未来お兄ちゃん以外の皆は初対面だし、攫った理由が分からないよね。」

白夜叉「まあのおう。一度、未来達の繋げてみるか。未来、聞こえるかえ？」

未来『白夜叉？どうかしたの？』

白夜叉「空が攫われた理由とか、知っておるか？」

未来『うーん、そう言われても、僕には———』

ガルツチ『その事なんだけど、一つ仮説があるんだ。』
レティシア「なんだ？」

ガルツチ『未来から聞いたけど、龍神空は転生者。って事は、前世と何か関係があるんじゃないかって思うんだ。』

それって、お兄ちゃんや未来お兄ちゃんみたいな感じなのかな？

ガルツチ『それに、母さんから聞いたけど、龍神空っていう名前は、転生してからの名前で、本名は別にあるみたい。』

しかも、その前世は、神様にも感謝されるぐらいの事をしてたらしいけど、具体的なことに関しては不明なんだ。どちらにせよ、その空の前世に関わってるのは確かだと思うよ。』

白夜叉「成る程、って事はその攫った本人を喋らせれば分かるのじゃな。」

ガルツチ『そう言うことだな。それじゃあ通信切るね。』

それから、私達は再び奇襲してきた敵達を一掃しながら進んでいった。でも、途中で厄介な敵が現れた。

『ズダンッ！』

こいし「伏せて！スナイパーよ！」

鈴美「分かるの？」

こいし「うん、そしてその先に居るのは……………」

???「ほう、よく分かったのう。そう、儂は『終焉』^{THE END}！だが、もう一人おるぞ。」

オーフェイス「もう一人？」

すると、隣の家がいきなり火事となり、そこから誰かがやってきた。ううん、正しくは何かを着込んだ人が現れた。

レティシア「な、なんだ此奴!？」

愛花「暑くないのかな？」

深雪「いやそれ以前に、その貴様は何者だ!!」

???「私か？私の名は『憤怒』^{THE FURY}。貴様らに憤怒の炎と終焉の鐘を届けに来た。」

深雪「終焉？悪いけど、まだまだ終わるわけにはいかないのよ。貴方の炎、食らって返してあげる!!アサルトライフルとマシンガンの鉛玉をね!!フランちゃん、こいしちゃん、イリヤちゃんは私と一緒にフューリーを、鈴美と白夜叉、レティ、愛花ちゃん、オーフェイスは、あの遠くから狙ってるエンドを倒して！」

3人「分かった!!」

白夜叉「さあて、お爺ちゃん。私達と遊んでやろうではないか。太陽神から直々相手になるから、ありがたく思え。」

END「ホッホッホ、面白い。では行くぞ！」

皆はそれぞれの銃を構えた。まあ私は、リボルバー式の『SCARLET』（モデルはタウルス M44）と『CRIMSON』（モデルはS&W M500）で、挑むけどね。お兄ちゃんの真似事だけど、私だつて得意だよ。魔理沙も言つてたじゃん。

『弾幕はパワーだぜ』って。どちらも高火力、貫通性もあるし一撃で吹き飛ばすことも出来るからね。

フラン「さあ、チーム戦の弾幕^{殺し}ごっ^合この始まりよ。」

sideChange

—
???
—
空
s i d e

うーん、アレ？ここは何処？

??? 「漸くお目覚めかね？龍神空。いや、『』よ。」

えーっと、なんか全裸待機している人が………つて、全裸!? え？何あの人!? 何で裸なの!?

に、逃げないと——

??? 「逃げようだなんて、無駄だぞ。貴様専用の鎖で縛ったのだからな。」

空 「つて言うか、誰!？」

??? 「私か？私は『ヴォルギン』。貴様を捕らえるために、どれ程待ち侘びたか。」

ヴオルギンって、確かメタルギアソリッド3に出てくる……………って、は
いいいい!?

ヴオルギン「しかし、貴様の肌は綺麗だな。無垢な赤ん坊の肌だ。犯すのが惜しい。」
「(´・o・｀)」ホモオ……………。駄目だこの人、なんだか嫌な予感しかないんだ
けど。それにサラツと犯すとか言わなかった!?

空「や、やめて下さい!!俺をどうするといひのですか!?

ヴオルギン「ふむ、どうやら記憶が飛んでいるようだな。仕方あるまい、何しろ貴様
は、ある厄災を救った大英雄なのだから……………」

空「え?」

俺が、大英雄?何の話をしてるんだ?

ヴオルギン「知らんのか?いや、今はどうでも良い。貴様を捕らえたのは他でもない。
貴様の前世の能力を、再び目覚めさせ、私の力にする。」

空「そんな力を手に入れて、如何するつもりだ!!」

ヴオルギン「決まっておる。あのお方に捧げるのだ。無の神である『ゼロ』様にな。」

空「ゼロ?」

ゼロって一体誰なんだ?聞いたことがない。

ヴオルギン「そして、貴様の力を捧げれば、我ら『リターン・オブ・ザ・アヴァロン』

計画が漸く進む!! 全ての生命を、全ての時を、全ての運命を『0』に戻し、我々が新たな1を生み出す!! そして、我々の理想郷を作り出す!! それこそが、『リターン・オブ・ザ・アヴァロン』計画だ!!」

空「そんな、滅茶苦茶だ!! 全部を0だなんて、おかしいよ!!」

ヴォルギン「そうかな? だが、無駄な抵抗は無理だぞ。『——』、お前を逃がすわけには行かない。たつぷりと調教し、可愛がつてやろう。」

まずい、何~~ん~~かしないと……………。お願い、助けて……………!!! 助けて

……………!!!

空「未来さん……………、ガルツチさん……………。」

sideChange

—海鳴町—

ガルツチside

ツ!!

簪「如何したの？」

ガルツチ「空が危ない!!」

未来「僕も感じた!!急ごう、ガルツチ!」

ガルツチ「ああ!!済まない簪!!他の敵兵は任せた!!僕と未来は急いであの施設に向かう!!!」

簪「あ、ちよつと!!」

待つてろ、空!!お前を、助けてやるからな!!!!絶対に、絶対に!!!!!!

t o b e c o n t i n u e d

◇

第54話 破壊者VS狂狼 不死鳥VS狂犬

—謎の施設—

ガルツチ side

って、簪達より先に到着したのはいいけど、勢いで来ちゃったなあ………………。でも、仕方なかったんだもん。今空から、助けてって声が聞こえたんだから。

未来「つっていうか、こここの敵相当多いよね。」

ガルツチ「まさに、ここが本拠地と言ってるようなもんだね。」

未来「でも、空は何処に居るんだろう。」

ガルツチ「分からない。この辺りなのは確かなんだけど……………」

ミスト『兄や、未来お兄ちゃん、空さんはここから地下に何か途轍もない兵器を作ってる部屋があるから、そこに……………！2人とも、避けて!!』

未来ガル「!?!」

未来と反対な場所に避けると同時に、扉が破壊されるのが見え、そこから誰かがやってきた。

??? 「Surprise, Surprise.」

ガルツチ「あれって……………、ワイルドドッグ!？」

未来「知ってるの!？」

ガルツチ「タイムクライシスに出てくる登場人物、VSSBの宿敵とも呼ばれてる狂犬だ。って事は、そのとなりは……………」

ワイルドドッグのとなりにあつた瓦礫がこちら側に飛んできたが、すぐさま避けた。

??? 「I can see you at first. My name is Wild Fang.」

ガルツチ「よもや、お前らと対面することになるとは思わなかつた。だが邪魔だ、そこを退いて貰うぞ! 狂犬共!! 未来、フアングを頼む、僕は狂犬を倒す!」

未来「分かつた、無茶はしないでね。」

ガルツチ「行くぞ、ワイルドドッグ。VSSBではないが、今度こそ仕留めてやる!! だがせめて、日本語話せ。」

ドッグ「……………コウルサイ小僧。」

ガルツチ「喋る一声はそれか!？」

しかし、ワイルドドッグか。まあ奴はどうせ爆破オチで来るだろうけど、絶対に逃がさない。

ドッグ「hahaha!!」

ワイルドドッグは笑いながら、左腕のガトリングで僕に撃ちまくる。それに対抗し、僕はサブマシンガンでワイルドドッグを撃ちまくる。多分他の皆から見れば当たってないように見えるが、実は僕が狙っているのは、ワイルドドッグが放っている弾を狙って当てているのだ。

普通に考えたら、有り得んだろうな……………。

ドッグ「You seem to be doing pretty good.」
 ガルツチ「It can not be translated by you.」

っていか何気に僕も英語使ってるけど、別にいつか。

ガルツチ「当たれ!!」

ドッグ「グオツ!?!」

一つの弾がワイルドドッグに直撃。すると、あの謎の施設に逃げ込んで行った。って逃がすか!!

sideChange

未来 side

未来「つていうか、物蹴り飛ばしすぎでしょ!？」

どうなってるのあの人の足!?!いや、ガルツチ程じゃないけど、でもおかしくない!?!凄
い速度で蹴ってるもん!

ファング「How was it? How about that?」

未来「言わせておけば!!」

でも、あの厄介な物を避けながら銃で当てるつて、結構大変だね。ぶっちゃけ言うとな
一度ガルツチと一緒にガンシューティングゲームで遊んだけど、一度も勝てなかった気
がする。つていうかガルツチ強すぎでしょ。さすがグランドアーチャーは伊達じゃな
かったのか。

未来「そこだ!!」

ファング「ツ?! It seems a little over head………」

どうやらファングも、あの施設に入ったようだ。だったら僕も!待ってて、空。絶対
に助けるから。

—謎の施設内—

中に入ると、そこは兵器ばかりの施設だった。戦車もあればミサイルもあり、中には核爆弾らしきものなど、まるで何時でも戦争が出来るかのような施設だった。つていうか核爆弾があるつて、大丈夫なの!?!これ、刺激を与えたら多分海鳴町壊滅しちゃうね。

フアング「Fight for this person!」

つて、戦車を蹴り飛ばした!?

ガルツチ「うわあ……………、おい……………。あれ大丈夫なんかよ。」

ドッグ「……………。」

フアング「There is more, there are more!」

未来「ヤバっ!」

フアングが蹴り飛ばしてくる戦車等の車両がこちらに飛んで来るも、ギリギリのところで避けた。というか、完全に殺しに来てる。

ガルツチとワイルドドッグも、ワイルドフアングが蹴り飛ばした物には軽々と避けては居るようだけど、見てないのかな?あれ。

ガルツチ「おいワイルドドッグ!!あれ止めないのか!?!」

ドッグ「Do you think it can be stopped?」

ガルツチ「お前の後継者だろうが!!しかもここ、核爆弾とかあるから、下手すりやお陀仏だぞ!!」

ドツグ「Rather it is not good?」

ガルツチ「駄目だ此奴、早く決着着けさせ……………!!未来!此奴を使え!!」

ガルツチが投げたのは、コンテナダーだった。しかもその中に入っているのは、ガルツチの起源弾だった。

僕はそれを受け取り、フアングに標準を当てる。そして引き金を引くと、流星の如くフアングに当たった。

フアング「ッ!」

未来「つてガルツチ、まさか!」

ガルツチ「……………能力を封じていたとしても、起源弾は例外だ!内側からの剣に恐怖しろ!!『起源弾:起動』!!」

『ブシヤアッ!!』

フアング「what!」

ドツグ「fang!!」

ガルツチ「ごめんね、未来。これだけは、君に見せたくなかった。『起源弾:起爆』

……………!」

ワイルドドッグ、貴様何時召喚された！あのコブラ部隊と同じように！！」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
⇨

第55話 サークヴァントソルジャー

|
???
|

ガルツチ side

ガルツチ「ワイルドドッグ、貴様何時召喚された！あのコブラ部隊と同じように!!」
未来「!？」

ドッグ「……………サアナ。タダ、我々ヲ召喚シタノハ、『ヴォルギン』ト呼ブ男ダ。」
ヴォルギン!?メタルギアソリッド3の!?あのバイセクシャルの!?雷電似と呼ばれる
ライコフと滅茶苦茶セックスしまくって……………いや待て、少し落ち着こう。

そうなると僕も変わらない気がする。っていうかあの筋肉モリモリマッチョマンの
変態と一緒にしたくないんだけど!!

ガルツチ「奴の目的は？」

ドッグ「ソレハ、ヴォルギンニ聞ケ。ダガ、私ハ通サナイ!!」

ガトリングが変わった!?一体何を……………。

ドッグ「Eat this!!」

ガルツチ「ちっ！」

『スパッ』

ドッグ「何!？」

未来「えっ？」

ガルツチ「……………あらあ。」

何故か知らないけど、ワイルドドッグの持つ機械で、その辺にあつた戦車を投げつけ、僕に当てようとして、僕が蹴ろうと横振りしたら、どういう訳か戦車が綺麗に真つ二つに斬れてしまった。

……………あの時刃すら折る事が出来る脚と言つたが、訂正するよ。戦車ですら真つ二つに斬れる脚だったわ。

ガルツチ「どうなつてんだよ、僕の脚。」

未来「それ僕が聞きたいぐらいだよ!?!何その凶器の脚!?!」

こつちも疑問に思つてんだから答えられないよ……………。

ドッグ「コウナレバ、『宝具』ヲ使ウシカナイナ!!」

ガルツチ「なっ!?!」

ドッグ「Eat this!! 『固有時間危機』!!」

え?何その宝具……………?つて、タイムクライシスつて事は……………。げっ!?!

ガルツチ「未来!!急いでワイルドドッグを倒すぞ!!」
未来「え?」

ドッグ「モウ効果ヲ見破ツタカ。今貴様ラニハ、制限時間ヲ与エタ。0ニナレバ、ライフガーツ減リ、0ニナレバ戦闘不能ニナルノダ。最モ、私ノ弾ニ当タレバライフガ減ルケドナ。」

ガルツチ「くっ、厄介な宝具だ……………」

僕と未来は急いで銃を構え、ワイルドドッグに向けて撃つ。が、先程の兵器を使用し、真つ二つに斬った戦車を盾にして、投げつけてきた。

与えられた時間は40秒。それまでにワイルドドッグを怯ませる、または撃破しないと、どこからともなくダメージを与えられてしまう。それも、強制的に。

ドッグ「hahaha!!」

って、逃げる気か!?!だが!

ガルツチ「それで終いだ!!」

『ズドンッ!!』

ドッグ「ウグアアアアアアアアアア!!」

僕が狙った部分は両足で、そのまま転げるかのようにそのままバタリと倒れる。どうやら動かなくなっただよう、僕と未来はそのままワイルドドッグに近づく。が、手探りで何かを取り出すと、そこにはスイッチらしきものが見えた。

未来「ガルツチ、伏せて!!」

ガルツチ「まさか……………!」

ドッグ「フフフツ……………此デ貴様モ道連レダ!!!」

そういえば、ずっと疑問に思ってた。本当にあれが自爆なのか。本当に自爆なら、跡形もなく消えているはずだ。だが、その次作にはサイボーグとなって改造して復活して

る。
って事は、あの自爆は……………!!!

『ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!』

自爆すると同時に、僕は直ぐさま伏せてワイルドドッグの生存があったか調べてみた。すると……………。

『ワイルドドッグ 生存』

ビンゴ、あれは逃げの自爆だった。だったら、それを追いかけるのみ!!

未来「ガルツチ!? 何処に行くの!?!」

ガルツチ「ワイルドドッグを追いかける!! 彼奴は、逃げの自爆をしたんだ!! 未来は先に行つて空を頼む!!」

未来「分かった!!」

僕はその爆風に向かって走り、ワイルドドッグが今何処に居るか探した。

そして、意外な場所にいた。海鳴町のとある崖のところになっていたようだ。だったら、そこに急ぐのみ!!

—とある崖—

ガルツチ「居た、やはりここに逃げていたか。」

僕は直ぐさま飛行を解除し、ワイルドドッグに向けて銃を突きつけた。

ガルツチ「観念しろ、もう逃げ場はないぞ。」

ドッグ「……………久シブリダ、アノ自爆ヲ見抜イタノハ、貴様デ2人目ダ。」

ガルツチ「何？」

ドッグ「改メテイオウ。サーヴァント『ソルジャー傭兵』、真名ハ文字通り、『ワイルドドッグ』ダ。

ソシテ、マスターハ『ヴォルギン』ダガ、他ニイル。」

ガルツチ「ヴォルギンのサーヴァントじゃないって事か？」

ドッグ「ソウダ。本当ノマスターハ、『ラーク・ブライアン・ロード』ダ。」

……………はい？え？今ワイルドドッグは、なんて言った？一瞬、お爺ちゃんの
名前が聞こえた気がするが……………。

ドッグ「アア、ナルホド。マスターノ孫ハ、貴様ダツタノカ。確カニ、似テイル。」

ガルツチ「待て、僕のお爺ちゃんは死んでいるはずだ。」

ドッグ「イヤ、マスターハ死ンデイナイ。今モ生キテイル。」

ガルツチ「ハア!? どういう事だ!? お爺ちゃんが死んでいないって!!」

ドッグ「ソウダナ、貴様ハドコマデ知ツテル?」

ガルツチ「無の神に敗北するも、最後の力を振り絞り、『グランド・ゼロ』という自爆魔法を……………、え?」

ちよつと待て、まさかあの自爆つて……………!

ドッグ「アノ自爆ハ、私ガ教エタ。恰モ自爆シテ、死ンダカト思ワセルヨウニ。」

ガルツチ「そんな!? じゃあ何で皆の前に——」

ドッグ「死人トナツタ人物ヲ、態々皆ノ前ニ出レルト思ウカ?」

ガルツチ「……………ロマンはあるだろ。」

ドッグ「イヤ、ロマンハナイ。」

でしょうね。

ガルツチ「そつか、お爺ちゃん生きていたのか……………。じゃあ、あのファンクは?」

ドッグ「彼奴モマタ、ロードノサーヴァントダ。」

ガルツチ「ええ……………、僕知らずに殺しちゃったんだけど……………」

ドッグ「安心しろ、アアミエテマダ生キテイル。」

ガルツチ「何だそのワイルド一族的な感じ……………」

ドッグ「ソウイウナ。」

ガルツチ「ハア、何だ。本人かと思つたら、お爺ちゃんのサーヴァントなら、殺す気失せたよ。」

ドッグ「ソウカ。マアトニカク、奴ラノ計画ト『データ』ガ取レタカラ、ロード二渡スカ。」

そう言うのと、ワイルドドッグの姿が薄まっっていく。つて、その前にお爺ちゃんの事言わないと！

ガルツチ「待て、ワイルドドッグ！お爺ちゃんは、今どこで生きてるんだ!？」

ドッグ「……………知りタカツタラ、東風谷早苗カ蒼天星龍二会ウガイイ。デハ、マタ会オウ。ロードノ孫ヨ。」

そして、ワイルドドッグは何かの荷物を持ちながらこの世界から去って行った。代わりに、溢れ出る力を感じ、一度解析すると、どうやら力を取り戻せたようだ。

さて、ヴォルギンのところに向かうか。

—謎の施設 内部—

未来 side

あれ？なんだか力が戻った感じがする。もしかして、ワイルドドッグが居なくなっただけで、力が戻ったのかな？

フラン「未来お兄ちゃん!!」

未来「フラン、皆。」

簪「未来、速いよ……………」。

十香「ガルツチさんは？」

未来「ワイルドドッグを追いかけていったらしいけど、大丈夫なのかな？」

本音「そういえば、なんだか私達の力が戻った気がするんだけど……………」。

深雪「私も。」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
→

第56話　メタルギアエクセルサスヲ

—謎の施設 地下—

ガルツチ side

ヴォルギン「ほう、まさか最短距離として上から来るとは思わなかったな。」

ガルツチ「待たせたな、ヴォルギン。空を取り返してきた。何処に居る!!」

ヴォルギン「安心しろ、空は私の隣にいる。全く、調教の真つ最中だというのに、無
粋なことを……………」。

美久「調教つて、あなたダーリンになんて事を!!」

つていうか、一体ナニをしてたんだよ……………」。今更だが、ヴォルギン裸なんだな

……………」。

空「み、みんな……………」!

十香「空!」

琴里「つてあんた、何で裸なの?」

ガルツチ「多分、ヴォルギンに無理矢理脱がされたんだろ。」

二重「ㄣ(´・o´)」ホモオ……………」
未来「何その顔……………」

ヴォルギン「ふつ、だが早くここにたどり着くとは想定外だ。空のデータを取れば、我らの計画が進むというのに……………」

計画？此奴は一体何が言いたいんだ？

ヴォルギン「まあいい、邪魔が入った以上、貴様らを始末しなくては……………！来い、メタルギアエクセルサスヲ!!」

すると、ヴォルギンの後ろから、巨大な機械が現れた。4本脚の……………つてあれ!?

ガルツチ「メタルギアエクセルサスだつて!?!バカな、アームストロング自ら破壊された筈の機械が、何故!?!」

ヴォルギン「ああ、貴様は見たことあるのか。だが、此方は違うぞ?何しろ、メタルギアレックスとメタルギアジーク、サヘラントロプス、メタルギアレイ等のメタルギア形式の機械や性能、そして武器を取り揃えた最高傑作のメタルギアなのだ。」

ガルツチ「ちつ、相当厄介なもん作りやがったもんだな……………」

未来「ねえガルツチ、何であれを知ってるの?」

ガルツチ「以前僕が反乱軍だったとき、此奴のオリジナルと戦ったことがあるんだ。」

まあ、その後は皆の力で、戦意喪失させたけど、結局はアームストロングって言う阿呆な政治家がぶつ壊したけどね。ぶつちやけ、持ち上げたことあるし。」

本音「ええええ!!？」

簪「メタルギアを、持ち上げた!？」

レティシア「どれだけ腕力あるというのだ!？」

白夜叉「腕が細いのに、ようやるのう。」

十香「もう規格外ってレベルじゃない……………」

他の精霊『うんうん。』

5人『どうなってるの……………、その腕。』

みんな酷い……………、いやブレイズ達もそう言われた気がする……………。

ヴォルギン「ほう、エクセルサスを持ち上げたのか。面白い、ならばこの機械で、持ち上げられないほどの圧力で、貴様を踏み潰してやろう。」

空「くうう……………!!」

ガルツチ「空!」

『バキンッ!!』

ガルツチ「よつと、大丈夫か？」

空「な、何とか無事です……………。貞操も、どうやら間に合ったようですし。」

ガルツチ「そうか。」

空を助け出すと同時に、エクセルサス牙が動き始め、上から核兵器と合体していき、二足歩行のメタルギアへと変貌していった。その中には、ヴォルギンが入っている。

ヴォルギン「フハハハハハハ!! さあ来るが良い、捻りつぶしてくれる!!!」

ガルツチ「封印された分、派手にやるか! セフィロト『絶滅天使』! クリフト
『救世魔王』!!」

折紙「ホントに使える?！」

琴里「へえ、確かに凄いわね。」

ガルツチ「ついでだ………! フラン、こいし。アレをやるぞ!」

フラン「アレね!」

こいし「いいよ!!!」

イリヤ以外全員『あれ?』

絶望の魔神デウスベア・ガイア・エビル・ゴッド
Despair darkness Gaia Evil God!
ガルトツチ「Connect in

破壊滅の魔神ヘイン・エビル・ゴッド
Ruin Brake Heron Evil Goddess!
フライン「Connect in

こいし「Connect in

殺^殺戮^戮の^の魔^魔神^神 Slaughter Ripper Hades Evil God!

3人「混沌を統べる力よ、我らに目覚めたまえ!!」『Connect in chaos Stone guardian!!』」

僕とフラン、こいしが黒く光ると同時に、直ぐさま変化が訪れた。先ず僕の方は、デビルメイクライ4に出てくるネロのような腕は、両腕となり、翼は『完全生命体デストロイヤー』、顔の右頬には闇のような刻印が浮かびあがった。

フランは両腕両脚にミラバルカンの装備へと纏い、ミラバルカンの翼が追加された。

こいしに関しては、宙に浮くと同時に両腕両脚に水色と白のヒレが現れ、そこから風と水を纏い、こいしのサードアイはアマツマガツチのヒレに覆われていた。

ガルツチ「我らは大魔神にして1人の存在。」

フラン「大切なものを守るために。」

こいし「今ここに、混沌を統べる力を持ち。」

3人「彼の者を倒さん!!」

ヴォルギン「混沌を統べる3大魔神か……、まさか此奴らに宿していたとはな。

あの宵闇霊夢が言っていたのは、本当だったとは……。」

ガルツチ「何ッ!？」

フラン「宵闇霊夢だっ!？」

こいし「まさか、彼奴生きて!？」

ヴォルギン「な訳あるか、貴様らが殺しただろ。」

3人「「デスヨネー……………」」

マジでビックリした。生きていたら、一体どんなトリックで蘇ったのか自問自答してたところだった。

ヴォルギン「さて、お喋りもここまでだ。ここが、貴様らの墓場だ!!」

簪「やらせない!!セツト!!」

『覚醒せよ!セラフイムオープンオリジン!!!』

簪「ウルトラマンセラフイムオープン!!」

ヴォルギン「ぬお!?!これが、ウルトラマンだと!？」

イリヤ「あれ?簪ちゃんのとおりにあるのって……………」

となり?僕らは直ぐさま簪の右と見ると、デイケイドのケータッチらしきものがあつた。そのケータッチは、イリヤのところに止まり、手にすると9つのマークが描かれていた。

イリヤ「もしかして……………」

『Sabber! Archer! Lancer! Rider! Caster! Assassin! Berserker! Avenger! Ruler!』

FINAL SPIRIT RIDE(DECAD)!!』

イリヤの服装が一変し、ジャンヌ・ダルクの衣装へと変わった。それに加え、イリヤの背中に、虹色の翼が生えていた。最早仮面ライダー要素が見当たらねえ……。いや、どっちかというプリキュアの方が近いか。

ルビー『あらあ、まさかコンプリートフォームになっちゃうなんて、私でも想定外です。これもこれで可愛いですけど。』

イリヤ「ルビー、シヤラップ。踏み潰すよ?」

ルビー『何その冷たい目は……。』

イリヤ「鞭打つてもいいのよ?」

ルビー『何でッ!? S M プレイする気ですか!?!』

ガルツチ「お前が悪い。」

全員『激しく同意。』

ルビー『解せぬ……。』

ヴォルギン「ま、まあいい。さあ来い!!」

ガルツチ「行くぞ、ヴォルギン。兵器の貯蔵は十分か!!」

t o b e c o n t i n u e d
→

第57話 次元を超える絆

—軍事施設跡地—

空 side

そういえば、この戦い。俺も何処かで体験した気がする。でも、いつ?何処で?

『——前!!』

誰の声なのかは知らないけど、何処か懐かしい声に従い、俺は右に避けると、あのヴォルギンって言う奴が言ってたメタルギアエクセルサス刃の攻撃を避けた。

でも、本当に誰なの?あの声は?

『ボサツとするな!次が来る!避けたらすぐに攻撃をしろ!!』

別の声だ。これも懐かしく思っちゃう。でも、分からない………………。これは、誰の記憶?だけど、今はそれどころじゃない!!

空「ハッ!!」

ヴォルギン「何ッ!?!」

ガルツチ「片手で……………、止めた!?!」

ガルツチ 『響け虚の歌』!!』

複数から放たれる魔手が僕を守り、他の魔手はメタルギアエクセルサス牙に向けて攻撃を仕掛けた。右腕は引き千切るも、どうやら他の物が吸収され、再生されたようだ。

しかし、再生か……。あの再生をどうにかしないと、どうやっても破壊しきれないな。まあ、あの巨人共よりは殺し甲斐があるけどね。

未来「ガルツチ、どうやったら再生止められる？」

ガルツチ「いやそう言われてもだな。あの再生、思ってるより厄介な奴だ。あのアームストロングのナノマシン並みに再生力が高いしな。って、会話中邪魔するな!!」

『日輪』!!』

簪『確かに、私も何回も斬っても、何回も瞬時に再生してくるよ。あの再生力を何とかしないと、本体を攻撃できない!』

アラヤ「ですが、どうやって——」

つとその時だった……。

『俺達に任せろ。スネーク!!』

『ヴォルギン! 改造型のレールガンを食らえ!!』

白い一閃が走り、メタルギアエクセルサス牙の頭部分が貫通、そのまま頭部は崩れ落

ちていった。しかも、再生すら起こらなかった。

ヴォルギン「何ッ!? バカな、何故再生されない!? しかもその声……………、まさか!?!」
???「多分それは、BIG BOSSの事だろうが、あえて言わせて貰おう。『久しぶりだな、ヴォルギン』。」

ガルツチ「スネーク!?!」

スネーク「ほう、俺を知ってるとは、まだまだ捨てたものじゃないな。なあ雷電。」

雷電「ああ、そのようだな。あとスネーク、もう一度チャージを。今度は胸部を。その間、俺が時間を稼ぐ。」

スネーク「分かった。」

みんなは後ろを向くと、そこにはレールガンを持ったスネークと、サイボーグ化されている雷電がいて、その雷電が僕の近くに来ると、僕を見ていた。

雷電「君、あそこまで飛ばせるか?」

ガルツチ「え? まあ一応は。」

雷電「そうか、なら頼む。」

ガルツチ「分かりました。しかし……………、貴方が雷電ですか……………。」

雷電「?」

ガルツチ「サムから聞きました。僕の目は、貴方に似ていると。」

雷電「サムが？君とサムとはどういう？」

ガルツチ「サムは僕の剣術の師匠でもあり、ライバルなんだ。」

雷電「なんだって!?それじゃあ、サムは……………」

ガルツチ「そう言うこと。って事で、行ってこい!!」

話の途中で切り上げて、雷電を力一杯投げ飛ばす。同時に赤い一閃がメタルギアエクセルサス刃に大きな傷跡を残すと、そこにはヴォルギンが乗っている場所が見えた。

ヴォルギン「バカな!?イワン!?お前だということのか!」

雷電「いや俺、イワンじゃない。それよりその巨人!今の内にメタルギアを!!」

簪『え?ああ、うん!!』

簪がオーブカリバーをぶっさすと、そこにはメタルギアエクセルサスの姿が見え、そのまま取り出し、宙に投げ飛ばされた。

ヴォルギン「しまった!?このままでは……………!!」

雷電「今だ!!撃て!!」

スネーク「発射!!」

『ズギュウウン!!!』

今度は赤い閃光が走り、メタルギアエクセルサスは貫通、そのまま爆発するも、小さな点だけは残った。言わずともヴォルギンだ。

ヴォルギン「まだだ!!まだ終わってない!!!!!!」

ガル深雪「彼奴の『戦闘続行』スキル絶対高いだろ!?!?!」

未来「でも、今がチャンスだ!!行くよ、みんな!!」

全員『おう!!』

『解き放て、オーブの力!!』

『FINAL INFINITY ATTACK RIDE<DIMENSION
ICK>!!』

『FINAL ATTACK SPIRIT RIDE<DEDEDECADE>!!』

ガルツチ「ヴォルギン!!!この一撃を食らいやがれ!!!『咎得テ釘放ノ閃光』!!!」

フラン「破滅へと落ちなさい!!『緋色月下・狂咲ノ絶ノ斬撃』!!」

こいし「これが殺戮の極限!!『墮天厄災ノ大嵐』!!!」

イリヤ「『全て^{オール}約束された幻想の剣』!!」

簪「『熾^{エクス}天へと輝く絆の剣』!!!」

未来「いけええええ!!」

鈴美「『零^{ゼロ}に戻りし無の剣』!!」

オーフィス「『夢現へと連なる閃光』!!」

白夜叉 「『アルティメットブラスタ―』!!!」

レティシア 「『ギガントドラゴニックダブルスラッシュ』!!」

本音 「『アース・オブ・ザ・スパーク』!!」

深雪 「大魔砲『ファイナルダブルダークマスタースパーク』!!!!」

空 「これが我が奥義……………。零を全に変え、全を零へ戻る。『

』!!!」

最後に空が何の技を出したのかは聞こえなかったが、みんながそれぞれの高火力の技を出し、そのままヴォルギンにぶつかる。

BGM終了

.....、御座いません.....!!ここまでか.....!ゼロノス様.....、申し訳

s i d e C h a n g e

空 s i d e

え？あの技、俺が出したの？なんだろう、この技使ったら、凄く疲れた気がする。誰か、声が聞こえた気がする……………。

でも、ちよつと疲れてるから少し寝てからにしよう……………。

だけど、あの声は誰だったんだろう。それに、ガルツチさんを見たら、違う人に見える。ううん、その違う人が、何故か懐かしく見えて……………、今はいいや。寝よう。

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第58話 ロードの居場所

—病院 屋上—

ガルツチ side

なあ母さん、空が出したあの力って何なの？

全王神『あれ？前世の力だよ。多分空ちゃんはまだ気が付いてないと思うけどね。』
そうか、でもいつか思い出すんだよね？僕や未来みたいに。

全王神『そうだね、そうなら空はどう言う決断をするのか、楽しみにしてるよ。』
まあ、決めるのは空自身だしな。僕みたいに、前世と訣別するのか、またはその前世を受け入れて人生を歩むか。

でも今気になるのは、お爺ちゃんの生存だな。

全王神『え？ローちゃん生きてるの!?!』

ちよつと待て、なんだローちゃんって。ていうかお爺ちゃんと知り合い!?!

全王神『もつちろーん!!ローちゃんはね、全の竜神の後継者とも呼ばれるほどで、凄
いイケメンなんだよ!!』

ウエイ!?(0w0) 全の竜神の後継者!?!それ初耳なんだけど!?!っていうかどんだけ

僕の爺ちゃん知らなすぎなんだよ!?

それじゃあ、お爺ちゃんの居場所も知ってる——

全王神『期待してて悪いけど、そこまで分かんない。』

なんだよ、それ………………。まあ、確かに母さんですら生きてたなんて知らなかったんだし、無理も無いか。

むう、こうなったら星龍と早苗に聞きに行かないとだな……………。

全王神『あ、それならここの平行世界に行つた方がいいと思うよ。そこにガイア君の両親もそこにいると思うから。』

ありがとう、母さん。

僕はそう思い念話を切り、次は別の念話に繋がれた。言わずもがな、空を知っているこの世界の『ゼウス』だ。

聞きたいことがある、ゼウス。

ゼウス『ぬお!?!誰だ!?!一体どうやって念話を!?!』

驚くのも無理は無い、この念話は一応どんな奴でも繋がる優れものだ。それよりも聞きたいことがある。

ゼウス『なんだ?』

どうしてそこまで空を気にする。彼はもう転生して、自由に生きてても良いはずだ。それなのに、連れ戻そうとはどう言う根端だ？

ゼウス『それは……………』

彼の前世は何かと英雄だろうけど、元を正せば一人の人間だ。どう生きようが、どう死のうが、それは神々が決めることじゃない。彼自身が決めることだ。

ちなみに、何者かと言うと、僕は虚王魔神。全王神の負の感情から生まれた存在だ。

ゼウス『虚王魔神!? な、何故生きて——』

死んでる扱いなんか。全く、もしそつちにいたらぶん殴ってたぞ? 生きてる理由は、転生してるからだ。特典は地味にしろ、努力で以前の力よりも増してる。さて、ゼウス。これ以上空を手を出すなら、一度覚悟しておけ。

ゼウス『はい?』

貴様らにとつての大いなる厄災を起こす。それも、とびつきりのな。

ゼウス『お、脅しですか!』

当たり前だ。分かったら空に手を出すな。他の奴らにも伝える。

ゼウス『は、はいいいい!!!』

念話を切り、僕は溜息をついた。

ガルツチ「らしくないこと、しちやったな。それとも、虚王魔神の頃の僕に、戻った
りして。」

確かに、あの頃の僕は、なんて言うか………自分で言うのもなんだが、つまら
ん存在だったな。

でも今は違う、ちゃんとした心を持つてる。負の感情の、特に絶望と憎悪が強いけど、

それでも僕は、僕で居られる。

ガルツチ「さてと、空の様子を見に行くか。」

イフ「……………ガルツチ、一つ聞きたい。」

ガルツチ「ん？」

イフ「君の願いは、なんだ？」

ガルツチ「……………何時までも強敵と戦い、そして延々と世界を回ることかな？
未来達と一緒に死ぬことがあっても、ずっと旅していききたい。救うときは救うし、手伝うことは手伝うかな？」

イフ「そうか、では空に会いに行こう。未来達も見舞いに行ってるし。」

ガルツチ「そうだな、ところでイフは、ずっと一緒に居てくれるか？」

イフ「どうだろう、未来と同じように私が消えるかもしれない。」

ガルツチ「……………そっか。それまでは、今の一時を楽しまないかね。」

イフ「確かに、そうだな。」

そうして僕とイフは、空がいる病室に向かった。

s i d e C h a n g e

—病院 外—

未来 side

未来「空が大事にならなくて良かった。」

簪「うん、あんな力本当にビックリしちゃったよ。」

十香「でも、あの力何処で？」

未来「確かに、不思議だね。」

でも、ガルツチは何か知ってるらしいけど、何も言ってくれない。教えたくないのかな？

オーフィス「そういうえば、グレードレッドから聞いたが、また宴を始めるそうだ。」

ガルツチ「なにこの宴率……。高くね？」

オーフィス「しかもどうやら、何処かの旅館で始めるとか。」

ガルツチ「宴に続いて旅館!？」

レッド「良いでは無いか、空が無事だと分かったんじやしな。」

ガルツチ「まあさすがに、言峰達も来ないよね？」

全員『ガルツチ（母さん）（お母さん）（お兄ちゃん）、それフラグ。』

ガルツチ「……。もう来てるな、絶対。」

それ言っちゃ駄目だろ、ガルツチ。本当に来ちゃったらどう反応すればいいの？

深雪「何故だろ、凄くいやな取引を見た気がする……………」。
 イリヤ「そういえば、他にどんな同人誌作ってるんだろう……………」。

本音「他には、『月の魔神』とか『雨降りし時に出会うふたり』とか。『月の魔神』は、もはやこれまでと、魔神は目を閉じるも、気が付くと何処かの場所で、そこには自分に殺されたはずの勇者がいて、それから色々な物を見て距離が縮まっていき、最後には愛し合う仲に……………」。

未来「月の魔神って、多分これガルツチだよね。」

ガルツチ「うん、どうもそうだね。勇者って事は……………」。

未来「如何してこうなった……………」。

本音「ちなみに、ふたりの設定は基本みつくんがSでガルガル君がMだから。」

未来ガル「「いやいやちよつと待て!?まさかとは思うけど、SMプレイとかないよね!?」
 「」

簪「え?書いて欲しいの?駄目だよ、期待してるけど、私のはイチャラブ系だから。」
 未来ガル「「そこじゃあない!!」
 「」

琴里「何でこうなったの?」

3人「「私達がやりました。」
 「」

琴里「何やってるの!?二亜が腐っちゃったら如何するの!?!」

ガルツチ「そこっ!?! ってかそんなことしたら腐女子が増えちゃうでしょ!?!」
フラン「お兄ちゃん、それも手遅れ。」

ガルツチ「……………レイス、今頃何してんだ?」

未来「あ、そういえばガルツチ。あの同人誌は、何時完成するの?」

全員『え?』

ガルツチ「うーん、もう少しかな? でも難しいんだよね、小説を同人漫画に変えるのって。」

二亜「えっ、ガルツチって同人誌書くの?」

ガルツチ「なんとなくね。フランとこいしの同人誌や、簪とフラン、本音とこいし等色々。あ、みんな先に戻ってて。ちよつと未来と一緒に買い物に行くから。」

『ここからは会話だけです。』

ガルツチ「さてと、未来。君も知ってるだろ？あの力のこと。」

未来「うん、とてもじゃないけど、あれは空が出した技だよね。」

ガルツチ「しかも、あの技は零と全を応用した技。普通じゃないよ。」

未来「ガルツチは、あの力を見たことあるの？」

ガルツチ「いやない。零と全を組み合わせた技なんて、聞いたことがない。でも、確かにあれは『零の龍神』の力と『全の竜神』の力だった。二つの技を所持するのは、少なくとも龍神王ただ1人の筈だ。だが空は、それを持ってた。いや、正しくは、前世の時に持っていたことになる。」

未来「前世か……………」

ガルツチ「母さんは知っていいそうだけど、恐らく知らないっぽい。でも、いずれ連れ戻そうとする神々や、空を狙う輩が居るのは少なくない。念のために、連れ戻そうとする神々には釘を打っておいた。」

未来「うーん、空を連れ戻すってどういう事なんだろう？ 転生したんだから、自由に生きても構わないと思うんだけど。」

ガルツチ「それには僕も賛成さ。少なくとも、手を出すことはないが、狙う輩はどうにも出来ない。そこは、自分の身は自分で守って貰う他ないな。」

未来「でも、何かいい考えはあるんだよね？」

ガルツチ「まあね、ただどんなのがいいのか悩んでるんだ。指輪かチョーカーか……。」

未来「？」

ガルツチ「実は、僕らの力を一時的に扱えるような効果を持ったアクセサリーをあげようかなって思ってるんだ。まあ、あの力はさすがに無理だ。絶望、破壊、殺戮の力は、空には似合わないからね。こういうのは、汚れ仕事の僕やフラン、こいしがやることだから。」

未来「またそうやって自分を犠牲にしようか……。」

ガルツチ「それを止めるのが、未来でしょ？」

未来「その言い方、ちょっと狡くない?」

ガルツチ「狡くないよ。だって、未来のこと好きなんだからさ。離れたくないほど、大好きだし。」

未来「……………ホントに、ズツと一緒にいてよ?」

ガルツチ「安心して、僕はずっと一緒に。死ぬときも、一緒に。」

未来「もう、そう言うところ狡いと思うんだけど。」

ガルツチ「そうか? 狡いと思つたら、如何するの?」

未来「それは勿論、君の耳を舐める。」

ガルツチ「やっぱりそうなるのね……………。でも、出来れば戻つてからにしない?」

未来「勿論そのつもりだよ。楽しみにしてね。」

ガルツチ「うん。」

t o b e c o n t i n u e d

→

第59話 魔眼の試練

—空の家 トレーニングルーム—

ガルツチ side

さてと、粗方ギフトゲームの紙が完成したけど、もう一度確認した方がいいな。ガルツチ「白夜叉、こんな感じでいいか？」

白夜叉「どれどれ？」

その内容は、こう書かれていた。

〈ギフトゲーム：直死の魔眼の試練〉

プレイヤー：門矢未来

クリア条件：ガルツチが戦ってきた敵達を倒す。

クリア方法：その敵の全滅

敗北条件：なし

クリア報酬：『直死の魔眼・破壊』の習得

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印

白夜叉「ふむ、よく出来ておるの。流石じやな。」

ガルツチ「んじやあ、後はあの機械に挿入するだけだけど、念のために確認しよう。」
そう言い、僕は中央にいる未来の方を見た。

ガルツチ「いい未来？これを挿入したら、僕らは手助けは出来ない。その先は一人で戦う必要がある。覚悟は良い？」

未来『うん、いいよ。君が戦った奴ら、どんな奴なのかは分からないけど、必ず習得してみせるからね。』

ガルツチ「よし、それじゃ行くぞ。」

未来の覚悟を確認し、僕はその機械に挿入すると同時に、僕らが戦った宿敵達が現れた。

ウインズオブデストラクション

破滅を呼ぶ風とアームストロング、宵闇霊夢、殺生院キアラ、ヘブンDIO、ブラック、マーモン、女神イリアス、シーモア等が、未来の目の前に現れた。

そういえば、こんな奴らがいたなあ……………。

空「あれが、ガルツチが戦った奴？」

ガルツチ「そう言うことだ。」

イリヤ「それにしても、随分な強敵そろいだね。」

ガルツチ「まああくまで、当時の強敵だけど……………、多分未来なら勝てると思うな。」

雷電「つていうか、奴らと戦つてたとは、驚いた。」

ガルツチ「今じゃミライつていう子と一緒にいるから、生前よりはいい人だよ。」

雷電「信じられんなあ……………」

ガルツチ「それよりほら、始まるぞ。」

さあ未来、その試練乗り越えて見せろ!!

side Change

???

ゼロノス side

時臣「……………ゼロノス様、どうやらヴォルギン殿は、彼の伝説の存在のデータを――

ゼロノス「知ってる、失敗したのだから？しかも我が弟の奴らに。」

時臣「ハッ、その通りでございます……………」

クソ、奴を逃したのは我々にとっての痛手。あの龍神空とか言う人物は、恐らく強大な力を持つてたはずだ。それを逃すと言うことは、我々の計画が大きく後退することになる……………」

時臣「どうなさいます？」

ゼロノス「いや、慌てるな。まだ他の奴もいるから、そのデータさえとれば、何とかなる。」

時臣「ふむ、そうですね……。確かに、空の能力の代わりも居るといっても、また事実ですな。」

ゼロノス「そうだ、では時臣。頼んだぞ。」

時臣「畏まりました、ゼロ様。」

ゼロノス「……………なるほど、弟よ。そうまでして邪魔をしたいというのか。我が計画さえ成功すれば、完全な世界へと生まれ変わるといふのに……………」

まあいい、所詮我が理想に理解できぬ愚かな弟だ。愛とか絆とか、そのような下らんものに縋っていれば、いつか破滅に導くというものを。

しかし、問題は英竜と呼ばれる存在。どうやら宇宙侵略をもくろんでいるそうだな。どちらにせよ、邪魔な障壁になるのは確実だ。

ならばただ一つ。あれより最もチートを持ったホムンクルスを送り込めばいいのだ。

『ガチャ』

ゼロノス「俺だ、早速だが頼みがある。試作品型のホムンクルスを、英竜が居る世界に送りこめ。ついでだから、奴とその仲間のデータもコピーし、その後は殺害でもさせろ。よいな？」

よし、これで布石は打った。フッフ、奴等を始末さえすれば、我が計画も進めることが出来る。

ゼロノス「……………さてと、紅茶でも飲も——（ズズズツ）——ブウツ!!」

なんだこれ!? マツズ!? 何なのだこれは!?

時臣「失礼しま——ゼロ様!? 如何なさいました!?!」

ゼロノス「如何なさいましたじやない!! 丁度良い、時臣。これを飲んでみる。」

時臣「紅茶ですか? 一体——（ズズズツ）——ブウツ!? ゲホッ! ゲホッ! な、何

ですかこの紅茶!?! 実に優雅ではない!!」

ゼロノス「誰だ!! 不味い紅茶を入れた奴は!!」

くそ、しかもこの紅茶。俺の嫌いなブランドものではないか!! 俺が気に入ってるのは、『アールグレイ』ただ一つだ!!

全く、誰だブランドものかつ不味い紅茶を作った阿呆は!! この俺が直々に成敗してくれる!!

（風籠「そういえば、ガルツチが飲んでた紅茶も『アールグレイ』だったな。」

士「彼奴安物が好きなのか?」

風龍「落ち着くだとか何とか。」
sideChange

—空の家 トレーニングルーム—
未来 side

BGM Fate/Extra CCC BB戦『bottom black, moon gazer』

アームストロング 「ぬおおお!! 死にやがれえええええええ!!!」
未来 「見切った!!」

『ブシャアアッ!!』

アームストロング 「ゴフツ!」

未来 「よし、そのままあの霊夢に投げつける!!」

『ブンッ!』

宵闇 「つてちよちよちよ!?! こつちに來るぎやあああああ!!!」

あ、2体同時に倒しちやった。確かに、強敵なのは確かだったけど、攻略さえ見つけば、勝てない相手じゃなかったね。

宵闇霊夢に關しては………、何あれ? ホントに強敵なの? アームストロングに押しつぶされて死ぬって、ちよつと引くんですけど………。

ガルツチ『いや、あれは間違いなく強敵なんだが……。原因は、やつぱりアームストロングに潰されたからかな?』

フラン『かつて恐怖の鬼神とも呼ばれた宵闇霊夢が、今じゃポンコツの……。ウフツ』

ガルツチ『お、おい。やめ……。フフフフ。』

滅茶苦茶笑いを堪えてる……。やつぱり分かる人には分かるって事かな?

H D I O「余所見をしていいかな? 『ザ・ワールド・オーバー——』」

未来「やらせない!!力を貸して!! 『ムーンライト・アウターヘル!!』」

僕は一時的にガルツチのスタンドを召喚させ、ヘブンD I Oのスタンドを攻撃した。すると、ヘブンD I Oのスタンドの頭が砕け散ると、ヘブンD I Oも同じように頭部がエグいぐらいに砕け、そのまま消滅した。

って、ガルツチのスタンドって、そこまでパワーあったっけ? いやまって、そういえばあのスタンドを攻撃するとき、一瞬ひび割れのマークがスタンドの頭が見えた気がする。

マーモン「このっ!!ドワーフ帝国のために、今一度死ねええええええ!!!」
未来「ッ!」

あのドワーフからは、全身にひび割れのマーク……。もしかして!

未来「『砕け』!!」

マーモン「なっ!? 何で俺のからだだが、砕け……………!?」

『ガラガラガラ……………』

砕けと言った途端、あのドワーフは落石のように砕けていき、跡形もなく消えていった。

ガルツチ『あれって、直死の魔眼とは違う魔眼!?』

フラン『しかもそれ、私のとよく似ている!!』

未来「え? 直死の魔眼じゃないの!？」

ガルツチ『恐らくそれは、『破碎の魔眼』だ! 直死と似たようなものだけど、ひび割れのマークが見えると、そこが弱点となって、触れた瞬間砕けるようになるんだ!』

未来「嘘くん。直死じゃないのかよ……………」

でも、その破碎の魔眼のお陰で他の強敵を倒し、ついにクリア。そう思ってた。

??? 「へえ、すげえな。確かに、肉体的には俺と同じだな。」

突然女性の声が聞こえ、後ろを振り向くと、そこには短刀を持った僕らしき人物が立っていた。

ガルツチ 『式!?!お前、『空の境界』に居たはずじゃ!?!』

両儀式 「ああ、予定が狂ってな。今すぐ未来つて奴に会いたくてこっちに来たんだが……。なるほど、確かに同じにして全く違う存在だな。」

未来 「え?」

両儀式「決めた、俺の力を使わせてやる。受け取りな、『直死の魔眼』をな！」
すると、僕の目に急激な痛みが来るも、すぐ引いていき、目を開けると、そこには僕らしき人物がいなかった。

両儀式『いなかっただじやなくて、お前の人格になったんだ。』
未来「え!?! 人格!?!」

両儀式『そうだよ。つて、なるほど。なんか居るかと思っても分かんなかったが、此奴のことだったんだな。』

「両儀式」『そう、やっと見えたのね。初めまして、と言うべきかしら?』
未来「だ、誰!?!」

「両儀式」『初めまして、門矢未来。私は「両儀式」、出来れば式セイバーと呼んでもらえるかしら? 彼女とかぶるとあれだから。』

両儀式『確かに、俺の名前と一緒にするのはちよつと気味が悪いな……………。』
未来「なんて言うか、これでガルツチは中の人格と会話してたんだ……………」

ガルツチ『そゆこと。まあとりあえず、試練は終了。『直死の魔眼・破壊』に加え、『破碎の魔眼』も手に入ったことだし、結果オーライかな?』

そうだね、結構疲れたなあ……………。

「両儀式」改め式セイバー『そういえば、未来つて女装するんだっけ?』

未来「女装じゃなくてこれが普段着。」

両儀式『いや、それはお前だけだぞ?』

嘘………、この体の持ち主まで言われちゃった………。

両儀式『まあ何にせよ、これからは宜しくな。未来。』

『未来に新たな能力を習得

『直死の魔眼・破壊』

魔眼と呼称される異能の中でも最上級のもの。異能の中の異能、希少品の中の希少品。

無機、有機問わず、“生きている”ものの死の要因を読み取り、干渉可能な現象として視認する能力。直死の魔眼から視た世界は“死の線”で満ちた終末の風景であり、まっとうな精神構造ではこれと向き合っただけの日常生活は難しい。魔眼の中でも最上級のものとしてされる。

未来の場合『破壊』の属性が付与していて、短刀で使わなくても、死の線を断ち、死の点を突くことが出来る。

式とは違い、右眼は赤い眼、左眼は蒼い眼というオッドアイ状態になる。

『破碎の魔眼』

直死の魔眼とよく似た力を持った魔眼。

ひび割れのマークが現れ、そこに攻撃すると砕け散り、跡形もなく消し去ってしまう能力。

此方は両眼緑色の眼に変わる。』

まあ、何にせよ。此方もよろしくね、式さん。式セイバーさん。

t o b e c o n t i n u e d
→

第60話 大宴会

—京都府のとある旅館—

ガルツチ side

えー、早速ですが結論から言いますよ………。

『どうしてこうなった?』

アザゼル 「しかしお前さん、本当に男なのか? 女装がこんなに似合ってるというのに。」

ガルツチ 「やめろ、そもそも着させたのは——って、そのアンタ!! うちの息子にナニさせようとするんだ!？」

ヤハウエ 「まあまあ、別に良いでは無いですか。宴だ宴だ。」

ガルツチ 「いや宴つつたつてなあ? つてそのアンタ、うちの嫁に変なことさせようとするな!!」

未来 「うわー、忙しそう。」

ガルツチ「まあ、あの時はホントに酔ったけどね。まさか切り傷で——」
『イヤアアアアア!!! ヤッダバアアアアアア!!! オラアアアアア!!!』

……騒がしすぎて、会話すら出来ねえ。何なのホントに……。

ガルツチ「悪い、先に抜けるよ。」

アザゼル「え？」

ガルツチ「空は確か、温泉だったよね？」

未来「うん、それが……、ああそう言うこと。」

サーゼクス「？」

ガルツチ「それじゃ。話せて良かったよ。」

そして僕は、宴の席を抜け、お風呂セットを持ち、お風呂場に向かった。

—旅館 温泉—

腰にタオルを巻き、露天風呂のところに向かうと、ゆったりとくつろいでる空がいた。
空「あれ？ガルツチさん？宴はどうしました？」

ガルツチ「途中で抜けたんだ。あまりにもカオスだったんで、抜けてきた。」

空「そ、そうだったんだ……。」

ガルツチ「まあ気にするな。」

それに、あの馬鹿騒ぎに我慢できるほど、そこまでもてないしな。特にあのカオスは、止める気失せたよ。

ガルツチ「はあ……………、いい湯だ……………」

空「……………ガルツチさん。」

ガルツチ「？」

空「あの時、俺を助けてくれてありがとうございます。」

ガルツチ「気にするな、未来の友人なら助けるのも通りだろ。僕の絶望は、誰かを救い、守るためだけにあるからな。」

空「貴方の『絶望』って、端から見たら悪人が使っているような力でしたけど……………」

ガルツチ「ハハハ、違う。でもな、光とか闇とか、希望とか絶望とか、そう言う物は結局、其奴がどのように使っていくかと言う事さ。光だって、使い方を間違えれば闇以上にヤバいことになるよ。逆に闇は、誰かを守る、誰かを助け出す為に使うなら、きつと頼もしい力にもなるかもしれない。結局は、その力をどのように使うかで決まるんだ。」

空「そっか……………」

まあ、僕は善悪二元論なんて無いし、そもそもヒーローよりダークヒーローが似合う。衛宮切嗣みたいに、9を救うために1を殺す正義の味方じゃなく、大切なものを守るた

めに世界が敵だとしても戦い続ける殺戮者。正義の味方 ある意味、僕はこちらに性に合ってる。悪

に近い中庸だが、悪人なんかじゃない。守るときは守るし、殺すときは殺す。僕の刃は、鞘すらなかった『この世の全ての刃』。でも、未来という鞘がいて、今は収まっている。

空「ガルツチさんって、未来さんと一緒に居るのは分かっていますが、その人と出会ったのって、何時頃ですか？」

ガルツチ「何時頃か。そうだな、僕が故郷の星に帰る途中、フランの様子がおかしくて、相談して聞いてみたんだ。その後には黒化したフランが襲いかかってきて、劣勢だったときに、出会ったんだ。」

空「そうだったんですね。」

ガルツチ「んで、その後は未来が居た世界で協力し合ったんだよな。それから、フラン達が乱交パーティーが始まって、どういう訳か僕と未来がやりあう羽目になったんだ。」

空「あの、おかしくないですか？男同士で子供なんて出来るはずが——」

ガルツチ「僕が女体化してやりあってたんだ。本来僕は、野郎とやりあう気はなかったけど、未来とやってたら、不思議と安心感があつたし、未来なら構わないかなって思ったんだ。」

空「そ、そう……。」

ガルツチ「今でも感謝してる。未来に会えて、ホントに良かったよ。」

空「そっか。」

ガルツチ「話変わるけど、空。」

空「？」

僕は真面目な顔をして空を見る。

ガルツチ「君の前世って、何も思い出せないんだよね？」

空「う、うん。」

ガルツチ「……………ならば、これだけは忘れないで。いずれ君は、この先君の前世を思い出すかもしれない。そうなれば、選択せざるを得ない状況に陥るかも知れない。前世と訣別するか、前世と共に今を生きるか、それは君次第だ。敵は、ヴォルギン以外にも他に居るし、君を狙う輩もいる。」

空「……………。」

ガルツチ「恐らくその頃は、僕が居るかどうかは分からない。助けようにも出来ないかも知れない。だから、僕が作ったこれをあげるよ。」

僕が取り出したのは、水色の小さな剣が付いている青色のチョーカーで、それを空の首元につけた。

空「これって、チョーカー？」

ガルツチ「うん。僕の手作りだけどね。ちなみにそのチョーカーは、僕達の力を一時的に扱えるような効果があるんだ。流石に、『混沌を司る3大魔神』の力は無理だけど。」

空「ありがとう。」

ガルツチ「いずれ次の世界に行かなきゃならないし、また全ての世界を揺るがす戦いが起ころうとしてる。その時は、君にも手伝って貰うことになるかもしれない。その時は、力を貸してくれるか？」

空「勿論です。俺を救ってくれた恩もあるし、ガルツチさんには感謝していますしね。」

ガルツチ「ありがとう、空。」

さて、いずれにせよお別れは来るだろうな。今度の世界は少し見えた。こことは違う平行世界。イリヤとなのはと呼ばれる女の子が会い、そして僕と似たようなものだが英霊達の力を使い、敵と戦う少年。そう言う光景が見えた。

ガルツチ「やはり、世界を旅するのは止められないな。出合いがあれば、別れもくる。生と死と同じように……。この旅を続ければ、きつとお爺ちゃんにも出会えるかもしれない。終わりが来るとなれば、それは『死』だろう。いや、まだ旅を続けたい。そして、戦い続けたい。永遠が許されるかぎり……。……。」

『今を生きたい』。」

空 「ガルツチさん？」

ガルツチ 「ん？」

空 「あの、どうかしました？」

ガルツチ 「いや、気にするな。」

それから、いつの間にか宴は終了し、お別れがやってきた。
空「もう行くんですね。」

未来「うん、次の世界にいかないよ。」

こいし「それじゃあね、空お兄ちゃん。」

十香「どの世界でも、元気だね。」

二亜「簪さん、我が同士よ。また会おうね。」

簪「うん！」

ガルツチ「いつの間にか同士になってるし……………」。

未来「それじゃ、行くよみんな！」

そうして、僕らは次の世界へと向かった。今度の世界は……………。

『新部署プリズマ☆イリヤ』と描かれた看板がある建物の前だった。

未来ガル「……………なにこの建物？」

イリヤ「プリズマ☆イリヤって、まさか……………」

ルビー『どうやらFate／kaleid linerプリズマ☆イリヤの平行世界
のようですね。つまり、平行世界のプリヤさん、プリエさん、美遊さんが居る世界です
ね。』

???「ほう？これは驚いた。このようなフェイカーがいるとはな。」

え？この声って……………、まさか！

???「我は貴様とは初対面だが、貴様はこの我を知っているようだな。ならば敢えて言
おう。」

『久しぶりだな、我が雑種』。

ガルツチ「英雄王ギルガメツシユ!？」

t o b e c o n t i n u e d
◇

やくびょうがみXとコラボ 狭間の世界 〈全の竜神〉

第61話 部署プリズマ☆イリヤ

—プリズマ☆イリヤ 前—

ガルツチ side

驚いた……。まさか平行世界のギルガメッシュと出会うなんて思わなかった。

って事は、ここにも英霊が——

??? 「あ、ギルガメッシュ。お帰り……。……って、何この人たがり!?」

ガルツチ 「人たがりって……。、イヤ実際多いもんなあ……。……。」

ギル 「喜べ、此奴らは異世界の客だぞ。」

??? 「異世界!？」

ガルツチ 「まあ、ぶつちやけ旅人だしな。ところで、『プリズマ☆イリヤ』って、何?

何故作品名を？」

??? 「あー、詳しくは中で話します。皆さんもどうぞ。」

—プリズマ☆イリヤ—

中に入ると、自宅と同じような広さの部屋につき、先程の人が窓のところまで座って待っていたため、僕と未来はその場に座った。フラン達はどこか別のとこに座った。

???「えつと、まずは自己紹介ですね。俺は高町総刃、このプリズマ☆イリヤの、つまりよろず屋の者です。」

ガルツチ「よろず屋だったんだ………。んじやあ今度はこつちね。僕はラーク・バスター・ガルツチ。幻影の不死鳥にして、この世の全ての刃、前世は全王神という神様の息子、虚王魔神と呼ばれてた者だ。まあ、転生者というわけでよろしく。」

未来「僕は門矢未来、通りすがりのスタンド使いだ。色んな世界を旅をしている。」

総刃「ガルツチさんと未来さんですね。お二人はどう言った———」

ガルツチ「あー、出来ればタメ口で頼む。」

総刃「分かった。んじやあガルツチと未来は、どう言う関係？」

そこ聞かあぁあ………。まあ言うけど。

ガルツチ「関係と云ったら、恋人兼愛人だな。」

『ガンッ！』

ギル「フエイカー、貴様ホモか？」

ガルツチ「なんでさ。どこぞに筋肉モリモリマッチョマンの変態と一緒にしないでく

れる？こっちは妻子も居るんだし。」

『ガンッ！』

未来「総刃さん？大丈夫？」

総刃「いやちよつと待って、恋人兼愛人？男同士なのにか？というかガルツチ、妻子いるの！？14歳なのに！？」

ガルツチ「いや、ぶつちやけ言うとな、見た目的に老人に入りそうな歳なんだけど、歳が∞になつてゐるから、とろうにも取れないし、ぶつちやけどれ位とつたのか、忘れちゃつたし。」

総刃「えええええ……………」

ガルツチ「まあ呪いだな、不老不死の呪い。」

総刃「え？不老不死って、呪いなのですか？」

ガルツチ「まあ価値観はそれぞれだが、僕は呪いだと思つてゐる。生の有り難みを感じられず、死ぬことも出来ない呪いのようなものだしな。」

総刃「そ、そうなんだ……………。でも妻子がいるって、誰ですか？」

ガルツチ「あそこに居る3人。」

『ガンッ！』

未来「何で机で頭ぶつけるの？」

総刃「3人!?重婚してるんですか!」

ガルツチ「うん。フランとこいしとイリヤ。んで子供が14人。うち二人は僕と未来の子。」

総刃「もうどこからどこまでツツコミを入れればいいのか分からない……………」

イヤ僕が言うのもなんだが、全部ツツコミ入れたらきりがいいから止めておけよ。

総刃「つて今更だけど、イリヤと結婚してるの!」

ガルツチ「うん。でも、違う世界のイリヤだぞ?」

総刃「どういう事?」

ガルツチ「平行世界のイリヤ、つまり『Fate/Stay Night Unlimited Blade Works』のイリヤで、原作ではイリヤはギルガメッシュに心臓抜かれて死亡するんだけど、その時に転生したらしくて、その時に出会ったんだ。まあなんやかんやあつて結婚して、3人目の妻になったんだ。」

総刃「そ、そうですか。俺が知ってるイリヤとは、違うのか。」

ガルツチ「そう言うこと。」

総刃「さて、それじゃあ本題に入りますが、このプリズマ☆イリヤは、いわば何でも屋なのですが、出来る範囲なら出来ます。」

出来る範囲か……………。ちよつとダメ元だけど、聞いてみるか。

ガルツチ「したかな？ 今後も必要になるだろうと思うし、因みに代償は、あらゆる全ての感情さ。」

未来「ええええ!!?じゃあ何で感情持つて——」

ガルツチ「とある世界に行つて、取り戻してきた。時間はかかったけど、思い出ししたくない。それより、何処で聞いたの!？」

総刃「確か仕事の時に少し。何でも銀行強盗が逃走中に、刀を持った人が車に乗つてた人ごと真つ二つに斬つて、奪われたお金を返していつて立ち去つたとか何とか。名前は聞かなかつたけど、その人は『憎悪』を司る者だといいました。」

ガルツチ「思いつきし星龍じゃないか!!星龍はどこに!？」

総刃「そこまでは、全く……………」

そうか、星龍はこの世界に居たのか。

居場所は分からなかつたけど、少しだけ安心した。

ガルツチ「分かつた、それだけで十分だ。」

未来「じゃあ、これから如何するの?」

ガルツチ「調査と言つたら、情報収集。つうわけでしばらくは、自力で探すしか——

『バンッ!!』

突然ドアがぶっ壊れると同時に、一人の男性が物騒な剣を持ちながら入ってきた。

総刃「失礼ですが、何かご用——」

???「貴様が聖船総刃か？」

総刃「？」

ガルツチ「此奴、まさか……………！」

???「『零の龍神』様からの命令で、貴様を捕縛しにきた。大人しくすれば、家族の命を奪わん。」

鈴美「『零の龍神』?!」

総刃「何それ？」

ガルツチ「零の龍神は、嘗て無の神を作り出した龍神とも呼ばれる存在だ。って事は、あんたがジャックの兄の手下か。」

???「ほう、『零の龍神』様を知っていると云うことは……………。なるほど手間が省けた。ついでながら貴様らも殺してやろう!!」

我が名は『^{D i s a s t e r}災厄』! 戦闘型ホムンクルス9号と呼ばせて貰おう!」

愛花「!」

ガルツチ「全く、初戦はこの男か。強敵なのは確かだが、負けるわけにはいかない! 行くよ、みんな!」

未来「ああ！」

『INFINITY RIDE』

『ANOTHER INFINITY RIDE』

未来ガル「変身!!」

『INFINITY DECADE!』

『ANOTHER INFINITY DIEND!』

鈴美「私も、変身!!」

僕と未来、そして鈴美は仮面ライダーとなり、武器を構える。油断は出来ないが、負けるわけにはいかない。

必ず、勝つ!!

t o b e c o n t i n u e d ♪

第62話 復讐と狂乱のガルツチ

—プリズマ☆イリヤ 前—

未来side

早速ですが、一言言います。まさかの敗北です。

ガルツチ「クソ!! 鍛錬を怠ったのが運の尽きだったのか……………?」

未来「しかも、何あの尋常じゃない力は？」

総刃「はあ……………、はあ……………」

災厄「フハハハハハ!! 弱い、弱すぎるぞ!! いや、俺が強すぎるからかな？」

正直、あの災厄の技が、殆ど天災人災等の災害を操っているけど、此奴は規格外過ぎる。それ以上の災害を起こしてきた……………。

災厄「まあいい、どうせここで死ぬんだ。手始めに……………この小娘から殺そうか。」

ガルツチ「ッ！イリヤ!!」

イリヤ「あ……………ぐっ……………!!」

災厄「どうだ？ 苦しいか？ 安心しろ、すぐに楽にしてやろう。しかし良い肌だ。先ず

は骨までしゃぶりついてやろうか。」

『ペロツ……………。』

あの災厄がイリヤを舐め始めた瞬間、ガルツチから何か切れる音が大きく聞こえた。まるで、何かの琴線を強く触ったかのように、先程のダメージがなかったかのように、ガルツチはすぐさま立ち上がった。

災厄「ほお？まだ立てるのか？意外と突きが浅かったのかな？」

ガルツチ「……………黙レ、造花。」

瞬間、僕の背筋が凍ってしまうほどの恐怖を感じた。まるで、死の間際に立たされていくかのような、恐怖を。総刃という人も同じだった。

そして、ガルツチの目には光が無く、むしろ今まで僅かの光を取っ払ってしまい、その瞳にあつたのは、憎悪と絶望、ただそれだけだった。

ガルツチ「貴様ハ、触レテハナラヌ領域ヲ、大キク踏ミ込ンダ。ダカラ、肉片残ラズ、殺ス！」

災厄「そのようなボロボロな貴様に、何が出来る？どう言う手を使おうが、俺の能力には勝て——」

ガルツチ「オルタナティブモード、起動。」

『Loading・Alternative, Set!』

『反転モードに移行、これよりガルッチの属性は混沌・悪に変化します。』

髪の色は黒く染まり、目には白い部分が黒く変色し、紫色の光が強く輝いていた。それだけでなく、体から紫色の刻印が張り巡らせながら光らせていた。

でも、僕は何故か分かる。これが、ガルッチの前世、本来の『虚王魔神』の姿なんだと。きっと、皆には見せたくはなかったんだと思う。

『真名：ラーク・バスター・ガルッチ・オルタナティブ（虚王魔神）

CV、内山？輝

クラス：アヴェンジャー&バーサーカー

マスター：なし

性別：男

身長：150cm

体重：45kg

属性：混沌・悪

ステータス 筋力：∞／耐久：Z／敏捷：∞／魔力：∞／幸運：A（C）／宝具：∞

クラス別スキル

復讐者：E X

恨み・怨念が貯まりやすい。特にガルツチの場合は、憎悪を最大限まで上げ、筋力と魔力を底上げする。

忘却補正：E X

時がどれほど流れようとも、彼の憎悪は決して晴れない。ただし、復讐を果たすと元に戻る。

自己回復（魔力）：E X

復讐が果たされるまでその魔力は延々と湧き続ける。最も、無限もあるガルツチには、無用なスキルではある。

狂化：E X

たのは災厄と思われる肉片が散らばっていた。

そこへ降り立つガルツチは、その肉片ごと燃やし、何もなくなったのが分かった途端、何時もの姿のガルツチに戻った。

ガルツチ「……………全く、相変わらず進歩ないよなあ。」

総刃「ガルツチ……………?」

ガルツチ「総刃、迷惑掛けちゃったね。キレたとは言え、度が過ぎた。あれはもう、あの頃の僕に戻ってしまったようなもんだしなあ……………。多分、母さんに殺された理由は、これかな……………?」

イリヤ「お兄ちゃん……………。」

ガルツチ「イリヤ、ごめん。下手すれば当たってたのに……………。」

イリヤ「ううん、お兄ちゃんだったら上手いこと当たらないようにすると信じてたよ。」

ガルツチ「そう……………か……………。」

『バタンツ!』

未来「ガルツチ!!!」

???「一体何……………って、幼い頃の私が居る!」

イリヤ「あ、プリヤちゃん……………。って大人になってる……………。」

ルビー『え!?あれがプリヤさんですか!?幼女じゃなあああい!!』

プリヤ「プリヤって何!?待って、名前もプリヤになってるし!」

ルビー(プリヤ)『いいじゃないですか。でもその前に、何ですかこの状況。』

未来「お願い、死なないで!!死んじやイヤだよ!!」

フラン「待って未来お兄ちゃん!?落ち着いて!お兄ちゃん死んでないよ!」

こいし「というか寝てるだけだから、落ち着いて!!」

???「さっきの爆音を聞いて急いで戻ったけど、何なのこれは……………」

???「私に聞かないで。理解不能だから。」

イリヤ「あ、プリエちゃんと美遊ちゃんもヤツホー!」

プリエ「つて、幼いイリヤ!?つていうかプリエちゃんつて何!?可愛いからいいけど。」

美遊「幼いイリヤ?でも雰囲気はクロに似てる。」

ギル「あれは平行世界、もとい異世界から来た者だ。しかし、彼奴の力……………正

直あれは人類悪と言っても過言ではないほどのものだった。」

総刃「人類悪!」

ガルツチ「ハハハ……………、否定は……………しないよ。」

未来「ガルツチ!?よかつた……………」

ガルツチ「勝手に殺すな、未来。」

総刃「ガルツチ、人類悪ってどう言う!？」

ガルツチ「ギルが言ったとおりそのままの意味だ。僕のクラスには、ビーストもあるんだ。しかも冠位獣。グランドビーストだが、別に滅ぼしたいか思ったことはないし、そもそも滅ぼすぐらいならデイストピアのような世界を滅ぼすさ。」

全員『それはそれでどうかと思うけど……。』

ガルツチ「それは言わないお約束。」

それにしても、ガルツチがここまで元気になるなんて。本当にすごいなあ……。。

???「ありやま、もう終わってたのか。いやまあいつか、懐かしい顔ぶれも居るし。」

4人「!!!」その声って!!「!!!」

総刃「あ、貴方は?」

僕らの目の前に現れたのは、桜の絵柄の和装を纏い、氷のオーラを纏った刀を持った青年が、ガルツチを見ていた。

っていうか、この人は一体……………。

星龍「久しぶりと言いたいが、初対面の人達もいるから自己紹介するよ。僕は蒼天星龍、またの名を憎悪の大魔神『ディテスト・シエイド・クロノス』だ。詳しい話は、僕に付いてきて、皆。」

t o b e c o n t i n u e d
↪

第63話 ガルツチの祖父との出会い

—
???

深雪 side

総刃「え？ちよつと星龍さん!?ここ何処ですか!？」

星龍「何処かつて？少なくとも、ミッドチルダではないよ。そうだな、君達が言う『英霊の座』と言うべきか。」

美遊「英霊の座!？」

え、英霊の座つて、これが!?一軒家があつて、庭園っぽい庭もあるけど、これが!？」

星龍「まあ、ちよつとした理由があつて、この場所にいるんだけどね。」

『ガラッ』

星龍「早苗、帰つたぞ。」

早苗「あ、お帰りなさい。星龍さん。つて4人とも、久しぶり!？」

フラン「早苗さん、久しぶり!？」

星龍「早苗、悪いけどガルツチを頼む。」

早苗「え!?何があつたの!？」

ガルツチ「キレて、スタミナ切れと貧血を起こした。以上。」
未来「あれで!？」

いやいや、普通に考えてあれスタミナ切れと貧血で済ませる分けないでしょ!?!
それで済ませるガルツチって何者!?!あ、虚王魔神だったわね……。つてそれでも変
やないか!?!自分おかしいと思わんか!?!つて、いつの間にか方言に戻った気がする。

星龍「……まあいいか、とりあえず皆。上がってくれ。」

そうして私達に案内した場所は、不思議と落ち着く和室のところに到着した。

ルビー『ほっほう、これは一種の固有結界的な場所ですね。』

イリヤ「分かるの?」

ルビー『こんな魔力ダダ漏れなら一目瞭然です。素人なのか、それともわざとなので
しょうか。何かと戦意喪失させるような落ち着かせる魔力を出してますし。』

ルビー（平行世界）『流石私、やっぱり分かりますか。でも、誰が出して——』
???「これはわざと魔力を放出してるんだ。んで、こういう部屋にしたのは僕だよ。」

若々しい声が聞こえた。その声の方を探すと、そこには髪の色が4色も分かれ、右か
ら順に山吹色、空色、エメラルドグリーン、緋色で、顔立ちはアラヤ君みたいに童顔、た
だ体つきについては凄く、男らしいです。うん、不思議と抱かれても良いなんて思っ
てしまうほどの、いい男です。

未来「貴方は？」

???「まあ待て。まずは座って、お茶でも飲んで、話をしよう。星龍、彼は？」

星龍「今少し休ませています。後で様子を見に行った方が良いでしょう。」

???「分かった。もう下がって。」

星龍「了解。」

うーん、でも誰なんだろう。

そう思いながら座ると、人数分のお茶が現れ、私達は手に取った。

???「さてと、まずは初めましてだな。こうして久しぶりに生者と話が出るのは何時ぶりだろうか。」

未来「死者なのですか？」

???「ううん、どっちかというと生きてる方。まあ死者扱いも当然か。」

フラン「死者扱い？あれ？どこかで聞いた気が……。」

???「まあ、まずは自己紹介だな。多分フランとこいし、イリヤも聞いたことはあるらしいがあえて言わせて貰う。」

僕は『ラーク・ブライアン・ロード』。ガルツチの祖父で、『全の竜神』と呼ばれる有翼人だ。」

えっ? ガルツチのお爺ちゃん? 滅茶苦茶若いのに!? 何でや!? どう見てもお爺ちゃんとはいえへんがな!? おかしいとちゃうんか!?

深雪「というかおじちゃん!? 何処が歳取ってんねん!? 少なくとも26歳にしか見えへんやん!!」

未来「あれ? 深雪? 何そのしゃべり方?」

本音「スノーちゃんって、実は大阪出身なのかな?」

きたいことはあるかな？」

総刃「それじゃあ聞きますが、死者扱いってどういう事ですか？」

あー、そこからか。

ロード「そうだね。多分ガルッチから聞いたと思うけど、僕は無の神との戦いで、敗れてしまい、自爆魔法で死んだと皆は思ってるだろう。」

フラン「確かに、絵本でも書かれてたわ。」

未来「でも、何で生きてるのですか？」

ロード「まあ、ワイルドドック式だね。でも、出ないようにしてたんだ。」

簪「何ですか!?!ガルッチと再会したら喜ぶと——」

ロード「いや、それこそ駄目なんだ。関係してるのは『全の竜神』だ。」

オーフィス「全の竜神と再会しないと関係が？」

ロード「うん。って言っても、ワイルドドックが答え出しちゃったから意味ないけど。実は『全の竜神』っていうのは、竜神だと思われてるけど、ちよつと違うんだ。勿論本物の竜神はいるけど、それになろうって言う人物も結構いるから、其奴らも『全の竜神』と呼ばれることが多いんだ。」

鈴美「え? 『零の龍神』みたいな一族も?」

ロード「いや、残念ながら、『零の龍神』みたいに一族は存在しない。居るのは『全の

竜神』と、それになろうと思う人だけ。」

そう、正直『全の竜神』が1体だったのは驚いた。『零の龍神』と違って、『全の竜神』は天上天下ただ1人だが、弟子募集はしてたようだ。そして、『全の竜神』になるには条件があり、その条件が『死んだ者扱い』にならなければならぬという。

ちなみに、入っちゃえば、例えバレても気にしないようだ。

未来「それじゃあ、貴方は死んでいた間は、その『全の竜神』の元で修行を？」

ロード「そう、そして晴れて皆より先に『全の竜神』になって、修行を終え、ここでのんびり隠居していたんだ。そして、君達を見ていたんだ。正直、孫の前世が無の神を生み出したのは驚いてたけどね。」

あれは驚いた。ガルツチが無の神を作ったなんて、思わなかったから。でも理由は納得した。確かに誰もが見てくれなかったら、ああなるのは仕方ないよね。

イリヤ「じゃあ、お爺ちゃん。お願いがあるけど——」

ロード「とは言え、残念ながら協力は出来ない。」

未来「何故!？」

ロード「その、自爆魔法で使った魔力が、あまりにも膨大すぎたから、まだ回復しきつてないんだ。せいぜい日常的に使える分しか使えないから、役には立てない。」

未来「そう、ですか。」

ロード「とは言え、今の君達だと『零の龍神』には勝ち目はない。先程のホームクルスだけど、あんなのは序の口だ。」

???「ロード様。お茶のお代わりを持ってたぞ。」

ロード「あ、ありがとう。レイ。」

この子はどういう訳かうちに来て、弟子にして下さいといった少女。レイ。どうやらこの子は、今ガルツチ達が戦おうとしている『零の龍神』が生み出したホームクルスの一人だが、英竜と呼ばれる子に負け、愛でさせられ、その力が入った宝珠を持って何処かに向かったら、たまたま僕が居る場所に到着し、いきなり『弟子にしてくれ!!頼む!!』って、いきなり言うからびっくりしたよ……………。

未来「君は？」

レイ「レイだ。今英竜との勝負に勝つため、ロード様の元で厳しい修行をやってる。」

未来「英竜と!？」

レイ「ん？知り合いなのか？」

フラン「うん、お兄ちゃんも英竜と出会ったことあるよ。」

レイ「なるほど……………」

ロード「慌てるな。さてと、君達も聞いたとおり、今から君達には修行をしてもらう。

レイ、教育を頼んだぞ。」

総刃「あの、俺らもですか？」

プリヤ「え？何させられるの？」

プリエ「いやまさかそんなことは——」

ロード「また襲われても遅くないように、お前達も修行してくれ。」

プリヤーズ「やっぱりかアアア!!!」

美遊「イリヤ達を守るなら、私は構わない！」

レイ「よし、皆着いてこい。」

そして、皆はレイに連れられ、地下室に向かった。

さて、ガルツチの顔でも見ようかな。

side Change

——
???

ガルツチ side

ここは……、昔見た悪夢か？今まで見なかったのに、何故今更これを？

???'「やれやれ、見るに堪えないな。この転生者は。」

ん？ってこいつ、虚王魔神の頃の僕？

ガルツチ「なんで僕の目の前に出て来るんだ？僕はあの頃のお前じゃない。」

虚王魔神「ああ、お前は俺じゃない。だが、腐っても俺はお前だ。この事実を変えられない。だから、俺がお前に出て来るのも不思議じゃないだろ？」

ガルツチ「どうだか。一応言うが、僕はお前のようなつまらん存在にはなる気はない。」

虚王魔神「よく言うな、俺は過去のお前だぞ？」

ガルツチ「だが、もうお前のような失敗をするわけにはいかない。」

虚王魔神「無理だな。」

過去の僕は嘲うかのように、声をあげていた。

虚王魔神「お前の前世が俺である限り、また失敗を冒す。永遠に、誰も守る事なんて出来ない。」

ガルツチ「……………かもな。薄々思ってるさ。だが、それはお前の失敗を引きずっていったらの話だ。」

虚王魔神「何？」

ガルツチ「確かに、あの言葉にキレ、母さんを守るためとは言え、大変な失態を犯し、殺されたのは事実だ。否定はしない。でも吹っ切れたさ。イリヤの肌を舐められ、一度狂化した時にな。」

虚王魔神「おい待て、俺の姿を狂化扱いか!？」

当たり前だろ。その頃のお前、つまらんだけじゃなく、狂信者的な存在だったんだぞ？それなら狂化あつてもおかしくないはずだ。

ガルツチ「どちらにせよ、お前は邪魔だ。この人生は僕のものだ。」

虚王魔神「ふっ、お前。俺を忘れたとは思っていないだろうな？」

ガルツチ「耐久と幸運以外無限なんだろう？確かに、今の僕は弱体化してる。だからどうした？そんな物は関係ない。もう僕は、以前のお前じゃない。消してやる！貴様は、僕なんかじゃない!!」

虚王魔神「そうか。ならば例の台詞を言うか。」

我は影……、真なる影。」

ガルッチ「ペルソナの台詞かよ。」

虚王魔神「いや、否定したらこれ言うのが常識だろ。」

ガルッチ「お前が言うか……。」

過去の僕の姿は変わり、8つの腕が生え、血に塗れ剣が刺さった大地は割れ、それぞれの場所に浮いた。なるほど、あれが僕の影。まさしく化け物そのものだな。

あれに負けたら、確実に死ぬ。これで勝てたら凄いけど、まあ足掻くとするか!!
ガルッチ「来いよ、虚王魔神は2人も要らない!僕が消してやる!!!」

t o b e c o n t i n u e d
⇨

特別編 修学旅行

旅館 寝室

『スー……。』

フレディ「おう良いじゃねえか。俺はここだ!!布団にダイビング!!」
空「じゃあ俺はここで!」

総刃「全く騒がしいなあ……。」

未来「僕はそこだ!!」

ルツチ「んじゃあ僕はここで。」

『グシャ!』

フレディ「おい総刃!テメエ踏むんじや——」

未来「よーし、飛び込むぞ!!」

フレディ「もうこの際だから、皆語ろうか。」

ルツチ「そうだね、僕初対面だし。」

ガルツチ「いや語らないで、寝ようよ。」

ルツチ「えー、駄目だよガルツチ。」

フレディ「そうそう、こんな夜は語ろうぜ。ガルツチ。」

ガルツチ「なんでさ……、僕は良いから寝かせて……。」

フレディ「つてか暑い、空。暑いから布団剥いでくれ。」

空「フレディさん、布団位自分でやってよね。」

『バサッ!』

『幼女が描かれたパンツ』ワーオ

フレディ「おいやめろよ! w w w」

空「何ですかそのパンツは! w w w w」

フレディ「良いじゃんか。」

空「このロリコン!! w w w w」

フレディ「ハハハハハハ!!」

ルッチ「ガルツチ、電気消してくれない？」

ガルツチ「兄さんが言うなら、いいよ。」

フレディ「おい皆！絶対喋るんじやあねえぞ？」

ガルツチ「んじや消すぞ、お休み。」

『カチッ』

ガルツチ「(さて、ぐっすり眠って明日に備え——)」

『ZZZZZZZZ!!』

ガルツチ「おいうるさいぞ、フレディ！」

フレディ「ムッフ。」

ガルツチ「頼む寝てくれ。」

フレディ「ムッフッフ。」

ガルツチ「マジで寝てくれよ。」

フレディ「ふう〜……………。ムフフフフフフフフフフフフフフフフフフ……………。」

総刃「何でそんなに静かに出来ないんですか？」

フレディ「フフフフフフ……………。フ←ウ↘↓ン♪→」

『ズー!!!』

ルツチ「うるさいよ。」

『カチツ』

ガルツチ「うるさいマジで。」

空「そうですねよフレディさん、眠れないじゃないですか。」

ガルツチ「ホント、うるさい！」

『バシッ!』

フレディ「いってえく……、失礼だろ！」
ガルツチ「シヤラップ！」

『バシッ！』

空「これでも食らえ!!」

『バシッ！バシッ！』

フレディ「痛え……………」。
ガルツチ「何芝居ぶっこいてんだよ。
消したら喋るんじゃねえぞ。」

『カチッ』

ガルツチ「いやマジでいい加減にしろよ、テメエ！」

フレデイ「ハハハハハハ!!」

ガルツチ「ホント、いい加減にしろよ？」

フレデイ「何だよガルツチ。」

ガルツチ「何笑い我慢してんだ？」

フレデイ「何回も起こすんじゃねえよ……。」

ガルツチ「いやそれ以前に、いびきかくなよ。五月蠅いんだから………。絶対寝ろよ？」

つて、兄さん何故笑ってるの？」

ルツチ「フフフ……。」

ガルツチ「……（――；）、絶対に寝ろよ？ホントマジで。」

『カチツ』

ガルツチ「(今度こそ——)」

空「痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!痛い!痛いよ!!」

ガルツチ「(ぬああああああ!!!)」

総刃「ホントに五月蠅いですよ。」

『カチツ』

ガルツチ「兄さん!?何してんの!?!」

空「痛い!ホントに痛いって!っていうか見える!見えちやうって!もう、ルツチさん何をしてるんですか。」ポロンツ

フレディ「ノーパン!？」

ガルツチ「いや、空のことは良いとして（意外と大きいな……。・―・。）、兄さん何してんの？」

ルツチ「ごめんごめん、興奮して眠れなかったんだ。」

未来「えええ。」

総刃「いやだからって、それはないと思いますよ?。」

ガルツチ「もう、兄さん500歳でしょ?しつかりしてよ。」

フレディ「って事は、ガルツチはフランちゃんと同じ495歳って事か。」

（ちなみに、設定上ガルツチは495歳でルツチは500歳です。）

ガルツチ「もう寝よう?。」

ルツチ「分かった分かった、寝るよ。」

ガルツチ「んじや、お休み。」

『カチッ』

ガルツチ「(流石に騒ぐことは——)」

空「痛い痛い痛い!!待って、ホントに痛いって!!」

『グキリッ!』

フレディ「グオオ!!おい総刃!?今グキッって!?ギヤアアア!!」

ガルツチ「(あーもー!) 今度は何だ!?!」

『カチッ』

ガルツチ「って、何じゃこりや!?!」

フレディ「ストップストップ総刃、それだけは——」

総刃「フンッ!」

『グキッ!』

フレディ「ガッハアアア!?!」

総刃「このままトルネード!」

フレディ「待って待って!?それはギヤアアアアアア!?!」

未来「うわー、凄いやこれ。w w w w」

空「る、ルツチさん!?これ以上はああああ……………」。

ルツチ「まだまだ、此からだよ。それ!」

空「待つて待つて!?!落ち着いて——」

ガルツチ「つて、おい!おい!!おい!?!おいちよつと!!皆?」

未来「アハハハ!!駄目だ、お腹が……………!wwwwwwwwww」

ガルツチ「おい、いい加減にしてくれ……………。もう眠たいんだけど……………」。

ルツチ「あー、体が火照つちやつた。」

ガルツチ「兄さん、それ以上はいけない。それに、明日早いよ?多分だが。」

空「でも、1番五月蠅いのつて、ガルツチさんだよね。」

ガルツチ「おい、巫山戯るなよ?次同じ台詞を言つてみる。というか次騒いだら、宝具使用しまくるからな?」

『カチッ』

ガルツチ「(もう寝たい……………、此本当に寝不足で倒れそうな気がするよ……………)」

『ギギギツ……………』

ガルツチ「……………はあ。」

『カチツ』

ガルツチ「何してるの君達？」
フレディ「え？いや、何してるって。」

総刃「寝返りです、ガルツチさん。」

未来「そうそう、寝返りだよ。」

空「寝返り、寝返り。」

ガルツチ「いや待て、何だよさっきの寝返りは!? 何だよ今の!？」

フレディ「おいガルツチ、まぶいって〜！」

ガルツチ「つて、何で兄さんは汗かいてるの?」

『バシッ!』

ルツチ「アハハハ、だつて暑いんだもん。」

ガルツチ「やれやれ……………、マジで寝かせてよね?」

『カチッ』

ガルツチ「(やばい、本気で寝ないと、ホントに——)」

『痛い痛い痛い痛い痛い!!』

総刃「未来さん!? 背骨が!」

フレディ「重い〜……………!!」

ルツチ「ま、まだですか……………?」

空「背骨! 背骨!」

ガルツチ「(がああああああああああああ……………!!)」

『バチッ!』

!!!!!!!!!!!!

未来「人間ピラミッド〜!!!」

ガルツチ「……………何してるの?」

未来「さてと、満足したし寝ようっと。」

総刃「ジャンケンに負けなければ、こんな事は……………。」

空「あーあ、てっぺんやりたかったなあ……………。」

フレディ「痛え……………、マジで背骨が折れるところだった……………。」

ルツチ「さて、寝よう寝ようっと。」

ガルツチ「……………」。

フレデイ「邪魔するなよ？ガルツチ？」

ガルツチ「……………」やれやれ。」

言峰『こうして午前0時、6人はようやく就寝に入ったのであった。』

f i n

第64話 未来達の修行

—ロードの家 地下室—

あー、久々のナレーションだ……。つと失礼、では……………。

レイと呼ばれる少女に着いていく未来達は地下に着くと、そこにはあらゆる修行用の道具や器具、色々なものが揃っていた。更には、VRルームもあるようだ。

未来「え、ここが？」

レイ「ああ、ここで日々鍛錬している。いつか英竜に勝てるようにな。」

こいし「ねえ、殆ど血が付いてるけど。」

レイ「死に物狂いでやってると、何時かは血が出る。ホントにオーバーワークじゃないかと疑いたくなるほどさ。」

???「戻ってきましたか、レイ様。」

レイ「げっ……………」

機械的な声がし、レイはガタガタ震えながら後ろを向くと、そこには女性のようなアンドロイドが立っていた。

???「全く、何処をほつつき歩いていたのですか？まだトレーニングは終わってません

よ?」

レイ「終わってるから!?!死に物狂いで必死に頑張ったから!?!」

???「ん? 其方の方々は?」

レイ「ロードの孫の関係者。妻も居れば子供、恋人友人など色々。」

???「そうですか、では自己紹介を始めます。私は2B、この修行のアンドロイドとしてやっている者です。」

未来「2B?」

簪「聞いたことのない名前ね。」

こいし「あ、多分あの人『N i e R : A u t o m a t a』の主人公よ!」

2B「その通りです。」

本音「聞いたことないタイトルだなく。」

白夜叉「ほうほう、って事は9Sも居るというのかの?」

2B「いえ、9Sは仕事中です。それよりレイ様、早速続きを——」

どうやら2Bは話を聞かないようだ。一度その内容が気になり、こいしがトレーニング内容を見ると、滅茶苦茶引いていた。

こいし「うわあ……………、確かにこれは厳しいわね。」

未来「どれど……………、いや幾ら何でもスパルタ過ぎでしょ?」

『どんなトレーニング内容なのかは、ご想像でお願いします。』

2 B 「つまりそう言うことです。それに、あなた方にも修行の内容も完成していません。」

全員 『早っ!?!』

フラン 「子供にも容赦なんてないのね……………」

2 B 「殆ど強敵に備えての修行です。」

早速ナレーションの仕事を放棄するというけど、幾ら何でもおかしくね!?!それで肝心な時に動けなかったら如何するの!?!?

2 B 「ちなみに休息は、食事と入浴、そして睡眠のみです。」

総刃 「待つて待つて、それはどうかと思うよ!?!僕仕事とか——」

2 B 「ご安心を、この世界は時空に影響していません。終われば入る前の時間に戻ることが出来ます。」

白夜叉「だとしても、いや今は良からう。それよりは、ガルッチが目を覚ましたら、修行に入るのか?」

2 B 「いえ、彼はその必要はないです。」

アラヤ「ええ!? 何ですか!」

2B「彼は、いや元々アレは普通じゃないのです。恐らく、全王神様が転生させた一人、『星空英竜』と同等、いえそれ以上の力と技量を持っています。」

リサ「それって、どういう事?」

2B「難しい質問ですね。世界を飛び回りながら修行とかしていたようですし、それ以前にアレは、間違いなく加減はしています。それに、全王神様から聞いたのですが、彼は限界突破と言いつつ、あれで10割の本気を出していないのです。」

未来「ええええええ!」

長年の付き合い出会ったフラン達ですら、驚愕を隠せていなかった。何しろガルツチには、今までの戦いで本気だった戦いが、実は手加減していたということだった。

そうなれば、ガルツチの本気とは一体どういうものなのか気になってしまった。

2B「とにかく、話はここまで。早速だけど、動きやすい服装はあっちにあるから、着替えて頂戴。それから内容を教え、始める。」

???

風龍（作者） side

一言言う。飽きた。ナレーションやらなかった内に、飽きちゃったよ。

全王神「何で飽きちゃうのかな、風ちゃんって。」

風龍「風ちゃん言うな。それにナレーションをやらなくなっちゃってしまっただけで、もうナレーションやらない方が良いんじゃないかって思ってたんだよ。」

士「いやそれはそれでどうかと思うぞ。」

東「それはそうと、ガル君の事だけど、あの子は何時まで隠すつもりなんだろ。」

風龍「……………分からん。そもそも全王神、何で息子にする際に、あれを使ってたんですか？」

全王神「あー、あれね。確かに、私の息子にするには一度肉体が必要になるの。何しろ魂はよくても肉体を持たないといけないからね。ぶっちゃけ敵だったはずの肉体を、ガルツチちゃんの魂を入れ、胎内回歸させて息子にさせるのって、普通じゃ考えられないからね。何しろあの肉体、元は『虚の龍神』だしね。」

『虚の龍神』、かつて全王神と龍神王が全面戦争をしていた最中、虚数宇宙からやってきて襲いかかった『龍神』。

二人と同等なのは驚いたが、それでも何とか勝利し、そのまま虚数宇宙にいる『虚偽の偽竜神』を倒した。全面戦争は終わってから数日、その日に宇宙ごとガルツチと出会

い、転生はなんと全王神の息子にして欲しいと頼み込んでいたのだ。

ぶつちやけみな驚いてたよ。全王神の息子になりたいだなんて、前代未聞だ。だがそれを快く受け入れた全王神も凄いなと思うよ？

そもそも虚の龍神は、『偽り』『虚無』『虚数』などの全く存在しない力を持っていて、全と零に取っては天敵でもあった。

風龍「何時かは目覚めるんだよね。」

全王神「うん、あの肉体は元々彼のもものだったけど、魂と精神が無くなってるから、ガルツチのものだよ。だから、あの能力はガルツチちゃんのもの。」

『虚の龍神』の復活は、ガルツチちゃん次第よ。」

ヴォルデモート「風龍、ここに居ましたか。」

全王神「アレ？ヴォルちゃん？どうしたの？」

ヴォルデモート「全王神様、お久しぶりうございます。」

風龍「ヴォルデモート、どうかしたのか？」

ヴォルデモート「実は、モンスターハンターの世界で——」

ええええええ!!黒の大厄災が起こっただって!!それによりモンスターと人間が激減しただど!!

ヴォルデモート「原因は7つの絆石が完全汚染されて、浄化不可能に陥り、それを発

生させたマネルガーとイチビッツは、未だに逃走中だと言うこと。」

風龍「分かった、報告ありがとう。それじゃあみんな、僕は急いで絆石をどうにかしてくる。」

士「おう、頑張れよ。」

s i d e C h a n g e

???

ガルツチ s i d e

ガルツチ「ハア……………、ハア……………。」

虚王魔神「何故だ？何故俺に負けると分かってるのに、立ち上がろうとするんだ!?」
 何故かって？そんなの決まってる。

ガルツチ「まだ………、終わりたいくないからだ。たかが、腕一本引き千切られようとも、心臓を抉られようとも、その先に絶望しか無くっても！僕は………、俺は!!まだ諦めたくない！負けようが、勝とうが関係ない!!お前という影を消すことが出来れば、十分だ!!!」

虚王魔神「巫山戯た戯れ言を!!これで死ぬえええ!!」

ガルツチ「諦めるかアアアアアアアア!!」
ガイスト・カウティング・クレイター
 !!「海神の水!!」

虚王魔神「何ッ!?!」

僕の真下に現れる影が過去の僕に襲いかかる。丸まったところはすぐに大爆発を起こし、宙に浮いてた大地が砕け散る。

虚王魔神「馬鹿な!?その力は、『虚数』の力では使えないはず!!何故貴様が!?!」

ガルツチ「こんな物じゃない!!零は虚となり、偽を生み出し、影となる!!」
ファンタム・フォールス・スラッシュ
 『幻影虚偽斬』!」

腕を振るうと同時に、過去の僕の腕は吹っ飛び、その後ろの大地が裂けていった。

虚王魔神「馬鹿な!?まさか、まさか目覚めるといふのか!?!」

ガルツチ「僕は偽り、虚無、幻影、存在無き者なり。されど、我が意思は本物なり!!」

虚王魔神「まずい、全ての力を使っても!!!」

ガルツチ「我に眠る内なる龍神よ! 目覚めよ!!!」 『フォールス・ゴッドマスタードラゴンモード』!!!

これは僕の無意識なのか分からなかったが、それを唱えた途端、光に包まれていき、姿が変化した。

両腕は絶望の魔神の腕の見た目ではあったが、少しだけスマートで、鱗の色は白く、爪の色は青く輝いていた。服装はアンリマユのような姿ではあったが、紋章は青く光っていて、布の部分は白く、そして翼はいつも以上に神々しく光っていた。

虚王魔神「貴様、何者なんだ!? 何故滅んだはずの龍神の姿になれるのだ!」

ガルツチ「さあな。だが、おかしいよな? 何故そんなことで驚くんのだ? 影の僕と言えど、これを知らないなんて、おかしいよな? そうだろ? 僕の影を偽り、僕を消させ、僕の肉体を乗っ取ろうと企んだ、『偽物』の起源を使うホムンクルスさん?」

虚王魔神(「?」)「なっ!?! 何を言う!?! 俺はお前の——」

ガルツチ「僕はこれを使うまでは知らなかったが、お前もまた知らなかった。過去の虚王魔神なら、自分の肉体はどんなものなのか知っていたはずだ。」

虚王魔神(「?」)「……………よもや、贋作の貴様に、偽物に見破られるとは。まあいい、見破られるのは想定外だったが、気が変わった。」

貴様諸共消してやろうではないか!!」

ガルツチ「はあ、正直未来達がいたから、本気とか出さなかつたけど、僕とお前だけしかない世界なら、好都合だ。」

『久方ぶりに、本気で殺してやる』。来い、名も無きホムンクルスよ。遊んでやるから、掛かってくるがいい。」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
→

第65話 虚の龍神と全の竜神

—
???

ガルツチ side

何時からだったのだろうか、本気でこの力を扱ったのは。元々この力は、世界を及ぼしてしまふほどの力を持っていて、使わないように極力気を付けていた気がする。

使わなくなつたのは、多分母さんに殺されて以降かな？

虚王魔神（？）『「八つ裂き光輪」！』

ガルツチ「無駄だ。”消える”。」

何処かのウルトラマンの能力なのか、偽物は手にギザギザの鋭い刃のついた輪を生み出して、僕に投げつけてくるも、たった一言で消滅した。

ガルツチ「今度はこつちだ！」

虚王魔神（？）「なっ!?早っ——」

『ドゴッ!!』

虚王魔神（？）「ゴハッ!!」

フエイク「ああ、元々は我のものだった。だが、今はお前のだな。」

ガルツチ「何故この力を？」

フエイク「何を言う、お前は全王神の息子になりたいと言ったのだろうか？だからこそ、全王神は快く賛成し、我の体を使わせたのだ。『虚』の力を持った、全王神の息子としてな。しかし、まさかこれを使わずに戦ってたとは思わなかったな。」

ガルツチ「フエイク、貴方も知っているでしょ？この力は、未知数であり、下手すれば仲間も巻き込まれる程の力もあると。」

フエイク「なるほど、確かに『虚』は、『全』と『零』と同じぐらい未知数だ。下手すれば仲間も当たるというのも、通りかもしれないな。あの頃とは、変わったのだな。ガルツチ。」

ガルツチ「かもな。でも僕は、例え変わろうが、『虚王魔神』にして『■■■■』ということには、変わらないさ。」

フエイク「そうか、やはりお前は……………存在そのものが、変わり者だな。」
変わり者……………か。

まあ確かに、滅茶苦茶変わり者なんだけどな。

フエイク「ガルツチ、お前は今まで他人や自分の偽の力を使って、戦ってきたけど、そろそろ自分の本当の力『虚』の力を解放するべきじゃないか？」

ガルツチ「え？でも——」

フェイク「いいか、相手は『零の龍神』。今までの力を使つてたら、きつと行き詰まるだろう。それに対抗出来るのは、『全』だけじゃない。『虚』だ。今解放しなくては、仲間を守る事はできないだろう。」

ガルツチ「……………フェイク、その『虚』で守る事は出来るのか？」

フェイク「ああ、お前は今まで『絶望』や『憎悪』を使つてるけど、殆ど守れてるじゃないか。ならば『虚』も守れる。」

ガルツチ「……………どんな力でもか？」

フェイク「何を今更、お前は今まで私欲のために力や技、心を使ったことがあるか？いやあつたとしても、ほとんどは誰かを守るためだけに使つてたはずだ。違うか？」

ガルツチ「……………やれやれ、そう言われたら、否定できないじゃないか。分かつたよ、フェイク。使つてやる、お前が言う……………『虚』をな。」

フェイク「……………安心した、さて我は消えるでしょう。」
え？消えるって、まさか……………。

フェイク「元々これは、お前のだからな。久方ぶりに顔を出せたが、本当にお前は面白いものだ。だが、忘れるな。我は何時でも、お前と共にいる。それを忘れるな。」

それを言い残し、さっさと姿を消し、まるでフェイクが僕と共に生きているかのよう

な心地良さが感じた。

だが、それと同時にもう二度と姿を現さないと思った。何故なら、本当の『虚の龍神』であるフェイクは、もうこの世に存在していないからだ。

つまり、此より僕は、『虚王魔神』と同時に『虚の龍神』の後継者という事になったのだ。いずれにせよ、守るべきもののためなら、とことん利用してやろう。

そう思いながら、視界が明るくなった。

—ロードの家—

目を覚ますと、そこには何故か目隠しをした少年らしき人物がいた。いや、誰この人？

??? 「あ、やっと目が覚めたのですね。」

ガルツチ 「いや、その前に誰？」

??? 「失礼、僕は『9S』。気軽にナインズと呼んでください。」

ガルツチ 「ならナインズ、僕はどれだけ眠ってた？」

ナインズ 「大体2週間ぐらいだと思います。」

あー、はいはい2週間………はあ!?

ガルツチ「2週間!?僕そんなに寝てたのか!」

ナインズ「ええ、ぐっすりと眠ってました。」

おいおい、あのホムンクルス………時間感覚すらゆがめるんかよ!?そんなに時間かかったって言うのか!?いやそれ以前に、そこまで眠りが深かったのか!?

しかも何だよオルタナティブモードって!?属性すら変わっちゃったよ!?完全に闇堕ちじゃねえか!!いやそれ以前に堕ちてるな。

ナインズ「まあ、いいとして。そろそろロードさんが来ますので、入室の許可を出して良い——」

ガルツチ「是非、会わせて下さい!!」

ナインズ「あ、はい。(そんなに会いたかったんだね……)ロードさん、どうぞ。」

多分歳の爺さんだろうし、流石に歳は——

ロード「起きたか、ガルツチ。」

僕と同じぐらい若かったです本当にありがとうございます。結局爺さんもかよ………。

ロード「ん?意外か、僕がこんなに若かったのは。」

ガルツチ「うん、歳取って老人になってたんかと思つた。」

ロード「ハハハ、確かにね。まあでも、会えて嬉しいよ。我が孫よ。」

ガルツチ「僕もだよ、爺さん。どうして、兄さんや姉さんのところに会いに来なかったの？」

ロード「そうだな、簡単に言えば……………。僕は『全の竜神』の規律で、会うことを許されなかったんだ。だから、会うことはできなかった。」

ガルツチ「え？爺さん、『全の竜神』なの!？」

ロード「ああ、そうだ。でも、君の期待はできないんだ。」

期待出来ない？

ガルツチ「如何して? 『全の竜神』なのに、何で戦え……………。爺さん、まさか……………」

ロード「うん、あの時自爆魔法を使って、何とか生きることが出来たけど、魔力が結構持つてかれたからね。日常生活に使うだけで精一杯さ。だから、すまないが協力は出来ない。」

魔力不足、確かにお爺ちゃんが使った自爆魔法『グランド・ゼロ』は『無』と『零』の力を融合した危険な魔法とも呼ばれていて、足りない分は生命力も使ってしまうため、実質自爆魔法を覚えようと必死に頑張る大魔術師も居るのは事実だ。

だが、まさか魔力だけで自爆魔法を使ったなんて、爺さんの魔力はそれだけ足りて

たつて事になるんだな。

ロード「でも、協力してくれる『全の竜神』は一人いるぞ。」

ガルツチ「マジで!？」

ロード「うん、ただ彼に出会うのは結構骨が折れるぞ。連絡はしているとは言え、何時でもその世界に留まってる訳ではないからな。」

ガルツチ「ん？デイルーラーの士みたいなの？」

ロード「そうだけど、士じゃない。というかあれは完璧過ぎるとは言え、『全の竜神』には入らない。」

ガルツチ「んじゃあ、一体……………」

ロード「なら、これなら聞いたことはあるか？

仮面ライダー達にとって、原点にして頂点の仮面ライダーを。」

ん？原点にして頂点？その仮面ライダーって………つてハア!?

ガルツチ「まさか、伝説の仮面ライダー1号と呼ばれてる『本郷猛』の事か!？」

ロード「そうだ、彼は全王神の部下であり、『導き手』と呼ばれてる人物だ。彼なら、僕以上に協力してくれるはずだ。」

本郷猛、まさか彼が『全の竜神』になってるなんて、思っても見なかった……。でも、世界を飛び回ってるのか。確かに、これは結構やばいな。

ロード「まあ一度、『地獄大師』から聞いたが、猛はゼロノスが放ったホムンクルスを

倒すために、あらゆる世界を飛び回っていると聞いたことはあるな。」

ぬおおおい!? 何でシヨツカーの首領と知り合いなの!? つていうか何時知り合ったの爺さん!?

ロード「まあ、『地獄大師』は今、ゼロノスとの戦争に備えて、英竜に使者を送ってるだとか。」

ガルツチ「シヨツカーですら英竜の力を求めるつて事は、それだけ脅威だつて事か。」
ロード「ゼロノスは文字通り、やばい存在なのは確かだ。実際、転生者を虎視眈々と狙つては奪い殺すし、他の世界を侵略し、男女平等に皆殺しもしてるし、奴隷として無理矢理働かせてるといふのもあるからな。」

ガルツチ「改めて考えると、随分度し難い奴だな……………」

ロード「それと、ファングから聞いた話だと、僕らの故郷星の『End of The e World』は、英竜達との同盟を交わしたそうぞ。」

え? 何それ初耳なんだけど!? 兄さん、マジで何をやってるの!?

ロード「まあ、英竜となら信頼出来ると思つて、お互いの技術等を教え合つたりしているからな。」

ガルツチ「兄さんえ……………」

ロード「それと、ガルツチは知らないだろうが、今では『End of The W

orld』だけでなく、他の星々の代表者を集めて、『星際連合』というのを作り出したというのもあるが。」

ガルツチ「マジで!?!んじゃあ、他の星々も……………」。

ロード「全部の星々は、英竜の侵略を全面協力することになった。」

ガルツチ「なるほど、僕らが居なくなってる間、こんな事が起こっていたとはな。」

ロード「いずれにせよ、今期待されてるのは、英竜と未来、そしてガルツチ。君達なんだ。」

ガルツチ「期待は勘弁なんだけど……………つてちよつと待て、そいや未来達は?」

ナインズ「未来達でしたら、2Bのスパルタトレーニングをやっているといますよ。」

ガルツチ「はあああああああああ?!?!?!?!?!」
 ナインズ「ちよ、ガルツチさん?!?!?!?!?!」
 ガルツチ「おいナインズ、爺さん!!ホントか?!今僕の息子と娘、挙げ句の果てには妻
 達と恋人達をスパルタトレーニングをさせているというのか?!」
 ロード「え、いや……………その……………」

ナインズ「あの、ガルツチさん落ち着い——」
 ガルツチ「落ち着けど!?こんなので落ち着いてられるかってんだ!!寝ている間、
 きつとみんな苦しい思いをしているに違いない!!クソツ、僕がちゃんとしていれば——」

第66話 ホムンクルスの襲撃

—ロードの家—

未来 side

うん、正直あそこまでスパルタだったとは思わなかった。お蔭で滅茶苦茶疲れたけど、その分なんだか強くなった気がする。

力だけじゃ、如何することも出来ないか。確かに、ここに来る前までは、ほとんどが転生特典である『イフ』を駆使して戦いながら、色々な人達の力を使ってたけど、それでもあの土に勝てなかった。

でも、勝てなかった理由が、ここ2週間鍛えられて分かった。技術が足りなかった。ガルツチは、その技術を隠して戦っていたらしいけど、如何してそこまで隠したかったのか。

早速聞いてみた。

未来「ガルツチ、聞いても良いかな？」

ガルツチ「？」

未来「2Bから聞いたけど、『英竜』と同等、またはそれ以上の力と技量を持つてるっ

て言ってたけど、どういう事？」

白夜叉「そういえば、私も聞きたかったところじゃ。如何なんじゃ？」

ガルツチ「あー、そう言うことね。多分それは、虚王魔神の頃の肉体と関係してるんだ。」

フラン「肉体？」

アラヤ「母さんの肉体と？」

ガルツチ「うん。多分皆は、『全の竜神』と『零の龍神』は知っているだろうけど、実はもう一つ居るんだ。」

もう一つ？でも全と零しか知らな……………あ！

未来「待ってガルツチ！そのもう一つって……………」

ガルツチ『虚の龍神』、存在するはずも無い、ラジエル囁告篇帙にもベルゼバブ神蝕篇帙にも載っていない龍神だ。」

本音「ふえ？でも『虚の龍神』なんてどこに——」

ガルツチ「居るじゃん、目の前に。」

目の前について、ガルツチしかないけど？

ガルツチ「おーい、皆何処見てる。」

簪「いや、そんなこと言われても。」

如何することも出来なかつたんだ。」

レティシア「何故肉体を？ 憑依すれば、それで——」

ガルツチ「いやいや、全王神の息子、つまりその肉体を胎内回歸させて、その中に憑依して初めて全王神の子供になるんだ。ただ問題が、それに耐えられる肉体——」

数分後

ガルツチ「——というわけで、虚王魔神の頃の肉体は、『虚の龍神』の肉体を使つて現在に至る。」

未来「（。 ㇿ。 ）ポカーン」

リサ「ガルツチさん、とことん規格外に……………」

アラヤ「母さんの規格外が、レベルアップした。」

ガルツチ「アラヤ、それは傷付くからやめて……………。 自覚してるから。」

未来「自覚してたんだ。」

ガルツチ「まあ、本来転生したら、その肉体は消えるんだけど、どうやらそのままに

なってるらしいんだ。転生しても、この肉体さ。」

未来「……………もしかしたら、ガルツチの転生特典って、それだったりして。」
ガルツチ『虚の龍神』の肉体が?」

未来「うん。」

というかそれ以外有り得ないよ。

プリヤ「つていうか、そろそろここから出よう? 流石に長居は出来ないよ。」

プリエ「それに、なんだか嫌な予感がする……………」。

ガルツチ「嫌な予感?」

『Prrrrr, prrrr.』

『ソウバ、クロノから連絡だ。しかも緊急の。』

総刃「繋げて。」

『ピッ!』

『ソウバ! イリヤ! クロエ!! 緊急事態だ!!』

総刃「何かあったのですか?」

『謎のホームクルスの軍勢が、我々の街に襲撃している!!』

なんだって!? 僕達は立ち上がると同時に、ガルツチは総刃が持つてる機械を取り、話し掛けた。

ガルツチ「そのホムンクルスの人数は？」

『ん？お前は？』

ガルツチ「話と説明は後で、それよりホムンクルスの数を!!後住民の避難は!？」

『わ、分かった。まずホムンクルスの数は、10万人。住民の避難は、まだ最中だ。そういうえば、ゼロノス様が何とかって、言ってたような——』

ガルツチ「ゼロノス!?!クソツ、奴か!!今からそちらの街に戻ります!それまでに、住民の避難を!そして、出来るだけ食い止めてくれ!!」

『いや待て、何故見ず知らずのお前が——』

ガルツチ「つべこべ言うな!!!急いで避難場所に移動させろ!!!」

俺らがそつちに来るまで、極限まで耐えるんだ!!!」

『イエ……………、イエツサー——!!!』

『プツツ……………。』

うわー、容赦ないなあ……………。

総刃「あの、一応言うけど、クロノは僕らの上司なんだけど……………。よく怒鳴ったね。」

ガルツチ「うん、悪いとは思ってるけど、時間がない以上、急いで戻らないと。」

星龍「じゃあ、急いで戻ろう。入ってから10秒後のところに戻すから、急いで救い

に行つてね。」

レイ「私も行つて良いか？ロード様の恩返しをしたい。」

星龍「分かった。」

愛花「……………レイちゃん。」

レイ「何だ？愛花。」

愛花「怖く……………ないの？」

レイ「……………同じホムンクルスを殺すのが怖くないと言えば、嘘になるが。だが、戦うしかない。愛花も覚悟を決めろ。私と同じ、ホムンクルスだろ？」

愛花「……………うん。」

僕達は急いでこの場所から出て行き、ミッドチルダへと戻つた。

sideChange

—ミッドチルダ—

ガルツチside

イリヤ「何これ!？」

プリヤ「殆どの建物が燃えてる……………!!」

オイオイオイオイ、これじゃあ冬木市で起こった出来事と一緒にじゃないか!!

総刃「如何する？」

ガルツチ「総刃達は、他の住民の避難を!!僕達はホムンクルスの軍勢を全滅させる!!」

総刃「分かった。厳しい修行で覚えたこれを使ってみるか!汝理を破りし者!然れ

ど、汝全てを救う者!!夢幻交差!!『ラーク・マスター・ルツチ』!!」

つて、総刃が兄さんが着ている服装に変わっちゃったんだけど!?

??? 「なるほど、もう戻ったのか。」

総刃「なっ!?お前は……………!!」

??? 「久しいな、総刃。地獄の底から帰ってきたぞ。」

ガルツチ「……………何者だ?ゼロノスの配下か?」

??? 「ほう?誰に向かってその口を開いてるんだ?」

ガルツチ「質問を質問で返すな!疑問文は疑問文で答えろと、親にでも教えられたのか?僕是谁なのかを聞いている、下郎。」

??? 「ふっ、うるさいゴミめ。まあいい。俺はダークネス・エンデ、総刃に殺されるも、

ゼロノス様が蘇らせ、今やそのお方の配下の者だ。」

未来「如何する、ガルツチ。」

エンデ「しかし、驚いたな。まさか0号と1号がここにいるとは。しかも、のうのと裏切ってるではないか？」

まあ、裏切り者は………ここで———」

『ズダンッ!』

エンデ「なっ?!?まだ喋ってるのに、妨害するか!？」

ガルツチ「本音、簪、アラヤ、鳳凰、リサ!!!愛花とレイを!!!」

アラヤ「分かった!!!」

5人は愛花とレイを連れて、ホムンクルスがいる場所に向かった。

エンデ「ちっ、邪魔者が………!まあいい、どちらにせよ貴様らは死———」

ガルツチ「白夜叉とレティシア、鈴美、フラン、こいし、イリヤは、プリヤ達と一緒に救助に!!」

フラン「分かった!無理しないでね、お兄ちゃん!!」

エンデ「………もういいか？」

総刃「君って、人の話を聞かないタイプなのかな？」

ガルツチ「いやだって、こんな状況に追い込まれてたら、誰だって聞かないだろ？」

未来「多分、ガルツチだけだと思うよ?」

『繋I amがりは鍵the boneで出来of myている。』

ガルツチ 『I am the bone of my blade.』

感じる。隣には総刃なのに、兄さんと一緒にいるかのような感じがする。

総刃 『巡bondsり合う運命is my Destiny, and I fightに、輝ける心is my heartの光。』

ガルツ

『shadow is my body, and phantom is blood.』

総刃 『幾度の世界を飛び回りて絆を繋ぐ。』

ガルツ

『I have created over a thousand blades.』

目の前の光景は、僕が生み出す剣と兄さんが作り出したキーブレードが草原に刺さつ

ているのが見える。

総刃 『ただ一度の絆を断つことなく。』

ガルツチ 『Unknown to Evil,』

総刃 『友を守るために戦う。』

ガルツチ 『No knowledge to justice.』

空には太陽と月が重なり合い、晴天の昼と星空の夜の混合した空へと作り出す。

ガルツチ 『Unaware of darkness,

ただ一つの光を持つことなし。』

総刃 『担い手はここに独り。』

ガ
ルツチ 『His person has astray,

永遠の苦しみを背負い込む。』

総刃 『巡り巡る繋がりで、心を生む。』

ガルツチ 『Yet, that suffering also unleashes,

Crawl over the ground Empty Skyline,

次元的な超次元の飛行。』

future dimension.』

未来「凄い、2人の固有結界が、融合していく………!」

総刃 『ならば、その繋がり。』

ガルツチ 『I have no regrets.』

総刃 『運命の歯車へと変わる。』

ガルツチ 『This is the only path.』

そして仕上げに、1本の大桜と、空から降る羽根が現れた。

総刃「『^{My}この^{Whole}の^{Life}繋がり^{was}は、』!!」
 ガルツチ「『So a s I p r a y,』………。』」

総

ガ

ル

「『永速unlimitedを繋ぐ絆keybladeで出来ていた

(UNLIMITED DIMENSION WORKS)!!
 そして、唱え終わると同時に、その光景には、半分が兄さんでもう半分が僕の固有結界が別たれていた。

エンデ「くっ、何とか耐えられ……………つてなんだここは?!

ガルツチ「驚く事じゃない。だが、ここなら誰も邪魔する者はいないだろう。エンデ、貴様はどうも一足遅かったようだな。もう少し早ければ、僕を殺せたというのに、そのチャンス逃した。」

エンデ「何が言いたい?」

ガルツチ「何、今のお前は、僕にとっては敵じゃないって事だ。まあ、遊んでやるよ。僕と、未来と、総刃の3人でな!!」

未来「行くよ、総刃。ガルツチ。」

『FINAL INFINITY RIDE <PERFECT INFINITY
 DECADE>!!』

さて、行きますかね!!

ガルツチ「覚悟は良いか？」

3人「「「僕（俺）達は出来ている!!!」」」

エンデ「はっ、思い上がったな？ 貴様ら。」

t o b e c o n t i n u e d ↵

第67話 夢現に続く希望の光

—次元を超える無限の刃製と無限の鍵製—

ガルツチ side

『無限の剣製』、元を辿ればエミヤシロウが生み出した固有結界に過ぎなかった。けど、今更だがこの世界を作り替えたのは、大昔何処かの大図書館で読んでた時だっけ？ その時に目に止まったのは、『一時的に心像世界を作り替える魔法の書』。その時だっけ？でも、それを作り出すには詠唱があった。

詠唱の種類は多かったが、それによつて心像世界は違っていた。しかも、自分の深層心理が変われば変わるほど、心像世界も変わっていった。それと同時に、僕は詠唱を変えた。

ガルツチ「悪夢再現『無限の剣製と幻影の世界』!!」

エンデ「何!?!」

最初は『悪夢』。両親に裏切られ、憎悪と絶望、そして喪失が作り出した最初の固有結界。血に塗れた武器達が、エンデに向かって襲いかかってきた。

エンデ「だが、所詮は贗作!この俺の敵では——」

ガルツチ「僕の贗作を舐めるなよ？此奴は………『対真作宝具』とも呼ばれるぐ
らいの贗作宝具だからな。」剣よ、奴の動きを停める”。

血塗れの剣はエンデに絡み付き、身動きが取れない状態となり、どれだけ暴れてもビ
クともしなかった。

未来「開眼『破碎の魔眼』！能力粉碎!!」

エンデ「なっ!?」

未来には見えるマークに向かって殴ると、何かの破片が飛び散った。つと同時に、剣
は消滅した。

エンデ「つて思ったが、拍子抜けか。今度は此方から………あれ？能力が出ない
!？」

未来「君の能力を粉碎させて貰った。もう君には、能力を持たないただのホームクル
スだ。」

エンデ「だ、だが!!まだ終わりじゃ——」

ガルツチ「させるか！闇の再現『闇夜の無限の剣製と幻影の世界』!!」

次に『絶望』。一度は希望の光を射し、太陽を崇めることが出来たが、僕には眩しすぎ
た。だから決意した。二度と希望の太陽が見られなくて良い。希望の太陽は兄さん、な
らば僕は明けない絶望の月となり、希望を守る絶望となった。

どれだけの苦痛を与えても構わない、ただみんなの幸せを守れたら良い。そんな固有結界。

どこからともなく現れた闇の月が、閃光を放ち、エンデにぶつかつた。

エンデ「あ……………！ガハッ!?」

総刃「星光の絆の鍵よ、力を!! 『祝福されし希望のお守り』!!」

総刃が振り下ろしたキープレードは、かつて兄さんが持っていた『約束のお守り』とよく似たキープレードだった。振り下ろしたと同時に、眩しい程の光の斬撃が走り、闇の閃光を斬り裂き、ついでにエンデに深傷を負わせた。

ガルツチ「能力を封じられ、致命傷とも言われるほどの傷を負つてるといふのに、まだまだ立ち上がるか？ 最早虫の息だというのに。」

エンデ「……………だ、ま……………れ!!!」

ガルツチ「次で終わらせるぞ。未来、空とフレディを召喚して。」

未来「分かつた。」

『FREDDIE KRUGER! TATSUGAMI SORA! SUMMON!』

未来の隣には、フレディと空が現れ、それぞれの武器を持っていた。フレディはガシャコンブレイカーのブレードモードとガシャコンキースラッシュャーを、空は神龍殺しと秩序の庭園を両手に持っていたのだ。

フレディ「また召喚されたか。しかも今回は、俺の好きな斬撃武器のおまけ付きか。」
空「そういえば、其方は？」

総刃「あ、俺は総刃です。」

空「総刃だね、宜しく。」

未来「さて、エンデ。」

ガルツチ「蘇って早々悪いが、ここでくたばって貰うぞ。」

そして、この『次元を超える無限の刃製』は、絶望でも悪夢でもない。ならば何か？
それは『幸せ』。満たされることのない苦しみの末に、漸く見つけた幸せ。あの時未来が
止めてくれた事で、今まで血に染まった草原は消えゆき、代わりに地面から溢れ出てく
る光の球、空には無数の星々と青い月が佇んでいた。

絆を繋げる為に戦い続け、大切なものを守るために、この幸せと共に生きる。そんな
固有結界。

ガルツチ「エルム町の悪夢男、^鹿世界を救いし大英雄、^聖ミッドチルダの英雄、^船
無限の^門世界の破壊者、そして……、^{ライク・バスター・ガルツチ}この世の全ての刃。今ここに剣と共に、次元を
超える絆を繋ぐ!!」

『FINAL ANOTHER INFINITY ATTACK BONDS FO
AM RIDE……………』

総刃「先ずは俺から!! 『絶望を断ちし希望の斬撃』!!」

総刃は兄さんが持つ祝福されし希望のお守りで振り下ろし、眩しい程の斬撃が飛んだ。

空「次は俺だ、バランスブレイカー 禁手! クロスバスター!!」

空は総刃が出した斬撃よりも早く走り出し、素早くエンデを斬った。

フレデイ「さあ、地獄を楽しみな!!」

フレデイはまるで今までの鬱憤を晴らすかのように、滅多斬りしていた。

未来「いつけえええええええ!!」

未来は上空へ跳び上がり、エリデに向けてライダーキックをお見舞いしようとした。

そこには、デイケイドの模様と、その上に『∞』が描かれたカードが現れた。

そのままエンデの胸部に直撃し、風穴が空いた。最後は、僕だけ。

ガルツチ「真偽、無欠にして盤石!」

先ず僕が投げたのは、黒い翼のキープレードと白い翼のキープレード。2本から残光が見え、エンデを斬る。

ガルツチ「力、次元を穿つ!」

お次に、エミヤシロウが使ってる干将・莫耶を投影し、同じように投げつける。

ガルツチ「刃、海を裂く!」

今度はエクスカリバーとダインスレイフを投影し、近付けて斬りつけ、ガルツチ「絆、時を越えて!!」

瞬時に次々の聖剣と魔剣を投影し、それを用いてどんどん斬っていく。そして、総刃が放った斬撃が来ると同時に離れ、すぐさま生命の樹セフィロトソードの剣と邪悪の樹クリフォトソードの剣を取り出し、英霊達のカードとスペルカードを挿入していった。

ケテル『全宝具使用可能!』

バチカル『我が主、奴にトドメを!!』

僕はすぐさま飛び上がり、何時でも斬り掛かる準備をした。後ろには、先程出会った『虚の龍神』フェイクの姿と『零の龍神』の龍の姿、そして『全の竜神』のドラゴンの姿がいた。

さあ、全よ! 零よ! 虚よ! 無よ! 絆よ! 僕に力を貸してくれ!!!!

ガルツチ「我ら、共に全てを駆け抜けけん!!
オール・ゼロ・イマジナリー・ナッシング
 『全 零 虚 無 ・ 絆 翼 八 連』
バンド・オブ・オーバーハンス
 !!!!!
 『ズサツ!』

生命の樹の剣からは白く輝く虹色の斬撃を、邪悪の樹の剣からは黒くどんよりとした虹色の斬撃を交差するかのようにはり裂き、エンデを殺した。いや、正しくは、偽者のエンデだ。

本物は、おそらく何処かの世界へ行っているはずだから……………。

ガルツチ「……………僕は偽り。然れど、この幸せと思い、そして意志は真なり。」
 僕は無意識に、その言葉を出し、そのまま空を見上げた。眩しい程に希望が満ち溢れ

た太陽と、煌めくように青く光る月。

偽りでもいい、此が夢でも良い、其れが僕にとっての唯一の幸せだというのならば、気にしたりしない。

t o b e c o n t i n u e d
◇

第68話 次の世界へ

—ミッドチルダ—

ガルツチ side

全王神 「——やって来たのさく♪」

ガルツチ 「シヤラップ。」 ガツンツ!

全王神 「アベシツ!」

未来 「ガルツチ、肉親にも関わらず殴るって、これ如何に。」

全王神 「うー、英竜ちゃんは殴らなかつたのに……。」

いや一度何で殴られたのか想像しろよな? いきなりやって来て、『——やって来たのさく♪』なんて来たら、大体殴るでしょ。

エ? 僕ダケ? チョット何言ツテルカ分カンナイ。

簪 「えーつと、此がガルツチの母親の全王神様?」

鈴美 「なんだか、幼くない?」

全王神 「えへへ、気にしちやダメより、ダメダメエ。アデッ!」 ゴツンツ

ガルツチ 「すんません、うちの母さんが……。」

フラン「なんだか、どっちが親なのか分かんなくなっちゃうよね……………」

こいイリ「うんうん。(・ー・)(・ー)」

あ、因みにホムンクルスの件については、既に解決済み。レイ達が全滅させました。街については、復興完了しています。

アラヤ「此が、母さんの……………。うー、もう分かんなくなってきたやうよ。」

ガルツチ「んで、母さん何でこっちに来たんだ？観測していたんじゃないのか？」

全王神「あー、その事ね。ガルツチちゃんに渡す物があつてね。」

ガルツチ「渡す物？」

一体なんだろうと思ひながら待っていると、そこにはどの仮面ライダーでも見慣れないベルトに、刃が虹色に光っている刀があった。

ガルツチ「此は？」

全王神「貴方だけのベルトと、『全』『虚』『零』『無』『絆』の力を備わった神刀よ。」

ガルツチ「フア!？」

全王神「いやー、此作るのに結構時間かかっちゃったよ。ベルトはともかくこの神刀、オリハルコンとか、カッチン鋼とか、クリプトン鉱石とか、色々な世界にある最硬鉱石を集めて、其れを扱えるように色々工夫してたからね。あ、刀は私デザインしてるよ。」

ガルツチ「デザインって……………、ちよつと刃が派手じゃない？しかも鞘は？」
全王神「あー、そのー……………」

ガルツチ「？」

全王神「ごめんちゃい。♪」

『ONE TWO THREE』ガチャッ

ガルツチ「ライダーキック！」

『ガチャッ！ RIDER KICK!!』

全王神「暴力反対ッ!？」

「全王神お仕置き中、暫くお待ち下さい。」

全く、鞘がないってどう言う了見だ？あれか？僕みたいなやつなんかこれ？

総刃「ガルツチ、肉親の筈なのに何で殴るの？」

全王神「ガルツチちゃんはツンデレだか——」

ガルツチ「シヤラップ！」

全王神「アフィン！ガルツチちゃんの愛を感じるよ〜！」

ガルツチ「というかツンデレじゃねえよ!!」

鳳凰「なんて言うか、ツツコミが追いつかないね。」

リサ「鳳凰ちゃん、私もそう思うよ。」

ガルツチ「まあ良いとして、これ。試し斬りしていいか？」

全王神「もっちゃん！」

さて、扱いやすさはどれくらいか――

『ブオンツ〜!』

何だ!?!このフィット感!?!斬る度に桜の花びらが出てくるし、両手で持てば太刀にも変わるとは……………。

ガルツチ「凄いい……………、滅茶苦茶扱いやすい！」

全王神「でしょ?これも時間かけて作ったんだよ?」

ガルツチ「だが鞘がないってのは……………」。

全王神「あ、そうそうあの質問だけど、本当は鞘は要らないよ。」

全員『え?』

全王神「一度離してみて。」

どういう事なん——つて消えた!? 何処いった!?

深雪「ガルツチさん、背中!」

背中? つてあつた!? つて此、『N i e R : A u t o m a t a』的な奴!? なんか白い魔法陣的な何かが刀を囲ってるんだけど!?

全王神「これなら何時でも斬り掛かる事ができるのでしょ?」

ガルツチ「そうだね。あ、そうそう、母さん。仮面ライダー1号は今、何処に?」

全王神「たけちゃんのこと? 難しい事聞いてきたね。残念だけど、何処に居るのか私でも分からないの。」

母さんですら分からないのか。こりや、闇雲に探す他ないな。せめて、手掛かりさえあれば良いんだが……………。

クロノ「ん? つて、貴方様は全王神様!」

総刃「エ!? 知ってるの!」

クロノ「おい、お前達頭を下げろ! 失礼だろ!」

ガルツチ「おい待て、先ず母さんを知ってるってどういう事?」

クロノ「何を言う、全王神様といえば——」

全王神「ストップストップストップウオッチング。信仰は要らないよ、嬉しいけど。」

なのは「先ず私、知らないけど……………」

ヴィヴィオ「うん、私も。」

未来「異世界の神様だからねえ……………」

うん、それにどの神様も、母さんを無かったことにしていたし、ぶっちゃけ信仰なんてないに等しいしな。単に魔力タंक的な奴だしな。いや魔力タंकじゃないか。

総刃「それより、もう行っちゃうの？もう少しいてもいいんだけど。」

ガルツチ「総刃、それは嬉しいがやめておくよ。次の冒険が待ってるし、何よりゼロノスとの戦いがある。」

総刃「そっか、なら仕方ないな。」

ガルツチ「代わりつてもんじゃないが、この力を受け取れ。」

『TRACE POWER』

僕が分け与えたのは、幻影と不老不死の呪い、そして異世界の英霊達の力を宿した擬似宝具の力だった。彼に触れてみたところ、どうやらゼロという礼装がこの世に繋ぎ止める為の必須アイテムだったようだ。だが、この呪いを使えば、たとえゼロが破壊されても、呪いが発動しこのまま現世に留まることができる。まあ代わりに死ぬことが出来

ないってのが、辛いことだが、総刃なら大丈夫だろう。

僕には耐えられなかったが、もしかしたら総刃なら……………。

ガルツチ「トレース・オフ……………。これで僕の方が使えるよ。」

総刃「ありがと、でもさつき流れた物の中から、なんだか悲しく切ない感じがしたけど。」

ガルツチ「安心しろ、此で君は『永遠』にこの現世に留まれる。ただ代償として、僕と『永遠』の苦しみを味わう事になる。」

総刃「え？」

ガルツチ「でも、僕は信じてる。お前なら、僕と同じ苦しみを乗り越えることが出来る。絶対に……………。」

総刃「……………」

全王神「ガルツチちゃん……………」

ガルツチ「未来、次の世界に行こっか。」

未来「あ、うん。」

そして僕らは総刃達と別れ、次の世界へと旅立った。

side change

総刃side

力を受け取ってる最中、俺は何かを感じた。まるで、俺を蝕もうとしているかのような呪いが注ぎ込まれてるような気がした。

過去を見た。彼は元々普通の男の子だった。でも、彼は誰も『見てくれなかった』。

ずっと一人、孤独だった。そんなとき、一人の男が手を差し伸べた。そして二人は史上最大の計画を練った。それも、俺達ですら恐ろしい計画を……………。

だが結果、彼は命半ばで散ってしまった。そして、今度は神様に転生した。でも幼い歳で亡くなり、今度は最も残酷な物が見えた。虐待だった。まるで忌みの子扱いを受けるかのように、暴力を振るわれた。そして、場面が変わった。

そこは、アーチャーの固有結界よりも酷いものだった。血に塗れた大地に、数々の死体。その武器にも血が着いていて、空は黄昏だった。その大地に、彼が立っていた。

そして彼は、俺を振り向きこういった。

『ここは僕の呪い。この世の全ての刃となった成れの果て。そして、僕の不老不死の呪いの根源となった世界。君は、僕のようになつて欲しくない。だから、お願い……………。』

この呪いを受け取っても、決して僕のような『殺戮者』に、ならないで。』

彼は泣いていた。この苦しみに耐えきれず、ずっと表に出さずに苦しみ続けていたんだ。だったら、俺はこの呪いを受け止め、彼のようにならないと誓った。

約束する、決してお前のようにはならないと。

『ありがとう、聖船総刃。』

すると、先ほどの世界は光に覆われ、晴天の空に血に塗れてない草原に変わった。そして彼は泣きながら笑みを溢し、姿を消した。

そして、目を開けると既にガルツチ達はいなくなっていた。が、手元にはクラスカードがあった。それも、ガルツチが描かれたクラスカードが。

『Avenger ラーク・バスター・ガルツチ』

総刃「また会おう、ガルツチ。」

t o b e c o n t i n u e d
⇨

ガルツチの第2の故郷　　く消えない思い出く

第69話　懐かしき世界

—
???

ゼロノス side

ゼロノス「むう………、よもやここまで手こずるとは………。」

まさか、殆どのホムンクルスがやられるとは思わなかった……。しかも、最悪な報告の中に、0号と1号の試作品が裏切るとは………。

ゼロノス「こうなれば、時臣！」

時臣「お呼びで御座いますか？ゼロノス様。」

ゼロノス「任務を与える。此はまだ、命を賭ける必要はない。」

時臣「と、申しますと？」

ゼロノス「今から英竜が居る世界に向かい、星空英竜や衛宮藍、夜神小夜、五河士織、空海翔の能力を、このディスクにコピー………いや此はやめよう。」

時臣「何故です？」

ゼロノス「うっかかりミスしそうだし、何より機械音痴だからな。」

危ない危ない、下手してディスクが割れたら大変なことになってたな。

ゼロノス「代わりにだ、このコピー宝玉で奴らの能力を手に入れる。コピーだから、流石の奴らも気付かれまい。」

時臣「もし、見つかった場合は？」

ゼロノス「このリターンクリスタルで、此方に戻れ。」

時臣「畏まりました。」

ゼロノス「見つかるなよ。」

さて、此ならば流石の彼奴も気付かれまいし、万が一の時でもリターンクリスタルを99個分の奴を渡しておいた。

此ならばようやく奴を、『アンチスパイラル』のホムンクルスが完成できる。俺だけしか操縦できない、最強完全人工生命体で全てを0に戻し、絶対的な善と絶対的な悪を作り上げ、闘争心しかない世界に変えてやるのだ。何も疑う必要のない、ただ善は悪を、悪は善を殺すだけの存在に仕立て上げるのだ。たった1つだけの次元で、たった一つの星で大勢の者達が戦うのだ。

ゼロノス「必ず完成してみせる！」

闘争こそが、本当の世界だ!!

sideChange

—
???

ガルツチ side

未来「到着つと。」

本音「つて何これ!?この桜大っきい!!」

次の世界に到着と同時に、空を見上げると、そこには大きな桜が移つて……………ん?
いや待て、なんか見覚えが……………。

ミスト『……………やつと、帰ってきたね。兄や。』

ガルツチ「……………つて事は、ここつて。」

未来「ガルツチ、知ってるの?」

ガルツチ「この桜は『鎮魂大桜』と言って、数多の魂がここで集い、この大桜に宿す守護的な存在だ。間違いない、どうやら僕は『帰ってきた』ようだな。」

鈴美「帰ってきたって……………」

ガルツチ「ここは、僕にとつての第2の故郷の世界。『イマジナリーユニテッドワールド幻想空想和洋世界』。魔法と剣、魔物、妖怪、妖術、霊術などありきたりな物が溢れている世界だ。」

まさか、この世界に帰ってくるなんて思わなかった。この世界の父上と母上は、元気にしているのだろうか。

ミスト『待ってて、すぐ迎えに行くから。お父さんとお母さんをつれてね。』
え？ちよつと待て、説明を……………」

ガルツチ「あーもー、ミストったら……………」

フラン「どうかしたの？」

ガルツチ「ミストが迎えに来るんだと。」

未来「え!?!ミストって、生きてるの!?!」

ガルツチ「いや僕に聞かれてもな……………」

ミスト「でもちゃんと生きてるんだよ、兄や。」

ガルツチ「そういえば、どうやってこっちに来るんだろ。」

ミスト「転移霊術で、こっちに来るよ。」

ちゃげ、あの親父よりもまともなのは確かだしね。

ガルツチ「久し振り、父上。母上。」

???「ああ、だがどちらかといえば、あちらの方が今の父じやないのか？」

ガルツチ「親父か。あんなのがなあ……。確かにそうだが、ここじやあ貴方が僕の父だし。」

未来「えーつと、貴方は？」

???「あ、そうですね。私は『安倍晴明』の末裔、『言峰九郎』と申します。此方は『間桐華怜』です。」

華怜「息子がお世話になってます。」

未来「あ、いえいえ此方こそ。」

ミスト「それじゃみんな、こっちに来て。私達の町に案内するよ。」

ガルツチ「慌てなくても良いのに……。つて、おいおいこれ目立つんじゃないの？」
九郎「ハハハ、確かに此を使って迎えに来るのは初めてだから、目立つのも無理はない。」

全くもう、此で敵が来ないことを祈るばかりだよ。そう思いつつ、僕らはその陣の中に入ると、一瞬にして街に到着した。

鈴美「ここが、ガルツチちゃんのもの？」

ガルツチ「うん。それにしても、あれだけの年月が経つたのに、余り変わってないとはね。」

ミスト「うん、私も不思議だけど、そう言うものじゃないかな?」

ガルツチ「そうなのかよ………………。まあ良いとして、みんな、ようこそ。『ヒメムラサキ』へ。そして、ただいま。」

九郎「お帰り、エンド。いや、今はガルツチだったね。」

街に入るや否や、みんな僕を見て驚いていた。まあ確かに驚くよな。見た目も有り得ないほど豹変しちゃってるし、特に耳が滅茶苦茶目立つ。羽化しちゃったんだし、此は仕方ないけど、どうやって戻せば良いんだろ?」

そう思いながら進んでいくと、どこからともなく石が飛んできて、すかさず手で止めた。そして、投げつけた本人を見つけ、何かを言っていた。

えーつと? 『良くもまあこのうのと帰ってきたな、異端者。お前の帰る場所なんてねえから。さつさと出て行け!!』ねえ。

うわー、子供だ。差別だわく。

ガルツチ「ごめんみんな、ちよつと止まって。さつき石を投げた奴に仕返しするよ。」
華怜「え? 仕返し?」

ガルツチ「昔だったら、我慢していたけど、今じゃ沸点低くなっちゃったからね。」

さて、あそこだな。ん？また何か言ってるな。何々？『さつきと出て行け！疫病神！お前なんかそのよそ者と一緒にくたばつちまえば良いんだよ!!』……………此奴、僕を罵倒はともかく、フラン達にも差し向けるとは……………。

仕返しじやあ物足りない。ああいう奴は、もつと痛めつけてやらないとな。

ガルツチ『ザ・ハンド』!!こつちに来い!』

空間を削ると同時に、石を投げた人が何が起きたと言わんばかりの顔をしていて、さすが2発ぐらい顔面に殴りつけた。

ガルツチ「おい、テメエ。次あの子達に悪口言ってみろ、文字通りお前に厄災を振り掛ける呪いを掛けてやる。」

「な、何だと疫病神！お前、強くなったからっていい気に——」

ガルツチ「黙れ雑種、僕にとつて疫病神は貴様だ。あの時お前は何をした？小心者で、何も出来ず、ただ血統だけが高いと自慢し、他の奴らを見下したんじやあねえのか？

それにしても、見ないうちに堕ちたな。いや極限まで堕ちたと言つてもいいだろ。全く、親は甘やかしすぎだつうの。言つたはずだったんだがなあ、でも人の話聞かない金持ちだったし。

『その子供は、きつといい人生を選ぶ。それも、名のある傭兵に』ってね。なのに、お前達の親と言つたら、『この子に傭兵なんて向いてません！出鱈目なこと言わないでくだ

「さい!!」とかいつてさっさと出て行って、とことん甘やかさせたんだよなあ……………」
才能を無駄にしちやつて……………」、何ともまあ。」

「黙れ!!俺のパパとママを侮辱するな!!」

ガルツチ「そんなんだから成長しない。体は青年でも、中身が子供だとなあ……………」
いいか、今からでも遅くない。さっさと出家して、傭兵としての人生を歩め。じゃなきや、一生分の後悔をするぞ。」

そして、剣を投影し、その男の喉元を突きつけた。

ガルツチ「もう一度言うが、もし僕の大切なものを傷つけてみる。その時は殺す。そしてその両親!!」

「ッ!?パパ!?ママ!」

「……………」。ワナワナ

「アワワワ……………」。

ガルツチ「言つたはずだ!甘やかすなど。にもかかわらず、貴様らは忠告を聞かず、此奴の才能を無駄にした。見ろ、すっかり小心者になって、鼻を掛けてしまった。」

もうこれ以上甘やかすな!此奴はまだ、やり直しが利くが、次甘やかしてみろ。最悪な展開になると思え!!」

未来「ちよ、ガルツチ。もうやめてあげて。何かやばいオーラが出てるよ!」

『仮面ライダーカブトOP NEXT LEVEL』

ん？誰からだろう。

『ピッ』

ガルツチ「はい、もしもし。」

???『もしもし!?ガルツチか?』

ガルツチ「え、ええ。ってその声、火ノ兄か!」

火ノ兄『ああ、久し振りと言いたいが、大変なことが起こった!!』

未来「どうした?」

ガルツチ「(未来、ちよつと待って。)何があつたんですか?」

火ノ兄『深海棲艦の事なんだが、一部の奴が反乱を起こし、アフリカ大陸を占拠したと!』

なにい!?!どういふこつたな!?

火ノ兄『原因不明なのだが、此を解決できるのは君しか居ないと思つたんだ。頼む、すぐにごつちに——』

ガルツチ「火ノ兄、すまないがそれはできない。」

火ノ兄『な、何故?!』

ガルツチ「実は今、ゼロノスと呼ばれる『零の龍神』と戦わなきゃならないんだ。その為には、『全の竜神』である本郷猛の捜索をしているんだ。」

火ノ兄『そ、そうか……………。』

ガルツチ「だけど、代わりの人なら頼めるかも知れない。それで頼む。」

火ノ兄『わかった。すまない、邪魔して。』

ガルツチ「構わない、連絡感謝する。」

さて、通信が切れたことだし、早速母さんに聞いてみるか。母さん、ちよつと頼めるか？

全王神『ハイハイ、ニッコニコ〜！貴方のハートに——』

また殴られたいの？（ニッコリ）

全王神『あ、はい。ごめんちゃい。それはそうとどうかしたの？』

艦これ世界の火ノ兄龍馬って言う人から、緊急事態が発生したんだ。正直いって、此方から行くにも時間が掛かってしまうし、何より猛の捜索をしなくちゃならないんだ。

全王神『えーつと、それってつまり……………英竜ちゃん達に頼むって事？』

出来ればそうしたいが、一応頼んでくれるか？

全王神『うん、わかった!』

到着場所は以前僕が使つてた不死鳥鎮守府にしてくれ。他の艦娘達にも伝えるから。全王神『OK!!もう、モテる男は辛いねえガルツチちゃん!♡終わつたら一緒に子作りとか——』

却下。それだと近親相姦になるだろ。

全王神『えゝ、しようよゝ。』

なんでさ。それだと未来にも頼めば——

未来「ちよつと待つて、ガルツチ。何僕を売ろうとしてるの!？」

ガルツチ「聞こえてたか。」

全王神『あ!だつたらみつくんとガルツチちゃんをまとめてやつちやえばいいんだ!!』

ちよつと待てええええええええ!!?本気!!?本気で言つてるの?!

全王神『私は何時でも本気だよ!!?て事で、アディオス。♪』

うわー、とんでもない事になつちやつたよ。如何すれば良いの此?

深雪「えーつと、ガルツチ?実はうちの龍神王にも……………」

ガルツチ「お前もか……………」

フラン「お兄ちゃん達、とんでもない神様に当てられちやつたね……………」

紫「ガルツチざまあゝ。wwww」

『プッツン』

ガルツチ「……………スキマごと破壊してやるから、そこ動くなよ?」

紫「あ、オワタ＼(^o^)／」

ガルツチ『イマジナリー・ライトニング・ノア』!!」

今回の紫 ガルツチの『虚』の力を宿したスペシウム光線を発動させ、直撃して死亡

全員『うわー、エグい。』

ガルツチ「うん、凄い威力。今後敵が来たら使おうかな。」

全員『敵の人、南無阿弥陀仏。』

ん? 何で皆念仏唱えてるんだろ? まあいいか。

t o b e c o n t i n u e d
→

第70話 歓迎

—ヒメムラサキ 町長の家—

未来 side

それにしても、ガルツチが住んでた街って、なんだか賑やかだったなあ。でも、ガルツチが出したあの殺気、ホントにびっくりしたよ。

そう思いながら、ようやく町長がいると思われる家に着き、中に入っていった。

「ようこそ、おいで下さった。そして、よく帰ってきたエンド。いや今はガルツチじゃったな。」

ガルツチ「お久しぶりです、町長。」

「ああ、しかし結構人というのも変わるんじゃない。皆、此方に来るが良い。茶を用意しよう。」

ガルツチ「変な物用意しないでよ?」

「酷いなあ、そんなに儂が信用できんのか?」

ガルツチ「大体、貴方の場合って湯呑みにギャグ漫画日和の聖徳太子が浮いていたり、茶の筈なのに何故かトロピカル風だったし、それならまだしも挙げ句の果てには精液

的な粘りが——」

「ごめんなさい、それ以上は勘弁して下さい。」

ガルツチ「あれセクハラですよ？男に欲情するって、ホモですか？」

「わかった、わかったからこれ以上やめて。」

町長の威厳つて、ガルツチよりも低いのかな？つていうか町長、後で詳しく——

ガルツチ「未来、お茶に精液は入れないでね？（へ——）」

未来「バレてた……………。（・——・）」

ガルツチ「まあでも……………、気が向いたら……………別にいいけど……………。／／

／／／／／／／／／／

ガルツチ、それも誘ってるよ。

そんなこんなで、人数分の”普通”のお茶が置かれた。いたつて”普通”のお茶の筈なのに、ガルツチは未だに警戒していた。そこまでのものなのだろうか？

「安心しろ、”今回”は何も怪しいものは入れてない。」

ガルツチ「今回は？」

「あ、えと。ホントに何も無いから！うん。」

結構警戒してるけど、それぐらいヤバかったって事なんだね。しかし、飲んでみると

ころ何の事は無い普通の緑茶だった。

「さてと、ここまで来る経緯は、ケルピーから聞いた。お主ら、特にガルツチ。どうやら思ってた以上に壮絶な旅をしていたのじゃな。今はゼロノスという者の相手をしておるのか。」

ガルツチ「ええ。」

「ゼロノス……………、彼奴は龍神の中で一番の危険な奴で、一度指名手配もしたと言われてる極悪の奴じゃ。ガルドもそうなんじゃが、奴はただ妹思いで、亡くなってから彼奴は悪い奴じゃないと、皆が認識し始めたようじゃしな。」

ガルツチ「……………それって、ギルサンダーが？」

「そうじゃな。何でもギルサンダーの妻である『アサナト』が、兄さんの恩を返したいと言う思いで、ギルサンダーに頼み込んだそうさ。勿論、ギルサンダーも快く受け入れたそうさ。だから、ガルド。いや今は、ジャックじゃな。安心しろ。」

多分ジャックさん、今頃安心していらっしゃるうね。鈴美さんも、少しだけホツとしてくれるらしいね。

「しかし、ガルツチ。お主が神様でありながら、『虚の龍神』だとは。こりや儂らも一本とられたわ！」

ガルツチ「自慢できるもんじゃありませんよ、町長。」

「しかも、まだ愛人居るんじゃない？」

全員『え？』

ガルツチ「……………少なくとも、僕の意志じゃないぞ。(：う？)」

ガルツチ「……数百年間修行のために色々と世界を飛び回ってたのは知ってるけど、まさか愛人を作ってるなんて思わなかった……………」

ガルツチ「まあ例を挙げるなら、『進撃の巨人』のヒストリカだな。ヒストリカは、あの一国の女王様でね。でも、僕でも想像絶する位の酷い扱いをされていたらしくてね。聞いてから少しキレイだよ。んで、僕は言っちゃったんだ。」

『巫山戯るな、ヒストリカ。』

『え?』

『彼奴らは君を目の敵をしていた。お前を生まなければだど? あんなのが親だとよく言えたな!! 僕だったら、其奴を絶対殺す。そしてこう言ってやるさ。だったら最初から軽はずみに生むな! 傷つける為に産ませたんだったら、さっさとくたばっちまえ! つてね。』

『ちよ、ちよつとガルツチ。それは流石に……………。』

『ヒストリカ、あんな奴等見限れよ。あんなのが親なんて、僕は認めない。困ってるなら言ってくれ。あの親のようにはしない。ユミル程じゃないが、君を狙ってくる奴等を、僕が皆殺しにしてやる。王族? 巨人? 関係ない。ユミルの仇はちゃんと取ってやる。いずれ、どこかいつちやうだろうけど、それでも可能な限り、全力で守ってやる。』

『……………ホントに、私を守ってくれるの?』

『約束してやる。我が刃に誓って。』

未来「ガルツチ、多分それだと思うよ？」

ガルツチ「え？」

フラン「お兄ちゃんの優しさって、どこまでモテさせるんだろう。」

簪「多分ガルツチって、自分に起こった境遇を目の辺りにした人を見るのが嫌いで、自分のようにならせないように、ああ言う行動をしたんじゃないかな？」

深雪「あー、あり得そう。」

未来「……………それで愛人が出来るって、凄いと思うよ？」

ガルツチ「いやまって、僕はそういう奴等を守りたいって言うだけで、別に愛人を増やしたいなんて一言も——って、ヒストリカ!?いきなり念話しないで!?ユミル、お前も!!っておいおい、めだかもかよ!?って念話なのに何脱ごうとしてるんだよ!?何?『練り上げたこの肉体を、衆目にさらすことに、一体何をためらう必要がある?』だって?大ありだよ!?そもそも、念話だから見せるなんて無理だつての!!」

っていうか、めだかさんも愛人関係なんだ。今更だけど、ホントに懐大きいなあ。多分『女祝の相』が原因だけど。そういうえば、念話って愛人にも有効なのかな?

イリヤ「むう、私達の知らない内に愛人がいたなんて。狡いよお兄ちゃん!私達にも紹介して!!」

フラこい「そーよ、そーよー!」

ガルツチ「いや待て、嫉妬じゃないんか!」

本音「……………モテすぎつてのも、大変だね。」

白夜叉「いや、どちらかといえ、お人好しに優しすぎるのが仇なんじゃないかな?」

鈴美「私も、そう思う。」

簪「むしろ、めだかさんと知り合いなのが初めてだよ。やっぱり数百年間旅しながら修行してる内に、愛人も作って——ハッ！もしかして——」

ガルツチ「ストツプ簪、なんか想像しているが、少なくともそう言うのはないからな？ 未来で十分だから、な？」

何を想像していたんだろ？

「ハッハッハ!! やっぱり若い奴らはいいのう!! 九郎も華怜もそうは思わんか？」

ガルツチ「あのさ、一応言うけど僕はどっちかというところとジジイだからね？」

「関係あるまい、見た目は14歳なんじゃから。って、ホレホレ。若いもんが年寄りに暴力振ろうと考えるな。」

ガルツチ「誰のせいだと思ってるんだ？」

そんなこんなで馬鹿騒ぎが終わったのは、太陽が沈んだときだった。僕らは町長が用意してくれた貸切の宿屋に入り、暫くは滞在することに決めた。

ガルツチは、一度家に向かったけど、久しぶりに家族団欒でもするのか？ まあ、部屋も空いてるけど数名しかは入れないって言うてたし、ここは平等でみんなでジャンケンしようつと。

(ちなみにガルツチは除外。)

勝ちました。ガルツチの家に入れるのは、僕と簪、フラン、そして深雪さんだった。それにしても、ガルツチの家って質素なところはああるけど、広いんだね。食事は基本ガルツチが作ってくれたけど、華怜さん滅茶苦茶やばいって顔していたっけ。
しかし、楽しそうだね。ガルツチは。

side change

—ヒメムラサキ ガルツチの家—
ガルツチ side

はあ、御飯食べたし、久々にここの風呂に入ったし、そろそろ寝ようか——

『コンコンッ』

ん？誰だろう？って、ミストか。

ミスト「兄や、入って良い？」

ガルツチ「うん、いいよ。」

そう言い、ミストは僕の部屋に入ってきた。しかし、ミストの寝間着は久しぶりに見たな。そういうえばこんな可愛らしい服を着ていたんだっけ。

ミスト「兄やって、最近女装とか始めたの？」

ガルツチ「あ、いやその……。友人がな、まともな服装用意しなくって、それに

ミスト「でも、似合ってるから気にしないよ。」

因みに、僕が着ていたのは、アストルフオの私服で、以前未来が着せてくれた奴だ。

ガルツチ「なあ、ミスト。」

ミスト「なあに？」

ガルツチ「寂しかったか？数百年、いや数千年もの間、君を一人にさせたのは……。」

ミスト「うーん、寂しくないって言ったら嘘になるけど、泣きたくなるほど、寂しかった。」

ガルツチ「そっか……。ごめん、自分のことばかり気にしてて。正直、ここま
で壮大な旅になるなんて、思わなかったんだ。ラヴオスを倒してハイ終了って、思った
のに……。」

ミスト「私も。でも、その分楽しかったでしょ？自分が何者なのか、本当の家族は誰

なのか、そして、どんな能力を持っていたか。」

まあ確かに、負けてしまったからこそ、こう言う人生を歩めたつてのは事実だな。クソ、負けて悔しいと思つてたが、事実そのお陰でフラン達と結婚し、更には未来達と出会えたつてのも、実際嬉しかったし。

あーもー、考えるの辞めよう。

ガルツチ「まあ、どちらにせよ寂しい思いをさせたのは、変わりないけどね……。」
ミスト「そうでもないよ。そのリアクターで、色々とサポートしながら頑張つていたし、何より兄やと一緒にだったから、そこまでじゃないと思うよ。」

ガルツチ「まあ、今じゃリアクターじゃなく、改造して別のものになったしね。まあまだリアクターの原型もあるし、此誰かに送つた方がいいかな？」

ミスト「良いと思うよ。でも、兄や疲れてるでしょ？長旅で。」

そういうえば、確かに長旅やら戦いで結構疲れていたし、ちよつと動きも鈍い気がするな。

ガルツチ「確かに、そうだな。」

ミスト「そつか、だったらマツサージしてあげるから、服脱いで。」

ガルツチ「うん。」

まあパジャマ着た意味なかったか。

そう思いながら、僕は服を脱いで、一応下着姿になってうつぶせ寝となった。うーん、なんだろ……。何故かこの後の展開が見えてくる気がするな。

ミスト「それじゃあまず、ローションを塗ってあげるね。」

ガルツチ「うん、頼む。バケツでかけるとかはやめてよ?」

ミスト「大丈夫。バケツなんて、持っていないし。よつと。」

そう言いながら、ミストのマッサージが始まった。まあどんなローションなのかは謎だけど、まあいいよね。

そう思ってた時期が、僕にもありました。数分後、マッサージを続けていく内に、どういう訳かムラムラし始めてきた。おっかしいな、ただのローションならこうはならないはずなんだが……。

ミスト「それにしても、兄やの体、大きいね。鍛えているのに、何で筋肉着かないんだろう。」

ガルツチ「確かにっ、不思議だよなつ。／／／／／／／／」

ミスト「あれ? 如何したの兄や、少し声が色っぽいよ?」

ガルツチ「ッ! きっ、気のせいっ……だよつ。／／／／／／／／」

わからん、一体何のローション使ったんだ?

ガルツチ「そつ、そういえば、何のつ、ローション使ったの?／／／／／／／／」

『ヤツダアアバアアアア』

ん？なんかどこぞのスキマ大bbaの声が聞こえた気がするが、気のせいか。

ミスト「ねえ、大丈夫？」

ガルツチ「大丈夫つ、とは言えないかな？凄くムラムラするしつ…………。／／／／／

／

ミスト「うー、やっぱりあの胡散臭そうなオバサンらしい人に貰ったのは間違いだつたのかなあ？」

ん？胡散臭そうなオバサンらしい人？

ガルツチ「ちよい良いかっ？その胡散臭そうなオバサンって、名前言つてたか？／／

／／／

ミスト「えーつと、『幻想郷の賢者』とか何とか……………」

ガルツチ「……………彼奴には麻婆豆腐をプレゼントしてやろう。」

やっぱり奴だったか。何にせよ、絶対許さん。って、ちよつと待て？そーいえばミス

ミスト「え？」

扉に声をかけるとすぐ開き、何かとムラムラしまくってる3人がいた。つてか、何してんの？

ガルツチ「いやまあ、確かにマツサージしていたときに喘いでだのは否定しない。聞き耳はともかく、覗き見するか普通？」

未来「そうは言うけど、あんなに喘いでたら気になつて覗きたくなるよ。」

簪「それでミストちゃん、ガルツチには一体何をしていたのですか？」

簪、何メモ帳持つて女の子がしちやいけないような顔で質問してるの？いやまあ端から見たら近親相姦のようなもんだけど……………。

ミスト「ただのマツサージだけ？兄やつて、結構長旅しているでしょ？だから、マツサージで癒やしてあげようかなあつて。」

フラン「ただのマツサージだったら、あんなに喘がないけど、何か特別な事でもしてもらってるの？お兄ちゃん。」

ガルツチ「文句を言うなら、このローションを送りつけた本人に言ってくれ。お陰でムラムラしていて大変なんだから……………」

未来「え？ローションで？」

ガルツチ「ただのローションかと思つたら、此媚薬と精力剤を混合したローションな

んだ。しかもメツチャ強力。」

僕はそのローションを投げ、未来がキャッチした。

未来「何でこんなのを？」

ガルツチ「紫からもらったらしい。」

未来「何してるのあの人………。」

フラン「ところで、ムラムラしてるなら今回は——」

ガルツチ「ごめん、今回は妹と戯れたいんだ。期待して悪いけど、次の機会にしてくれ。」

そう言い、フラン達とやりたい衝動を抑えつけ、出て行かせた。そのまま布団に寝転がり、ミストは仰向けになった僕を跨がり、何時でも犯す準備をしていた。

ミスト「よかったの？」

ガルツチ「うん、今日は寂しがってた妹を精一杯可愛がらないといけないからね。」

ミスト「もう、昔と變わらないね。兄や。」

ガルツチ「變わり損ねた成れの果てさ。」

そうして僕は、ミストの唇を重ね、お互い抱きしめ合った。というかミストとセックスって何時ぶりなんだろ？ 確か、レイスを救助しにいった際に秘密の扉の中に入った瞬間だっけ？ あの時以外、ミストとはやってなかったしなあ………。

ミスト「んふっ、ホントに可愛らしい顔だね。」

ガルツチ「い、言うなよ恥ずかしい……………」

ミスト「それに、今回はちよつとサキュバス？ つばい事してみようかなって、ある霊術を覚えたの。」

ん？ なんだろ？ 種族をサキュバスに変える霊術なんて、あつたっけ？

ミスト「淫に現れ、色欲は我に憑依、性に溺れしはこの悦楽。『淫獣憑依・サキュバス』！」

詠唱が終わると同時に、ミストの背中に悪魔の翼が生え、尻尾も生えた。……………つて。

ガルツチ「ゴハッ!？」

ミスト「え?! 兄や大丈夫!？」

ガルツチ「ご、ごめん。可愛すぎてつい吐血しちやって……………」

／／／

ミスト「待つて待つて、兄や可愛いのを見ると吐血しちゃうタイプなの!？」

ガルツチ「知らないけど、多分そう。」

ミスト「……………貧血の原因、それじゃない?」

多分それはない。宝具で血を使うのは確かだだけ。

ミスト「まあ、それもいつか。サキユバスは知ってるだろうけど、本物とはちよつと程遠いかな？」

ガルツチ「やつぱり、『エナジードレイン』とかそういうのがないとか？」

ミスト「うん。でも、わざわざ兄やの命を吸う必要なんでないでしょ？」

言われてみれば、確かに。

ミスト「それじゃ早速、兄やのパンツを脱がしてつと。」

パンツを脱がされると同時に、僕のアレが既にギンギンになっていた。と言うより、何もされてないはずなのに、我慢汗が出ていた。

まあだいたいわかるよ？あのローションのせいだ、我慢するのに凄く辛いからね。もちろん、ミストは少し驚くも、クスツと笑みを溢していた。すると尻尾が僕のをチクツと刺した。何したんだ？

ミスト「えへへ、極めて強力な媚薬や精力剤を注入したの。この尻尾の仕組みは不思議だけだね。ついでに、私もつと。」

や、やばい……。これまでに無いほどのムラムラと射精欲が極限まで高まつてきた気がするっ……。ちよつと、これはっ！

ミスト「それじゃ、兄やの精液っ、いただきますっ。／／／／／／／／／／／／／／／／

未来 side

え？ちよつと待つて、ガルツチの精液滅茶苦茶出してない？しかも、ミストつて言う子の姿が、何故かサキュバス？つて言うのになつてゐるし。

やつぱり参加するべきだったあああああああ！！！！！！

フラン「しかも、子作りするつて言つちやつてるわね！お兄ちゃん達。」

簪「あれもう、本気で作る気満々だよね……………」

未来「うーん、どうしよう……………。いつそ僕達も参加して、乱交パーティーでも――

――

フラン「未来お兄ちゃん、私もそうしたいけど、お兄ちゃんの妹ちゃんが寂しがつていたようだし、今回は譲つてあげたら？」

未来「フランがそう言うのなら……………」

フラン「代わりに……………」

代わりに？そんな疑問を持つとしたら、いきなり押し倒されてしまい凄く艶めかしい目で僕を見ていた。フランつて、吸血鬼の筈なのに、この時つて何故かサキュバスに見えるやうなだけで、気のせいかな？

フラン「未来お兄ちゃんの精液でも、戴こうかしら。♡」

簪「フランちゃん、私も入れさせて。」

フラン「いいよ。それじゃあ早速……………ッ!？」

簪「え、ど……………どういう事!？」

いきなり全部脱がされると同時に、何故かフランと簪は驚愕した顔をしていた。何かあつたのかな？

フラン「……………これ、お兄ちゃんに見せるべき?」

簪「いやまって、これ見せた途端混乱しちゃうかも。」

未来「ねえ、2人とも如何したの?」

フラン「えーつとね、未来お兄ちゃん。覚悟して聞いて欲しいんだけど……………」

未来「?」

簪「未来、貴方……………『ふたなり』になつてるよ。」

はい？

え？僕が？ちよつと待つて、もしかしてフラン達のようなのが？

簪「今手鏡しかないけど、それで見てみて。」

と、手鏡で僕の股間部分に映すと、そこには普通男には無いはずの割れ目があつて、一度開いてみると、本当にふたなりと化していた。

未来「嘘くん。何で？」

両儀式『あー、なるほど。多分俺らがこの肉体に入ったときに、偶然本来の性別を取り戻したのか、そう言う風になったんだろうな。まあ、此でお前も子供が作れるって事でいいじゃねえか。やったな未来、正式なお母さんになれるぞ!』

未来「……………これ、喜ぶべきか悲しむべきか複雑な気持ちになってきた。」

『ゴクリッ』

あれ? 2人とも、何だか凄い目をし始めたんだけど、ねえちよつと? 何だかいやな予感がし始めたんだけど。

簪「フラン、貴方はどっち攻める?」

フラン「そうね、未来お兄ちゃんのおまんこから攻めようかしら。」

簪「いいよ。って事で未来、いっぱい出させてあげるね。♡♡」

フラン「その代わり、私の精液、受け止めて。♡♡」

うー、そんな同時に攻められたら、メスになっちゃいそう……………。

side change

—
???

ゼロノス side

……知ってた。信用していなかったとは言え、やつぱり失敗したか。時臣の奴、見つかったら撤退しろと言ったというのに、あのうっかりめ……。しかもよりにもよって全部のホームクルスを連れていくとか、どこまで馬鹿なのだ!?

あーダメだ、少しイライラしてくる。この時は、まずは紅茶を飲んで……。

『ブフォツ!』

なんだ此!?!滅茶苦茶不味い紅茶だな!?!しかもこれ、見習い以前の問題だぞ!?!クソ、しかもよりにもよってブランド紅茶だし……。

ゼロノス「おい、この紅茶を入れた奴出て来い!!」

「ゲホツ!ゲホツ!す、すみません……。ゼロノス……。さ……。ま……。」

ゼロノス「お前か!って、如何した?風邪か?」

「え、ええ。」

ゼロノス「っていうかお前、アールグレイを頼んだ筈だぞ。しかもこの紅茶、ブランドなんだが?」

「申し訳ございません。ゴホッ！ゴホッ！何しろ、私……何時如何なる時も、ゼロノス様に満足出来るように……。ゲホッ！ゲホッ！」

え？此奴、休み無しでずっと紅茶担当してたのか!?だとしたら、俺相当な馬鹿野郎じゃねえか……。

ゼロノス「わ、悪かった！文句言ったのは謝る。だが先ずは、ちゃんと体調治してからにしろ。というか、治るまで紅茶作るな!!」

「し、しかし……。」

ゼロノス「ええい!!これは絶対命令だ!!治るまで休め!!」

「は、はい!!」

はあ、まさか風邪すら気付かないとは……。紅茶担当は風邪、そして時臣は敗北し英竜の配下に。しかも全ホームクルスも同様に……。一応まだ換えは作れてるが、此だとジリ貧だな。如何したものか……。

ゼロノス「……何か良い案は——」

???「おいゼロノス、まだ出番は来ないのか?」

ゼロノス「ん?レフか。」

レフ「全く、あのお方も出番まだかと言っているぞ。」

ゼロノス「ゲーティアもか……。仕方あるまい。出撃の許可してやる。魔神柱

ミスト「わ、わたしもく……。/// /// /// /// /// /// /// /// /// ///
 //♡♡♡♡」

ぶっちやけ言おう、もうお互いイキすぎてぐったりしてる。ミストのお腹は臨月状になつて、体中ほとんど精液塗れで、息してるだけで、凄い精液のにおいがついてた。

というか自分の精液なのに滅茶苦茶興奮してるんだけど、もう末期だよ。しかもミストの尻尾が僕のアレにぶっすり刺したままなのか、未だにギンギンになってた。流石に限界だし、ミストだってハイライトが消えかかてるよ。

ガルツチ「な、なあ。お互い限界だしつ、そろそろ……………」
 /// /// /// /// /// /// /// ///

///
 ミスト「だ、だったらつ、繋がったままつ、一緒に寝よう?」
 /// /// /// /// /// /// /// ///

///
 //♡♡♡♡」

ガルツチ「うん。/// /// /// /// /// /// /// ///
 //」

僕は静かに、ミストのおまんこに挿入させ、子宮にくっついたのを確認し、お互い抱きしめて眠りについた。

それにしても、妹とのハードセックスしたの初めてだな。いやこれ、ベリーハードセックスの方が正しいのかな?

正直ここまで激しすぎるセックスは、多分無かったぞ?アニムだって、ここまでしなかったし、というかほとんどのサキユバスはそんなに激しく無かったぞ?。

うーん、憑依したサキュバスが原因なのか、それともミストの性欲が異常過ぎるのか……。

まあ数百回以上も射精しまくった僕も異常すぎるが。いやもう考えるのは止そう。だって……、ミストの寝息が凄く色っぽいし、喘いでるせいで変に意識しちゃうし。

レイン、お前の初恋の人、相当な性欲の持ち主だったよ……。

そして朝になり、少し眠気を感じながら降りて、シャワーを浴びようとした。

華怜「おはようガルツチ、昨夜は凄くお楽しみだったわね。」

ガルツチ「ホントにな。というか母上、ミストから聞いたが、母上の占い方って、セックスなの？」

華怜「いきなりド直球に聞いたわね。まあそうね、大体が夜限定で受け付けていて、基本男性だけ占ってるの。」

ガルツチ「因みに、何の占い？」

華怜「恋愛運と淫乱運とかかな？」

ガルツチ「……………そんな占い方あるのか普通？」

華怜「私限定だけどね。一応避妊対策はちゃんとしてるよ。」

母上、ホントはセックスを楽しむためにそんな事してるだけだろ。そう思っていた僕だった。

ガルツチ「まあいいけど、あまり無理しないでよ？」

華怜「はい。」

しかし、ホントに随分と精液のにおいがついたな。早く体全体洗って、においを落とさない……………。

ガルツチ「さーて、先ずは——」

未来「あつ、簪いいいっ!」

簪「出すよつ、未来っ! 私の精子受け取つてええええええ!!!」

『ドボボボポリュボビュボビュウウッ!』

………ん? 気のせいかな? 簪が挿入している場所に、違和感を感じるんだけど………? つて、あらか? え? ちよつと待て!?

未来「あつ、ガルツチつ。おはようつ。」

ガルツチ「えーつと、未来? (。D。)」

未来「何っ?」

ガルツチ「あの、如何したの? それ。いつから、ふたなりに?」

未来「気が付いたらこうなった。」

…………なんでき。

簪「ねえ、今度はガルツチもしてみない? 未来のおまんこ凄く気持ちいいよ。」

ガルツチ「………いいよ。」

理性より快楽の勝利。ダメだこりや………。

そして、滅茶苦茶セツクスしまくった。

t o b e c o n t i n u e d
♪

第71話 懐かしきお守り

—スピリットレストラン— 月夜ノ刻—

村正 side

どうも、ガルツチさんの愛人でありエンドの恋人の村正です。今ちよつと探し物して
います。探し物っていうのは、昔私が作った星型のお守りで、私は桜色、雁夜は緑色、エ
ンドは藍色という、いわばテラ、ヴェントウス、アクアのようなお守りを探しているの
だけど、転生したせいなのか、どうやら置いてちやつたみたい。

村正「ハア……………」

エンド「如何したの、村正。」

村正「あ、エンド。実はというとな。私が作ったお守り、あつちの世界に追いつ
ちやつたみたいなんだ。」

雁夜「そういえば、そうだな。でも問題は、エンドのお守りだね……………」

エンド「あー、ラヴォスと戦つたときか。あれ何処に行つたんだろ。」

村正「うーん、一度ガルツチさんに連絡してみる?」

エンド「そうだね。」

side Change

—ヒメムラサキ 外—

ガルツチ side

村正『つて事で、お守り探してくれない?』

ガルツチ「お守りかあ、んじやあ見つかったらそれらを送るね。」

村正『うん。』

さて、今日は久しぶりに外に出回って近くにある森にみんなと一緒に行くとしたら、村正から連絡がきた。

しかしお守りかあ、これは手間が掛かりそうだな。

ミスト「誰からだったの?」

ガルツチ「村正から。お守りを探してきてって言われて。」

未来「お守り?どんなの?」

ガルツチ「キングダムハーツをやってる人ならわかるが、テラ、ヴェントウス、アクアの3人が持つてるお守りと酷似している奴なんだ。中央には桜の花びらで、僕のは藍色、雁夜は緑色、んで村正さんは桜色なんだ。」

ミスト「でも、兄やお守りってラヴオスの時に持って行っちゃったんだよね。」

ガルツチ「うん、仮に2つ見つけたとしても、僕のがなあ……………」

「というか、そのお守り何処にやったのかわかんないなあ……………」
「それさえ分かればどうか……………」

鈴美「ねえ、誰か倒れてるよ?」

ガルツチ「ん? あれって……………」

あの姿にあのスライムみたいな色……………、
「つてあれって!!」

ガルツチ「ライム!? おい、大丈夫か!」

フラン「え? 知り合い!」

???「う……………あ……………」

ガルツチ「しっかりしろ、ライム! 如何したんだ!」

アラヤ「母さん、この子の生命バイタルが低下してるよ。何か、毒を盛られてるようだよ。」

ガルツチ「毒ツ!」

「やばい、早く治療しないと。確か、毒消し薬を持っていたはず……………。スライムだし、全身にかければ早くなるかも……………」

こいし「それにしても、この子何で毒なんかに……………」

未来「まだ来たばかりで分からないけど、一体何が……………」
???「う……………ん……………。あれ?……………ロスト?」

ガルツチ「ライム、何があつたんだ?」

ライム「ロスト!!」ガバツ

ガルツチ「うお!?!」

毒が治つたと同時に押し倒されてしまうも、今回は服は溶けなかった。

ライム「あー、やっぱりこのにおいて……………ロストなんだね。」

ガルツチ「おい待て、ライム。何があつたんだ?」

ライム「あ、そうだ!!ロスト、大変な事が起こつたの!!」

ガルツチ「大変な事?」

ライム「兎に角、私についてきて。」

元気になったのはいいが、余り無茶しないで欲しいなあ……………。

本音「えーつと、これどういう状況?」

ガルツチ「今は先ず、ライムに着いていこう。」

ライム「こつちだよ!」

『ライム 17歳 誕生日不明 性別：女』

身長：130～155cm 体重：45kg

CV、種田理沙

種族：スライム娘

スリーサイズ：B98/W76/H99（最大はB110/W80/H100）

ロスト・エンドの頃の幼なじみのスライム娘。最初に出会った頃は獲物として見ていたのだが、別の魔物に襲われていたときに助けられ、今では好意を抱く。

主食は精液で、日々男性が来ると襲いかかって無くなるまで絞り尽くすのだが、ガルツチの精液を味わったのか、もうガルツチ無しじゃ生きていけない程、依存している。

（因みに、任意的にあげていました。）」

（風龍「とうか、スライム娘が幼なじみってどゆこと？」

士「お前が設定してるだろうが。」

—スライム娘の村跡—

つて、なんじゃあああああああああ!?

未来「酷い、村が……………」

ライム「実は人間達がここに攻めて、村を壊滅まで追い込んだのよ。しかも、私達の村長は、自分を犠牲にして……………」

ガルツチ「じゃあ、ここにはもう、君しかいないのか？」

ライム「私はそう思いたくない。誰か生き残ってくれればいいけど……………」

ミスト「兄や、ライムちゃん。安心して。少なくとも生存者は確認できたわ。」

ガルライ「ホント!？」

ミスト「うん、ただ微弱な生命バイタルだから、手分けして探した方が良いかも。」

ガルツチ「よし、だったら見つけたらあの家に運ぼう。」

皆は頷き、それぞれ行動に出た。

side Change

―ロードの家―

Road side

ゲータィアか……………。しかも魔神柱やアルキメデス、そしてレフもあの場にいるの

か。さてと。

ロード「魔神柱フェニックス、状況は？」

フェニックス『はっ、現在如何裏切るかタイミングを測ってます。』

ロード「一応聞くが、君は不老不死かつ不死身であつてるよね？」

フェニックス『ええ、他の魔神柱には気付いていません。ですが、全魔神柱、どうやら殺されても永遠と復活する傾向があるようです。』

永遠と復活する……か。だったら……。

ロード「シーモア、いるか。」

シーモア「お呼びでしょうか、ロード様。」

ロード「確か君は、異体から最終異体の能力と、シンの宝具も持っていたよね？」

シーモア「ええ、持っています。」

ロード「よし、だったら早速任務として、英竜達がいる世界に行き、援護して欲しい。ただし、魔神柱のフェニックスは殺さないように。裏切る準備をしているから。」

シーモア「畏まりました。ですが、シンの宝具である『グラビドン』系は、相当な影響を及ぼしますが……。」

ロード「恐らく大丈夫だろう。さあ、行け。」

シーモア「では……。」

頼んだぞ、サーヴァントキャスターの『シーモア』よ。
side Change

—スライム娘の村跡—

ガルツチ side

ライム「此で全部?」

ミスト「うん。」

しかし、スライム娘って色の種類あるんだな。ピンク色もいれば黄色もいるし、更には僕の髪の色と同じスライム娘もいたし…………。

ガルツチ「…………ほとんど毒でやられてるのが多いな。流石に魔法薬では対処しきれないか。つととなると、久しぶりにこの魔法で治すか。解毒『キアリースモーク』。」

僕の手の平から煙が現れ、スライム娘達に纏っていった。やがて、紫色になった霧は、そのまま消え去り、毒に冒されていたスライム娘達の意識が戻った。

「う……………ん？あれ？私、一体……………」

「って人間!？」

「くっ、良くも村と村長をつ!」

ライム「あー、待って待って皆!この人達違うよ!!」

「ライム!?!其奴らから離れろ!殺されるぞ!」

ガルツチ「おい、落ち着け。先ず何が起きたのか言ってくれ。」

「ハッ!誰が人間の命令なんかに——」

ガルツチ「良いから言いなさい。」

「は……………、はい。」

本音「威圧で鎮めちゃった。」

少なくとも、僕は状況も読めないのに、あんな態度されたらキレそうだよ。何

? カルシウム足りてないって? 耐久性が低いのはカルシウムが足りてないからだって

?

チヨット何言ッテルカ分カンナイ。

液状娘説明中

「んで、此が奴等の旗。」

ん？あれ？この旗何処かで……………でも、あの旗とはなんか違う。僕の知ってるのは、太陽が沈んでおらず、輝いている紋章なのに、沈み掛ける太陽の紋章なんて……………でも、何故か見覚えがある……………。

ガルツチ「……………情報が足りない、一端ヒメムラサキに戻って、町長に連絡しないと。あ、そうそう。ライム達、ヒメムラサキに来ないか？事情は僕が説明するから。」
ライム「いいの!？」

ガルツチ「村が壊滅してる今、住むとこないだろ？なら来いよ。」

ライム「うんっ!」

「ちよつとライムちゃん、その人達信用して良いの?」

ライム「大丈夫、ロストなら安心できるし、私達を守ってくれるもん。」

いやライム、少しは疑え。無警戒しすぎじゃ無いの？

未来「ねえ、ライムだっけ?」

ライム「?」

未来「ちよつと無警戒しすぎだよ？気を付けないと、レイプ魔に襲われちゃうかも知れないから。」

ライム「あ……………、うん。気を付ける。」

さてと、皆に如何説明しようかなあ………。

t o b e c o n t i n u e d
→

第72話 不穏なる王国

—
???

ゼロノス side

クツクツク、奴ら何も知らずに全滅しようと思死になっているな？魔神柱達が死んで行けば行くほど、こちらに英竜達のデータが揃っていく。

ようやくだ、ようやくで……………ん？

ゼロノス「何だ？魔神柱フェニックスが届くはずのデータが来ない？」

何故だ？一体何があったというのだ？いや、気にしないで置こう。ほぼ揃っていれば、後はどうでも良い。

っていうか、此が手っ取り早かった。馬鹿か？俺は？とりあえず資料はホームクルスに渡してっと。

ゼロノス「ハア……………、疲れた。ちよつと気分転換に出掛けるか。ストレス解消の為に……………」

あー、疲れた……………。暫く出番無くてもいいや。

(風龍「オイオイオイオイ!?ラスボスが言っちゃいけない台詞だぞ!」)

全王神「あー大丈夫、終盤で復活するし。」

風龍「それもそっか。」

士「というかさつきから、俺ツツコミ役にしかやってないんだが……………」

sideChange

—ヒメムラサキ 町長の家—

ガルツチside

ガルツチ「つというわけです。」

「なるほど、じゃからどういう訳か、スライム娘達がガルツチ達と共に入ってきたという訳か。」

ミスト「そう言うことですな。」

「まあ一応、その村で何が起こったのか、ライムが一から説明してくれた。」

「……………!?そ、そうか。やはり……………」

ガルツチ「町長？やはりって？」

「ガルツチ、厄介なことになったぞ。この旗の紋章、変わってるが『サンライト王国』だぞ!？」

ガルツチ「ブウウツ!？」

余りの驚きで、口に含んでいたお茶を吹き出してしまった。って、ホントに厄介なことになってるな!?!

ガルツチ「嘘だろ!?!嫌な予感はしていたが、そんな馬鹿なことがあるのか!？」

「何だ？知ってるのか？」

ガルツチ「かつて、あそこに所属していた事があるが、前までは日光らしい日光なんて無かったんだ。最初は全く気にしていなかったんだが、段々不安になり、王に出会って見たら、相当なぐーたらしていて、殆どが大臣が仕切ってたんだ。王子に関しては、何かを恐怖してるかのように震えてたし。んで、暫くしてファイヤーエンブレムの英雄王とも呼ばれる『マルス』に戦闘技術を叩き込まれ、大臣に反逆した結果、王も目が覚め、王子の正気も戻ってめでたしめでたしって思っていたんだけど……………」

「実はというとな、それからの事なんじゃが、お主がいなくなつてから、またとんでもない事が起こつたんじゃ。その王と王子が、『暗殺』されたんじゃ。」

な……………なんだと
!?!?!?

ガルツチ「じゃあテイキングはどうなったんだ!? 他の奴は!」
未来「ガルツチ、落ち着いて。」

「そう言う奴等はまだ分からん。じゃが、新王の情報なら聞いたことがある。『グリア
ンズ・シャイターン』、邪知暴虐で悪名が高いのが有名な奴で、超が付くほどの税金を払
わせ、自分は酒池肉林をするというとんでもない——ガルツチ?」

「なんて奴……………ん?」

殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サ
ナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ
殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サ
キヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺
サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナ
キヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺
サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ殺サナキヤ
……………。

未来以外全員『(そこで落ち着くんだ………………。)』

(士「未来の奴、ガルツチの好感度カンストを振り切ったんじやねえのか？」

風龍「……………」

なんか聞こえる気がするけど、別に——

全王神『ちよつと皆!!!聞いて頂戴!!!』

全員『!?!』

ガルツチ「おい母さん!?!何だ急に!?!」

全王神『良いから、先ずは此を見て!!』

一体何が………………。

英竜『“僕”の勝ちだな。ゲーティア。』

ゲーティア『…………ふん。好きにするが良い。』

あれ?何でだ?英竜の顔、何処かで……………?

英竜『ん?好きにしちやって良いの?』

ゲーティア『勝者には、敗者を好きにしても良い権利がある。煮ようが焼こうが殺そうが、好きにするが良い。』

英竜『あ、そう。じゃあ……。クロツクGを暫く貴方に預ける。殺したら但じゃおかないけど、其の子と共に修行してみない？』

.....え？

しても問題が起きてまた消す。そんな無限に等しいループになるだけさ。それが嫌なら、世界を壊すなんて馬鹿な真似、やめた方が良い。』

ゲーティア『……………ふん。』

英竜『ねえ、ゲーティアがどんな存在かは知らないし、何者かも知らないけど、人間を信じろとは言わない。でも、この美しい世界は、本当に壊すしか無いのかな。』

ゲーティア『……………主には、報告させてもらう。きつと後悔するぞ。』

英竜『そうなっても仕方ないよ。まっ、そうならないよう努力すれば、どんなに絶望的であっても、何度でも立ち直れるんじゃないかな?』

ゲーティア『……………ふん、来い。』

クロック『うあー♡』

そして、そのまま映像は途切れ

ガルツチ「ガッ!?アアアアアア!?!?!」

ミスト「兄や!?!」

未来「ど、如何したの!?!」

なんだ此!?!頭が、頭が割れるほど、痛い!?!?!なんだ!?!一体何が!?!

???

痛みが引くと、そこにはクロックGとゲーティアが次元の狭間で休んでいるのが見えた。

ゲーティア「……………とは言え、今後は如何するべきか。」

クロック「？」

ゲーティア「早く気付くべきだったかもしれない。フェニックスはいつの間にか裏切り、ロードとか言う男に持つて行かれ、そもそも我々魔神柱は、捨て駒に過ぎなかった。今更、主の所に戻る必要があるのか……………？」

クロック「あー、あー。」

ゲーティア「ん？なんだと？」

クロック「うー、あー。おー、おー。」

ゲーティア「主を裏切れと?!しかし、私は……………。そういえば、あの遠坂凜と衛宮星夜の奴等は……………」

何故だろ、ゲーティアに笑みがこぼれてた気がする……………。

ゲーティア「……………そこにいるのだろうか?ゼロノス様を仇となる者よ。」

ガルツチ「!？」

ゲーティア「なるほど、あの英竜とは違うベクトルで、相当な力と技術を持つてるよ。うだ。」

ガルツチ「……………なら如何するんだ？」

ゲーティア「待て、私はもうお前達に敵対しない。それに、暫くはお前達の刺客は来ないであろう。」

ガルツチ「何故そう言える。」

ゲーティア「ゼロノス様は、既に英童達の能力のデータを取得した。奴の最終兵器の完成まで、間近に迫ってきてる。が、配備されるのは、相当掛かる。」

ガルツチ「……………何故教える？」

ゲーティア「何故だろうな。貴様なら、ゼロノス様を止められると思ったからかな。」
クロック「あー、うー。」

おいおい、過大評価しすぎじゃねえか？

ゲーティア「さてと、いずれにせよ居場所を失った今、何処へ行くべきか……………」

ガルツチ「だったら、爺ちゃんのとこに行つて。未来達から聞いたけど、スパルタではあるが、鍛えやすいだとか。」

ゲーティア「ふん、スパルタ教育か。ならばそこに向かおうではないか。行くぞ、クロックG。」

クロック「あーい。」

ゲーティアは立ち上がり、もう一度クロックGの手を握り歩き始めていった。

ゲーティア「忠告しておく。英竜に手を出すな。奴は、お前達が思っている以上に厄介な奴だぞ。」

ガルツチ「分かっている。でも、もしあの人が僕の大切なものを奪おうとしてたら、その時は死ぬ覚悟で復讐する。」

例え未来達が、危険人物だと分かっても、僕は最後まで守るつもりだ。完膚無きまで折り続けようが、錆びれていこうが、何度でも戦い続ける。それが、『ライク・バスター・ガルツチこの世の全ての刃』が許された最後の使命だから。」

ゲーティア「……………そうか。」

そうして、2人は渦の先へ行き、姿を消した。

英竜「大きく出たね、ガルツチ。」

ガルツチ「……………聞いていたのか。」

英竜「ええ、勿論よ。最初から最後まで。」

ガルツチ「そうか。」

英竜「本気？ 貴方の大切なものを奪ったら、私に復讐するって。」

ガルツチ「ああ、勿論だ。」

英竜「いくら貴方でも、私には勝てないよ？」

ガルツチ「かもな。だが構わない。それならば何度でも立ち上がり、何度でもお前を殺す気で挑むから。」

ついでだから英竜、此方の忠告を聞いておけ。」

英竜「？」

ガルツチ「『この世の全ての刃』を、甘く見るな。鞘がなくなれば、全も、無も、虚も、何もかも斬り裂く『刃』と化す。『この世の全ての悪』より、質が悪いから、覚悟しておけ。」

英竜「……………何もかも斬り裂く『刃』、ね。分かった、その忠告受け取る。」

しかし、どうやってこっちに来たんだろ？ いや、いいか。

ガルツチ「そういえば、英竜。」

英竜「なんだ？」

ガルツチ「もし、君の前世を教える気があつたら、誰でも良いから話してね。その辛さ、いつか身を滅ぼすかも知れない……………」

だから、僕みたいに一人で抱え込まないで。」

そうして、視界が真っ白になり、気がつけば、僕は布団に寝かされていた。

—ガルツチの家—

未来「ガルツチ！大丈夫!？」

ガルツチ「あ、ああ。何とかな。」

どうやらさっきの頭痛で気を失い、未来が家に運んでくれたようだ。

未来「もう、いきなり頭痛で倒れるんだから、皆慌ててたよ？ホントに——」
ガルツチ「……………」

でも、確かにあの頭痛は何だったんだろう？気が付いたら変な場所についたし、あれはどう言う意味なんだ？

だけど、何かが……………何かが近付いてる気がする。何なのかは分からないが、この頭痛は何かを意味している。

でも、如何していきなり頭痛なんかに——

未来「ガルツチ!!」

ガルツチ「はいっ!？」

未来「ホントに大丈夫？今度はブーツとしていたようだけど……………」

ガルツチ「……………大丈夫。」

未来「何だか心配だよ。この世界に来てから、何だか様子がおかしいよ?」

ガルツチ「つ……………」

未来「少し休んだら?それか、ここで旅をやめるのも——」

ガルツチ「それだけはダメツ!!お願いだから、それだけは……………やめて。」

もう未来と離れたくない、また遠距離恋愛は、もう嫌なんだ……………。

未来「……………ごめん、此は禁句だったね。君の場合。」

ガルツチ「いや、怒鳴ってごめん。考え込んでいたとはいえ、心配掛けちゃったしね。」

未来「それで、何が見えたの?」

ガルツチ「ゲーティアは、こう言ってた。今後は刺客は来ない、って。それと、英竜と再会したんだけど、何故か既視感があったんだ。何処か見覚えがある気がして……………」

未来「え?それって、僕みたいなの?」

ガルツチ「さあ、未来と同様記憶が曖昧だからね。この記憶は、遠藤宇宙の頃か。ロスト・エンドの頃か。もしかしたら、僕の知らない本当の前世が、持っているのか。」

未来「待って、そこは考えすぎじゃないかな?少なくとも、君の前世は色々あるだろうけど、考え込みすぎるとパンクしちゃうよ?」

確かに、またあの頭痛は勘弁だ。

ガルツチ「つて、考え込んだら、ちよつと目眩めくらが……………」

未来「今日はゆっくり休んで、回復したら町長さんが言ってた『サンライト王国』の調査しに行こう？」

ガルツチ「分かった……………」

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第73話 思い出したくない場所

—草原 桜通り—

ガルツチ side

どうも、この世界に戻って以来何故か頭痛やら目眩やらし始めてきたガルツチです。いやもう散々だよ。如何したって言うの一体。今までの世界はこう言うことはなかったのに（大怪我は免れないが）、何でいきなりこんな症状が？

未来「ねえ、やっぱり休んでたほうが……………」

ガルツチ「分かってはいるが、やっぱり落ち着かないっていうか、どうもねえ……………」

実際、まだ頭痛と目眩が続いていて、今は未来に担がれながら歩いている状態になっていた。ホントに此なんなの？

ガルツチ「ん？」

今さっき、あの桜の木々に何かがいたような……………？

未来「如何したの？」

ガルツチ「あの桜の木々に何かが……………」

未来「え?……………いないけど?」

ガルツチ「……………遂に幻覚も見え始めてきたのか?死地に近づいて——」

未来「ちよ、冗談でもそれ言うのはやめてっ!」

此が冗談だったらどれだけ良いのか……………、幻覚も見え始めるって、もう死ぬのでは?
は?

クリムゾン『おいおい、お前が死んだら物語が成り立たねえだろ?!』

ラクト『でも、ホントに体調が悪くなってるよ?もし熱でも上がったら……………』

それこそ死地だな。というか頭痛に目眩、幻覚で更に熱が40度以上あつたら、もう

これ死を覚悟した方が——

ガイア『ヴァカか!?本気でそれだけはやめい!!!』

あー、何だか彼岸花が見えてきたく、綺麗だなあく……………。

未来「ガルツチ?ちよっと、通つちやダメなところに通ろうとしてない?」

イフ「未来、ガルツチの頭痛の原因が分かったぞ。どうやら、新たなスタンドが発現しようとしてるのだ。」

未来「え?『ムーンライト・アウターヘル』とかあるのに?」

イフ「あれは転生神ラヴオスからの特典。オリジナルスタンドとは言え、特典のスタ

ガルツチ「……………幼いかもな。確かに、憎悪と憤怒で上塗りしているから、幼くは見えないかも。でもスタンドは、見破ったってわけか。」

イフ「そう言うことだな。だが、ガルツチにしか見えない奴か……………」

幼い……………か。僕のスタンドは、見破っていたのかな？未だに虐待され、恐れ
てばかりの幼い自分を、見破ったって事なのかな？

未来「だとしたら、どうやって精神を強くすれば——」

ガルツチ「あ、さっきの子！」

未来イフ「「え？」」

ガルツチ「あ！待って、ちょっと待ってって!!」

未来イフ「「ガルツチ!」」

何故だろ、何故か逃げてるあの子に近づいただけで頭痛と目眩が酷くなってる……………！
でも、勘がこう言ってる。あの子が秘密を握ってるって……………。

そうしていく内に、段々薄暗い森に入っていく、更に頭痛が酷くなってきた。そして、
その子が止まった場所に着くと、僕にとって忌々しく、最も思い出したくない場所に着
いてしまった。

デイマイズがかつての僕に憑依した場所であり、自分自身でも帰りたくない場所でも
あった。

未来「ガルツチ!! ハア……ハア……、如何したの一体?」

ガルツチ「……………帰って来ちやった。」

未来「?」

ガルツチ「ここに、……………帰りたくなかった村に……………。『虐待の村』に……………」。

—虐待の村—

未来「虐待の村?」

ガルツチ「言葉通りさ。ここには、愛情なんてまるつきり存在していない、ただ生まれたことを後悔させる為に、虐待や暴行、絶食など色々とやられた忌まわしき村さ。しかし、ここに来た途端、頭痛が無くなるとは……………。目眩も全くしないし。」

イフ「気を付けろ。この怨念、凄まじい程多いぞ。」

ガルツチ「知ってる。嫌でも分かるさ。多分動物も、無機物でも拒否反応は起こるだろうな。」

僕は覚悟した上で村の中に入り、先程の子を探していた。

未来「酷い……………、子供たちが痩せ細ってる……………。殴られてる子も……………」。

ガルツチ「……………死体も平気で、捨ててるしな。」

イフ「お前は、こんなところで転生させられたのか。」

ガルツチ「ああ、正直此は嫌だった。母さん、ホントに覚えてるよ?」

全王神『ごめん、ぶつちやけ此は気が付かなかった。』

だが、先程の子供は全く見つからず、居るのは子を殴る親、自分の子を犯す親、殆どが子を虐待させる光景しか見えなかった。

「何だテメエら、こんな村に何の用だ?」

ガルツチ「子を虐待するような奴に言いたくないね。」

「何だとガキ!」

ガルツチ「黙れ下郎、さっさ退け。殺すぞ。」

未来「が、ガルツチ。それは——」

「……………ほう、気に入らねえ目をしているが、面白えツラしてるな。まるで、この村を知ってるかのようなツラだな。」

ガルツチ「元この村出身者って言えば、分かるか?」

すると、その男が驚愕し、そして声を荒げた。

「おいお前ら!!聞いてみる!!此奴、元この村出身者って言ってるぞ!!!」

「何だって!?!」

「そういえば、彼奴の家に無残な死体に成り果てて……………」

「そのガキが消えたって話を聞いたわ。どうでも良いけど、まさか?」

ガルツチ「チツ、しようがねえ。未来、巻き込んでごめん。口調変わるけど、気にしないでくれ。」

未来「え?それってどう言う……………」

すぐに分かるよ。

「へえ、あのガキが帰ってくるなんてね。可愛い顔で帰ってきて。」

ガルツチ「触るな、アマ。鬱陶しい。」

「てつきりくたばってたと思ってたが、何だ?寂しくて帰ってきたのか?」

ガルツチ「テメエらのような豚にも劣るような村に、誰が寂しく帰るか。兎に角さつさと退け。」

「おい、大人の俺達に向かつてどう言う口をしてんだ?オラ。」

ガルツチ「本来貴様らのような下郎共にも、喋らせる口なんて無いんだがな。耳障りだし聞きたくもない。」

しかし、もうこれ以上怒りを抑えるのは難しいな。早くあの子を見つけないきゃ。でも何処に?

「た、助け……………」

「喋るなガキ!!!」

『プツンツ』

ガルツチ「……………未来、俺もう我慢の限界だ。悪いけど、まだ生きてる子をつれてこの村から連れ出してくれないか？」

未来「え？あ、うん。『ザ・ワールド』!!!」

未来は僕以外の時間を止め、直ぐさまこの村にいる子供達を連れて、村から出て行かせた。残ったのは、僕と虐待した大人達だけとなった。

ガルツチ「ジャンヌ・オルタ。復讐の時間だ。力を貸せ。」

ジャンヌ（オルタ）『ハッ、まさか貴方のような人に、私に指図するなんてね。』

ガルツチ「世迷い言はいい。竜の魔女として、此奴らを、この村を焼き尽くしたい。」
ジャンヌ（オルタ）「アハハハ!!!いいねえ、気に入った！私の力で、存分に振るいなさい！」

ガルツチ「ああ、果てるまで扱き使ってやる。」

僕は直ぐさまケースから一枚のカードを引くと、黒い炎が纏わり付いていて、絵柄には邪悪な顔で嘲うジャンヌ・オルタの姿が見えた。

「何だ？」

ガルツチ「死んでいった子供達の怨念を聞かせてやる。そして絶望しろ。『復讐者』、アウエンジャー

『ジャンヌ・ダルク・オルタナティブ』、『Connect in
絶望の魔神デイクスベア、エビルインストー
Despair darkness Gaia Evil God』、『魔夢幻召喚』

!!

黒い炎と闇が僕に纏わり付き、竜の魔女『ジャンヌ・オルタ』の姿へと変貌し、更に両腕は引き裂くような爪と化した。

「こ、此奴!?俺達の村を!」

「おい!村長呼べ!!村長を!!」

村長?そういえば、ここの村長つて見たことなかったな。

「何だ?騒がしい、女とヤル時間がねえのか?」

「そ、村長!!」

……………なあ。

ジャンヌ(オルタ)『何?』

あの村長だけど、どう思う?

ジャンヌ(オルタ)『言いたいことは分かる。』

うん。

ガルジャン 「『チェンジを要請する。』」

(風龍 「そこっ!?!」)

「ほう? テメエがあ親のガキか。なるほど、帰ってくるとは想定外だが、丁度良い。オメエら!!! 歓迎してやれ!!」

ガルツチ 「その前に、俺からの贈り物だ。受け取れ。」

僕は直ぐさま黒い炎を作り出し、周囲に回り始めた。

ガルツチ 「全ての邪悪をここに……………、彼らの報復の時は来た!! これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮……………! 憎悪の炎に焼かれ、絶望の闇に堕ちろ!! 『吼え立て、呼び起こせ、我らの憤怒』
!!!!!!」

燃えろ、忌まわしき記憶! 消えろ、虐待する下郎共!! この村ごと、森ごと我が憎悪と共に焼き尽くせ!!!!!!

t o b e c o n t i n u e d

第74話 歪んだ精神と清らかな魂

—ヒメムラサキ—

未来 side

とりあえず、ガルツチの言われたとおりに子供達を連れだしたけど、凄く怯えていたし、お腹もすかせてるし、そう思った僕は一度ヒメムラサキの方に戻った。

簪「あ、お帰り……………ってその子達は？って何でそんな状態に!？」

未来「簪、この子達は親に虐待されてて。」

簪「……………ガルツチは？」

未来「村に残って、何かしようとしてる。凄く怒っていたし……………。兎に角先ずは、子供達を！」

簪「分かった。皆、怯えないで。私に着いてきて。」

子供達はガクガクと震えていて、怯えているも、すぐに頷き、簪に着いていった。彼女なら、きつと……………。それより、ガルツチが心配だ。本当に憎悪に満ち溢れているし、性格もまるで……………。

ちよつと待って、精神が幼い理由で……………。”虐待に対する復讐心?”

深雪「あ、未来。ガルツチは？」

未来「それが……………」

僕は直ぐさま説明した。虐待の村という場所のことも、ガルツチが子供達を頼むと言ったこと、知ってるかぎり教えた。

深雪「なんやねんそれ!?!というかうち、嫌な予感しかしない!他の皆にも伝えて!!ほなはやく!!」

未来「…………改めて深雪って、関西出身なんだなあって思うなあ……………」
 って言ってる場合じゃない!他の皆にも伝えないと!!!

side change

—虐待の村—

ガルツチ side

「なっ、何だこの炎!?!俺達に——」

「ウギヤアアアアア!!!焼かれるウウウ」

「嫌だ……………、私、私死にたく——!!!」

そうだ、助けを請え、叫声を上げる、絶望の闇に溺れるがいい!!それが、貴様らにとつ

て、唯一の救いだ。

「き、貴様!!こ、こんな事をして、何になる!!何も変わらんぞ!!例え虐待の村を消したところで、何も変わらんぞ!!」

ガルツチ「構わない。こんな忌まわしく、穢らわしい、人間性を貶すような村が、この世に消え去れば、それでいい。この森と共に、俺の憎悪と絶望の炎に焼かれるがいい!!!」

「分かった、分かった!分かったから、俺達を——」

ガルツチ「助けろと?断る。何自分達が助かろうとしてるんだ?子供達もそうやって、誰かを助けを請えてたんだ。それが貴様らの罪だ。言い訳なんて聞きたくない。」

僕は空かさず黒い炎を放ち、村長と思わしき人物を燃やした。森と村は黒い炎で覆われ、僕の好きな桜を燃やさないように気を付けながらも、燃やし続けた。

村の外に逃げようとした奴は、青い炎に焼かれ、僕を殺そうと襲った奴は黒い槍を放ち、殺した。この辺り一帯を焼け野原にするために、この忌まわしき記憶と共に、この歪みきった精神と共に、何もかも消えてしまえば——

『兄や、ストップ!!!!!!』
この声、もしかしてミスト？僕は直ぐさま後ろを振り向くと、ミストだけでなく、未
来達も来ていた。

ガルツチ「なっ!?!皆!?!何で!?!」

ミスト「話は未来兄に聞いたよ！兄や、お願いだからこの人達を許してあげて!!」

ガルツチ「な、何言ってるんだよ？此奴らは、子供達を虐待した奴等だぞ!?!それを許

してあげろって!？」

未来「確かに、虐待は許されるものじゃないのは分かってる。でも、復讐なんて駄目だよ!!」

ガルツチ「そんなの分かりきってる!!けど、それでも復讐しないといけないんだ!!誰かがやらなきゃ、また生まれてくる子供達が………!」

深雪「かと言って、こんなのあんまりやらないか!!何も森ごと燃やす必要はないやろ!?このままじゃ桜も燃えるやないか!!」

ガルツチ「あ、桜のことは大丈夫。ちゃんと気を付けて森を燃やしてるから。」

深雪「何その器用な復讐の炎。っていうか何処まで桜Loveなんやねん。」

逆に桜嫌いな奴がいたら、宣戦布告だ。桜を全身全霊で守り切ってみせる。って、それは良いか。

全王神『うちの息子が、桜に対して愛が深すぎる件について。』

キング『相当好きなんだな……。』

まあその話はおいおい聞きますよ。

深雪「ってそれは良いとして、ええ加減炎消してやりや!!」

ガルツチ「だがっ!!此奴らは………。此奴らはっ………!!」

ライム「ロスト、貴方………何で言わなかったの?」

ガルツチ「らっ、ライム!？」

ライム「貴方が此処まで病んでるなんて聞いてないよ!!」

全員『そこっ!？』

ガルツチ「いや皆、強ち病んでるのは間違いないだろ。つていうか、シリアス。シリアスが働いてないよ？」

あれか？シリアスが働こうとしてたら全力で止める設定とかあんの？

「い、今の……………内に……………、逃げ……………なきや……………。こんな……………奴に……………殺され……………ない……………、場所に……………」

ガルツチ「誰が逃げて良いと言った？」

『ザクツ!!』

「ヒィィ!!!」

フラン「お兄ちゃん!!」

ガルツチ「村長、特にお前を許さない。こんな村にしたのも、この歪んだ精神にしたのも、お前だ。この闇も、この炎も全部、全部……………お前が望んだものだ。」

「ま、待て!!俺は、俺は——」

ガルツチ「お前がほしかったのは、金目のものや美女とかじゃないだろ？本当に望んだのは……………」

「やめろ……………、やめろ……………!!」

ガルツチ「子供達の、悲痛の叫びと……………。」

「頼む……………、それは——」

ガルツチ「親に対する復讐……………。」

「殺さないで……………、死にたくない……………。」

ガルツチ「そして……………、村を失い死の間近に迫るときの絶望だろ？ 今から、それを返してやる。」

「あつ……………ああああ……………!!!」

ガルツチ「無様だな、とても村長とは思えない程の震えだ。まあいいか。」

僕は直ぐさま、黒い炎を纏った剣を抜き、村長を振り下ろそうとした。

ガルツチ「さあ、受け取れ——」

ミスト「兄やストツプって言ってるでしょ!!!」

ガルツチ「は、離してミスト!!」

ミスト「離さない!! 兄や、お願いだからもうやめて!!」

ガルツチ「何で、何で此奴を庇わなきゃならないんだ!!!」

ミスト「だって……………、兄やは優しいままがいいの! 残酷な復讐者に堕ちる兄やな

んかより、優しい復讐者の兄やがいい!! だからお願い、その人を殺さないで!!!」

その途端、もう一人の誰かが僕を抱き締めているのを感じ、下を見下ろすと、先程の子が居た。

『だめっ!!優しいままでいて!!』

ガルツチ「さっきの……………ウツ!!」

また頭痛……………いや、違うっ!!何かが、何かが僕を蝕んでいるのか!?

ジャンヌ（オルタ）『ちよっと!?!アンタなんなのこれ!?!こんな聞いてないわよ!?!』

え?!何がいるんだ!?!

ジャンヌ（オルタ）『何って、人型の化け物よ!!!兎に角どうにかして!!!』

ええええええええ?!?!いやどうやって——

『お願い、自分に!?!歪んだ精神を、あの子を止めについて!!!』

その声を言った途端、意識が薄れてしまい、ぐったりと倒れてしまった。

型で保っていられるのがやつとなぐらい崩れていて、まさしくおぞましいと言う言葉以外に見つからなかった。

ガルツチ「何あれ……………」

『あれは、貴方の精神。憎悪と絶望に呑み込まれる寸前の貴方よ。』
ガルツチ「……………」

『このままだと貴方、彼奴に魂を食われて、本当の復讐者になってしまうわ。』
ガルツチ「改めて思うと……………」

『?』

ガルツチ「僕って、此処まで醜いとは思わなかったな。ハハハ、嗤えちやうな。そりやスタンドも、見破るか。」

まあ、どうせやることは一つ。と言つても、単純な作業だな。

ガルツチ「自分の始末は、自分で付けなきやな。来い!!!化け物!!その不拔けた精神を、たたき直してやる!!!」

sideChange

—虐待の村—

深雪 s i d e

ん？あれって………。

英竜「大丈夫ですか？全王神様の息子さん？」

フラン「英竜お姉ちゃん!」

藍「うわー、また派手にやっちゃったねえ……。この様子からして、ジャンヌ・オ
ルタの宝具を使ったのかな?」

英竜はんに、藍さん!?!って他の皆も!?

英竜「おーい、大丈夫?」

イフ「どうやら、自分の精神と戦ってるようだ。」

英竜「自分の精神?」

イフ「そう、どうも新たなスタンドが目覚めようとしているようだが、その時に頭痛
や目眩も起こしていたようなんだ。」

夜神「ええええええ!?!」

ライム「スタンド?」

未来「ガルツチなら苦も無く手に入るはずだけど、どうやら虐待のせいで精神的に幼
いまま、代わりに憎悪と絶望が担い手となって生きていたんだ。」

英竜「つまり、彼は自分の憎悪と絶望に蝕まれて、自我を失おうと?」

ガイア『まあそう言うことだな。』

英竜「スタープラチナが喋った!?!」

イフ「ガイア、ガルツチの様子は?」

ガイア『奴は、何故か笑つてた。』
笑つてた？

英竜「笑つてたつて？」

ガイア『自分の醜態さを見て、滅茶苦茶笑つてた。だが、奴は戦つてる。憎悪と絶望に取り憑かれた精神を、取り戻すために。そして、”純粹”な憎悪と絶望を取り戻すために……………」』

英竜「純粹？」

ガイア『ようは、彼の憎悪と絶望は、暗殺者^{アサシン}のジャック・ザ・リッパーのように、水子的な存在なのだ。

精神が幼かったのは、感情の『憎悪』『絶望』が借り物だったというわけだ。』

夜神「じゃあ、その二つを取り戻せば——」

イフ「スタンドも手に入り、漸く自分の憎悪と絶望を取り戻すことが出来ると言うわけだ。」

英竜「じゃあ、今すぐにでも——」

ガイア『英竜、だったか？それは無理な相談よ。もし不用意にガルツチの中に入って見よ、他人を気にするあまり、敗北の可能性もある。そつとしといてくれ。』

今更なんだが、ガイアっておっさん声なんやな……………。

「い……………今の内に——」

「ハイ確保。」

なんか聞こえたけど、気のせいやな。
ともかく、復活頼む!!ガルツチ!!!

t o b e c o n t i n u e d
⇨

第75話 神話スタンド覚醒

—
???

ガルツチ side

全く、今まで僕の世界でどんなものなのか、ずっと知らなかったけど、いざ蓋を開けてみれば……………。なんて事は無い。憎悪と絶望に溺れ果てようとしてる醜く哀れな存在だったとは……………。

フレディ「つて何じゃこりやあああああ?!?!?!」

ガルツチ「フレディ!?!お前、何でこんなとまろに!?!」

フレディ「知らねえよ!?!寝てたらこんな場所に着いたんだよ!」

ガルツチ「何つうタイミングだ。」

フレディ「つていうか、ありや何だ!?!」

ガルツチ「……………憎悪と絶望に溺れ果てようとしてる僕の世界さ。まるつきり、化け物だ。」

フレディ「おいおい、キースより厄介じゃねえか。勝てるのか!?!」

ガルツチ「勝てるのかじゃない。勝って、『取り戻す』!!」

僕は直ぐさま2本の剣を取り出すと、今度はホツケーマスクを被ったジェイソンが現れた。

ジェイソン「うー、何で僕がこんなところに？」

フレディ「ジェイソン!？」

ジェイソン「つてフレディ!？」

ガルツチ「お二人さん、先に此奴を仕留めるぞ。」

ジェイソン「そうだね。」

【デンジャラスゾンビー！】

フレディ「んじゃ、共同作業と行くか！」

【マイティアクシオンX！】

ガルツチ「おい、二人とも。此奴相手に、それで行けると思うか？」

フレディ「じゃあ如何する？」

ガルツチ「二人とも、此奴を使え。」

僕がフレディに渡したのは、マキシマムマイティUXガシヤットの改良版。他のガシヤットと違って、こちらはカラーは光沢のある赤と緑。ガシヤット下部にエグゼイドの頭部が象られた『アーマライドスイッチ』があり、これまでのガシヤットとは違った特異な形状。

そしてジェイソンに渡したのはマキシマムゾンビXガシヤット。マキシマムマイティUXガシヤットと同じだが、こちらはオニキス色と白、赤と青の4色を使ったガシヤットとなってる。

ガルツチ「此奴なら対抗できる。」

ジェイソン「えつと、これバグドライバーでもさせるのかな？」

ガルツチ「本来此奴はバグドライバー専用として改造したガシヤットだからな。バグスターウィルスも極限まであるけど、ジェイソン用に使えるようにしてる。因みに、其奴は憎悪と絶望、破滅、殺戮の力を持った混沌のガシヤットだ。」

フレディ「チート………。まあいい！行くぜ、ジェイソン！」

【マキシマムマイティアルティメットX！】

ジェイソン「うん！」

【マキシマムゾンビX！】

フレディ&ジェイソン「マックス大変身!!」

【アルティメットガシヤット!!!】

【マキシマムガシヤット！】

【レベルエクストラ!!究極級のパワフルボディ！ダリラガン！ダゴズバン！】

【バグルマックス！不死身の最強ボディ！ダリラガン！ダゴズバン！】

【マキシマムアルティメットX！】

【マキシマムパワーX！】

おう、二人ともなんかデスピサロ的な姿になったな。そんじや、やるとしますか。

ガルツチ「来い、俺達がお前の正気を取り戻してやる!!」

sideChange

???
side

やっと、見始めてくれた。それに、彼だからこそ止めることが出来る。正直、関係のない者がいるけど、彼と一緒にだからきつと勝てるはず…………。

全王神『ふーん、ガルちゃんの本当のスタンドって、可愛らしいんだね。』

全王神……………か。まあ気付いているとは言え、この姿は仮だよ。

全王神『だと思った。それにしても、これが本当のガルちゃんだったなんて。』

ごめんね。思ってたより、ロストエンドの頃の絶望と喪失が大きくて、挫折しちゃっ

て耐えきれなかったんだ。それにしても、転生者って大変だね。自由になっても良いのに、霊長の抑止力のアラヤと星の抑止力のガイアが、そうはさせないと言わんばかりに邪魔してくるし。一層彼らを消滅させて、抑止力なんて消しちやえばいいんじゃないの？ そしたら、全王神がやってくれれば結果オーライだと思うんだけど。

全王神『うーん、まあ抑止力はホントにろくな者じゃないのは知ってるけど、流石に私がやるのはちよつとねえ……。』

えー、僕はその方がいいけどね。

全王神『それで、如何するの？ 息子じゃないガルちゃん。』

そうだね。いずれにせよ、僕はガルツチとなつた彼を守るために、さつきも言ったが僕はスタンドになる。

英竜にも、未来にも、あの完全生命体イフでも、全く刃が立たない最強かつ無敵のスタンド。ううん、あらゆるスタンドを超えたスタンドへと変わる。

でも、その為にはガルツチが自分の憎悪と絶望を取り戻さなければならぬ。じゃないと、真価を發揮できないからね。この力は、多分ゼロノスでも知らない力であり、恐らく英竜でも欲しがるような力だしね。

全王神『そうなの？』

うん。それが僕、ラーク・バスター・ガルツチの本当の力。真実ですら変えられない

属性、それは……………。

いや、今はいいや。この力は、本気でアラヤもガイアも敵視するような力だからね。全王神『バスター……………この意味ってもしかして……………。そう言うこと?』

うん。父さんがこのミドルネームにしたのは、そう言う意味なのかもね。全も、零も、虚も、無も、絆ですら、『滅ぼす』力だしね。

子ガル「さあ、ガルツチ。今こそ君の感情を取り戻すときだ。」
sideChange

ガルツチside

BGM Fate/EXTELLA 主題歌『extella』

さつきの声が聞こえた。取り戻すときだと。ならば、取り戻してやらねえとな!!
フレディ「オラア!!」

【HIT!!】

ジェイソン「ハアツ!!」

【HIT!】

ガルツチ「光よ、全てを貫け!! 『オールライト・ノア』!!」

僕は先程母さんにもらった神刀で光を収束し、光の斬撃を繰り出すと、漸くポロポロへと追い込むことが出来た。

と、その時だった。謎の虹色の光線が、僕の精神に直撃し、苦しみだした。

フレディ「ぬお?! なんだありゃ!?!」

ガルツチ「これって、ウルトラマンコスモスの!?!」

ジェイソン「そうなんですか!?!」

ガルツチ「うん。って事は、簪と英竜が……………」

そして……………」

未来「ガルツチ!!」

フラン「お兄ちゃん!!!」

ガルツチ「未来、フラン!!」

未来「って、フレディ!?! ジェイソン!?!」

フレディ「よっ、なんか知らねえがこっちにきてよ。」

ジェイソン「僕も同じです。」

未来「それよりガルツチ。今なら脱出出来る。早く——」

ガルツチ「未来、フラン。聞いて。」

未来フラ「?」

ガルツチ「確かに脱出できるけど、このままだと何も変わらない。あの精神は、君の言うとおり元は幼かった。だが、憎悪と絶望が担い手になったせいで、精神がおかしく

なった。それが、あの成れの果てさ。自分の精神を見たら、なんて事は無い。醜くて、とても哀れすぎる化け物に変わってたよ。だったら、簡単な事だ。

此奴を、正気に戻す。そして本当の憎悪と絶望を『取り返す』!!」

僕は直ぐさま母さんからもらったベルトを付け、本郷猛が変身するようなポーズを取った。

ガルツチ「ライダー……………!! 『変身』!!」

瞬間、僕の姿は全身白いスーツのような物に包まれた。そこに両手にエグゼイドのような手袋になり、右眼は赤で左眼は青、青い肩や膝や肘の装甲がついた。

フレディ「な、何その姿?！」

ガルツチ「言うなれば、此奴は……………。『仮面ライダーロスト』! 虚の力を宿した仮面ライダーだ!!」

『■■■■■■……………』

ガルツチ「がっちり目を覚ましてやるよ。下がってて、二人とも。今来ようとしれる奴も、巻き込まれないようにね! フレディ、ジエイソン!」

フレディ「あいよ!」

【ガツシューーン! ガシャット! キメワザ! マキシマムクリティカルブレイク!!!】

ジエイソン「うん!」

「マキシマムクリティカルエンド!!」

2人は飛び上がると同時に、僕はバク宙しながら身体を捻って飛び上がり、2人と同じタイミングで跳び蹴りした。

ガルツチ「イマジナリー・ライダーキックウウウ!!!」

その時の皆の感想はと言うと、『3つの彗星が見えた』と。

BGM終了

いや待て、そんなに!?!後で映像見せてくれ。

そのまま僕の精神に直撃、完全に弱り果てたところで『ルール破戒すべき全ての符』を投影し、刺した。途端に黒い霧が大きく崩れていき、眩いほどの光が溢れ出し、気が付くとそこは僕の固有結界、『アンミリテッド・ディメンション・ワークス次元を超える無限の刃製』の世界にいた。

そして、そこにいたのはぐっすりと眠ってる僕の精神がいた。っていうか、幼児姿の僕って、こんなに可愛いものだったのか。

ガルツチ以外全員『グハアアッ!!!』

ガルツチ「……………なんて言うか、ごめんね。ガルツチ。本来なら、君が背負うはずなのに。」

子ガル「いいよ、気にしないで。それに、『ガルツチ』は君でしょ?」

ガルツチ「そうだけど、元々この肉体は、君の物だったんだ。それを、僕が横取りを
——
子ガル「そんなこと無いよ。これは自分で決めた宿命だし、何より君の運命を手伝うつもりだったからね。」

ガルツチ「そっか……………。この子はどうなるの?」

子ガル「……………暫くすれば、この子は勝手に成長していくよ。ただ、全王神が不老不死の呪いを継続して、25歳までしか成長出来ないけどね。」

ガルツチ「だろうな。」

子ガル「さてと、此で君はスタンドを……………ううん、『神話スタンド』を使う権限を与える。此を使えば、如何なるチートにも勝てるようになるよ。」

『神話スタンド』か。聞いたことはないが、それが僕の物になるのか。

子ガル「さあ、目を覚まして皆のところに戻っていつて。心配してるし。」

ガルツチ「……………なあ、ガルツチ。」

子ガル「なあに?」

ガルツチ「……………君と出会えて、よかった。」

子ガル「僕もだよ。『ガルツチ』」

そうして、僕は未来とフランの手を握り、視界が眩しくなる。だが、戻る間近に魂の僕が僕を微笑んでこう言った。

子ガル「安心して、『ガルツチ』。僕も、君のこと何時までも応援してるから。」

—虐待の村跡地—

目を覚ますと、そこには何故か鼻血を出しながら幸せそうな顔をした皆がぼったりと

倒れていた。

ガルツチ「……………なんでき。」

もうこの言葉しか出てこなかった。いやまあ、分からなくもないよ？でもね、流石に恥ずかしいよ？さて、『神話スタンド』を出すか。

名前は、そうだな……………。

ガルツチ『Moon Light Another Fate』！

そのスタンドの名前を呼んだ途端、そこには18枚の翼がついた青年で、虹色のマント、黒色のガントレット、純白の鎧を着込んでいた。そして、右胸部には三日月のタトゥーがついていた。

ガルツチ「此からも、宜しくな。ムーン。」

ムーン「うん、宜しく。」

どうやら喋る事も出来るようだ。

さてと、此どうしよう。どうやったら目覚めることが出来るんだ？

to be continued

第75. 5話 動き始める運命

—心の塔— 月夜ノ刻—

ルツチ side

ロヴァス「つと言わうわけじゃ。」

ルツチ「そつか、それじゃあ遂に……………」。

ヴォルデモート「ゼロノスも行動を起こしてらるだろう。」

長かった、こつちも準備も出来たことだし、そろそろ僕達も動くとするかな。

ブレイズ「だが問題は、何処に居るかだな。少なくともこの世界には居なさそうだし。」

アビス「そうですね。どの世界にもいなかったし……………」。

ルツチ「ううん、この世界にいるよ。」

レイス「ルツチ、でも何処にも——」

ルツチ「それは『ゼロノスがいない可能性』の世界って事。」

ノーム「じゃが、その意味……………いや待て？もしかして……………」

マルフォイ「俺達の世界とは違う『平行世界』!？」

そう、しかも今回は目星を付いている。この世界は、元々平行世界のようなもの。本来ならこういうことは、絶対にあり得ない世界でもあった。

本当なら、僕は『死んで』いた。でも、幾つかの偶然が絡み合ったのか、僕は『生きて』いる。

カレン「でも、私達知らないわよ？ 『平行世界』っていうけど、様々な可能性が——」

アルファス「そうそう、でも少なくとも俺は何処でもいそうだけど……。」
ルッチ「ううん、皆勘違いしてるよ？」

7人『え？』

ルッチ「この世界そのものが『平行世界』って事。」

マルフォイ「それじゃあ、この世界の原世界にゼロノスが？」

ルッチ「うん。その世界が、本来在るべき姿なんだ。無の神そのものが消滅し、そしてガルッチは様々な冒険を得て強くなっていき守護神となって世界を守るのだけ……。」

ブレイズ「様々なイレギュラーが介入したことによって、この世界になったって訳か。」

ロヴァス「そうじゃな。さてルッチ。子供達を。」

ルッチ「分かりました。」

ロヴァス「出発は明日じや。『プロトエンド・オブ・ザ・ワールド』に向かうために、悔いの無いように準備を済ませておけ。」

8人『はいっ!』

僕達はそこで解散し、自宅に戻った。

ロヴァス「さてと、恐らく儂の予想じやと、『全の竜神』の本郷猛は、もう既にあの世界に居るじやろうな。」

ダンブルドア「原点にして頂点、全てを司る仮面ライダー……………か。」「
ヴォルデモート「後はガルッチ達が合流できれば、きつと……………か。」

—スピリットレストラン— 月夜ノ刻—

無月「なるほど、つて事は……………」

ルツチ「うん、原世界で皆で行く。」

エミヤ「そうか。」

レミリア「まあ、此も運命よね。いえ、此は私達に課せられた運命というべきかも。」

さとり「久しぶりに、ガルツチさん達に出会えますしね。」

DIO「ルツチ、一つ聞く。」

ルツチ「？」

DIO「恐らくこの戦いは、我々が思っている以上に過酷な戦いが待ち受けている。

恐らく犠牲

者なしで帰れると言う可能性は0だ。

その辺は覚悟はしているか？」

ルツチ「……………確かに、犠牲者は免れないね。でも、負けるわけにはいかない。多分家族の中から犠牲者が出て、その思いを胸に前に突き進む事にするよ。」

DIO「そうか。ならば心配無用だな。」

承太郎「DIO、絶対生きて帰るぞ。」

DIO「ああ、俺達は必ず生きて帰る！承太郎も死ぬなよ？」

承太郎「元よりそのつもりだ。」

ルツチ「みんな、準備を怠らないようにね。」

全員『おう！』

s i d e C h a n g e

―ロードの家―

ロード side

いよいよ動き始めるか。再び、全ての存亡を賭けた戦いが…………。

ナインズ「ロード様、魔力の方は？」

ロード「完全回復した。全く、ご都合主義とはこの事だな。」

レイ「それってつまり……………」

ロード「フェニックス。」

フェニックス「ここに。」

魔神柱だったはずのフェニックスは、今や立派な鳥人かつ美少年とも言える姿へと変わった。

ロード「奴等の情報は？」

フェニックス「現在、最終兵器とも言えるものの完成まであと少しだそうです。」

ロード「丁度良い、ナインズ！皆を呼べ。ゼロノスがいる世界に向かうぞ！」

ナインズ「はい！」

さてと、本郷……………久しぶりに共に戦おう。

side change

— 始原の城 —

風龍（作者） side

みんな集結してるしていつてる。って事は、そう言うことなんだね。

メアリー「もういい加減、イリアって名前はやめて、ありのままの名前で戦おうかな。」

士「いいのか？」

メアリー「うん、ibとギャリーを守るために、絵達の力、喪失・忘却の力でみんなを守るわ。」

アラン「僕も手伝うよ、メアリー。」

ライフ「お父さん、東姉さん。」

風龍「よし、東。時空の賢者達を集結させて、『プロト・エンド・オブ・ザ・ワールド』

に向かおう。」

東「はーい!!」

さあ、こつちも本気で行こうかな。作者ではあるけど、そんなのはいい。あらゆる世界を守るための『守護神』として……………。

風龍「デイマイズ、ビギニング。」

デイマイズ「分かってる。」

ビギニング「ですな。」

風龍「さあ、世界を救うために大いなる戦いを起こそう。」

t o b e c o n t i n u e d
⇩

第76話 決戦の世界へ

—ヒメムラサキ—

ガルツチ side

ガルツチ「あー、酷い目に遭った。英竜、いきなり弟になってって言わないでくれ。」

英竜「可愛いのはジャステイス！」

ガルツチ「やめろ。」

はあ、此はツツコミが疲れそうだ。あ、因みにサンライト王国については、どうか解決。やはり魔物が支配されていたようだ。んで、倒したら村正が探していた3つのお守りが見つかり、それを送ろうとしたら、どうやら神刀に触れた途端3つのキーホルダーになってしまったようだ。其れを村正に伝えたら、やっぱりあげると言った。なんでき。

因みに、今見た目は14歳に戻しています。

ガルツチ「そういえば英竜って、性の悦びはないって言ってたけど、無性愛なの？」

英竜「うん。」

ガルツチ「その、大丈夫なの？それとも、最初から？」

英竜「わかんない。」

ガルツチ「なんて言うか、悲しくない？僕はまあ、最初は異性と付き合いたいって思っ
てはいなかったけど、フランとこいしと出会ってから考えも変わったし、未来とヤつた
ら、いつの間にか両性愛になっちゃったけどね。」

英竜「そうか……………」

それにしても、英竜の前世聞いたことないな。でも、それに関しては聞く気はない。
多分思い出したくないのだろう。

ガルツチ「もし、だけどさ。」

英竜「？」

ガルツチ「もし、君の恋人だと名乗る奴がいたら如何する？」

英竜「ブフォツ!？」

ガルツチ「？」

英竜「い、いいいいいいいいいいいきなり、へへへへ変な質問しないで
!?!?!?!?!」

ガルツチ「え？そうか？僕は気になるんだけど。」

英竜「あ、あのね!?!?!?!?!」

ガルツチ「……………まあ、今は聞かないで——アダツ!?!」

英竜「聞いてきたのは貴方でしょ!？」

ガルツチ「別に殴ることもないだろ。興味本位なんだし……………」

とは言え、村正から聞いた話だと、どうやら皆ゼロノスがいる世界に集結してるようだ。しかも、あのシヨツカー達もそこにいるようだ。

その世界の名は『プロト・エンド・オブ・ザ・ワールド』。本来在るべき世界であり、その世界に出会ったバルツチ、マルツチ、ドルツチの出身世界でもある。

しかし、自分の世界が決戦場所だとは……………。まあ、いずれ帰るだろうとは思っていたが、原世界だとはな。

ガルツチ「思えば、長い旅路だったな。あらゆる世界を巡り巡り、多くの敵、多くの仲間、多くの好敵手と出会い、そしていつの間にか愛人を作ったり、色々あったなあ……………」

英竜「……………ガルツチ、今後も旅は続けるのか？」

ガルツチ「まあ、続けるかな?でも、正直分らないんだ。」

英竜「なんで？」

ガルツチ「なんでって、決戦場所は僕が住んでた世界の本来在るべき世界。ゼロノスとの戦いで、犠牲者は必ず出て来るはず。」

それに、僕の『切り札』は、ゼロノス戦用の神話礼装だけど、スキル追加で『死滅願

望』が付くんだ。」

英竜「『死滅願望』……………。藍から聞いたけど、それって死をいとわない生存活動。肉体の限界を無視して稼働するスキルなんだよね？」

ガルツチ「うん。そのランクは、この世の全ての悪よりも高い。」

英竜「え!？」

ガルツチ「そのランクが∞。Grand Orderの効果なら『自身に毎ターンバスター&アーツ&クイック性能がアップする効果を付与(6ターン付与)&6ターン後戦闘不能』かな。」

英竜「破格すぎ……………、しかも6ターンか……………」

ガルツチ「そう言うこと。まあ、戦闘が終われば、限界が来て聖杯を使わない限り……………。僕は今度こそ、死ぬかもな。」

そう、例え不老不死の呪いを持つてたとしても、聖杯を使わない限り、今度こそ死ぬ。言わば、特攻神話礼装と言うべきだろう。

英竜「ガルツチは、死にたいのか？」

ガルツチ「昔だったら、そうかも。自分という存在を嫌い、消えて無くなればそれでもいいと思った。けど、今は違うかな。自分嫌いはまだあるけど、あの時の幸せを手放したくない。未来とフラン、こいし、イリヤを置いて死にたくない。」

英竜「そうか……………」

ガルツチ「……………英竜、こっち向いて。」

英竜「?なん——」

僕の顔に向いたところで、僕は直ぐさま英竜の顔に近づいて口付けした。

英竜「……………え? (。D。)」

ガルツチ「あまり気負いし過ぎないようにね、英竜お姉ちゃん。」

英竜「え?え?が、ガルツチ。な、何を!？」

ガルツチ「景気付けの軽めのキスだよ。少し、恥ずかしいけど、英竜が僕みたいにならないようにね。」

英竜「なっ!?! / / / / /」

ガルツチ「まあ、少なくとも僕のようにはならないだろうけど、やっぱり心配だからね。」

しかし、英竜の弟か……………。それも悪くないけど、けどやっぱり兄さんと姉さんがいるし、流石に英竜お姉ちゃんっていうのは今回だけでも——

英竜「もう、ホントに狡い弟だねええええ!! / / / / /」

ガルツチ「うお!?!」

英竜「いつそ、私の家族はガルツチだけでいいよ!!」

ガルツチ「待て待て、僕には兄さんと姉さんがいるんですが!?あと妹のミストもいますし!?!」

英竜「決めた。今日からガルツチは、私の弟兼妹で決定!!」

ガルツチ「ちよつと待てえええええつ!!!!」

妹!?!それって女体化したとき限定なの!?!なんでさつ!?!

藍「如何したの?」

英竜「藍、今日からガルツチは、私の弟兼妹にします。」

ガルツチ「勝手に決めて如何するんだ!?!っていうか妹ってどういう事!?!」

英竜「だつて少しだけ女の子っぽいところもあるし。」

ガルツチ「解せぬ……………」

全王神「2人ともく、どうかしたの?」

英竜「全王神様、息子を私の弟兼妹にして下さい!!」

ガルツチ「母さん、ちよつと英竜を何とか——」

全王神「いいよ!! (ゝω・) b」

ガルツチ「軽つ!?!」

だが僕は知らない。此が、後にとんでもないところで役立つ事になるなんて、この時知らなかった。

そして、再び英竜と二人つきりになったとき、僕はあることを思い出した。昔、パチュリーに止められたあの儀式を、今こそ使おうと考えた。

ガルツチ「トリス・オン投影開始。」

英竜「あれ？弓と矢を持って、如何したの？」

ガルツチ「何、ちよつとした儀式をするんだ。」

僕は弦を引き、月に向かって狙いをつけて、そのまま離れた。

ガルツチ「誓い『プロミス・エンゲージ』。我、星空英竜の義の弟兼妹となりて、この刃を持って誓わん。」

終焉と原初を持って、呪われし運命と共に進まん!!」

途端に月が光り始め、その光は英竜に包まれた。とは言え、この『終焉と原初の誓い』の本当の使い方は、桃園の誓いのような物。

つまり、此を持って僕と英竜は義姉弟になったのだ。例え遠く離れても、この契りは決して破ることはない。絶対に……………。

未来「ガルツチ、英竜。そろそろ出発しよう。」

ガルツチ「わかった。」

英竜「さあ行こうか。決戦の舞台へ。」

そして僕と英竜は、街の中心の広場に到着すると、フラン達や簪達、更にはギルサンダーとメリオダス、ミスト、ライムがいた。

ガルツチ「さてと、皆！そして、この戦いに参加してくれた人！いよいよゼロノスの戦いが近い！！

ゼロノスは強大だ、そして其れと同じようにホムンクルスも大量に生み出しているはずだ。きつと、大激戦が待ってる。

恐らく、この中から、故郷に帰れず、この世を去る人も居るかもしれない。けど、此だけは忘れるな。

『この戦い………いや大聖戦に、絶対に勝とう』
 全員『おおおおおおお』
 『！！！！！！』

ガルツチ「では行こう、本味！僕らが在るべき世界。『プロト・エンド・オブ・ザ・ワールド』へ！！時渡り『タイムドミネートデイメンション』！！」

そのスペルカード放った瞬間、僕らはヒメムラサキに別れを告げた。

t ガル
o ツチ
b 「さあ、
e 大聖戦を
c 始めよう。
o ゼ
n ロ
t ノ
i ス
n を
u 始めよう。
e ゼ
d ノ
↵ ス。」

『原典回帰終焉世界』 End of The World

d 最後の戦い

第77話 かつての戦友の再会

|
???
|

ゼロノス side

あー、久々にリラックス出来た。大阪ホントにいいな、お好み焼きも然り、串カツも然り、大阪城然り、ストレスたまったら彼所に行くのが一番だな。

だが、それも全て終わりか。

「報告します。星空英竜、門矢未来、ラーク・バスター・ガルツチが、此方の世界に来ました。それだけでなく、全王神やシヨッカー軍、様々な者達が、此方の世界に――

|

ゼロノス「遂にか………………。例の兵器は？」

「あともう少しで完成です。」

ゼロノス「そうか、ならば怠らないように最終調整とチェックをしておけ。」
「了解しました。」

ゼロノス「さて……………、と。いよいよだぞ。」

「ハア……………ハア……………、英竜たんハアハア……………」

「……………ようやくか。姉をこの手で殺せるのは。」

ゼロノス「全王様、我々に協力して下さり感謝します。」

全王「言うな、元より俺は自分勝手な姉を許さないのでな。姉の相手は、俺がけりをつける。」

しかしまあ、全王様がこちら側に着いてくれたのはありがたい。あと、この英竜を知ってる人物、恐らく関係者かストーカーのどっちかだな。

まあどうでも良いか。頭にパンツ被ってる事以外は。

ゼロノス「全王様、ホムンクルス共に伝えて下さい。究極獣共も、お願いします。」
全王「ああ。別に、前線に出ても構わんのだろう？」

ゼロノス「ええ、お願いします。」

さあ戦争の準備だ。我々が、勝つ！何としても!!!

side change

— 鎮魂歌の湿原 —

ガルツチ s i d e

ガルツチ「到着つと。」

あー、分かる。この感じ、この風、帰ってきたって感じだが、住んでた世界とは少し違うな。このどんより、いやどちらかという空虚感。

この世界に、ゼロノスが居るのか。いや待て、神々しさも……………? 母さん程ではないけど、これって……………!

ガルツチ「母さん、どうやら叔父もここに居るようです。母さんを殺すために、ゼロノス陣営に居るようです。」

全王神「弟め、そこまで私が邪魔だと言いたいって、よく分かるよ。」

フラン「お兄ちゃん、今は他の人達を探そう?」

ガルツチ「確かに、そうだな。ミスト、他の仲間達は?」

ミスト「そうね、どうやらある場所に大勢の反応があるよ。」

ガルツチ「場所は?」

ミスト「スターダスト魔法魔術学校ね。そこに皆がいるよ。」

ガルツチ「懐かしいな、そこに皆がいるのか。」

未来「んじゃあ、そこに行こう。ガルツチ、案内お願いね。」

ガルツチ「分かった。オメガ、ルート検索頼む。」

僕はすぐに『ステータスウォッチャーΩ』のルート検索に『スターダスト魔法魔術学校』を検索すると、すぐに出た。やはり原世界と言えど、場所は同じだそうだ。

—スターダスト魔法魔術学校—

未来「えーっと、この子は？」

ガルツチ「バルツチ。僕とフランの子で長男なんだ。」

バルツチ「初めまして、未来兄！リサも！ってそうそう親父、大変なんだ!!」

ガルツチ「どした？まさか奇襲か!？」

バルツチ「そうじゃなくて……、兎に角来て!!皆も!!」

一体如何したというのか。そう思い急いで学校内に入った。途端に瞬時に理解した。何故か苦しむ人達が大勢居たと言う事を……。

ガルツチ「あー、此アイリの仕業だなあ……。」

藍「え？」

ガルツチ「あの人、料理がとんでもないほど下手で、いつもダークマター作るんだよね……。」

英竜「ええええ……。」

未来「だからか、ガルツチが『この世の全ての闇料理』っていうのは……。」

オーフィス「怖いな……。」

ガルツチ「宝具は白いのに、料理は黒いって、どうなってんの一体……。」

夜神「其れは確かにね……。」

そんなこんなで、僕等は城の中で会議を進めた。

そして……。

—アストロ平原—

ガルツチ「それで、総大将は誰が——」

全王神「私で良いかな？」

全員『賛成!!』

ガルツチ「よし、それじゃあ行くか。」

僕は武装の最終確認をした。背中には神刀『天満月』アマミツキ（名称は僕）、セフィロトソード生命の樹の剣邪悪の樹の剣クリフオトソード、そして常闇月の刀。右腰には魔剣ダークネスムーンと月光・闇夜丸、そしてスペルカードケース。左腰には聖剣スターダストソードと日光・暁丸、そして英霊カードケース。

今回の目の色は『虹色』、つまりここで全身全霊の本気を出すと言うことだ。

未来「ガルツチ、右眼が……………」

ガルツチ「あ、此を見るのが初めてだっけ？これ、義眼でね。」

英竜「義眼って、前何かあったの？」

ガルツチ「うん、サムと出会って早々戦ったときに、運悪く負傷してね。両眼とも青だったけど、義眼のお陰で、好きなように色を変えられるんだ。その代わり、自分の能力も反映するけどね。」

未来「例えば？」

ガルツチ「今僕は虹色にしてるから、効果は全能力を底上げする代わりに命を使うんだけど、不老不死の呪いで普段通り使えるけどね。」

英竜「なるほど、そうだったのか。」

さてと、そろそろ来るかな？

ジンオウガ「我が主よ、報告します。」

ガルツチ「敵本拠地の状況は？」

ジンオウガ「どうやら、本拠地は摩天楼のようで、その中に無の神のホムンクルス達が9無量大数人位います。その守りに徹するかのようには、彼方は1無等人います。その中に、全王がいます。」

全王神「……………」

ガルツチ「ありがとうございます。モンスター軍に戻って。」

ジンオウガ「承知。」

ルツチ「ガルツチ、この戦い勝てる？」

ガルツチ「勝てるかじゃないよ、兄さん。絶対に勝つ。そして、生きて帰る！ただそれだけだ。」

ブレイズ「ガルツチの言うとおりだ、戦って勝ち抜き、全ての次元を守るんだ。」

アルファス「でも、こうやってまた再び戦えるときが来るなんてね。」

確かに、エレメントフェニックスの再結成が来るなんて思わなかった。

風龍「覚悟は良い、ガルツチ。この戦い、全てを決めるのは君なんだから。」

ガルツチ「作者、君も出るの？」

風龍「うん、そりゃあ今大学生だけど、生きて帰るためなら、神さまにだってやってやるさ。この物語は、君が主役だからね。」

ガルツチ「……………そっか。」

んじゃあ、行くか。

第78話 英竜の忌まわしき過去

—アストロ平原—

ジンオウガ side

我が主は先に向かわれた。今思えば、彼は俺にとつての好敵手であり、親友でもあった。狩りに行くときも、決まって俺を選んでいた。

最初は、ただの自殺願望者かと思った。俺はすぐ、戦闘態勢をとり、襲いかかる。だが、結果は返り討ちされた。

その後ちよくちよく俺を選び、やられていった。さすがの俺も業を煮やし、『二つ名』と化し、勝負に挑んだ。流石の俺も勝ったと思った。だが、結果は惨敗。そして俺は思った。此奴なら、殺されても構わないと。

だが、気になっていた。何故俺を選ぶのか。理由は単純、『例えモンスターでも、好敵手として、親友として戦い続けたいから。』だった。

変やハンターだと思ったが、嘘はなかった。それだけ俺を好いていたと言うことだった。

ならば、期待に応えなくてはなるまい。

「さあ、究極獣が来たぞ！此で貴様も——」

ジンオウガ「終わるのは貴様の方だな！『十字雷神斬』!!」
クロスオメガボルト

俺はすぐさま真帯電形態となり、究極獣と呼ばれるものを討ち滅ぼし、周りに居たホムンクルス共を倒していく。

む？あれは、ゼットン達か？苦戦を強いられているな。ならば手伝ってやろう！

ジンオウガ「下がるがいい!!『集中雷撃』!!」
ライティングボルト

空から数千の雷撃が、苦戦させた究極獣を討ち滅ぼし、前に出た。

ゼットン「貴方は……………?」

ジンオウガ「俺はジンオウガ。かつて、ガルツチと戦い続け、いつしか好敵手であり親友となった物だ。苦戦のところにて、助太刀に参った。」

ヤブール「濟まない、ジンオウガ。手を患わせて。」

ジンオウガ「気にするな……………。古龍軍!!超獣娘の援護に廻れ！飛龍軍!!強襲を駆ける!!!我々モンスター軍の強さを、見せつけてやるのだ!!!」

頼みましたぞ、我が主。『ガルツチ』よ。

sideChange

ガルツチ side

全く、どんだけホムンクルスが多いんだよ。楽々と10億人を斬り伏せてるとは言え、此じゃあきりが無い。

フラン「お兄ちゃん、ここは私達が道を作るわ。」

ガルツチ「フラン？」

こいし「私達が道を作ったら、お兄ちゃん達が行つて。」

ガルツチ「ええええ!!」

イリヤ「私達のこととは平気よ。こんなの、負けるつもりなんて微塵もないから。アラヤ、鳳凰。覚悟は良い？」

アラヤ「うん、最後まで戦うつもりだよ。」

鳳凰「絶対に、生きて帰るんだから!!」

皆……………。

簪「私達も残る。此奴らの相手、数が多いだけで、負けるつもりなんてないよ。」

未来「簪!?!」

本音「大丈夫、みつくん。私から言わせれば、こんなの雑魚同然だもん。」

鈴美「それに、今までのお礼を返せる。ガルツチちゃんに未来ちゃんの恩返しを、こ

こで返すわ!」

オーフィス「我、未来に感謝。」

レテイシア「安心しろ、必ずそっちに向かうから。」

白夜叉「絶対に生きて帰ろうじゃないか。」

リサ「だから、お母さん。ガルお父さん。それまで待つてて!」

未来「皆……………。」

英竜「……………いい恋人を、良い妻を、子を持ったね。ガルツチ。未来。」

ホント、そうだな。

フラン「いづくよ! 『災厄へと導く破壊の剣』
!!!!!!」

こいし「『殺戮遊戯』!!!」

イリヤ「『我が魂と絆を繋げる永遠の剣』!!!」

アラヤ「『死神の抱擁』!!!」

英竜「和装……、だね。」

ガルツチ「うん。」

クリムゾン「そういえば、ゼロノスの奴。やたら和装の奴集めていたな。洋というのが全くなかった。あ、紅茶は飲んでたな。その時はアールグレイがお気に入りだったし。」

ガルツチ「ジャック!?いきなり出て来ないで!」

クリムゾン「悪い、決戦が近いって分かると、ウズウズしてねえ。」

愛花「エレベーターは、あっちにあるよ。」

愛花がそう言いついて行こうとしたら、何かを察した英竜が上を向くと、驚愕した顔をした。

英竜「なっ!?そ、そんな……!!いや、そんなことがっ!」

ガルツチ「如何したの?」

「アハ、見つけた。英竜ちゃん。よっと。」

降りてきたのは、黒髪で美少年、黒いTシャツにジーンズの人が居た。どうも英竜お姉ちゃんを知ってるようだ。

英竜「何で、いや……そんなことは!!」

「なあに驚いちゃってるの?『お兄ちゃん』。」

ガルツチ「っ!？」

お兄ちゃん!？」

「お父さんとお母さん、心配してたよ？英竜が出てこないって。」

英竜「違う!! あんな奴ら、私のこと心配してるわけ無い!!」

「そうだよね、憎いもんね。だって、虐待されてたもん。」

英竜「黙って!!」

ガルツチ「英竜お姉ちゃん、落ち着いて。……………誰だ雑種、そして気安くお姉ちゃんとか言うな。」

「……………君こそ誰なの？僕のお兄ちゃんに、何してるの？退いて、僕はお兄ちゃんに用があるの。」

ガルツチ「訳が分からないな。お兄ちゃんだって？英竜お姉ちゃん、此奴が言ってる事が分かんないんだけど。」

英竜「……………ガルツチ、彼奴の言ってることはホントよ。」

ガルツチ「え？」

英竜「私は生前、『男』だったの。いいえ、『性同一性障害』を持った『男』だったの。」

……………はい？（。 ㇿ。）

「まあ、お兄ちゃんの事知らなさそうだから、簡単に説明するね。英竜お兄ちゃんは

ね、元々『性同一性障害』を持った『男の娘』だったの。」

ガルツチ「また男の娘かよ!?! ツツコミが追い付かねえよ!?!」

未来「英竜って、男の娘だったんだ……。しかも障害者って。」

「その際で、お父さんとお母さんは虐待し、友達と思ってた人からも虐められ、大人になっても其奴らに指差されていたんだ。」

ガルツチ「うわあ、僕より酷くね?」

未来「確かに……。」

「でも心配しないで、お兄ちゃん。ゼロノス様に着けば、そんな奴らが居なくなつて、誰からも指差される事も無いし、虐める奴なんて居なくなるんだ。」

英竜「……………」

巫山戯るな……………」

「あ、どうせなら交渉しよつか。僕がゼロノス様に——」

ガルツチ「巫山戯るな!!!」

英竜「ツ!」

愛花「ガル兄!」

深雪「どないしたの!」

ガルツチ「ゼロノス側に着けだと? 英竜お姉ちゃんを苦しませようとするな!! 雑種
!!」

「何? 何でそうまでして邪魔するの? お兄ちゃんと関係ないでしょ?」

ガルツチ「関係ない? 違うね、英竜は僕のお姉ちゃんだ! 貴様のような雑種に、お姉

ちゃんを傷付けるつもりなら、俺が許さない!!」

英竜お姉ちゃんが男? 関係ない。どうでも良い。守るって決めたんだ。フラン達のように、未来達のように。英竜お姉ちゃんを守るって!!!

「うっざざったるい奴だね。だったら、殺してあげる。ゼロノス様に楯突いたこと、後悔してあげる!!」

ガルツチ「上等だ! 4人と、手を出すな。此奴を殺す。『天満月』、『無』を宿せ!」
「僕の方が、英竜お姉ちゃんの弟に相應しい。お前のような女臭い奴に、弟と名乗ってたまるか!!」

『プツツン』

ガルツチ「ほう? 面白い事言うではないか雑種。どうやら先ず、その喉元かつ斬ってやった方が良さそうだな。英竜お姉ちゃんは僕が守る!!」

未来「あー、出ちやった……。」

英竜「何が?」

未来「英竜は知らないだろうけど、ガルツチはああみえてヤンデレ気質があるんだって。」

英竜「フア!?!」

深雪「うわあ、ガルツチはん相当やな。愛が重い。」

愛花「フランお姉ちゃんどこいしお姉ちゃん、イリヤお姉ちゃんも、ヤンデレだけどね。」

3人「「「そうなの!?!」」」

愛花「共通点を上げれば、傷つけた相手を殺す……………かな?」

英竜「(。(。ポカーン)」

深雪「うわー、此はどうしよもあらへんな……………。」

聞こえてるよ、皆。

「死ぬ覚悟は出来てる?」

ガルツチ「寧ろ、貴様は無残な死に方に覚悟は良いか?」

「英竜の弟に相応しいのは、僕だけだ!!!」

この時、未来達はこう思った。

!!!

4人「二三(二人とも、ヤンシスじゃん……。)」「三」
だから聞こえてるって。っていうかヤンシスって、酷くね？

t o b e c o n t i n u e d
✦

第79話 全王神&龍神王VS全王

—アストロ平原—

龍神王 side

おー、やってるやってる。♪なんとか間に合ってよかった。さーて、敵軍に向けてつと。

龍神王 『『カオスシュート』!!』

その場に居た人造人間ちゃん達は、私のビームで吹っ飛ばされました。つていたいた、全ちゃん見つけた!!

龍神王 「全ちゃくん！」

全王神 「龍ちゃん！来てくれたんだね!!」

龍神王 「もつちろん！私達は、無敵のタッグでしょ？」

全王神 「勿論!!さあ、暴れちやうよく！」

士 「いや待て、お前総大将だろ!?!」

海東 「やめておけ、士君。ありや人の話を聞かない方だ。」

束 「まあ楽しければ、それでいいんじゃない? つて事で、そおれ!」

「ゴホオ!？」

士&海東「うわあ、スプラッター………………。女の子がやる事じゃない………………。」「
って言うてるけど、実際そう言うことしてる女の子って居るのはいるよ?」

???「随分と楽しそうだな、姉貴。龍神王。」

この声、間違いない。全ちゃんもその声に気が付いたのか、まだ微笑んではいたけど、目はもう笑ってはいなかった。すると、ホムンクルスは私達を円に囲い、その中から全ちゃんの弟である全王君が現れた。

彼奴、ホントにゼロノス側にいたなんて。

全王神「やあ全王、こんなところで何してるの?こんな戦場のど真ん中で。」

全王「何してるって?決まってるじゃないか、姉貴。処刑しに来たんだ。」

全王神「処刑?私を?」

全王「そつ、実は界王や界王神、果てには星の抑止力のガイアと霊長の抑止力のアラヤから、勅命を頂いてね。」

次元を狂わせた元凶である、『全王神』を抹殺せよつと言われたんだ。勿論、その中に君が転生させた人達も対象してるんだよね。」

全王神「へえ、彼奴らそこまで敵視してるって訳ね。」

オーデイン「全く、あれだけ派手にやったら、抑止力も働くだろ。というよりは、今

まで抑止力が居なかったのが不思議なぐらいだ。」

全王「君も苦勞してゐるね、オーデイン。其奴と一緒に居るだけで、頭が痛いだろ？ 何でそっちに居るの？」

オーデイン「確かに、頭は痛いな。それは事実だし、此奴と一緒にいても意味は無いかもしれない。」

え、それちよつと酷くない？ 全ちゃん可哀想だよ？

オーデイン「だがな、此奴の息子にガツンと言われたんだ。『母さんの気持ちを知らないくせに、これ以上追い打ちかける気なら、二度と会わせない』つてな。確かに、此奴の苦しみは、俺も分かるはずはなかった。」

だがな、ロキとかフェンリル、此奴の息子に言われてようやく分かった。そして理解しようと思つたんだ。

神泣かせではあるが、此奴をほつといたら何をしでかすかたまつたもんじゃないからな。だからこそ、俺は俺の意志でここにいる。あんな奴らに従うより、こっちの方が面白があるからな。」

全王神「いや〜ん！ オーデイちゃんホントに照れ屋さんなんだから〜！ ♪♡」

オーデイン「喧しい。」

龍神王「オーデイン、ツンデレだね。」

オーデイン「龍神王も、はあ………全く。まあそう言うことだ、悪いがこの神泣かせを守るために、その抑止力諸共倒してやる。来い、『滅幻・運命の槍』」

うわあ、相変わらず禍々しい程放つてる槍だなあ………。まつ、私はこつちを使うけどね。魔神刀『死龍剣』。黒き龍の角や鱗で作られたと言われている、禍々しい刀。妖刀の類なんだけど、どうも此、神刀が墮天しちゃったようなものだし、勝手に魔神刀つて命名しちゃった。

全王「………まあいい、どうせ貴様も邪魔だ。姉貴に楯突くなら、殺してやる。」

全王神「………ねえ、弟よ。知ってる？」

全王「？」

全王神「仮に私に勝てたとしても、私の息子がどれだけ強いか、知ってる？」

全王「はっ、何を今更。姉貴に劣る奴なんざ——」

全王神「どうかかな？息子は、私を超えているよ？貴方が思ってる以上にね。」

全王「世迷い言を、貴様を殺し、ついでに貴様の息子を殺してやる!!」

全王神「そつ、そこまで言うのなら。私も本気でやろうかな。」

全ちゃんの本気がきたわね。このびりびりと電気が流れるような感じ、私と喧嘩をした時とは違う感覚ね。

全王神「オーデイン、龍神王。奴に情けをかけず、殺すわよ!!」

オーデイン「クッククック、勿論だ。」

龍神王「元よりそのつもりよ、全ちゃん！」

全王「愚かな……………、抑止力と俺に逆らったことを後悔させてやる!!!」

さあ、深雪ちゃんと全ちゃんの転生させた子達を襲ったこと、後悔してあげようじゃないの!!

「やれえええ!!全王様ああああ!!」

葵連「なにこの声援。」

士「俺が聞きたい。つて、ん?」

「全王様あああああああ!!!その冷たい目で、私を罵つてえええええ!!!踏みつけてえええええ!!」

海東「……………変態だ。」

士「……………あのホムンクルス、変態だな。いや待て、ここにいるホムンクルスつて……………」

『全王様Love!』

東「……………ファンだったようね。しかも挙げ句の果てには縛つて鞭打つて甘い声で罵つてつて言うホムンクルスがちらほらと……………」

士「……………なにこのホムンクルス。」

葵連「私が聞きたい。」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
⇨

第80話 歪んだ兄弟愛と守護する姉弟愛

— 摩天楼 1F —

ガルツチ side

ガルツチ「妖術百ノ術『窮奇・疾風斬』！」

「奉靈の時来たりて此へ集う、鳩の眷属、幾千が放つ漆黒の炎！『カラミティブラスト』
!!」

ちっ、此奴ただの一般人と置いていたが、何かしらの強化魔術で、強くしてるな？だが、此奴は……………」

未来「中途半端だね。」

英竜「え？」

深雪「ほな、見てみ。火力は申し分ないけど、途中から弱まってるやん。あれじゃあガルツチに勝とうなんてどだい無理な話やな。」

愛花「もう、関西弁になっちゃってるね……………」

英竜「それはそうと……………、私……………」

英竜お姉ちゃん、やっぱり迷いがあるな。無理も無い、あれで動揺しない方が、大し

ガルツチ「……………洗脳か。だから勝ち誇っていたのか。」

「その通り！…さあ英竜お兄ちゃん、自分の正直さを教えて！どっちが英竜の弟なのかを!!」

まずい、もし英竜お姉ちゃんが取られたら、ホントに最悪な状態になる……………。

英竜「私は……………、私は……………!!!!!!」

ガルツチ「英竜お姉ちゃん!!!」

英竜「私は、もう一度ガルツチにキスしてもらいたあああい!!!」

ただその言葉で、全員（。D。）ポカーンとしていた。どちらの弟なのかわけなく、ただ僕のキスを要求してただけだった……………。

英竜「ううう……………、恥ずかしい……………。／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「なっ、え？た、確かに、洗脳が効いたはず……………。な、なのに……………何だって？」
ガルツチ「お姉ちゃん、もしかして……………？」

英竜「そ、その……………、なんて言うか……………。／／／／／／／／／／／／」

未来「つていうか、何の洗脳したんだろう？（。D。）」

深雪「ウチが聞きたいぐらいやわ……………。（。D。）」

愛花「もしかして、洗脳の内容が原因なんじゃ……………」

「嘘だろ!?僕は確かに、『自分の正直な部分を言つて』って洗脳を――」

ガルツチ「……………。（。D。）ポカーン」

「しまったあああああああ!!!」

我慢して。」

英竜「ホント!!」

ガルツチ「うん、だから今我慢しといて——」

英竜「わーい!!!ガルツチ大好きく!!!♡♡♡」

ガルツチ「お、おいおい!もう、しょうがないお姉ちゃんだなあ……………」

この時未来は何故か悟りを開いたかのような顔をして、『尊い』と言っていたそうな……………。とりあえず、先を急ぐために、エレベーターに乗り込み、最上階まで登った。あ、あの弟と名乗ってた奴は、復活できないように肉片ごと燃やし尽くしました。

未来「ガルツチ……………、このエレベーター。」

ガルツチ「うん、どうやら500階までしかいけないようだね……………」

愛花「あ、そういえばこの摩天楼、9那由多階位——」

英竜「高い!？」

ガルツチ「何その気が遠くなりそうな階数!？」

深雪「アホやろ!?!こんな高い摩天楼作ったら何時崩れるかわからへんやないか!!!」

未来「ゼロノス、絶対に登るとき面倒くさがってるんじゃないのかな?」

クリムゾン「はあ、2人とも。ブルトン使って最上階に行つた方が良いんじゃないやねえのか?」

あ、そういえばそうだな。でも……………」

未来「確かにそうだね。」

英竜「いや。お薦めは出来ない。」

クリムゾン「何故だ?」

ガルツチ「ちつ、なるほど……。既に対策済みって訳か……。」

英竜「ガルツチ、どうだった？」

ガルツチ「どうやら、次元を使って屋上に行かせないように、強力な結界を張っている。しかも、結界を外すには何処かの階にいる結界師を見つけて倒さないと、ブルトンで屋上に行くことが不可能だ。」

英竜「むう、最低でもどれだけ倒せばいいの？」

ガルツチ「最低でも、10人倒せば結界を維持できなくなる。そこがチャンスだ。」

英竜「分かった。じゃあ、ジャックと神風、愛花とは別行動しよう。」

クリムゾン「おう、任せておけ。」

500階に着いた途端、僕と未来、英竜は右サイドを、ジャックと深雪、愛花は左サイドで別れ、結界師を探し始めた。

t o b e c o n t i n u e d

→

第81話 ゼロノスの真意

— 摩天楼 最上階 —

ゼロノス side

………結界師10人敗北して、更には大勢のホムンクルスが犠牲になったか。やれやれ、ここまで劣勢になったのは驚きだ。

しかし、時間稼ぎのおかげで、ようやく完成までに至った。だが、その前に……。

ゼロノス「最後かもしれんから、紅茶でも飲むか。」

『ズズツ………』

ゼロノス「ブウツ!?!」

結局ブランドかよ!?!クソ、何故こうなるのか理解が苦しむ……。ああクソ、いつそ

ブランド消して……。

『バンツ!』

来たか………、つてしまった!!紅茶のシミが!?!

ガルツチ「待たせた………つてどした。」

ゼロノス「ちよつと待て、服ぐらい着替えさせる。紅茶のシミが着いた。」

英竜「何故に!？」

未来「ここに来るまでの間、何してた……………」

ゼロノス「と、兎に角その紅茶を飲みながら待つてろ。すぐ着替える!」

あーくそ、俺のしたことが。そもそも何故ブランドばかりなのだ!?!アールグレイだと
言っているのに……………」

『数分後』

ゼロノス「すまぬ、待たせた。」

クリムゾン「お前、何してんだよ。というかガルツチの奴、文句が言いたいらしいぞ。」

ゼロノス「?」

ガルツチ「おいゼロノス、何故紅茶がブランドなんだ?何故アールグレイじゃないんだ!!!」

深雪「なんでやねん!？」

英竜「つていうか紅茶の味が酷すぎたんだけど……………」

愛花「うー、変な味がする……………」

ゼロノス「……………おい、最後の戦いの前にあのような紅茶を入れたのは誰

ゼロノス「あああ……、此だ。っていうか、お前紅茶を作るの上手いな。」

ガルツチ「エミヤに散々鍛えられたからね。」

はあ、此奴を見習わせてやりたいくらいだ。しかも俺の好きなアールグレイにしてくれたし、敵じゃなかったら毎日でも入れて欲しかった……。

未来「ねえ、ここに来た目的って確か……。」

英竜「ゼロノスを倒す、だったよね？」

クリムゾン「それは間違いない。んで兄貴、何時まで茶を飲んでるんだ。」

ゼロノス「待て、しかして希望せよ。」

5人『敵が言う台詞かそれ!』

ふう、とりあえず全部飲みきったことだし、そろそろ真面目に行くか。

ゼロノス「んんっ、さて……。ってお前、そっち側だろ。」

ガルツチ「そうだった。」

ゼロノス「全く……。では改めて、よく来たな。しかも、0号……貴様がそちら側に居たとは驚いたぞ……。」

クリムゾン「兄貴、一体何を考えてる。テメエがやろうとしてるのは、無限ループだ

ぞ。」

ゼロノス「知ってる。だが実際、彼奴らも同じ事してたでは無いか。『聖杯戦争』つてのをな。」

そう、あの機能と似ている。仮に終わったとしても、また次の聖杯戦争がある。そうやって永遠と語り継がれるように聖杯戦争が巻き起こる。

俺がやろうとしているのは、ただ一つだ……………。

ガルツチ「ゼロノス、貴様の本当の目的は何だ？」

ゼロノス「目的……………、か。決まってる。全次元の、本来在るべき姿に戻すだけだ。」
英竜「それはただ逃げてるだけじゃないのか？根本的な問題を無かったことにして、もう一度作り替えて——」

ゼロノス「それは違うぞ、小娘。確かに聴き方次第ではそうだろう。だが俺は違う。新時代の者達に、絶対的な善と絶対的な悪を教える。そして歪み始めたら取り壊し、次の者達にこう教える。絶対的な神を信じよ、そして疑わず、ただ崇めよ。そして、ただ愛を育み、そして息絶えるだけの人生を与える。」

知性も与えず、ただただ本能のままに従う世界に変えるのだ。

それが、我が計画『リターン・オブ・ザ・アヴァロン』だ。」

ただそれだけだ、全ての生き物を平等にするために1と言う悪を切り捨て、9という

善を作り出す。つまり破滅の原因である進化を止めるのが、俺の目的だ。

ガルツチ「巫山戯た計画だな。だが、分からない訳でもない。」

5人『え!』

ゼロノス「ほう?」

ガルツチ「お前の本当の目的って、全ての生き物達に『進化』という概念を捨てさせる事だろ?」

確かに、『進化』するためには、何かを捨てなくては進化はあり得ない。進化すれば、きつと戦争は起こる。そして、今回のように犠牲者が出る。まるで、お前がやろうとしているのは衛宮切嗣、その体現者だな。」

ゼロノス「奴は恒久平和というのを目指し、善と悪の廃絶を試みてるが、俺は違う。先ずは善と悪の戦いを起こし、取り壊した次は、神という者に崇めて、『進化』という概念を捨てさせる。」

生きる者は世界のルールに従って生き、助からぬ者は捨てて行く。そういう世界を作るのだ。」

sideChange

ガルツチside

なるほど、それがゼロノスの目的か。分からなくもないな。たしか、『胎児の夢』の中

の歌詞に、こんなのがあったな。

『終わらない悪夢

続いていく悪夢

進化する歩みを止めない限り

血塗られた歴史

呪われた歴史

これからも続いてゆくだろう』

終わることもなく続いていく悪夢、血に塗れ呪われた歴史、『進化』という歩みを止めない限り、此からも続いていく。

切嗣は、その人類の可能性を信じる気を失せ、善と悪を取っ払おうとしていた。だがゼロノスは、『進化』という概念を捨てさせようとする。

そうすると、誰も争うことはなくなり、生きる者は世界のルールに従って生き、助からぬ者は捨てて行く世界へと生まれ変わる。なるほど、全くもって……………。

ガルツチ「つまらないな。」

ゼロノス「何ッ？」

ガルツチ「つまらないと言ったんだ。そんな世界作って、何が楽しいんだ？暇すぎて欠伸が出そうだ。」

確かに、風龍さんやエイリアンマンさんが居る世界は大変なことになってるの事は事実。『進化』とか『変革』とか色々起こってるからな。

まあこんな事言ったら不謹慎だけど、逆に何が起こるか、次にどんな『進化』をするのか、気になるんだよ。それと比べてお前の世界は、ただ平凡な毎日。刺激という物がない。ただ神という存在を崇めるだけ。全くつまらない世界だ。

こんな事なら、まだ遠藤宇宙がやってた計画がまだ良いかもしれない。2人だけの世界の方が………いや同じか？」

未来「いやそんなこと言われてもねえ………。」

まあその時の記憶があやふやだから、もう知らないけどね。

ガルツチ「兎に角、神様気取りはここまでだ。あらゆる次元を守るために、ゼロノス。貴様を殺す。」

ゼロノス「愚かな奴め、この『零の龍神』の俺に勝てるだけでも？」

ガルツチ「忘れて貰っちゃ困るな。こう見えて僕は、『虚の龍神』だぞ。」

ゼロノス「『虚の龍神』!? 馬鹿な、あの戦争で死んだはず———」

ガルツチ「だが運がよく、その死体が残って、今では僕の肉体になった。未来、深雪、愛花、ジャック、英竜。準備はいいか？」

僕は直ぐさま、『天満月』と常闇月の刀を抜き、未来は仮面ライダーディケイドのコン

プリートフォームに、深雪は白楼剣と楼観剣を投影し、ジャックはブラッドレイが使った2刀の剣を取り出し、そして英竜はウルトラマンモンスターと呼ぶ姿に変わった。未来「ついでに、彼らも呼ぼう。」

『FREDDIE KRUGER! TATSUGAMI SORA! SEBA SOU
BA! SUMMON!』

すると、総刃とフレディ、空が召喚され、それぞれの武器を持っていた。

総刃「つて、ちょっと此スケール大きくなってませんか？」

フレディ「まあまあ、楽しめればそれでいいじゃねえか。」

空「皆さん、行きましょう。」

未来「うん、この戦い……………絶対に勝ってみせる!!」

ガルツチ「行くぞ、零の龍神。」

英竜「君の野望は、ここで打ち砕く!!!」

この全次元を、守るために!!

t o b e c o n t i n u e d
◇

第82話 超完全生命体アンチスパイラル

— 摩天楼 地下 —

一方で、地下奥にある実験室……………。

「最終チェックを確認、システムオールグリーン。」

「なあ、此がゼロノス様が言ってた最終兵器なのか?」

「ええ、元々は反螺旋族と言って、『天元突破グレンラガン』の世界の最大の敵とも呼ばれてた奴なの。でも、シモンって男に敗北され、消滅したかに見えたけど、ゼロノス様が運良くその遺体を見つけたらしくて、それを拾って、何者にも負けない最強かつ無敵の『超完全生命体』にさせたって事ね。まあ様々な能力とか色々あるから、確かに此が最終兵器って言うのも納得かもね。」

「ならば、此さえあれば、もう勝ったのも同然ですね!!」

「そうだ——」

〔Warning!!! Warning!!! Warning!!!〕

「どうした!」

「大変です!! 最終兵器である『超完全生命体アンチスパイラル』が――」

『パライイイイイイン!!!』

「何だと!?! まさか、自我がまだ残って!?!」

そして、その場に居た研究者と開発者達は、その最終兵器に殺されていき、その最終兵器は瞬間移動して、外に着いた途端ロボットが召喚し、その中に取り込まれていき巨大化し始めた。

――摩天楼 最上階――

ガルツチ side

ゼロノス「ぐおおおおお!!!」

あー、結局英竜お姉ちゃん一人で倒しちやっとなあ……………。

英竜「ゼロノス、これで終わりだ!」

ゼロノス「……………どうかな?」

ゼロノス「はい、全王様。」

叔父はグランゼボーマに乗り込むと同時に、姿が変化し翼の生えたグランゼボーマへと進化した。その大きさは、あの天元突破グレンラガンと匹敵していた。

未来「なつ、なんだよあれ………………。どうやって勝てば良いんだ？」

フレディ「いやいや、こんなの無理だろ常識的に!!」

空「勝てない……………、こんなのはどうやって!!」

英竜「……………負けた、こんなの……………勝てないよ……………」

ゼロノス「ハハハハハハハハハハ!! さあ、助けを請うがいい!! だが誰も助けてはくれまい。ここで貴様らは果てるのだからな!!」

ゼロノスの勝利の笑いで、他の仲間達は絶望し、一部はどうやって勝てば良いのか算段をしていた。

最早如何することも出来ない、この絶望に立ち向かえない。誰もがそう思った。

ハ!!!!!!
」

ゼロノス「何が可笑しい!?まさか絶望のあまり気でも狂ったか?」

ガルツチ「正気か貴様!!wwwwwwこのようなもの見せて、もう勝ったと思ってるのか貴様らは!!!ハーツハツハツハツハツ!!!滅茶苦茶笑える!!!wwwwww」

英竜「ガルツチ、何で笑えるのよ。私達!もうどうすることも——」

ガルツチ「戯け者!!まさか英竜、僕の言葉を忘れた訳じゃあないよな?『絶対に勝とう』って。」

深雪「せ、せやけど……………、あんな巨体にどう対処しろと。」

皆は僕の笑いで気が動転していた。あんなのに勝てる方法があるのか?誰もがそう思った。

ガルツチ『Moon Light Another Fate』

ムーン「何でしょうか。」

ガルツチ「確か、君は限界もなく大きくなれるんだよね?」

ムーン「ええ、勿論。融合すれば、あれより強大な力を持てます。」

ガルツチ「十分だ。」

ゼロノス「まさか、たかがそのスタンドで、この最終兵器に対抗出来るとも言うのか?無駄な足掻きよ。」

ガルツチ「ただのスタンドだったらな。」

ゼロノス「何？」

そろそろ、見せつけてやるか。

ガルツチ「未来、英竜、深雪、空、フレデイ、ジャック、愛花、フラン、こいし、イリヤ、兄さん、レミリア、さとり、姉さん、クロエ、士郎、エミヤ、クロウ、ギルガメツ シュ………………。最後まで、俺の我が儘に付き合って貰うぞ。この身が果てるまでな。」

未来「でも——」

フラン「言うと思った、お兄ちゃんなら。」

未来「フラン!?! って皆!?!」

全王神「もう、ホントにガルちゃんは諦めの悪い子なんだから。」

英竜「全王神様!?!」

ガルツチ「英竜、未来。諦めるのはまだ早い。それに言つたら?ゼロノス用神話礼装がある。だが、それを発動させるには、『神話スタンド』である此奴が必要になる。

此奴が居れば、あとは簡単さ。」

英竜「……………そうだね、まだ、負けてない!」

未来「だったら、足掻こうじゃないか。最後の最後まで!!」

ようやく、重い腰をあげたな。さてと……………。

ゼロノス「下らん、三文芝居はそこまでだ。」

ガルツチ「お前よりはマシだ、ゼロノス。つてな訳で、地上にいるお前ら!!!!
アレをや
るぞ!!!!」

全員『アレ?』

ガルツチ「決まってるだろ?

合体だ!!!!!!
「」

「する!この場にいた未来達と地上にいる味方は光球へと変化していき、僕のスタンドに吸い込まれていく。同時に巨大化していき、いつの間にか超天元突破グレンラガン並みの大きさに変わった。しかも、姿も一変し、50枚ほどの虹色の翼に、虹色のマントを靡かせた姿へ変貌した。」

ガルツチ「母さん、英竜、操縦は任せた。僕はゼロノスと決着を着ける。」

僕はゼロノスの方を見た途端、また何かの気配を感じ、すぐ後ろを向いた。そこには、超天元突破グレンラガンの姿があった!まさか、あれって…………。

シモン「ガルツチいいいいいい!!!お前の諦めない心、その意志!!しかと見させて貰った!!」

カミナ「ああ、それでこそグレン団の中の一人、本当に最高だぜ、ガルツチ!!!」

ガルツチ「シモン!?カミナ!?皆!」

ヴイラル「あの野郎を倒すんだろ？手伝ってやるよ!!英竜とか言ったか!!」
英竜「何っ？」

ヴイラル「俺達の手を掴め!例のアレをやるぞ!!!」

ガルツチ「あれって………、ちよつと待て、『神話スタンド』とそれで!?!」
シモン「ああ、そうだ!!!!

超天元魔合体だ!!!!!!

シモンがそう言うと、お互いに巨大な光球となり、そこから現れたのは、600枚の虹色の翼に虹色のマントを靡かせ、シモンが着けているゴーグルを着けた、僕のスタンドがあつた。

その大きさは……………、いややめよう。兎に角、超天元突破グレンラガンの約90億倍とでも言おう。何あのデカさ、狂つてるだろ……………。

ガルツチ「んで、シモン。その名は決まつてるのか？」

シモン「ああ、お前のスタンドと俺のグレンラガンの力を合わせた魔合体、その名も『超究極天元突破アルティメットグレンラガン』だ!!」

英竜「これなら、あのアンチスパイラルを倒せる!けど、聞いていい?ガルツチ。ガルツチ「?」

全員『何で全裸なおおおおお』

ガルツチ「いやそう聞かれてもね……………。こつちしてんじやあ、何も見えないよ。兎に角、英竜!!母さん!!アンチスパイラルを頼むぞ!!シモン達から受け取った『螺旋』の

力、皆の力を使いこなせよ!!」

さて、やれるだけのことはやった。後は、ゼロノスの決着だ！

ゼロノス「ふっ、確かに此ではアンチスパイラルの敗北は一目瞭然だ。しかし、俺とお前の戦いなら、此方が有利だな。」

ガルツチ「どうかかな？まだ本気も出してもいないってのに、随分な言い草だな。」

ゼロノス「ならば見せてみる、貴様の力を。」

ガルツチ「ああ……………」

BGM 天元突破グレンラガン挿入曲 『liberame from hell

1』

本来なら、『死滅願望』のスキルがあつたはずの神話礼装だが、英竜お姉ちゃんのおかげで、問題なく使える。でも、僕のは別にある。

『消滅願望』、限界を無視して戦うと言われる『死滅願望』スキルとは違い、此方は己の全ての極限を無視して戦うスキル。

此を使えば、きつと僕は消滅するだろう。皆を置いて……………。

クリムゾン『俺に背負わせろ、そのスキル。』

ジャック!?

クリムゾン『へっ、お前だってまだ生き足りないんだろ？俺はもう充分満足した。』
だ、だが――

クリムゾン『ガルツチ、俺はお前と出会えたこと、感謝してる。恩返ししきれないほどな。だから頼みがある。』

鈴美を頼むぞ。』

……………分かった、『消滅願望』の代償は、お前にするぞ。

クリムゾン『ああ、頑張れ。お前なら、俺の兄貴を倒せる。』

少し涙ぐむも、ジヤツク我が親友の別れの覚悟を決め、詠唱を始める。

ガルツチ「全、零、虚、無、絆、滅。6つの龍神と共に、我はすべてを超える。

我は虚無であり偽りなり。されど、持ちし心と精神、そしてこの意志は黄金なる魂なり！

繋がれた楔を、枷を全て断ち切り、己の極限を超えん!!!」

詠唱が終わると同時に、髪の色は虹色に変色し、羽耳は何故か4枚に増える。20枚

の虹色の翼が生え、右腕には植物が、左手には鎖が絡みあつた。服装はギルガメッシュの神話礼装と似ていたが、首元に月のキーホルダーが着いたチョーカーを着けていた。

此がゼロノス用の神話礼装『永劫の超天元神話礼装』。

その姿に、ゼロノスは驚愕を隠しきれなかった。

ゼロノス「貴様……………、一体……………何者なんだ!?!」

ガルツチ「僕か?ならば聞くがいい、何者かをな。僕はラーク・バスター・ガルツチ。全王神の息子にして、『この世の全ての刃』、そして全王神を超える『超全大王神』なり!!!

さあ、零の龍神よ。最終ラウンドと行こうではないか。」

ゼロノス「……………いいだろう、その覚悟に敬意を評して此方も全身全霊で相手をしてやろう。」

ガルツチ「行くぞ、零の龍神。我らの真髄……………」。

恐れずして掛かってこい!!!!!!
」

ゼロノス「来い!!ガルッ!チイイイイイイイイ
今ここに、本当の最後の戦いが始まる。
!!!!!!」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
◇

第83話 超全大王神『ガルツチ』VS零の龍神『ゼロノス』

—
???
—

ガルツチ side

子ガル『漸く踏ん切りが着いたんだね、『ガルツチ』。』

うん、僕は今まで本気を出さなかったのは、喪失という恐怖を抱いていた。友を、家族を、大切なものを失い、正気を保てる自信がなかった。

けど、ジャックの目を見て、僕も覚悟を決めた。だったら、こっちも覚悟を決めなきゃね。

子ガル『やっぱり、君は凄いよ。なら、その思いを無駄にしないために、勝たないとね。』

元より、そのつもりだ!!

ガルツチ『オールレインボー・ノア・スパーク』!!』

ゼロノス『アンチネクス・スパーク』!!』

僕は虹色の斬撃を、ゼロノスは黒い斬撃を放ち、ぶつかると同時に、一瞬にして爆発

を起こす。

ゼロノス「おのれ、ならばこれならどうだ!! 暗黒邪龍『ディアボロス・ザ・ドラゴン』!!」

ゼロノスの後ろには、禍々しき抜群のドラゴンの姿があり、僕に攻撃してきた。

クリムゾン『ガルツチ!! 俺の力を使え!!』

ガルツチ「ああ、使わせて貰うぜ!!」

僕は直ぐさまバックステップで攻撃を避け、ジャックの力を使った。

ガルツチ「混沌を司るドラゴンよ、我らの世界を守るために目覚めよ!! 混沌邪龍『カオス・オブ・ザ・ドラゴン』!!」

呼び出すと、そこにはゼロノスにも負けないほどの禍々しさがあるも、翼は美しい程白く、竜人とも思える姿があった。其れがゼロノスの邪龍に攻撃を仕掛け、邪龍同士の闘いが始まった。

ゼロノス「くっ、だったら!!」

ガルツチ「おい待て、それって『マスターボール』!?」

ゼロノス「来い!! 『ディアルガ』!! 『バルキア』!! 『ギラティナ』!! 貴様の思うがままに戦え!!」

ガルツチ「だったら、こっちだって!! 『ゼクロム』! 『レシラム』! 『キュレム』!」

6つのボールが投げられると同時に、その中から伝説のポケモン達が現れた。ゼロノスからは、時を操る『ディアルガ』、空間を操る『パルキア』、虚数世界で見守る『ギラティナ』。僕のは理想を追い求める黒き竜『ゼクロム』、真実を追い求める白き竜『レシラム』、僕と同じ虚無しかない『キュレム』。この6匹が出て来たと同時に、持ち主の敵に攻撃をし始めた。

ガルツチ「つていうかお前、ホウエン三龍持つてるつてどういう事だ？」

ゼロノス「貴様も言えた義理じゃないだろ!!」

しかしまあ、ここまで高揚感が溢れ出てくるのは、初めてだ。

今まで強敵と戦ってきたが、多分1番の強敵と言えるのは、ゼロノス………お前かもしれない。相容れぬもの同士ではあるが、似た部分はある。もしかしたら、お前と出会うために、ずっと彷徨っていたのかもしれない。正直言つて、会えて嬉しかった。

このような全次元を超えた戦いじゃなかったら、好敵手として切磋琢磨出来ただろうに………。

ん？何かこつちに——

『ズッポオオオオオオオオアアア!!!!』

ゼロノス「グギヤアアアオオオオオオオオオ!!!!」

ガルツチ「ええええええええええ!!」

ゼロノス「お、おのれガルッチ……………、まさか狙ったのか？だがこの程度では死な
んぞ!!」

ガルッチ「いややってないし、つていうかあれで無事って……………」

だがまあ、こんなところで負けたら萎えるけどな!!

ゼロノス「お返しだ!!『インフィニティ・ビッグバン・ストーム』!!!DNAの一つも
残らず、消え去れええええええええええ!!」

ガルッチ「負けるかっての!!『アナザー・インフィニティ・ビッグバン・ストーム』!!!」
お互いに巨大な閃光を放つと、そこからあらゆる宇宙が誕生し、ぶつかり合っていた。
邪龍も、ポケモン達も同じように、お互いの最強の技でぶつかり合っていた。

だが、そのぶつかり合いに、ゼロノスの表情が見えた。彼は……………泣いていた。
何故泣いていたのか分からなかった。でも確かに、彼は泣いていた。

あのような野望を持った『零の龍神』が、何故泣くのか、僕には分からなかった。
クリムゾン『……………兄貴はな。』

ん？

クリムゾン『あの野郎、俺やティポタが生まれる前だから分かんねえが、彼奴はいつ
も、泣きそうな顔をしてた。野望とかは人一倍の癖に、いつもあの顔だった。聞こうに
も俺達を無視ばかりしてよ。』

苦しいなら言ってくれば良いってのに、全然聞かねえんだ。そんな時は業を煮やし、彼奴から離れたんだ。もう少し傍に居てやれば、おそらくこうはならなかったのに……。」

……………なんだ、結局彼奴も、僕と同じだったんだ。野望とは裏腹に、本当は気付いて欲しかったんだな。

ジャックに見捨てられてしまったことで、手遅れになるほどあなつちやつたのか。だったら尚更、同情したくなる。でも、それでも勝たないといけない!!その苦しみを解放させるために!!!

ガルツチ「うおおおおおおお!!!」

ゼロノス「なつ!?押されてるだど!?↓の俺が!?この、零の龍神である、この俺がつ!」
ガルツチ「もうつ、終わりにしよう!!ゼロノス!!全次元のためにも……………!!お前のためにも!!」

ゼロノス「つ!?俺の……………?貴様に……………、貴様に何が分かるってんだ!!!」
ウスパーク『!!!』

凄まじい程の閃光を放っていたが、先程の言葉で動揺していた。

ガルツチ「……………分かるよ、お前の気持ち。その苦しみ……………。だから、受け止めてあげる。花卉よ、我を守りたまえ!!『熾インフイニティ天覆う無限の円環』!!」

此方は出力全開の大きな花を生み出し、その閃光を受け止めていた。その途端、彼女からの心の叫びが聞こえた。

『何で誰も分かってくれないんだ……、俺は生まれない方がよかつたのか……！
こんな苦しい思いをして、一体なんになるんだ!!』

こんな苦しい思いをするなら、進化する^{!!}ために犠牲を払うなら………!!!

進化なんて、消えてなくなればいいんだ^{!!!}
消してやる、この世から『進化』を^{!!}進化^{!!!}という概念そのもの消し、神だけ崇めるだけの世界に変えてやる^{!!!}』

此が、ゼロノスの本音………。でも、でも………!!!

ガルツチ「『其れは違うよ』^{!!!}」

ゼロノス「!?」

閃光を弾くと、其れは明後日の方向に向いて飛んでいった。

ガルツチ「ゼロノス、お前の気持ちは分からなくもない。けど、『進化』が無くなれば
いいなんて、間違ってる!!」

ゼロノス「………ならば、消えろ!!この技でな!!『反螺旋ギガドリルブレイク』^{!!!}」

ゼロノスは己をドリルと化し、僕に迫ってきた。実際、あのグランゼボーマも同じよう^{!!!}に行動していた。

全王神「ガルちゃん、こっちもやろう!!」

ガルツチ「ああ……………!!6つの龍よ、螺旋となりて、今ここにこの世の全ての希望を織りなそう!!!」

シモン「行くぞお前ら!!『超究極天元突破』!!!」

カミナ「『アルティメットインフィニティー』!!!」

アギラ「『ギガ』!!!」

英竜「『ドリル』!!!」

全王神「『ブレイクウウウウ』!!!」

ガルツチ「此が、僕の全身全霊!!!『真・超究極天元螺旋剣』!!!」

此方も対抗して、グレンラガンもドリル化し、グランゼボーマのドリルとぶつかる。

此方は螺旋剣を投影し放ち、ゼロノスとぶつかる。

互いにぶつかると、あらゆる銀河、いや宇宙が両方に吸い込まれていった。だが、僕が放った螺旋剣は、早々と散ってしまった。

ゼロノス「ハハハハハハハハ!!!此で終わりだアアアアアアア!!!」

砕けたか……………。最早此までとは思わないけどな!

???「終わり? 違えな!!ゼロノス!!!」

『ガキンッ!!』

アンリマユ「さあて、派手にやられますかね！」

ガルツチ「アンリマユ、違うぞ。それを言うならば、殺りに行くんだよ!!!」

アンリマユ「だったら、やることは一つ!!」

ガルツチ「この世の全ての刃と……………」

アンリマユ「この世の全ての悪の……………」

ガルアン「最凶合体宝具を見せてやる!!」

アンリマユは赤と黒の残光、僕は青と白の残光が走り、ゼロノスに近づき二つの斬撃を放った。

アンリマユ「これで、俺とガルツチの合体宝具……………」

ガルツチ「『無限インフィニティ・スピニングに交差する螺旋の斬撃』だ。」

ゼロノス「グオオオオオオオオオオオ!!!」

ゼロノスは呻き声を上げると同時に、ド!^{!!}ゴンの姿は無くなり、いつもの人型に戻った。そしてホウエン三龍もゼロノスの隣に^{!!}落ちてきて、グツタリとしていた。

BGM終了

ゼロノス「……………あり得ない、俺が……………、貴様のような……………、小僧に……………!」

僕は直ぐさまゼロノスの前に立ち、『天満月』を投げ捨てた。が、すぐ戻り背中に収

まった。

BGM ファイナルファンタジーX 『いつか終わる夢』

ガルッチ「……………もう、やめよう？ゼロノス。」

ゼロノス「え？」

その行動に、戦いを終えた英竜達には理解できていなかった。母さんですら、理解できなかつた。唯一未来だけは、気が付いていた。

そう、これは未来がやつてた光景の、似たようなものだった。

ガルッチ「もう背負う必要なんて無いんだよ、ゼロノス。」

ゼロノス「な、何を言うんだ!!俺は、俺はまだ——」

ガルッチ「ゼロノス……………!」

僕は思いつきり、ゼロノスに抱き締めた。前までの僕なら、あり得ない行動だった。精神が憎悪と絶望に囚われて、幼かつたからこそ、普通に殺していた。だが、今は違う。慈愛を持って、その苦しみを和らげさせるために、ゼロノスを抱き締めたのだ。

ガルツチ「辛かっただろ？ 苦しかっただろ？ お前が、そんな風になって、素直になれなかっただろ？」

ゼロノス「何で……、何でそんなことを——」

ガルツチ「もう良いんだ、素直になつても……。俺だつて、お前以上に苦しかったんだ……。素直になれなかったんだ……。この苦しみを、一体誰にぶつければいいのか、分かんなかったんだ……!!」

ゼロノス「ガルツチ……、貴様……。」

ガルツチ「もう、泣けば良い。泣けば良いんだ……。！ 苦しみも、辛さも、全部……全部吐いちゃえ……！」

僕は涙を流し、泣いたような声になって、こう言った。

ガルツチ「僕が、お前を許す……………」。

ゼロノス「やめろ……………」

ガルツチ「例え万人が、お前を許さなくても……………」

ゼロノス「やめろ……………」

ガルツチ「存在が、お前を許さなくても……………」

ゼロノス「やめろ!!!」

ガルツチ「僕は、お前を許す!!だから、泣け。」

ゼロノス「あ……………」

ガルツチ「本当に……………」、苦しい思いをさせて……………」、

めんなさい!!!」

ゼロノス「うっ、ううう……………」

自分の悲しみに抑えきれず、ゼロノスに強く抱きしめる。同じように、ゼロノスも我慢の限界が来たのか、僕を抱き締め泣き始めた。

ゼロノス「すまなかった……………」、ガルド……………」、ティポタ……………」!!俺は

……………」、俺は……………」!!俺はただ、俺達を見捨てた親父共に、復讐したかったん

だ!!!

ただ、それだけだったのに……………、俺は……………、なんて事を……………！

ガルツチ「同じだ、僕も親父に裏切られ、復讐したかった……………」

ゼロノス「馬鹿げていたのは分かってた！だが、後戻りが出来なくなつた。ガルドが、お前が居なくなつて、寄り添ってくれる奴が居なくなつて……………!!だから……………、だから!!」

クリムゾン「……………兄貴。」

ゼロノス「ガルド……………」

クリムゾン「俺こそ、悪かった……………。俺は、お前を誤解してた。そんな苦しみを持ってたなんて、全く知らなかった……………」

ゼロノス「……………本当に、すまなかつたつ!!!俺を、俺を許してくれ!!!」

ゼロノスはジャックに向かって土下座を始めた。許してくれるまで、何度も何度も土下座をしていた。

クリムゾン「俺は、今でもテメエの事は嫌いだ。兄貴。」

ゼロノス「……………」

クリムゾン「だが、許すよ。だって、俺達兄弟だろ？」

ゼロノス「ガルド……………!」

クリムゾン「兄貴……………!!」

そして、2人は抱き締め、お互い泣いていた。気がつけば、グレンラガンに乗っていたみんなも、いつの間にか泣いていた。

だが、本当に泣きそうになるのは、ここからだった。

ゼロノス「ガルド、お前……………!!」

クリムゾン「ああ……………、時間だな。だが、兄貴も同じだろう?」

『消滅願望』が発動したのだ。それにしても、まさかゼロノスも使っていたとは……………。

ガルツチ「ジャック……………!」

クリムゾン「すまないな、ガルツチ。ここで、さよならだ。」

ガルツチ「お前、本気か! 鈴美さんは如何するんだ!!」

クリムゾン「言ったろ? お前に任せるって。」

ガルツチ「でも、でもそれじゃあ!! それじゃあお前が救われないじゃないか!! 散々殺人鬼扱ひされたお前が、救われないじゃないか!!!!」

クリムゾン「っ!!……………参ったな。」

覚悟はしてた。だけど、半身とも呼べるジャックが消えてしまうのは、とてもじゃないけど、耐えられなかった。

クリムゾン「ガルツチ。」

ガルツチ「ッ！」

クリムゾン「もう一度言うが、鈴美を頼む。未来にもそう伝えてくれ。彼奴はああみえて、泣き虫などころがあるからよ。お前なら、きつと俺達みたいなことにはならないしな。だから、頼む。」

ガルツチ「……………分かった、ジャック。絶対に、守る。この刃に誓って、我が親友に誓って、鈴美さんを守る。だから!!」

クリムゾン「……………ああ、安心した。お前と出会えて、本当に……………よかった……………」

——ああ、じゃあな。魂よ、友よ……………。

そう言い残し、一番かけがえのない親友である、『零の龍神』であり、僕の裏人格である『ジャック・マッドネス・クリムゾン』は、ゼロノスと共に、跡形もなく消え失せた……………。

アンリマユ「……………ガルツチ。」

ガルツチ「……………こつちこそ、本当に……………本当にっ!!お前と出会えて、よかったよ!ジャック……………!」

止めようのない涙を流しながら、ジャックの名を呼んだあと、僕は今まで我慢していた泣き声を、大きく叫んだ。

勝利を手にした代償として、僕は………かけがえのない親友であり、半身を失ってしまったのだ。

t o b e c o n t i n u e d
⇩

第84話 超大宴会

—孤独の岬—

ガルツチ side

ガルツチ「ふうつ、この辺りでいいかな。」

僕はあの戦いが終わった後、超大宴会があるらしいのだが、先にやるべき事をやることにした。

そのやるべき事というのが、ジャックとゼロノスのお墓だった。

ガルツチ「まあ、今回のメインはアギラだけど、こっちはサブだからね。まさかグレインラガンを操縦できたなんて思わなかった。」

しかし、彼奴がいなくなったお陰で、まさかの本当に半身がなくなるなんて思わなかったよ。英竜お姉ちゃんつたら、気付いていないだろうけど、瞬時に再生出来るけどなあ。目以外。

まあいつか。さて、と……………。

ガルツチ「そこにいるんだろ？出て来い。」

後ろを振り向くと、そこには英竜お姉ちゃんとは似ても似つかぬ姿があった。だが、

それが誰なのかは分かった。

霊長の抑止力、『阿頼耶識』だった。

ガルツチ「今更何の用だ。どう足掻いても、ここまで歪んでちや、さすがのお前でも対処出来ないだろ？それとも、根本的な原因である母さんを殺すとか？だったら何故態々自分から出て来なかつたんだ？」

阿頼耶識「……………確かに、今更遅すぎた。ガイアですら、それも理解している。だが、そんな私でも、意地が出来た。今回歪ませた元凶である、お前を殺しに来た。」

ガルツチ「……………そうか、万人の幸せを優先して、僕達を自ら殺しに来たって訳か。下らない、万人の為に、個人の幸せを奪うなんて、熟々思ってたが、やはりお前は存在してはならないようだな。」

阿頼耶識「何故だ？何故個人の幸せを求める。その為に、一体どれだけの犠牲を払ったんだ？どれだけの人類を殺してきたんだ？」

ガルツチ「お前が、思ってる以上に殺してる。そしてこれからも、僕は殺し続ける。だがそのためには、お前が邪魔だ。お前のせいで、エミヤが苦しむ。お前のせいで、切嗣が苦しむ。だからこそ、阿頼耶識。お前を殺す。」

阿頼耶識「愚かな男め、ならばこの手で、この力でお前という存在を無かったことにしてやる。感謝するがいい、お前の義姉の力で殺してあげるのだ。」

ガルツチ「……………無駄なだけだな。お前には。」

阿頼耶識「何？」

僕は直ぐさま直死の魔眼・絶望を発動させて、『天満月』を抜いてバツサリと斬った。

ガルツチ「式より先に、抑止力という名の、神様を殺しちゃったな。」

阿頼耶識「まさか……………、私が……………。万人の民よ……………、どうやら、お

前達の幸せを……………守れないようだ……………」

阿頼耶識はそのまま倒れ、存在諸共消えるのが分かった。絶対に勝利できる数値で来るのなら、それは無駄なことだな、阿頼耶識。

僕はこの世の全ての刃、お前がどれだけの数値で挑んでも、数値そのものを斬る。

さてと、これでやるべき事が出来たな。

僕の幸せを守るために、母さんを、英竜お姉ちゃんを守るために、抑止力を殺す。つ

いでに、魔術師達の目標である根源も絶つ。

英竜「ここに居たのか、ガルツチ。……………ガルツチ？」

ガルツチ「英竜お姉ちゃん、僕決めたよ。」

英竜「？」

ガルツチ「英竜お姉ちゃんを邪魔しようとする抑止力の根源を、僕が殺す。阿頼耶識もガイアも何もかも、英竜お姉ちゃんを仇となる奴らを殺すから。」

英竜「待て待て待て待て!!!何故ヤンシスに!?!というか何があつた!?!」

ガルツチ「阿頼耶識が英竜お姉ちゃんの姿で殺しに来たから、直死の魔眼・絶望で殺してやった。」

英竜「つていうか阿頼耶識今更来たの!?!対応遅いししかも弱すぎ!?!」

ガルツチ「安心して、英竜お姉ちゃん。あの2人を殺したら、後は母さんが仕切れば万事OKだから。」

英竜「やだ………、私の義弟、愛が——つてそんなじゃ無い。ガルツチ、宴の準備終わったよ。」

ガルツチ「あ、もうか。それじゃ行こつか。」

僕は直ぐさま英竜お姉ちゃんと一緒に歩くと、ふとあることを思い出した。

ガルツチ「ところでお姉ちゃん。約束覚えてる?」

英竜「約束?」

ガルツチ「ほら、言ったじゃん。あの弟を倒した後に——」

英竜「あ、えええ!?!ほ、本気で言ったのか!?!」

ガルツチ「本気も何も言ったじゃん!!」

英竜「まじか。＼(´o´)／」

えー……、まあ宴会が終わってからでいつか。

そして……。宴会が始まった。まあ正直、合同での宴会が始めるなんて思わなかったからな。

ただまあ、問題が……。カオスな状況なんだけどね……。

ガルツチ「まあでも、こんなカオスな状況も、悪くないかもね。」

全王神「ガルツチちゃん、楽しんでる〜?」

ガルツチ「うん、バツチリと。」

全王神「それにしても、アギラちゃんの歌、ホントに上手いね。」

ガルツチ「そうだな。」

全王神「でも、ガルツチちゃんの半身——」

ガルツチ「安心しろ、ちゃんと戻ってる。どうやらこの超獣、僕の再生力と相性が良すぎたのか、滅茶苦茶馴染むんだ。代わりに、ジャックを失ったのが辛いけどな……。」

正直言つて、ジャックがいないと寂しい。けど、悲しんではいけないのは分かってるさ。彼奴が死んだ分、僕が生き続けないと……。

その後僕は、英竜、未来、愛花、深雪、藍、夜神、士織の8人で最後の締めくくりをするためにステージに上がり、マイクを手を取った。

歌のことだが、どうやら母さんのリクエストがあつたため、それを歌うことにした。

ガルツチ「皆、準備はいい？」

未来「何時でも良いよ。」

愛花「(ゝω・) b」

深雪「アハハ、ウチも歌う羽目になるなんて……。まあしやあないか。」

藍「というか、Fateで選ぶなんて、全王神様も変わってるね。」

英竜「まあそんな全王神様と出会えたお陰で、今があるって言うのも事実だけだね。」

夜神「そうだね。」

士織「それじゃ、そろそろ歌おう？皆待ってるし。」

英竜「ガルツチ、準備は？」

ガルツチ「OKだよ、お姉ちゃん。では、聴いてください。『blossom』。」

Fate/Extra cccのエンディング曲で、前にフランが歌った曲を、今度は僕らが歌う番になった。

すると、僕らの後ろに、一本の桜が現れ、花びらを散らし始めた。と同時に曲が流れ始め、最初は英竜お姉ちゃんが歌い始めた。

英竜「夢一つ、密かに生まれとてた。♪眼差しが、私射抜くいた、瞬間に。♪」

夜神「暖かい、掌、魔法のように。♪戒めに、閉ざされていた。♪心、開いた。♪」

藍「誰も、名付けない花に。♪」

士織「そつと、話しかけた人。♪」

藍「貴方には見えて欲しい。♪」

士織「夜明けまでの光。♪」

4人「「「「蕾が、解けていく。♪」

こんな小さな、私のかげら。♪触れ合って、溶け合って、満ちていく。♪

桜色した、淡いこの恋。♪いつか、愛に育つまで。♪「「「「」

1番を歌い終わったお姉ちゃん達は、マイクを下ろした。と、同時に、僕はヘアゴムを解き、ポケットの中に入れた。いつの間にか、後ろ髪が長くなったと思いつつながら、僕は初めて、女声で歌い始めた。

ガルツチ「悲しみのく、運命が待つのなら。♪世界ごと、未来を変えて、あげるから。♪」

愛花「美しいく、詩人の言葉より。♪何気ない、微笑み。それが、私への寄香。♪」

未来「誰も、傷付かないように。♪」

深雪「一人、苦しんでいたの。♪」

未来「君の為に生きたい。♪」

深雪「純白のドレス着て。♪」

4人「二二奏でよう、永久の誓い。♪」

無邪気な時がく、過ぎ去って今く。♪想うまま、願うまま、身を焦がす。♪

求める事を、止められぬ愛。♪いつか、恋を越えるまで。♪二二

お互いに歌い終わると同時に、フランとこいし、簪、本音、鈴美さん、オフィス、レ

テイシア、白夜叉がウエディングドレスを、イリヤだけは『天の杯』^{ヘブンスライール}の羽衣を着込みながらステージに上がり、マイクを取った。と、同時に、僕らの衣装がいつの間にか変わっていた。僕は結婚式や戦闘の時に何時も着ていた『月夜の袴』を、未来は二十世紀少年時代に着ていた白いスーツを、深雪達はフラン達が着ているウエディングドレスに着替えさせられたのだ。さすがの英竜お姉ちゃんも予想外だったそうだ。

その時、母さんの念話が聞こえた。

全王神『実は英竜ちゃん達やガルちゃん達に内緒で、サプライズ結婚式の準備を進めてたの。』

サプライズ結婚式、だって？ってちよつと待て、まさか——

全王神『そう言うこと、だから英竜ちゃん達と結婚しちゃいなよ。未来ちゃんたちも

含めてね。♪』

オイオイオイオイ!!マジかよ!!ってそれフラン達は——

全王神『快くOKしてくれただよ!』

やつぱりか………。

英竜「ガルツチ、何で私ウエディングドレスなんかに!?!」

ガルツチ「お姉ちゃん、要するにこれ結婚しろって事だろうね。」

英竜「ハイイイイ!?!け、けけけけ結婚!?だ、誰と!?!// // // // // // // // // //」

ガルツチ「ステージでマイクを持つてる人全員って事じゃないかな？」

士織「ふあ!？」

英竜「と、ととととと突然過ぎるって!!そ、そもそも、先ず恋人から——」

ノア「恥ずかしがる必要はない、全世界を救ってくれた怪獣娘。君も、幸せになればいいと思うぞ。」

ノア!?!いつの間に来たの!?

英竜「で、でも……、私……その……。//////////////////

ガルツチ「はあ、英竜。こつち向いて。」

英竜「ちよつと待って、これって——」

この後の未来が分かっていたのか、英竜は赤くなるも、構わず僕は英竜にキスした。

ガルツチ「僕は君のことが好きだ。未来もそうだし、フラン達も、簪達も、夜神達も
 そうだ。だからこそ——」

英竜「いやいや、あのね!?!物事には順序があつてね!?!//////////////////

ガルツチ「順序なんてどうでも良い!!僕は結婚することには構わない!夜神達も、簪
 達も結婚も構わないって言つてた!」

英竜「つて、藍達いつの間に!?!///////////////

藍「えへへ、全王神様の質問の時にねえ。まさかこんな形で結婚だなんて、思わなかつ

た。」

英竜が滅茶苦茶焦ってるな。まあ無理も無いか。無性愛の英竜だったし、仕方ないよね。

ガルツチ「それで、如何なの？英竜。」

英竜「わ、私は……………。……………。」

もう顔が真っ赤になっているも、覚悟を決めたのか大声で言った。

英竜「私だって、ガルツチ達と結婚したい！！！！」

それが滅茶苦茶響き、音楽ですら一時的ではあつたが止まった。そして、僕の答えは勿論。

ガルツチ「だったら、結婚しよ。英竜。」

英竜「ああ、そうしよう。ガルツチ。」

そして、皆は歓声をあげて祝福してくれた。皆はおめでとうと言う言葉が飛び交い、母さんはうれし涙を見せた。

音色が再び流れると、直ぐさま僕と英竜は歌い始めた。

ガルツチ「誰も名付けない花にく。♪誇る理由、くれた人。♪」

英竜「君には生き続けて欲しい。♪」

ガルツチ「強い風に、♪」

英竜「もしもこの花っ。♪」

ガル英「散ったとくして。♪」

そして最後の部分で、皆歌い始めた。

全員『ほんの微かなっ、希望の針が。♪

私^僕から、貴方^君へと、伝えてく。♪

不器用な恋も、歪な愛もっ。♪

全て、砂に、還るけどく………。♪』

英竜「尽きぬく未来く。♪」

ガルツチ「見えるくかくらくく………。♪」

歌い終わると、皆は一斉に割れる程の拍手を送り、超大宴会＋サプライズ結婚式が終

わった。それにしても、母さん。それ僕にも教えて欲しかったなあ………。
全王神『えく、教えちやったらサプライズじゃなくなっちゃうじやくん。♪』
はあ、やれやれだぜ。

t o b e c o n t i n u e d
◇

第84. 5話 英竜との異世界デート

—冬木市（VR世界）—

ガルツチ side

正直に言おう、何故冬木市!?というか何が一体如何したらこの場所になるんだ!?

英竜「な、なあガルツチ。何故冬木市?」

ガルツチ「こつちが聞きたい。そもそも何でおまけとして制服なんだ!?ホントに分か
らないんだけど!」

英竜「そもそも、他の皆は目的の場所に着いて、何故私とガルツチがここなのだ?」

そもそもその発端が、ダ・ヴィンチが作ったVR世界の事だ。結婚して一日目の時、ど
うもVR世界にいける転送装置を作ったそうさ。んで、試しに僕らが適当な場所に選
び、皆で乗ったら、どういう訳か、英竜と僕が冬木市、未来達は目的の場所に到着した
のだ。

ヴィンチ『ごめんね、何故か知らないけど、2人は別のところへレイシフトしちゃっ
た。』

ガルツチ「ダ・ヴィンチ、貴様、後で覚えてろよ?」

ヴィンチ『え？何の事かなあ？私にはわっかんない！』

英竜「ガルツチ、ああいうのは起源弾が有効だよ。」

ガルツチ「僕の起源弾が？」

英竜「いや、切嗣が持つてる起源弾。」

ヴィンチ『酷くない!?!』

ガルツチ「なる程、後であの馬鹿親切嗣に頼んでみるか」

ヴィンチ『ちよつと待つて、そんなことしたら私が消えちやうじやない!!!』

ガルツチ「だったら紫みたいにああなりたいのか？僕は別に構わ——」

ヴィンチ『ごめんなさいホントにそれだけは勘弁して下さい正直に言いますだからそれだけはホントにマジで勘弁して下さい。』

つてな訳で、如何して英竜と僕だけ違う場所なのか。そしてどう言う世界なのか聞いてみた。

ヴィンチ『それで、この場所だけど……。ここは『月色溺愛』の冬木市——』
 ガルツチ「おい待て、それってつまり……。簪が作ったBL同人誌の世界って事!?!」

英竜「え？何それ初耳。つていうかガルツチ持つてるの!?!」

ガルツチ「うんまあ、どんなのか見たらさ……。濃厚すぎた。色々。」

ヴィンチ『まあ何故こうなったのかはさっぱりだけどね。とりあえず英竜はともかく、ガルツチは気を付けた方が——』

ガルツチ「20歳にしたけど、こんなんでいいか。」

英竜「……………。(。D。)ポカーン」

ヴィンチ『まっまあ、良いんじや無い?とりあえず……………、Good Luck。(、ω・)b』

因みに身長は160cm位あります。っていうか、英竜が(。D。)ポカーンってなってるけど、大丈夫なのか?

ガルツチ「おーい、英竜?」

英竜「……………ガルツチ、言って良いかな?」

ガルツチ「何?」

英竜「滅茶苦茶エロい。」

ガルツチ「なんでさ。」

何でエロいなんて言われたんだ?そんなに色っぽいのか?いや絶対無いと思いたいが……………。

英竜「と言うか、エロカワイイ。」

ガルツチ「だからなんでさ。」

まあいいや、VR世界つつたつて、本物とは変わりないしな。とりあえず、どこか行くか。(あの本場の麻婆豆腐は、連れて行かせないで置こう。)

英竜「ところで、何処に行く?」

ガルツチ「そうだね、何処がいいかな……………。つて、ん?」

『サーヴァントランド カップル限定チケット1000円』

チケット? つていうかホントにあの世界なんだな……………。

英竜「何これ、サーヴァントランド?」

ガルツチ「設定だと、そこは遊園地のように、滅茶苦茶人気のある場所なんだつて。」

英竜「へえ、行ってみる価値はあるな。」

ガルツチ「んじゃあ、行ってみるか。生で体験できるのは、凄いことだしな。」

そう思い、僕と英竜はサーヴァントランドへと向かった。

—サーヴァントランド—

うんまあ、ここまで忠実だとは思わなかったな。

「ようこそ、『サーヴァントランド』へ。チケットを。」

ガルツチ「はいっ。」

「カップル限定のチケット、ですね。ありがとうございます。それでは、ごゆっくりお

楽しみ下さい。」

さてと、パンフレットも貰ったし、一体どんなのがあるかな。

英竜「結構多いね。ステイナイトエリアにゼロエリア、エクストラエリア、アポクリファエリア、プロトタイプエリア、ストレンジフェイクエリア、コハエースエリア、グランドオーダーエリア。」

8つのエリアがあるんだね。」

ガルツチ「こんなにあつたのか……。ステイナイトエリアはこの辺りだな。んで、あれがジェットコースターか。お？あれって……。」

ここでまさかのこの世界の僕と未来が、ジェットコースターに降りた後だったようだ。

(B L世界) 未来「だ、大丈夫？」

(B L世界) ガルツチ「あ、危うく死にかけた。」

英竜「(。D。D。)ポカーン」

ガルツチ「英竜、また(。D。D。)ポカーンってなってるぞ。」

(B L世界) クーフリーン「うつぶ、もう駄目……。」ボタン

Wガルツチ「ランサーが死んだ!?!」

英竜未来「この人でなし!!」

あ、無意識に言っちゃった。っていうか英竜もノってくれたんだ。そしてクーパーリンはダメツトに運ばれ、医務室に向かっていった。

英竜「んで、如何する？乗る？」

ガルツチ「乗ろつか。」

とまあ乗ったのは良いのだが、問題はその後だった。

——ジェットコースター乗った後

ガルツチ「おーい、英竜？大丈夫か？」

英竜「（。 ㇿ）ポカーン」

ガルツチ「……………まさか気を失うとは思わなかった。」

とはいえ如何したのか……………。とりあえず、目が覚めるまでベンチに座らせて、目が覚めるまで待つてるとするか。ん？これって、未来から？

未来『ガルツチ、聞こえる？』

ガルツチ「未来？未来なのか?!」

未来『よかつた〜、やつと繋がったよ。英竜と一緒に？』

ガルツチ「うんまあ、今はジェットコースターで気絶しちやつてるけど。」

藍『気絶!? ジェットコースターで?!』

夜神『だ、大丈夫なの？』

ガルツチ「まあ大丈夫なのは確かだけど、相当怖かったそうだ。」

簪『ちよつと待つて、今何処に居るの？』

ガルツチ「何処つて、『サーヴァントランド』だけど。」

本音『え、そこつて確か……………。』

ガルツチ「多分本音が想定してる通りの世界だね。」

簪『なんだつてええええええ!!! うらやましい!!! リアルでその世界に行けるなんて!!! う〜、ちよつとダ・ヴィンチ!! ダ・ヴィンチ〜!!!』

ガルツチ「むう、如何しても見せない気か？」

英竜「ウグツ……………」

ガルツチ「そうだったら、僕も寝顔を見せないように——」

英竜「やめて下さい見てもいいからお願ひします。」

何その反転、どこまで可愛さ優先してんの……………。(・|・;)

英竜「それで、今度は何処に行く？」

ガルツチ「じゃあ、エクストラエリアに行ってみるか。」

—サーヴァントランド エクストラエリア—

エクストラエリアに入ると同時に、近未来的な音楽と世界観が移っていた。辺りにはゲームセンターやVRゲームセンター等、様々な近未来的なアトラクションがある場所になっていた。

ガルツチ「凄いな、ホントにエクストラの雰囲気があるよ。」

……………あれ？英竜？何処に行った？まさかはぐれた!?

英竜「何これ楽しい!!」

ガルツチ「つて居たく、そこにいたよ。つていうかどう言うアトラクションなんだ？」

『VR格闘ゲーム』

……………おし、参加しよう。っていうかトーナメント戦？まいつか、やってみよう。
だが、ここでまさか、彼らと出会うことになるなんて、思いもしなかっただろう
……………。

—黄昏ノ刻—

「さて、いよいよ決勝戦!!先ずは赤コーナーと行こう。数々の格闘ゲーム達を葬り、
見事決勝戦に勝ち抜いてきた!!『ガルツチ』選手です!!」

ぬぁにいいい!?!このゲームに参加してたつてのか!?!ちよつとこれは想定外なんだけ
ど!?!

「青コーナー、此方は正体不明で、優勝候補者であるにもかかわらず、勝ち進んできた
選手!『無銘』さんです!!しかし、ホントに何故フードなんかを着てるのでしょうか?」
と、とりあえず無銘かつフード被せてるから、一応大丈夫かな?

(BL世界)ガルツチ「お互い、全力で行きましょう。」

ガルツチ「……………」コクツ

「おや？ 準決勝までは喋っていたはずなのに、何故ここで？ やはり緊張してるのでしようか？」

違うから!! 同一人物だからああああああああ!!!

「それはともかく、いよいよバトルスタートです。両者、構えて!!」

まあ、加減はするけど、負けるわけにはいかない!

「FIGHT!!」

先手は未来と付き合ってる僕で、素早く攻撃を仕掛けてきた。うーん、何故だろ。あまりにも強すぎたのか、動きが鈍く見える。けど……………!

ガルツチ「ハッ!」

(BL世界) ガルツチ「え!？」

「何と無銘選手、ガルツチ選手の攻撃を受け流して、背負い投げをしたああ!! まさかの柔道技だ!!」

(BL世界) ガルツチ「……………このっ!!」

ガルツチ「ツ!」

ここで関節技か! だが、貫つた!!

ガルツチ「オラア!!」

(BL世界) ガルツチ「ツ!! 足が!？」

手元から離れた。ここがチャンス!!

ガルツチ「フウ……………」

「あの構え、ガルツチ選手が使ってたのと同じ?」

ガルツチ「ハアッ!!」

(BL世界) ガルツチ「なっ?!」

ガルツチ「肘撃!!」

見事に直撃したのか、もう一人の僕はそのまま吹っ飛ぶ。が、ここに来て誤算が招じてしまった。

「なっ、何と言うことだ!!此は一体、どういう事なのだ!」

ガルツチ「ん?って、しまった!!フードが!!」

(BL世界) ガルツチ「ええええ!!何で僕がもう一人!」

「信じられません!!まさかの展開が起きました!!無銘選手の正体は、何とガルツチ選手と酷使した人物です!!」

(BL世界) 未来「え、ガルツチが2人!」

ヤベえ、早めに決着を着けたかったのに、此は……………。仕方ない。

僕は直ぐさまフード付きの服を脱ぎ捨て、ファイティングポーズをした。

ガルツチ「驚いてる暇はないぞ、もう一人の僕よ。今この一時を、この奇跡を大事に

して、戦おうじゃないか。」

(BL世界) ガルッチ「……………説明してくれるよね?」

ガルッチ「可能な限り、教えてあげる。」

そして、手加減していたとは言え、激闘の末に、僕が勝利した。まあ勝った原因は、判定勝ちだけど。

優勝賞品は、単なる優勝バッジではあったが、不思議と魔力を感じたため、一応持つことにした。その後、観覧車に乗り、僕と英竜は、自分の名前、そして異世界から着た住人だと言った。

(BL世界) 未来「ちよつと待って、異世界? そんなの信じられないよ。」

ガルッチ「でも、此が現実だ。実際、そっちの僕と出会っているし。」

英竜「それに、未来から着たって訳でもないからね。正真正銘、異世界の住人さ。」

ガルッチ「とは言え、別に信じなくても良いよ。どうせ、忘れろと思うし。」

(BL世界) ガルッチ「忘れるって、ちよつとそれは……………」

ガルッチ「仕方ないよ、本来なら君達に出会わないようにしてたんだし。デートの邪魔して悪かった。」

(BL世界) 未来「うーん、確かにデート中だったけど、一つ聞いて良いかな?」
ガルッチ「何?」

(BL世界) 未来「そつちの僕も、僕達と同じように付き合ってるの?」
 そう着たか。まあ言っても良いか。

ガルツチ「既に結婚してるよ。本来なら新婚旅行で何処か行こうとしたら、どつかの馬鹿が英竜と一緒にこつちに飛ばされたからね。」

(BL世界) ガルツチ「け……………、結婚……………。／／／／／／／」

おいこの世界の僕よ。付き合うことになったのは、あんたらだからね?

(BL世界) ガルツチ「だ、大胆過ぎない!?だ、だつて——／／／／／／／」

ガルツチ「言いたいことは分かるけど、別に同性愛に恥じる理由なんてあるか?」

(BL世界) ガルツチ「え!?!」

ガルツチ「最初は恥ずかしいよ?僕だつてそうさ。女の子は好きだけど、未来と出会い、やりあつた途端、いつの間にか両性愛になつた僕だよ?そりや最初は否定するほど恥ずかしいよ。」

でもさ、恥じることは無いよ。だつて、君は未来のこと、愛してるんだろ?」

(BL世界) ガルツチ「そ、それは……………。／／／／／／／／／／／／／」

ガルツチ「自分の気持ちに素直になれ。さらけ出しちゃえ。ずっと住みたいって言いなければ良いし、この場で犯し……………は無いか。」

英竜「流石にそれは露出狂だぞ……………、ガルツチ。」

ガルツチ「分かってる。こんなところで脱いでヤル人は、流石にいないって。」

(BL世界) 未来「冗談でも、恥ずかしくてやりたくないけどね……………」

そして色々な会話をしていると、もうすぐ閉園の時間になったため4人とも『サーヴァントランド』から出た。

—冬木市— 月夜ノ刻—

とは言え、何時までこの世界に留まれば良いんだ？(現在15歳 身長は150cm)

流石に永遠つてのは、御免だからね？

ガルツチ「んじゃあ、僕と英竜はこの辺で。」

(BL世界) ガルツチ「宛はあるの？」

ガルツチ「無いけど、それが旅だからね。こうやって旅をし続けていたからさ。ゲームみたいに、次の街に行けるなもんはないし。」

まあ、彼らは多分ラブホテルに行くだろうけど、そこを邪魔するのはどうかと思うしな。

英竜「いいの？」

ガルツチ「この後の事を考えて決めた事だからね。あの2人は、結ばれる関係だし。」

英竜「……………経験者は語る、ね。」

ガルツチ「まあ大きく歪ませない事なのは事実だからね。此ばかりは、歪ませないよ
うにしないと。つて時既に遅しかな？」

英竜「うーん、ここはあくまでVR世界だから、一応心配要らないんじゃないかな？」

ガルツチ「あ、ここVR世界だったの忘れてた。」

英竜「忘れるな！」

ガルツチ「アダツ!？」

まあ今回は僕が悪いな。とは言え、どの辺りで寝泊まりしようか——

英竜「……………んで、何故私達この場所にいるんだろ？」

ガルツチ「こつちが聞きたい。」

やっぱりお約束が発動したか。何故考えてる最中にラブホテルに着くんだよ!?!おい

ダ・ヴィンチ、お前最悪処刑するからな!?

英竜「はあ、仕方ないからここに入りましょうか。」

ガルツチ「……………そうだね。」

まあそこでお約束が発動しますがね。つて事で、鳴滝さんの台詞言わせて貰います。

おのれダ・ヴィンチ!!

とまあ、仕方なく入り、お互いシャワー浴びたのはいいけど、問題は、英竜が無性愛つて事なんだよな。

多分原因は別にあるだろうけど、やっぱり知った方がいいと思うんだよね。分かってはいるけど、でもやっぱり寂しいと思うよ。

英竜「ん？」

ガルツチ「どうかした？」

英竜「いや、君の半身、元通りにならないと思ってたのに……………」
ガルツチ「あー此？言い忘れてたけど、元から再生力が高くてさ。けど、致命的な、特に目とかは再生その物が不可能だし。」

あと、『寄生再生超獣ニョキン』だっけ？なんか居心地がよすぎたのか、一体化しちゃった。」

英竜「なんて言うか、お前の身体便利だな……………」

ガルツチ「超獣作るなら、僕の腕やろうか？条件として、英竜の助手になるってのは？」

英竜「本気か？」

ガルツチ「いずれ、旅を終える日があるかも知れないからね。その時になったら、助手になる。まあ、どうせ『超全大王神』になっちゃった以上、その仕事が山ほどあるし。」

英竜「でも、私は全王神様以外従わないよ？」

ガルツチ「従わせるかっての。頼み事はするけど。」

そう言いながら、僕は英竜に抱き締めた。

英竜「……………ホント、仕方の無い弟だね。無性愛の私なんかじゃ、つまらないわよ？」

ガルツチ「けど、僕は君と結婚した。夜神達も未来達もそうだけど。」

英竜「じゃあ、何で私を？」

ガルツチ「……………少しでもいいから、セックスの悦びを……………知って欲しいんだ。無理なのは、分かっているけど、その……………頑張って気持ち良くしてあげるからさ。」

英竜「物好きだね、君は。」

ガルツチ「自己破綻しまくった末路さ。」

そのまま英竜を押し倒し、そのまま唇を重ね合わせながら、胸を触っていた。さわり心地は、なんかシュークリームみたい。

英竜「んふっ……………、胸触ったって、何もっ……………。／／／／／／／／」

ガルツチ「でもなんか、シュークリームみたいに、少し柔らかい。」

英竜「転生したときの当初の私も、そうだったな……………。／／／／／／／／」

ガルツチ「とてもじゃないが、ホントに元男だとは思えないけどね。」

英竜「言えてるな。と言うか、ガルツチ。耳がお留守だぞ。／／／／／／／／」

英竜の胸を触ってる最中に、英竜は僕の羽耳を啜え始めた。いやまじで、此だけは全然なれない。肝試しで滅茶苦茶怖い思いをしようぐらいなれそうにないよ。

やっぱもう耳は、聴覚器かつ性感帯なんでしょうかね。

英竜「凄い反応だな、ガルツチ。こんなにピクピクして。ここも連動して小刻みしてるとは……………」

ガルツチ「あつ……………、あのなあ……………。あまり、耳をおおおお?!?!?」

弄るだけでは飽き足りないのか、英竜は僕の耳の穴の中を舐め始めてきた。

今更だけど、皆よく僕の耳を舐めてくるよね? ホントに不思議でたまらないんだけど、こつちとしたらたまつたもんじゃあねえよ! でも気持ち良すぎるし、否定は出来ないし、……………あーもー!! 考えるのが面倒い!!

英竜「ひようふあ? みみのなふあひおはふあれふひぶんは? (翻訳: どうだ? 耳の中に犯される気分は?)」

ガルツチ「あ……………、気持ちいいにつ、決まつてるじゃんつ……………。」

『チュポン』

英竜「やつぱり、そうだと思った。でも耳を舐められただけで感じるなんて、変わってるな。」

ガルツチ「う、言うなよ。こ、これでもつ、恥ずかしいからつ。」

英竜「全く、可愛げな顔して。君のお陰で、興奮しちゃうじゃないか。」

そんなこんなで、英竜がマウントポジションを取られ、騎乗位となつてしまい、英竜が動き始めた。

まるで初めてとは思えない程の動きで、出したばかりだというのにまたすぐに射精しそうになった。と言うかももう出しまくってるけど……………。

最後はとんでもない程の精液を英竜の中に出すも、入りきれなくなつたのかいっぱい漏れ出していた。

抜いた瞬間、まだ出て来る精液が英竜にぶっかけてしまい、出しきつた瞬間お互いグツタリした。

ガルツチ「はあ……………、はあ……………、お姉ちゃんっ……………。大好きだよ……………。♡♡」

英竜「私も……………、大好きだ……………。ガルツチ……………。♡♡無性愛の私に……………、性を教えてくれて、ありがとう……………。♡♡♡」

ガルツチ「えへへ……………、よかった……………。♡♡」
 そしてそのままお互い抱き締めて、眠りについた。その時の英竜の鼓動は、未来と同じぐらい落ち着く鼓動だった。

t o b e c o n t i n u e d ↪

最終話 抑止力の最後

―プロトタイプ世界 心の塔―

ガルツチ side

未来「え!?ガルツチなんだって?」

ガルツチ「だから、少し用事が出来たから、ここで別行動だつて。」

フラン「何でいきなり!?私達の相談無しに!」

ガルツチ「ごめん、フラン。いきなりこんな話したには理由があるんだ。よく聞いて、皆。」

僕はジャックとゼロノスの墓を作つてるときに抑止力に襲われたことを話した。

アラヤ『阿頼耶識』、つて事は母さん。もしかして其奴を殺しに?」

ガルツチ「うん、皆にも連れて行かせたいけど、多分殺される可能性が高い。」

鳳凰「でもお母さん、それじゃあお母さんも同じじゃないの!!」

ガルツチ「鳳凰、僕なら平気さ。何故なら『この世の全ての刃』、確実に勝てるつて思つてる奴なんかに、負けるかつての。」

リサ「で、でもお父さん。相手はその抑止力でしょ?仮に勝つたとしても、その後は

どうするの？」

ガルツチ「決まってるじゃん。母さんか英竜に抑止力になって貰う。彼女たちなら、彼奴らよりうまく立ち回ってくれるしな。」

まあ元々、僕は奴らのやり方が気に食わなかった。ガイアは世界の存続のためならば人類の破滅も問題としないが、世界の大部分を支配領域とする人の世を崩壊させるほどの事態は星の破滅も招きかねないため、結果的に人も守るために発動する。

阿頼耶識は人を守るために人を縛り、時には万人を幸せにする行為にさえも立ちほだかっている。

確かに僕や母さんは、ある意味抑止力が働いてもおかしくない事は滅茶苦茶してる。しかし、其奴の幸せを奪ってまで修正するつもりなら、許しがたいものだ。そうなるぐらいなら、人類だろうが星だろうが、僕がその抑止力を殺す。

その後は、母さんか英竜に任せる。抑止力は、母さんか英竜。特に英竜なら、抑止力を上手く使いこなせそうだし、何より今後にも役に立つてくれそうだしね。

未来「僕達、待ってるよ。君が帰ってくるのを。」

ガルツチ「安心しろ。俺を誰だと思ってる？例え死んでも、幻影から蘇る不死鳥のガルツチだぞ？」

3人「お兄ちゃん……………」

ガルツチ「フラン、こいし、イリヤ。そんな哀しい顔しないで。必ず生きて帰るからさ。この幸せを奪おうとする奴らに、僕を敵に回したらどうなるか、思い知らせてやらないと。」

だから、笑って？その方が、僕も安心して戦えるから。」

簪「絶対、生きて帰ってね。」

鈴美「約束よ、ガルツチちゃん。」

白夜叉「信じて居るぞ。」

ガルツチ「ああ、皆。行ってくる!!」

僕は青いマフラーをつけて、次元を越えようとしてたとき、英竜達が来た。

英竜「行く気か？」

ガルツチ「うん、抑止力はお姉ちゃん達を襲ってくる。多分侵略の邪魔をしてくるに

違いないからね。」

英竜「抑止力か……………」

ガルツチ「心配か？」

英竜「いや、そんなことは無い。だが、ちゃんと無事を連絡しろよ？私達の子が、悲

しまないように。」

英竜のお腹を摩ると、そこには二つの命が宿しているのが分かった。英竜と僕の子

供。約束ぐらい、ちゃんと果たさなければな。

ガルツチ「んじやあ、皆。行ってくる!!時渡り『タイムドミネートディメンション』!!」
別れを告げ、虹色のゲートを開いて中に入ろうとし、後ろを振り向くと、親指を立て
無事を祈る皆が居た。

さて、皆のためにも、生きて帰らないとね!!

—
???

そして、着いた場所は宇宙その物の世界。恐らくここが、奴らの本拠地だろうと思つた。

阿頼耶識「よもや、本気で挑んでくる愚か者がいるとはな。」

ガイア「ええ、しかもよりもよつて、私たちにとつて危険人物。」

そこには白い衣を着た美女に、黒い袴を着込んだ美男が立っていた。

(絶望) ガイア『奴らが、抑止力……………。』

ガルツチ「待たせたな、抑止力よ。『この世の全ての刃』の僕が、お前達を滅ぼしにきた。」

ガイア「何故私達を滅ぼすのです? 今まで人類を守ってきた私達を、何故?」

阿頼耶識「お前がやろうとしてるのは、人類だけでなく、星の滅亡。それを分かつて言ってるのか?」

ガルツチ「ああ、そうだ。霊長の抑止力? 世界の抑止力? 下らん。こつちの大切なものを奪つてまで万人を幸せにするぐらいなら、いつそお前達を滅ぼした方がマシだ。自分の身は、自分で守つた方が通りだろ?」

阿頼耶識「何とも愚かな……………」

すると、彼らの後ろには様々な強者達が沢山居た。中には、キリツグやシロウもいた。ガイア「私達に敵に回したらどうなるか、思い知らせてあげないといけませんね。」ガルツチ「言つてろ、雑種共。『UNLIMITED DIMENSION WORK』!!」

僕は瞬時に固有結界を作り出し、『天満月』と常闇月の刀を抜いた。

ガルツチ「預言しておこう、お前達は抑止力に解放されると。」

阿頼耶識「行け、お前達！」

ガイア「かの大厄災をこの場で滅ぼしなさい!!」

大量の精鋭部隊達が僕を襲い掛かろうとしていた。が、そんな物は無駄だ。

ガルツチ「ゼクロム、レシラム、キュレム。彼らの苦しみを解放させてあげて。」

イツシュ三龍「二はい。」

ガルツチ「ガイア、此からも僕のために戦つてくれるか？」

(絶望)ガイア『何を今更、我が友はガルツチ。お前だけだ。お前が幸せを奪おうとする輩がいるのであれば、我は何時でも力を貸す。』

ラクト『ガルツチちゃん、私も戦う。だから、抑止力なんて蹴散らしちゃいませよ!!』

ガルツチ「……………ああ。」

阿頼耶識「お前には後悔する時間も与えん。この世界で、死ぬがい
いいいいいいいいいい！！！！」
さて、『超全大王神』の最初の仕事を始めるか。

ガルツチ「見くびるなよ、抑止力!! 我が大切なものを守るために、この場で息絶える
がいい!!」

THE
END

第E X話 2万年後の君へ

—光の国—

ガルツチside

ふう、あれから2万年か。未来の旅も終え、英竜達がやろうとしてるのを手伝ったお陰で、宇宙侵略は完了。

現在は、英竜お姉ちゃんが支配者として宇宙に従わせている。でも、それは僕みたい
に力による脅しの支配ではなく、人々の心を奪うという新たな宇宙侵略だった。

勿論、『End of The World』の同盟も永遠と続き、引き続き英竜お姉
ちゃん達に技術を教えていた。

兄さんことルツチは、長年の天皇を引退し、その息子が第二の天皇をやっている。隠
居はしておらず、代わりに英竜達の技術提供者としてやっているそうだ。

姉さんことラルツチは、どうも英竜お姉ちゃんを目の敵をしていたようで、どちらが姉らしいのか勝負し始めた。実はそれも2万年間も続いていたようで、止めに行つてる僕のみにもなつて欲しいぐらい。と言うか仲良くしろよな、姉さんもお姉ちゃんも……。まあ……、『お姉ちゃん達が聞いてくれない……、仕方ない。自殺するしか——』つて言つたら喧嘩をやめて止めに行つてるようだからね。まあ此はあくまで最終手段だな。

エレメントフエニックスの皆は、それぞれの仕事に就いた。ブレイズは英竜達が生み出した超獣達の教官。アビスは全知の海神。レイスは宇宙自然環境に関わる仕事。ノームは鉱山の親方。カレンはマルフォイの秘書官。んで肝心のマルフォイは、全宇宙

ネットワークの社長となり、日々英竜お姉ちゃん達に今まで起こったことをねつ造無く教えている。アルファスは宇宙監獄の監獄長として、日々犯罪者達を光らせているらしい。

僕の息子や娘も、それぞれ仕事に着いてる。バルツチは、性格に似合うほどの執事長。マルツチは超大魔導師兼冒険家として、あらゆる宇宙で遺跡を探している。ドルツチは引き続き天皇補佐。鳳凰は宇宙一の料理長として名をあげている。アラヤはどうもリサと結婚、仕事はどうやら僕の手伝いのようにだ。

未来は旅を終えて土と頂上決戦、結果勝利し、激情コンプリートフォームを手に入れたようだ。が、未来が言うには最終手段として使うようだ。そして、次元管理人として、

母さんの仕事を手伝ってる。

簪と本音は、正義の味方となり、藍と同じように困ってる人達を助けて行ってるようだ。勿論、育児も忘れず、連れて周りながらだけど頑張っているようだ。

鈴美さんは未来と一緒にだが、『零の龍神』として本格的に修行しに行ってるため、最近会っていない。連絡はしているようだけど……。

白夜叉とレティシアは久しぶりに里帰りをしたようだ。土産話も、たんまりあるよう

で、十六夜達も楽しみにしているだろう。

さてと、んで肝心の僕だけど……………、つてあああああああ!!!!
ガルツチ「ヤベツ!!今日ダークザギが転生する日じゃん!!急がなきゃ!!!」
仕事終わって今更だけど、ホントにうつかりしてた!!クソ、転生祝にダークザギ専用
の刀を作ったつてのに!!畜生!!

— 執務室 —

『ガチャツ!』

ガルツチ「お姉ちゃん!ザギは!？」

英竜「ガルツチ、入るときはノック。」

ガルツチ「ご、ごめん。慌てると、ホントに……………」

英竜「全く、しょうがないんだから。それよりザギだけど、もう転生し終わったよ。」

ガルツチ「遅かったか……………」

あークソ、此渡しに来たつてのに……………。

英竜「その刀、ザギに渡すのか？」

ガルツチ「うん。ようやく完成して、仕事が終わったら渡そうかなって思つて。」

全王神「ガルちゃんホントにごめんねごめんね〜!♪」

ガルツチ「母さん? (ニッコリ)」

全王神「はい反省しております超全大王神様。」

ガルツチ「誰もそこまで言えなんて言つてないだろ。」

まあ要するに、僕は正式に『超全大王神』として、様々な仕事をしている。全王の処遇についても、どうやら僕が決めることになった。

勿論その処遇だが、全王としての権限や能力などのものを剥奪、そして宇宙一の脱獄率が低い監獄城にて仮釈放なしの終身の刑に処した。

英竜「しかし、ガルツチも正式な『超全大王神』か。ホント時は早いなあ……………」

ガルツチ「そうだね。そういうえば、抑止力の方は？」

英竜「問題ない。ただ、どうも調子に乗る転生者は後を絶たないようだ。」

ガルツチ「世知辛いもんだなあ……………」

英竜「それには同感だ。それより、どうするんだ? っていうかこの効果は？」

ガルツチ「あ、言つてなかつたな。此奴は村山刀と言つて、僕の力を宿した太刀なん

だ。此を使えば、抜かなくても手刀すれば、どんな最硬なものでも綺麗に斬ることができるものさ。キーホルダーは青い月だけどね。」

全王神「なるほど、最強の矛ならぬ、最強の刃ね。」

英竜「オン／オフの切り替えは？」

ガルツチ「大丈夫。ちゃんとしてあるさ。戦闘モード以外は生活に支障は無い。」

持ち手にはネイビーと黒色で、刃部分は血に飢えてるかのような色、クリムゾンにしている。勿論此はジャックを意識して出した色だ。

鞘付きである。

ガルツチ「とりあえず、宅配として此送るね。名前はザギ限定で分かるように、ロシア語かドイツ語で頼む。」

英竜「名前は『超全大王神 ガルツチ』でいいか？」

ガルツチ「まあ、それでいいかな？」

そんなこんなで、僕はその刀を転生装置に置き、ザギに送り届けた。少なくとも、ザギならあの刀を使えそうだしな。

全王神「あ、そういえばつくくんが言ってたけど。」

ガルツチ「？」

全王神「写真撮るから、世界樹の桜の前に集まってっさ。」

英竜「私も？」

全王神「もつちろん!!『エターナルフォース・ゼロ』と『エクストリームブレード・オー
ル』も一緒にね!(ゝw・)b」

ガルツチ「風の大陸か。そういえば仕事ばかりで、最近『End of The W
orld』に帰ってなかったな。」

英竜「ちよつと皆に聞いてみるから、先に行つててくれないか？」

ガルツチ「分かった、英竜お姉ちゃん。」

んじゃあ僕は、未来達や兄さん達に連絡つと……………。

—風の大陸 世界樹の桜の丘— 昼ノ刻—

懐かしいな、この桜は全く変わってない。2万年も経つてるのに、何時でも散り続け
てる。

ギル「よう、我が雑種。久方ぶりだな。」

ガルツチ「ギルガメツシュ、久しぶり。」

ギル「貴様も相当変わったものだな。いつの間にか、私の嫌いな神に成り下がってし
まうとは。」

ガルツチ「ごめんね、ギルガメツシュ。」

ギル「気にするな。貴様のような神だったら、きつと我も……………いや、悔やんでも無駄か。」

ガルツチ「新生ウルクの方はどうだ？」

ギル「ああ、問題ないな。英竜とか言ったか？彼奴が援助してくれたお陰で、国を作り出すことに成功したからな。」

ギルガメツシュの服装は、いつの間にかキャスターバージュンになっていて、あの時の金ピカ鎧は着ていないようだ。

ガルツチ「しかし、まさかアーチャーとキャスターのダブルクラスになるとは思わなかったよ。」

ギル「ダブルクラスに慣れずして何が王だ!!いっそ、全クラスにでも——」

ガルツチ「おい待て、無茶するな。っていうかバーサーカーになったら駄目だろ。」

ギル「駄目か？」

ガルツチ「駄目です、英雄王。」

ギル「そうか……………」

ギルガメツシュと話をしていると、未来達や兄さん達が来てくれた。

未来「ガルツチ、もう早く着いてたんだ。」

ガルツチ「そりやあそうだよ、ここには縁のある場所だからね。」

レイス「ガルツチらしいっちゃんらしいよね。主に桜好きってのが。」

ガルツチ「そう言うアンタは、簪と二亜の共同作業でBL同人誌を作ってるじゃないか……………」

レイス&簪「BLはジャステイス!!!」

ガルツチ「駄目だこの腐女子達、混ざらせてしまったのが運の尽きか……………」

ブレイズ「そんなガルツチは、何だかんだ言って読んでいると。」

ガルツチ「アハハ……………、否定できない自分に恨みたい……………」

ラルツチ「ガルツチ、白眼になってるよ。」

あ、そうそう。ここ最近この義眼、感情によつて色が変わるようになったんだ。普段は蒼眼なんだが、喜びは黄色、怒りは赤、哀しみはそのまま青など、感情が深まれば深まるほど色も濃くなるようになってる。勿論任意的にオン／オフもしてるため、今はオシっている。

英竜「お、皆揃ってるね。」

ラルツチ「おやおや、遅いではないで—————」

ガルツチ「姉さん、喧嘩は……………?」

ラルツチ「……………くっ!」

英竜「あらあら、私の弟の言うこと聞くなんて、相当ほだされて——」
ガルツチ「お姉ちゃん……………」

英竜「……………」

ラル英竜「私の弟、マジ天使……………」

簪「おねシヨタ……………いやシヨタおね……………」

レイス「どっちもありね。」

ガルツチ「2人とも、なしだ！」

レイス&簪「え〜。」

藍「つていうかすごい大きいね。この桜。」

ルツチ「何しろここは、世界樹の桜と言って、どんな大桜よりも大きく、永遠と咲き誇つてると言われてる、まさにこの世の全てを統べる桜とも呼ばれているんです。」

ギル「私も手にしたかったのだが、手に入ってしまったらせつかくの場所が寂しくなるからな。」

ガルツチ「コレクターEXだなあ……………」

夜神「ガルツチ、また遠い目になってる……………」

士織「そう言えば、全王神様は？」

ガルツチ「そう言えば遅いな。」

何してんだ？ 言いだしっぺは母さんなのに……………。

ミスト「兄や、全王神が来たよ。」

全王神「ヤツホー!! 何時もにこにこ貴方の隣に、這い寄る——」

ガルツチ「それはニヤル子さんの台詞。つていうか見事なまでに普通の女の子に見えるな。」

白いワンピースに麦わら帽子つて、しかも裸足？ 何故こうなるんだよ。仮にも僕の母なんだから、そこは威厳を持って……………、いや母さんには威厳なんて無いか。

全王神「そう言うガルツチちゃんは、ホントに和装が好きだね。」

ガルツチ「此が普段着なんだよ。」

対して僕は、月夜の袴を着ていた。やっぱり僕にはこつちがお似合いかな？

風龍「よつと、どうやら間に合ったようだな。」

メアリー「そうね。懐かしい服を着替えたけど、こつちが私らしいかな？」

ガルツチ「あ、風龍さん。メアリー。」

ギャリー「んで、何で私達まで？ 関係ないんじゃないの？」

イヴ「うん。ただの一般人なのに……………。」

メアリー「もう、そう言わないの!!」

まさかの『ib』のキャラクターも出て来るとは思わなかったな……………。

メアリー「それより風龍、無茶言っでごめんね？」

風龍「ううん、メアリーが望んだことだし、これぐらいお安いご用さ。」

東「おーい、皆々！桜の木に集まって〜！写真撮るよ〜！！」

いよいよか………。だったら、急がないとね。

士「んじや撮るぞ。」

『カシユン』

その一枚の写真には、かつて赤ん坊の時に、母さんに見せた満面の笑みをした僕がいた。

『親愛なる○○○○へ』

ようやく、僕だけのアルカディアを見つけました。二万数百年間ではありますが、やっと思つきました。

此方の生活は上手くいってます。其方はどうですか？

まあ、其方が何だろうが、多分大丈夫なんでしょうね。………以前貴方は言いましたよね？自分の幸せを捨てては、他人の幸せを守ることは出来ないって。

確かに貴方の言うとおりです。

とは言え、此は貴方にとって最後の手紙。これで貴方に手紙を送ることは、もう二度とないでしょう。

どうか、気を悔やまぬように、あなたも幸せを見つけて下さい。それが、取り戻して下さい。

それでは、さようなら。『僕』よ。

超全大王神兼この世の全ての刃 ガルツチ』

s i d e o u t

—
???
—

「……………なるほど、幸せそうで安心した。」

それだけ言い、男はガルトツチが送った手紙を破り、写真をポケットの中に入れた。

「……………結局僕は、生き残ってしまい、彼女達を置いて行かれてしまった。ずっと後悔していた。こんなことなら、消えて無くなればいいと思った。だが、同じ道を進もうとしている僕を、どうにかしてその道を歩ませないように、旅先で助言していた。

しかし、まさかあの門矢未来とかいう人物が、彼を救うことになるとはな。」

男は常に一人。大切なものを守ることが出来ず、挙げ句の果てには、故郷も失い、永遠と彷徨い続ける亡霊のような存在へと成り果てていた。

「まっ、どっちにしろ僕には関係のないことか。彼奴は僕とは違う人生を歩んだ。今

更幸せを見つけれなんて、無理な話だな。

此が僕の末路。絶望に堕ちきってしまった、成れの果て。自殺も出来ず、かといって生きる目的を失った僕には、最早彷徨うしか選択肢は無いからな……………」

だが、男が持つてる指輪を見て、ふと笑みが零れる。

「……………」でも、今思えばあの頃は楽しかった。もう二度と、この感情は蘇らないけど、せめて思い出だけは、焼き付けておこう。

さて、次の世界に行くか。」

そして、男は一枚のカードを取り出し、投げつけると青いゲートが開きその中に入る。「今度こそ、お別れだ。ガルツチ。決して、絶望に落ちた『僕』に、ならないでくれ。」
それだけを言い残し、男……………」

いや、原世界の住人である『ラーク・バスター・ガルツチ』は、この世界から去った。
1枚の写真を持ちながら……………。

t e S t a r D u s t S p a c e & M o o n L i g h t A n o t h e r F a
t e T r u e H a p p y E n d